KAIZO

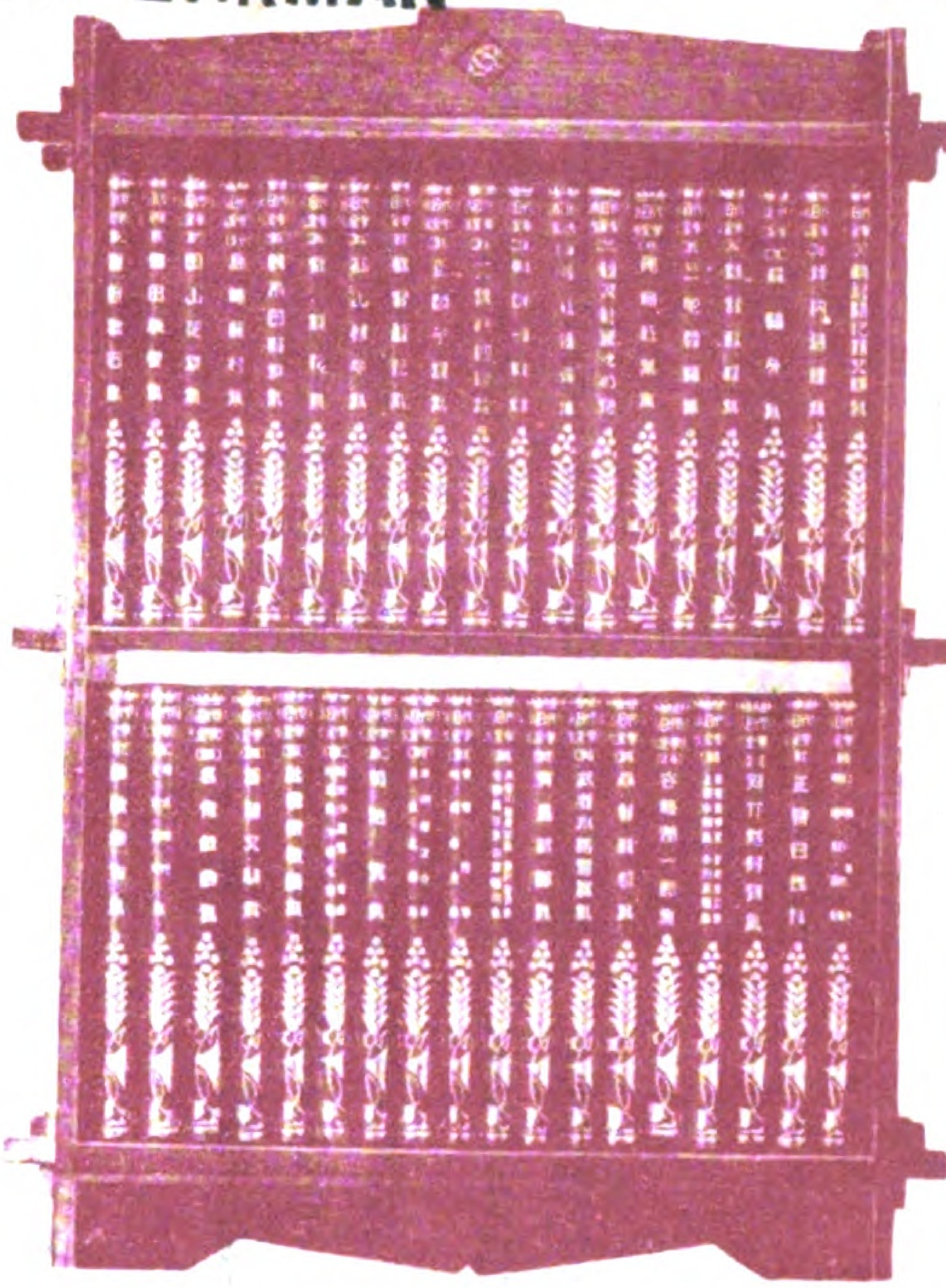
改造

六月號

1927

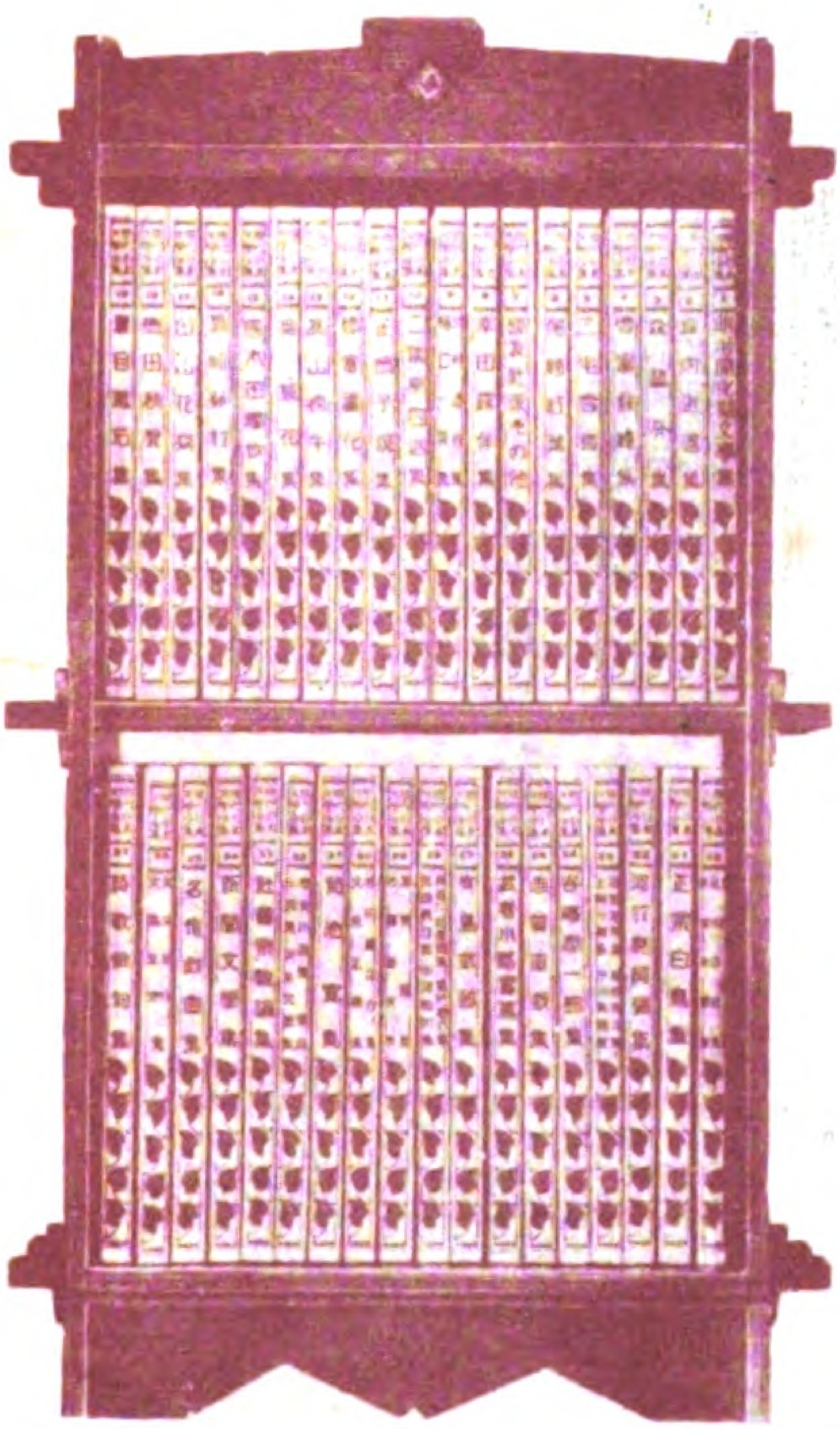
特典

現代日本文學全集
豫約會員全部に
特製書棚
（堅牢美麗）
無代贈呈します



特製本と書棚（上）

並製本と書棚（下）



◇第一回募集大成功の謝意を表するため。第一回會員全部にも同じ書棚を進呈します。

◇書棚は第一回會員も第二回會員も各々配本全部終了後、最後まで繼續された會員に進呈いたします。

改造社

糖尿病內服新藥

獨逸ザールブルフクン微生物研究所製

ランゲリン

フォルネット氏インシュリン丸劑

○インシュリン療法の發見が近時に於ける醫學上の劃期的成功にして、糖尿病の治療的方面に大なる貢献を致せるは著名なる事實なり。

○従來インシュリンは注射としてのみ用ゐられ、重症患者以外に應用し得ざりき、而してこれを初めて內服的に用ゐ、作用を緩和に、應用を絶對安全とし、輕症及び中等症患者に簡易に與へ得るに至れるはランゲリンなり。

○數日の內服により糖尿を減退し、連用により種々の自覺症幷びに合併症を輕快せしめ、嚴重なる食餌上の制限を緩和し、患者をして精神的幷びに肉體的に強健ならしむ。

○ランゲリン一丸は尿中の糖約四瓦を補償す。

詳細は糖尿病のランゲリン療法と題する小冊子にあり、御申越次第送呈す。



三〇丸入……四圓五十錢
一〇〇丸入……十二圓五十錢
各地著名の藥店にあり

日本總代理店
株式會社 田邊元三郎商店
東京日本橋區本町

改造　六月號　目次

出版界の革命時代と本社の立場……卷頭言……一

國家資本主義トラストへの過程か？
資本家機能の總破產か？

資本家機能の總破產……高橋龜吉……三
財界の大動搖が產業界に及ぼす影響……武藤山治……一五
パニックに襲はれた金融市場……堀江歸一……二〇
十年苦の補償法……太田正孝……三三
國家資本主義的トラストへの過程……猪俣津南雄……三七

唯物史觀經濟史出立點の再吟味(その一)……福田德三……四一
資本主義日本の帝國主義……猪俣津南雄……六〇
現代歐米に於ける經濟學の新傾向……アルフレッド・アモン……八四

臨時議會とその使命……山川均……一〇四

由比正雪……笹川臨風……一
外交官珍話……堀口九萬一……一二
芭蕉手記……室生犀星……三三
浮氣もの……近松秋江……四五

短歌
植物圖……岡麓……(五五)
小夜の中山……松村英一……(五五)
山上歌篇……藤澤古實……(五六)
耕人餘錄……吉植庄亮……(五六)

吉野紀行……吉田絃二郎……五七
春陽會を評す……河野通勢……六五

モーダン・デジーズ……佐多芳久…七三
李大釗銃殺の報を手にして……荒川實藏…七四
胡適漫談……胡適…七九

プロレタリア文藝理論の確立へ

所謂プロレタリア運動の「混亂」について…藏原惟人(八二)、無產階級文學に就ての覺へ書…小堀甚二(八九)
理論確立及びその混亂の根據…田口憲一(八四)
文藝運動とは何を以すとか?…久板榮二郎(九一)
所謂現段階とプロレタリア文藝運動…山田清三郎(八七)

凡愚列傳……長谷川如是閑…九四
長篇小說 地妖……三上於菟吉…一〇〇

明治文學とその人々

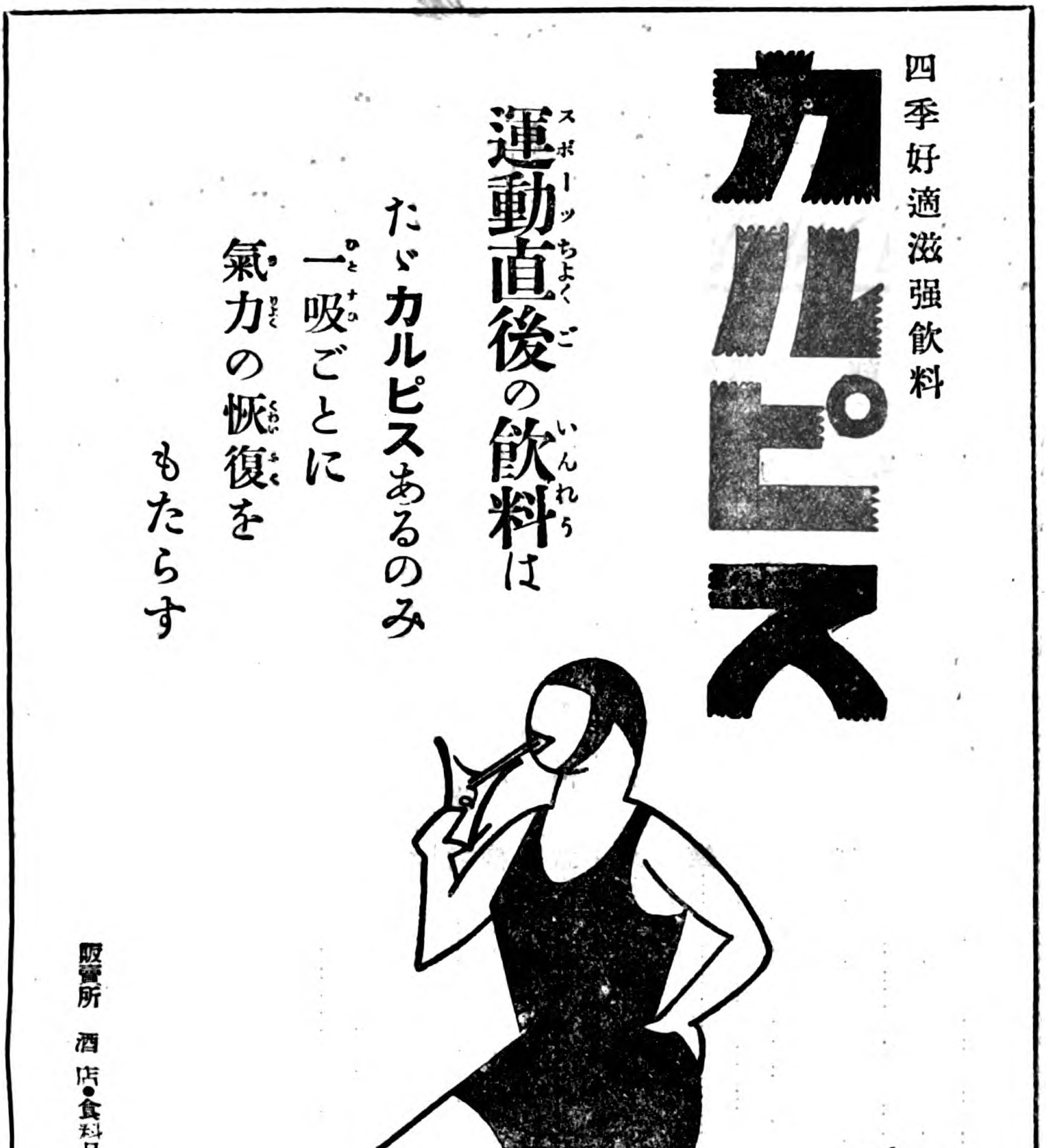
平凡化されたる漱石……高濱虛子…一二〇
私の明治文學觀……野口米次郎…一二八
假名垣魯文……高須芳次郎…一三一
明治文學史手引草……佐藤春夫…一三九

ダイヤのジャック……エレンブルグ作 米川正夫譯…一四三

饒舌錄……谷崎潤一郎…一五三
秣藤閑語……正宗白鳥…一五八
文藝的な、餘りに文藝的な……芥川龍之介…一六五

創作

夢殿……中里介山…一
橋……池谷信三郎…一六
善魔……里見弴…二三
太陽の黒點……前田河廣一郎…二五


四季好適滋强飲料
カルピス
運動直後の飲料は
たゞカルピスあるのみ
一吸ごとに
氣力の恢復を
もたらす
販賣所 酒店・食料品店・藥店

出版革命時代と本社の立場

我々の敬意と親みとを覺ゆる我讀者諸君は本誌及その他の出版物を通して我社の對社會的態度は御存じであらふと思ふ。我々はいつでも自分達の事業に對しての矜持と愛着があり、そしてその矜持、愛着から來る慰安と滿足とがある。

我々は何事に對しても常に眞面目であり、生一本であり、進歩的であり、そして何れへも偏するところがない。背後の人、即ち資本家もなく政黨もなく、軍閥もなければ出版閥にも囚れない。我々の信ずる處に直往進出すれば足りるのである。我社の出版なり、雜誌なりが社會的にいかなる地位にあるかは既に賢明なる諸君の御認めになつておるところである。我々が出版に對してどういふ氣持と覺悟とを有するか、また將來の出版界に對して如何なる抱負のもとに進出すべきかについて斷片的ではあるが一言するであらふ。

出版業者はいつでも社會の先覺者であり、豫言者たり得る識見を先要條件とする。つまり來るべき——新世紀が——そして第二、第三の大衆が要求するであらふ思想なり、傾向なりを洞察する遠識力を必要とする。出版者にしてこれ等の諸要素に缺ぐるところあれば、そこにはいつまでもジヤーナリズムの獨立性はあり得ない。あくまでも明治初期の我出版書肆のごとく前垂かけで、そして著者に對して從屬的位地を脱することは出來まい。何でも儲かるものなれば餓えたる狼の如く相手選ばずに飛びつく情勢である。そこに個性もなければ創意をも必要としない。かかる出版界は文化史的にどう云ふ結果を將來するであらふか？　このごろ出版界に渉者

が同一のものを、そして半歳もたたぬうちに出版者の意志に反して二つの書肆で出版することが一つの問題となりつゝある。そしてそれは道德的の立場より立法的の問題として進展しつゝある。つまり著者は著作權によりてその利益が正當に保障されているが、出版者に對してはすべてが斬棄御免であり、非人格的である。これは殆んど我國だけに見る不思議、珍無類の現象であれば來議會に提出さるるであらふ出版法にはこの點に改革を加へて片務的の議を脱出せしめなければならぬ。だが、出版者に一の權威と、自負とそして創意とがあつたならば、すべての方面に對立的に。そして人格的に出づることができるであらふものを。我々は玆に遺憾なる結語として奴隷時代の延長の責任の大部分は出版者自身が負ふべきだと思ふものである。その結果として大衆はいつまでもこの場當り出版に引きずられることになる。我社は不敏と雖。出版のすべてに對し。その動機、結果を創意的に判斷して世人を誤らぬことを第一義としておる。日本人は世界中で模倣にかけて第一人者であるとさへ稱されておる。この批議を我々はいつまで甘受すべきであらうか、我社はアインスタイン全集の如き世界に類例のない學的に幾多の困難ある出版を創出して學界にもいく分貢獻した。その他「改造」の行きかた、「現代日本文學全集」の發行等すべてが出版革命であり、世界の獨特である。我社の出版方針は歐米のそれを何等模倣追隨しているところがない。全くの元素的創造である。あそこの國にああしたものがあるからあれはよい　と、すぐ——それを猿まね的にまねるやうな不見識はしない。我社のものはオリヂナルを尙び、生々潑溂の發見者的氣魄が伴ふのだ。僭越ではあるが、我社の意思は仲介者なくして直に讀者に血が通ふのである。それが模倣者だとすべてが玻璃窓を隔て青空を望むやうに清鮮な大氣に觸るべくもない。

我々と讀者とのつながりは一般の商賈的取引でなく、全く氣魄、情熱が其時代化された結合であるべきである。我々はそうした思念のもとに過程して來たが今後に於ては一層の決意を以て混亂せる出版界にのぞむ考である。

國家資本主義トラストへの過程か？資本家機能の總破產か？

資本家機能の總破產
──財界大恐慌の社會的意味──

高橋龜吉

一、今次財界大恐慌の社會的意味
二、資本家的經濟能力の破產
三、既成政黨の政治的破產
四、資本家階級自ら墓穴を掘る

一、今次恐慌の社會的意味

平時に於てモラトリヤムを實施したと云ふことは史上未曾有のことである。しかも、その未曾有の最極級の非常手段を此際必要としたと云ふのであるから、今度の財界大恐慌のため資本家及政府が如何に狼狽し震駭したかゞ想見せられる。事實、あらゆる銀行は大小善惡の差別なく、全國的に取付に逢はざるものなく、このため、日本銀行の民間貸出は二十億九千六百萬圓（四月二十五日）と云ふ空前の巨額に達した、いま三月十四日のそれが二億二千八百萬圓であつたのに比較すると十八億六千八百萬圓の膨張である。これだけの紙幣を日本銀行が貸出しても、尙ほ銀行の取付を抑えることが出來なかつたと云ふのだから、その取付のスサマジかつたことが想像せられる。又、この紙幣の洪水の如き市中銀行の要求のため、流石の日本銀行の庫底が空ツポになつて、貸出す紙幣がなくなり、遂に粗末な五十圓新紙幣と二百圓新紙幣とを一時の間に合せに勞農ロシヤがやつた如く晝夜兼行で急に印刷したと云ふことに出つて、如何に銀行の恐慌が空前であつたかと云ふことが指摘せられる。

斯樣な財界空前の大恐慌は、そもく如何なる原因に由つて勃發したのであるか。世上の批評を見るに、或は之を若槻內閣就中片岡藏相の責任に歸し、或は之を政友會と樞密院との責任に歸し、或は之を銀

行當局者の責に歸せんとしてゐる。しかし乍ら、私を以て見るに、この財界空前の大恐慌は、要するに、資本家階級の政治經濟兩方面の機能が已に退化廢頽して、最早、今日の經濟活動を統整制御し得ざるに至つた「總破産」の曝露に外ならない。一人の片岡や、少數の不良銀行や、一團の已成政治家の失敗と之を見るには、その失策や無能やが餘りに根本的であり、その錯誤が餘りに一般的協力の下に公々然と行はれてゐる。

斯樣に申す意味は、今度の財界空前の大恐慌は、資本家全體がグルになつて支持し來つた各種政策が遂に總破綻を曝露するに至つたものに過ぎないと云ふのである。片岡藏相や、臺灣銀行や、鈴木や、十五銀行や、松方や、樞密院やと云ふが如き登場役者は、單にその總破産の最後の清算の舞臺に、たまたま引出されたものに過ぎずして、その最後の清算の幕に至る迄の筋書に於ては、すべての資本家階級は一團となつて、それ等の政策を支持し、自ら之を行ひ、しかも之を以て少しも非難すべきものでないかの如く實行もし公言もして來たものであつた。

例へば、今度の財界空前の大恐慌の第一原因は、政友會内閣時代の放漫政策と、資本家側の無思慮無責任な事業の濫興並びにその場限りの巨利の配當に在つた。大正九年の大反動に由る我が財界の大負傷はその惡報に外ならなかつた。しかも、この惡報を見せつけられ乍ら、政府も資本家も、之に善處することをなさず（寧ろ之に善處する機能を失ひ）却つて姑息極る彌縫策に腐心し、益々、病策をして膏肓に入らしめた。が多大の犠牲と歳月とを産業それ自體と國民とに荷負はしめて後ち、兎にも角にもその善後策（所謂財界の整理）が表面上漸く緒につくかつかんかと云ふ時に於て、大正十二年の大震災に見舞はれた。

いかにもこの大震災は不可抗力の天災であつた。しかし、この大震災に對する善後處置に於ても、資本家階級は全くその位地に値ひする能力なくして、そのやり方は已に社會的機能を失へるものなることを曝露した。震災後已に四ヶ年の今日に於て、尚ほ財界は不景氣と新たな損失の過重とに呻吟し、愈々財界の缺陷を激成せしめ、以て、今次の財界空前の大恐慌を招く根因を培養せしめたことが、その何よりの證據である。

而して、最近に及び、資本家及び政府は、財界の整理も已に一巡終り、愈々最後の手術に耐え得る體力が囘復したと呼號して、その最後の手術に着手するに至つた。金の輸出解禁が即ちその象徴的なものである。しかし乍ら、政府も資本家も、我が財界の實體が、大正九年以來如何に衰弱してゐるか、而してこのまゝで、、、、を加へることの如何に危險であるか、の眞相（その眞相は民衆にはヒタ押しに隱してゐた）を誰よりもよく知つてゐる。そこで震災手形善後處理法案と云ふ二億七百萬圓と云ふ高い頓服を銀行に呑まして、その作用の援助に由つて、外科手術を終へて了はんとした。しかし、この震手法案はそのカラクリが外部に漏れて、民衆の大反對に逢ひ、議會の内外に於て、大にゴタ着くに至り、玆に、從來政府や資本家側がヒタ押しに隱してゐた財界缺陷の眞相が大臣の口から曝露した。否、之を曝露するに非ざれば、震手法案の通過は不可能となつたので、致方なしに之を

漏らしたのだ。しかも、その曝露に對し如何なる高價の代價を支拂はねばならないかを政府も資本家も少しも自覺し得なんだがため、愈々民衆がその代價を要求するに至るや、大に狼狽して之に善處する所を知らず、こと〲〵に政策を誤り、遂に周知の如き財界空前の大恐慌にまでその無能を曝露したのである。之を要するに、今度の財界の大恐慌は、經濟運用に於ても、その失策の善後處置に於ても、資本家階級全體が全然無能力であり、腐敗墮落してゐることを曝露した破產の總決算に外ならない。以下、その理由を更に詳はしく述べるであらう。

二、資本家的經濟能力の破產

武藤山治氏の實業同志會で發行した「財界動搖善後策早わかり」に由ると、今度の財界大恐慌の責任は全然我が政府乃至我が政治に在ることになる。例へば前掲書は云ふ『……今回の財界動搖もその根本原因は役人の能力を過信する弊害の現はれであります。……我國で政黨が政權にあり付くため、餓鬼のように爭ふ原因は……政局に當ると色々ウマイ事があるからです……故に我國の政府より色々の仕事を取上げさへすれば、今日のやうな政黨の爭はなくなりますから、こゝへ國民が目を付けねばなりませぬ、若し幸に此點に醒めることが出來たら、今度の（財界大恐慌に由る）月謝が何億圓でも良い學問をしたことになります』。いかにも、今度の財界大恐慌の責任が、既成政黨の腐敗墮落及びその無能力に在ることは事實である。しかし乍ら、然らば武藤氏一派の主張する如く、政府の仕事を出來るだけ取上げて、之を資本家に任かしたならば、それで、我國は今度のやうな財界大恐慌から救はれるかと云ふに決してさうではない。何となれば、資本家階級自身が、既成政黨と敗けず劣らず腐敗してゐるからである。否、既成政黨の腐敗そのものは資本家階級腐敗の反映に外ならないからである。而して今度の財界大恐慌の根源を培つたものも亦、資本家階級そのものに外ならなかつたのである。

今度の財界大恐慌の最も根本的な原因は、何と云つても、歐洲戰中戰後の放漫極る事業の濫興に在つた。當時、流石に武藤氏は頑として鐘紡の增資運動を峻拒し、增配（利益配當增加）運動を極力抑へて來た。（しかし實際は七割配當を餘儀なくされたこと周知のことである）しかし、資本家階級一般はどうであつたか、彼等は事業永遠の繁榮と云ふことはテンデ問題とせずに、目先の利益、株主の歡心等のため、「あとは野となれ山となれ」主義の企業の新設擴張、增資增配等の浮華政策を旺んに逞ふしたのであつた。甚しいのになると、企業の發起人自らその事業の前途を危みながら、兎に角、プレミヤムを儲けんがために新株を募集し、それがすむとサッサと持株を賣つて、あとはドウならうが知らないと云ふやり方が横行した。

資本主義經濟の運行は、斯の如き資本家階級の亂行無恥な所業に由つて著しく傷けられた。しかし、歐洲戰爭と云ふ特別なアルコール劑が作用してゐた間は何とか、その刺戟の興奮に由つて彌縫せられたが、一度びそのアルコール劑の作用が止ると共に、我が財界はバタリと半身不隨となつた。即ち、大正九年春の財界の大反動がそれである。

こゝに於て、我が資本家は、この大反動に對する善後策を嘘でも敢

行せねばならぬ事情に置かれたのである。所謂財界の整理がそれであつた。而して、此際の整理とは、歐洲戰中戰後に濫興した企業の中、平時に於ては存立する能力のないものを、或は淘汰し或は存立し得る位地にまで改善することに外ならない筈だ。而して、その方法は、資本主義の仕組に從ふと、左の諸點、就中その第一及第二點を敢行することを最も必要とした。

一、平時狀態に於て收益力なき資本を切捨つること（即ち減資その他に訴ふること）

二、損失を塡補するため株主配當、重役賞與等を全廢乃至著減さすこと。

三、冗費を極力整理して經費を節約すること。

四、勞働側を整理すること。例へば賃銀引き下げ、人員整理、昇給停止等々。

然るに、資本家は右の中、第三及第四點の整理のみは之を無慈悲に斷行しながら、肝心の第一及第二點は、あらゆる手段——然りそれが如何に不正の手段であらうが——を講じて之を回避した。斯くて多くの我が資本家は、その事業が多大の損失にて大穴があいてをり、且つ一文の利益もないにも拘らず、帳簿を欺き表面を糊塗して、如何にも利益あり、損失の傷もなきが如く粉飾して、年々多大の「利益配當金」を絞り取つたのであつた。然らば、その手品の種は何所から出たかと云ふにそれは丁度蛸が自分の身を喰ひ、遊食者が自分の財產を居喰ひするが如く、その事業そのものゝ肉を割き取り、之を衰弱に陷らしめながら、口腹の慾に淫蕩してゐたのであつた。而してそれに必要な金は、從來、腐緣のあつた銀行から借りたか、乃至は預けてあつた金を引き出したのである。斯樣のわけで、銀行の手許は、益々資金の涸渇に當面するに至つたのである。

加之、銀行は、この外、斯樣な整理にも耐え得ずして已に破產したる多くの事業への貸出が損失となつてその經營を壓してゐる。その上に、右の如き、資本家の整理彌縫の金も、その少からぬ部分は、同樣困難のものである。尠くともその結果に於てはさうであつた。斯くて銀行自身も多大の損失をその身の中に包んでゐたのであつたが、そのため、破綻を曝露した銀行は、極めて少數であつて、その大部分は之を糊塗して世間を欺瞞して來たのであつた。

彼等は何故に斯樣な糊塗欺瞞をやつたかと云ふに、（一）彼等は愚かにも、景氣は間もなく良くなるものと期待し、尠くとも之を僥倖して、その時まで財政を彌縫しおうせば、資本の整理をやらずに又內容の惡化を曝露させずに、何とか糊塗を續け得ると考へたこと、（二）資本の整理を必要な程度までやつては資本家が困却すること、（三）重役共がその失策を糊塗して失脚を防がんとしたこと、この三つにその理由がある。而して、（一）は資本家の無能を語り、（二）は資本家の驕慢を示し、（三）は資本家の墮落を現はす。就中、不都合極る點は（二）である。蓋し資本家は事業の整理上必要と云ふ鐵則の下には勞働者階級に對しては、「失業」と云ふが如き生存の脅威を茶飯事の如く無慈悲に行ひながら、同じく事業の整理上最も必要な資本の整理に對しては、「それでは資本家が困る」と云ふ名で、公々然と詐欺配當をやつてゐるからである。然り、利益があつて始めて許さるべき配當を、利益が

全然ないのにも拘らず、「それでは資本家が困る」と云ふ名で蛸配當を公許してゐるのである。しかも政府が之を公々然と許して來た（例へば臺灣銀行はその代表的のものだ）のである。

斯の如きことが、大正十二年の大震災に於ても繰返されて來た。あの大震災に由つて多大の資本は破壞せられたにも拘らず、その直後、會社の公表した資產負債表に現はれた損失は極めて少なかつた。就中、銀行のそれの如きは、ほんとうに人を馬鹿にした少額であつた。その後高田商會其他が倒れて大口貸付の氷結が外部に曝露せられても、尙ほ依然として、銀行は「損失」を出さずに之を糊塗して來た。その後、大正十四五年に於て、爲替が急に回復して物價が暴落したがために、多くの事業は更に一大損失を蒙り、その尻拭がまた銀行の不良貸出乃至損失となつたが、此の時も亦、同じやうな糊塗と誤魔化しが大規模に行はれた。斯様にして、我が「要整理會社」の多くは、大正九年以來の財界整理期に於て、その基礎を鞏固にするどころか、益々薄弱にした。而して、その惡結果の殆んどすべては、銀行への借金となり、このため銀行の資產內容は愈々惡化するに至つたのである。尤も此間に於て、事業會社の整理は、その債權銀行の監視、强要に由つて、ボツ／＼ながら行はれて來た。しかし、銀行そのもの丶整理は、之を强要するものが無く、從つて、事業會社の整理に比し銀行の整理は著しく怠慢であつた。蓋し、銀行へ整理を要求し得る第一のものは預金者であるが、彼等の多くは銀行の內容を知り得る位地に置かれてはゐない。銀行の內容を知り得る唯一の手掛りなる貸借對照表は、全くの誤魔化しであつて、眞相を知るに由ないからだ。又、銀行に整理を要求すべき責任を法制上有する政府は、資本家の請願に軟化せられて、知りながら整理を强要せざるのみならず、進んでは、その詐欺的貸借對照表、利益配當、重役賞與等を公認してゐたのであつた。斯様にして、銀行の內容は就中益々惡化するに至つた。試みに、最近遂に破綻を曝露するに至つた諸銀行、即ち日本銀行が救濟の餘地なしとして見做した諸銀行について見るに、その何れも、シヤー／＼然と、利益ありと詐稱して、その破綻曝露の直前まで次の如く配當を續けて來てゐる。就中十五銀行の如きは一割の配當をやつてゐるズー／＼しさであつて住友銀行の如き安固のものと同率である。

各銀行配當表

銀行名＼下半期	大正二	大正八	大正九	大正一〇	大正一一	大正一二	大正一三	大正一四	大正一五 上期
東京諸銀行	%	%	%	%	%	%	%	%	
安田銀行	—	一四・〇	一二・〇	一二・〇	一二・〇	一二・〇	一二・〇	一二・〇	一二・〇
第一銀行	一〇・〇	一二・〇	一二・〇	一四・〇	一四・〇	一四・〇	一四・〇	一四・〇	一四・〇

十五銀行	九・〇	一〇・〇	一二・〇	一一・〇	一一・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇
第百銀行	一〇・〇	一〇・〇	一二・〇	一二・〇	一二・〇	一二・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇
東海銀行	八・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・	一〇・〇	八・〇	八・〇	八・〇
川崎銀行	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇
中澤銀行	—	—	六・〇	六・〇	六・〇	—	五・〇	五・〇	五・〇
村井銀行	五・〇	六・〇	六・〇	六・〇	六・〇	五・〇	—	五・〇	五・〇
中井銀行	—	八・〇	六・〇	六・〇	六・〇	六・〇	五・〇	五・〇	五・〇
東京渡邊銀行	—	五・〇	七・〇	七・〇	七・〇	—	四・〇	四・〇	四・〇
大阪諸銀行									
近江銀行	九・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	八・〇	五・〇	五・〇	五・〇
加島銀行	八・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇
山口銀行	—	九・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇
三十四銀行	九・〇	九・五	一〇・〇	一〇・〇	一二・〇	一二・〇	一二・〇	一二・〇	一二・〇
住友銀行	四・〇	八・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇

以上の如きわけで、我が資本家は大正九年以來幾度かの大負傷を一時逃れの膏藥張りで彌縫し、かくして益々內訌せる膿汁の全部が色々の管を通じて銀行貸出のコゲツキとなり、銀行資産の大穴となつて伏在してゐたのであつた。しかして、銀行と政府とは、之をヒタ隱しに隱すことに腐心して、次の景氣の波の來る僥倖をのみ待つてゐたが、その僥倖を待ちあぐんで、否、景氣の波は此の膿汁を整理するに非ざれば容易に來らざることを漸くに自覺して、その整理に着手するに至つたのが、即ち去る五十二議會に於ける震手法案であつたこと已述の通りである。

三、既成政黨の政治的破産

大正九年の大反動は、之を政治的に見れば、大正六七年以來の政友會內閣の放漫政策に根源するものであること云ふまでもない。而して、大正九年反動以來、我が財界の整理が遲々として進まず、寧ろ病根を益々內訌さすに至つたことも、之を政治的に云へば、當時の政府が、或は資本家の苟安的請願を容れ、或は腐れ緣を結んで、極力彌縫策を弄したことに基因する。

斯く、我が財界は、政府及資本家ともに、大正九年以來その病根を

內訌さして、兎に角表面を一時安定さし景氣再來の僥倖のみを只管に頼みの綱としてゐた。斯かる所へ、泣き面に蜂のやうに、十二年の大震災が突發した。我が財界に內訌してゐた病根が更に一大惡化を來たしたこと云ふまでもない。然るに、この大震災及び其の後に對する善後處置においても、已成政黨は全然無能を曝露した。即ち、十年雌伏の後ち朝に立つた憲政會內閣の採つた政策は、要するに何にもしないと云ふ消極政策であつた。

そもそも、當時の我が經濟界が必要としてゐたことは、資本と勞力とを最も效率あるやう利用し得るため、從來の資本と勞力の利用方法に一大改善乃至一大方向轉換を與へると云ふことであつた。然るに、憲政會內閣のやつたことは、一方の效率少き資金と勞力の使用を中止さしただけで、他方に之をより効率ある方法に於て利用すると云ふことに全然無能力であつた。否、彼等はそれを考へんともしなかつた。彼等政治家は、斯樣にして資金と勞力との使用を一方に於て止め、之を遊置せしむるに於ては、資本家が最も有利に之を利用すると暗默の裡に信じてゐたかのやうである。さり乍ら、その資本家は已述のやうなわけで、從來より背負ひ來つた不適當な事業を、目先何とか彌縫するに汲々としてゐるのみであつて政府の消極政策に由つて新に浮び上つた資金と勞力とをより効率ある用途に利用すると云ふ餘地を與へられてゐなかつた。斯くて、憲政會內閣の消極策は一方には多くの失業者と工場閉鎖を出して生產を益々減少せしめ（大震災の後ちイクラ働いても足らない國情にありながら）一方には餘つた資金を資本家の彌縫政策に利用（例へば蛸配當其他）せしめて、却つて資本の濫費を促進する作用をなすと云ふ逆結果を招來したのである。

しかし、憲政會內閣の消極政策のこの大破綻は、中途に於て、僥倖にも他の思ひも寄らぬ資本主義の自働的はたらきに由つて救はれた。それは、震災後の應急的物資輸入の激增のために爲替が二割餘も暴落したので、內地の物價は著騰しながら輸出は激增して、資本家の一角に一時多大の利益を與へたことであつた。が、この好景氣の先觸れは、その後、政府が爲替の引上政策を取り、急激に爲替が回復するに及んで急停車の如く止つて了つた。大正十四年末の好景氣が十五年初めには一大蹉跌したのはそのためだ。そんなわけで、資本家は啻に從來の大穴を埋め得る好景氣を取り逃がしたのみでなく、この爲替の著騰は物價の暴落と輸出不振とを招來して、損の上に更に損の上塗りをしたのであつた。憲政會內閣の消極政策の破綻は、この時より漸く顯著となり、爾後、著しく不人氣となつた。資本家は、打ち續く不景氣と繰返し襲る損失とに耐え得ずして、政府の消極政策の轉換を要求して止まなくなつた。

茲に於て、憲政會內閣は急に積極政策に變つた。日本銀行の金利引下げを二回も續けて行つた。しかし乍ら、銀行は政府の吹く笛について踊つて來ない。彼等には、已述したやうな大きな病根が內在してゐて、それを手術しない限り、動けないのだ。

こゝに、憲政會內閣は惱んだ。總選擧は目の前に迫り政敵政友會は不景氣は憲政會內閣の罪だと宣傳し始めたが、しかし、その積極政策は銀行界に內訌してゐる病のために効果を現はして來ないのだから・・・・。

この難局を彌縫せんとして考へ出されたのが即ち、有名な震災手形善後處理案である。案の目差すところは、國民の懷から二億七百萬圓と云ふ大金を絞り取つて、之れで以て、これ迄整理もせずに表面を糊塗し來つた銀行の大穴を埋め、斯くすることに由つて、その又銀行の奥に表面を誤魔化し來つた事業會社をも救濟し、こゝに、何とか我が財界が政府の積極政策の笛につれて踊り得るだけのカンフル注射を施さんとしたのであつた。この限り、資本家階級は之を謳歌すべきや云ふまでもない。

然るに、此の案は、その裏面に一の政治的腐敗を伴つてゐた。斯くて、政友會がその案の中に包まれたウマイ汁の割け前の爭ひから急に反對し出した。無産階級側は、このアマリにも虫のよい案に猛然と反對し出した。斯くて、貴族院が騷ぎ出すと云ふわけで、遂に、片岡藏相が、この案が通過せねば銀行のうち休業の止むなきに至るものあるべしとの、銀行界內部の危險の眞相を口走るに至つた。これ、今回の財界大恐慌の口火である。斯くて、其の後の經過は周知の如く、臺灣銀行と鈴木商店の縁切り、鈴木商店の破綻、續いて臺灣銀行に對する不安にて大銀行が臺灣銀行よりコール其他を回收するに至り、こゝに臺灣銀行二億圓補償の緊急勅令案の閣議、樞密院の否決、若槻內閣の辭職、臺灣銀行の閉店、十五銀行の休業、全國的銀行の大取付、財界の大混亂、遂に緊急勅令に由るモラトリヤムの施行等と發展するに至つたのだ。これ等一連の出來事は之を政治的に見れば已成政黨の政治能力破産の總決算であり、之を經濟的に見れば資本家能力破産の大清算であつた。而して、その善後策として採らんとする所のものは、彼等の瀆職の尻拭を國民に強要せんとする不都合極る五億圓の補償案である。以下之について更に項を改めて論ずるであらう。

四、資本家階級自ら墓穴を掘る

五十二議會を通過した震手法案の一番不都合な點は、二億七百萬圓の巨額を國民の負擔に轉嫁しながら、その當の責任者である銀行資本家には、減資の義務も減配の強要をも課してゐないことだ。顧るに、政府は大正十三年と十四年の二回に亘つて、全國の銀行に對しその銀行の基礎を鞏固にするため、減配すべきことを公文を以て慫慂してゐる。にも拘らず、今度休業した多くの銀行は之に從はず依然不都合極る配當をなして來た。そのやうな不埒な銀行を救ふために、國民に二億七百萬圓の負擔を強要しておきながら、その銀行の整理については、その資本家が幾ら損失を負擔し、國民がいくら負擔することになるのか、一言も之を明確にしてはゐないのである。震手法案の政治的破綻の招因はこゝにあつた。國民が猛然と反對するに至つたわけは、この點が曖昧極るものであつたからだ。

斯くて難産に見えた貴族院に於ける震手法案の通過を圖るため、若槻內閣は臺銀の徹底的整理を約束した。が、その約束した臺銀の徹底的整理と云ふのは、輿論の大反對のために動かざるを得なくなつた貴族院の攻撃を緩和するために、突嗟に約束したものらしく、前から準備してゐたものではなかつたやうだ。さう見るわけは、その後の臺灣銀行の整理の散々な不始末である。例へば、若槻內閣は議會の公約に從つて、早々に何等の準備も整へずして臺灣銀行をして鈴木と絶緣せ

しめた。さうなれば、鈴木が倒れ、鈴木が倒れゝば臺銀の鈴木への貸出三億數千萬圓の回收が愈々困難になるので、臺銀が危ぶまれるに至る位、分り切つたことであり、この故に、從來臺銀が鈴木との腐緣を切ることが出來なかつたのであつた。此の點に於て、若槻內閣は第二の大失策をやつた。

臺銀と鈴木と絕緣せしむるはよい。しかしそれには合理的な方法がある。一朝にして鈴木と絕緣せしむれば、臺銀より融通の出來るつもりで取引を擴げて來た鈴木が行詰るのは當然だ。しかし鈴木の破綻は臺銀の鈴木への貸出三億數千萬圓の回收難の加重だ。斯くて、臺灣銀行の信用は著しく不安になつて、コール其他の大口の取付に逢つた。臺灣銀行を救ふには更に二億圓（殿手法の救濟によるもの以外に）の金が要る、と云ふ理由で、二億圓の補償令を樞密院と爭つて、緊急勅令を出さんとした急迫せる事態が突如として生れたわけは之れだ。

此の際に於て、若槻內閣は更に第三の大失政を續けてやつた。それは、臺灣銀行救濟の二億圓の補償法案を樞密院に提出した際、「その案以外に財界を脅かしてゐる大混亂を未然に防ぐ方法なし」と公言して、他の方法を準備しなかつたことだ。否、寧しろ、斯樣な緊急勅令を議會直後間もなく出す不手際の代りに、他の方法を講じなかつたことか第一の失政だ。思ふに、この失政の理由は（一）從來齊藥張りにした病根が內訌してゐて已に收拾困難な狀態にありと感ぜられたこと、（二）國民の利益と云ふことは塵程も考へず、何とか云へば負擔を國民に轉嫁して資本家を救ふことを茶飯事の如く心得へてゐたこと、の二つであつたらう。

斯くて、二億圓の補償案が樞密院の否決に會するや、政府は銀行業者自らをして協力してこの急迫せる事態を救はしめることに努力することなく、乃至は他に應急處置をも採ることなく、捨鉢的に辭職すると云ふ無責任極ることをなし、遂に、臺灣銀行の閉店、十五銀行の休業と云ふ大混亂に財界を陷らしめたのであつた。之れ、若槻內閣第四の而して最後の大失政である。が、しかし、若槻內閣の辭職そのものは、前項に述べた所と右に述べた所とに由つて分る通り、徹頭徹尾、その政策破綻の總決算に外ならないのであつて、之を救ふに由なき事情にあつたわけだ。

去り乍ら、此間、政友會は只管に若槻內閣を倒すに急にして、そのためには手段を選ばず、財界の混亂を益々助長さした罪跡は之を覆ふべくもない。而して、一度、若槻の後を追つて內閣に立つや、彼れは次いで起つた十五銀行の破綻を輕卒にも、無準備で發表せしめた。當時人心は、臺灣銀行の休業で已に極度の神經過敏になつてゐた。其處へ、東京五大銀行の一つ、宮內省金庫と云ふ素人オドシのきく十五銀行（已に札付銀行であつたことはその道の者には周知のことであつたけれども）の休業を發表すれば、人心は更に動搖すべきことは容易に推知出來た筈だ。然るに、政府も銀行も、之れに對し何等の對策を豫め講ずることなくして、本然と之を發表せしめたのである。之れは、當時、銀行家及政府何れもが、大事を所するの愼重を缺いだ大失策であつた。又斯かる際之を豫知することすら出來なかつたと云ふことは彼等が如何にその位地に値せぬ無能者であるかの表明であつた。

云ふまでもなく、右の結果は財界の一大混亂であつた。十五銀行休

業の發表せられるや、全國の人心は極度の不安に陷り、全國に亘り、大小善惡の區別なく、すべての銀行は一大取付に逢ふに至つたのだ。しかし未だ政友會內閣や銀行の採るべき手段の餘地はあつた。然るに、政府も銀行家も、此の形勢を見るや、先のクソ落付に反比例して一大狼狽を始め、輕卒にも、三週間のモラトリヤムと云ふが如き、犧牲の極めて多大なる最上級の非常手段を急遽採るに至つた。之れ、政友會內閣最大の失政である。蓋し、モラトリヤムがその施行中、及びその撤廢時に於て、如何に多大の犧牲を國民に强ひるものなるかと云ふことを少し冷靜に考へる時、斯の如き最上級の非常手段を採る前に、他に、採るべき方法があつた筈だ。それは、あの際、政府は何故に市中大銀行を慫慂して、銀行聯盟を作らし、その共同責任の下に、彼等自らの力で取付を鎭撫することに努力せしめなかつたかである。

そも〱、今度の大恐慌は、財界に何等の突發事件が起つた譯ではないから、前々から、各銀行の資產狀態は、それ〱監督官廳や日本銀行や、銀行同志の間には分つてゐた筈である。であるから、容易に市中銀行の共同責任に由る救濟の出來る基礎の上にあつたのだ。然るに、銀行家は我利〱で、出來るたけ損失の負擔は之を國民に轉嫁して、自らは之を免がれ甘い汁ばかりを吸はんとして、政府にモラトリヤムと國庫の補償とを要求したのだ。此の點に於ける資本家の我利〱を國民は先づ極力糾彈せねばならない。しかし若し、あの際、政友會內閣にして、銀行家は先づ自らの力で自らを救濟して後ち、その上で國民の援助を請へとて、彼等に共同責任の銀行家聯盟を組織せしめることを慫慂したならば、必ずや、銀行家は嫌々でも之に應じたであつたらう。蓋し、若し之を拒むに於ては、如何に有力なる銀行と雖も、すべて銀行は倒れる外なき場合であつたことは當時の事實が雄辯に敎へてゐたからである。而して、此等銀行家聯盟が連帶責任で預金の支拂を補償することを聲明せば、當時の大取付は、モラトリヤムを必要とせずして鎭靜したことは確かであつた。萬一必要な場合には、日本銀行が又その銀行聯盟を保證すれば最惡の場合と雖も、モラトリヤムなしでこの危機は突破出來た筈だ。斯くて五億圓の補償令の必要もなく、又モラトリヤムに基く財界の大損失失業等の大犧牲をも國民に負擔せしめずして濟ます途はハッキリと橫つてゐたのであつた。

にも拘らず、政友會內閣は、銀行家連の我利〱的請願を輕卒にも容れて、國民に大犧牲を强ひるモラトリヤムを實施した。モラトリヤムとは、此の場合、これ迄資本の整理を怠り、誤魔化しと欺瞞とを以て私利を逞ふして來た銀行家を救ふために、彼等自らにその責任を荷はさしめずして、國民の双肩にその大犧牲を轉嫁せしめんとする非常手段である。それも、例へば大震災とか戰爭とか云ふ不可抗力に由るものならば兎に角、銀行家自らの不始末(しかも惡意の不始末)の總決算である今度の大恐慌に際し、その尻拭を銀行家自らの協同的努力に荷はせずして、否その提案すらなすことなくして、當然極るものを爲すかの如き態度と口吻とを以て、之を國民の負擔に歸せしめたのだ。民衆が彼等資本家と既成政黨にアイソをつかすに至るは餘りに當然だ。

しかも、資本家及既成政黨がズー〱しくも國民を蔑るは之に止らない。モラトリヤム撤廢の善後策として、臨時議會に五億圓(記憶せよ國民の老弱男女すべて一人拾圓の負擔だ!)の損失補償を國民に强

ひる提案を爲しながら、當の責任者たる銀行に對しては、何等の義務をも課してゐないのだ。而して、彼等は云ふ、この補償案は預金者を救ふためであつて、決して銀行を救ふものではない、と。

若しも既成政黨にして少しでも國民の利益を念とし、若しも資本家にして些少にても自らの責任を知るならば、彼等はこの五億圓の補償を國民に負擔せしめるに當ては、彼等は尠くとも左の諸點を義務として公然荷ふべきが、資本主義の立場から云つても當然のことである。

一、補償法の下に資金の融通を受ける銀行會社はその資金の融通を受けてゐる期間は絕對に株主に利益を配當し重役に賞與を出すことを嚴禁し、以て銀行の基礎を强固にすること

二、補償法の下に資金の融通を求める銀行に對しては此際徹底的整理（資本の切り捨て、重役の私財提供等）を斷行することを條件とすること

三、國家の補償は先づ株主並に重役を丸裸にして彼等自ら荷ふべき責任を先づ負はしめたる後ちに對してなすべきこと

四、補償案による日銀の融資の利子收入は全部之を國有とすること

然るに、已に墮落し切つてゐる既成政黨及び資本家は、斯の如き當然過ぎる義務すら之を銀行家に荷はしめんとはしてゐない。來る臨時議會の形勢は未だ本文執筆中には不明であるが、恐らく、以上の如く斷言しておいても狂ひはあるまい。現に、若しも右の如き當然の處置をなすならば、臺灣銀行の株式の如きは今日一文の値すらなくなり、その新株の如きは未拂込金を追徵せられる惧があるので、一株廿圓以上のノシを附けても買手がないのが當然だ。然るに、臺灣銀行の株價は、その破綻が曝露しても左の如く舊株二十七八圓、新株十五圓餘の株價を維持してゐると云ふ奇現象を呈してゐる。（參考のため十五銀行の株價も附記しておく。）

臺銀及十五銀行株價（東京市場）表

	臺灣銀行株		十五銀行株	
	舊株（百圓拂込）	新株（七十五圓拂込）	舊株（百圓拂込）	新株（二十五圓拂込）
一月中最高	円 五九・五	円 ―	円 一〇七・五	円 ―
二月中最高	五八・〇	―	一一〇・五	―
三月中最高	六五・五	―	一一〇・七	―
四月十五日	四一・五	二八・〇	一〇五・三	二七・〇
十六日	三九・五	二六・五	一〇五・三	二五・〇
十八日	二八・〇	二三・〇	一〇四・〇	二四・五
十九日	三一・五	一六・〇	一〇〇・〇	二三・二
二十日	二七・〇	一三・五	八〇・〇	一七・〇
二十一日	二八・〇	一五・五	六五・〇	一三・〇

斯の如きは、政府と資本家とが一致協力して、負擔を國民に轉嫁して銀行株主の利益を擁護するであらうとの市場の觀測を反映するものであること云ふ迄もない。十五銀行株が五十五圓と云ふ市價を維持してゐるのも同じ理由が多分に働いてゐる。若しも、私が右に揭げた第一乃至第三の條件が斷行せられるものとせば、多くの銀行株は更に下

落してゐるのが當然なのである。

顧るに、我が政府と資本家とは、從來、(之を單に大正九年以後に限りて見るも、)國民の負擔に於て、資本家の不始末の尻拭を屢々やり、そのために國民に轉嫁せしめた犧牲の高は極めて巨額に達してゐる。しかも、その殆んどすべてが、資本家の私財を肥やさしたのみであつて、事業そのものゝ保護とはなつてゐないと云つてよい。試みにその重なるものを列擧して見やう。

A　預金部資金の特別貸出

貸付先	金額（千圓）	利率	融通時期	償還期限
國際汽船會社	二九、二〇〇	六分	大正八年末より十二年に至る	約十ケ年
三共製薬會社	二、〇〇〇	六分	大正九年	五ケ年
日本興業銀行	一五、〇〇〇	七分五厘	大正十二年	大正十四年
日本紙器會社	六、〇〇〇	五分七厘	同十一年	五ケ年
合同油脂グリセリン會社	二、〇〇〇	五分五厘	同十二年	十ケ年
横濱興信銀行	一六、〇〇〇	五分	同九年	大正十九年
臺灣銀行	五〇、〇〇〇	五分	同十二年	大正十六年
勸業銀行	四、二〇〇	五分五厘	同十二年	廿四ケ年半
朝鮮銀行	三〇、〇〇〇	五分	同十三年	大正廿二年
東亞興業會社	二、六〇〇	五分五厘	同十三年	十ケ年
對支借款關係資金	五一、一六五	六分	同十二年	大正廿七年
裕豐公司	四、五二一	五分五厘	同九年及十二年	十ケ年
南洋鐵業公司	二、五〇〇	六分	大正十三年	大正廿八年
朝鮮銀行	五、〇〇〇	七分又ハ五分	大正十二年	三ケ年と五ケ年
東拓會社	二五、八四〇	五分乃至七分	九年乃至十三年	五ケ年乃至十五ケ年
合計	二三九、七二六	―	―	―

B　預金部利子の引下に由る救濟(大正十四年)

	金額（千圓）	利差に由る救助年額（千圓）
一國際汽船關係利子六分より三分に	二九、二〇〇	八七六
一朝鮮銀行關係利子五分より二分に	五〇、〇〇〇	一、五〇〇
一同上別口利子を二分に	一九、〇〇〇	*五七〇
一臺灣銀行利子五分より二分に	五〇、〇〇〇	一、五〇〇
合計	一四八、二〇〇	四、四四六

(備考)*元利子を五分と見做して計算す

C　損失補償法に由るもの

	千圓
一、震災手形善後處理案	二〇七、〇〇〇
一、今回の財界恐慌補償案	五〇〇、〇〇〇
一、臺灣銀行救濟同上	二〇〇、〇〇〇
合計	九〇七、〇〇〇
之に預金部低利貸付合計	二三九、七二六
總計	一、一四六、七二六

即ち、預金部の特別貸出と損失補償金額とを合計すると、實に十一億四千六百七十二萬六千圓、人口五千萬人と假定せば一人當り約二十三圓、全國世帶數約千二百萬戸に割り宛つれば一戸平均約百圓の大負擔を國民に負荷さして、資本家を助けて來たわけだ。然らば、この大迷惑を國民にかけた資本家や政治家は、頭でも圓めて罪業消滅の念佛でも唱へてゐるかと云ふに、否々、彼等は、斯の如き大犧牲を國民に負擔せしめながらウマイ酒に依然陶醉して亂舞を續けてゐるのだ―見よ國民に數億圓の迷惑をかけた臺灣銀行前頭取中川某は勅選議員として光榮ある位地に既成政黨から推擧せられて得々としてゐるではな

いか。松方某は數百萬圓の油繪を外國から買込んで豪奢を續けてゐるではないか。多くの前科政治家は依然として政治的位地を與へられてゐるではないか。

資本家及既成政黨が、國民に迷惑をかけた高は右に止らない。姑く、失業其他の間接のものを除くも、大正九年以來、幾多銀行の破綻に由つて、どれだけの預金者が、粒々辛苦の結晶を喪つたか。今度の休業に罹る預金者のみでも實に八億數千萬圓に達してゐるのだ。しかも、その富の責任者である重役その他の多數はどうである?! 彼等は私產提供のカラクリの裏に、依然豪奢な生活を保證せられてゐるではないか

さり乍ら、聽けよ。斯の如き不正極る政治と經濟との下に、民衆は長く蹂躙せられてゐるものでは決してないと云ふことを。然り、今度の財界の大恐慌は、實に、民衆が、斯の如き既成政黨と資本家との全體に對して、一般的不信任を決議した一つの現象に過ぎないのだ。資本家及政府は民衆の無智から今度の大恐慌が來たと誣いる。だが、民衆にすべてを掩ひ隱し、その幕の裏に於て、民衆に多大の負擔を轉嫁し、民衆の粒々辛苦の結晶である預金を、、、、、をたくらんだものは一體誰れなのだ。

斯の如くにして、資本家も既成政黨も、國民の信頼を裏切り、彼等の無能と不誠實とを暴露し、いよいよ國民の支持を喪ふのだ。彼等はいま、斯の如くにして、自らの墓穴を掘りつゝあるのだ。今度の財界の大恐慌は、資本家と已成政黨とが、斯くの如くにして亡び逝く破產總清算の一幕に外ならないのだ。讀者は容易に之を理解せられたであらう。（五月五日記）

財界の大動搖が產業界に及ぼす影響及國民覺醒の必要

武藤山治

今回吾國に起りたる財界の大動搖が產業界に如何なる影響を及ぼすかを知らんと欲せば其影響を直接と間接の二つに分け觀察せねばならぬ。財界の大動搖とは俗に言ふ恐慌であつて恐慌は吾國に於ても度々起つたことがあり歐米では今日まで既に十一回も起つて居る。然かして此大部分は資本を過大に固定させたことが其原因となつて起つて居る。吾國今回の恐慌も其原因遠く大正六七八年の好況時代に發したもので當時一時の好況に浮かれ資本を濫費せる上に收支償はぬ事業に過大な資本を固定させたためである。それを大正九年の世界大戰爭後の

反動時期に吾國のみ官民が彌縫策を採り徹底的整理を怠り居るところへ大正十二年九月一日關東大震災が起り非常なる資本を失つたにも係はらず猶相變らず彌縫糊塗を事とし其日を送り來りたるため早晩財界に一大動揺の起ることは避け難い運命であつた。それが今回の震災手形法案より偶々表面に現はれたに過ぎない。恰かも吾國の財界は戰後久しい間内面的に一大病毒が伏在して其切開が日一日と遲れて居つたところ段々病毒が廣く蔓延して終に外部に現はれるに至つた病人のようなものである。故に吾々國民は此際苦痛を忍んで多年吾財界に潜み、吾經濟界の健全なる進歩發達を妨害せる此病毒を除去することに協力一致せねばならぬ。

偖、右に述べたる如く今回の恐慌は永い間の不整理の結果であるから吾産業界に及ぼす影響は之を輕視するとは出來ないが直接之が爲め影響を受くるものは餘り多くあるまい。尤も臺灣銀行其他より放漫なる貸出を爲したるため收支償はぬ事業でも繼續し來つたものがある是等は中止する運命に立至るは止むを得ぬ成行である。故に此方面に於て多少の影響は免かれぬが同時に玉石混同されて不良なる經營者の下に苦しんで居つた事業の中で有望なる事業は壓制者より解放された國民の如く大に發達するようになるから整理の爲め一時多少の動揺はあつても結局産業界は良い影響を受くるとは明らかである。然して今回の財界大動揺の爲産業界が間接に蒙る影響に至つては極めて一時的のものであつて私は寧ろ一般的には今回の財界の動揺は産業界に一服の整理と發奮を促がす動機となつて極めて良いものであると信んずる。何んとなれば今回何にも新に財界に大動揺を起す原因が發生したのではなくして、元來吾財界の體内に伏在した病毒が公けに知れ渡つた爲め一般が驚き慌わてたに過ぎぬのであるから新に是れが爲め産業界に悪影響を及ぼす理由はないからである。勿論眞の財界恢復まで産業界も困難の時代を經過せねばならぬから其覺悟は必要である。然るに米國紐育の商業會議所などの意見の如く吾財界は戰後根本的に整理改革の必要があるのに之を爲さずして今日に及び今回財界に大動揺が起つたとて猶之を覺らずして政府が再び通貨を膨脹して之を救ふようなとをすれば病人に麻醉劑を與へて一時安堵を爲さしむると同様であつて、今回財界の動揺に對する政府の救濟策如何に依つては前門狼を防ぎて後門虎を迎ふるような結果となり更らに他日吾財界及産業界に甚大なる禍根を貽すことゝなるから吾々國民は苦しくても良藥は喜んで服用し苟くも一時の苦痛は和らげても他日大なる苦痛を與ふる麻醉劑のような政府の財政策を誤つて歡迎せぬようせねばならぬ。

元來吾國で政局に當る政治家は大部分官僚政治家であつて政黨と言つても眞の政黨でない、政黨の首腦部は皆官僚に占領されて居る故に吾國には未だ眞の政黨政治はない。政黨の假面を被る官僚政治家は政府の金なるものは一文一錢の微と雖ども國民全體の負擔するものなることを顧慮しない。從つて何にか事あると一部少數の人々の爲め無頓着に國民に負擔せしめて顧みぬ。今回政府の財界救濟案を見ても幾億圓の國民の損失負擔も金は天から降つて來ると思つて居るのか一向苦にせぬようである。

英國政府が對獨宣戰布告をした時財界に起つた一大動揺を鎭めるには政府が大國際金融市場たる倫敦に集まり來たる手形の決濟が不可能

となつたのを救濟する爲め英蘭銀行をして引受銀行に代はりて危險を犯して割引せしめ之れより生ずる損失を補償するより外はなかつた。それで英國政府は之を斷行した。其結果英蘭銀行が割引した手形金額は壹億貳千萬磅、即ち吾拾貳億圓に達したが戰爭終了後四年間に是等手形の大部分は決濟され支拂不能となつたのは僅かに五百萬磅即ち五千萬圓に過ぎなかつた、此一事を以ても英國に於ては如何に國民の負擔損失となる場合には關係者が忠實に事を運ぶかを知る事が出來る。當時對獨宣戰前數日即ち千九百十四年の八月一日英蘭銀行と英國政府との間に交換されたる往復文書を左に掲載し吾國政府と日本銀行との關係も斯くの如き程度に迄改めねばならぬ事を悟る參考資料とする。

大藏大臣宛英蘭銀行書翰一九一四年八月一日

拜啓歐洲二、三の强國間に戰爭勃發せんとする脅威ある結果として吾英蘭銀行が各方面より受理したる異常なる援助的要求に關する事實をば政府に陳述するを以て吾人の義務と存候

銀行は過日五日間に於て倫敦銀行業者、ビルブローカー並に商人に對し政府債券、爲替手形等を擔保として金貳千七百萬磅を超ゆる未曾有の貸出を爲せしを以て此支拂高は、以て右當業者の所要全部を充たし得るものとは察せらるゝも、右貸出高中幾何が國内各地へ送金されたるや、其割合如何は時局に重大なる關係を有するものと存候吾人は現在に至るまでは、何等合法上の援助依賴に對しては之を拒絕せざりしと雖ども若當銀行にして制限外紙幣權を附與せられざる曉に於ては當行或は資金の貸出を制限するの要に迫られ、以て吾國の現狀に於て緊急缺くべからざる通商及貿易上の便宜を減殺せざるべからざるに至るの近きにあることを恐るゝ次第に御座候

總裁　ウォルター、カンリッフ

副總裁　アール、エル、ミューマン

右に對する總理大臣及大藏大臣連署の政府回答文、一九一四年八月一日

拜復歐洲二、三强國の戰爭勃發せんとする脅威ある結果として英蘭銀行に對して要求されたる異常なる金高に關する本日附貴翰受領、

貴示に依る現狀に於て政府は若し英蘭銀行にして正當なる商業上の必要を充たす爲めに認可されたる擔信に對しての割引及貸付增加を必要と認め、之がため法定の制限外紙幣發行の必要起りたる時は之を即行相成べく、此曉に於て政府は直ちに議會の協贊を求むべく候、

前記の割引若くは貸出は之を利率壹割以下を以ては行ふべからざること並に右利率の引上は政府適當なりと認むる時に於てのみ之を貴行に勸告すべき事、

貴行は以上の割引若しくは貸出を一般に對して行ふに當り之に伴ふ危險、經費及手數に對する相當なる諸掛をば右割引若しくは貸出に伴ふ利益より差引たる殘利得は之を國民全體の有に歸せらるべきものに候事、

總理大臣　エッチ、エッチ、アスクイス

大藏大臣　デー、ロイド、ジョーヂ

最後に一言して吾國民に向つて政治的自覺を促したい。今回の恐慌は吾國民に一大教訓を與へた。即ち政治の良否は國民に利害關係が如何に大なるものであるかが一般に知れ渡つたことである。言葉を換へて言へば從來吾國の政黨政治家たるものは國民が政治に冷淡であつた爲め國民の利害を代表せず一部政商の利益を圖ることに汲々として居つたことが明白になつた。

今日吾々國民の眼前に曝露された實例から見ても今日まで臺灣銀行を救濟し來たことは色々の口實を唱へても結局其銀行を喰い荒らした政商を救濟せんが爲めであつたことは明らかである。然して此一つの事件だけでも國民は尠くとも參億圓位の損失負擔を蒙らされることになるであらう參億とは之を米に換算し壹石〔〕拾六圓とせば約八百三十一萬六千石となり又之を壹ヶ年六朱とすれば每年壹千八百萬圓宛子々孫々永久に吾國民の損失となるのである。昔から惡政は虎の如しと言ひ傳へられて居るが之を以て見れば吾國今日の政黨政治より國民の蒙る被害は到底虎の比でない、之を國民が政治に冷淡なる罰金とすれば隨分高大なる罰金である。又之を立憲治下の國民が政治に對する一つの學問をするためと見れば月謝は實に高いものである。然るに此高い罰金を課せられ、此法外なる月謝を拂はされて猶吾國民が悟り得ぬであらうか、來年五月の總選擧は一に之に對し吾國民が答案を與ふる時である。

今や全國津々浦々まで吾國民は既成政黨頼むに足らざるのみならず既成政黨に政治を托することの非常なる損失を蒙ることを悟つた。然しながら吾憲政發達の爲め最も改めねばならぬ一つの吾國民性がある

それは唯愚痴を言ふばかりで自ら立つて戰ふの勇猛心がないことである人の念佛で極樂へ行きたいと言ふのが吾國民の通有性である。昔の道話に次のような面白い話がある。

秋も夜寒になつた頃相應に暮す町人が五六人、言ひ合せて鹿の音を聞きに行かうと酒肴の用意をし或る山寺に懇意の和尙があるを幸ひ、それを訪ねて客殿を借受け泊りがけの遊山に出かけた。さて、鹿の音を待ちわびて、歌を讀むものもあれば、詩を作るものもあり、句を案ずるものもある。持參の酒をさしつ押さへつ最早入會の頃となつたが、どうしたことか、とんと鹿が鳴かないのである。初夜になつても何時になつても鹿の音が聞へない。

「これは何うだろう、もう鳴きそうなものだが！待てど暮せど狐の[illegible]さへしないので、そろ〳〵眠氣がさして來る、詩も歌もいやになつて欠伸に世間話も杜切れ一同默然として居る折柄五十ばかりの男が、「今晩は、皆さんのおかげで、宵からゆつくり御話を承はつて、よい樂みをいたしました。私は、こうして遊んで居ますが家の者は定めて心づかいをして居るだろうと、不圖、そんなことを思ひ出して、どうやら理に入りそうで御座います」妙なことを言ひ出した。一同が「如何な理由で」と尋ねると、

「御存じの通り一人の伜、當年二十二になりますが何んともはや困つた奴で、私が家に居りますと、しぶらこぶら。店の用を手傳ひますが、私の影が見へなくなりますと、尻に帆かけて遊所通ひ、勿論親類緣者が、色々意見をしてくれますが馬の耳に風同様手應がとんとございません、あんな奴に身代を委かせるかと思ふと心細いもの

でございます。御蔭で、何一つ不足のない私でございますが、毎日毎夜子故に血の涙、さりとては困つたものでございます。」と溜息吐き吐き言ふのである。

するど、傍に居た四十四五の男が「否々、あたのは御困りとは言い條、畢竟、御息子が金を御使になると言ふまでゞ、强いて御心配には及びますまい。私などは、それどころでは御座いません」と言ふ。

「そしてあなたの御難儀は」

「とかく、近年店の者が引負をいたしまして五十兩は儘よ、七十兩は儘よと年々帳面の空き、たまつたものでは御座いません。鼻つ垂れの頃から世話し少し用に立つ時分になると、引負を拵らへる。それでは主人は何になりますか、それから見れば、あなたのは何んでもありますまいよ。」と言ふと又一人が否々それは、まだしものことです。私共は近頃どうも都合が惡るくて、得意先が片つぱしから倒れます。彼方では三貫匁此方では五貫匁、思つても氣の滅るようでございます。」何んのことはない將に是れ泣言の陳列會である。

所が、まだ、上手があるのか、向に座つて居る老人、扇ばちく鳴らしながら、

「皆さんの御愁嘆何れも御道理、御察し申しますが、私のように、親類縁者から金の無心を言はれたり、印形をしてくれと頼まれたり、家内連れのかかりゆうと是れも又困つたものでござます。」半分言はせず隣りの人が、

「否々、皆さんのは皆榮耀と言ふものです。私の辛いこと御聞き下さい。どうしたことか、女房と母の仲が惡るくて一年三百六十五日休みなしの角突合ひ、家内中で燻ぼつてしまいますので、いつそ貧家へ歸へそうと思へば、幼い者が二人もあります。挨拶すれば女房のヒイキをすると言つて母の機嫌が惡るし、女房を叱れば、他人と思つて妾ばかりを邪慳にすると怨みまして、いやもう、中に立つた枕で辛いの苦しいのと、申すようなことでは御座いません。」と調子に乘つて身の上の難儀話をする、すると、一人が氣が付いて

「ほんに、もう、鹿が鳴きそうなものだと話に夢中になつて、聞き漏らしたか知ら」と障子を引開けると、大きな鹿が一疋悄然と座つて居る。

「こりや、どうだ、そこに居る位なら、先刻から何故鳴かないのだ。」

鹿は拔からぬ顔で、

「否々、私はお前方の泣くのを聞きに來たので……」と言つたそうである。

吾々は既成政黨の隘路には困つたものだと口癖のように泣言を常に言ひながら立憲政治の下で之を革新する事は各自の有する一票の投票で容易に出來るのに今日まで各自協力一致して其目的を達し得なかつたのは全く吾々の弱い道德心に束縛せられて居るからである。馬や鹿から馬鹿にされても腹を立る事も出來ぬような情ない有樣である。尤も永い間の因習で立寄れば大樹の下とか、雉子も鳴かずば打たれまいと言ふ弱い道德心が第二の天性となつて居るから急には之も改めることは出來ないとしても、今度は普通選擧である。吾々と同感の士は各自の立場に制せられず、感情に捉れはず、來る總選擧に一人にても多く既成政黨以外の眞面目なる代議士を議會に送る事に協力せねばならぬ。

パニックに襲はれた金融市場

堀江歸一

不景氣時代の銀行業

我國の銀行業に幾多の瑕疵があり、缺陷があり、極めて脆弱なる基礎の上に立ちつゝ、辛うじて其日其日を過しつゝある銀行の少なからざることは、從來世人の認める所であつた。蓋し銀行の多くは大正五六年より七八年に至る好景氣時代に乘じて、如何に當時政友會內閣の下に、行はれた積極政策に、煽揚されたとは云ひながら、營業上に戒愼す可き所を失ひ、取引先に對して、其求める儘に無謀なる資金の融通を敢てした。其咎めは大正九年の恐慌に際して、彼等の受ける所と爲り、當時蒙つた傷痍の未だ治癒するに至らざる內に、大正十二年の震災に依つて、取引先の多くに打擊を受ける者を生じ、彼等に對する貸付は自ら固定して、其回收處理に窮せざるを得なかつた。固定貸付を整理する最良の方法は減資か、配當金の減率か、孰れかの一であつて、固定貸付の金額の大なる場合には、減資を以つて、之に當る可く、又其小なる場合には、年々の利益配當を低減することに依つて、減却の道を立てる可きである。然るに我國に於ては、銀行が株主の利害を尊重し、其希望に聽從するに熱心なる、餘程の急場に迫らざる限り、減資は愚か、減配を爲すが如き擧に出でず、如何なる無理を忍んでも、又如何なる逆境時代に於ても、從來通りの資本金を維持して、從來通りの配當を株主に頒ち、重役自身亦莫大なる賞與金を獲得しやうとする。斯くて銀行業の基礎は鞏固と爲る機會を得る能はずして、無理に無理の重なる爲めに、脆弱に傾かざるを得ない。幸に經濟社會の狀勢、遽に好轉して、昨日まで固定貸付と思はれたものが回收されたり、銀行の所有する資産に値上りを來したりしたならば、銀行亦一方に右の如き危險なる營業方針を取りながら、他の一方に著しき失態を生ぜず、局面を糊塗するを得るであらうが、近年の我國に於ける如く、不景氣が幾年の久しきに亘つて、毫も其勢を更めず、寧ろ其深刻化する趣きすらあるに於ては、銀行が資金回收の困難と所有資産の値下りとに挾擊されて、苦境に陷るに至るのは、已むを得ざる所である。三月中旬渡邊、あかぢ貯蓄の兩銀行が支拂停止を發表するに至つたのは、兩銀行の當局者をして云はしめれば、片岡大藏大臣が議會に於て、渡邊銀行の破綻を明言した結果であるとして、罪を大藏大臣に嫁さうとするであらうが、同銀行の如く、渡邊一家が自家の事業經營に於ける便宜を得る機關に供され、銀行の資金を運用する方法が頗る亂暴の

ものであつては、假令ひ大藏大臣の失言がなくとも、能く營業を全ふするを得たかどうかは、一個の疑問であつて、早晩閉店の悲運を免かれなかつたであらうし、爾餘の數銀行亦倒潰す可き狀勢に居つて、倒沒したものに外ならないと云へる。

斯くて三月中旬渡邊銀行に端を發した、銀行取付騷ぎは村井銀行の支拂停止を一段落とし、日本銀行の非常貸出に依つて、辛うじて他に蔓延するを防ぐを得たものゝ如くに見えた。然も斯くて收められた金融市場の小康は單に外面を裝へる事實に止まり、其內部には險惡なる潮流の打寄せ來るものがあつた。之に對して政府なり、銀行業者なりが唯一の力頼みとしたものは、震災手形損失補償公債法案と震災手形善後處理法案とであつて、兩者に依つて、震災手形を持扱つて、其處理に苦んで居る銀行が救濟されたならば、當面の金融に於ける難關は除かれるものと考へられたのである。而して是等兩法案の通過は甚だ困難であつたが、漸くの思ひで、成立するを得たことは、政府を始め利害關係の厚き者に一安堵を與へた次第であつたかも知れないが、是等兩法案の討議中、大藏大臣自ら渡邊銀行に關する失言を爲したのを始め、世人をして、我國の銀行業が如何に危機に瀕しつゝあるやを想像せしめるが如き質問應答が屢々政府代表者と議員との間に交へられた。大藏大臣は信用攪亂の虞れのあると云ふ理由の下に、震災手形の銀行に依つて所有される高に就ても、震災手形の支拂人に就ても、之を明言することを回避したが、俗に云ふ隱すより現はれるはなしとの諺の如く、震災手形を多く所有する銀行も、其支拂人も世間の類推する所と爲り、某銀行は危險であるとか、某商會は行詰つて居るとか云ふが如き樣々の風評の起ることを免かれなかつたのである。

臺灣銀行の破綻

其れにしても震災手形に關する兩法案の成立は關係者をして自ら安んぜしめるを得たに相違ない。而して兩法實施の結果として、最も多く救濟の效果に浴するを得るものゝ臺灣銀行であることは、世人の一樣に認めた所であつた。然るに其臺灣銀行が震災手形法の恩典を受ける能はざる間に、早くも手元資金に窮乏を告げて、如何とも爲し難き狀況に陷り、曩に震手法さへ成立すれば、臺銀の無事亦期せられるとした政府の明言を裏切つて、日本銀行の援助を受けざる以上は、到底營業を續けるを得ざるに至り、而して日銀をして臺銀を援助せしめるには、國家に於て、二億圓を限度とする保證を與へざる可からざることゝ爲り、若槻內閣は緊急勅令に據つて、之を行ふとしたに對して、樞密院の反對に會し、遂に內閣の總辭職を見るに至つた次第である。表面から概觀すれば、若槻內閣は議會に對し、又國民に對して、曩には震手法に依つて、臺銀の救濟されることを斷言しながら、二旬の後には、日銀の援助を以つてせざれば、救濟するを得ないとした點に於て、大なる食言を爲した責を免かれざるやに思はれる。臺銀救濟の緊急勅令案に對する非難の一個條が此點に繫がつて居つたのは勿論であつて、若槻內閣が不明の譏を受けるのは當然であるが、一面から考へると、若槻內閣をして斯る不明を餘儀なくせしめたに就ては、一の事情の存するものがあつた。其れは市中銀行殊に第一流とか、有力とかと云ふことを以つて知られる某銀行の臺銀に對する態度であつて、今

回の金融動亂の如き、此某銀行のシヤイロツク式態度に關聯して、起り來つたことの著しきものありと云へる。

臺灣銀行は從來東京に於て、大阪に於て、市中の諸銀行からコールを借入れ、一方に返濟すれば、他方に就て新規の融通を仰ぎ、以つて資金調達の一方便として居つたのであつて、其金額け驚く可き高に上つて居つた。故に臺銀に對する活殺の權は一にコールの出手銀行に握られて居ると見られる。而して是等の出手銀行がコール貸出の際定められた條件に依つて、之を回收することは、固より其自由であつて、何ものにも遠慮す可き筋合のものでないと云へば、其れまでの話であるが、總ての銀行が斯る態度に出でたとしたならば、銀行業者と高利貸との間に何の擇ぶ所があるであらうか。銀行業にして社會公共の利害に關係することの深き以上は、營業の方針を決定するに就ては、單に自己一個の利益のみを念とす可きものではない、取引の相手方に就ては勿論、同業者並に社會全體の利益を顧みなければならず、殊に金融市場に危機の伏在する場合に、此種の必要の存するものゝ大なることは論を俟たない。而して臺灣銀行に對するコールの貸出は京阪兩地に亘つて諸銀行の爲す所であつて、之を回收する遲速若しくは手段の寬嚴は臺銀の運命を左右すると共に、諸銀行の利害を支配するもの少なしとしない。然らば此點に於て、諸銀行は協同一致の態度を持し、出來得べくんば臺銀の命脈を繋ぐことを期しなければならない道理であり、斯くてこそ銀行の社會公共の機關たる面目は全ふされるを得る次第であるのに、某銀行の爲す所は之に反し、殆ど拔駈けの勢を以つて、急遽臺銀に就て、コールを回收し、此事が一の動機と爲つて、臺銀をして手元資金に窮し、日銀の援助之に對する政府の保證なき限り營業を繼續することを不可能ならしめたのである。某銀行の如き、平生高利を以つて、臺銀にコールを融通し、營業上に利益を得るもの少なしとしない、此情誼から云つても、又諸銀行相協同して、金融上の平靜を保つ可き責任から考へても、コールの回收に或る手加減を施すなり、少なくとも諸銀行協同して臺銀に臨むなり、取る可き道は多々あるのに、自行一個の安全を謀るに急にして、臺銀を犠牲に供し、次いで金融市場に動亂を惹起して、憚らざるに至つては、正に高利貸根性の曝露したものとす可きであり、而して一方に此處置を敢てしながら愈々金融市場の攪亂、收拾す可からざるに至るや、市中諸銀行相聯合して、救濟の必要を政府に求むるが如き、厚顏の甚だしきものとしなければならない。

臺灣銀行が其營業振りに常軌を失し、殊に一の鈴木商店に對して、莫大なる固定貸付を爲し、鈴木の營業に於ける不如意が直に臺銀をして窮地に陷らしめたり、營業資金を調達する爲めに、內地市場に於て、高利を以つて、コールを漁り廻つたりしたことの不都合は論を俟たない。前回の整理に際して、減資の徹底的に行はれなかつたことの如き臺銀今日の悲運を招く一原因であつたに相違ないとしても、其後に於ける營業振りに依然として改まるものゝなかつたことも、臺銀をして世間の同情を失せしめた所以である。然も前回の整理に於て、僅に四分の一減資に止まつたのも、當時の臺銀頭取の背後に控へた有力者に對する遠慮の然らしめたものであると云ふ風評を耳にするに至つては、同銀行今回の失態に就ては、歷代の財政當局者に其責任の存する

が如く、臺銀を見殺しにして、顧みなかつた、否臺銀の破綻を早からしめた市中銀行業者にも負ふ可き責任の大なるものゝあることが認められるのである。

銀行の共同扶助

同一の都市に於て、同一の業務に從事する者の間に於ては、常に相互扶助の精神を以つて、營業に臨み、自他互に相助けて、以つて業務の進捗を謀るのが當業者としての道徳であると共に、社會全體の利益を擧げる所以である。臺灣銀行の營業上に於ける放漫は固より責めなければならないが、市中諸銀行亦實に平生高利の收められるを利益ありとして、臺銀にコールを貸出し、臺銀の放漫振りを助長せしめた點に於て、多大の責任の負ふ可きものがあり、而して一銀行が毅然態度を一變し、殊に從來或る程度まで、臺銀に對する方針に就て、默契し、了解して居つた他の諸銀行には何等謀る所なく又今後に生ずる影響の如何に就ては、殆ど考へる所なく、臺銀を窮地に陥らしめたに至つては、其銀行一個は臺銀に何等の引掛りなきの故を以つて、安んずるを得るとしても、銀行業者として、社會に對する考へを失つたものであつて、斯る銀行業者の跋扈する限り、金融市場の安全は到底保たれるを得ない。臺銀の當局者に罪のあることは論を俟たないが、同時に平生臺銀を利用しながら、急場に臨んで、臺銀の破綻を早からしめた某銀行業者の私慾的態度にも、大なる憎惡を感ずるのである。

斯る金融的危機に際して、市中諸銀行が當初から相互扶助を原則として、各自の力を合せ、以つて時局に臨むことが出來ず、互に單獨の功名、拔駈けの手柄を現はすが如き態度を取るのは、世間が所謂世智辛く爲つて、斯くまでにせざれば、充分なる利益の贏し得られざるに至つたことを以つて、一の原因とするが、同時に我國今日の銀行業界を通じて、群鷄の一鶴を以つて目される人物はなく、張三李四の徒が鈍栗の背くらべをして居るが故である。澁澤子の壯時、東京銀行業界の牛耳を握つて居つた時代には、銀行業者の國家萬一の際に於ける働きには、統率の保たれるものがあつたし、其後三菱の豐川良平氏が銀行業者の代表者として、外部に臨んで居つた時代には、斯業に團體的行動の見る可きものはあつたが、今や銀行業界に於ける代表的人物の輪廓は次第に小なるものと爲り、如何なる場合に於ても、斯業全體を統率して、統一ある行動に出でしめるを得ざるに至つたことは、吾人の頗る遺憾とする所である。

若槻内閣の二失策

臺銀救濟に關する勅令案の樞密院に於て否決されるや、若槻内閣は直に總辭職の擧に出でた。自家の必要と認めた政策の行はれざるを機會として、總辭職を爲すことは、政治家の行動としては申分ないと考へるかも知れないが、若槻内閣は緊急勅令案の成立せざる場合には、經濟社會に起る波瀾の容易ならざるものある可しとして、其成立を必要としたのである。不幸にして樞密院と見解を異にして、否決の運命に陥つたとすれば、次いで來る可きものゝパニックであることは、若槻内閣の熟知して居つた所に相違ない。果して然らば勅令案の否決されたと共に、之に代る可き何等かの方策を講じて、恐慌を防止するな

り少なくとも恐慌の及ぼす慘害を局限するなりして、然る後、總辭職するのが政治家としての責任を全ふする所以であるのに、此邊の用意に就ては、何等爲す所なく、殆ど跡は野と爲れ、山と爲れと云ふが如き考を以つてし、田中新內閣組織の直後に、果してパニックの起るや、自家先見の明を誇るが如き言動に出づるに至つては、私は若槻內閣の爲めに、遺憾とするの念を禁ぜざるを得ない。現に四月十七日若槻內閣が總辭職を爲すや、臺灣銀行は日銀に見離され、市中諸銀行からコールの回收を受け、開店の見込立たずして、十八日以來休業の已むを得ざるに至つた一事に徵するときは、臺銀は最後に臨んで、見殺し同樣の處置に會つたものである。緊急勅令まで發布して、臺銀を救濟しやうとした若槻內閣は何故に緊急勅令案の否決された場合に、其以外の方法に依つて、臺銀を救濟する最善の方法を講じなかつたのであるか。又臺銀破綻の曉には、容易ならざる混亂の經濟社會に生じ來ると云ふことを豫想して居つた以上は、若槻內閣は緊急勅令以外に臺銀を救濟する道なく、隨つて臺銀を見殺しにすることは、已むを得ないとしても、臺銀の外に、臺銀よりも更に重大なる一般金融市場を救濟する政策を確立す可きではないか。否當初臺銀の救濟に偏倚して、一般金融市場の安否を閑却した點に於て、若槻內閣の第一の失策があり、臺銀救濟の成らざるや、一般市場の利害は全く放擲して、政局を去つた點に於て、若槻內閣は第二の失策を敢てしたものと云はなければならない。或は道途、說を爲す者がある。政府は始め緊急勅令發布の意はなく、單に日本銀行をして臺灣銀行に對する貸出を行はしめて、以つて臺銀を救援する意嚮であつたが、既に臺銀に過大の貸出を爲して居る日銀としては、政府の保證なき限り、此以上の貸出を爲すを得ざる所から、政府の申出を拒絕し、斯く緊急勅令案の必要を生じた次第であつて、斯る行掛りの存する以上は、緊急勅令案の否決された故を以つて、今更ら日銀に臺銀の援助を求めるを得ざる次第であり、此事が若槻內閣をして萬策盡きて、辭職以外に道なからしめた所以であると。然しながら私を以つて見れば、緊急勅令案否決後政府が日銀に向つて、臺銀の救濟を求めることは、不可能であつたとしても、斯る狀勢の下に、金融市場にパニックの生じ來ることの推測される場合には、單に臺銀救濟と云はず、一般市場安定の爲めに、日本銀行をして非常貸出其他の方法に依つて、出來るだけの力を致さしめることは、政府の正に爲す可き所であつたのであつて、若しも此點に於て、日銀當局者が狐疑逡巡事を決せざるものとすれば、政府は日銀正副總裁を解任し、適當と信ずる人をして之に當らしめることも、一般市場の安定を求める爲めに、爲すを憚らなかつたのである。若槻內閣が緊急勅令案の否決に會して、直に總辭職を爲したのは、近頃世事意の如く爲らずして、鬪志沮喪した結果であるかも知れないが、政治家として守る可き責任を守り、盡す可き職務を盡したものとするを得ない。

樞密院の態度

唯玆に問題と爲るのは、緊急勅令案に對する樞密院の態度である、過般の震災手形關係の法案に就ても、其後の緊急勅令案に就ても、政府の議會に向つて、又世間に向つて、說明する所は毫も事の委曲を盡さず、唯是等の案にして成立しなかつたならば、恐慌を免かれないと

云ふ威嚇的言辭を弄するに止まり、聽者をして首肯せしめるを得なかつた。經濟社會に關る秘密の暴露から、如何なる急變の生ずることなきかを恐れる以上は、政府が斯る態度を取ることも、亦諒とす可きものがあるかも知れないが、國民としては斯る空漠たる言辭に滿足するまでに、若槻內閣を信用するを得なかつたのである。然るに樞密院に於ては若槻首相自ら長時間に亘つて、詳細なる事情を說明したものゝ如くであり、臺灣銀行の救濟されざる場合に、何故にパニックの襲來に接するやの道理は充分顧問官に了解されたものと思はれる。之を了解したに拘はらず、尙ほ緊急勅令案を否決し去つた樞密院はパニックに依つて、如何に經濟社會が攪亂されても、憲法の精神を格守することが國家に利益ありと信じたのであるか、緊急勅令案を否決した場合に、若槻內閣は何等か之に代る方策を講じて、パニックを防止するに至るものと信じたのであるか。若しも前者であるとすれば、樞密院の固陋驚くの外なしとす可く、又若しも後者であるとすれば、餘りに若槻內閣を買被れるの譏なきを得ない。孰れにしても今回のパニックに就ては、樞密院に負ふ可き責任の存するのは勿論であつて、同院の行動が斯る經濟社會の活機に觸れることのある今回の如く爲る以上は、樞密院の權限なり、組織方法なりを如何にするかと云ふことも、今後の一問題たらざるを得ないのである。

田中內閣第一の失策

既に政局を去れる若槻內閣の失策は之を咎めるも詮なしとして、之に代つて國政を擔當した田中內閣は果して時局を安定せしめるに就て幾何の努力を致したであらうか、抑も亦田中內閣の實際に爲した所は正しきものであつたかどうか、吾人の檢せざる可からざる問題である。田中男は對研究會關係に就て、組閣に多少の思案を凝したやに傳へられたが、男の組閣計畫は比較的順調に進行し、四月十九日午前十一時大命を拜し、同二十日午後六時親任式の擧げられるを得たのである。然も若槻內閣が殆ど投げ遣りの態度を以つて、政局を離れたことは、經濟社會に不利の影響を及ぼし、田中內閣組織の直前から、金融市場は時々刻々に惡化し來り、親任式擧行の當夜東京市五大銀行の一たる十五銀行は手元資金に缺乏して、次日の開店不可能と爲り、遂に二十一日以後休業することゝ爲つた。十五銀行の閉店は臺銀に、貸出したコールの回收不能と爲つた一方に、松方系の事業家に對する固定貸の多大の金額に上つたとの爲めであつて、豫てから大銀行中最も危險なる地位に居るものと稱されて居つたのも、偶然ではない。然も拂込資本金四千九百七十五萬圓を有し、一億二千四百六十七萬圓の諸預金を負ふ點に於て、我國金融市場に重要なる地位を占める十五銀行が一部關係者の機關銀行と爲り了り、關係事業家の業務不振と共に、銀行亦起つ可からざる損害を蒙つたと云ふに至つては、其經營振りの亂雜なる、驚く可き次第であつて、此點に於ては、十五銀行は三月以來不始末を演じつゝあつた二流以下の諸銀行と擇ぶ所なしと云はれても、辯解の辭はないであらう。由來銀行が一部事業家の機關に利用され、其れ等の事業家と興亡の運命を共にする程、危險の事はない。銀行としては或る程度まで廣く取引先を求め、擔保品の種類亦之を多くしなければならない。然るに十五銀行の如き、從來華族銀行と稱される程、

華族と資産上の關係頗る厚きものがあつたが、前年故松方公（先代正義氏）の推薦に依つて園田孝吉男が頭取と爲つて以來、鹿兒島系實業家との關係著しく濃厚と爲り、園田男に代つて、松方公自身頭取と爲つた時代に於ては勿論、他鄕出身の成瀨正恭氏が其地位を襲いだ後に於ても、此關係は依然として渝らず、遂に彼の國立銀行としても特殊の歴史を有した十五銀行をして支拂停止の失態に陷らしめたことは、吾人の遺憾とする所である。

日本銀行が十五銀行から援助を求められながら、之を拒絶し、遂に十五銀行をして閉店の已むを得ざるに至らしめた。當時何故に日銀は十五の如き大銀行を救援して、以つて影響の及ぶ所を遮斷しなかつたかと疑を懷く者もあつたが、十五銀行の內容の不良なること、想像の外に在つたとすれば、或は其見殺しにされたのも、已むを得なかつたかも知れない。此事は姑く別問題とし、兎に角十五銀行が日銀の力を以つてして、救援する能はざる破綻を生じたと云ふことは、銀行に些少なりとも預金を有する人々に大なる衝動を與へ、二十一日は朝來諸銀行に對する急劇なる取付を誘致するに至つた。既に前日午後を以つて、親任式擧行されて、其任に就いた田中內閣の關係は此金融的危機に直面して、何事を爲したかと云へば、單に政權を獲得したことに滿足し、政友會員相會して、祝酒を酌むに忙はしく、世人の恐怖を除却するに就ては、畫策した跡の認められる可きものはなかつた。斯くて若しも二十二日に銀行が閉店したならば、如何なる珍事の出來するか、測り知る可からざる危險のあつた爲め、二十一日夜東京の市中銀行業者は、全國諸地方の銀行を勸誘して、二日間の全國的休業を爲すの方針を決定し、一方に政府を促して、支拂猶豫令を制定せしめ、二十二、二十三兩日から、二十四日の日曜日にかけて、全國の銀行は一齊に休業し、二十五日の月曜日に於ては、右の休日の間に行はれた日本銀行の非常貸出と支拂猶豫令に據る銀行預金引出に對する五百圓の制限と相俟つて、銀行の地位を擁護することゝ爲つたのである。然し私をして云はしめれば、斯る處置に出づる前に、政府としても、日本銀行としても、市中銀行業者としても、爲す可きものがあつたのであつて、之を爲さずして、一躍非常手段を講じたことに對しては、私は我國金融市場の爲めに、遺憾とするの念を禁ずるを得ない。日本銀行並に市中諸銀行の爲す可かりし所に就ては、姑く之を後段に讓り、私は今政府に對して、其足らざりし所を指摘する。私を以つて見れば、何故に田中內閣は宮中に於て親任式の擧行された其足で、直に民衆に向ひ、內閣の運命を賭する最善の努力を以つて、金融安定の策を講ずる、其方策の要綱は斯く〲であると云ふことを公言しなかつたのであらうか。田中內閣の閣員は陸海軍並に司法の三大臣を除けば、盡く政友會に黨籍を有する政治家である、而して今日の政治家として、親しく街頭に出でゝ、民衆に接觸するのは彼等の當然心掛け可き所であつて、意見を發表する方法は幾らでもある。日比谷公園に民衆大會を催ほしても、ラヂオを通じても、共に其目的は達せられるではないか。彼の如く民衆の惶惑甚だしきに至つた場合には、私は責任ある當局者から引受けたと云ふ一言に依つて、騷擾を鎭靜する場面を見たかつたのである。唯田中內閣が此事を爲しても、幾何の效果があつたかは、一個の問題であり、又田中內閣が始めから斯る行動に出でる氣振りすらな

かつたに就ては、自ら事情の存するものがある。

田中内閣に於て、其首相と爲つた田中男は最近まで軍職に居つた人であつて、經濟財政に對して、無智無識であるは當然である。藏相の任を拜した高橋氏は往年原内閣時代の藏相として、所謂積極政策の下に、散々に我國の經濟社會を混亂せしめた張本人であり、其罪科は今日に至つて、尙ほ顯然たるものがある。假に此事は姑く問題外とするも、氏は先年内閣不統一の故を以つて、首相の職を辭するや、間もなく世間の實務から遠ざかり、一個の樂隱居として、悠遊自適の境地に居つたのである。軍人上りの政治家と樂隱居の老骨とが何の因緣か、金融市場の危急に臨んで、首相として、又藏相として、之に當らざる可からざる重職に就いたと云ふが如き、時と人とを誤まれるの甚だしきものであつて、之を假名手本忠臣藏の狂言に譬へて云へば、大石内藏之助が赤穗城の明渡しを了つて、感慨無量の體で、舞臺に現はれた時に、鷺坂伴内が飛出し來つて、一幕を滅多矢鱈に打壞したものと異ならない。田中高橋の蹤が此重大なる時機に臨んで、惶惑爲す所を知らず、親任式後、平日の千日にも、萬日にも比せられる可き滿一日以上の時刻を空費して、何事をも爲さず、殆ど自失の體であつたのも怪むに足らない。斯くて其間に現出した事相は全國に亙る銀行二日間の休業であり、支拂猶豫令の制定であり、臨時議會の召集である。吾人は是等に對して何と批判す可きであらうか。

銀行の全國的休業

銀行業者が自己の發意に依つて、二日間の休業を行ひ、一切の取引先に對して、ロック・アウトを爲したことは、彼等自ら恐怖心に驅られて、銀行の公共的任務を忘却した所爲と評するの外はない。或は彼等は歐洲開戰の當初、倫敦市中の諸銀行が所謂銀行休日（バンクホリデー）を延長し、右休日の外に、新に三日間の休業を行ふことを銀行休日法の規定の下に、政府をして布告せしめた先例を擧げて、自己の所業を辯護しやうとするかも知れないが、歐洲大戰當初に於ける倫敦市場の混亂は内外兩方面の變動に依つたのであつて、我國今回のパニックの如き、國内的のものとは全然事情が異なるし、殊に右數日間の休業も政府が金融救濟の爲めに案出した政府、紙幣發行の準備中、已むを得ず行つたものであり、然も國法の下に、政府の發した布告の下に、合理的に之を敢てしたのである。然らば我國今回の銀行休業の如き、當業者一片の恐怖心に驅られて、銀行の自儲勝手に天下の公器を公衆に向つて、ロック・アウトし、殊に日本銀行の非常貸出の行はれつゝある間に、休業したものとは、多くの點に於て、異なる所のあることを認めなければならない。何故に銀行は自發的休業を爲す以前に先づ

第一、銀行同志の間に於て、相互扶助の計畫を講ずること、

第二、日本銀行をして非常貸出を爲さしめ、資金を借入れる銀行の便宜を謀り、見返品の種類を擴張せしめ、又從來取引關係のなかつた銀行に對しても、新に取引開始の要求に應ぜしめること、（而して見返品としては、瓦斯、電燈、電力、紡績、砂糖業に關する諸會社の株式中、優良なるものを詮衡するに於ては、日銀の信用を傷けずして、諸銀行に對し、一般市場に對する金融の便宜を擴張するを得ること）

第三、從來日本銀行が取引先の銀行に對して、定めてある信用限度に適當の擴張を行はしめること

の三策を實行しなかつたのであるか。是等の諸點に就ては、何等考ふる所なく、唯、一時の急場を凌ぐ爲めに、二日間の休業を敢てするに至つては、我國銀行業者の怯懦なる、唾棄す可きであつて、斯る輩に公共的機關の經營を託するが如き、危險の甚だしきものとせざるを得ない。

今や五月五日を以つて、臨時議會は召集され、政府は此議會に向つて、一方に日銀に對して、五億圓を限度とする損失補償の責任を負ひ、他の一方に或る條件を定めて、日銀をして非常貸出を行はしめる法律案を提出する意見であり、本論文の讀者の机邊に達する頃は一切確定するであらうが、其要項として、新聞紙上に報導されるものゝ內、或るものは日本銀行條例の改正を必要とするが、他の或るものに至つては、政府と日本銀行との意見、一致すれば、何時に於ても行ひ得る所であつて、彼の非常の際に、之を爲さずして、今日に至つて、之を爲すが如き、政府も日銀も爲す所の緩怠であると云ふ譏を蒙らざるを得ない。唯非常貸出に依つて、日銀の受ける損失に對して、國家保證の道の設けられざる以上は、日銀も亦如何ともするを得ないと云ふ說があるかも知れないが、損失と云つて、行はれる非常貸出の程度なり、方法なりに依つて、如何やうにも之を伸縮するを得るし、彼の如き危機に際しては、日銀が斯く〳〵の條件を以つて、非常貸出を爲すと云ふことの聲明だけで、時局を緩和する效果を生ずるのである。啻に然るのみならず、日本銀行が平生特殊銀行の巨擘として、大なる特權を擁し、此特權に依つて、莫大なる利益を獲得して居る事實を顧みたならば、彼の如き危機に際して、日銀が平生の利益の或る部分を擲つて、社會公共の利益に殉ずるのは、頗る合理的態度であつて、斯くありてこそ、日銀の中央銀行たる本色は始めて發揮されるを得たと云へる。唯此事のなかつたことを以つて、遺憾とせざるを得ない。

支拂猶豫令の當否

銀行二日間の休業中に、金融市場の安定—寧ろ露骨に云へば、銀行に對する取付防止の爲めに、銀行業者の要求に聽從して、政府の案出したものは、支拂猶豫令の制定であつて、四月二十二日以前に發生した私法上の金錢債務は二十一日間支拂を延期することゝ爲り、唯、國府縣其他公共團體の債務の支拂、給料及び勞銀の支拂、右支拂の爲めにする銀行預金の支拂、前號以外の銀行預金の支拂であつて、一日五百圓以下のものを除外することゝした。支拂猶豫令は先年震災當時に我國に行はれ、又其前歐洲戰爭中に交戰諸國に行はれたことがあり、爲めに我國民の內には或は之を以つて尋常の事の如くに思ふ者があるかも知れないが、支拂猶豫法のものたる、其性質から云へば、非常の事であり、其及ぼす影響から見れば、容易ならざる事であつて、現に從來の事歷に徵するときは、內外孰れの國に於ても、戰爭とか、天災地殃とか云ふが如き變事に臨んで、始めて行はれたことに依つて、其一斑を知るを得るのである。四月下旬我國に勃發した金融上の動亂たる、如何にも世人に大なる恐怖心を懷かしめたには相違ないが、固と一個のパニツクに過ぎない。臺灣銀行の如き、十五銀行の如き、內容

不良であると云ひながら市場に蟠居した大銀行の支拂停止に接して、其以前に暴露した中小銀行の破綻と相俟つて、銀行一般に對する世人の不安を大ならしめ、無意識無反省の間に、甲乙相誘ひ、丙丁相伴つて、銀行に取付を試みる勢盛と爲り、斯くて資金の融通殆ど停頓するに至つた次第であるが、歐洲戰爭當時の交戰諸國に於ける如く、今後或る期間に亘つて、經濟上の諸機關が停廢するに至るとか、金貨が諸外國から取付けられて、金融市場の根柢が搖撼されるとか云ふが如き虞れのないのは勿論、大正十二年の震災當時に於ける我國の如く、國富に大なる減損を來した譯でもない。隨つて或る方法の下に、市場の恐怖心を一掃して、金融の疏通し、資金の流動する方法を講じたならば、パニックの如きは、恰も俄雨と同じく一過の後に却つて以前に倍する晴天を見るを得るのである。然らば金融の疏通、資金の流動を期するには、如何なる策を以つてするかと云へば、其れには市中諸銀行の相互扶助、之に對する日本銀行の援助を以つてし、日銀の獨力を以つて、如何かと思はれる場合には、國家の保證を以つてすれば、即ち足りるのである。要は日本銀行が一大決心の下に、制限外銀行券の大增發を行ひ、一時銀行券の洪水を起す、覺悟を成し、政府に於て萬一の際に於ける保證を爲せば、パニックの如き、之に當るを難しとしないのである。

　然るに金融の動亂に對して、政府は支拂猶豫を以つて、之を臨んだのである。支拂猶豫令の發布と共に、銀行は一日五百圓を限度として、預金の拂出に應ずることゝ爲つたから、預金取付に對して、安全なる地位に立つに至つたと云へる。然るに之に對して事業界は事業資金の調達に就て、非常の苦痛を覺えざるを得ないのであつて、株式市場や商品市場の閉鎖されたのは勿論、總ての取引にして規模の大なるものは、悉く其進行を中斷されることゝ爲つた。支拂猶豫令は銀行の窮境を救濟するに足りるとしても、此救濟は事業界に打擊を加へる犧牲に依つて、購はれるのであつて、代價の不廉なることが認められる。即ち政府が銀行業者の言に聽き、或は銀行業者の說に左右されて、一切の施設を爲し、一方にパニックの經過後に於て、如何にして產業の狀勢を維持し、發展せしめる可きかの工風を閑却した一事はパニックに對する政府の政策に於ける一大缺陷であると云へる。

　唯支拂猶豫令の效果として、擧げられるのは、或る程度まで、通貨膨脹の勢を抑制するを得ること是れである。即ち猶豫令の下に、或る期日以前に於ける總ての債權債務の關係が一切不動の狀態に膠着し、銀行預金の引出高或る金額に限られるに於ては、是等の束縛は一方に產業資金の調達される道を塞ぐの弊はあるとしても、他の一方に通貨の膨脹は避け得られる。現に歐洲戰爭に際し、支拂猶豫法の施行された英國に於て、通貨の膨脹する勢の比較的弱かつたに對して、猶豫法の施行されなかつた獨逸に於て、非常の勢を以つて、通貨の膨脹したことの如き、前者に於ては猶豫法の力に依つて、戰前の債權債務關係を固定せしめた一方に、後者に於ては、通貨の激增に依つて、債權債務の關係を流動せしめたからである。孰れの政策が戰時金融に處する方策として、正しきを得たものであつたかの問題は此所に論じない。唯兩國戰時金融の實驗に徵して、支拂猶豫法の適用は通貨の膨脹を避けるを得るし、通貨の膨脹を認容する覺悟さへあれば、支拂猶豫法の

如き、遂に其必要を生ぜざるものであると云ふことは斷言し得られるのである。

此點から云ふと、我國今回のパニックに臨んで、一方に支拂猶豫令が制定され、他の一方に日本銀行の非常貸出が行はれると云ふことは誠に屋上屋を架するものと認められる。市中諸銀行が頗る臆病であつて、臺灣銀行の打壞しを行ひ、パニックの直前に、相互扶助の方法に依つて、之に當るを得ず、預金者亦臆病風に襲はれて、何等の危險なき自己の取引銀行に向つて、預金の取付を急ぎ、他の虛心の人々を驅つて、同樣の所業に出でしめて、遂に銀行の基礎を脅かした如く、政府亦臆病癖に動かされて、支拂猶豫令と日銀に依る通貨の膨脹と二重の非常政策を用ゆるに至つては、揃ひも揃つて、臆病者の寄り集りと云はざるを得ない。端午の節句に臨んで、武者人形を飾る古風の習慣の行はれんとする際、金融界に、官界に、民衆の間に臆病者の大衆を見出すのは、私の遺憾とする所である。唯今後の問題は日銀の非常貸出に依つて、二十五六億圓臺まで增發したと稱される銀行券が如何なる速度まで、回收されるかの一事であつて、一方に支拂猶豫令の存するに拘はらず、他の一方に永く銀行券の回收を見る能はず、一時の恐怖心から人々の手に保藏された銀行券が市場に出で來つたならば、必ずしも金融を緩和せしめずして、徒に物價騰貴の勢を刺戟する弊害のみの殘ることなしとしない、斯の如きは吾人の不可なりとする所である。

金融上に於ける前途の難關

パニックは兎に角支拂猶豫令と日銀の非常貸出とに依つて一掃されるを得た。而して日銀の非常貸出に依つて、蒙つた損失に對しては、國家に於て、保證の責に當ること〻爲り、之に關する法律案は臨時議會に提出される。而して之に對しては事情の已むを得なかつたことに出づるものとして、議會の承認を得ること〻爲るであらう。然らば今回のパニックに關する一切の問題は是れで終了したとす可きであるが我國民の內には、一種異樣の考へを懷いて居る者がある。高橋是清氏が曩に內閣の首相であつた經歷を持しながら、後進田中男を首班とする內閣の一閣僚と爲つたことを以つて、恰も天人の人間界に下降し來つた如くに難有がり、四月二十五日無事に銀行の閉店するを得たのも高橋氏の善策宜しきを得たもの〻如くに信じて居る。斯る輩が高橋氏に對して如何なる考を持し、又如何なる幇間的言辭を試みるのも、其人の勝手であるが、私を以つて見れば、高橋が藏相に就任して、一日以上時局を放擲して、金融上の危機を甚だしきに至らしめたことは、就任當初の第一失敗であるのみならず、今後に於ても、彼の手腕を以つて、能く解決するに堪へるや否や、覺束なしと思はれる幾多の難問題が伏在して居る。其重なるものは、左の如くである。

第一、支拂猶豫令の下に、或る方面に於ては資金の調達に困難を訴へ、生產業の維持並に伸張を難からしめて居る。日銀の非常貸出にして行はれる限り、支拂猶豫令の如き寧ろ無きを以つて、勝れりとする或は支拂猶豫令にして一旦發布されたからには、期限の到來するまで存續せしめなければならないと云ふのは、一應道理あるやに思はれるが、支拂猶豫令の下に、資金融通の自由、餘りに束縛される弊の著し

きものがあり、而して猶豫令の制定は現に銀行に對する取付を防止し其後に於ては日銀の非常貸出に依つて、預金取付に就て、充分に銀行を保護するを得たとすれば、支拂猶豫令の如きは、既に其職分を盡し了つたものと云ふを憚らざる次第であつて、當初定めた期限の如何に拘はらず、早く之を廢止して可なりと考へられる。或は政府の爲す所斯の如く爲る能はず、一旦發布した支拂猶豫令は期限通り三週間を通じて施行するものとすれば、一方に支拂猶豫令を存續して、他の一方に資金の流通を圓滑ならしめるに就て、其間に何等かの工夫を凝さなければならない。支拂猶豫令の存續する爲めに、一場の暴風の如く瞬時に去來せしめる可きパニック（金融動亂）をして、霖雨の如く或る時期に亘つて、世人を懊惱せしめるクライシス（恐慌）たらしめる掛念あるが如き、田中内閣が金融政策に對して、何等の定見なく、又斯る定見なき者の常として、狼狽爲す所を知らず、一部銀行業者に動かされて、事を決した結果であつて、此般の責任は如何にして之を負ふかどうか。

第二、日銀の非常貸出が通貨に異常の膨脹を來す原因と爲ることは論を俟たない。金融上の異變に際會した今日、此事も亦已むを得ないが、必要の消滅した際、直に過剩の通貨を回收して、通貨流通の狀態を正常に復せしめるだけの用意が政府に存するかどうか。高橋氏の奇論邪說に動かされて、通貨の膨脹をして永久の事相たらしめ、其物價に騰貴を惹起すことの關係から、膨脹に次ぐに膨脹を以つてするが如き誤まりに陷らざるを得るかどうか。

第三、臺灣銀行は一個の植民地銀行として存續せしめる理由はあるか、從來の如く植民地の領域を離れて、内地に營業の科目を求めたり外國と爲替の關係を結んだりする必要のあることは考へられない。今回の破綻を機會として、植民地銀行の面目を保たしめるまでに、大改造を施す成算が政府に、なければならない、其れには臺灣銀行の營業範圍を縮小し、銀行券發行業務は日本銀行に、外國爲替業務は横濱正金銀行に讓り、臺灣銀行は臺灣に於ける拓殖金融機關として立つ可く尙ほ此機會に於て、思ひ切つた減資を爲し、不良貸付を銷却す可きである。先年半額減資を敢てした朝鮮銀行の經營が無事に進行しつゝある一方に、四分の一減資に止めた臺灣銀行に經營難を生ずる一事の如き、顧みる可き點であるが、然も前年臺銀に於ける實質的減資を妨害した事情が將來に於ても、矢張り妨害と爲りはしないかどうか。

第四、破綻を暴露した銀行中、如何なるものは之を復活せしめ、如何なるものは之を見殺しにしなければならないか、抑も亦如何なる條件の備はつた場合に、政府は如何なる程度の援助を銀行に與へて、以つて復活の道程に就かしめるか。例へば十五銀行の如きに至つては、之を復活せしめるに就て、背後に政治的勢力の動きつゝあるは、爭ふ可からざる事實であり、現に華族の如き十五銀行に取引關係の多い所から、國體の力を以つて、宮内省に陳情とか、政府に運動とかを試みつゝあるやに聞くが、支拂停止、之に次ぐ破産又は解散に依つて、悲慘なる影響を蒙る者に至つては、一部の華族よりも、十五銀行以外の破綻銀行に預金を有する民衆の間に多々ある。此事實を顧みず、一部少數者の運動請託等に支配されて、政府が獨り十五銀行の復活のみに力を施し、一方に中產以下の階級に屬する民衆を預金者とする二流以下

の銀行の整理を閑却したならば、由々しき社會問題を釀成するの恐れなきを得ない。此點に於て、政府の爲す所が公正を得て、誤まらざるを得るかどうか。破綻銀行を整理するの道は容易ではない、其根本は（一）減資に依つて不良貸付を銷却すること、（二）斯くて生ずる株主の負擔の重きに過ぎる場合には、重役殊に常務を擔當せる重役をして資產を提供せしめること、（三）預金者に對して、預金の引出に關する制限を設け、殊に大金額の預金者に就て、嚴重なる制限を求めること（四）株主に對しては、今後幾年かの間、無配當を忍ばしめることの諸點であつて、是等の工夫に就て、銀行當局者なり、株主なり、又時に預金者なりの誠意が現はれて、整理後の營業開始に必要なる資金の調達を見るを得るのであるが、政府の方針が此所に出でるかどうか。

第五、今回の金融動亂に依つて、我國の新銀行法は未だ其實施されざる內から、不備の點のあることが明瞭と爲つた。即ち普通銀行をして特別當座預金を取扱はしめる場合には、重役の預金に對する責任を無限のものとし、此責任を果す可き重役の資產は特別に官廳に於て保管し、重役の口癖に稱する私財の提供をして有意義のものたらしめ、銀行の一取引先に行ふ貸出の高を制限して、機關銀行たる弊なからしめ、一門一族に屬する人々に依つて、組織される變態的株式會社組織の銀行を排斥するの諸點は銀行法改正の個條として、特に重要なるものであるが、能く銀行業者の意嚮又は仕來りを排して、斯る改正を遂成するを得るかどうか。

整理不徹底の餘弊

論じ來れば今回のパニックに直面して、私が我國金融市場の爲めに將た又我國の金融を支配する人々に就て、考へた所、少なしとしない。今其一端を論述し、他は姑く後日に譲る。要するに昨年下半季に於て餘程順境に移るものと期待された我國の經濟社會は爲替相場の昂進に依つて、貿易の趨勢に不利の事相を來し、更に其後支那の狀勢に依つて、不利の度を強くし、今回の銀行破綻に依つて、益々景氣恢復の勢を挫折するに至らしめた。少なくとも我國の經濟社會は一年以前又は二年以前の狀態に逆轉したのであつて、視るもの、聽くもの、一として吾人に凄慘の感を懷かしめざるなきは、昭和の新政に際して、深く遺憾とする所である。而して事の玆に至つたのは、歐洲戰時の好景氣に臨んで、所謂積極政策の下に、浮華輕佻なる氣風を誘導し、經濟社會の到る所に投機熱を勃興せしめ、大正九年の恐慌後に適當なる整理を施さず、同十二年の震災後に於ても、依然たる彌縫を事とし、今日に於て決裂の已むを得ざることゝ爲つた次第であつて、少なくとも銀行金融の方面に於ける總決算の行はれる時に會したものと云へる。當局者尙ほ此事を認めず、舊態を繰返すに止まつたならば、其弊の大なる、知る可きのみである。

今回のパニックに臨んで、我國の銀行組織若しくは金融機關に於ける缺陷は遺憾なく到る所に暴露されて、殆ど極まる所を知らざるの概きであつた。是等の諸點に就ては、人心の鎭靜した今後に於て、研究し、論議したいと思ふ。今は單に當面の諸問題を批判するに止める。

十年苦の補償法

太田正孝

一

昭和の新政は日に新にせよとの詔は、いみじくも、おそれおほい。——さりながら、あきれはてたる三黨首の會見によつて解散は避けられ、私たちの待つてゐた普選の日は延ばされてしまつた。あまつさへ震災手形問題に、一鈴木商店一臺灣銀行を救ふかのごたごたを見せられた。それでおしまひかと思つてゐるうちに、問題の臺灣銀行は、資金運動の油となつてゐたコール引上げに遇つて、窮地に陷つた。政府は、議會が閉ぢて二旬もたゝないうちに、二億圓補償の緊急勅令を出して、その場を過ごさうとした。しかるに、狹い理屈と感情まで交へた樞密院の彈劾にあつて、もろくも若槻内閣は倒れてしまつた。かうして深甚の考慮は解決されたのである。形ばかりの數に反對第一黨の地位にあつた政友會に、大命降る。世は、憲政の常道であるといふ。その間に、臺灣銀行は店を閉ぢ、十五銀行も休業する。かへりみれば、二月十四日廣部銀行の休業以來、全國のこれにならうもの二十九行におよび、預金總額八億六千餘萬圓と稱せらる。民衆騷ぐ。しづ心とてなし。銀行へ取付くるさまは、あたかも仇討ちに行くとでも申さうか。大銀行すら、その厄に遇ふ。つひに、二十二、二十三の兩日全國の銀行一齊に休業す。金融界未曾有の慘事である。新政府は、高橋翁を迎へ、まづモラトリアムを布く。樞密院は、臨時議會を開くならばといふ口實のもとに、これをみとめる。さうしてゐるうちに、日本銀行の貸出は二十五日には二十一億圓におよび、兌換券の發行は二十六億六千萬圓を數ふ。やがて、世も靜まる。いはゞ颱風一過。——しかし、事業界は假死狀態に陷り、綿業は一割五分の操業短縮をするなど、その影響するところも少なくない。とにもかくにもして第五十三議會は開かれた。國民に冷靜なれと叫んだ政府は、果して良策を得たか。この國家一大事に際して、議會は充分その職を盡したか。

現在の政界と財界との實狀を、腐り果てた根性の因果とみる筆者は、再び新帝の詔を拜して、ひたすら暗涙にむせぶのである。

二

さてもモラトリアムで一息つき、ポンプの用意をしたといふ高橋藏相は、如何なる水をもつてこの非常時に浴びせやうとするか。問題は内地の金融界と臺灣の金融界とに分たれてゐる。前者に對しては、日

本銀行をして今までの擔保品より範圍をひろめて、不動產等にも及ぼし、その限度も高め、かつ國債同樣の一錢七厘の低き利子をもつて銀行に對して非常貸出をなさしめる。そのこれに伴ふ損失に對しては、五億圓を限度として國家に於て補償せしめやうとするのである。その目的とするところは、財界の安定にある。銀行の救濟ではなくて、主として預金者の救濟にあるといふ。後者に對しては、臺灣一般の金融機關をして、その機能を維持せしめ、または海外におけるわが國の信用を維持せしむるため、日本銀行をして、無利子無擔保によつても、二億圓を限度とする强制貸出をなさしめる。かつ、そのこれによつて生ずる損失二億圓を限度として、國家において補償せしめんとするのである。しかも兩者とも貸出期間は一年とし、回收期間は十年をもつてし、損失を決定する基準は大藏大臣が定め、損失額は審査會が決定するといふのである。問題は、いろいろある。——特別融通の利子が低くすぎるから、これを利用して、銀行は預金救濟以外の營業資金に振りむけるやうなことはないか。貸出しも、回收も、その期間が長すぎはしないか。補償額の五億圓は、本年三月末日の預金總額百十四億圓を百億と概算し、その半額五十億を併出すと見て、その損失を一割と見込んだ數であるといふが、あまりに大ざつぱにすぎはしないか。なかには定期預金（六十五億圓）など、期限の到來し、もしくは近く到來すべきものを除外するも、拂出を要せざるもの（東京の協定銀行も、さう申合せてゐる）半額以上を占むるではないか。また從來の引出取付狀況は三割五分を出でないといふではないか。やがて國民の負擔となる立場より、この點は最も嚴正に定むべきものではないか。預金者救濟といふが、もと〱不良なる銀行をえらんだ責もあらうし、これを救はんがために、預金者以外の一般國民にも負擔を命ずることは道理として許すべからざることではないか。ましてや、事實においては銀行そのものを救ふの結果となるではないか。さらに、臺灣の金融界を救ふといふが、その實は、臺灣銀行以外の金融機關はいづれもその子銀行であるか、市街地信用組合の如きものであつて、結局臺灣銀行そのものを救濟するにあるのではないか。——これに對する當局者の答は、內地の預金者を救ふといふのは、預金は資本の源泉であつてそれが事業界に供給されて、經濟界の圓滑なる働きを見ることになるのであるから、預金者を救ふことは、國民全般の負擔においてするも差支ないといふにある。また、缺損の額は、國民に安心せしむるための見出しの額に過ぎなく、大藏省の監督などによつて出來るだけ少くせしむるであらうといふにある。もしそれ、臺灣金融問題にいたつては、ひたすら臺灣統治及び海外信用維持の申譯をもつて應じ、臺灣銀行救濟の言葉にふれやうともしない。

私たちをもつて見れば、法案の形式においても、その內容においても、不滿を感じてゐる。缺點も認めてゐる。とくに臺灣銀行救濟といつては前內閣の方針そのものを踏襲することゝなるから、臺灣金融機關救濟といふ言葉を工夫したのではないかとおもふ。——政略から出てゐる。またこれを攻むる反對黨も、今回の事變の罪を樞密院と政友會との策謀（政權爭奪を眼目とせる）に歸し、臺灣銀行だに救へば、二億圓だけで濟んだものをと誇らうとするのである。——やつぱり政略から出てゐる。一言にしていへば、財界安定の大義のもとに開かれ

た議會において、政權のため政略のため相爭ふの太い暗流のあることを見ぬかねばならぬ。アメリカあたりの論調が、今回の財界恐慌をもつて政治が經濟に浸入したからであるといふ言葉をおもふにつけ、まことににが〳〵しいことであるとおもふ。しかもまた、イギリスの批評家が、過去七年間における整理怠慢のため政治上のスキヤンダルをした結果であるといつた言葉をおもふにつけ、これによつて果して本當に財界の灰汁拔けをすることが出來るであらうかを案ずる。かへすがへすも、政治家根性は、すさまじいではないか。

三

議會はじまつて嘗てない、また今後もあるべきことを望まない此度の議會は、一に財界安定の大旆のもとに開かれた。法案に不備の點があるため、野黨はこれに修正を加へた。そして、現に休業してゐても營業繼續の見込あるものをも救濟することになつた。よつてもつて、十五銀行も近江銀行も救はれるであらうと見られてゐる。さらにその内容の不備を補はんがために、希望條件をつけた。曰く、その運用に當つて補償金額をなるべく縮少せしむること。曰く、日本銀行の貸付利率は國債を擔保とする貸付以上とすること。曰く、信用組合中組合員以外の預金を取扱ふものに對しては、中央金庫をして特別融通の道をひらいてやること。曰く、不動產貸付についてはなるたけ簡易な方法によつて迅速に取扱つてやること。——である。もとより、如何なる法も、その運用のうへに、はじめて活きる。補償法には、特にその點が多い。これらの希望條件も、一に當局者のやりくちと誠意とによつて實現される。日本銀行の特別融通は、日本銀行關條令の例外をなすものとして勅令事項とするよりも、立法事項とすべきものではないか。それは、とにかくとし、私たちは、これらの希望條件の無理からぬことを思ふ。そして、すぎにし日の放漫の罪をつくつた當局者も、——いたづらに杓子定規によつて今回の財界混亂の糸口を開いた日本銀行も、——たゞ一時の利のためにサイフの口をひろげて來た一般銀行も、——十四年以來低利二分で五千萬圓を融通され、震災手形關係によつて二億に近き金をめぐまれんとし、さらに二億を加へられんとする臺灣銀行も、やがて國民の負擔にひゞく補償額を少くせしむるのめどをもつて、十年の日をゆるむことなく嚴肅に進んでもらひたい。いやしくも一般銀行にして營業資金に融通し、臺灣銀行にして整理に利用するごときことあらば、そして、當局者にしていまゝでのやうな怠け切つた監督をしていくならば、國民の恨みは、永く殘るであらう。

それにしても、七億にのぼる將來の負擔問題に對して、當局者が財源もしくは財政計畫を示さないのは、私たちの最も殘念におもふところである。それを責むることの薄き議會にも、おどろく。——かうなつては、このさきかゝる巨額の負擔を國民におよぼすことを念中において、これからの財政策をたてゝもらはねばならぬ。それだけの財源を、つねに用意してかゝつてもらひたい。言葉をかへていへば、とかく私たちの心配になる積極政策を用ひたがる政友會內閣が、この案を認むることによつて、積極策を用ふるの餘地のすこぶるせばめられたことを觀念してもらひたい。さもなくて、七億の補償は十年先きのことで

あるとして、黨利に都合のよい新規事業の計畫でも試みるにおいては、とんでもないこととなる。とくに、府縣會選擧をひかへ、普選を前にして、舊式の政略によつて選擧民を釣るの轍はづみに出づるではないかとおもふがゆゑに、あらかじめこれを注意するのである。この意味において、補償法は、現內閣が積極政策を遠慮する保障とすべきである。

私たちは、この非常財政案を議する議會について、いろ／＼學ばせられたことがある。——政變をキツカケとして、大命の降るべきことを期待した政友本黨と、通常議會以來のゆきがかりをもつてゐた憲政會とは、議會を前にして形ばかりで何等の新味のない新黨をつくることに夢中になつてゐた。政友會もその切りくづしにのみ心をくばつてゐた。ともに／＼地盤關係を主として、見にくき爭をしてゐた。さらに、田中首相は新に內閣を組織しながら、何等の施政方針を示さなかつた。大命を拜するにあたつて、財界安定と外交問題とに就ての優諚を賜つたといひながら、たゞみづからの政黨に吹聽するにとゞまり、何等國民にその方針を示さうとしない。たまたま質問にあへば、農村振興とは肥料の分配であるといふ。對支外交は、列國協調の先にいで、たゞ自衞上積極の主張をもつてゐるに過ぎないといふ。さきの日の積極方針も忘れてゐる。おそらく、案もないのであらう。これをしも首相みづから口にする立憲的行動といひ得るや。

さらに、下院における審議中において、私たちの氣に食はぬ點が、も一つある。反對黨は、若槻內閣が銀行の內情をさらけ出さなかつたことの正しさを誇り、政府當局も、さきの日の攻擊を默してゐることである。——ちがふ。私たちは金融界が微妙の信用の糸によつて動くことは、萬々承知してゐる。しかし、國民全體に巨額の負擔を負はしめる問題について、當局者のみを信用して、數字的根據をみとむることなくして、承認することの無理をおもふ。前當局者の緊急策はよろしかつたにしても、その內容を示さなかつたがゆゑに、私たちは、攻め立てたのである。しかもまた、いまの當局者が、銀行中どれだけの不良のものがあり、どのくらゐの貸出を要し、かるがゆゑに、どのくらゐの缺損となるかを示さないのは、不親切であるとおもふ。もとより、具體的の銀行名まで知らうとするのではない。——立憲的行動とは、公明を本位としたものでなければならぬ。それを口にする政治家も、意氣地なくも局に當つてこれを行はざるを見て——私たちは、やつぱり一日も早く普選の日の來るのを待つことにするよりほかない。

あゝ、國民に十年苦を殘せる補償法よ。私たちは舊式政治が經濟に喰ひ込んだ惡るい遺產として、けふの日を呪はないでおけようか。

——昭和二年五月九日稿——

國家資本主義的トラストへの過程

猪俣津南雄

一

樞密院の「クーデーター」、「憲政」內閣の倒壞、軍主的田中內閣の成立、日本最大の商業資本家鈴木の沒落、「華族」銀行、植民地銀行を筆頭とする大小三十有餘銀行の總起的破產、實力日銀を凌ぐと誇稱する巨大銀行をさへ取付けた全日本的な銀行パニック、二日間に發行された十億の紙幣、——かやうにして今ま、我國の資本主義の、運命的な、金融資本主義への旅の首途は、花々しくも祝福されてゐる。

金融資本主義は、資本家的獨占の資本主義であり、帝國主義の資本主義であり、反動の資本主義であり、最後的なる資本主義である。今ま我國において、如何にその資本主義が「獨占の段階」にまで進出し、支配的な金融資本の成立を見つゝあるか、またかゝる經濟的基礎の變化が如何に極東日本の、、、、、、、せしめつゝあるかは、私が、本誌本號の別稿「資本主義日本の帝國主義」において、究明し、論定した所である。突如として吾々の視野を襲へるかの如き此の未曾有の金融恐慌も、實はかやうな、本質的基底的な變化そのものの、現象的表層的な一表現に過ぎない。しかしながらそれは、僅かに、最も集中的な表現であり、最も尖銳な表現である。かゝるものとしてのそれは、疑ひもなく、全事態の本質の多くを、吾々に語る。凡そ社會組織の根抵を暴露せしむるほどの事件の突發ありし際の常として、組織の現狀維持によつてのみ存續し得る階級は、事態の本質に眼を覆ひ又た覆はしめんとする意識的無意識的努力の下に、ありとあらゆる辨解的、慰撫的、欺瞞的な觀念、示唆、言說、情報を、大量的に生產し、傳播し、喧傳する。が、現狀維持によりて一物も得ず、、、、、、、、、、、、、、、、、、何物をも失はざるが故に唯一の眞に進步的なる階級たり得るところの無產階級は、まさに其のことの故に賦與さるる獨自の洞察をもつて、一切の歪曲を斥け、いま發展しつゝある事物をば其の如實の姿において把握し得るのであり、また把握しなければならない。

二

金融資本は、生產及び資本の集積における發展が、獨占を可能ならしめるほどの段階に到達することを前提として成立する。だから、金融資本の「生活原理」は、國內及び國外に於ける獨占的地位の爭奪である。それは、資本家的競爭の一發展形態であり、從つて「自由競爭」

の止揚である。自由競爭は、生産及び資本の集積がまだ獨占を可能ならしめるほどに發展しない段階においての、産業資本の「生活原理」である。自由競爭の武器は、安い價格であり、優良な技術であつた。しかるに、金融資本の「獨占競爭」の武器は、老大なる資金力（貨幣態資本）であり、全産業における戰略的地位（重工業）の占領である。

戰后の九年恐慌が、安田銀行のコール引上げに端を發したことは周知の事實である。今次の金融恐慌における同一の役割は、、、銀行によつて演ぜられた。金融資本は、その獨自の武器の切れ味を見せた。如何なる目的の爲めに彼等はそれを使用したのであるか？ 獨占的地位の爭奪の爲に。

安田の支配下にある貨幣態資本は、戰時の好景氣時代を通じて、漸々と産業の領野に侵入して産業資本と融合したとはいへ、重工業の諸部門はそれまでに既に三井、三菱、住友その他の領有する所となつてゐた。安田の進出すべき分野として殘されたものは、新興重工業の電力があるに過ぎない。新しき金融資本主義時代の爭覇者としては、安田はまだ余りに多く銀行資本家である。だが、それ故に又た彼れの戰略は、先づ銀行資本としての最優位を獲得することに、當面の重點を置かねばならぬ。九年のエピソードを始め、彼れの合同政策の辛辣さや、預金協定の破却やは、頻りに財界風聞子を聳目せしめた。此の資本は同時に今また急速に電力事業を襲ひつゝある。

石炭、製鐵造船等における三井、三菱の獨占的地位は、自余の私的資本に對して決定的である。が、それだけにまた、此の最大の金融資本の對立、暗闘は、眼ざましい。「金持喧嘩せず」は、「滅多に」と形容句づけてこそ眞理らしい響きもする。此の兩雄が、先づ決定的な衝突を見せるか、また、それに先立つて、資本家的聯盟の盟主として現はれるかは、專ら思辨的な興味に屬する。が、可能性は遙に多く後者にある。鐵鋼の獲得その他における對外關係上、協同動作を有利とするに加へて、國家資本と軍事關係とがそれを要求して止まない。（例へば鐵道や八幡を想へ）。重工業における最大の諸資本と政府及び國家資本とを聯結し包括する一大トラストは、國家資本主義的トラストの一方の礎石として欠くべからざるものである。かゝるトラストの形成過程の進行につれ、獨占的地位の爭奪戰は、次第に海外に移される。移すことが出來、移されねばならない。が、如何なる條件をもつて、かゝるトラストに割込むか、——それが、いま、金融資本にとつての最大關心である トラスト内の第一人者たり得る自己を築くこと、——そこにいま、各金融資本當面の鬪爭目的はあらねばならぬ。

三

重工業トラストと並んで、國家資本主義的トラスト形成の爲めの先要條件たるものは、特殊の役割を有する銀行シンジケートである。それは全金融市場を支配し、此の支配を通じて全産業を統制する爲めの機關としての、五箇乃至六個の最大銀行シンジケートでなければならない。大戰以來最も顯著なる一傾向とされるところの、我國の銀行業における長期貸出の增大と資金の固定化なるものは、本質的には、銀行資本の變質——金融資本化——を意味し、此の變質は、謂はゆる「金融制度の根本的改革」を必要とする程度にまで進んだ。そして、當の「改

革命がまた、今言ふ銀行シンジケートの成立を前提とし、これが指導の下においてのみ可能である。各金融資本の立場は、此の問題において、も、前の場合と變らない。至要爭點は、か丶る獨占的結合において、各自は、如何にして、如何なる優越的地位を占むべきか、の一點に歸着する。

金融資本は、一樣に、「整理の徹底」を强調し來たつた。それが、新時代を代表する聲であるが故に「財界の輿論」ともなつた。整理とは、さし當り、過剩資本の强行的處分と、産業、商業、及び金融業における劣弱企業の併合とを意味し、從つて生ずる資本の集積及び集中に爭其の目標は存したが、整理の過程は必然的にまた二樣の對立を含む鬪の過程でなければならなかつた。―― 金融資本と自余の資本との對立、並びに金融資本家相互の對立。

獨占的地位の爭奪を指導原理とする此の鬪爭は、自由競爭時代に見ることの出來ぬ辛辣さと、陰險さとその結果の破局的なることとによつて特徴づけられる。それは、政權の爭奪をも含むところの、陰謀と陽謀との過程であり、、、、、、、、買收、賄賂の有らゆる典型を展示する。今次の政變と金融恐慌とは、すくなくも一面において、か丶る過程の一突起であり、一爆發である。

吾々の闘はるところは、か丶る過程の平面描寫ではなく、今ま吾々の視野に投ぜられたる其の最集中的な、最尖銳な表現を通して洞見し得るところの、全組織の本質である。何を、吾々は見るか？

四

一般的、社會的に、先づ、、、、、、、、を見る。ブルショア政府が、言葉の哲學的意味における政府でないことを、今次の大混亂にあつての如く、自らの行動によつて不可爭的に立證したことが曾つてあらうか。ブルショア政府は、、、、を意味する資本家的對立抗爭を緩和し得たか？ 少くとも緩和し得たか？ 絕對に否な！ 却つて自らを對立抗爭の道具たらしめた。か丶る道具としてのみ機能した。

ブルシジョアジーは、信用制度に生産の統制を托さうとする。だが、ブルジョア的信用制度は、、、、、、を基礎としてのみ成立し、成立することが出來る。そして、まさにそのことの故に、該制度が、今まで與へられんとする職能に堪え得ざることを、今次の混亂における如く、自らの行動によつて、不可爭的に立證したことが曾つてあらうか？

信用の全體系を破壞に導いたものは、該制度の擔へ手その者ではなかつたか？ 全日本の銀行總罷業の決行によつて全組織の運行を杜絕せしめた所のその命令は、そもそも何人によつて發せられたか？ 此の命令の署名人こそは、實に、「台銀のコール引上げ」の、、、あり、、、、、、、、、、、、、、はなかつたか？ 彼は、日本最大の金融資本を代表した。

「預金者」なるものは、ブルジョア的信用制度の下に如何なる保證を與へられてゐるか？ 政府は、預金者を「救濟」すると揚言した。だが、如何なる手續きによつて？ 政府は、資本家的對立抗爭の道具として、先づ預金者をして其の預金を喪失せしめ、救濟の對象をつくり出した。預金者は、七億圓の何十分の一かを得、失へるもの丶何十分の一かを取戾す。そして殘る六億何千万圓かによつて、パニックの主

諜者等（コール放出者等）が救濟される。此の救濟の全費用は、預金者を含む民衆が負擔する。——何が「救濟」されるのであるか。

一部において早くも唱へられんとする「信用の國營」は、かゝる手續きを、民衆にはかることなく、從つてヨリ「圓滑に」遂行せしめ得るであらう。そして、同樣の効果は、國家資本主義的トラストの體系を創造することによつて、ヨリ徹底的に擧げられるのである。それは、資本家的支配の最高形態であり、金融資本主義の精髓である。國家資本主義的トラストへの過程の進行と共に、獨占的地位の爭奪の戰野は、ますく\國際的である。その國際的對立抗爭の必然の尖銳化の歸結として不可避的に生ずる、、、、が、從つて生ずる、、、、が、果して如何なる社會的意義を有すべきかは、今にして既にわが無產階級の明視する所である。

現社會一切の基底に、「資本」がある。搾取關係がある。（一九二七・五・五）

唯物史觀經濟史出立點の再吟味(其二)

＝『古代共產制度』に關する若干の考證と祖述＝

福田德三

(六)

さて吟味に取かゝる。

私は、前段(前號七五頁)に於て云つた。『ソコデ、暫らく、クノーの非難を避けて、マルク共產制度に出立點を置くと、彼れが斷言したマルクスとエンゲルス(即ち改說前の)とに就て、吟味するのが、此小論文に於ける、私の仕事で、あらねばならぬ』と。

エンゲルスに就ては、其改說前に關しては、此く單純化することに、何の疑點を殘す餘地はない。併し乍ら、マルクスに就ては、──而して彼と全然同說を執つて居たとする限りに於いては、無論エンゲルスに就ても、──クノーの斷定を受入れる前に、若干吟味を經なければならぬことがある。

其れは、外の事でもない。所謂『唯物史觀公式』なるものゝ中に於ける、經濟的社會構成の諸々の進歩的階段に關する一條である。マルクスは『吾々は、極めて大づかみに、亞細亞的の、古代的の、封建的の及び近代ブルヂオア的の生產方法を以て、經濟的社會構成の進歩的

階段と爲すことが出來る』(前號六一頁)と云つて居る。此は一八五九年刊の『經濟學批評』序言中の一句であるが、今茲に、必ず此句と比較對照せられねばならぬ一句が、更らに右に先つ十年前の一八四九年『新ライン新聞』にマルクスが寄せた論文『賃銀勞働と資本』中に見出される。即ちカウツキー編纂の其眞本版(伯林フォアヴェルッ社印行一九二一年刊に據る)の第二十五頁にある左の一句此れである。

『かくて、諸個人が其中に於て生產する所の社會的諸關係、(即ち削除)社會的生產諸關係は、物質的生產手段の、(即ち、削除)生產諸力の、變動及び發展と共に、變化する。(此等の)生產諸關係は其の總和に於て、社會的諸關係(又は)社會と名づけられる所のものを構成する。其社會とは、一定の、歷史的の發展階段に於ける一の社會を、(即ち)固有的、差別的性質を有する社會である。古代の(ギリシヤ、ローマの)社會、封建の社會、ブルヂオア的社會は、生產諸關係の斯樣な總和であつて、その各々が同時に、人類の歷史に於ける、一の特定の發展階段を表示してゐるのである。』(河上博士譯『賃銀勞働と資本』一九二一年弘文堂刊、五七・五八頁に據る。圈點を附した部分は、私が試みに改めて見たもの。)

右の兩句は、殆んど同じ樣な趣意を述べたものであるが、私が、今問題とする點に就ては、稍ゝ重要な相違あることとは、讀者は直ちに氣付かれたであらう。即ち一八五九年の句には、經濟的社會構成の進步的諸階段は、(一)亞細亞的、(二)古代的、(三)封建的、(四)近代ブルヂオア的の四となされて居る。(前號六二頁に五とあるは誤植、此事後に云ふ我妻氏より教示あり。)然るに、其十年前の一八四九年の右文に於ては、(一)古代、(二)封建、(三)ブルヂオアの三つのみしか擧げてないのである。ソコデ、當然の順序として、マルクスが、茲に、亞細亞的生產方法と名くるものが、當面の問題となる。

マルクスは、右『賃銀勞働と資本』に後るゝこと四年、『經濟學批評』に先つ六年なる一八五三年(六月十日起稿同月二十五日揭載)に『紐育トリビユーン紙』に、『印度に於ける英吉利の支配』(15)と題する一文を寄せた。私は、此號をモスクヴアのマルクス・エンゲルス研究所で一瞥したことがある。(同所主任ツオーベル氏は、右紙を私に示しつゝ戲言して曰く、我研究所は、マルクス・エンゲルス文獻の蒐集については、歐羅巴中には、競爭者を見出さないが、今數日後るれば、獨り日本は、實に恐る可き競爭者である。此新聞の大揃も、日本人によつて買去らるゝ所であつたのを、リアサノフ氏が百方盡力して、非常の高價を拂つて買取つたものである。日本のマルクス硏究の熱心は、實に畏るべきものであると。)幸にも、此文は、リアサノフ氏によつて『マルクス主義の旗の下』誌に、同氏の解說を添へて、他の數文と共に飜譯して揭げてあるから、誰人も就て、一讀することを得る。(同誌第一年度三七〇頁以下『カール・マルクスの支那、印度論』(15))リアサノフ氏は、其解說中に、マルクスの此文を注意して讀むときは、彼が一八五〇年代に於いて、即ちサー、ヘンリー、メーン(一八六一年『古代法』刊行)及其門弟等の諸著作の顯はるより久しい以前に於いて、彼が其の『經濟學批評』中の一脚註中に於いて明言したことを、既に已に確信して居たことを知り得るのであると云つて居る。其の脚註とは、右書前揭版第九頁にある次のものを指して云ふのである。(譯文

は、宮川氏のものは少し不十分と思ふから、試みに拙譯して置いた。）

『原始發生的共有制てふ形態は、スラヴ民族特有であり、又は全然ロシア的形態であると思ふのは、最近時に於いて普及して居る一の笑ふ可き偏見である。此形態は、我々が、ローマ人、ゲルマン人、ケルト人に就いて、共存在を立證し得るものである。加之、此形態に就いては、――タトへ、部分的には、遺跡としてゞはあるが――多様多趣な見本を有する一の全き模範圖が、今日猶ほ、インド人に就て存在して居るのである。亞細亞的の、殊にインド的の共有諸形態を、より綿密に研究すれば、原始發生的共有制の様よな諸形態から、此制の解消の（又は、解消過程中に顯はれる）様よな諸形態が生じ來るものなることが、明かとなるであらう。即ち、例へば、ローマ及ゲルマンの私有財產制の種々異なつた固有典型は、（實に、）インドの共有制の種々異つた諸形態から派出するものなることを知り得るが如きこれである。』（宮川氏前掲譯本一五、一六頁參照。同氏が『如何にして、種々なる形式の自生的共產制が崩解して、種々なる社會形態を採るに至るかを知ることが出來る』と譯出された部分は、原文の意味とは合つて居ないようである。原始發生的共有制の様々な諸形態から、此制が其の解消に當つて採る様々な形態が生じ來る云々の意味でなければならない。此點一應宮川氏の再考をこひたいと思ふ。）

リアサノフ氏が、右『經濟學批評』の脚註の趣意が、マルクスによつて一八五三年に於いて、既に已に道破されて居ると云ふ、マルクス共文の個所とは、恐らく『マルクス主義の旗の下』三八八頁中段以下の、インド村落制に關する部分であらう。然し其處にも、又た右文中何れの場所にも、共有制に就いては、マルクスは明かには、一言も言つて居ない。唯だ彼の意を忖度して考へて見れば、共有村落制のことを眼中に置いて居ただらうとは云ひ得る。然し其れには、多少の附加的解釋を要する。ソコデ、――でであらう――リアサノフ氏は其部分に脚註して、『資本論』第一卷（ハムブルク一九一四年）の第三二二及三二三頁を參照せよとしてある。『資本論』の其部分には、成程明瞭に jene uraltertümlichen kleinen indischen Gemeinwesen（彼の原始古代的なる、小さき、インドの共產體）云々と言つてある。而して其記述の內容は、右『紐育トリビユーン紙』上の印度論と符節を合はすが如きものである。（高畠氏譯本四五六頁を見よ。高畠氏の譯は『インドに於ける、かの矮小な太古的の共同體』となつて居る。）

一八六七年刊の『資本論』第一卷に、マルクスがインドの共有制に就いて云つたことは、既に一八五三年に於いて、判然と彼の看究めて居たところであること、リアサノフ氏の主張する如くであるならば、私は、私の當面の吟味について、力強い支持を授けられたことになるを喜ばざるを得ないのである。而して、『資本論』第一卷中に於いて、マルクスが、共有制について記したところのものが、何れも、由來久しいものたることが確められるのである。（カウツキー編の『資本論』第一卷民衆版に所載した件名索引によると、共有制に關する記述は、四一、一八六―七、二八二、三〇四―五、六五五―六六四頁　何れも

民衆版にて）の數ヶ所にある。其れについては、後に論及する。）

然しリアサノフ氏は、一九一四年版を引かれたのであるから、果して一八六七年刊の初版に其部分が載つて居るか否かを確めようと思つて、私は其の初版を繙いて見て大に安心した。即ち同版三四一頁の中段以下に、正さに其通り一字一句の差なく載つて居る。而して更らに一八七二年の第二版では、三六九頁の第三段目以下に、又全く同じ文章が見出される。

少し煩雜になつたようだから、此問題關係文獻を一目の下に置く可く左に要目を作つて置く。（猶本文末尾の文獻年次表參照。）

（一）一八四九年　賃銀勞働と資本——『古代的』『封建的』『ブルヂオア的』

（二）一八五三年　紐育トリビューン新聞掲載の『印度論』『インドの村落制度』云々

（三）一八五七年　『經濟學批評』緒論

（四）一八五七年　『經濟學批評』第九頁の脚注

（五）一八六七年　『資本論』第一卷第一版三四一頁以下

（六）一八六八年　エンゲルス宛書翰

玆に必ず言つて置かねばならぬことは、今私の前に横る問題については、一八六七年の『資本論』第一卷にまで降り來ることは、殆んど必要のないことであると云ふこと是れである。何故となれば、右表に云ふ如く、カウツキーが一八五七年八月廿三日にマルクスが下稿したと云ふ『經濟學批評』緒論中、共有制に觸れた發言が若干見出されるから。即ち、同書前掲版に就て、其個所をあげて見れば、一八—九、三七—八、四二—三頁等がそれである。これが、右の要目の（三）に當るものである。

（七）

ところが、玆に、右の要目（六）に當る文獻が未だ一つある。其れは、クノーの前掲書第二卷九三頁にも引いてある一八六八年三月十四日付で、マルクスがエンゲルスに送つた書簡これである。私は、玆に其書簡を引くつもりであつたから、前號七三頁の其個所に於ては、態と（書簡略）として置いた。今其文を烏海篤助君の前掲譯本『婚姻及び家族の發展過程』二二頁以下から、左に引用して見る。

——序に云ふ、前號拙文七三頁の追記に於て私は、甚だ誤つたことを記した。即ち私は「私が玆に引く部分は譯出以外の部に屬する」と記して置いたが、其れは、私が烏海氏の譯本を前以て執筆中購ひ求めはしたけれども、目次丈けを一寸見た丈けで一讀したのでなかつた爲めの妄言であつて、此部分こそ實は、烏海氏の篤實な筆によつて譯出せられたものに係るのであつた。私の怠慢の爲めに、私は、聽々

自譯を試むると云ふ無駄なことをしたのは、笑止なことであつた。然し鳥海氏の譯本には一二、如何と思はれる處があるようだ。例へば、エンゲルスは「幾らか冷靜な言を用ゐた」とクノーが言つたのを、同氏は、「いくらか冷笑的に」として居られる。又た ad vocem Maurer を「マウレルの言葉によれば」としてあつてマウラーの言葉によれば、かれの著書は非常に重要であると、マルクスが言つたことになつて居る。コレは、可笑しい。マウラーの著書を重要なりと云つたのは、マウラー自身でなく、マルクスであたが」と云ふ意味である。猶ほ、クノーの此書第二卷の各章が、其々分册として、續々として邦譯されて居ることを知つたのは、私に取つて甚だ會心のことである。其書名は次の如し。(一)マルクスの氏族、社會並に國家觀　(二)同階級鬪爭理論、附錄「階級とは何か」(三)前掲　(四)同經濟概念　(五)?　(六)マルクス主義と倫理、何れも東京同人社の刊行にかゝる。——

前略『ドイツにも、所々に第十八世紀までいな第十九世紀にさへも殘つてゐたところの、土地を一定の期間毎（ドイツでは年々であつた）に再分配するロシアの習慣か、今や實に興味あるものとなつた。一般に、アジア的な殊にインド的な諸所有形態は、ヨーロッパにその端を發したのだといふ、私が提出した見解は、ここに一の證明（マウレルはこれについて何も知らなかつたのだが）を得たわけだ』（下略）　右譯本二二頁

此書簡は一九二一年ストットガート出版『一八四四年至一八八三年エンゲルス、マルクス往復書簡集』(16) 第四卷二三頁以下に其全文が載せてあるものである。

鳥海氏の譯本は、全體を通じて、甚だ綿密、忠實なものであるが、此一節は、マルクス及エンゲルス常套の語を以つて云へば、『逆立ち』auf dem Kopf stehen 的の讀み違ひをされたものではあるまいかと思ふ。念の爲め、原文を先づ引き、次に私の拙い譯文を添へて見る。

Interessant gerade jetzt, dass die russische Manier der Wiederverteilung in bestimmten Terminen (in Deutschland erst jaehrlich) des Bodens sich in Deutschland stellenweise bis ins achtzehnte und selbst neunzehnte Jahrhundert erhielt. *Die von mir aufgestellte* **Ansicht**, *dass die asiatischen, resp. indischen Eigentumsformen in Europa den Anfang bilden, erhält hier* (obgleich Maurer nichts davon weiss) *einen Beweis*. S. 21.

右私譯

『丁度今興味ある事は、一定の期間を置いて、土地の再割替をするロシア的やり方は、ドイツに於いても、處々に於いて、第十八世紀、否第十九世紀までさへも存續したと云ふこと是れである。私が嘗つて主張した見解、即ち、ヨーロッパに於いても、到る處に於いて、アジア的、乃至はインド的所有諸形態が（土地所有形態の）出立點（又は端緒）を形づくると云ふことは、これによつて（マウラーは、其れについて、何事も知らなかつたけれども）一の證據を與へられるのである。』

鳥海氏の譯文によると、『アジア的な殊にインド的な諸所有形態は、ヨーロッパにその端を發した』と、マルクスは言つたことになる。其れは、全然あり得ないことであるは、言ふまでもない。マルクスの所謂『アジア的乃至はインド的』「殊に」は讀違ひである。respektiv は beziehungs weise と云ふドイツ語の拉丁形であつて、『乃至は』とか『或は』とか『又は』とか譯出されねばならぬ。と云ふのは、ヨーロッパ的よりは、ズット昔しのことを云ふものなるは、疑を容れない。然るに其れが、端をヨーロッパに發したと云ふのは、恰かも、君主政體は、日本に端を發したと云ふが如き、轉倒である。マルクスの意は、アジア的乃至はインド的所有諸形態――共有制――は、ヨーロッパに於いても、亦た、所有諸形態の出立點であり、端緒であつたと云ふに外ならないのである。（前段引く所『經濟學批評』中の一句『ローマ及ゲルマンの私有財産制の種々異なつた固有典型は、インドの共有制の種々異なつた諸形態から派出するものなること』云々を參照。）これは、單なる字義の問題でなく、歷史的事實の前後に關する重要なる順序の『逆立ち』であつて、マルクスは、其樣な間違をしたものでは、決してない。此點は、彼の爲めに、是非訂正を願はねばならぬ。

――附記。未見の學友我妻東策氏は、前號の拙文を一讀されて、早速長文を私に與へられた。氏は云ふ『貴稿中共產宣言の一句「亞細亞的」が引用されて居りますが、亞細亞的が何を意味するかは、先生の該論文に於て重要な意義をもつものと存じます。（中略）ところが、マルクスのエンゲルス宛一八六八年三月十四日付の手紙中に左の一節のあることをクノーは示してゐます（茲に前掲鳥海氏譯文と同じ文句を引く）この文章は、廿年前年に「共產宣言に書かれたところの「亞細亞的」が何を意味するかの考證に意義を持たぬでせうか。」（下略）と。私は我妻君の親切と篤實とに對して、甚大な感謝の意を表明せずして已む能はざるものである。ソコデ、私は、直ちに同君に禮狀を差出して、此一節は、拙文の續稿に於いて、當然問題としてあるところであることを御答して置いた。但し同君が『共產宣言』と云はれるのは『唯物史觀公式』のことであり、又同君の擧げられたマルクスの言も、鳥海氏同樣「逆立ち」になつて居ることを、茲に申上げて置き度い。其他は、以下述ぶる所によつて御覧を乞ふことにする。――

（八）

ソコデ、此の點についての私の吟味は、二つのことに涉ることとならねばならぬ。

第一、一八四九年のマルクスに、『アジア的』が見出されずして、一八五九年刊の所謂『唯物史觀公式』に、其れが見出されると云ふことは、單なる偶然の出來事であらうか、其れとも、意味のあることであらうか、否か。

第二、マルクスの『アジア的』(乃至はインド的)とは如何なることを意味するのであらうか。

是れである。

一八四九年のマルクスの『賃銀勞働と資本』は、エンゲルスの言によれば、一八四九年四月四日以降『新ライン新聞』に初めて載せたもので、其底本は一八四七年に、マルクスが、ブルユクセルのドイツ勞働者協會に於いて、爲した諸講演であると云ふことである。(河上博士前掲譯書二三頁參照。) 私は不幸にして、右の『新ライン新聞』を見ることが出來ない。又た、河上博士が、其譯底本とせられた一八九一年伯林發行のエンゲルス修正版も今以つて之れを見ることが出來ないのである。ソコデ、河上博士の舊譯を『社會問題研究』第四號を引出して見たが、(同號二一・二頁) 其れにも、『古代の社會、封建の社會、素封の社會は、斯かる生産關係の總和にして、其各々が、人類の歷史に於ける發達の特定の發展階段を劃する次第である』としてある。從つて、エンゲルスの修正本にも『アジア的』の存せざることを確め得たのである。『新ライン新聞』掲載の文については、何事をも知ることが出來ないが、恐らく其れにも『アジア的』は、載せてないものではないかと想像する。少くとも、重刷編輯者カウツキーに信賴すれば。

私の此問題に關する吟味には、直接の資料となる可きものが、私として寓目し得た限りに於いては、全く缺けて居る。此事に就ても、私はモスクヴアに於いて、一二の先覺學者に教を乞ふて見たが、何等得る所はなかつた。マルクス、エンゲルス、研究所に於いて『資本論』の露譯の譯者たる當時、六十五歳の某老女史が、孜々として勉強して居られるに紹介せられたときも、此事を一寸問うて見たが、同じく教を得られなかつた。後に某氏は私に言つて呉れるよう、其れには直接の材料はありそうにも思はぬが、マルクス修學の順序からでも考證して見ては如何だらうかと。私は、其言に示唆を得て、其後少し渉獵して見た。其結果は、殆んど何物もないが、後の研究者の參考にまで、左に少し申述べて置かう。

マルクスの經濟學、經濟史研究の過程に就ては、河上博士の『賃勞働と資本』の飜譯序言中に、左の一節がある。

『エンゲルスは、一八四五年の春、ブルユッセルに於てマルクスに面會したのである。然るに彼は其後間もなく英國に向けて出發した。之れは英國に商用があつたのと、今一には英國に置いてある藏書を纏めてブルユッセルに引越して來る爲であつた、さうして此旅行には、マルクスも一緒に隨いて往つたのであるが、此事は、マルクスの思想の發展の上に大に記憶すべき事であつた。そは彼が英國の資本主義經濟學に接觸するに至りしは、正に此時より始まるが爲である。彼は英國到着後暫くの間は、兼ねてエンゲルスの蒐集し置きし諸種の經濟書及び其拔萃、並びにマンチエスタア其他の圖書館に藏せる經濟書をば、盛に耽讀したのであつて、現にエンゲルスも『彼は飽く事を知らずに貪り食つた』と言つて居る。其は一八四五年の夏の事で、恰も、其時に、マルクス特有の經濟論の種子が始めて蒔かれたのである。既に彼特有の唯物史觀を抱き居りし彼は、其獨特の眼を以て、英國正統學派の經濟論を調破し、玆に一流の價値論の第一の礎石を置いたのである。かくて、彼は同年の秋、エンゲルスと相携へてブルユッセルに歸り、之より主として經濟學の研究に力を注ぎ、傍ら當時ブルユッセルに組織されたる獨逸人勞働者協會と連絡を保ち、勞働者階級に向ひ經濟學の初歩を敎へなどして居たのであつて、玆に譯出する所のものは（『賃勞働と資本』を指す）即ち其間に之が腹案を得たるものである。』　前揭同博士譯書 二七・二八頁

一八四五年の夏から秋の間、而もマルクス自ら云つて居る樣に、マンチエスターに於いて得られる丈けの諸書に就て研究したのであるから、一八四九年の『賃銀勞働と資本』とに、『アジア的』が出て來なかつたことは、別に怪むに足りないとも云ひ得るだらう。彼は、正統學派の經濟書に心を潛めて居たから、他の雜書類にまで亘る餘暇を有せなかつただらうとも想像し得る。此想像は、マルクス自らの左の言によつて、多少根據を與へられるものと考へても差支ない樣である。

『一八四八年及び一八四九年の『新ライン新聞』の發行、及びその後に起りし出來事のために、私は經濟學の研究を中斷しなければならなかつたが、一八五〇年ロンドンに於て漸やく之れを再び始める事が出來た。大英博物館には經濟學史に關する莫大なる材料か累積されてあるし、……(中略) 此等の事情は、私をして、全く始めから研究をやり直し、この新らしき材料に依つて、徹底的に批判的研究をしようと決心せしめた。この研究は或部分に於いては、自づから一見全く關係のないやうな諸學科の研究に私を導き、私は之の爲めに或は長き、或は短き期間道草を食はねばならなかつた。(中略) そ

れから（略）第一流の英米新聞ニューヨーク、トリビユンへの今に至る八年間の同勞は、私に於てはたゞ例外的に適當の意味での新聞通信其ものに從事したにすぎないから、其のために（略）私の研究は甚だしく攪亂せられた。』 宮川氏譯『經濟學批判』序言・八七頁　圏點の部分は、私の改めて見たもの。

リアサノフ氏が、『經濟學批評』第九頁の言明を、マルクスが其以前に言表はして居たと云ふ一八五三年の紐育トリビユーン紙上の『印度論』は、此期間の產物であるのである。

ソコデ、私は、次ぎの如く想像するも大過ない樣に思ふ。一八四五年の渡英期に於いては、マルクスは、アジア就中インドの共有制に關する既存の書物類には、目を通す暇がなかつた。之れに反し、其次の一八五〇年の渡英期に於いては、彼は廣汎に『一見全く關係のないやうな諸學科の研究に導かれ』其間にインド並に支那等に就て、稍ゝ立入つて研究したものであつて、其結果が一八五三年の『印度論』、更らに進んでは、一八五七年の『緒論』中の若干の引照となつて顯はれ、玆に『アジア的』が、彼の進歩的諸階段の中に組み入れられるようになつたのではあるまいかと。

私は、私の此想像は、エンゲルスの『共產宣言』への脚註中『一八四七年には、社會の前史、總ての記錄せられた歷史に先つ社會的組織のことは、未だ殆んど知られて居なかつたと言つてもいゝ位であつた』前掲拙文六〇頁 と云ふ一句によつて、多少蓋然性を附加せられるように思ふ。殊に、右の『未だ』の前か後かへ『少くとも我々兩人に取つては』と云ふ句を入れて置いて吳れたなら、其蓋然性は更らにより大なるものであつたらうとも考へて見た。私が斯く云ふは、リアサノフ氏の前掲の言中『マルクスは既に一八五〇年代の中葉に於いて』云々と言ひ、而して『經濟學批評』第九頁の脚註を引いた上に、『マルクスは、ミルやウヰルクスやラツフルスやキヤンプル等の著作は善く知つて居た、又たインドに關する議會の諸演説及諸報告も』と云ひ、而して其等は『資本論』の草案を起稿するに方りマルクスによつて、理論的に利用し盡された『マルクス主義の旗の下』三七六・三七七頁 と斷言するに、勵まされてである。

右リアサノフ氏の擧げた諸書とは、左の如きもので、何れも、『資本論』第一卷に引用してあるものである。何れも、メーンの諸書以前のものである。

(一)キヤンプル著『近代の印度』(17) 一八五二年刊。『資本論』第一卷民衆版三〇五頁參照

(二)ラツフルス著『ジアヴア史』(18) 一八一七年刊。同書三〇五、六八〇頁參照。

(三)ウヰルクス著 印度南部の歷史的諸篇(19) 一八一〇—一七年刊 同書三〇五頁參照。

右の中、今玆に問題とする點に就て、マルクスが、最も多く學んだのは、キャンブルの書であるらしく、思はれる。滅多に他を賞めない彼も、特に此書について丈けは『インドの共同體の種々異つた諸形態の善き總覽は、此書に於て見出さる』（民衆版三〇五頁脚註六〇）と賞めて居る。而して、其書は、一八五二年に刊行されたものである。

ソコデ、聊か忖度に過ぎるかとは思ふけれども、マルクスがインドの共有制に就て、稍精密な智識を得るに至つたは、一八五二年又は其以後であつたのではあるまいか。其智識が一八五三年の紐育トリビューン紙上の『印度論』中に應用されたのではあるまいか。

以上何れも、想像、忖度に外ならぬものであるが、右に云ふモスグウアの某氏が示唆された所に勵まされて、私が考證し得た所は、此以上に出づる能はなかつたのである。但し此問題を私の爲した所より、更らにより精確に講究した人が、日本又は西洋に於て、既にあるかも知れない。唯だ私の淺學なる、其を知り得ないまでのことである。

（九）

さて、右の樣に考へて來ると、私の吟味の第一問題、即ち、一八四九年のマルクスに『アジア的』が見出されず、一八五九年の彼に其れが見出されると云ふことは、別に大して意味のあることではなく、唯だ、マルクスの研究不十分と云ふ事に歸着すると云つても宜しいように思はれよう。

然るに玆に左樣に考へることは、未だ早計であるかに覺へしむ可き一の事實があると思ふ。其れは、餘の儀でもない。ヘーゲルとの關係是れである。

ヘーゲルの『歷史の哲學』は、一つの大きな綜觀の上に立てられたものである。彼は、其の緒論に於いて『世界史の地理的基礎』から論を起し、『新世界』、『舊世界』『アフリカ』『アジア又びヨーロッパ』を論じて後、『時期分け』Eintheilung の一章を設いて詳論して居る。今其の初めの一節を、私の廻らぬ筆を以て邦譯を試みて見る。

『地理學的綜覽に於て、世界歷史の面影は、大體に於いて示されて居る。太陽、光りは、東洋に於いて昇る。乍去、光りは、其自らへの單純なる關聯である。其自らに於て普遍的なる光りは、同時に主體として、太陽の中にある。人は屢々一人の盲者が忽如として物見ることを得る樣になり、黎明、昇り來る光り、輝く太陽を見る光景を描いた。（『社會經濟體系』第一號の拙文『洞窟の內と外』參照）此の純なる明さに限りなく己れを忘れ去るとは第一義の事であり、完き驚異である。然し一度太陽が昇り詰めると、此の驚異はより小となる。周圍の諸對象は、見究られ、其れからして、自己の內部に昇り行き、此れによつて、兩者の關係への進步が成される。ソコデ、人間は、無爲なる觀象から行爲へと出で行く。而して夕べになると、彼が、彼れの內部の太陽から形づくつた、一の建物を作り卒へる。夕になつて此建物を見るとき、彼

は之れを初めに見た外部の太陽よりもより高く崇める。何故なら、今こそ彼は、彼れの精神への關係に於いて立ち、從つて自由なる關係に立つから。我々をして、此の形像を堅く念頭に置かしめよ。然れば、其の中に、世界歷史の過程、精神の大なる日程が存する。

世界の歷史は、東から西へ行く。何となれば、ヨーロウパは、單に世界歷史の終りであり、アジアは、其初めであるから。世界の歷史に取つては、一の東方は、特に優れて(an sich)存在する。何故なら、東方は、其れ自らに向つて(für Sich)全く相對的な或ものであるから。地球は一つの球を成すけれども、歷史は此れを環つての圓を描はしないで、却つて、一の定まつた東方を有つ、其は即ち東洋である。(中略)

世界の歷史は、自然意思の羈絆から一般への、並びに主觀的自由への訓練である。東洋は唯だ一人者が自由であると云ふことを知つた而して其れを知るのみである。希臘及羅馬の世界は、若干のものが自由であることを、ゲルマンの世界は、總てのものが自由であることを知る。從つて吾人が世界歷史に於て見る第一の形態は專制政體であり、第二の形態はデモクラシー及びアリストクラシーで、第三の形態は君主政治である。』ヘーゲル全集第二版伯林一八四〇年刊第九卷一二七・一二八頁(20)

ソコデ、ヘーゲルの『歷史の哲學』は次ぎの如く分れる。第一部、東洋の世界、其一支那、其二印度、(佛教)其三波斯、第二部、希臘の世界、第三部、羅馬の世界、第四部、ゲルマンの世界、是れである。

さて、マルクスが大づかみに、アジア的、古代的、封建的、ブルヂオア的としたのは、右のヘーゲルの第二・第三部を古代と一括し、第四部のゲルマンの世界を、封建的とブルジオア的との二つに分けて見たものなることは、言を待たざる所である。而して斯く改めた爲めに、ヘーゲルに於いては、井然地理的基礎の上に立てられた分類が、一種妙な鵺體的區分となつた。アジア的、古代的、と、封建的、ブルヂオア的とを、一列に並べるのは、嘗て私がゾムバルトの經營分類を評して言つた樣に國家を分類して(一)專制國家 (二)立憲國家 (三)共和國家 (四)北米合衆國 (五)獨逸帝國となすの類ではないか。『經濟學全集』第四卷四三六頁 又た例を代へて言つて見ようとなれば、人類を分類して(一)老人 (二)壯年 (三)泥棒 (四)かつたいぼう と爲すが如きものではあるまいか。

乍去、マルクスの言つたこととて、彼が常に口を極めて罵倒する俗學經濟學者や坊主や馬鹿者やの言ふことよりも、更らに拙いことも必ずしも尠くはないことを思へば、此點は、別に彼是云ふにも當らないことでもあらう。

兎にも角にも、マルクスは、英國へ渡らざる以前、其學んで而して深く歸依して居たヘーゲルから丈けでも、『アジア的』の存在に、十分に氣が付いて居り、其の大づかみの進步的諸階段中に、此れを入る可きなら入れることを、決して忘れ又は知らなかつたものとは、思ひ得

ぬことは明白であらうと思ふ。

果して左様であるとすると、一八四九年になくして一八五九年にある『アジア的』の取扱は、單にマルクスの研究不十分云々を以つて、取片付けて仕舞ふことは出來ないことになる。

私は斯く、暗中模索に等しい考證を重ねて來た結果、此第一の問題に對しては、『アジア的』の有無は、必ずしも偶然の出來事や、マルクスの研究不十分やに歸す可きではなく、其處に何等かの意味が存するものではないかとの暫行的結論に到達しなくてはならぬ様に覺へるのである。

然りとすれば、其の何等かの意味は、何であらうかを吟味せねばならぬこととなる。即ち私が自ら提出した第一の問題は、自ら第二の問題に移り行つて『マルクスの「アジア的」とは、如何なることを意味するか』の吟味を爲さねばならぬこととなるのである。

（十）

マルクスが『アジア的』と云ひ、『乃至は、インド的』と云ひ、時には又た、『東洋的』とも云つたのは、此關係に於いて、如何なるものを意味するやについては、所謂『唯物史觀公式』の一八五九年前後の文獻について、一通り考證して見ねばならぬ。其れには、幸にも、カウツキーが我々に與へて異れた例の一八五七年稿の『結論』がある。前段に其關係箇所を列擧して置いたが、今其文を、左に引いて見よう。

一八九頁。（上略）總ての生産は、（略）一定の社會形態の内に於いて、而して、その媒介によつて、個人が行ふところの、自然の占取である。この意味に於いては、所有（占取）が、生産の一條件たることは、言ふまでもないことである。しかし、これから、所有の一定の形態、例へば、私有制度に、飛躍するは、笑ふ可きことである。（私有制度は、猶それに加へて、その反對的形態たる無所有制をも、その條件として前提してゐるものである）。歴史の示すところによれば却つて反對に、共有制度（例へば、インド人、スラヴ人、古代ケルト人等における）が、原始的形態であり、此形態は、團體所有の形のもとに、尚ほ長く、一の重要なる役割を演じてゐるものである。（中略）だが、何等の形態の所有も存在しないところでは、何等の生産をも從つてまた何等の社會をも、談ずることが出來ないことは、言ふまでもないことである。何物をも、自己の有としない占取とは一の自家撞着の言である。』宮川氏譯本序説一一・一二頁。圏點を附したる部分は私の改めて見たもの

三七—八頁。『しかし。此等の單純なる諸範疇はまた、より具體的なる諸範疇以前に一の獨立な歴史的または自然的存在を有してはゐないだらうか？　其れは事情次第によることである。例へば、ヘーゲルは、正しく、法律哲學をは、主體の最も單純なる法的關聯としての占有をもつて始めた。しかし、占有なるものは、それよりも、遙か

に具體的の關係たる家族または支配關係、隷屬關係以前には、決して存在しないものである。それに反し、たゞ占有するだけで所有を持たない家族又は種族團體が存在する、と云ふ(削)は、正しいであらう。すなはちより單純なる範疇は、單純なる家族又は種族團體の所有への關係として現はれるのである。』同上三九四〇頁。圏點を附した部分は私の改めたもの。

四二—三頁。『さらに、ブルヂオア社會それ自らは、發展の一對抗的形態にすぎないから、それ以前の諸形態の諸關係は、しばしばたゞ全然萎縮してその中に見出されるか、又は——例へば、團體所有のやうに——(削る)滑稽に變裝されてゐる。(中略)かくて、ブルヂオア經濟學も、ブルヂオア社會の自己批判が始まるや否や、始めて、封建的、古代的、東洋社會を理解し得るようになつたのである。』宮川氏譯本四七・四八頁。圏點の部は、私の改めたもの。

同上。『例へば、遊牧民族を例にとらう。(單なる、狩獵民族、或は、漁撈民族は、本當の發展の始まる點——出立點——の外に存在するものである)。彼等にあつては、農業の或種の形態(削)、孤立散團形態の存するを見る。土地所有(削)は、これによつて定められる。それは共有的形態であつて、(削)此等の民族が、その傳統を固執する度合に比例して、或は多く或は少なく(削)維持される。例へはスラヴ民族の土地所有(削)のやうに。』同上譯書五〇頁。圏點を附した部分は、私の改めたもの。

以上の諸例を合せて考へて見るときは、マルクスが『アジア的』と云ふのは、遊牧民族の孤立散團式共有ではなく、家族乃至種族團體の共有形態のことであり、而してマルクスは、其れを原始的形態、原始發生的形態と見るものであることは、疑を容れないと思ふ。即ち前段に引く所の『資本論』第一卷(ハムブルク一九一四年版三二二頁、高畠氏譯本四五頁)の『彼の原始古代的なる小さきインドの共產體』と全然同一の意味を有つものと解す可きが如くである。

右『經濟學批評』緒論中の數節と照合して考へて見る可き文獻は、前にも引いた一八五三年六月十日執筆の『紐育トリビューン紙上』のマルクスの『印度論』及『經濟學批評』の本文の第九頁の脚注である。前者に於いては、マルクスは、『共有』と云ふ文字は、明記しては居らぬが、インドの村落制度を論じて居るので、其處には次の如く云つて居る。

『二つの事情、即ち一方にはインド人は、總ての東洋民族と同様に、農業及商業の土臺たる大仕掛な公共(土木)事業の經理を中央政府に、全然委ねて居ると云ふ事實。他方には、此の農業、此の商業は、全國に彌つて散在し、農業的及手工業的勞働は家庭内に結合せられるによつて唯だ小なる諸〻の中心に綜合せられたと云ふ事實——此等二つの事情は、考へ得る限りの昔以來、一の特

殊な社會制度、即ち所謂村落制度を産み出した。』『マルクス主義の旗の下に』第一年度三八八頁、

此一句と對照して見る可きは、リアサノフ氏が、右文解説中に引いた『資本論』第三卷第一册三一八頁の次の一句である。

『生産方法の廣い基礎は玆（支那及印度）では、小なる農業と家庭的工業との一致によつて形づくられて居る。而して、猶ほ、インドに於いては、土地共有の上に立つ村落團體の形態が之れに加はる。此形態はまた支那に於ても、原始の形態であつたのである。』

後者に於いては、マルクスは、明かに、原始（又は、自然）發生的の共有制の形態は、特殊スラヴ的又は全然ロシア的だと云ふ説を笑ふ可き偏見なりとして斥け、此の形態は、ローマ人、ゲルマン人、ケルト人に就いても立證し得るところであつて、今日猶インドに存するものであり、此のアジア的、殊にインド的共有形態をよく研究するときは、此の原始（自然）發生的共有制の種々形態から、其解消に當つて起り來る種々の形態が派生することを知るであらうとまでも、極めて明瞭に云つて居るのである。

（十一）

玆に一八五三年の『印度論』が、私の此の吟味に關聯して、如何なる意味を有するものであるかを、リアサノフ氏の解説から全く離れて、よりよく考證し得ると考へられる文獻がある。

私は前に云つた『聊か忖度に過ぎるかとは思ふけれども、マルクスが、インドの共有制に就て、稍々精密な智識を得るに至つては、一八五二年又は其以後であつたのではあるまいか。其智識が一八五三年の紐育トリビユーン紙上の『印度論』中に應用されたのではあるまいか』と。私は、此忖度を支持し得る文獻の有無を判じ兼ねて居た。恰も其際、前段附記中に記した如く我妻東策氏からの來書に接したのである。同氏は一八六八年のマルクスの書簡をクノーから擧げて、『唯物史觀公式』中に、私が『共産的』が列擧せられてないと申したに對し、『アジア的』とは、右の書簡に徴すれば、明かに『共産的』の代り語として用ゐられて居るのではあるまいかとて、私の注意を促されたのである。私は、無論此問題を取扱ふつもりであつた。否、此問題こそ、マルクスとエンゲルスとの異同に就て、又た階級鬪爭の始期に關して、否、押し擴めて云へば、唯物史觀經濟史の出立點に關して、輕視し難き重要を有するものであると信じて居た。唯だ右書翰は『公式』に後るゝ十年も後のものに屬するから、此れによつて、直ちに論斷を下すのは、當を得て居らぬと信じて居たのである。我妻氏の示教によつて私は、此問題を、當初豫期したよりも、聊かより鄭重に取扱ふ可き勇氣を與へられたので、此點は、繰返して、同氏に深謝せねばなら

ぬことである。

ソコデ、私は、私の忖度を多少にても支持す可き同時的文献の探索に若干時日を費した。而して、私は幸にも、其れを見出し得たと云ひ得ると思ふのである。

其文献とは、右『印度論』執筆に先つ八日前の一八五三年六月二日付エンゲルス宛のマルクス書翰、同月六日付エンゲルスの同じく返翰、『印度論』執筆後四日目の同年六月十四日付マルクスの書翰の三通これである。今左に、之れを譯出して見よう。

六月二日付マルクス書翰から。

ベルニエー(ベルニエー著大モゴル諸國の記述を含む旅行記)は、何等の土地私有制の存在せぬことが東洋(彼は、トルコ、ペルシア、ヒンドスタンに就て云ふ)の總ての現象の根本形態なることを、正しく見出して居る。これこそ、東洋の天地それ自らへの本當の鍵である。 エンゲルス、マルクス往復書翰集第一卷四一三頁(15)

六月六日付、エンゲルスの右に對する返簡から。

『土地所有制の存在しないと云ふことは、實に、全東洋への鍵である。其中に政治及宗教の歷史が橫はる。乍去、東洋人が土地所有制へ、封建的の其れへさへも、進み來らなかつたのは、抑も何に基くか。私は信ずる。其原因は、主として氣候――土壤の關係、殊に大なる砂漠帶(中略)と結合つて――に存する。人工的灌漑は、玆では、農業の第一條件である。而して、此仕事は、自治體、州又は中央政府の司るところである。 同上四一五頁

(中略)

ベルニエー老の言ふ所は本當に甚だ結構である。一の年老いた眞面目にして、頭腦明晰なフランス人――其人は、殆んど其れに氣付かない樣な風をしつゝ、一擊肯綮に中ることを云ふ人――の書いたものを讀むのは、本當に嬉しいことである。』 同上四一六頁。

六月十四日付マルクス書翰から。

『アジアの此部分(インドを云ふ)の停滯的性質――政治の表面に於ける總ての無駄な運動にも拘らず――を說明するものは、二つの相互に助け合ふ事情是れである。第一公共の(土木)事業が中央政府の仕事であること。第二、其れと相並んで、全國が――若干の稍ゝ大きな都市を除いては――諸々の村落團體に分解されてあり、此等村落は、一の全く秘密な組織を有し、其自らに向つての一の小さな世界を形づくること、是れである。』 同上四二〇頁

(中略)

所有問題については、これは、インドに關するイギリスの諸著述家間の一大爭論問題である。クリシユナ(略)に於いては、土地に對する所有制は存在して居たと思はれる。之れに反し、ジヤヴ

アでは、ラッフルスが其『ジヤヴア史』に記す所を見ると全國の土地に亘つて、稍ゝ額多き地代の得られるところでは、君主が絕對的の地主である。』(同上四二一頁)

右は、倫敦住のマルクスとマンチエスター住のエンゲルスとの間に交換せられた書翰であつて、マルクスが、大英博物館の讀書室へせつせと通つて居た頃に屬するものであらう。前掲キヤンプルの書は、其前年に出版せられたもので、マルクスは、此頃其れをも見たゞらうと思はれる。

而して、此頃からして、インドは勿論、アジア諸國——殊に支那——に關して、マルクスは若干の材料を蒐集し始め、其れが後に『資本論』第一卷に應用せられたものと思はれる。一八六八年のマルクス書翰は、クノーの引用によつて、此問題に引き入れられたけれども、其前年に刊行された『資本論』第一卷丈けで事は十分に窺ひ知り得られると思ふ。唯此書簡中に見えた、土地の周期的割り替へ(割地)のことは、稍〻重要な意義を有するものであつて、其事は、資本論』中の諸記事と共に特段に取扱ふ。又た明瞭に、始終——出立點——なる文字を用ゐたことについては勿論として。

さて、斯く吟味を重ねて來た結果、私が第二の問題として提出した『アジア的』とは、如何なることを意味するかは、一應の解答を得たものと考へて差支あるまいと思ふ。乍去、斯くして得た解答、即ちアジア的——原始發生的村落團體の土地共有形態は、一應の解答たるに止る。何となれば、私が第一の問題から第二の問題に移るについて疑問として提出したところのものは、未だ右の考證を以てしては解けて居ないから。其疑問とは、一八四九年の『賃銀勞働と資本』に此の『アジア的』が見出されず、一八五九年の『唯物史觀公式』に於いて、其れが見出されるのは、必ずしも、偶然の出來事ではなく、其處に何等かの意味があるのではないかと云ふこと此れである。此疑問を先づ解くにあらざれば、私が前段(前號六二—六六頁)に於いて提出し未解決のまゝに捨てゝ置いた根本の問題の吟味に取かゝることが出來ない。而して、然る限りは、マルクスによる唯物史觀經濟史出立點の吟味、並びにエンゲルスによる其れとの交渉の吟味は、一の『ペチチオ・プリンチピイイ』たるを免れない。

私は、此の困難なる——少くとも、私共に取つては——疑問を、聊かたりとも解くことを努む可く、更らに、若干の考證を重ねなければならぬ。今、其れについて、豫め一の手引たらしむ可く、私は次ぎに關係文獻の年次表を作つて見た。

一八二一年　ヘーゲル著『法律哲學』
一八四〇　ヘーゲル著『歷史の哲學』
一八四〇　プルドーン著『所有權とは何ぞや』

一八四二、シュタイン著『今日の佛國の社會主義と共產主義』
一八四四　マルクス著『ヘーゲル法律哲學批評』
一八四四　マルクス。エンゲルス共著『神聖なる家族』(批評的批評)の批評——マルクスのプルドーン讃美——
一八四五　ドイチエ。・イデオロギー中の所有制論(マルクス・エンゲルス・アルヒーヴ第一卷二九八・三〇三頁)
一八四六　プルドーン著『經濟的諸矛盾の體系、又は、窮乏の哲學』
一八四七　マルクス著『哲學の窮乏』——マルクスのプルドーン攻擊——
一八四八　マルクス、エンゲルス共著『共產黨宣告』——後に、共產宣告』——
一八四九　マルクス著『賃銀勞働と資本』
一八五一　マルクス著『ルイ・ボナパルトのブルユメール第十八日』
一八五三　紐育トリビユーン紙上のマルクスの『印度論』
一八五四　マウラー著『マルク、莊園、村落、都市の歷史の概論』——マルクスは一八六八年に至り、初めて、此書を知り、一八七二年刊『資本論』第一卷第二版四八頁に第二版脚註として此を引く、但し其刊年を一八五九年としてあるのは、明かにマルクスの誤記である。ハンブルク刊の初版にも、カウツキーの民衆版にも、此誤は訂されてなく、其儘になつて居る、
一八五七　マルクス稿『經濟學批評一般緒論』
一八五九　マルクス著『經濟學批評』——所謂『唯物史觀公式』なるもの此中にあり——
一八六一　メーン著『古代法』
一八六七　マルクス著『資本論』第一卷
一六八六　エンゲルス宛のマルクス書翰——中に『アジア的』云々の句あり——
一八七七　モルガン著『古代社會』
一八七八　エンゲルス著『駁デユーリング』
一八八一　ザスリッチに與へたマルクスの書狀
一八八二　右の拔刷『ウトピアより科學への社會主義の發展』
一八八四　エンゲルス著『家族、私有財產及國家の起源』

(以下嗣出)

引用書

(15) Die Britische Herrschaft in Indien. "The New York Tribune.". 25. Juni 1853. In "Unter dem Banner des Marxismus." I. Jahrgang. März 1925 bis Januar 1926. SS. 385 ff.
(16) Der Briefwechsel zwischen Friedrich Engels und Karl Marx. 1844 bis 1883. Herausgegeben von A. Bebel und Eduard Bernstein. IV. Bd. Stuttgart 1821.
(17) Campbell, George. Modern India. London 1852.
(18) Raffles, Th. Stamford. The History of Java. London 1817.

(19) Wilks, Mark. Historical Sketches of the South of India. London 1810–1817.

(20) G. W. F. Hegel's Werke. IX. Band. Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte. Herausgegeben von Ed. Gans. 2. Auflage besorgt von Dr. Karl Hegel. Berlin 1840.

前號分正誤表

頁	行	誤	正
五九 上段	一〇	合自然的	合自然的
〃 下段	一三	先づ	先つ
六〇 上段	二〇	合惜	生惜
六〇 下段	一	Fûturus	Futurus
六一 上段	一九	ギリシヤ、ローマ	(ギリシヤ、ローマ)
〃 〃	二〇	經濟社	經濟的社
六二 上段	一三	大きな全體	大なる全體
〃 下段	一四	の五と爲して	の四と爲して
六三 上段	一〇	マルク共產社會	マルク共產體社會
六三 下段	九	段適用以外に立つものであり。	段の適用以外に立つものであり、
〃 〃	一六	マルク共產社會	マルク共產體社會
〃 〃	一九	疑問も抱いて	疑問も湧いて
六四 上段	一九	黒氏	黒正氏
〃 下段	一四	Progrssive	progressive
〃 〃	一九	最終を	最終段を
六五 上段	一八	一度來れが	一度其れが
〃 下段	一	だが、	だか、
〃 〃	四	己むを得ず	巳むを得ず
六七 上段	一〇	押入	挿入
〃 下段	一一	多別差別	多少差別
六八 上段	九	現實	眞實
〃 〃	一一	現實	眞實
〃 下段	一一	論本	論文
〃 〃	二〇	nuf sieh	auf sich
〃 〃	二一	よつて受けられる	よつて受けられる
六九 上段	三	遺憾な	遺憾なき
〃 〃	九	einghen	eingehen
〃 下段	一〇	河上博士佐野氏	河上博士や佐野氏
七〇 上段	二	ein ehen	eingehen
〃 〃	九	Bd. I.	Bd. II.
〃 〃	一七	eingeken fuire-un	eingehen=faire un
七〇 上段	一八	Fuegel	Fluegel
〃 下段	一	trast	truct
七一 上段	六	iohte	ichten
〃 〃	一〇	einversandon	einverstanden
〃 下段	一六	a	a,
七二 下段	一	た例は、	た例は、少くとも獨逸語に於ては
七二 下段	八	押入	挿入
〃 〃	一九	宥怒	宥恕
七三 上段	一八 一九		追記文削除
七四 上段	一〇	カール、マルクス	カール・マルクス

〃 下段	一五	前項	前即ち一八四四年頃
七五 上段	一九	學問的	學問的
七五 下段	一五	唯物史觀の	唯物史觀經濟史の
七六 下段	五	研究もし	研究も
〃 〃	八	此首には、	此首には、私は
七七 下段	三	ラヴレ井	フヴレエ
七八 上段	六	推則	推測
七九 下段	一五	フメステル	フュステル
〃 〃	一九	佛國經濟學の最近	佛國經濟學の現在の
八〇 上段	一	に對する	に關する
〃 〃	八	租述	祖述
〃 〃	一一	學土院	學士院
〃 〃	一七	歷史的諸問題	歷史の諸問題
八〇 下段	六	メロヴンチアン	メロヴヰンヂアン
〃 〃	一六	I I Bd.	III Bd.
〃 〃	一七	18 2	1852
〃 〃	一九	So i lo,gie	So iologie
〃 〃	二一	rivateigentums	Privateigentums
八一 下段	三	Wirtsschaftsgeschi hte	Wirtsschaftsgeschichte

資本主義日本の帝國主義

＝ひとつのポレミーク＝

猪俣津南雄

一　問題の重要性

(1)　はしがき

これまで、わが國の無產階級の大いなる努力の一つは、我國における無產階級イデオロギーの確立にむけられて來た。無產階級の「理論鬪爭」は急速に進展した。理論的究明の對象は、一般的、抽象的なものから、次第に特殊的、具體的なものに移り、問題の重心は今や、我國資本主義の現段階の性質如何の一點に置かれやうとしてゐる。まことに、此の點を十分に見究めることなくしては、わが無產階級の鬪爭の、戰略の、戰術の、一般的基準は規定されることが出來ない。しかるに、我國資本主義の現段階の問題は、私が本論の主題、本篇の標題たらしめてゐるところの「資本主義日本の帝國主義」の性質と地位、わけてもそれが世界資本主義の沒落過程において演ずる役割如何の觀點からそれに近づく時にのみ、正しく把握され得るであらう。

茲に主題とされてゐる問題に見らるる所の、斯かる理論的關聯に加へて、吾々は更に、それの有する特殊の實踐的重要性を指摘せねばならぬ。わが無產階級がます〱明確なる意識の下に政治鬪爭の段階に進出せんとしてゐる時、恰もその、更に格段なる意識化を強要するものゝ如く、我國の帝國主義は今や、わが無產階級に、果敢なる「對支非干涉運動」を遂行すべき任務を、現實に課した。そればかりではない。我國の勞働運動の一角には早くも、對支非干涉運動における無產階級的精神に根本的修正を施さんとする要求が高か〱と掲げられた。そして吾々は飽くまでも、かゝる歪曲と鬪はねばならない。

かうした要求に理論的根據を與へんとする企ての、論篇の、既に發表されたものも少くない。私は茲では、その最も有力な、最も代表的なものとして特に高橋龜吉氏の論文を、批判の對象たらしめるであらう。私は、これが批判の過程において、極東日本の帝國主義の特質——まさに現段階における——を、明かにし得ると信ずる。

高橋氏は、我國資本主義經濟の研究者として、また、わが勞働運動の指導者として知られて來た。また、氏は現に日本農民黨の顧問として特殊の指導的地位にある。雜誌「社會科學」帝國主義號並びに「太陽」四月號に現はれた氏の最近の二論文、「末期における帝國主義の變質」と「日本資本主義の帝國主義的地位」とに於て、氏によつて提起された諸問題は、就中、次ぎの諸點の故に重要視されねばならない——

一、隣邦支那の被壓迫大衆によつて捲き起された「打倒帝國主義」の運動、——此の、世界的に至要なる無產階級的意義を有つ運動が、わけても我が無產階級の徹底的協力を要求して止まない時、「日本は果して帝國主義國なりや」と氏は問ふてゐる。

二、わが無產階級の政治的戰線の一大展開を前にして、氏は、レーニンの謂はゆる「無產階級運動の戰術を規定するところの、帝國主義時代の客觀的諸條件」*の、我が日本における特殊の特質は何かと問ふ。

*(レーニン選集(獨本)三三四頁)

三、我國の「人口問題」の「解決」なるものが、ブルジョア諸政黨の政綱を賑はしてゐる時、ブルジョア的「人口問題」とそのブルジョア的「解決」とにおける必然の犧牲者たる被壓迫大衆の指導者をもつて任ずる高橋氏が、日本の無產階級は「人口問題」の故にこそ英米の帝國主義と戰はねばならないと說く。

(2) 高橋龜吉氏の、左翼への挑戰

高橋氏の論ずる所はなか〳〵多岐にわたるばかりでなく、理論の部面においてはレーニン及びレーニストを援用し、事實の部面は之れを詳細なる統計的數字をもつて裏づけやうとしてゐる。それらの援用と統計的數字とが氏の全議論にとつて如何なる論證力を發揮するかは、私の間もなく讀者の前に展示しやうとする所であるが、それに先立つて氏の主たる論旨の輪廓を一通り見取り置くことが便利であり、順序でもあらう。私はそれを凡そ次ぎのやうに要約し得ると信ずる——

「レーニンの帝國主義の理論に從つて、日本資本主義の帝國主義的地位を檢討するに、それは決して彼の謂ふ所の「資本主義最後の段階としての帝國主義」にまでは發展してはをらない。日本は、『なるほど帝國主義「的」であるかも知れないが、しかし、それは精々の所、大ブルジョアーに對する小ブルジョアーの如き帝國主義「的」國であつて、若しプチ・ブルジョアーと云ふ言葉に倣つてプチ・帝國主義國といふ分類が出來るならば、日本はそのプチ・帝國主義國の一つに過ぎない。そしてプチ・ブルジョアーの利害が、大ブルジョアーよりも寧ろ無產階級のそれと一致するやうに、プチ・帝國主義國の利害は、大帝國主義國のそれと一致する所よりも、被帝國主義國(即ち植民地や半植民地國——猪俣)と一致する所多く、從つて、……日本の國際的地位に即して考る限り、その反帝國主義運動(日本の反帝國主義運動——猪俣)の中には、必然に國民的運動(即ち現時の支那國民の運動の如きもの——猪俣)の色彩の附隨することを免かれ難き位地に、未だ日本はある。』」(太陽、五—六頁)

しかるに、わが日本の無產階級運動の『左翼理論』は、『現に日本の資本主義が「資本主義最后の段階としての帝國主義」にまで（即ち資本主義の最高段階にまで　…猪俣）發展したるが故に日本の資本主義が崩壞に直面するものとなしてゐる。』*『左翼の理論の「直譯」の直譯たる所以の主なる一つは』そこにある。**（*「太陽」三頁。**同上）

しかるに、レーニンは實に、『被帝國主義國（即ち植民地や半植民地諸國　…猪俣）における國民運動乃至民族運動が、帝國主義の打破と如何に密接な關係にあるかを洞察』し、*『斯樣な被帝國主義國の民族運動、國民運動に、極力支持を與ふべきことを力説し、』*『國民の「自決權」を否認して小國民の民族的運動に侮蔑的な態度をとる』（レーニンの言葉）やうな同志を戒め、『長い間奴隷とされて來た國民及國民の間に殘存してゐるこの國民的偏見（即ち小ブルジョア的偏見、國民主我主義、國民的孤立　…猪俣）に、特に洞察を持ち、注意を拂ふの義務がある』（レーニンの言葉）と述べてゐる。*で、（高橋氏は云ふ）「日本の國際的地位が、我國左翼理論の盲信せるが如く帝國主義階級の仲間ではなくて、寧ろ反對に被帝國主義階級（即ち植民地や半植民地　…猪俣）の仲間に入るべきもの』である以上、『我が左翼今日の戰陣は、この點において（即ち日本といふ弱小民族の打倒帝國主義の民族運動を支持せざる點において！　…猪俣）根本的に覆されることになる譯である。』*『又た、その（日本といふプチ帝國主義國における無產階級運動の　…猪俣）國民主義的感情に對しても、單に「侮蔑的な態度をとつて」（レーニンの言葉）得々としてゐるが如き小兒病を慎まねばならない譯である。**』（*「太陽」五頁。**「太陽」六頁。引用文その他の傍點はすべて猪俣のもの）

右によつて明かであらうやうに、高橋君の全意圖は、日本帝國を弱小國に、帝國民を被壓迫民族に仕立てあげつゝ、氏の最近の二論文をば、此の弱小國を愛せざるかの如き不屆きの「左翼」に對する挑戰狀たらしめやうとするものである。もつとも、氏は寬容にも、「社會科學」所載の論文「末期における帝國主義の變質」を斯う結ばれた――『その故に、私は、從來より、現在の我國左翼理論、從つてその戰術に反對し來つたのである。さり乍ら私は無論、私の考を頑固に守らうとするものではない。若しも、私の考へが間違つてゐると云ふことが分れば、私は、少しの躊躇もなく左翼の軍門に降るつもりである。』

尙ほ讀者にとつて若干の興味であらうことには、前の引用文によつて明かなやうに、氏は『左翼の軍門に降る』に先立つてまづ、レーニンをもつて左翼を「覆へし」てをられる。

二　問題は如何に提起されたか

(1)「資本主義最後の段階としての帝國主義」

帝國主義の理論におけるレーニンの地位は、帝國主義の段階におけ

るマルキシズムの發展こそがレニニズムであるとされてゐるほどに決定的である。が、此の理論的部面におけるレーニンの勞作は決して、多かれ少なかれポレミークの形をとる多數の小論文として現はれてをり、「資本主義最後の段階としての帝國主義」といふ標題を帶びた一著さへが、僅々百頁余の、著書といふよりは寧ろパンフレットであり、內容とするところも亦た從つて理論といふよりも多くモノグラフの性質を帶びてゐる。

わが高橋龜吉氏は、專ら此の一著に據らんと欲し、氏の「日本資本主義の帝國主義的地位」なる論文の冒頭を、次ぎの一句で起してをられる『云ふ所の「資本主義最後の段階としての帝國主義」は、之をそのまゝ（そのまゝ――：猪俣）日本資本主義に當篏める（――：猪俣）ことが出來るかどうか。』（「太陽」二頁。傍點は猪俣）

これによつて氏の問はんとする所は、日本の資本主義は既に「最後の段階にあるか？　日本の帝國主義は斯かる段階を代表するか？　といふにある。そして高橋氏の此の問題提起そのものが頭から間違つてゐるのである。吾々はそれにおいて、混亂の極大限と、意義の皆無とを見るのみである。なぜ間違つてゐるといふか？

茲に「最後の段階」なる言葉で特性づけられた「資本主義」は、斷じて一國の資本主義を意味さず、資本主義一般を、資本主義一般としての世界資本主義を、意味する。氏にしてもし、氏の據らんとするレーニンを讀むに際し初等的な理解をだに有たれたならば、また氏の猩さんとする左翼理論に對し、當然にそれが要求する所の注意をだに拂はれてゐたならば、氏のなせるが如く問題を提起することは初めから不可能であつたであらう。レーニンはその著書の殆ど開卷第一とも言ふべき頁——高橋氏の引用された邦譯本（白揚社版）の第九頁——に於て同書の「主要任務」を述べ、それは、『爭ふべからざるブルジョア統計の總括的報告と、總ての國家のブルジョア學者の自白とを用ひて、資本主義世界經濟の總果を示すことにある……』*と明記してゐるではないか。そして志賀義雄氏は、夙に大正十四年六月の「マルクス主義」において、資本主義の崩壞との關聯における帝國主義を論じ、『帝國主義は一連の世界資本主義經濟の鐵鎖である』** ことを、簡潔にも又た力強く指摘し、しかもそれを、高橋氏の經濟理論そのものによつて基礎づけられたかの如き赤松克麿氏の謂はゆる「科學的日本主義」に對する批判において、指摘してゐるではないか。（*「世界」の傍點は猪俣の、「總果」の傍點はレニンのもの。*同誌三一頁）

(2)　引用されたレーニンの定義

だが、此の點は、實に高橋氏自らの引用するレーニンの言葉のうちに、更に明白にあらはれてゐるのであつた。レーニンは曰ふ——

『帝國主義の出來るだけ簡單な定義が必要ならば、帝國主義は資本主義の獨占的段階である、と言はねばなるまい。この定義は、本質的なものを含むことにならう……だが、餘りに簡單な定義は、最も重要なものを要約するが故に便利だとはいへ、定義すべき諸現象の本質的

な諸特徴が特にそれから讀み取られねばならぬとなると、不十分なものである。從つて吾々は——どんな定義でも發展の過程にある諸現象のあらゆる關聯を包括し得るものでは決してないから一切の定義は總じてたゞ限られた相對的な意義しかないといふことを忘れずに——次ぎの如き五つの、その最重要な特徴を抱擁するやうな、帝國主義の定義を工夫しなくてはならない。——(一)經濟生活にとつて決定的な諸獨占をつくり出す程に、それほど高度の發展段階に達してゐるところの、生産及び資本の集積。(二)銀行資本と產業資本との融合と、そして——此の「金融資本」の基礎の上に——金融寡頭政治の成立。(三)商品輸出と區別される資本輸出が、特に重要な意義を得る。(四)相互の間に世界を分けるところの國際的、獨占的資本家諸團體が成立つ。(五)資本主義強國間の、世界の領土的分割が終結してゐる。

(即ち)帝國主義は、獨占と金融資本の支配が確立され、資本輸出が優れた重要性を得、國際的トラストによる世界の分配が始まつてをり、最大の資本主義諸國の間に地球の全地域の分割が終了されてゐるところの、そうした發展段階における資本主義である。』(傍點全部と、(即ち)は、猪俣のもの。高橋氏によつて引用された邦譯本の此一節は、あひにく誤譯と脫漏とがあるから、序でながら總べて私の譯文に書き直しておいた。しかし、これから問題にしやうとする部分の關する限りでは、意味において高橋氏引用のものと本質的差異はない。私の譯文は、獨本ウエルトハイム版七九——八〇頁と、英本ロンドン版一〇三——一〇四頁とによる)

(3) 出發點の誤謬

これは、レーニンが、帝國主義に與へた定義である。此の定義の對象たる帝國主義が、「一國の帝國主義」ではなく、謂はゞ「世界的規模における帝國主義」であり、その意味の「帝國主義」があらはす所の一定發展段階の「資本主義」は、當然に、資本主義一般、世界體系としての資本主義であつて、個々の國家組織の枠内にある個々の資本主義であり得ないことは、定義を一讀する者の直ちに看取し得るところである。資本主義をして帝國主義たらしめてゐる諸特徴が、資本主義世界體系の諸特徴であればこそ國際的トラストによる世界の分配や、強國間の世界分割が、主要特徴として擧げられ得る。實にそれらは、單一の資本主義國の特徴としては、言葉としても始めから意味をなさいものではないか。また勿論これらの五特徴は不可分的な一綜合としてのみ、帝國主義のエポックの本質をあらはし、そのおの〳〵は、相互制約的なると同時に相互補足的なる關係にある。

吾々は、高橋氏に立戻り、レーニンより此の定義を借り出して來た氏が、如何にそれを運用し、利殖せんとされるかを見やう。氏はおもむろに言はれる——

『以上がレーニンの云ふ所の「資本主義最後の段階としての帝國主義である。なる程、(讀者よ、この「なる程」に用心あれ ・・猪俣)、世界的

に云つて（恰も、世界的に云はなくてよいかのやうに！　‥猪俣）、斯様な現象が近年著しくなつて來たことは事實であるが、しかし乍ら（!?　‥猪俣）、その故に日本の資本主義（それ！　‥猪俣）も亦、斯様な所まで（？　！　一體どの様な所まで？　日本の資本主義において世界の領土的分割が終結したりするやうな所まで？　‥猪俣）發展したと云ふわけでは無論ない。（そも〳〵そんなことが考へ得べきことだと言はれるのですか？　‥猪俣）』* 無論ない。『そこで、いま、（いよ〳〵定義の運用が始まる　‥猪俣）、日本（といふ一國　‥猪俣）の資本主義現在の發展段階そのものを（そのものを　‥猪俣）、レーニンの「尺度」によつて（即ち世界資本主義の諸特徴そのものによつて　‥猪俣）はかつて見ることにする（!!　‥猪俣。』*（*「太陽」九頁、七頁）

(4)　直譯と誤譯と

帝國主義は、前記の五特徴の故に、資本主義一般——資本主義世界體系の最後の段階を代表する。この「資本主義最後の段階としての帝國主義」を、そのまま日本の資本主義に當箝めることが出來るか、といふ高橋氏の問題提起それ自體を、なぜ私が失禮にも「頭から間違つてゐる」などゝ言つたかは、これぐらひで大概わかるであらう。が、同時に、適用すべからざる「尺度」を、或るえたいの知れぬ目的の爲めに強いて適用せんとしてゐる者は、外ならぬ高橋氏それ自身であることもまた解つた。今や吾々は、讀者と共に、次ぎの事を想起する。即ち氏は、「左翼理論」なるものを評し、それは、『現に日本の資本主義が「資本主義最後の段階としての帝國主義」にまで發展したるが故に日本の資本主義が崩壞に直面する』となすが故に「直譯」であると難ぜられたのであつた。さうした珍奇な左翼理論なるものを、氏が、氏の混亂せる頭以外の何處から引出して來られたかを知るの自由は、吾々はあひにく氏によつて毫も與へられてをらない。だが、果してそれが直譯であるかを問題とする前に既に、今ま見る如き尺違ひの「尺度」を「そのまゝ當箝める」ことによつて立てられんとする高橋氏の全議論こそが、文字通りの直譯であるのみならずまた實に誤譯として、氏の全頭腦を反映するものでなければならないことを指摘するの自由は、まさに吾々の物のやうである。

(5)　日本を創作する者

以上において明かにされた、氏の方法上の誤謬——それが過失であれ故意であれ——は、まことに致命的である。かゝる誤謬に出發する議論から引出される如何なる結論でもが、みな、誤謬であると結論することはたやすい。だが、吾々は、氏が斯かる方法を適用して達成せんと欲する究極の目的をも讀者の爲に摘發し、批判する義務があると感ずる。從つて吾々は、先づ、何等かの動機の下に特に世界的な「尺度」をば眇たる日本列島に當て箝めることを選ばれた氏が、如何なる苦心と努力とをもつて如何なる日本を捻出されんとするかを、氏の手續の各節を追つて確めるであらう。が、前にも示唆しておいた通り、氏によつて創作されんとする日本は、半植民地國級の弱小國である。

高橋氏と限らず、およそ强大國を弱小國に變裝せしむる爲めに「レーニンの尺度」——しかも尺違ひの——を借用するといつた方法を選ぶからには、誰しも多少の無理は覺悟せねばなるまい——虛構、隱匿、すり換へ、詐欺……（だが、おゝ、せめて此の最後の言葉だけは紳士の名譽の爲に撤回せしめよ！）

三　我國資本主義の現段階

(1)　資本の集積とその程度

で、吾々は高橋氏と共に、「生產及び資本の集積」から始めるであらう。

我國に於ける集積の狀態を示唆し得る數字は少くない。しかるに、數字には特別の愛好をもたれるかの如き氏が、何故か茲では一切の數字を忌避し、たゞ『生產の集積……は……英米獨等のそれに比較すれば殆んど言ふに足らないと云つてよい』といふ獨斷で、極くあつさりと片付けられたと云つてよい。だが、昔から、「事實は頑强」であり、さう簡單に片付いたためしがない。統計上、大正十二年において既に、我國の五人以上を雇ふ工場に働く勞働者總數の三八%は、五百人以上の巨大工場に在り、六〇%は、百人以上の工場に、七〇%は、五十人以上の工場に在つた。直ちにこれと比較し得ないにもせよ、參考としては十分に役立つところの、獨逸の一九〇九年の數字を擧げれば、工業、鑛業、及び建築業における勞働者五十人以上を雇ふ經營に在る勞働者の數は、總數の四五%に過ぎなかつた。高橋氏は、日本には五人以下の小工場が多いと言はれる。いかにもさうした工場の數は多い。しかし一工場の勞働者數が五人以下といふ少數である以上、かゝる過小工場勞働者の總數は知れたもので、之れを加算しても前揭の百分比に幾何の變化も生じないことは、必要あれば私の何時でも立證し得る所である。

現時の企業資本の主要形態たる、株式會社企業の形態をとる資本の集積はどうか？ 茲でも、拂込資本百万圓以上のものが、拂込資本總額の六五%を占め、一千萬圓以上ものは三一%に達してゐる。一九一二年の英國には約五萬五千の株式組織の企業があり、一會社平均の拂込資本は約四十八萬圓であつたが、大正十二年の日本には、同樣な企業が一萬七千ほどあつて、一會社平均の拂込資本は五十萬圓强になつてゐる。また、一九〇九年の獨乙においては、拂込資本五百萬圓以上の會社は二百五十社ほどしかなかつたのに、大正十二年の我國においては、同樣の大會社が五百六十社近くあつた。更にまた同年において拂込資本五百萬圓以上の會社の資本は、拂込資本總額の六五%を占め、一千萬圓以上のものは、三一%に達してゐる。

大正十二年における我國の銀行資本の集積程度は、一九一三年の獨逸のそれよりも劣つてゐた。獨逸では當時において既に、最大の八銀行の銀行資本（拂込資本と積立金と預金との和）は百三十二億マルクに達し、此の資本力は、獨逸の大銀行及び中銀行の銀行資本の八三%

位を占めてゐた。しかるに、震災の年の日本では、最大の普通銀行十五行の銀行資本が普通銀行の銀行資本總額の四五%に達してゐるに過ぎない。だが、それは四年前のことであり、其後の四年間には周知の如く銀行資本の集積は急速に進んだ。加ふるに、最近の六銀行の破綻に續いて今や最大銀行の一なる第十五銀行以下の三十餘行が破産狀態に陷つてゐる。此の「財界混亂」のアウトカムが、資本の集中となり、少數巨大銀行の銀行資本の急激な膨脹となるべきことは、多くを語らずとも明かである。もし、來年末又は來々年末において、獨逸にならつて最大の八銀行をとり、それらの銀行資本總額を求めたならば、恐らく全銀行資本の八割には達しないとしても優に六割には近づくであらう。そしてかゝる資本力は、謂はゆる「金融制度の改革」と相俟つて、それら少數の巨大銀行による全金融市場の統制を可能ならしめ、「金融寡頭政治」の物質的基礎に、更に强大な一礎石を加へるであらう。

以上の如き數字は、畢竟するに數字であつて、生産及び資本の集積の程度を示す單なる指標以上のものではない。また我國の數字を歐米のそれと比較することも、技術上の諸困難に加へて、各國の歴史的發達の所産たる經濟的政治的機構の相異の故に、無意味に近い場合もないではない。だから私は右の數字によつて直ちに我國における集積の程度と戰前の英米獨のそれとの異同を論定しやうとするのではない。だが、吾々は、それらの數字を示すことによつて、高橋氏の謂はゆる『英獨米のそれに比較すれば殆んど言ふに足らないと云つてよい』といふ立言のうちにかくされてゐる氏の苦心の一端はこれを明かにし得たと信ずる。更にまた、以上及び以下において明かにするところの、集積、獨占、金融資本等に關する我國の現狀は、それ自身直ちに帝國主義國としての日本の全特徴を示すものではない。示すかの如き見解を强いんとする高橋氏の謬謬こそは、私の反覆强調したところである。だが、それらの現狀の闡明は、日露戰爭以來の日本帝國主義の經濟的基礎に生じたところの最近の變化──しかも異常な變化と、從つてまた日本帝國主義そのものに生じた最近の變質の實相とを明かならしめるに役立つであらう。詳しくは後段──

尚ほ、以上において言ひ殘されてゐる重要な一點は、我國における生産及び資本の集積の程度の論定は、それ自身既に獨占的なる國家資本を除外しては全く不可能だといふことである。かゝる國家資本は、鐵道、郵便、電信、電話、製鐵、石炭、造船、兵器、煙草、木材、その他の企業において産業資本として作用し、その總資本額は優に三十億を超え、工業、鑛業、運輸における「民間」會社資本總額の半ば以上に達するほどのものである。そして我國における金融寡頭政治、もしくは「財閥政治」は、此の國家資本との關聯においてのみ機能する。*(國家資本の地位については本年二月の「政治批判」において既に林二郎氏が指摘してゐる)

(2)「金融寡頭政治」の六個斷

さすがに高橋氏と雖も、『金融寡頭政治は少なからぬ程度にまで進みつゝある』*といふ程度の、事實の認識までを拒否することは出來ない。また、『而して「財閥政治」は現に大なる力を振つてゐる』*こと迄では勇敢に承認される。だが、氏の心眼に映ずるところの、此の金融寡頭政治、財閥政治なるものは、『謂はゆる「金融資本を基礎としての」それではなくて、それとは　を基礎としたものである。』*しかも其の神秘な「別な力」の正體について語ることは、すくなくとも氏が日本帝國の帝國主義を論ずる際には、　でもあるかのやうに、氏は敢て沈默を守られる。（*「太陽」一一頁。傍點は猪俣）

では、如何にして氏は、金融資本を無視することが出來たか？　氏の手續きは玆でも至極簡單である。氏は、先づ、「普通銀行運用資金中放資高調」と題する一表を掲げ、それにおける「合計」の數字を、「所有株券」なる項下の數字と對比し、『斯様に銀行資本が産業資本化した高は（それは大體に銀行の株券所有高以外にはない筈である）總計約百十三億の內、三億圓にして、即ち百圓につき僅々的三圓の割合しかなつてゐない!!』と歎呼される。

だが、待たれよ。銀行が株券に放下する資本のみが金融資本でない位のことは、此の資本概念に一顧をでも與へる者の直ちに見得る所ではないか？

高橋氏の利益の爲めに尙ほ一言すれば、氏が金融資本の總高（！）として高か〲と差しあげられる三億ほどの「端した金」でさへ、その全部が、『銀行資本が産業資本化した』ものではないのである。氏の知らるゝ通り、銀行の所有する株券は謂はゆる事業會社株だけではないから。

誰もが氣づくであらうやうに、特種の動機に囚はれた高橋氏の意識には、銀行資本が、銀行の資本として映じ、（でなければ二つのすり換へ！）、金融資本は、ひとへに、銀行が産業會社に投下（インヴエスト）した資本として映じてゐる。かゝる意識にとつては、金融資本を機能的に概念することの如きは、全く無緣であらねばならぬ。

玆では氏は、ヒルファデングとパブロヴイッチとレーニンとが金融資本について述べてゐる三つの定義やうの特性記述を並べて氏の金融資本概念を裏づけやうとしてをられる。

そして氏の手續きは玆でもまた、「發展に於ける諸現象のあらゆる關聯を包括し得」ざるを常とする「定義」の、「限られた相對的な意義」を全く忘れ、最も典型的な發展を對象としてそれを一般的抽象的に特性づけてゐるそれらの「定義」をば、特殊の歷史的發展の所產として今ま特殊の生成過程にある我國の金融資本に、「そのまゝ當嵌め」やうとすることに盡きてゐる。氏の「直譯」は、再び誤譯たるのみである。

『生產の集積、それから生れて來る獨占』*は、我國においては必然に先づ國家資本の形において成熟せざるを得なかつた。氏はかつて、わが大藏省預金部の資本が演じつゝある機能に想到されたことがあら

うか？ それは、國の内外において産業資本化されたる强大な金融資本である。氏はかつて、産業、商業、金融の三大分野に亘る渾成企業形態をとる三井、三菱、住友等の資本の機能に想到されたことがあらうか？ それは、「財閥政治」の物質的基礎の一として强大なる金融資本である。そして、自余の諸財閥が相次いで設立し來たつた「保險會社」は？ そしてまた、晩近の財界に「花形」と謳はれる「信託」は？ (＊高橋氏の引用さるゝレーニンの定義中の一句。「太陽」一三頁)。

だが、氏の頭には「銀行資本」の「銀行」がこびついてゐる。では最近の過去數年間に曾つて無き巨額の社債の引受けに用ひられた銀行資本は、如何なる資本として機能したか？ また戰後恐慌以後最近に至るまでの數十銀行の破綻は、銀行資本の機能における如何なる變質を暴露したか？ が、本來、高橋氏に向つてかく問ふことは「釋迦に說法」の類ひである。我國における銀行資本の急激にも又た多大なる産業資本化の傾向に至つては既に余りにも顯著な出來事であつた。四月九日の「東洋經濟新報」は、全國普通銀行の預金及貸出狀態について曰ふ——『定期、特別當座、「其他」の三口の預金計七十一億〇八百萬圓の中、右手許準備金六億圓を除ける殘六十五億〇八百萬圓は、我が普通銀行が、公衆より預りて公衆に代つて長期放資を行ふてゐるものである。かくて、我が普通銀行は、商業金融機關といふよりは、寧ろ（聴かれよ、讀者！…猪俣）企業放資の金融機關たる色彩が濃い。』こゝに我が銀行業の病根が横はる。」

生産の集積、資本構成の高度化は、我國における銀行資本の産業資本化を要求して止まない。かゝる變質は、必然的に、それに對應すべき金融機構の創造さるゝに先立つて生じた。ブルジョア的意識にとつては、その事態が「銀行業の病根」として映じ、金融資本時代への開が「金融制度の改善」を意味するのである。

世界資本主義の一環としての日本資本主義の特殊の發展過程における、現下の全事態の分析において、その本質に即して金融資本を見るか、それともブルジョアジーと共にたゞ現象の表層に彷徨するか——二者擇一の自由（と言つて置く）は、わが高橋氏の前にある。氏が何づれを擇るにせよ、氏の擇一と共に、氏の謂はゆる、金融資本を基礎とせざる金融寡頭政治なるものも亦た、一篇の御伽噺と化するであらう。

(3) 獨占の段階を跳び越える？

金融資本を看過し、集積を隱匿される高橋氏が、我國における獨占をも亦た、『英米獨等のそれに比すれば殆んど云ふに足らない』とされたとしても、もはや驚くやうな者はあるまい。（「太陽」一一〇頁）

吾々をもつて見れば、資本主義日本は、二つの意味において明かに獨占のエポックに入込んでゐる。（一）獨占的地位を有する二様の大資本が、我國の經濟生活にとつて決定的な意義を有つて來た。（二）重要産業の各部門においても、競爭の自由ではなしに、競爭の制限乃至廢止

が、原則として要求され、承認されてゐる。

一、獨占的地位を有する二樣の大資本と言つたその一つは、既に言及した國家資本である。いま一つは、混成企業形態をとる最大資本である。三井、三菱等の資本は、關係分野の個々の事業部門乃至分枝の多くのものにおいて獨占的であるばかりでなく、一全體として獨占的である。「獨占」とは、最廣義には、何等かの優越による一定範圍內の無競爭狀態に外ならない。かかる混成企業形態の最大資本と國家資本とは、その獨占的機能において相關的、相互補充的である。此の關係あるに加へて、そのいづれもが我國の重工業を占領してゐること、——そこに之等の資本の決定的な力が生ずる。

二、放下資本の觀點からの重要產業部門として、拂込資本が一億圓以上に達する十一部門、鐵、石炭、石油、造船、電氣、人肥、製紙、綿絲、毛織、電力、運輸を見るに、企業結合による競爭の制限乃至廢止の行はれてをらぬものは、新興企業たる電機、電力を外にして、僅かに石油、造船、運輸があるに過ぎない。しかるに電力は、それ自身、地域的獨占の性質のものであり、且つ近年の急速なる投資の結果、輓近の本事業に見られる競爭は既に相互致命的な性質を帶び、協定かトラスト化か國有かの何づれかを要求してゐる。石油では、トラスト化の過程より生れた一大會社が獨占的地位を占め、造船では、混成企業形態の資本が獨占力を有し、然らざる資本——例へば松方、鈴木等の資本の敗北によつて、いよ〱決定的な地位に近づく。運輸のうち海運にあつては、造船におけると同樣、國家統制の下に、自由競爭は既に排除されてをる。鐵道は、地方鐵道として、國家資本の一部門を代表する鐵道省の支配下に地域獨占を享有する。官線の電化と共に、電力の資本も亦た國家資本に依存し、少くとも實質的には兩者の融合が生ずるであらう。尙ほ、放下資本高においてそれらに劣る諸部門にも、カルテル、トラスト、による獨占、乃至は一大企業による獨占が見られる（糖業、セメント、製粉、製麻、染料、板ガラス、等、等）。（本項については、「社會科學」六月號及び「大衆」四月號の薄廣人氏の論文を參照あれ）

以上の十七部門中、石油と綿紡とセメントとを除いた十四部門において、混成企業態の巨大資本もしくは最大の銀行資本の支配的地位は既に確立されてゐるか乃至は確立に近づきつゝある。でなければかゝる資本の急速なる進出が見られる。かゝる事態は、獨占的な金融資本の制覇の過程の一面に外ならない。

商業及び土木に於ける、財閥資本の獨占的地位に至つては、それこそ「古い話である。」戰後恐慌以來、單獨態の大商業資本の沒落はまことに顯著であり（茂木、高田、鈴木、等）、その商權は、混成態の巨大資本の商業部門の手に歸した。これが、獨占的な金融資本の制覇の過程の他の一面でなくて何であらう。

玆に述べ來つたやうな獨占の成立は、毫も資本家相互間の對立及び鬪爭を排除するものではない。かゝる對立、鬪爭は、資本主義の存

續する限り存續する。無產階級は、資本家階級との闘爭において此の一點を看過してはならない。だが、恐らくそれにも增して看過すべからざる事は、我國においての、さうした資本家的對立闘爭は、もはや彼の古典的な「自由競爭」の形態をとることが出來ず、只だ「獨占」の枠内においのみ、また「獨占」の手段をもつてのみ、行はれねばならないこと之れである。金融資本と同じく此の場合にもまた、獨占の實質的成立にも拘らず、その似合ひの上衣としての經濟的政治的機構、わけてもその細目の創造が後れてゐる。かゝるものの創造は、資本家的對立闘爭――内部的及び對無產階級的――の過程を通して急速に進展するであらう。

高橋龜吉氏の「日本經濟の行詰」*は著名である。だから、吾々は氏に問ふであらう。「行詰」れる日本の產業は、「自由競爭」の「ありしよき日」に立返へることが出來るか? かゝる產業に體現さるゝ資本によつての、局面打開の最後的努力は、國內的には、競爭の制限及び廢止――獨占化の手段によらずして可能であるか? 自由競爭が、資本主義的發展の「開花期」の指導原理であるならば、それの否定としての獨占こそが、その「凋落期」の決定原理でなかつたか? かくても尙ほ獨占は、「行詰れる」日本の經濟生活にとつて決定的意義を有たないと言ふのであるか? （*高橋氏の著書「日本經濟の行詰と無產階級の對策」その他）

それともまた、獨占の段階を飛超えた崩壞過程を我が資本主義に見らるゝ程に、それほど「革命的」(!)で氏はあるといふのか。獨占の考察においても氏の直譯的誤謬の跡は余りにも歷然たるものがある。が、それへの言及は、もはや讀者の退屈を招くに過ぎまい。

(4) 資本輸出――あゝ、一と昔前の修辭[illegible]

私の議論のかゝる段階において早くも私は、私の思想的生產力――呵々――と、雜誌「改造」の紙面の制限との間の矛盾の增大を痛感し始めてゐるものであるが、しかも尙ほ私をして我國の「資本輸出」の問題の爲めに費すべき數行を敢えて割愛し得しめない程に、それほど此の問題は、高橋氏によつて興味深く扱はれてゐる。といふのは、氏は、大正十三年末現在とある大藏省發表の「對外投資額調」なる一表と、同じく大藏省發表の「外資輸入額現在表」なる一表とを掲げ、おのくの數字の總計を比較し、『我國は資本輸出國どころか、逆にその輸入國であることが分るのである』* と結論されてゐるが、此の對外投資の數字たるや、對支投資總額を僅々十四億足らずに見積つてゐるほどに如何がはしい物であるばかりでなく、支那、南洋、露西亞への投資を擧げてゐるに過ぎないからである。如何なる投資を海外投資と名づけるかは、お役人の勝手でもあらう。だが、吾々の問題は、科學的に考察さるべき資本輸出であり、わが日本の帝國主義の觀點からの資本輸出である。吾々は、臺灣や朝鮮が日本帝國の植民地であることを、さう輕るぐしく忘れ度くない。そして臺灣も朝鮮も、

の「投資」の地であることを忘れま

いではないか。せめてはかの、資本をして其處の
むる爲めに血と肉とを捧げて消えた幾十萬の若人の靈の
爲めにも……。

が、恐らくヨリ以上の興味は、氏の辯解の方にあらう。『尤も、以上の計算には、朝鮮臺灣等に對する投資を含んでゐない。從つて之れを考慮に入れねばならないが、しかし（！　：猪俣）之れを單に（！　：猪俣）典型的な（そら出た！　：猪俣）資本の輸出と云ふ立場から見れば、尠くとも（!?　：猪俣）日本資本主義の現狀が「商品輸出に代つて資本輸出が大なる意義を持つて來た」といふ事は、幾ら牽強附會しても（誰れが？　：猪俣）云ひ得ないことであることは容易に看取し得るであらう。』＊　玆に「典型的な」とは、世界資本主義の一定の發展段階に於て典型的な資本輸出のことである。さうした資本輸出が、或る一國、しかも少しも典型的でない資本主義的發展を餘儀なくされる一國に、そもそも生じ得るものかのやうに論ずることは、——またさうした資本輸出の有無が、直ちに、さうした一國の帝國主義的地位を決する標準となるかのやうに論ずることは、「幾ら牽強附會しても」、到底科學的であると言ひ得ないことを、氏は何故に「看取し得ない」のであらう？　（＊「太陽」一七頁。傍點は猪俣）

だが、待つた。『少くとも、日本が今日（今日！　：猪俣）、資本の輸出國でなく逆に輸入國であることは、レーニン自ら之を明言してゐる。』＊　といふ高橋氏の發見を見落すことは公正を缺く。氏のレーニンの引用にはかうある。『……世界は極く少數の高利貸國と、非常に多數の債務國とに分解した……イギリスが、エジプト、日本、支那、南アメリカに信用貸をしてゐるが如きがそれである。そこで、イギリスの艦隊は萬一の場合の執達吏である。』（日本の傍點は高橋氏のもの）しかし我々は、氏の折角の發見も、三つの事實の爲めに、その價値が、消極的——といふ意味はマイナス以下——になることを惜まねばなるまい。（一）レーニンがこれを書いたのは、一と昔前の大正四年の春であり、材料は從つて明治時代のものである。（二）あの頃の軍閥日本は、「執達吏のイギリス艦隊」の東洋方面を引受けて、成功的な　國主義國となり濟ましてゐた。それが高橋氏の發見洩れになつてゐる。（三）その後、世の中が變つて、今日では高利貸國のイギリスが變になり、極く少數の債權國の一つにさへなり上つた昔の　が、ブルジョアジーの新裝で、亞細亞の主人の地位を狙つてゐる。

が、まだある。高橋氏は、『レーニンの云ふ第四の帝國主義の特徴、「資本家の國際的團結が生れ、世界を分割すること」…』＊を、日本の資本主義に當て嵌めて見ねばならぬ。また實際に當て嵌めても見られた。そして最后には、『レーニンの第五の帝國主義的特徴は「資本主義强國間の世界の領土的分割が終結したと見得ること」と云ふのであつて、專ら、世界的事實を指摘してゐるのである。この點については、從つて、こゝに問題は起らないわけである……』＊　とある！　西諺の一つとに少し違ふが、「最后に笑はせられる者は、最もよく笑ふ。」

（＊「太陽」一一七頁。傍點は猪俣）

(5) 高橋は何を告げたか

しかしながら、以上の如き當て嵌めによつて高橋氏の『指摘したい點は、この小論文全體を通じてさうである通りに、日本の資本主義は未だ漸く、プチ・帝國主義階段にまで達したか、達しないかの階段にまで到達してゐるに過ぎないと云ふことである。』＊かゝる點を指摘する爲めには、氏によれば、全體としての日本經濟の性質を吟味する必要があり、更に日本資本主義の國際的地位を明かにする必要がある。そこでまた長々と數字の羅列が續く。

だが、讀者よ、不機嫌な顔をし給ふこと勿れ、それらの數字たるや、これほど公正を重んずる私にさへ、最早や眞面目に取り上げて見る勇氣を起さしめないほどに、只だ一つのことの外は何一つ語らないものであるから。そして其の只だ一つの事とは、これもまた例によつて、强大國を弱小國に變裝せしめるのには、なかく〵骨も折れるといふこと。たゞ、かく言ふ私の言葉を、誣罔や漫罵と響かしめない爲めに、次ぎの如く例證して置く。

高橋氏は言ふ、日本は未だ農業國である、何故なら（一）我國の輸出の四割三分は農産品であり、（二）我國の農業人口は總人口の五割五分を占め、伊太利のそれと大差ないから。

私は言ふ、その四割三分といふ「農産品」の中には、砂糖だのメリケン粉だのと言ふ大工場の生産物が入れてある。が、それはよいとしても、「農産品」の輸入の方はどうされたのか。輸入の方を見ると、農産品は、（輸出の四割三分に對して）輸入總額の五割二分ほどになる。それだけで見ても、日本は大部工業國らしく見えるが？……。また、米を作らねばならぬ日本の農業は、特殊事情の下に、極端な小農生産制である。が、麥を作る伊太利はちつと樣子が違ふ。伊太利式の生産方法を若し日本に移すことが出來たら、日本の農業人口は現在の三分の一に減ずる。日本式の生産方法をもし伊太利に移すなら、伊太利の農業人口は現在に三倍せねばならぬ。農業人口の大小で、一國の資本主義的發達の程度をはかるとなると、白耳義は米國よりも發達が進んでゐる。等、等。

高橋氏は言ふ、我國資本主義經濟の重心は、冶金工業にはなく、纖維工業にある。輸出中纖維品の占むる割合、工場生産高中紡織業の占むる割合、職工總數中紡織工の占むる割合がそれを示す。『かやうな事情の下においては、我國に「帝國主義」侵略が起る筈はない。』纖維工業は平和的な産業であるから。

私は言ふ、ずつと前から强固なカルテルをつくつて國内市場を獨占してゐた我國の紡績資本は、大正五、六年頃から急速に工場を支那に移し始め、今では支那における總錘數の三分一以上を所有してゐる。事實、我國の紡績資本が反動的な帝國主義政策の熱心な主張者であることに、何の不思議もないと思ふが……。

高橋氏は言ふ、『……我國の資源關係においては、少くとも現在にお

いては、我が資本主義が重工業化すと云ふ望みは殆んど絶望である。』

私は言ふ、さうでせう、始めつから日本の帝國主義を抹殺してかゝることによつて、日本から支那をきれいに切り離してしまへば……。

高橋氏は言ふ、各國の帝國主義的獨占を見るに、先づ『原料及び食料の（獨占）と云ふ點から言つて、日本は全く伊太利とその地位を同ふし、この點からは「帝國主義國」としての資格は殆んど零であると云つてよい。』

私は言ふ、一寸御注意申上ますが、あなたの表には一群の重要商品の單なる生産高が擧げてあるだけですね。「資源の獨占」といふのとは少しばかり違ひませんか？　それから鐵、鋼鐵の生産は、日本では毎月平均たつた一千噸足らずになつてゐて、東洋一とかいふ「八幡」なんかは何處かへ蹴飛ばされて。また、石炭は一ヶ月平均二十四万二千噸とあつて、本當の生産高のざつと十分の一。英帝國の項下には加奈太、米帝國の項下にはメキシコが入れてあつて、日本帝國へ來ると、朝鮮も滿洲も支那もなし。おまけに、表の中に小麥だの米だのも加へてありますが、そんなものの生産を除り「獨占」すると、恐るべき農業帝國になるんぢやなかつたでせうか？　アルゼンチン帝國、支那帝國など。――が、もちろん、そんな風に加へたり、減したりしないと、日本の地位は御愛好の伊太利といつしよになりません

高橋氏は言ふ、『日本資本主義の國際的地位は、その販路から云ふも、全く、被帝國主義の地位にあるといつていい事情にある。』けだし、『販路の獨占といふ立場から見るに……日本は僅かに八千萬人の人口を占むるに過ぎないが、英國は四億四千萬人を、米國は約一億二千萬人を、露國は一億三千餘萬人を、佛國は約一億人を、支那は四億人を獨占してゐる。』

私は言ふ、果せるかな支那は、米の獨占に加ふるに販路の獨占を以つて、遙かにアメリカ帝國を凌駕する大帝國であつた。憐れむべきは日本帝國よ！

だが、高橋氏の偉大は、かくして現代史及び近世史を根本的に書きかへたことにあらねばならぬ。

レーニンから帝國主義の一定義を借り出して來た氏が、如何にそれを運用し、利殖されたかを吾々は見た。そして尠くとも弱小國日本と、大帝國支那とが今ま氏の掌中にあることを見た。氏は少なからず儲けられた。そして有らゆる資本家と同じやうに、儲けるに從つていよいよ擴大し深化する矛盾の中に沈みながら――

四　「日本は帝國主義國でない」か？

(1)　獨占的地位の爭奪

レーニンは、高橋氏によつて利用された帝國主義の一定義――五つの特徴を含む――を述べた直ぐその後で、『もし、帝國主義に關して、單にその基底的な、純經濟的な諸概念――それらにのみ今ま述べた定義は局限してある――を問題とするに止めず、資本主義一般に對

して資本主義の一定段階が占めるところの歷史的地位や、勞働運動內の二つの根本傾向と帝國主義との關係をも考慮に入れるならば、帝國主義は更に違つた定義を下すことが出來、また下さねばならないと、それは吾々が後段で見る通りである。』と言つてゐる。

世界的規模における帝國主義にあつてさへさうであるとしたら、一國の帝國主義について更に別箇の定義を要すべきとは餘りに明白であるが、同時に、資本主義一般の一定段階としての、世界的規模における帝國主義があつてこそ、帝國主義國もまたあり得るといふことも、劣らず明白でなければならない。この點における前者と後者との關係をあらはす譬喩を—ただ、此の場限りの譬喩として——とれば、それは戰爭と交戰國との關係に似てゐる。戰爭があつて、始めて交戰國があるので、その反對ではないやうに、帝國主義のエポックがあつて始めて帝國主義國(近代的意味における)がある。(論理のプライオリーテーも、無論、前者にある。)そして、レーニンの指摘した五特徵こそは、此のエポックの最も一般的な物質的經濟的基礎たるものであるが故に最も重要な特徵なのであつた。そしてかゝる特徵は、之れを要約的に表現すれば獨占であつた。世界的觀點からの獨占が一定の時代において前記の諸特徵を有つに至つたこと、それが、その時代を帝國主義の時代にする

資本主義が、個々の國家體系の內部において、時を異にし、條件を異にして發生し、生長したといふ事實、即ち個々の、多かれ少なかれ異質の資本主義諸國の存在を前提し、では、世界的觀點からの獨占は國家と國家との關係においては、如何に歷史的に變化したか？

十九世紀の半ば乃至はその後二十年ほど迄での間は、資本主義國中の唯だ一國——英國のみが、植民地領有ならびに產業的優越の點で、獨占的地位を享有したといふ意味において、獨占が例外的であつた。此の時代を假りに、ナショナリズムの時代——勿論限られた意味において——と呼ぶならば、それに續いて現代に及ぶところのインピリアリズムの時代は、次ぎの點で前時代と區別される。即ち、資本主義國中の唯だ一國の獨占が、部分的に——特に產業獨占において——破れると同時に、資本主義國中の比較的に先進的な數國のいづれもが、それ〴〵の理由から、それ〴〵の程度及び範圍において獨占的地位を享有するに至り、しかも物質的基礎、經濟的諸條件の根本的變化の故に、各自はその地位の强化と擴大との爲めに戰爭を賭して爭はざるを得なくなつてゐるといふ意味において、獨占が常態的であり、決定的であり、時代的特質であること。

かゝる獨占、即ち一定範圍內の無競爭狀態を、實現せしむる力、優越が、金融資本の形態をとること——そこに時代的特徵はある。が、その獨占的地位の爲めの鬪爭が戰爭を不可缺手段たらしめる以上＊謂ふ所の力、優越は、同時にまた必然的に武力の形態をも併せとらねばならない。また、それらが、更にその他の樣々な形態をとることを妨げないのは言ふ迄もあるまい。(＊その點を私は「社會科學」六月號

の小論文において強調して置いた。)

が、帝國主義は、先進資本主義國相互間の競闘を意味すると同時に、かゝる競闘的な諸國家によつての、半開民族、未開民族の隷屬化と搾取とを意味する。

(2) レーニンと日本帝國

これだけを頭において、高橋氏がことのほか私淑されるレーニンの、次ぎの一句を讀むならば、氏の陷つてをる多くの誤謬は始めから不可能であつたであらう。『十九世紀の後三分の一は、新しき帝國主義のエポックへの過渡をなした。今や、獨占の用益者は、一個の強大國の金融資本ではなく、二三の極く少數の強大國の金融資本である。(日本とロシアとにおいては、近代的金融資本の獨占は、兵力の獨占や尨大な領土の獨占や又た支那等の外國民を搾取することの特別な便宜によつて、一部分は補充され、一部分は置代へられてゐる。)』(此の一句は、高橋氏が專ら引用される邦譯レーニン著作集第二卷二一〇頁にある。但し私の譯文は、レーニン選集(獨逸本)三三六頁により、邦譯本のものと多少の差異がある。)

右において明かに含意されてある通り、日本は、二十世紀初頭において既に帝國主義國であつた。それはまた、レーニンにまで行くことの馬鹿々々しいほどに著名な事實ではある。が、高橋氏の利益の爲めに、氏の愛讀書「資本主義最後の段階としての帝國主義」(一九一五年)から、彼の言葉を借り出してもよい。『印度、印度支那及び支那……が、イギリス、フランス、日本、アメリカ合衆國等の若干の帝國主義國の金融資本によつて搾取されてゐることは周知のことである。』(邦譯本一六二頁)しかも彼れによれば——また無論彼によらなくても——日本は帝國主義強國である。『右の六大強國においても、一方にはアメリカ、ドイツ、日本の如き、新進の、驚く可き急激に發展する資本主義國家があり、他方にイギリス、フランスの如き……があり、又最后に、經濟的に非常に後れた國家、即ちロシアの如きがある。』(同上一〇七頁)また『植民地、及び海外の諸國において、資本主義は極めて急速に發展しつゝある。後者のうちからは新しき帝國主義強國(例へば日本)が生れ出でつゝある。』(同上一三一頁)

だが、レーニンが斯やうに書いてゐるのは、決して故意に高橋氏を不利に陷らしめんが爲めではないことは、彼が如何に公平に伊太利をも帝國主義國となしてゐるかを見ても明かである。たゞ、彼は、伊太利の帝國主義を檢討するに當り、次の如き言葉に表はれてゐる科學的用意を以つてした點だけが、やや高橋氏と趣を異にする。『現在の帝國主義戰爭が、社會主義に向つて提起してゐる諸問題の解明にとつては、各種の歐洲諸國に一瞥を與へてもつて、本質的なもの基本的なものから(聽かれよ、高橋氏!……諸民)全實面の國民的差別相及び箇別態を見わけることを學ぶのは無用でない。』(レーニン著「流れに抗して」(獨逸本)の中の論文「伊太利の帝國主義と社會主義」一九一五年、二六五頁)此の、「全實面の國民的差別相及び箇別態」を見わけんとする

特殊の觀點からは、現エポックの本質的特徴は「國民的解放戰爭のエポックから掠奪的反動的な帝國主義戰爭のエポックへの渡過」に存し、伊太利において特にそれが明瞭にあらはれてゐる。『墺太利の桎梏から自己を解放した伊太利は、革命的民主的、即ち革命的ブルジョア的である。が、ガリバルディの時代以來の伊太利は、吾々の眼前において最終決定的に、他國民を壓迫する伊太利、土耳古や墺太利を掠奪する伊太利に變形しつゝある。むくつけき、忌まくしき、ドス黒いブルジョジーの伊太利。此のブルジョアジーが、掠奪物の分配に參加し得たことの歡びに涎を流してゐる。』(同上二六六頁) 高橋氏が、わが無產階級運動の爲めにいたくも恐れられるファシズムは、此の帝國主義伊太利の較近形態であつた。

(3) 番犬的帝國主義の時代

日淸戰爭當時の日本において既に支配的な生產樣式となりつゝあつた資本主義は、特殊の自然的、社會的、歷史的諸條件の下に、日露戰爭時代までにかなりに高度の發展段階に達してゐた。かゝる發達なくして、あの　　　　の遂行は不可能である。紡績業の發達や鐵道敷設哩數の增加やの速度を見ても、日露戰爭后の十年は、それに先立つ十年に比して緩漫になつてゐる。當時のわが資本主義は尙ほ半封建的な文武の國家官僚の指導に俟つ所多かつたに加へて、資本主義それ自態が既に掠奪的である。當時における、全體として帝國主義のエポックの成立を前提し、更に尨大な　　　　支那並びに朝鮮への近接と、武力における相對的優越とを前提する時、かゝる新興資本主義國を帝國主義國たらしむべき一切の條件は既にそこにあつた。日露戰爭は帝國主義戰爭であり、朝鮮、等、等はその　　であつた。當時及びそれ以來世界大戰までの帝國主義日本は、　　　　、その部分的支持の下に、ロシア、ドイツその他の帝國主義强國と、亞細亞における掠奪物を爭つた。

わが親愛なる高橋氏は、レーニンへの深き私淑にも似ず、また「日本はこれまで、英國の如き帝國主義國たらんと希望して、その目的の爲めに全力を擧げた』ことの認識にも似ず、『しかし乍ら、それは要するに一個の希望であつて、その爲めに日本が「帝國主義國」に現實になつたわけではない』*と辨明される。しかし乍ら、それは要するに氏一個の希望である。「國民經濟學」に造詣深き氏は、市場の商品に對する單なる欲望の所有者と、それに對する現實の購買力の所有者、即ち現實の競爭者との區別はとくに御存じでなければならない。だから。吾々は問ふであらう、當時の資本主義日本は、特定の「市場」における　　　　の、單なる希望者であつたか、それとも、「光輝ある戰勝」によつて現實に自己を立證したところの、帝國主義の榮えある若き鬪士であつたか?

が、事實は更に雄辯である。そして、世界大戰と共に、歷史の舞台は一轉する――わが亞細亞においても。

(4) 舞臺は一轉する

、、、は、しばらくは、、、、を强める。しかるにまた世界大戰は、未曾有の僥倖を、、、、、、與へた。「强大國日本」——それはもはや、「與へられた事實」である。吾々はたゞ、彼が如何に强大であるかを知らんとするのみである。

だが、大と小、强と弱は、ノア洪水の大昔から相對的であつた。

高橋氏は、極東の資本主義日本の强弱大小をはかる「尺度」を全世界に求めらる。そして一群の重要商品の生產高と、諸國の面積と人口とを記述し、比較することによつて、問題を、商業地理の水準にまで引上げられた。しかし、吾々の問題は、それよりはもつとつゝましやかな、ヨリ具體的な、特殊な、しかもダイナミックなものではなかつたか? 伊太利の小麥や、ドイツの鐵や、フランスの石炭の生產高、米領キューバの面積、佛領モロッコの人口——そうしたものが、資本主義日本にとつて有する意義を調べねばならぬほどに、此の極東帝國が膨脹したことを吾々は未だ知らずにゐる。「日本人は日本人らしく、」すくなくとも一應は、問題を東洋に限るべきであらう。

が、その東洋が、世界資本主義の、從つて帝國主義の、新らたなる重點とならうとしてゐる。そして重點に近いものゝ力は、たゞその事の故のみで擴大される。假令それがまだ「農業國」であつたとしても。

世界大戰は、英國と米國の地位を、顚倒した。戰后米國の不可避的な帝國主義的進出は、太平洋においては、しかし、形勝を占むる日本によつて阻止される。此の對立なくして「太平洋會議」は生れ得なかつた。革命的な印度、革命的な支那が、亞細亞の舊主人を脅かす。か、老帝國の衰亡は、此の大陸の既得權の維持を、老帝國に命ずる。彼は壯帝國を凝視する——形勝を占むる工業日本を。此の對立なくして、日英同盟の破棄はあり得なかつた　資本主義日本の優越は、一方では、依然として戰略的なそれである。

しかるに新しき日本の優越はまた新しき內部的な力に伴はれてゐる。その資本主義經濟は、世界大戰を機會に、社會的生產の全規模を、從つて社會的生產力を、殆ど倍加した。かゝる異常の蓄積は、それに應當する生產及び資本の集積と、生產の工業化並びに產業資本の獨立化と、重工業の擡頭と、信用の膨脹並びに銀行資本の集積とを齎した。そしてそれと共に、如何に今や獨占が、金融資本が、登場しつゝあるかは前既に之を見た。資本の輸出は、支那のみにても既に二十七億圓を超えるといはれる。(四月三十日「東日」竹越與三郎氏の報告)

戰後の帝國主義日本は、　　として、　の小さき分前を追つてゐるには、もはや余りに强大すぎる。彼の爭はんとする所は、亞細亞における霸權である。最も優越した二大强國に對する最も優越した獨占的地位である。けだし、爭はずにはをれないから。

何故、をれないといふか? (一)英米の抗爭にも拘らず、南洋と支那とにおいて特殊利權を獲得し、伸張せしめることは、既得の植民地及び諸利權の推持と共に、新らたなる段階に入れる資本主義日本存立の爲めの絕對的先要條件である。(二)對立のあるところ、かゝる條件

は戰ひとられねばならず、戰ひとるの道は常に進攻であつて退守ではない。

では、何故にまたそれが先要條件であるといふか？　まさにその新らたなる發展段階において、ヨリ遙かに増大したる規模において展開するところの諸矛盾の故に。

(8)　人口問題のワナにかゝる

資本主義生産の常則として、資本の蓄積乃至集積は、それが勞働生産力の發展を齎らす限り、不可避的に資本構成の高度化を來たし、從つて利潤率の低落に伴はれる。此の事態は同時にまた、一方では過剩資本の、他方では過剩人口の、増大となつて現はれる。（「社會科學四月號の拙文參照）今や、絶對的にも相對的にも増大した過剩人口は、一部分は言葉通りの失業者――しかも未曾有の大群として、一部分は農家經濟への負擔を意味はする「歸農者」の更に著しき大群として、ブルジョアジーをして今更のやうに「人口問題」を喧傳せしめてゐる。わが高橋氏が眼さとくも拾ひ上げられたのはそれであつた。そして氏の主張――「人口問題の故にこそわが日本の無産階級は、英米の帝國主義と戰はねばならぬ」とは、また何といふ機宜を得た愛國的提唱であらう！　が、そればかりでない、此の提唱に含まれる氏の理論的創意の矜恃をさへ、吾々は氏から聞くことが出來る。『レーニンは、彼れが白人種なりしが故に由るか（!!　見られよ、氏は先づ氏の同志の皮膚に着眼された　……猪俣）、兎に角（?　……猪俣）、彼れは、人口問題を日本人の如く痛切に感じてゐなかつたと見えて、（だが、これよりも的確な想像があり得やうか？　……猪俣）、帝國主義的領土の獨占が人口問題を　　に導くべしとの可能性につき、（讀者よ、此の可能性を御記憶あれ　……猪俣）全く論及してゐないやうだ（!　……猪俣）而して、レーニンが現實に言つたこと以外に一歩も踏み出し得ない、我國の直譯的（氏の誤譯との對立における　……猪俣）左翼は、日本の斯樣な立場（人口問題的、國民的、　　、戰爭の立場　……猪俣）を全然理解し得ずして、之を、非科學的にも、漫然と、「帝國主義戰爭」と混同してゐる。從つて彼等の之れに對する策戰は少なからず混線して却つて、レーニンの精神（有難や！　……猪俣）を失ふものが少くない。』

此の、皮膚の檢討に始まつて精神の高揚に終る一文における、氏によつての、レーニンの漫畫化は、蓋し篇中の白眉であらう。氏は、レーニンに、マルサス（嗚呼、たつた一字の違ひではある　……猪俣）のガウンを着せてゐるではないか。

氏において全く缺けてゐるところの、「人口問題」のマルキスト的把握の爲めには、私は幸にも河上博士の近著『人口問題批判』（問題の眞本質を捉え、我國近時の俗學的な諸見解と對立せしめつゝ、それを解明した、極めて啓發的な必讀の小册子）を推薦する便宜をもつ。この「人口問題」をば、先づ白人種のマルサスが、しかも氏が日本「人口問題」の一仇敵と見做す英國において、凡そ百二十年前に始

めて「人口問題」として日本人以上に痛切に感じたといふ奇蹟は、資本主義そのものが英國においては當時恰もかゝる問題を惹き起すやうな段階に進んでゐたといふ單純な事實に還元し得ることも亦た、同書が教へるであらう。だから、問題をレニンに限つて言へば、いかにも彼は、マルキストなるが故に、『帝國主義的領土の獨占が、人口問題を驅りて戰爭に導くべしとの可能性』には決して論及し得なかつた代りにに、帝國主義的獨占が、「人口問題」を借りて無產階級を戰爭に導かんとする努力の必然性を認識してゐたことは明かである。さればこそ、世界資本主義、帝國主義と鬪爭することに一生を捧げた白人種の彼は、高橋氏にも增して人口問題を痛切に感じてゐたところの、白人伊太利の愛國社會主義者ラブリオラを、「勞働者の陣營内におけるブルジヨアジーの手先き」と痛罵してゐる。

で、誰れが今ま「非科學的にも」人口問題のワナにかゝりつゝあるのか！

(4) 亞細亞の覇權

だが、かうした過剩人口の增大は、わが資本主義の新しき段階において擴大し深化したる諸矛盾の現れの只だ一つに過ぎない。それと關聯して、大衆の限られた購買力と、それに比して異常に大なるものとなつた社會的生產力との間の矛盾がある。國內市場の狹隘は、今や資本にとつて壓倒的な苦痛となつた。更にそれと關聯して、農業と工業との矛盾が增大した。それは、一方では市場の問題として、他方では「食糧問題」として又た工業生產とその原料との間の矛盾として、何れもその痛切さを增して現はれて來た。が、原料の問題は、鑛產物において更に甚しく、しかも重工業原料に於て最も甚しい。然るに重工業の軍事的重要に至つてはまさに絕大である。

現段階におけるわが資本主義經濟の存立は、これらの矛盾の克服によつてのみ可能である。さればこそ、ブルジョアジーの眼は今や一齊に海外に、わけても支那と南洋とに注がれてゐる。市場を、原料を、食糧を、「植民地」を、そこに獲得せぬ限り、かくして矛盾を緩和せぬ限り、「不景氣」は永久に續き、資本の蓄積は不可能だから。

戰後恐慌以來頻りに「整理」され來たつた過剩資本の一部は、今度の「財界危機」によつてまたげつそりと切り落された。が、尙ほ著大なるその存在と、一般利潤率――わけても重工業方面におけるそれの低下の傾向とは、資本輸出の促迫を異常に强めつゝある。

だが、これらすべての意味においての「海外への發展」――それが、吾々の既に强調したところの、亞細亞における爭覇によらずして如何に可能であらうか？ かくしてこの爭覇が、わが資本主義存立の絕對的先要條件となつてゐること――そこにこそ現段階における資本主義日本の帝國主義の本質は見出されねばならない。

(5) 無產階級の任務

かゝる覇權の競鬪者――英、米、日――との對立において、打倒帝國主義の、民族革命の、支那がある。更にまた、全世界の資本主義、

帝國主義との闘爭をたゝかひつくす無產階級ロシアがある。

英國は本國の政治的情勢の爲めに、米國は海軍根據地の缺除の爲めに、日本は軍事工業の基礎たる重工業の不備の爲めに、いづれも未だ決定的衝突を避けてゐる。が、それは平和ではなく、休戰に過ぎない。三大强國は、今ま、弱國支那に、また勞農ロシアにさへ、讓步的、妥協的態度をとつてゐる。が、それは、自家にとつて最も有利なる爭覇の機會を待つ間の事である。そして、日本の重工業の建設——この死活的重要事——は、支那に於ける特權的地位の確否にかゝる。

資本主義日本の帝國主義は、かやうに、確定的、運命的、死活的である。わが無產階級は、この事實の認識を、　　　　　　、一たらしめねばならない。諸矛盾の資本家的克服の努力は、生產費の低下と、生產の「合理化」と、獨占化と、　　　とを、帝國主義の目的の爲めに、　　　負擔においてのみ强行せんとする。そして無產階級は、かゝる企てに對する闘爭を敢行することによつてのみ、——即ち帝國主義との闘爭を通じてのみ、自身を解放することが出來る。けだし、かゝる闘爭の過程のみが、それ自身を强大化する過程であるから。氏よ、人口問題の解決は、かゝる闘爭の決定的勝利の後にのみ來るのではなかつたか？

高橋氏の思考における根本欠陷の一つは、資本主義が資本主義として、階級が階級として把握されてゐないこと、從つて諸多の矛盾と對立とがぼさかされ、まやかされてゐることにある。一國の資本主義は、單に「行詰る」が故に、崩壞するのではない。「行詰り」を打開せんとする必死のブルジョアー的闘爭より生ずる國際的及び國內的對立、かゝる對立の尖銳化が、一定の程度、形態に達することによつてのみ、崩壞するのである。氏は此の點に無關心なるが故に、安價で甘やかな崩壞理論を編み出すことが出來る。また、資本主義はその一般的抽象的意味における最高段階に達する時にのみ崩壞するかの如き考への影響を脫することが出來ない。そして、ロシアの資本主義が如何に崩壞したかを理解することが出來ない。レニニストは、世界資本主義、帝國主義の連鎖は、その最も　　　　。そして、一國は、そこの無產階級及び被壓迫大衆が……なる時にこそ、最も弱き一環であると云ふ。そして又、各國の無產階級及び被壓迫大衆の任務は客觀的條件によつて規定される戰略、戰術に卽しつゝ、何よりも先づ　　　　たらしめる爲めに闘ふことにありとする。

結語

かつて、伊太利のトリポリ戰爭——それと共に伊太利は帝國主義國たることを立證したとレーニンがなすところの——について、帝國主義伊太利の「愛國的」社會主義者ラブリオラは言つた。『吾々は、單に土耳古に對して戰つてゐたのではない。弱小國をして一指をだに觸れしめず、鐵の如き制覇を批議する一言をだも發せしめざる財閥的歐洲の、陰謀と威嚇と黃金と軍隊とに對しても戰つてゐたことは明かだ。』＊

いま、日本の高橋氏は言ふ。日本はかつて帝國主義戰爭をしたこと

がない、日本は農業國である、日本は弱小國である、日本は憐むべき債務國である。『日本の資本家は殆んど、資本家の國際的團結による「世界の分割」の埒外に取り殘されてゐる。』日本の生絲業の『勞働者は外國に搾取されて』ゐる——『勞働に値ひする人間なみの報酬を外國消費者(!)は支拂つてゐない、』原料食料の大部分は英米二國に獨占され、日本は伊太利と地位を同じうする、『いま、日本は、最も『領土』の獨占に苦んでゐる國であり、消極的に搾取されてゐる國である。』

かつて、伊太利のナショナリスト、コラデイニは揚言した。『社會主義が、ブルジョアジーからの、プロレタリアートの解放のメトーデであつた如く、國民主義は、(聽かれよ、高橋氏! ‥猪俣)吾々伊太利人にとつては、吾々に對するブルジョアジーであるところの、(聽かれよ!)、佛人、獨人、英人、米人からの解放(!)のメトーデであるであらう。』

いま、わが高橋氏は諄々として說かれる。日本は、『大ブルジョアーに對する小ブルジョアの如き帝國主義「的」國であつて‥‥プチ・帝國主義國の利害は‥‥(むしろヨリ多く)‥‥被帝國主義國と一致する。』日本の『人口問題の解決策は、‥‥專ら、(讀者よ、傾聽あれ ‥猪俣)英、米、佛、等の領土の「獨占」を解放せしむる「解放戰」(!!)に行く外に策はない。』『人口戰爭は一の無產階級(!!)の解放戰として の色彩の深いものである。』

かくして氏は、無產階級と其の「左翼」とに數へられる。それ故に『日本の無產階級運動‥‥(は)‥‥多かれ少なかれ國民運動的色彩を免かれ得ない。』(まことに然り! だが、氏の指摘する理由の故にではなく、帝國主義ブルジョアジーの必死の努力としての欺瞞の、部分的奏効の故に!) この點はレーニンの指摘せる如く、だが、氏よ、レーニンの指摘は、本國の面積に匹敵する植民地を領有して數千万の他民族を隷屬せしめ搾取してゐる國についての指摘ではなく、かく隷屬せしめられてゐる國についての指摘であつた!) 社會主義的に(!)無產階級の解放に志す者の、決して侮蔑すべからざる點であつて、(いかにも! そしてその「侮蔑」をあなたは今まあなたが與へたもの として取戾してゐる。) 要は之を反動化せしめず、之を導いて、眞の解放戰、即ち(!)、反帝國主義運動にまで發展せしむることに在るわけだ。』『かゝる準備をなさず、注意をも採らなかつたなら——と氏は言ふ、だが は言ふ、「氏の如き指導方針によつてのみ」——大衆は‥‥ファ吾々シスト化するに至るであらう。』

惜むらくは、吾々は此の高橋氏の指導方針に對するレーニンの賛否の聲はもはや之を聞くことが出來ない。しかし、彼が、氏の伊太利の同志ラブリオラ、コラデイニを評した言葉には、氏は必ずや喜んで耳を傾けられるであらう。彼は言つた——

『「吾々」よりも(氏の場合には日本よりも ‥猪俣)多くの植民地、多くの資本、多くの軍隊を有する國はいづれも、「吾々」から(日本から ‥猪俣)何等かの特權を奪ひ、何等かの利潤、餘剩利潤を奪つてゐる。

…自國の資本の特權と優先權との爲めに闘爭すること、そして他を掠奪する「權利」の爲めの帝國主義的闘爭が、（聽かれよ！　…猪俣）國民的解放の闘爭と　　されるやうに、國民即ち民衆を、――ラブリオラやプレハーノフや（そして高橋氏や？　…猪俣）の援助を得て――　　することと――それは、ブルジョアジーの仕事である。』*

『問題は、範疇的に、二つに一つだ――即ち、　　　ペンをとつてか、（高橋氏！　…猪俣）、直接にか間接にか何等かの形で、自國のブルジョアジーの…國家的な利害、もしくは特權及び要求を防衛するか、…そして彼等の　　　　であらうとするか、それとも、特權の爲めの如何なる闘爭でもを、又た特にその爲めの　　爭をば、國際的に團結したプロレタリアートの××××××××を得て、有らゆる××、就中自國の×××假面をはぎ、……するか、その何づれか一つだ。この場合に、　　　。言ひ換へれば、中間的立場をとらうとする試みは、事實において、帝國主義ブルショアジーの側への、裏面の轉落を意味する。』*（*レーニン著「流れに抗して」にある論文「伊太利の帝國主義と社會主義」より）

以上において吾々は、「日本資本主義の帝國主義的地位」に關する高橋氏の全議論を分析批判し、その出發點たる方法上の誤謬と、從つて生ずる個々の立言の間の矛盾撞着を指摘し、か丶る立言の基礎たらしめられた諸「事實」に含まる丶虚構を摘發し、最后に、氏の結論の「精神」を批判せしむに、氏の師事するレーニンの「精神」をもつてした。と同時に吾々は、吾々の立場より、資本主義日本の帝國主義の眞特質を、輪廓的ながら論定し得たと信ずる。か丶る志向を志向とする批判にあつては、更に氏の如きイデオロギーの社會的基礎をも、併せて曝露すべきである。だが、私は此の機會においてはたゞ、（氏がレーニンに着せたガウンがマルサスのものであつたやうに）氏が日本帝國主義に織らせたプチ・ブルジョアの外套が不思議にも氏の外套に酷似してゐることを示唆するに留め、それよりも先づ、今やか丶る外套を脱がれたかも知れない氏が、果して如何なる旗をか丶げて「左翼の軍門」の前に立たれるかの一點に、讀者と共に、當面の興味をつなぐであらう。（一九二七・五・五）

現代歐米に於ける經濟學の新傾向

アルフレッド・アモン

アルフレッド・アモン氏は最近までプラーグ大學の教授であつたが、昨年秋來朝せられ、現に東京帝國大學經濟學の教授である。氏は千九百十一年の「理論經濟學の對象と根本概念」を以て學界に名聲を揚げ、近く千九百二十四年にリカルドに關する小著を公にして、正統派經濟學に對する一見識を示し、更に翌年經濟原論に關する著述を公にした。ヴイーン大學に於てボエーム・バウエルクの門弟として育てられ、シユムペーター、ミーゼス等と共にヴイーン學派の三柱石を以て目せられ、現に歐米の理論經濟學に於ける第一流の碩學である。

一

學問は主として人間の實踐的目的への努力から生ずるものであるから、その發達が或る程度迄常に吾々の實際生活によつて、及びその中に在つて自己の利益を維持せねばならぬ結果吾々に解決を迫る具體的諸問題によつて影響されるのは自明のことである。此の影響が、一國民の生活に必要な生活手段の調達を目的とする人間の社會的協力を研究する學問に於いて、特に著しく感ぜられるのは當然である。斯様に學問的勞作が日日の具體的問題によつて影響されることは、その社會的活動の基礎や、主要條件に大なる變化が起り、或は急激な變更が齎される場合に、特に顯著にあらはれる。この事は、吾が經濟學の歴史に於いて屡々その實例を見て來た。即ち、或は北アメリカ發見後に於いて、或はナポレオン戰爭後や、產業革命後に於いて、そして最後に、今度の世界戰爭の後に於いて。是等の時代はいづれも吾々の經濟活動の條件や社會生活の基礎の上に決定的な變化を齎し、それによつて新しい政治問題や、經濟政策上の諸問題を前面に展開した。そして是が解決は問題となつて居る事柄の一般的及び特殊的事情を先づ以て科學的に研究することによつて得られたのである。さればアメリカ發見は貴金屬の供給問題や外國貿易問題や、一般的の意味での富と言ふ問題

に當面させ、ナポレオン戰爭は貨幣制度の問題を、產業革命は經濟的社會的の發展に關する問題を、そして更に世界戰爭の結果としてヨーロッパが經驗した深刻な經濟的社會的の動搖は亦一列の特殊問題を惹起せねば已まなかつた。

しかし斯く言へばとて偉大なる學問發展の行程を決するものは斯樣な問題それ自身であると言ふ譯ではない。是等の問題に對する興味はそのよつて立つ基礎、即ちそれが特殊の興味を引く基礎となる諸前提條件の消滅と共に亦消滅するものである。故にナポレオン戰爭後に於ける學問の進步を特徵づけるものは決してリカアドの貨幣本位制度に關する政策を論じた諸論文ではなくて、却つて、當時の特殊な實際問題に何等關はる所のない彼の經濟學原理こそ、この時代の斯學の進步を示すものである。又經濟的進化と言ふ問題の上に學問的な興味が集中せられたことが、產業革命後の斯學の發達をあらはすものでなくて、これを表示するものはかのゼボンス、メンガー、ワルラスの名と結びつけられて居る新しい價値學說の建設であり、完成である。日々の政策的諸問題が理論的勞作の上に恒久的な影響を及ぼす場合には、學問の發展は危機に導かれる。この危機を征服するには、その以前の理論的發展が示した正しい道迄、思ひ切つて退くより外には何等の方法もない。

二

ドイツの國民經濟學は戰前の十年間はこの危機に陷つて居た。それはドイツのホツホシユーレを一時代に亙つて支配した歷史的倫理的學派によつて導かれたのである。この學派は、それ自身產業革命の產物であつて結局單に一時的（過渡的）の事實にすぎない所の產業革命に關する具體的諸問題を以て斯學の主要問題たらしめようと欲した。しかし是等の諸問題はその本質に於いて歷史的な、政策的な、倫理的な問題であつたから、斯樣な試みの結果は學理を輕蔑し之を無視することとなり後に至つてその酬いを受けなければならなかつた。十九世紀から廿世紀への轉換期に當つては、既に產業革命は早くも完了し、工場的大量生產は手工業に代り、勞働者の組織即ち勞働組合等はもはや議論の余地のない事實であり、社會政策は自明の事と目された。手工業驅逐の行程が如何にして起るか、世人は如何にして手工業を工場による驅逐から保護するか、等々の問題はすでに何等の意味をも持たなかつた。社會政策と言ふ問題は單に程度の問題でこそあつたが、その存在の基礎を云々する問題でなく、そして又社會政策と云ふ問題は當時に於いてはむしろ主觀的な價値判斷の對象即ち倫理的な對象としてのみ考察され客觀的な認識に立脚した考察の對象とはなり得なかつた。そして今や再び異る問題が、即ち價格構成の問題、關稅問題、租稅問題、

勞賃構成の問題、資本利子の問題、地代構成の問題等要するに交換價値構成や所得の構成、則ち社會に於ける財貨分配の過程に關する、リカアド以來經濟學の主要な内容を形作る古い理論的問題が再びあらはれて來たのである。

しかし一方歷史學派の支配の下に、前記の諸問題や理論的勞作から全然遠ざかり徹頭徹尾記述的歷史的事實の部分的探究に沒頭し、實際的政策的諸問題に對しては價値判斷を加へながら之に臨む、と言ふ樣な學問題的態度を執る經濟學者の時代が發生した。この結果は書物に於いても學問的議論に於いても、純然たる因果的探究に對立して、價値判斷が支配することとなり、連絡のない部分的探究の結果理論的勞作の破滅となつた。かくて社會經濟の顯著な特色や關係を觀察し了解することを不可能ならしめた。

一九〇九年、ウイーンに於ける社會政策學會總會に於いて、マックス・ウエーバー、とウエルネル・ゾムバルトが、當時を風靡して居た理論的傾向の支持し難い所以を明かにし、殊に價値判斷を理論的討論の領域に引き入れることに反對するに至り、この危機は曝露された。その後この危機はポーレの『現代に於ける國民經濟の危機』と言ふ書物の中にその最後のあらはれを見せて居る。マックス・ウエーバーは既に早く一九〇二年にアルヒーフ、フューア、ゾチアルウイツセンシヤフト、ウント、ゾチアール、ポリテイーク、にあらはれた『社會科學的認識及び社會政策的認識に於ける客觀性』と云ふ小論文に於いて、當時當面の問題であつた社會政策の諸問題の理論的取り扱ひに對する綱領を立案した。

この論文は先述のウイーンの社會政策學會の總會迄は餘り顧みられて居なかつたのであるが、この後はその力を發揮し、アドルフ・ウエーバーの『資本と勞働』の如き、フオン・ツウイーデイネツクの『社會政策の體系』の如き、いづれも社會政策の諸問題をば、倫理的價値判斷と言ふよりは寧ろ客觀的社會的合目的性と言ふ見地から論述したものである。

戰前の經濟學の理論的文獻としては、經濟學上に於ける重要な一般的問題の理論的研究に對して新しい注目す可き見解を齎した二名著、クナツプの『貨幣國定學説』と、シユンペーターの『經濟的發展の理論』を擧げることが出來る。前者は多くの國々に於いて（例へばオーストリア・ホンガリア）尚未だ終局的に解決せられて居なかつた具體的な通貨の問題と直接の關係をもつて居たために、後者よりもヨリ多くの興味を引き起した。それは活潑な學問的討論を呼び起し、かくて名目説と金屬説なる二つの對立的立場を代表するベンデイクセン及びミーゼスの著書にあらはれた如き新らしい貨幣理論の諸問題の論述を導いたのである。シユンペーターの著書は貨子論に關する論爭と結びついて居るのであるが、この論爭は直接の當事者であるシユンペーターとベーム・バウエルクとの間にのみ行はれた。この同じ時に當つて、初めは余り注意を引かなかつたが、オツペンハイマーの『純理國民

經濟學體系』があらはれ、更に限界効用學說の見地より理論的に諸問題を取り扱つたウイーザーの包括的な研究が著されたが、それが純粹に理論的性質のものであり現實的の政策的諸問題とは全然無關係であつたために、ドイツの經濟學の素養ある人々の廣い範圍にわたつて注目を引くには元來不適當であつた。

三

時しも世界戰爭が勃發し、凡ての注意は再び必然的に經濟界の具體的現實的の問題の上に注がれねばならなかつた。されば先づ第一に經濟學者の勞作を要求したのは戰時經濟の特殊問題であつて、戰後に於いては經濟的復興に關する特殊の諸問題即ち社會經濟組織を新しく規制し、規則的なものとすることであつた。しかし之らの諸問題に對する興味も、その因つて生じた前提條件が大部分消滅すると共に亦遂に消滅せねばならなかつた。戰後に於ける之等の前提條件は主として次の二つである。即ち一は古い生產組織と市場とが生產の統制要素としての機能を失つたことで、一は貨幣制度或は本位制度の崩壞である。第一の前提條件よりはドイツに於ける社會化の諸問題を生じ、第二の前提條件よりは幾分新しく粉飾せられた古い貨幣本位制度の問題が復活した。しかしこの社會化の諸問題を引き起した條件はドイツに於いては間もなく一般に消滅した。何となればこの社會化の問題は政治組織の破壞によつて起つたものであつて全く政治的性質のもので、いはゆる『社會革命』ではなく、從つて政治組織が再び安定すると共にこの問題も消滅したのである。本位制度の危機は之に比してヨリ永く繼續し、その瓦壞に伴ふ種々の事實の研究は更に貨幣理論に關するあらゆる問題を、一層深く進んで討究する機會を與へた。

しかしながら社會化に關する諸問題及之に到達せんとする努力を科學的に研究し取り扱ふこともまた永續的な、科學的な意義を有する結果を齎した。それは社會主義に關する未知の問題の研究を導き、それが未だ完成したとは言へなくとも、古くからの社會主義的經濟秩序に對する通說の多くは極めて幼稚な、缺點多きものだと言ふことを說明し得る程度迄進步したのである。

マルクス以來社會主義を機械的發展の產物と考へ、それが未だ實在せぬ間は社會主義はそれ自身理論的認識の對象となり得ないと言ふのが通說である。理論的研究の對象となり得るのは單に發展の過程のみにすぎないマルクスに從へば社會主義的經濟秩序は人間の行爲や意志の結果でなく、窮極に於いて人間の外部に存在する諸力によつて決定せられる出來事である。それは只一つの決定せられた方向にのみ進み人間が欲すると否とには關係しない。しかるにここに社會經濟の社會主義的秩序の問題が、始終意志の問題であると同時に、人間の能力（可能）の問題としてあらはれ、かくて再び社會主義的組織の問題そのものが疑問として提出され、しかも根本問題とせられたのである。この問題

は、如何にして社會經濟は共同經濟的に組織せられ得るか、又如何にして人々はそれを組織しようと欲するか。と言ふ問題に歸着する。この事はこの問題がマルクス、エンゲルスによつて說かれた如くにユートピア的の對象たり得るのみならず、切實な現實の問題たり得、直接の生きた實踐の問題たり得ることを示すのである。これは同時にこの問題が實行によつて解決せられ得る以前に、先づ以て人間の頭腦の中に於いて解かれなければならぬことをも示す。そしてそれは更に進んでこの問題が非常な難問であり、その完全な解決には凡らくは一生を費すを要し、或は一般に滿足に解決し得られないことを吾人に敎へる。ドイツに於いて社會化の努力を全く廢止さしたことに就いては斯樣な考へ方もその有力な一因をなしたのである。ドイツ及びオーストリアに於いては社會化の實際的可能性を正確に研究する一つの學問的な委員會が設けられ、そこには特に識者及直接經濟に從事する實際家達が招聘せられた。これらの人々は社會化と言ふ考へ方に對して同情を持つた人々であつたがそれにも拘らずこの委員會の深い諸研究は次の如き比較的一致した結果を齎した。それによれば社會經濟を社會主義的經濟秩序に組織しようとする問題は非常に困難な問題であつて、少くとも當時に於いては解決し得ぬと斷言し得ると言ふのであつた。

ロシアに於いてはドイツとは異なる經過をたどつた。それはドイツの如くに理論的に指導せられたものではない。先づ科學的の研究に訴へたのでなく、直接に實際的經驗に訴へた。吾々はこのことによつて、人々が社會主義をマルクスやエンゲルスが考へた樣に自然必然的な、自然發生的な社會發展の產物と考へないで、本質上實踐意志と實踐行爲の產物であると考へたことを、いよいよ明瞭に確信する。斯樣な實際行動は人々が種々の困難を提示する理論的考察によつて阻まれることなくもつぱら大膽な着手と、必ず成功すると言ふ直接の生きた確信とによつて實際行動を執るとき、初めて可能なのであつた。この科學的經驗とも稱し得可き實踐的經驗は、ドイツに於いてなされた理論上の研究と正に同一の結果を齎した。即ち少くとも今日の吾々人間を以てしては又吾々の今日の生產手段と知識とを以てしては、社會主義的經濟秩序の建設は不可能であると言ふことを示したのである。ロシアに於ける實際上の結果は生產手段の私有を原則的に否定したものでもなければ、交換經濟組織による財貨の分配過程を排除したものでもない。それは戰前に比して經濟組織に於ける國家のヨリ多くのヨリ積極的な參加と、個人個人の私の交換經濟のヨリ嚴格な統制とを伴つた、生產手段の私有の新しい分配に過ぎない。個人企業は排除せられず、只國家企業に他國に於けるよりもより多くの活動範圍が保留せられて居るだけである。國家の經濟的活動の擴張が如何なる程度迄立派な結果を收め得可きかは未來に俟つ外はない。しかし斯くも意味多い社會經濟的社會組織的の問題が、最も確信す可き、しかし吾々の科學にとつては一般に近寄り離き方法で、即ち直接の實際的經驗によつて解決せられると言ふことは、學問の爲めに實に測る可からざる大きな利益であ

らう。之がロシアソヴィエット經濟組織の持つ大きな意味である。

しかしこのロシアの示した經驗は既にそれ自身、自然必然的な一義的に規定し認識し得る唯一の統一的な力によつて支配せられて居る社會發展の傾向が存在すると言ふ見解の否定であり、同時に凡ての唯物史觀の否定である。最近十ケ年間のロシヤ社會の出來事が此の國の物質的生産力の發達の結果であると言ひ得ないことは全く明かであるし、或は少くとも只管にそれのみによるとか、又は窮極に於いてその結果であると言ふことは出來ぬ。むしろそれは政治的發展の結果であり、政權を獲得した人々の頭の中に抱かれて居た思想の産物である。この政治的發達や、この思想そのものは、その原因として更に此の國の物質的生産諸力や生産諸關係に歸せらる可きでなく、それは之等のものと同時に並存し、全然他の關係によつて生じた力である。

ロシアに於ける社會的經濟的關係の發達は疑ひもなく次の事を教へる。即ち是等の諸關係の發達は、種々な、單に一方的方向のみに關係せざる諸力の作用の凡ての合成の結果であり、この諸力の中には人間の頭腦に抱かれた思想も亦重要な役割を演じて居ると言ふことを。この事は、社會の發展を決定する諸力の集合から、只一つの力を分離して之が他の凡ての力を決定するものであるとし、この作用の方法によつて全社會の今後の發達をトすることの不可能なことを吾々に明瞭に示すものである。

凡ての現實の事象と同じ樣に、社會的事象も亦無限に複雜した原因の集合として理解せられなければならず、その個々の構成要素は常に變化し、その現實の作用の强度も容易に之を決定することを得ない。故に將來に於いて具體的に如何なる事が起るかと言ふことを取り扱ふ學問は——その作用の强度が精確に知られて居る全く制限せられた少數の諸力の協働の結果を事實上取り扱ふ天文學の場合を除くならば——何らの確實な豫測をも爲すことを得ない。

ロシアの經驗によつて實に發展の上に新規の要素が加はつた。そしてそれはその發展の上に何等かの影響を及ぼさねばならぬ。擴張せられた國家社會主義の經驗の結果は、一定の時期が經過すれば、批判的試練の對象となるであらう。そしてこの試練の結果は、勞働者階級に於ける社會主義を憧憬れる意志にさへ決定的な影響を及ぼすであらう。此の經驗によつて社會經濟の社會主義的秩序が、之を長期に亘つて觀察すれば、果してヨリ勝れたるものであるかどうか、即ちアメリカが其の發展と作用とに於いて最も良い實例を示す處の、古き資本主義的秩序よりも、この新しい社會主義的秩序の方が大衆にとりヨリ滿足なものであるかどうかと言ふことが示されねばならぬであらう。そうして之によつて勞働運動の將來の方向が本質的に決定せられるであらう。

かくてマルクスの全發展學說はその因つて立つ根底を動かされた。此のマルクスの全發展學說のよつて立つ基礎となる事實は、空間的にも、(西ヨーロッパ)時間的にも(十九世紀の中頃、産業革命)制限せら

れたる經驗から成る事實であつた。故にそれから引き出された結論は普遍的の妥當性を要求することは出來ぬ。マルクス學說のよつて立つ基礎となる事實は、その制限せられて居る空間的範圍が世界經濟の關係の中の極めて小さい部分であればある程、即ちそれが特別な過渡的事情のために一時は絕大な役割を發展過程の中に演じ得たにすぎぬ小部分を占めれば占める程、愈々その普遍的妥當性が少くなるわけである。この時期は世界戰爭と共に過去のこととなつた。經濟及社會の發展は一部分西に一部分東に推移した。この發展は未來に於いて或は北米經濟團體が發達するか或はロシア經濟組織が發展するかにより、或は西に、或は東に推移するであらう。マルクスの缺點は彼が經濟的發展に對して間違つた豫測をしたことにあるのではなくて——彼はその時代の經驗を以てしては之より外の豫測をすることは出來なかつたのであるが——むしろ、彼が一般に、この經驗に立脚して未來に對する豫測をなし得ると考へた點にある。

社會主義的經濟秩序の可能性と合目的性（合理性）の問題に關連して、且ドイツに於ける文獻で激しい議論を引き起した重要な實際的問題は、社會主義的に統制せられた經濟組織に於ける合理的な經濟的評量、即ち價値評量の可能性の問題である。この問題は既に早くマックス・ウエーバーによつて社會經濟體系（G. D. S.）第三卷の中で取扱はれ、之が社會主義の中心問題であり、死活を制する問題であると言ふことが强調して論及せられて居る。故にこの問題は戰後當然に社會化の實際的試みと關連して、議論の中心に移つて行かねばならなかつた。しかしながらこの議論の歸結は、是迄は社會主義に有利ではない。何となれば、今迄は社會主義的經濟秩序を以て己が學說と任ずる人も、人々が如何にして貨幣による計算や、交換による評量がなくして、效用と費用とを相互比較し得るかと言ふことや、生產に於いて精確な計算と收穫の確定を期し、合理的な分配をつゞけ合理的に資本を維持し、之を合理的に增大してゆくことが出來るか、と言ふことについて、實際的に可能な方法を示し得た人は誰もないからである。マルクス學徒的に勞働價値說に從つて、社會的に必要な勞働時間によつて計量しようとするオットー・ライヒターがその『社會主義社會に於ける經濟的評量』（ウイーン、一九二三年）に於いて近頃なした古い試みの蒸しかへしは、何等問題の解決を意味するものでない。何となれば異種類の勞働時間の相互關係を決定する客觀的規準が未だ見出されないから。現代の經濟組織に於いて、種々の異なる勞働時間が各々互に一定の比例關係に立つて居ると言ふことは、全く、その異る勞働時間が一定の比例に於いて支拂はれて居ると言ふ事實に基礎を置くものであり、純然たる交換行程自身より發生した現象である、換言すれば、交易に於いてなされる勞働時間そのものの種々なる評價を直接表現せるものと言はねばならぬ。此の交換に於ける價値評價と言ふ事實がなければ、即ち社會主義的秩序に於いては、異なる種類の勞働を評價す可き客觀的規準は一つも存在しないであらうし、この評價は明かに、社

會主義的中央官廳の自由に委ねられるか、或は種々の勞働部門の間に於ける永久の論爭の對象となり、此れを調停す可き何等の客觀的な制限も存在しないであらう。斯樣な論爭は勿論今日の經濟組織に於いても存在する。併しながら今日の經濟組織は、異なる種類の勞働を評價する社會的に可能な客觀的規準をば、一方生產物が獲得し得る價格と言ふ形に於いて與へて居ると共に、他方客觀的な勞働市場の關係に於いても此れを與へて居る。

此の特殊問題は、マルシヤックの「經濟的評價と共同經濟組織」と言ふ論文の中で、最も徹底的に取り扱はれて居る（アルヒーフ、フユーアゾチアールウイッセンシヤフト、一九二四年收錄）又一方包括的な問題たる、個人主義的經濟秩序か、社會主義的經濟秩序か、と言ふ問題は、ミーゼス（『共同經濟』社會主義に關する研究、エーナ、一九二二年）及びハイマン（『餘剩價値及び共同經濟に關する諸研究』ベルリン、一九二二年）によつて最も深く研究せられた。此の場合、ミーゼスは主として個人主義的見地から、ハイマンは寧ろ社會主義的見地よりこの研究をなしたのである。

四

さて一方斯學に於いて斯樣な議論が醸されて居る間に、東方に於いては、工業的國家資本主義の新しい組織が（共產化した政治的國家形態の下に）建設せられ、西方に於いては、古い個人的資本主義の秩序が再生產せられた。此の事は、是等の秩序と關連した古い問題へ再び復歸することとなり、とりわけ（ドイツに於いては）先づ第一に變更せられた政治狀態と國家形態とに關連して、社會政策的諸問題が擡頭した。國家の勞働者に對する包括的な社會政策的施設は、ドイツに於いては、先に考察した樣に、戰前に於いては自明の事として考へられて居た。そして社會政策は單に程度の問題であり、國際的競爭に於ける經濟的條件の對等と言ふものが問題となつたにすぎず、決して社會政策自身の基礎を問題とするのではなかつた。社會政策的施設が如何なる範圍に於いて爲さる可きかと言ふことは、本質上政府に因つて決定せられ、政府は之を行ふに當つては、社會の平和と現存政治秩序の維持と言ふ點から見て利益であると考へられる程度に勞働者階級に經濟的滿足を與へると言ふ見地によつて指導せられると共に、他方ドイツ產業の國際的競爭能力と言ふ見解によつて指導せられた。此の種の社會政策は、ドイツ特有の產物であり、それはその基礎を一部分、實際的政治的考察の中に（人々は大衆に經濟的利益の滿足を與へることによつて、プロシヤに於ける選擧權や、國家統治權への參與等の如き、政治的權力を留保することが出來ると考へた）又一部を倫理的見地と政治的理想に對する抱負（國家の義務は弱者の保護者たることである等）の中に見出した。しかし今や戰後に於いて、勞働者階級自らが政權を獲得し得るに至るや、客觀的な公平な見地から社會政策の批

準を決定した超黨派的政府は最早存在しなくなり、勞働者階級自身の社會政策に對する要求がその規準となるに至つた。この事が社會政策の偏重となつたのは當然であつて、そこに一つの危機を孕み、社會政策の存在の基礎に對する諸問題が再び理論的に問題とせられなければならぬ必然性を與へた。是に於いて人々は、是迄の社會政策の學理的根據が、何等明瞭な決定的なものでないことを知り、更に又吾人は斯樣な社會政策の根據よりしては、何等具體的な社會政策の合目的な規準を導き得ず、殊に社會政策的施設の程度に關して、解決を引き出し得るものでないと言ふことを知つた。ドイツに於ける戰前の社會政策の基礎は、當時の經濟學の全性質に照應して、それ自身本質的に倫理的性質のものであつた。倫理的見地が超個人的な客觀性と言ふ最も必要な要素を缺いて居り、寧ろ主觀的な制限を受け、從つて又個人個人によつて種々變化するものであつて、それはむしろ考へ方の相異をあらはしたものであると言ふことは度外視するとしても、斯樣な倫理的見地は、具體的な社會政策の範圍と限界とに對し、何等據り所を與へ得ないと言ふことは、實に社會政策の倫理的根據の重要な缺點なのである。そしてこの規準を與へることこそ、吾々が今や必然的に要求する所のものなのである。然るにドイツに於いて戰後主として勞働黨によつて決定せられた具體的の社會政策の範圍に就いて見るに、吾人は、斯樣な程度を過した社會政策は、規準となる永い總てを消耗した戰爭によつて疲弊し、不幸な支出によつて殆んど凡ての外部よりの補助の源泉を奪はれたドイツの國民經濟にとつて、堪へ得られないものであると言ひ得るに過ぎない。斯樣な純然たる消極的主張に人々が滿足し得なかつたのは勿論のことであつて、それは次の如き更に進んだ主張によつて補はれたと言ふことも、更に亦當然のことであつた。即ちその主張と言ふのは、その經濟組織を根本から新しく復興しなければならず、而かも之を最も不利益な外的條件の下になさねばならない國に於いて、殊に數十億の額に上る戰時賠償金を負擔させられて居るが如き國に於いては、一般に社會政策と言ふ如きものは行ふを得ない、と言ふのである。

斯樣にして、實践的な社會政策を過度に重んずる一極端に對して、社會政策的活動の合目的性を全然否定する一極端が理論的に對立し、之は當然に、社會政策の存在に關する諸問題即ち、社會政策の本質は何であるか、科學の任務は之に對して何をあらはすか、一言にして言へば、社會政策の概念、その經濟生活、社會生活に對する作用と意味等に關する諸問題や、社會生活の本質より生れるその規準と限界に就いての諸問題を提出することとなつたのである。これらの諸問題は主として、ヘルクナー、ブレンターノ、フオン・ツヴイードネック、ハイマン、ブリーフス、マール、ハイデ、等や其の他の多くの少壯學者の加入して居るドイツの專門雜誌に於いて、非常に深い大部分明敏な研究を遂げられた。(ゾチアーレプラークシイス、シユモーラースヤールブーフ、ケルーナーフイアテルヤールシユリフト等)。この結果は、社

會政策の諸問題を、倫理的見解や、價値判斷と言ふ如き見地からするよりも、寧ろ、主として社會的合目的性と言ふ見地より取り扱ふこととなつたのである。この見解に從へば、社會政策は、政治的規準の特殊の一國と考へられ、それは社會並に社會秩序の存在を脅す處の社會内の軋轢と對立とを、或は鎭め、或は除去する事を任務とする。故にこの考へ方によれば、社會政策は、その特殊の目的を充す限り、元來貧窮な國、或は貧窮になつた國に於いても矢張り、必然なものとして、正しいものとして認められねばならぬ。換言すれば、社會的關係や社會的秩序を事實上脅威する、何等かの主として經濟的狀態に原因する社會、軋轢や對立が存在する限り、そして之を矯正することによつて、例へば生産力の減退とか、結局勞働時間を短縮して、國民經濟の國際的競爭能力を減損する等の反對の結果を起さない限り、社會政策は如何に貧窮な國又は貧窮した國に於いても當然のこととして、正しいものとして認められなければならないのである。

五

さて、社會化と社會政策と言ふ二つの問題が混合して、特にドイツの經濟學者が興味を持ち、之に從事する對象を構成したとすれば、戰爭が伴つた實際的の經濟狀態及び社會狀態から發生した更に第三の問題が、外國に於いても、――殊に英國に於いて――經濟學に於ける特殊の注目を引く對象となり、深い研究の目標となつた。此の問題はインフレーションとデイフレーションと言ふ戰後の特殊の通貨政策に關する諸問題と、之に關連した貨幣學說上の諸問題殊に、貨幣價値及び爲替相場決定の基礎に關する問題、金が貨幣の作用に對して持つ意味、殊に數量說に對して持つ意味、等々である。

戰前に於ける貨幣論發達の特徴は、主として貨幣價値の決定に關する數量說の見解を排除し、完全な金本位制度を可とする說、即ち純然たる金本位制度が、理論的見地より見て、貨幣組織の最も完備した形態をあらはすもので、他の本位制度は凡て、之に比して、ヨリ劣つた制度であると見做す見解に反對してゐたことであつた。斯樣な見解の經驗した變遷はクナップの『貨幣國定學說』の中に極端に表現せられて居る。それは一般に金の持つ貨幣の本質的意味を否定し、貨幣價値の問題を、貨幣理論から完全に除くこととなつた。貨幣數量說の新しい建設と基礎づけを其の內容として『貨幣の購買力』を論じたアーヴイングフイッシャーの著書が、正に數量說を執ると言ふ理由からして、何等ヨリよき待遇を受け得なかつたと言ふことは、この貨幣數量說の地位を顯著に示すものであらう。貨幣論に於ける反數量說的、反金屬說的傾向は、戰時中殊にドイツに於いて愈々強くなり、廣く流布せられるに至つた。しかしてこの戰爭こそ凡ての國家をして、貨幣と金との關連を廢止せしめ、戰爭の惹起した緊急の必要を充たすために、インフレーションを利用せざるを得ざらしめたのである。斯樣な理論的

見解は、ドイツに於いては『金の玉座よりの追放』―リーフマン、ダルベルグ―と言ふ通貨政策の要求に墮落した。しかし、次に戰後になつて、通貨の膨脹によつて荒廢した結果が眼前に現はれて來ると、再び反動は前と反對の方向に向つて起らねばならなかつたのは當然の事であつた。數量説は、目覺ましく再びその基礎を獲得したのみならず、凡んど公理と考へられ、貨幣と金との結合が、本質的に必然性を有する現象と見做されない迄も、實踐的、技術的の必然性を有するものと考へられ、之によつてのみ、支拂ひ手段としての、計算手段としての貨幣の作用が、故障なしに確保せられ得るものであるとせられた。

インフレーションと言ふ現象が教へた第一の事實は、貨幣が價値の尺度として、價値の保有手段として、價値移轉の手段として、經濟組織に對して持つ大きな意味であつた。靜態的經濟狀態に於いては、この作用はあまり表面にあらはれない。さればこのことから、斯樣な靜態的時期に於ける貨幣論は、主として、交換手段と支拂手段としての作用を取り扱ふものであると言ふことが説明せられる。このことによつてクナップの解釋たる、貨幣の本質はその支拂手段としての作用に存在し、交換手段としての作用を問題とする場合には、貨幣には、何ら一般的價格問題と異る問題が起り得ないと言ふ、見解が可能となる。故に、クナップの貨幣論は元來單に、貨幣の支拂手段としての作用の學説にすぎない。さてインフレーションの現象は、突然人々の注意を、貨幣の他の二つの作用に向けた。即ち一方その價値尺度としての、又價値保有者としての性質と、他方經濟的計算手段、資本の移轉手段としての作用の上に。同時に之によつて、貨幣に就いて最も重要なのは、その價値であり、以上の諸作用を完全に充たす爲めの缺く可からざる條件は、貨幣が價値として安定して居ることであると言ふことが示された。故に貨幣國定學説がかつて知らなかつた問題が、是に於いて、再び貨幣論の中心にあらはれたわけである。

更に、インフレーションによつて明かになつたことは、貨幣の價値が如何なる場合においても一の重要な要因としてその數量に依存すると云ふこと、從つて貨幣の數量は如何なる場合においても貨幣價値に對し一の重要な決定原因をなすものであることである。インフレーションが始まつた當初においては、右の所説は非常に論難され、物價騰貴は結局、當時同時に生じた商品の欠乏に依るものとされた。併しながら物價騰貴は戰後において而も生産が再び增加した時期においても依然として繼續したので、貨幣の數量の增加が物價騰貴の主なる原因であると云ふ先の所論は何人にも認められるに到つた。かくて問題は進展して、貨幣の數量の增加と物價水準との間には如何なる關係があるか、特に、貨幣の數量の增加が直接に物價水準に影響するか、或は間接に爲替相場によつて、即ち直接には爲替相場が貨幣の數量の增加に影響されて――例へば增加した貨幣の數量が直接に爲替市場に殺到するか、或は信用が低下した結果として外國人で我國の貨幣若くは貨幣債權を所有するものが、この權利の履行を要求するかによつて―

—第二次的に物價水準が影響を蒙るかが論議されるに到つた。そしてこれに關聯して實際界殊に發券業務の實際界において、なほ稀に學界においても、次の如き意見が非常に廣く行はれた、即ち貨幣の數量の增加は物價騰貴の原因でなくて、却つてその結果であり、そして物價騰貴は主として爲替相場の騰貴に依るとの意見が行はれた。

事實において屢〻貨幣の數量の增加とは獨立に爲替相場の騰貴があり、それが輸入品の物價を高めそしてその結果として物價の騰貴を齎らしたことがあるから、その限りにおいては右の意見は實際の事情に根據を有すると云ひうる、發券銀行は、かくの如き場合には貨幣の流通を擴大し、かくて生產及び商業に必要な手段を供給し、それによつて價格が騰貴した財貨（原料）の販賣及び調達を容易ならしめねばならぬと考へた。併しながらこの貨幣數量の增加が高い價格での販賣を可能ならしめ、かくて物價水準の高昇を事實において維持するための豫件をなしてゐるのだから理論的にはかくの如き貨幣數量の增加を以つて只管に爲替相場の騰貴及びこれを關聯する物價騰貴の必然的結果と見做すことは出來ない。

もしも內國の貨幣數量の增加によつて可能にされなかつたならば、騰貴した爲替相場は物價に對し長きに亘つて影響することは全然無かつたであらう。むしろ却つて外國品購入の減少を來し、かくて再びその結果として爲替相場の復活を來したであらう。

貨幣の數量の增加が直接に內國の物價水準に作用し、かくて貨幣の購買力の減少を來すか、或は間接に爲替相場を通じて始めて作用するかの問題を解決することは稍困難であるかに見える。古い貨幣數量說は一般に貨幣の數量をば直接に物價に關聯せしめ、爲替相場は全く考察の外におくか、或はその變動を以つて單に內國の物價水準變動の隨伴現象と見るに過ぎなかつた。然るに貨幣の數量が增加した結果起つたことは、先づ第一に爲替相場の騰貴であり、內國における物價水準の高昇は其の後に到つて初めて生じたこと、かくて爲替相場の騰貴が物價水準の高昇に先行すると云ふことが極めて明瞭となつた。そしてこれに對する說明は、新に作出された貨幣の數量が先づ第一にその大部分は爲替市場に注がれると云ふこと、換言すれば、貨幣をば外國有價證券に投資するか或は原料の輸入に使用せんとする人々の手に入ると云ふことに求めることが出來る。このことは云ふまでもなく、古い數量說が貨幣數量、爲替相場及び物價水準相互間の關係を說明して、爲替相場は一方的に物價水準に依存し、物價水準は又一方的に貨幣數量に依存するとなす限り、それが誤りであることを示すものであり、更にこれらの依存關係は概して一方的な因果關係と解さるべきではなくて、單に函數的依存關係と見做さるべきであり、依存關係の因果の方向は不明であると云ふことを示すものである。要するに爲替相場の變動は物價水準の變動の結果でもあり得るし、又原因でもあり得るが何れにしても貨幣數量が增加した結果である。理論的に云へば吾々は貨幣數量と物價との間の關係を問題とする方式の中には、單に物價及

び商品數量のみならず、發賣された爲替の價格及び數量をも取入れねばならない。

戰前において貨幣數量說に對する反對の氣分が一般に漲つてゐたのは主として、人々が數量說の方式の改良及び的確な解釋と云ふことよりば寧ろ却つてその反駁を事としてゐたことに起因する。然も事實不完全な方式だつたのでかゝる排擊は難事ではなかつたのである。實際古い數量說はミル以來既に、貨幣の存在量の外に、その流通速度及び信用も亦貨幣價値に對し一の重要な役割を演ずることを認めてゐる。併しながら一般には、流通速度も、信用擴張の程度も一國民經濟にあつては與へられた大いさであり、又は貨幣の存在量に對し一定の關係に立つ大いさであり、從つて貨幣の數量から離れては貨幣價値を決定し得ず、貨幣價値の變動はすべて貨幣數量の變化によつて說明され得るものと考へられて來た。然るにヨーロパ諸國特にドイツ及びオーストリヤにおける戰後のインフレーションは、かゝる見解と直接に矛盾するやうな多くの事實を提示した。貨幣價値は時には貨幣數量の增加に相應するよりも遙かに大なる割合で、下落した、そして更に、貨幣數量の增加が起つたのに同時に貨幣價値の騰貴即ち物價下落が起り得るし、又反對に貨幣數量の減少（デフレーション）が起つたのに同時に貨幣價値の下落即ち物價騰貴が起り得ることすら明かになつた。これによつて流通速度又は信用擴張の程度は貨幣數量とは獨立にそしてそれと反對の方向に變化したに相違ないことが明かである。それ故此の兩者は流通する貨幣數量からは獨立した役割を演ずるものと云はねばならぬ。

貨幣の存在量とは獨立に、云はば信用インフレーションが存在し得ると云ふことは既に早くから認められてゐる。今日においてはこの見解は、信用制限が單に一時的だけでなく長きに亘つて物價を低下せしめる效果があると云ふ經驗によつて、新に完全なものとされ更に明確なものとなつた。信用の擴張が貨幣價値及び物價水準に對して演ずる役割はこれによつて以前よりも遙に明瞭になつた、かゝる認識の結果として、物價水準の意識なる統制及び繼續的安定を目的とし（フイツシヤー、ケーンズ）そしてその結果としてそれによつて景氣の變動を除去し恐慌の消滅を來すべき新しき貨幣制度を建設せんとする企圖がなされるに到つた。かくの如き貨幣制度が實際において行はれ得るや否やは、今日においてはこの方面における研究が充分になされてゐないから、未だ確言するを得ない。さはれ實際の幣制政策家は、常に以前の金本位に復歸することを以つて、又はこれに復歸することを意圖しそれがために準備することを以つて、簡單にして且つ確實なる方策なりと考へてゐる。

すべてこれらの新しい經驗及び認識は主としてカッセル、ケーンズ及びホウトリ等により、これまでの所たゞきれぐ\に且つ連絡なしに考察され、學問的方式化を施されたに過ぎない。これらの新しい見解からする貨幣理論の系統的に總括的な解釋論述に到つては、特に數量

說の方式を更新しそれによつてすべてこれらの新しい認識を言ひ表はす點に到つては、從來何等なさるゝ所がなかつた。

貨幣制度の技術的見地から見ての貨幣と金との關係に關する問題は**從來、理論によつてと云ふよりは寧ろ現實の貨幣制度運用の實際によ**つて決定され、金屬主義的な方向に向いて居た。理論の領域においては此の問題に關しなほ多くの學說が對立してゐる、例へば、それは金本位に關するケーンズとカッセルの對立的地位がよく之を物語つてゐる。ケーンズは金本位制、少くとも古き形態における金本位制は既に廢れたものと看做しそして『調節された』即ち人爲的に管理された貨幣本位を以つて唯一の合目的な貨幣制度と考へてゐる。アメリカにおけるアーヴイング、フイッシャー亦此見地を支持してゐる。之に反してカッセルは金本位制は大體戰前におけると同じ形態においてなほ存在し、國民經濟及び世界經濟の將來にとつても亦最もよくその任務を果し得ると考へてゐる。合目的的な幣制如何に關する右の如き意見の相異は、金生產の發展に對する見解の相違に基くものである。一方においてカッセルは金生產が大體において、金の需要に適應する限界內に止つてゐると考ふるに反し、他方においてケーンズは將來における金の供給はその需要を非常に超過し、かくて金の價値の從つて貨幣價値の暴落を來すこと恰も前世紀の七十年代における銀及銀貨の場合における如きものであるであろうと信じてゐる。かくの如き懸念は先づ第一に、世界の金の現在量は現在の需要を遙かに超過しそして現在の規模において金が今後も引續き生產されるならば金存在量と金需要量との不均衡を更にますます大ならしめざるを得ないと云ふ事實と一致する、併しながら右の場合には、金本位制への復歸が一般に行はれるに**到るならば、金の需要は極めて高い程度において增大し、かくてカ**ッセルが考へてゐるやうに金の稀少と云ふことすら生じ得るであらうと云ふことが考察されてゐない。これは主に金本位制への復歸が如何程まで本位貨としての金と再び結び付くかと云ふことに懸つてゐる。現にドイツの金本位制への復歸が明かに示したやうに、金貨の流通しない場合においてもかくの如き貨幣政策は本位貨として非常に巨額の金を必要とするかも知れぬ蓋し今日においては巨額な金の保有と云ふことが戰前におけるよりもヨリ甚だしく貨幣行政にとり重要な意義を有してゐるのだから。

金本位制への復歸に對し背つて向けられた他の反對は要するに、かくの如き貨幣本位政策によつてはたゞ米國の他の諸國民經濟に對する金融的支配が强固になるのみ、蓋し米國は巨額の金を保有することによつて隨時金の價値を決定し得るから、と云ふのである。併しながらかゝる見解は、アメリカが金の價値を低落せしめることは何等その利益となるものでなく、却つて世界の金存在量の大部分の所有者として並びにヨーロッパ諸國に對する貨幣債權の所有者として、金の價値を安定せしめることこそ米國の利益であると云ふ點を考量してゐない。それ故金の價値が近き將來において甚だしい低落を蒙るであらう

と危惧することには根據がないと云ひ得る。勿論ヨーロッパ諸國が相率いて金本位制に復歸するといふことはアメリカに對するヨーロッパ諸國の債務の增加を意味するであらう。併しながら今やヨーロッパにおける經濟的に有力な諸國、イギリスドイツ等が既に金本位制に復歸してゐるのだから、他の諸國にとつては、國際資本市場に參加せんとする限り、前者の例に從ふ以外に方法はないであらう。從つて數年ならずして、經濟上有力な諸國の爲替關係は戰前の夫と甚だしく異ならないに到るであらう。たゞ唯一の重要な差異は恐らくは金貨が流通しないで、金はたゞ退藏貨幣として發券銀行に保有され、銀行は以前と同じやうにこれを基礎として銀行券の流通及び爲替相場を統制すると云ふ點に存するであらう。

六

此の問題と關連して、アメリカにおいて近時特に注目を惹き、科學的研究の對象となつた問題がある。元來ケーンズ、フイッシャーの提案する調節された通貨は景氣變動の統制と阻止並びに恐慌の排除とを目的とする手段として考案されたのである。景氣變動並に恐慌の問題はかくて論議の中心となつて來た。戰前において既に、從來の景氣及び恐慌の經驗の總括でもあり且つアメリカにおける景氣變動の研究の礎石ともなつたミチエルの著 Business Cycles（ビヂネス・サイクルズ）（一九一三年）が現はれた。アメリカにおいては戰時及び戰後に景氣變動の現象が特に顯著に現はれた、かくて何人も容易に理解し得るやうに、戰後におけるアメリカの經濟學は專ら景氣及び恐慌の問題を研究の主題目となすに到つた。この研究にあつては、景氣變動の道程を豫見し得、それを統制し且つその作用を弱め得るが如き手段を發見せんとする實際上の目的が重要な役割を演じてゐる。フイッシャー及びケーンズの提案する調節された通貨は專らかくの如き手段として提出されたのである。

このことは亦アメリカにおいて行はれてゐる恐慌理論も關聯する。アメリカにおける恐慌の研究は主として具體的な事實の研究であり、ミチエルの書と雖も亦景氣現象の『記述的分析』たらんとするに過ぎないけれども、併しながら是等の研究の背後には一定の理論的見解が即ち、信用の擴張と流通貨幣の增加とを以つて景氣變動及び恐慌の一般的原因なりとする見解が橫たはつてゐる。かゝる見地からすれば、景氣變動の克服及び恐慌排除の主要手段は貨幣の流通の統制であるとの結論に到達するのは當然である。然るに純粹の金本位制にあつては貨幣の流通の統制は不可ではない。このことからして、貨幣制度を變改して、調節された通貨たらしめることのみが景氣變動を統制し、經濟界の循環行程から恐慌を排除し得るとの結論に達する。

景氣變動並びに恐慌が貨幣市場の情勢及び貨幣流通に起る變動によつて惹起せられると考へる理論的見解は、アメリカ人が自國における恐慌現象から得た特殊な經驗に基いてゐる。アメリカ國民經濟におけ

る恐慌は殆んどすべてが『貨幣恐慌』及び『信用恐慌』であつて、これは今世紀の初頭十年まで存在した不完全な銀行制度と關聯してゐる之に反してヨーロッパにおける恐慌の大都分は生產の領域にその源を發してゐる、かくて吾々はヨーロッパの經濟學の恐慌理論は生產過剩說か、消費過小說であるかを常とする所以を理解し得る。ヨーロッパにおいて景氣變動の研究は主としてカッセル、シュンペーター、スピートホフ、及びレーデラーによつて進歩せしめられた。これらの理論的統計的新研究の到達した結論は、景氣變動及び恐慌の原因は生產と消費との不均衡の中にではなく、寧ろ種々の生產部門間の不均衡中に見出すべしと云ふにある。

七

景氣並に恐慌及び兩者の克服の問題と關聯して、戰後においても依然として重要な研究の對象となつてゐる問題がある。農業及び工業における生產組織の問題これである。農業の生產組織は戰前既にヨーロッパ諸國において經濟的にも社會的にも不充分なものとされてゐた英國においても、中部ヨーロッパの東部地方においても、當時の土地所有の分配狀態即ち大土地所有が多く存したこと及び自作農の欠乏してゐることは經濟的社會的に有害なものと考へられ、そして所有關係及び經濟事情の改良が企てられた。戰後に到り多くの國々において、特にルーマニヤ及びチェッコスロヴァキヤにおいては大規模にかくの如き改良が行はれた。かくて農業における生產組織の最も重要な問題が解決せられ、而もそれは既に戰前において學界において旺んだつた自作農を以つて有利なりとする見解と完全に一致したものであり、かくて更に、もし除去されなかつたならば資本主義的經濟制度の再開に少からざる難關を形成したかも知れない社會不安の一源泉を閉塞したのである。

併しながら近代工業における生產組織の問題は遙かにヨリ複雜であり、ヨリ困難である。戰後の經濟界の發展特にインフレーションを起した諸國のそれは、カルテル及びトラスト的な古い『水平的』な企業合同組織に對して『垂直的』合同と云はれる新しい企業合同の形態を著しく發達せしめた。カルテル及びトラストが同一種類の企業をばヨリ高度の組織體にまで結合せしめるに反して、この新しき合同にあつては異種の產業部門が相互に補足し合つて一の新しき一體となるものである。一時は、企業合同のこの新しき形態は古きものに代位し、それを押し除けて了うかに思はれた。併しながら事實の進展はこれと反對の道行を示した。經濟的政治的諸關係の安定すると共にヨーロッパでは再びカルテル化トラスト化の傾向が前面に現はれるに到つた。かくて戰前、先進工業諸國家において重要な役割を演じた問題はすべて再び展開され、就中カルテル及びトラストの成立及び活動の國家による統制と監督の問題が論議されるに到つた。この問題に關しては戰前

に比して本質的に見解が變化したことを確言することが出來る。戰爭勃發までは人々はカルテル及びトラストの成立に對し一般に敵對の態度をとり、それを阻止せんと力めた。然るに戰時經濟において人々がかくの如き結合體を生産統制のために利用することの有意義なことを理解して以來、これらの組織に對する反對的態度はカルテル及びトラスト形成の積極的促進の態度にまで轉向して來た、勿論その際國家はこれらの組織の成立及び行動に對し重要な作用を及ぼし得る權限を留保しようと欲してゐる。經濟政策的に云つてかゝる態度は、近代資本主義經濟の强力な發展傾向に對抗せんとして何等の定見なしに之を阻止せんとする計劃に比すればヨリ合理的である。特にこの發展において意義深きものは、最近ヨーロッパにおいて試みられた純粹に一國的なものゝ代りに國際的企業結合を成立せしめんとする計劃である。かゝる發展が將來の生産組織に對し如何なる意義を有するかは今日なほ推測し得ない。時は今日までの所あまりに短く、經驗も亦あまりに少なく、從つて學問的に近代生産組織の發展の最近の段階にまで突き進んで研究するを得なかつた。人々は、これらのものゝ中に、資本家的經濟秩序において激しい景氣變動及び恐慌を排除するに到る經濟的必然性を見出さんとしてゐる。

　このことからして更に、マルクス主義的發展理論に對する批判の箭が向けられる。マルクス主義的發展理論の主要欠陷の一は、資本主義的經濟秩序における恐慌は生産組織の成長と共にます〳〵頻繁且つ激烈となると云ひ、そして終に、資本主義的經濟秩序の沒落とはかくの如き恐慌的瓦壞以外の何物をも意味しないと主張する點に存在する。然るに經驗の示す所に從へば、恐慌は寧ろ資本主義の小兒病と看做され、そして資本主義的發展はその進行を續けてゐる中に、この小兒病を克服する手段を呼び起してゐる。カルテル及びトラストによる生産の統制、銀行による信用統制は少くも異常なる景氣の變動及び全經濟領域の恐慌による破滅をば阻止せんとする好適の手段をなしてゐる。これらの組織が如何程までに私經濟的利益に奉仕するか、或は國民經濟全體のために奉仕するかは又一の問題であるが、その解決は主として公權力のこれらの組織に對する態度如何にかゝつてゐる。とまれ政治の動きは常に權力の民主化と云ふ方向に進んだゐるから、私經濟的利益が終局において國民經濟の利益を支配するに到るであらうとは考へられない。

八

最後に、實際的にも理論的にも重要な領域たる外國貿易の領域においては何等本質的變化が生じてゐない。理論は、今まで常に此領域においてはさうであつたやうに、今日も依然として自由貿易主義的であるが、殆んどすべての國々の商業政策の實際においては、保護貿易主義的傾向が寧ろ强められてゐる。然も注目すべきことは、戰前フリ

ドリヒ・リストの傳統に從つて保護貿易主義的見解を採つてゐたドイツ經濟學者の多數が、戰後かゝる見解を捨て、そして國際貿易關係の自由貿易主義整理こそ人類の財貨調達における進步を促進する合目的的な手段なりと宣言したことである。實際において戰後、世界經濟の完全な新建設が問題となつてゐた當時こそ、商業政策をば自由貿易主義的に改良する絶好の機會だつたであらう。併しながらこれは、たゞに國際的資本移動の自由のみならず、國際的人間移動の自由をも前提としてゐたのである。然も保護關稅政策が經濟的に有害であることはすべての理論が殆んど萬場一致的に認めてゐるのに、之に反して各國が高率の保護關稅政策を固執してゐると云ふことは、高率保護關稅政策の實際的根據が經濟的以外の、一般に云へば政治的な根據（戰爭の場合における經濟的自律）であることを證明してゐる。このことは同時に、世界の政治的平和が經濟の進步に對し如何に重大であるかを示すものである、蓋しかゝる進步はたゞ絶えず進展して行く國際分業の中にのみ存するのだから。

九

以上數項に亘り述べ來つた所を概觀すれば、今世紀以來二十年間ヨーロッパ及びアメリカで國民經濟學の對象として特に注目を惹いた一列の問題群が吾々の面前に現はれて來る、併しながらそこには斯學の發展を特徵づけるやうな何等の一般的な明確な傾向又は流れといふものはない。然らばヨーロッパ及びアメリカの經濟學の近時の發展において、廣い大きい流れとも云ふべきものには何んなものがあるであらうか？勿論かゝる意味での諸傾向が全然ないとは云へぬ。併しながらそれらのものは、戰爭及びその清算にあたり提出された多種多樣の現實の問題を考慮するならば、然かく明かに觀取し得るものでもなく、況んや斯學發展の像を作り得るものではないことが知られるであらう。

それはともかく、斯學の一般的發展方向は、ヨーロッパ及びアメリカの現代の經濟學の特徵に着目することにより、二つに別けて論じ得られるであらう。第一は理論的興味の復活であり、第二は理論と實際とを緊密に結合せんとする試み、即ち理論に一の現實的樣相を與へ、かくてそれを出來る丈廣汎な事實の基礎の上に建設し、以つて他の具體的諸事實の說明に役立たしめんとする傾向之である。戰前の十年間理論的研究が經濟現象の歷史的觀察によつて殆んど全く押込められてゐたドイツにおいて、第一の發展傾向が最も明瞭に現はれて來たことは當然である。最近十年間において價格及び所得問題解決の多くの新しい試み（オッペンハイマー、リーフマン、エングレンダー）がなされたのはドイツにおいてである、カッセルの著『理論的社會經濟』が經濟學史上において一の理論的著作が稀にしか與へられない程の成效を收め得たのはドイツにおいてである。そして是等の著作に關連して

專門雜誌において理論的問題についての廣汎な論議がなされるのはドイツにおいてゞある。かゝる論議の示す所は、カッセルの體系が比較的に最も深き根基を有し、そして反駁される所最も少きに反し、リーフマン及びオッペンハイマーの體系は理論の出發點において、又系統的構成において弱點を曝露し、それがその思考過程をば維持し得ざるものとして示してゐること、更に新しい價格理論を建設せんとするエングレンダーの試みが未だ不完全にしか遂行されてゐないと云ふこと、從つて終局的判斷はなほ未だ不可能であること等である。最新の理論的系統的著作としては現チエッコスロヴァキア共和國大藏大臣カール・エングリスの著『國民經濟學』がある、本書は最近ドイツ語で著はされたもので、完全に新しい且つ統一的見地から經濟學の全問題を餘す所なく取扱つてゐる。

經濟學の他の發展傾向たる事實的研究と理論的討究とを結合せんとする試みは、時にアメリカ及び最も濃厚にスウエーデンの經濟學に現はれてゐる。この傾向の特徴を示すものとしてはアメリカでは若きクラークの名著 Economics of Overhead Cost と、スウエーデンではバッグの賃銀論に關する研究（團體契約による賃銀の規整等）がある。なほ此種研究でスウエーデン語で書かれたものが多い、これらは、一旦世界語に飜譯されたならば、經濟學の今後の發展に對し大いなる意義を有するに到るであらう。蓋しスウエーデンの經濟學者には、かの地にあつて常に、嚴格な理論的訓練と傳統とを享有してゐると云ふ優越さがある。

經濟學研究のかゝる新しき發展は方法論の問題をも再び新しき形で復活せしめた。

ドイツでは前世紀の後半において、主として自然法的觀念に影響され指導された古典派の國民經濟的事實の考へ方及び說明方法に對する反動が起つたが、それは延いて、主として歷史に目を注いだところの、そして後には同時に倫理的觀念によつて影響されたところの考察方法を導出するに到つた。考察方法のかゝる轉向は前世紀の八十年代において、最初の方法論の論爭を惹起した。併しながら二十世紀の初においては、歷史及び倫理學派は經濟現象の充分なる說明をなし得るものでないと云ふことが明かになつてゐた。かくて方法論の問題提起に對する新しい刺戟が與へられた。そして極めて複雜且つ多樣な經濟現象を觀察するために、古典派並に歷史的倫理派の見地とは異なる新しい一般的見地を獲得し、そしてこれによつて經濟現象を新しき光の下に現はれしめて、その相關々係を一層充分に說明し得るやうにしやうとの努力が專らなされた。ドイツでは主にスパン、ゴットル、及びシユトルツマンが此傾向にあつて研究したが、今後の研究に對して方向を與へるやうな影響を及ぼし得ないでゐる。アメリカではヴエブレン、コモンズ、及びミチエルの名と結びついてゐる新しい方法論的思想が一の學派を作り、通常、制度派（インステチユーショナリズム）と呼ばれてゐる。此學派は經濟生活の形成に對して有する經濟制度の意義を主として

考察し、そして經濟生活の形成をばこれらの制度に對する依存關係において理解せんと力め、そして經濟事實の變化をばこれらの制度の變化から説明せんと力めてゐる。『制度』とは、此派の解釋する所によれば、人間の經濟行爲を、更にその結果たる行爲の形式をも一般に規定するところの法律的、社會的、敎化的(學校)技術的及び心的狀態を云ふのである。かくてこれらの諸條件及びその變化、そして經濟世界の形成に對するその意義が主として注目の焦點となる。かくの如き考へ方は、既にドイツの歴史派の頭にも浮んでゐたが、彼等はそれを明瞭に一般的に表現し得なかつたのだ。

かゝる見地が經濟學の研究に對し時に有效に作用し、そして貴重な結果を生み得ると云ふことは疑を容れない。併しながら、この見地の一面的高調に伴つて、他の同様に重要な諸見地及び研究方法が等閑に附されること、例へば甞つてドイツにおける歴史的見地の高調の場合の如きものがあり得ると云ふ危險が存在する。事實アメリカには、この見地をば『主導的』なものとなし、そして他の諸見地を輕んずる傾向が強く現はれてゐる。併し事實はかうなのだ。經濟現象は非常に多面多様であり、從つてもし完全な充分な認識に到達せんとするならば吾々は研究するにあたり種々の見地を以つて之に向ひ、これを種々の見地から觀察し研究せねばならぬ、而ももし吾々の得んと欲する認識を得たいならば、これらの見地はすべて方法的には完全に同權であり、決して一を捨て他を採りその間に優劣の差を設くべきでない。云ふまでもなく經濟現象全體の複雜な形態と制約との認識こそ、吾々をしてその今後の發展に對し經濟政策的手段によつて、將來の吾々の經濟目的を益々完全に到達せしめるやうな影響を與へしめるものである。

臨時議會とその使命

山川均

(一)

憲政會内閣は震災手形損失補償といふ名目で、結局は國民から二億七千萬圓の金を取り上げて臺灣銀行、朝鮮銀行、鈴木商店などに與れてやる法案を、五十二議會に提出した。政府の標榜するところが財界の救済であつて、決して一特殊銀行や一政商の救済でなかつたことは無論である。それほどに今日の資本主義的國民經濟は、少數の大資本の利害と絡らみ合つてゐる。少數財閥の破綻は財界全體の破綻を意味し、從つて財界を救済するといふ名目はいつでも少數財閥を救済する目的に役立つものである。であるから憲政會内閣が、一特殊銀行と一政商とを救済することが眞實の目的だとは云はないで、ひたすらに財界の救済を目的とするやうな顔付きをしてこの法案を議會に提出したことは、決して不正直なことではない。

この法案が憲政會内閣にとつて如何に重大なものであつたかは、政府があらゆる代價を拂つて五十二議會の解散を避けたのも、ひとへにこの法案を成立せしめるためだつたとまで噂されてゐる一事によつても知ることができる。

この大事な法案は、圖らずも豫算委員會において、暗礁に乘り上げた。委員會の雲行きが怪しくなると、突如として憲本聯盟が出現した。憲本聯盟が、この二億七千萬圓を直接の動力として促進せられたことは、周知の事柄であつて、これはブルジョア政黨の離合集散が、いかなる勢力をめぐつて行はれてゐるかを明らかに見せしめた。それにも拘らず、この法案は五十二議會の本會議において、八回の記名投票のやり直ほしをした揚げ句、やつとのことで通過した。かうしてその大任と使命を果たしてしまつた若槻首相は、これを思ひ出に、然るべき時機において『最善の考慮』をする筈であつた。

しかし若槻内閣には、もう一つ仕事が殘つてゐた。若槻内閣に財界の下水溜めに蓋をしておいたまゝ、震手補償法の肥柄杓でもつて、そつと汲み取らうといふ方寸であつた。しかし肥柄杓を差し込むためには、いやでも應でも、幾らか臭い物の蓋を取らねばならなかつた。そこで財界は極度に神經的となつた。大銀行は續々、臺銀コールの回收をし始めた。日本銀行は最早やこの上、臺灣銀行の援助が出來なくなつた。この形勢に周章狼狽した若槻内閣の唯の窮策が、日本銀行をして無擔保で臺銀に特別融通をさせ、これに對して、政府は二億圓ま

では、日銀の損失を補償するといふ、例の緊急勅令案であつた。断わつておくが、この二億圓は政府が補償するのであるが、もちろん何らかの方法で、結局は國民の財布の金で、補償するのである。またこの勅令は、日銀の損失を補償する緊急勅令だが、究極は臺灣銀行を救済するための緊急勅令であつて、もつと率直に、金二億圓に熨斗をつけて臺銀に進上する緊急勅令と云つてもよい。

これで國民の懐から取り出す金が都合四億七千萬圓、若槻内閣は財閥救濟の目的を完成する筈であつたが、これは見すく若槻内閣の手に歸せしめるには、あまりに大きな功績であつた。いはんやこれで財界が安定し、若槻首相が無傷のまゝで、然るべき時機に『最善の考慮』をしたならば、次の政權の行く方はほゞ想像することができる。これはもちろん政友會の忍びないことだつた。かうした場合に最も役に立つ重寶な機關である研究會と貴族院は、いまは憲本聯盟のものである。そこで政友會は、貴族院よりももつと上層の勢力に目を附けた。

若槻内閣の緊急勅令案が、憲法第八條、第七十條に反してゐたか反してゐなかつたかは、おのづから別問題である。たゞ樞密院がこの勅令案を否決した名目上の理由が、憲法の擁護にあつたと同時に、その眞實の目的が、若槻内閣の倒壊にあつたことは爭はれぬ。少なくとも樞密院の行動は内閣の倒壊を豫期し、したがつて次の政權の行く方も豫期した行動であつて、この政變が、樞密院と政友會との結託と陰謀によつて惹き起されたものではないといふ、何らの證據もなく、かく辯護するための何らの口實もないのである。

そこでこの政變は、日本の政治の上に占める樞密院の獨斷と、國民はこの樞密院といふ奇妙な機關に對して如何なる決意をなし、如何なる態度をもつていかに取り扱ふべきかを示して吳れたものである。

かうして若槻内閣——五十二議會劈頭のあぶない瀬戸ぎはを生き延びた若槻内閣——は思はざる時に思はざる所で行き倒れた。一年の間、無氣力にして反動主義的な政治によつて、日本の政界に言ふべからざる沈滯の空氣を漲ぎらせてゐた若槻内閣の倒壊は、少なくとも、この沈滯した政界を攪きまぜる効果があつた。若槻内閣の倒壊が政界の沈滯を破つたといふ意味は、もちろん日本の政界に新消な空氣が注入されたといふ意味ではない。たゞ沈滯した政界の水を攪きまぜることにより、その底にかくされてゐた汚物と混濁とを、全水面に浮き上がらせたといふ意味である。

（二）

憲政會内閣を押し除けてその跡に坐つた政友會内閣は何をしたらうか。若槻内閣を窮地に陷し入れるためには、財界の不安動揺と金融恐慌の一そう擴大することが、野黨に取つて必要であつた。しかし野黨の暗中の努力が實を結んで、一方には恐慌が擴大して緊急勅令案をよぎなくする形勢を造り出し、他方には樞密院の否決によつて内閣の總辭職をよぎなくし、かくて野黨の目的が達せられ、人心の動揺不安と金融界の恐慌とは、政友會に取つては最早や必要のないものとなつたのちまでも、恐慌は加速度をもつて進行した。十八日には臺銀が休業し、二十一日には取付け騒ぎは全國的に擴大し、全國の銀行は二日間の休業を發表し、近江銀行、十五銀行のやうな大銀行が破綻を曝露し

た。そこで政友會内閣が第一番にやつたことは、戰時狀態以外にはあまり類例のない、全國にわたる支拂猶豫令の公布であつた。同時に政府は財界安定の『根本對策について國民一般の輿論に問ふ』ために臨時議會を召集した。

田中内閣が國民一般の輿論に問はんとした財界安定の『根本對策』といふのは、『日本銀行特別融通及び損失補償法案』『臺銀の金融機關に對する資金融通に關する法律案』の二つであつた。

臺灣融資法案は、日本銀行をして、二億圓を限度として、臺灣の金融機關に無擔保で貸出しを行はせ、それから生じた日銀の損失を二億圓まで國庫が補償するものである。これは臺灣の『金融機關』の救濟で、特に臺灣銀行の救濟ではないかのやうではあるが、この特別融通は特に『臺灣統治の必要』と『海外に於ける信用を維持するための必要』を條件とするもので、事實上、臺灣銀行の救濟法案たることにおいて若槻内閣の緊急勅令案の内容と何らの變りはない。要するに金二億圓を國民の財布から取り出して（國民一般の輿論に問うて取り出すのである！）熨斗をつけて一特殊銀行に進上する法律案なのである。これは憲政會の内閣によつても、必要缺ぐべからざる政策と認められたものであつたが、憲政會を押し除けてその跡に坐つた政友會内閣が必要缺ぐべからずとする政策も、精密に同一の政策だつたのである。憲政會の内閣が倒れて政友會の内閣がこれに代はらなければならなかつた理由は——この政變の原因と意義とは——一銀行を救濟するために、國民に二億圓の負擔を課してよいか惡るいかといふことではなくて（この點については、すべてのブルジョア政黨は完全に一致する）この金融資本への贈り物を、誰れの手によつてするかといふことだつたのである。

これは言葉をかへて云へば、最近の政變もそれ以前の政變と同じやうに、ブルジョア財閥の内部における勢力關係によつて誘導せられたものであつて、國民の大衆的な勢力は、少しもそのうちに働らいてゐない——少なくとも能動的には働らいてゐない——こと、從つてそれはブルジョアジーと大衆との勢力關係によつて惹き起されたものではないこと、最近の政變でも、大衆はなほ一個の政治勢力として舞臺に登場してゐないことを意味してゐる。この事實は、特に無産者勞働民の政治運動を指導する人々が、當面の戰術と行動とを決定する上に見落してはならぬ事實であつて、この冷やかな事實——運動の實際の發展の過程——と、熱した自分自身の意識の發展過程とを混同することが、多くの誤謬の泉源となることは云ふまでもない。

（三）

政友會内閣のいま一つの『根本對策』たる日銀特別融資及び損失補償法案は、日本銀行をして向ふ一年間、預金の支拂準備金として銀行に資金の特別融通をさせ、それから生じた日銀の損失に對しては五億圓までは國庫で補償するといふのである。

これは預金者を救濟するための法案だといはれてゐるが、その實は、徹頭徹尾ごまかしとからくりとの上に立つてゐる銀行業を救濟する法律案にほかならぬ。五億圓を限度として日本銀行の損失を補償するといふことは、これを反對に云へば、五億圓までは損失を承知の上

で――即ち回收不可能の見込みが明白な場合にも、銀行を救濟するためには資金を融通せよ、といふことである。もつと卒直な言葉でいへば、銀行が倒れさうになつた場合には、五億圓までは只で呉れてやるといふことである。この法案の眞實の目的は、、、とからくりとによつて、利潤を收得してゐた銀行業と金融資本家との救濟ではなくて、不幸にして――或は幸ひにして、この銀行に金を預けてゐる預金者の利益を保護することにあつたと假定しても、問題は大して變らない。この法案は銀行に金を預けてゐる不幸な國民の少數者――比較的裕富な社會層――を、銀行に預金のない幸福な國民の多數――比較的富裕でない社會層――が五億の金を出して救濟しようといふ法案なのである。

もつともこの寛仁を極めた法律――政友會内閣の『根本對策』の恩惠に、すべての銀行が均霑するものと早や合點をしてはならぬ。政府の原案と衆議院における修正の結果によると、この五億圓の無代進呈にあづかる資格を持つ銀行は、先づ第一に、その救濟が『財界の安定を計るため必要ありと認むる』銀行である。第二には、すでに預金の拂戻しを中止してゐる休業銀行のうちでは、『將來營業繼續の見込みある』銀行である。この資格條項は、現に休業してゐる十五銀行を救濟するための用意と見做されてゐる。

五億圓無代進呈のかやうな資格制限は、一面からいへば必要缺くべからざる妥當な制限であつて、何人にも異論がないらしい。この特別融資と損失補償とが、財界の安定を目的とする『根本對策』である限りは、そしてこの『根本對策』を必要と認めてこれを是認する限りは、財界の安定のために必要のない場合に融通をする謂はれはない。またこの融通によつて一時を凌いでもたうてい營業繼續の見込みのない休業銀行にまで、みす〳〵この獅子の分け前を與へる謂はれはない(しかしこれらの銀行にも預金者はあるが、この法案の目的はもとよりこの種の少額預金の救濟でない)。そこでこの資格の制限はかやうな見地からは必要にして當然であり、妥當であり、かつ何人にも異論がないものにせよ、この必要、當然、妥當なことの必要にして當然の結果と作用とはどうだらう。これが重大な問題である。

この法律案とこの資格の制限を讀んで、何人も直ちに看取することは、この法律案は大銀行の救濟案だといふことである。五億圓の無代價進呈を提供せられてゐるのは、すべての銀行ではなくて、有力な大銀行だといふことである。小銀行はこのどさくさ紛ぎれに篩ひ落とされて、金融資本が大銀行に集中せられる過程を促進する。小銀行の沒落は、救濟どころか寧ろ歡迎するところであつて、その預金者などは固より問題でない。これがこの法律案の根本精神であつて、しかもかうした金融資本の集中の作用が、何人も――資本主義的立場から――必要妥當として怪しまないことの結果として行はれるところに、少からざる意義と興味がある。

この法律によつて、國庫がいよ〳〵、どれだけの額、日銀の損失を補償するにいたるかは、何人にも分らない。或は實際の補償額は、五億に達せぬかも知れぬ。五億よりも遙かに少なくて濟むかも知らぬ。しかしかく云ふことは、同時にそれは五億に達するかも知れぬといふことを意味してゐる。少なくともこの法律は五億に達する場合のある

ことを豫想するばかりでなく、かく豫想することが妥當であるといふ見解の上に立つものであり、またこの妥當な金額――五億圓――だけは、投げ出して掛つてゐる法律なのである。

かうして二億と五億、都合七億の金を國民の懷から取り出して大銀行に與へるのが政友會內閣の『根本對策』たるこの二つの法律案であつてこの二つの法律案を『國民一般の輿論に問ひ』、國民の名によつて造るのが、臨時議會の任務であつた。

そこで或る人は云ふかも知らぬ。政友會內閣の財界安定は、憲政會內閣のそれよりも五億圓だけ高價である！　政友會と樞密院とは、若槻內閣を押し潰したゝめに、國民に五億圓だけ値段の高い代物を賣りつけた！　それだけ憲政會內閣の方が、國民の利害に忠實ではないか？　と。

しかしこの疑ひは誤つてゐる。憲政會の內閣が、臺灣銀行に二億圓を與へようとした時に、政友會と樞密院とは二億圓を與へるといふことには、少しも異論を言はなかつた。その代り政友會の內閣がさらに五億圓を奮發して、一般金融資本家に與へようとする臨時議會において憲政會も政友本黨も、五億圓を與へるといふことには、一言の異議をも挿まうとしなかつた。たゞこれらの政黨は、政友會と共謀した樞密院が、自らをこの與へる者の光榮ある地位から追ひ落としたことだけに異論を持つたにすぎなかつた。憲政會と政友會とは現在日本の政治勢力の反對の兩極を代表した政黨と見做されてゐる。ブルジョアジーの根本利害の範圍內においては、憲政會と政友會とは、最も根本的に政策を異にしてゐる筈の政黨である。現に彼らは、反對せんがためにことさらに反對の政策を立てることにさへも骨折つてゐる。しかるに憲政會が、二億圓を臺灣銀行に與へようと言ひ出した時、政友會は反對したくも反對できなかつた。その如く憲政會は、五億圓を銀行業者に與へようといふ政友會の提議に對してはこれに追隨することが如何にいま〳〵しからうとも、固よりこれに反對することができなかつた。なぜならばこれに反對することは、憲政會に反對し若しくは政友會に反對することではなくて、金融資本の致命的な利害に反對することゝなるからである。彼等は、その他の如何なる問題について異を立てることが出來ようとも、少なくともその『根本對策』については、互ひに異を立てるの餘地が存せぬからである。

（四）

臨時議會におけるいま一つの重要な、しかも偶然の出來事は、田中首相の對支態度の再聲明であつた。

政友會は在野當時、國民の感情を刺戟することの最も容易な『國威』『國辱』の問題――即ち外交問題をもつて、政府に肉薄しようと試みてゐた。當時は昭和二年四月十七日の吉日に、臺銀救濟問題で若槻內閣が辭職をし、棚から牡丹餅が飢ゑたる政友會の口のあたりに落ちてくることは、まだ分つてゐなかつた。そこで政友會は對支幣原外交を攻擊し、『血湧き肉躍る』ていの聲明書まで出して、暗に出兵熱をさへも煽ほつてゐた。そして一度び政友會の內閣が成立すると、田中首相は特に支那問題に對する態度について、極めて重要と認められた二十二日の聲明を發表したのである。

この聲明は、先づ第一には『支那國民の正當なる要望』は、『諸外國と支那との……關係に何等險惡なる事態を[illegible]さずして』達成するの途があることを確信するといふのであるが、その確信を裏づける具體的な方法には言及せられて居らぬ。聲明書のこの部分は、支那國民の要望に對しては、いつでも極まつて寛大であり同情的であることを特徴する帝國主義的列强の百萬遍もくり返へされた聲明を、もう一度繰り返したゞけであつた。要するにこの外交家辭令を反譯すると、帝國主義列國に取つて正當な支那國民の要望は、帝國主義列國の利害と何らの衝突をもしないで達成することができると云ふことになる。

その後半は、この聲明の最も重要な部分であつて、支那における共產黨の活動に對しては、列國と協力して內政に干渉することをも敢て辭しないといふ決意を表明したものであつた。

臨時議會における田中首相の答辯は、この聲明書を改訂して、事實上、若槻內閣の對支幣原外交に立ち歸つたものだと、一般に解せられてゐる。この答辯によつて、田中首相は(一)支那の一黨に偏してこれを援助するが如きことは毛頭考へて居らぬこと、(二)支那においては共產派が影をひそめ穩健派が勢力を得つゝあること(從つて)、(三)出兵の意志のないことを聲明したのである。

しかしながらこの二つの聲明を細かにしらべて見ると、後者は必ずしも前者を改訂したものではない。この二つの聲明は必ずしも相容れないものではなくて、互ひに相補足してゐるものである。

田中首相が第一の聲明によつて言はんとしたところは、政府はいかなる場合にも英國あたりと協力して、支那の內政に對して武力干渉を行はうといふのではなくて、それは共產派――主として工業勞働者と貧農を代表する勢力――が勢力を得る場合である。第二の聲明において、穩健派が漸次勢力を得つゝあるといふ田中首相の觀測は、即ちこの前後二つの聲明の調子に、當然に多少の變化のあることを、首相自ら說明してゐるものである。そして『自分が出兵の意見を有する樣にいはれたが、それは誤解である』といふのが、その結論であつた。

支那の國民運動が、謂ゆる共產派と穩健派とを打つて一丸とした勢力として、北方軍閥の勢力に對してゐた當時には、北方軍閥は支那の現在秩序を維持する力であつて、蔣介石軍は現存秩序を破壞しようとする力であつた。しかるにこの國民革命は、一方においては支那のブルジョアジーの必要とする限度に達し、他方においては、帝國主義列國がもはや內政不干渉を標榜してゐるに忍びない一定の限度を踏み越えようとした。これは國民運動の內部においては、共產派と穩健派との分化對立の進行となつて反映し、同時に帝國主義列國の對支政策の上では、內政不干渉を標榜する消極的態度に對する不滿攻擊と、『兇暴なる共產派』の支那に對しては、內政不干渉の旗印を半分引き卸ろさなければならぬといふ、對支積極政策と出兵論の暗示とさへもなつて現はれた。

國民運動の內部分裂がさらに進行し、武漢南京兩政府の對峙となり、帝國主義列强の威壓と誘引と支持とを受けて、蔣介石が共產派に對する態度を明白にした今日は、蔣軍の役割はすでに一變した。それはもはや現存秩序を打破する勢力から、現存秩序を維持する勢力に推移したのである。そして この勢力が共產派の勢力を壓して ゐる限り

は帝國主義列國にとつては、支那問題に對する干渉——ことに武力干渉——の問題は無いのである。幣原外交にかへれ！である。

それと同じく、北方軍閥と南方軍閥との鬪爭の結果がなほ豫想を許さぬ瞬間においてこそ、なかんづくこの天秤の皿のいづれかの一方に力を加へることにより、大勢を決定することの出來得る場合においてこそ、支那におけるいづれの『一黨に偏してこれを援助する』かゞ問題になつて來る。また國民運動の內部が、共產派と穩健派とに分化しようとし、その對立が漸次に增大し、たゞうつちやつて置いたのでは、そのいづれが勝利を得るかゞ分らぬ瞬間においてこそ、なかんづく外からの強壓、干渉、ないしは援助（公然と陰然との）によつて大勢を變化し得る瞬間においてこそ、この兩派のうちのいづれの一派に偏してこれを援助すべきかゞ、初めて問題となるのである。

すでに帝國主義列强の協力者となつた蔣介石が壓倒的な勢力を持ち、少なくとも差當り共產派が敗北してゐる現在の瞬間においては、『一黨に偏してこれを援助する』必要はない。それは急阪を獨りで轉ろげ落ちてゐる石のあと押しをする必要のないのと同じであつて、支那のあらゆる黨派に對して嚴正に中立を守つてさへ居ればよいのである。

（五）

臨時議會の前後において、憲本合同の催促せられたことも興味がある。政友本黨は、最も骨の折れぬ方法で政權にありつくための同盟であつて、政友會や憲政會と異つた別個の階級的利害を代表したものでないことは無論であつて、ブルジョアジーの根本利害の範圍內においてさへも、政友會や憲政會と異つた政策をも持つたものではない。その大部分が再び政友會と一緒にならないで憲政會にくつ附いたのは、たゞ個人關係や行掛りの偶然にほかならぬ。政友本黨はあらゆる意味において、存在の理由もない集團であつて、ブルジョアの二大對立政黨たる憲政會と政友會とに分解吸收せられるのは、極めて妥當なことである。

けれどもこの合同によつて、內部における分解作用を惹き起す危險に當面してゐるものは、政友本黨だけではなくて、憲政會もまた多かれ少かれ同じ危險を感じてゐる。この點では憲本合同の進行は、ただ單に政權拾得の一時的同盟にすぎなかつた政友本黨がその當然の到着點に行きつくといふことだけではなくて、それはブルジョア旣成政黨の內解と再整理の作用の一部であり、また一部であるところに重要な意義がある。ブルジョア旣成政黨の分解作用と再結合の作用とは、まさに擡頭しかけてゐる無產者勞働民の大衆的な政治勢力を前にして、ブルジョアジーが敵前においてその陣列を整理してゐるものである。

いま一つの興味あることは、無產政黨によつて唱へられてゐた議會解散の主張が、臨時議會の召集を機會に、多かれ少かれ進步的な要素によつて、廣く主張せられたことである。ブルジョア政黨とその政府とが、あらゆる手段に訴へて今日まで維持して來た、制限選擧によつて出來上がつた現在の議會をそのまゝに存することが如何に不合理で

あるかは、この議會をして、さらに七億圓の負擔を國民に負はしめようとするに至つて、初めて彼等によつて痛切に感ぜられたのであつた。これに反して無產政黨は數ヶ月以前において、議會の解散を要求し、たゞに要求するばかりでなく、プロレタリアと農民とを背後に持つ要求の運動を組織した。今日はその要求がいかに合理であつたかを明らかにしたばかりでなく、この合理な要求のためにブルジョア政治勢力と實際に鬪ふ能力を持つてゐるものは、たゞに無產階級とその政黨のみだといふことを明らかにしたのである。

たゞ不幸にして、無產政黨の指導する議會解散要求の運動は、決して大衆的な運動に發展したとは云はれない。無產政黨はその指導の下により廣く更により廣き大衆を動員することを學ばねばならぬ。最近の政變と臨時議會とが吾々に示した最大の事實――あらゆる事實の神髓――は、無產者勞働民の大衆は、ブルジョア政治勢力に對する強大な、しかしながら尙ほ可能的潛在的な政治勢力であつて、活潑な現實の勢力としては、まだ政治の舞臺に登場して居らぬといふことである。ブルジョア政黨をしてこの無產大衆の勢力を恐れしめてゐるものは現實な大衆的な政治勢力ではなくて、この可能的な勢力に對するブルジョアの先見である。無產政黨はこのブルジョアの先見とプロレタリアがどれだけの政治勢力を現實に持つてゐるかといふ、二つの別々の事柄を混同してはならぬ。無產政黨のあらゆる任務のうちの最も緊急な任務はこの可能を現實にし、この可能的な政治勢力を、現實な政治勢力に變化することである。

禁煙を志て未だ禁煙せざるは何故か
永年の喫煙家も忽ち禁煙家となれる

簡易な禁煙方法を知らぬからだ
驚くべき「カロット」の效力

煙草が如何に體に害を及ぼすかは百も承知の事であるから別に此處にくど／＼と書立る必要もない、而し煙草をやめて損をしたと云ふ人はないが煙草を癈めた爲體重が増し長生をしたと云ふ事は往々耳にする事實である、煙草を止めると云ふ言葉はよく聞くが、絶對に禁煙したと云ふ人は餘り多くないそれは如何に禁煙が困難であるかを物語つてゐるもので、永年の習慣は容易に改まるものでない。所が、玆に面白い一つの禁煙方法がある。「カロット」を一度口にすれば煙草を用ゆるに少しも異ならないから手持無沙汰でないばかりでなく適量の朝鮮人蔘の精氣を含んでゐるから根氣をよくすると同時に溫雅な香氣と忘れ難き清涼な甘味は、輕い刺戟と快感を長く口中に殘して、一度之を口にすれば煙草に對する永年の嗜好を忘れて斷じて二度と吸ふ氣になれない。殊に口中の惡臭、又は食後や夜中口の中がねばる時に用ゆれば忽ち爽快になり、暫く常用すれば永年のニコチン中毒も完治する效力がある。但し、これは眞劍に煙草をやめようとするのでなければお勸め出來ない。何故なら再び煙草がまづくて吸へなくなるからである。是は實業之日本社あたりでも實驗して此效力に驚いてゐるのでわかる。煙草の害を知りつゝ永年禁煙出來なかつた人、神經衰弱、慢性胃腸病消化不良その他禁煙したら屹度肥つて身體を改造し得るだらうと感じてゐる方は是非一度カロットを試みられるが良い。大倉男爵の大阪朝日の村山社長との禁煙の約束なども面白い一例である。

カロット（凡百日分）

金貳圓五拾錢（ベークライト製）（パイプ付）
金參圓五拾錢（サック入象牙製）（パイプ付）
（送料各内地十八錢）（代金引替内地卅錢）東京朝鮮 四十五錢 臺灣樺太 五十五錢

東京大森不入斗八二八振東五二九一
發賣元 榮川堂
東京京橋區瀧山町十三
代理店 天下堂

由比正雪

笹川臨風

一 叛骨

古い小説本などには、善く一癖ありさうな面魂と云ふことが書いてある。どことなしに底力が人相の上に現はれてゐるのを云つたものであらう。あいつ叛骨ありと云ふのも、一癖ある面魂には、相違なからうが、安祿山などは、飛んだ無邪氣相な顔つきらしかつた。明智光秀は陰性で、頗る恭謹の態度を取つてゐたから、叛骨は露はに見えてはゐなかつたらう。尤も叛骨にも陽性なのと、陰性なのとがある。向つ腹立つて、叛旗を飜へすのは、陽性の方だが、陰忍して徐ろに計略を廻らす方は陰性に屬する。陽性なのが失敗するのは當然だが、陰性のだとて、必ずしも成功すると云ふわけではない。

由比正雪も叛骨があつた。眼光烱々として、並々ならぬ樣子だと云ふことであつたから、いはゆる一癖あつた、面魂であつたに相違ない。音聲は靜かで、慌てず騒がずいかにも落ついてゐる〳〵とした挨拶振であつたと云ふから、決して、向つ腹立てる陽性の方ではなくして沈着な、思慮綿密の、遠謀深略の人らしく思はれる。

正雪は小ぶとりに肥つてゐたが、背は低かつたとのことである。荀子に古聖先哲の身長を述べてゐるが、果してどう云ふ出處があるだらうか、實は甚だ覺束ない。帝堯は丈高く、帝舜は短く、仲尼はのつぽで、子貢はちんちくりんだとある。晏子の背低は有名だが、淳于髡も同じく小さかつた。史記に依ると、郭解と云ふ遊俠列傳中の一人は、短小精悍とあるが、正雪は此短小精悍に當つてゐる。のつぽの叛骨や、でぶ〳〵の叛骨は、叛骨らしくない、叛骨だが、短小精悍は、どこか叛骨にふさはしい資格がある。正雪は生れながらにして叛骨を有してゐた。

傳ふる所に依ると、正雪が備前岡山の藩主新太郎少將池田光政の邸門を訪うて、辭し去らんとする時、熊澤蕃山とはたと出逢つた。蕃山は固より正雪を識らないので、侯に謁見した時に、其の何者なるかを問うた。侯答ふるに軍學者由比正雪なるを以てすると、蕃山は彼の相を見ますと、並々ならぬもので、後日必ず禍を引き起すでございませうから、必ずお近づけなさいますなと申した。光政は之を首肯いた。其後、正雪又光政に謁した折、前日逢ふところのもの〻何者なるかを

尋ねて、其の熊澤蕃山なるを知つた。某すると正雪は、つら／＼彼の狀貌を見ますに、他日必ず禍を醸すものと存じますれば、お用ひ遊ばすなと申したが、光政は之より正雪を近づけなかつたと云ふ。此話も果して事實であるか否やは明かでないが。兩人は各々一癖ある面魂と見たのであらう。英雄は英雄を知り、猩々は猩々を知ると云ふことであるが、いづれも一癖も二癖もある人物とて、互にそれと鑑別したのであらう。よしやそれが假構に出たものとしても、面白い插話で、蕃山と仁齋とが邂逅に出逢つた作話よりか、眞實味が多い。

同じ一癖あつた面魂でも、蕃山と正雪とは相違がある。蕃山には經綸があり、聖賢の道を學んで知行合一の旨を悟つてゐたが、正雪は軍學者で、聖賢の道とは縁遠くあつた。然し蕃山は唯の學者でない。識見は高く、眼一世を空しうするの概がある。若し彼を戰國亂離の世に在らしめたならば、撥亂反正の大業を讃へして少くとも一方に覇を稱へたか、若しくは英主を翼けて其の機務に參畫したであらう。時勢に迂濶なる道學者とは其選を異にして、彼は一世の豪傑であつた。正雪は固より亂世の英雄たる資格がある。彼をして聖賢の道を學ばしめたならば、彼れ亦蕃山の徒であつたらう。彼と蕃山とに各々英雄の資があつたのは、相似てゐる。大鹽平八郎になると、蕃山だけの學德を缺き、正雪ほどに英雄の資が乏しかつたが、彼も亦叛骨の所有者であつた。唯々其叛骨は、餘りに小さかつた。天下をねらふ正雪と、大阪城代を相手にした後素（平八郎）とは、同じ叛骨にしても、大小の差があつた。若し蕃山を後素の地位に置いたなら、かほどの妄動はしなかつたであらうし、假りに正雪を其地位に据えても、もつと遠大の計畫を策したであらう。

正雪も後素も同じく失敗者であつた。其末路もどこか、似た點がある。縲絏の辱を受けずに自決してゐるところも似通つてゐる。然し正雪の計畫は、江戸城を奪ひ、久能山に據つて天下に號令せんと夢想したところに、彼の杜撰な誇大妄想もあつたが、一世の風雲を動かさんとするのであつたから、相當に大規模な策略であつた。然し後素は百姓一揆の親分に過ぎなかつた。一世の風雲が之に依つて動からなどとは、さら／＼思ひがけぬことで、彼れ自らさへ斯くは信じなかつたであらう。

然し後素はとにかく蹶起して後に敗れた。正雪は計畫中に失敗した。此點になると、唯僕の擧なると、規模が小さいだけに、後素は先手を打つてゐる。正雪は後手に廻はつて、見事に背負投げをくはされた。西鄉隆盛は其地位と名望と兵力とがあつただけに、九州を席捲せんとするに至り、主客勢を顚倒して斃れた。後素や隆盛は猶遺憾なきに庶幾しであるが、正雪に至りては、暗から暗へと葬られた、產婦の流產であつた。

正雪の事蹟を虚實取まぜて、事實以上に担ち上げたものに「慶安太平記」がある。實錄本と稱するが、演義本の稗史である。講談師は之に潤色をつけて、張扇で見臺を叩く。又此稗史に依りて劇化したもの

に『尼御臺由井濱出』がある。享保十四年二月十五日より、大阪竹本座に於て上演した操芝居である。作者は竹田出雲と長谷川千四とで、世界を鎌倉に變へ、正雪を奇井忠節、丸橋忠彌を角星秋夜とし、將軍源實朝を討たんと謀り、北條泰時の知る所となつて、中節は其の生家である由井の紺屋にて誅せられ、秋夜は摩訶大丸進水に際して船中にて召捕はると云ふ筋で、外題の由井に正雪を利かせてゐる。其後、寶曆九年九月十六日より大阪竹本座の操芝居にて、『南朝正平四年北朝貞和五年太平記菊水之卷』と題し、上演したものも、亦正雪一件を脚色したもので、作者は竹田小出雲、二歩堂、近松半二、北窓後一、竹本三郎兵衞、三好松洛である。江戸時代を南北朝時代に替へ、正雪を宇治常悦（楠木正成の實子）忠彌を伽川主膳事鞠ヶ瀨秋夜（實は新田義興）とし、足利氏の顚覆をはかり、事成らずして、南北合一を條件として、常悦の自殺に異る趣向である。此一件を歌舞伎に脚色し、宮城野信夫の仇討を配合したものに『碁太平記白石噺』があり、河竹默阿彌の作に『樟紀花見幕張』がある。後者を増補したものに、『花菖蒲慶安實記』があつて、其中の丸橋忠彌と松平伊豆守との濠端邂逅は名高く、忠彌は市川左團次の家の藝とされてゐる。斯くして講談と狂言とで、正雪は全く潤色され戲化されてしまつた。

然し考へて見ると、正雪はどこか狂言じみてゐたところがある。彼が楠流の軍學者を看板として諸侯の客となつたのも、天下取りを夢みたのも、計畫の流產したのも、總べて、狂言じみてゐる。彼の叛骨は狂言じみた叛骨である。其人相も亦狂言じみたものであつた。狂言じみたと云ふのは、敢て滑稽味を帶びてゐると云ふことではない。どこか芝居がゝつてゐたと云ふのである。快男兒石田三成が一たび關ヶ原に躓いてから、這種の芝居がゝつた傑士は、殆んど跡を絕たんとしてゐたのに、偶々正雪の現はれたのは、頗る興味ある狂言であつに。誰か正雪を草賊なりと云ふものぞ。（林羅山の『草賊記』の著がある。慶安一件は、英雄兒の演じ損ねた狂言である。）

二　生國

東海の天に倒に白扇を懸けるがやうだと、詩人に形容せられた富士山の北と南とは其氣候を異にし、其地味を異にし、其人情を異にし、其風俗を異にし、其氣象を異にし、自然恩惠の厚薄を異にしてゐる。甲州の地は土地磽确にして、自然の恩惠極めて薄く、葡萄、柿の如き果實には富んでゐるが、農作物は甚だ乏しくあつた。笛吹、釜無の諸流は奔湍危瀨にして、霖雨續けば、土砂を流し、巖石を押出して、堤塘を破り、田畑に氾濫せずんば已まないのである。加ふるに氣候寒く、國を環りての山岳は皆雪を戴いて、凜烈肌に徹するばかりでなく夏日の暑氣激甚にして、毎夏の測候所報告には甲府最も著しと稱せられてゐる。鐵道交通の便が開けたる今日であるから、生魚の甲州に輸送せらるゝもの少からず、夏日猶活々した鮮魚に舌を鼓するを得るが、由來甲州における料理の上乘なるものは煮貝であつて。即ち鮑を醬油

にて煮しめたもので、往時之を醤油樽に入れ、馬の背につけて運搬したものであつた。輸送の途次、山坂にて樽の動揺は美味を増したと傳へられてゐる。夏日は此煮貝を割き、盤中の水に投じて之を賞味すると、猶水貝の如しであるが、或は水貝よりも却つて美味であるかの如く思はれる。

駿州は即ち之に與る。氣候溫和にして、夏に宜しく冬に宜い。興津、燒津の地は避暑地として知られてゐる。久能山の下では、石垣に栽培する莓が冬季紅離々として熟する。魚介に富むことは固より、蔬菜も少からず、海の幸に豐なれば、山の幸にも富んでゐる。靜岡縣にて殆んど產しないものはないとまで云はれてゐる。柑橘の類は纍々として、茶の產額は日本一の稱がある。然し駿州には品質の優秀なるもの少く、茶の如きは宇治に劣り、漆器の類は粗悪久しきに耐へない。由井、蒲原の櫻鰕、興津鯛は有名であるが、之は自然の產するもので人工ではない。

環境の力は人物に影響する。河叛の地に孔子孟子を出し、荊楚の間に老子屈原を產したのは、決して偶然でない。由來駿州に人物少くして、甲州に人物の多きは地固より與りて力がある。自然の恩惠に饒かな地方では、人は生活せんが爲に働く必要がない。自然の恩惠に貧しい地にては、人は力行して生活せんとする。そこに勤勉と游惰との風が截然として別れる。

海道一の弓取と云はれた駿遠の太守今川治部大輔義元は尾張半國の領主織田上總介信長に其首を授けた。義元の子氏眞は佞臣三浦右衛門のなすが儘にて、霜月極月にも右衛門の所望なれば、躑躅を七月の如くに咲らせ、五月の菖蒲切を七月末まで咲き合せ、日夕能猿樂遊山、月見、花見、歌、茶湯、川瀨舟遊びを事とし、父義元が死後も更に復讐を企つることなく、關東にも駿河の國小田原の酒と對稱せられて、酒にのみ興じてゐた。固より彼の昏愚を以て、堅實にして機敏なる一代の名將武田信玄に比するは、餘りに分に過ぎてゐるが、翁物語に何者の文學に就いて斯う云つてゐる。「或夜翁語りて曰く、善き大將、惡き大將の沙汰、品に背き記したるを見るにつけ、善き大將の風俗は次第に絶えて、惡しき大將の風俗は盛なり。信玄公を近代名將と申したるは、先づ文武二道の備りたる大將なりし。文を好みし大將其時代に多けれども、或は文字を覺る事を以て表とし、學文を上に顯し、自慢す、信玄公は學文を好んでも、其道理を胸に收め、表に出して給ふ事なく理を能く辨へ、家の諸法度家風の能き樣にとのみ歎き給へ共、上には見はさず、詩を作り歌を詠じ給へども、十八九の時の行の惡しかりしを能く思ひ當て、少しも浮世遊の風流伊達なる事なし。駿河今川氏眞公は取分け歌道達者なりし。信玄公氏眞公も歌學何れ劣り給ふと云ふことなし。殊更源氏伊勢物語は公家衆御家向在て幾度も聞かせ給ひて歌道に其心を用ひ給ふ。氏眞公の歌道にも又其身の行ひにも專ら源氏伊勢物語の風を用ひ給ひ、戀慕に過ぎ給ひ、人の娘の顏善きを聞き及んでは歌を詠じて遣り、武道の家に生れながら爪紅をさす樣に萬の

仕形いつくしがらせ、公家門跡の家風の如くに見えて、男らしき事尠し。妍きを集め給ふ計りの工夫のみなり。側に使ひ給ふ者も男らしく一存分をも申様なる者を殊の外に嫌ひ、當世の流行者のどうもこうもと云ふ頭巾の如くなる奉行人の女の腐りたるが如くなるにやくなる者ばかり氣に入て、其者に其身の目懸けたる女を呉れて、毎日毎夜の踊酒宴には件の女、輿に乘り靡々の侍り上をも乘行かし、出仕して主人のめかけとも內の者とも知れざる不行儀なりし。惡將の風俗此くの如し。信玄公とは各別なり。右の趣を以て善惡將を知るべしと云へり」固より信玄と氏眞とは霄壤の別がある。

今川氏は武人であつたが、又文學の家柄であつた。今川了俊は武道に優れ、嘗ては九州探題として筑紫の宮方（南朝の黨）を壓したのみならず「武士といへども文武兩道を守らざれは武にあらず、文武は是れ車の兩輪の如し、一輪闕けるときは人を經せず」と稱し、十條の制法を作り、其の第十條に「學問の事名利の爲めとはなすべからず、凡そ學道は聖賢の敎を學得し、一心を明德に入れ、萬法を覺えて道を守り、身を治むるの修學なり。身を治めて後は、諸德自然に來發す。若し名利の爲にする人は名聞の學にして、事理當然の道に達せず。其理を失ふときは、學んで何の益あらんや、多くは佞媚となるべしと云へり」と云つてゐる。此文學好きの家が氣候の溫暖な駿遠の地を領したのであるから、遊惰の風を生ずるに至つたのは、當然である。連歌師などの此地に遊ぶものも多く、今川氏親等は皆連歌を善くし、義元は口に鐵漿をつけて、公家を眞似てゐた。西に太內、東に今川氏ありて、京都の亂を避けた公卿の來り寓するものが少くなかつた。

德川家康駿府を隱居所と定めた。氣候の暖かな、風土の好い駿府は如何にも隱居するにふさはしい地であつた。然し甲州が今に財界に多くの人物を出してゐるに反して、駿州は人物が甚だ乏しかつた。功成り名遂げて身を退くの地は、奮勵向上せんとするに適しないと見える。

甲州に入ると、機山公（信玄）の遺德が今猶人の景仰する所となつてゐるのは、甲州武士が永く江戸時代に重ぜられたと同樣である。機山神社あり、機山館あり、龍王堤ありて、機山公は百世に廟食するのみならず、其名と其遺業とは永く傳はつてゐる。今川氏の遺風に至りては、纖塵の些細なものさへも傳はつてゐない。僅に臨濟寺に雪齋和尙の名を留めてゐるに過ぎない。德川氏になると、祖龍の廟が久能山に儼存してゐるが、其遺德を欽仰すること、果して甲の機山公と孰れが大なるや否や。此間に連歌師柴屋軒宗長の遺址なる吐月峰が灰吹に依りて名高いのは、頗る風雅掬すべきものがある。

遮莫れ、駿州と德川氏とは其緣故甚だ深い。三河は德川氏の開國發祥の地であるが、駿州は之について切つても切れぬ關係がある。大政奉還の時も、朝廷は德川宗家に賜ふる此地を以てした。云はゞ駿州は德川氏と其興亡生死を俱にすべき由緒のある地であつた。其地に德川家に弓を彎かんとする由比正雪を出したのは、寧ろ奇蹟と云はねばならぬ。

自然の絶景が雄渾なる地には多く實際家を出し、其の秀麗なる地には、理想家を輩出するを常とする。詩を作るより田を作れば前者に屬す。空想に耽るものは、後者の畑である。正雪も亦一種の空想家であつた。徳川氏と由緒の深い地に生れながら、乾坤一擲の壯擧を企てんとしたのは、環境の力であつた。環境は彼に空想を鼓吹した。

三　英雄棚おろし

正雪が失敗して自殺したのは慶安四年である。元和偃武を去ること三十六年で、家康より秀忠、家光を經て四代の家綱初世である。家康はいはゆる齊楚の間に介在する三河の一地方を領した小名である。之を支那の春秋戰國時代にて云へば、附庸の國であつた。東に今川氏あり、西に織田氏ありて。其間に細々た左右の鼻息を伺ひながら生を保つてゐたのである。一たび震怒に遇はば併呑せらるゝほどに果敢ないものであつたが。僅に今川氏と織田氏との權力平衡上、其の湮滅を免れてゐたのである。此彈丸黒子の小領主が後世江戸三百年の基礎を開くに至らうとは、誰しも思ひがけないことであるが、更に考ふれば匹夫の豐臣秀吉が天下を掌握するに至らうとは豫言者も亦下し得なかつた所である。然し應仁の亂は、門閥打破、階級打破、舊制度、舊因襲打破の曉鐘であつた。足利末世より現はれた下剋上の風は馴致して、此に總勘定の日が到來したのである。

伊勢の浪人伊勢長氏は裸一貫で、弓矢修業の爲に關東に下りて、遂に小田原北條の基礎を開いた。其の出世の點よりして云へば、彼も大なるものであつたが、秀吉は其の絶大なるものであつた。固より秀吉が尾張に生れ、信長に仕へたのは、彼の出世の糸口であつたに相違ない。彼に宿運はあつたに相違ないが、彼は彼自らの手に依りて、其運を開拓してゐる。

信長は極めて英雄教育に長けた豪傑であつた。彼は善く人物を甄別し、其能を發揮させるに巧みであつた。秀吉も其教育を受けて、機敏にして、努力奮闘することは他の諸將に優つてゐた。のみならず、彼には天空海濶の氣象があり、善く赤心を人の腹中に置くの大度量があつた。本能寺の變に際して、運は誰しもの目前に轉がつてゐた。之を獲るものは、天下を掌握することが出來るのに、織田氏の譜第舊臣老將宿將は躊躇して逡巡してゐた。秀吉急に毛利氏と和し、電馳して、山崎の奇捷を博した。運は彼れ自ら進んで之を獲得したのである。天下統一の大業を成し遂げたのは、全く彼の力であつた。

家康は艱難辛楚の間に人となりて。或は尾張に囚はれ。或は駿河に質となりて、幼時より人生のありとあらゆる辛苦を嘗めてゐる。斯くして彼は其身心を鍛錬したのであるから、如何なる艱難に遭つても、之を耐へ忍ぶの力があつた。獨り彼ればかりでなく、三河の臣下は主君とともに此辛苦を嘗めてゐたから。君臣一體であつた。一向宗一揆で一たび携離したこともあつたが、久しからぬうちに覆水盆に返り、水魚の交りが親しくあつた。武田信玄に對する信長の高等政略より、尾張と

三河との握手に、家康の地歩を向上させた。信長の死後に於ては、一たび其遺孤の爲に義兵を擧げて、秀吉と干戈相交へ、家康の地歩は、押しも押されぬ確實性のものとなつた。

同じく成上り者には相違ないが、家康は安田善次郎であつた。秀吉になると、久原一流のところがある。秀吉には岩崎の堅實さがない、家康は善次郎よりもやゝ覇氣があり、傲があり、思慮が緻密で、時勢を觀るの眼があつた。彼には隱忍性があり、忍耐性があつた。秀吉の豪奢とは違つて、極めて地味であつた。秀吉は醍醐の花見に興じ、北野の大茶會に浮かれ、桃山の絢爛時代を現出するほどの成金氣分があつたが、家康は麥飯に一汁一菜ぐらゐで甘んずる人であつた。家康はどことなしにぢゞむさいが、秀吉は華やかであつた。

天下を取つた擧句の贅澤三昧、後宮に折紙ついた美人を集めて好色三昧は、秀吉の天禀をして高からしめなかつた。同じ好色沙汰にしても、秀吉のは、極めて贅澤で、氣持ちがよかつたが、家康のはぼろつかひの下劣なものであつた。然し家康成功の秘訣は又此にあつたのである。

家康の祖父淸康は非命に斃れたが、父廣忠も短命であつた。德川歷代の將軍も短命の方が多いに、家康が長壽を保つたのは、身心鍛錬の結果に外ならない。殊に彼には大阪と云ふ對象があつた。大阪を滅さずんば、彼は安んじて眠することが出來なかつた。彼よりも年若な前田利家、加藤淸正、淺野幸長等が彼に先んじて歿したのに、彼のみが蟄伏數年であつた。嘗て北畠信雄の爲には小牧の一戰をも辭さなかつた彼が、豐臣氏の孤兒寡婦に對しては、殘忍を極めたものは、彼の老獪に反して秀頼が成長するのであるから、早く之を片附けようと、焦慮つたためである。關ヶ原戰後の彼の行動は、從來の隱忍を學んだ家康と別人の觀がある 之れ年寄の氣短と云はんよりも、寧ろあせり拔いたためであつた。此點あるが爲めに、彼は歷史の上に甚だ不人氣となつたが、殘忍は戰國時代に於ける一般心理である。信長は叡山を攻めて一山の老若を殘る所なく殺してゐる。別所長治の一族も荒木村重の一家も殆んど殲滅されてゐる。秀吉は甥秀次の妻妾を誅して畜生塚を築いた。家康は寧ろ殘忍性が少なかつたが、大阪に對しては、時代の一般心理が遺憾なく現はれた。若し之を以て彼を責むるとせば、秀吉の信孝、信雄に對する擧止を辯護する餘地はあるまい。織田氏は豐臣氏に取りて主筋であり、德川氏は豐臣氏に對して寧ろ僚友であつた。

大阪が亡びると、急に張り切つた氣が緩んで食べつけぬせいもあつたらうか、質素其のもののやうであつた家康は鯛の天麩羅を食べて、大阪落城の翌年死んでしまつた。家康は安心して他界したものゝ、思慮の緻密な彼は、秀忠が天下大亂せんと云つた言葉に對して肯首いたと云はれてゐる。大諸侯は家康にこそ首を低れてゐたものゝ、一杯の土未だ乾かざるに、何事かを仕出すやらも知れぬ。關ヶ原以來、德川氏に噛むものは少くない。前田加藤淺野はゐなくても、虎視眈々たるものがないとは限らない。死に行く家康にも多少の懸念はあつたら

う。

流人の源頼朝は苦勞人であつた。其苦勞は彼を猜疑深いものとさせた。秀吉も苦勞人であつたが、其苦勞は人心を收攬するに妙を得させた。家康も苦勞人であつたが、其苦勞は彼を老猾とし、横着とさせた。隱忍の反面には極めて横着があつたのである。彼が狸爺と評されるのは尤もなことである。老猾で横着な彼は、死後に於ける合戰起る際を假想して、一番鎗は藤堂高虎、二番鎗は井伊直孝、堀直寄には横鎗を入れよとまで遺言してゐるが、秀吉の臨終の如く煩悶しては居らぬ。寧ろ意を安んじて逝つたのである。

江戸幕府の基礎は三代の家光に至りて確立した。朝廷及公卿に對する束縛の法度、諸侯の淘汰の如きは着々此間に於て行はれてゐる。幕府の恐るゝ所は諸侯であつたから、諸侯の過失は遠慮會釋なく處斷し廢絶減封は頻々として行はれた。跡目のない爲めに絶家となつたものさへ少くなかつた。如何に初期の幕府にて諸侯を恐れたかは、將軍の代替りに必ず動揺のあつたことにても知られる。二代秀忠の死んだ時には秘喪の説が起つたが、酒井忠勝の發議に依りて之を止めたばかりでなく、家光は諸侯を召して告ぐる所があつた。大猷院殿御實記附錄に「台徳院殿(秀忠)薨ぜられしとき、大故を秘し奉らんといふ説どもありしに、酒井忠勝が議をとられ、其夜しも諸大名へ升天のこと觸れわたされ、いづれも御氣色伺はむとてまうのぼりしに、酒井忠勝松平信綱もて仰下されしは、祖宗二公の御事は櫛風沐雨の勞を重ね、四海一統の業をなし給ひ、天下の諸大名恐れ從ひ奉らぬはなし、我身は若年といひ、未だ戰陣に臨むで、兵鋒の利鈍を試み給ひしこともおはしまさねば、若しかゝる隙に乘じ覬覦の望を抱くものあらば、心任せに本國に馳せ下り、戰爭の用意すべし、さらむには速かに御勢を向けられ、兵の强弱を試み給はん尊慮なりとぞ。其時松平陸奧守政宗進み出で、御代のはじめにあたり、勇ましき仰をも承るものかな普天の下誰か當家の御恩を蒙らぬものやある。若し恩を忘れ義を顧ず、非望を企てるともがらあらば、御勢を勞するまでもなし、政宗一人馳せ向つて踏潰さん、あはれ老後の思出に、一戰して老武者の働きを若き將軍に見せ奉らんものをと申せしかば、いづれも恐悚してまかでしとぞ」とあるは、即ちそれで、幕府に最も睨まれてゐる、獨眼龍は流石に味なことを云つてゐる。家光の喪の時にも亦斯う云ふ云ひ傳へがある。井伊掃部頭直孝、酒井讚岐守忠勝を初め、諸老臣一同は列座して諸大名を集め、さて忠勝は一段と聲を張り上げ、此度御所には御他界あらせられ、御世嗣は僅か十一歳の幼兒にてあらせ給ふが前代の御子にてましませば、各々方も心安く思されよ。さは申せ、古より幼主の御時には群情一致せず、危亂の患もある例にてござれば、天下の望みある人々に取りてはよき折にてござりまするぞと申す。保科肥後守正之、松平越前守光通進み出て、諸大名に打向ひ、各々方には讚岐守の申したる言葉を御聞きでござろうが、普天の下、誰か御祖先の御恩を忘却するものがござらうぞ。殊に幼主の御時を幸と、

覬覦の志を挿む輩のあらんには、某どもに仰つけられ候へ、踏み潰して御代始の御祝儀に仕りませうぞ、と云つた。並みゐる諸大名も各々低頭して、一同に斯く存じ候へと平伏したとのことである。此等の傳說は餘りに狂言じみて、大名を殆んど罪人呼ばはりするのであるから、恐らく其儘の事實ではあるまい。然し幕閣の諸老臣が諸大名を疑つたことは並々でなかつた。尾紀水の三家さへも諸老臣の忌む所で、鵜の目鷹の目の監視を免れなかつた。前田利常が鼻毛を延し、愚者の皮を被つたのも、此嫌疑を免れんが爲めであつた。

幕閣の重臣井伊、酒井、松平、土井の徒は、老若の區別はあり、堅實なのと、銳利なのと、才の利鈍と、質の全不全との差別はあつたが、いづれも御家大事と心がける三河以來の譜代氣質であつた。此等の徒に宏謨大略は望まれない。撥亂反正の大經綸は期待されない。固より當時の世には宏謨大略の要はなく、撥亂反正の大經綸は必要でなかつた。戰國時代に多くの風雲兒を出した反動として、人物から云へば凋落した時代であつた。恰も現在の我邦と似てゐる。其の頃異つた所は寬永慶安の頃の幕閣重臣は、眼中德川氏ありて、黨利私利を謀る、さもしい量見がなかつた點である。

幸に諸侯の中にも人物がなかつた。個々之れありとするも、頽齡の、最早覇氣が銷沈したものか、隱忍して他の諸侯の覆轍を踏むまいと韜晦するもののみであつた。幕府は其の緻密なる諸侯制馭の方策に依りて、諸侯を威嚇し、警戒し、牽制してゐたのである。諸侯は唯々自安自息の途を講ずるより外に餘念がない。

若し此間に英雄雲兒ありとすれば、此等幕閣の循吏等がなす所に慊焉たるものが多かつたであらう。諸侯の中にも其人が絕無ではなかつた。紀伊の南龍公（德川賴宣）は其の随一であつた。民間には大阪以後食扶持に離れた浪人が多かつた。此等の一團は秩序ある社會を呪つてゐた。日夜彼は風雲に際會するを望んでゐた。大阪は曾て此等浮浪の徒を集め大旆を樹てゝ失敗したのである。浪人は皆其の向ふ所を失つてゐる。現狀打破は彼等の夢想し期待する所であつたが、さりとて之を諸侯の中に求めて其人は無い。何人かを擔ぎ上げ、其力に依りて一六勝負を爭はなければならなかつた。由比正雪は其の擔ぎ上げられたお神輿であつた。空想家であつた。正雪はお神輿として擔ぎ上げられるに最も恰好であつたが、彼も亦一個の英雄兒である。諸侯の英雄兒は空しく拱手して傍觀するに過ぎなかつたが、江湖放浪の英雄兒は、唾手して起つたのである。

四　楠流

正雪は駿州安倍郡足洗村の紺屋彌右衛門の倅で、其の第二子であつた。兄は半左衛門、二人の弟は三左衛門、又五郎と云つた。斯兒凡ならず、幼時より家業を好まなかつたので、駿府の臨濟寺に托せられて、僧院敎育を受くることとなつた。臨濟寺は今川義元の創建するところで、大原雪齋和尚の開基にかゝつてゐる。義元の首も此寺に葬ら

れて、駿府に於ける名刹第一であつた。

然し風雲兒の雛であつた正雪は到底緇衣圓頂にて終るものではなかつた。久しからぬうちに郷里に歸つた彼は武家奉公を志願して、江戸に出で、芝に假住居をしてゐたが、偶々火災に遭ひ、災を避けんとする途中にて、一つの掛硯箱を拾つた。之を開き見るに、僅かばかりの錢と軍學の書があつたので、これより兵學の研究を始め、楠流の軍學と稱するものを講じたと云ふことである。此火災が寛永十八年正月二十九日、京橋桶町より出火して、南は増上寺宇田川橋まで、東は木挽町の海邊、北は御成橋、西は麻布に至るまで九十七町、千九百二十四戸を燒き拂つたあの大火であつたか、それとも他の火災であつたかは明かでないが、此以後、彼は神田連雀町の裏に五間ばかりの店を假りて住まつた。其うち三間は手習子を集めて書道傳授の所とし、二間のところを住居とした。又謠曲をも教授したと云ふことである。彼はいつ稽古したのか、能書であつたので、之を以て其の生計のたしとしてゐたのである。然し楠流の軍學が彼の眼目で之に依りて次第に門弟を集め、漸く名聲を知らるゝこととなり、平家物語評判の著書さへ印行するに至つた。

新井白石が佐久間洞巖に與へた書翰中に、此頃の正雪の動靜と其人物とを說いてゐるが、白石の正雪觀が面白く見られるから、此に抄出することとする。

由井事は、中頃の故主堀田家に小瀧榮平と申し候足輕大將、十六歳の時に故上野介申付けられ、弟子（正雪の）になり候て、軍法を學び候とて、朝夕に老朽(白石)へ物語りし聞かせられ候ひき。それは人相よく老朽(白石)に似候とて、ふと其事を申し笑はれ候より承りたる事に候ひき。脇沙汰には駿河の由井の紺屋の子と申候。さあるべく候。神田の連雀町と申す町の裏屋に五間程の棚を借り候て、三間は手習子を集め候所とし、二間の所に住居候よし。中々淺ましき浪人、朝夕を謀らざるの體にて、旗本衆又家中の歷々をその所へ引きつけ、高砂やの謠の中にて軍法を傳授し候男にて候。大名にては二代の老中石され候板倉內膳正ばかりが弟子にて、外へ引つけめされ候はむと候をば一々に辭し候よし、內膳正御申に候ひき。さていづれの門弟の物語を承り候にも、尊信の心つきたる、探奧のやうに覺え候ひしと申され候。萬人にすぐれ候ば けものと聞え候。これらの類古への陳涉などの類と見へ候。由井撰述にては、平家物語評判と申すもの印行に候。それにて才力の程は知れ候べく、こなたにはあれほどの者もなき故に、今の代にはとやかくと申したる事と見え候。今の代には猶々ふつとあるまじく候。なし得ざる時は陳涉、なし得る時には漢の高祖と申す事も候へば、英雄豪傑の手段は別に一格ある事にて、遂に君子の道の語られ候事にはあるまじき事勿論に候。

之に依れば正雪は白石に酷似してゐたと云ふ。白石が精悍で眼光炯

くゝとしてゐることは、其肖像にて知られる。門人が尊信して、孫呉のやうに覺えと云ふので、正雪の人心を得ることの並々ならぬが思ひやられる。萬人にすぐれ候作物とは面白い評ではないか。なし得ざる時は陳渉、なし得る時は漢の高祖との評は蓋し適切で、正雪も亦地下に破顔微笑我意を得たりと得意がるであらう。今の代には猶々ふつとあるまじく候と評された如く、正雪は、實に一代の英雄兒であつた。成敗を以て人を論ずるが如きは、以ての外の僻事である。

軍學には甲州流、謙信流、義經流、北條流、楠流などあるが、楠流は太平記に依りて、作爲したもので、術を以て衆を撃つ兵法である。德川氏の初世に當りては、小幡勘兵衛景憲が甲陽軍鑑を本として、甲州流の祖となり、其門人北條安房守氏長は士鑑用法を選んで、北條流を起した。當時の軍學者と稱するものは多く之を祖述したのである。正雪此間に在りて、別に楠流を創めた。本朝武藝小傳に之を評して、「今世楠流の兵法と稱するものは、近世好事者の擬作たる所にして、未だ嘗て正成の意に出でざるなり、正成始めて後醍醐帝の密詔を賜はること正慶元年にあり、兵を統ぶる五年にして建武三年に至り、攝州湊川に戰死す。この此年四海大に亂れ、公卿より士庶に至るまで、みな變亂の中に在りて寢食を安んぜず、正成日夜心を盡して暴亂を定めんと欲す、何の違ありて兵書を作り、後世に遺さんや。是を以て之を知るべきなり。慶安に楠正雪なるものあり、承應に石橋某なるものあり、此二子、正成の名を假り信玄の法を竊み、附會して書をつくり、信を人に求む、其奸曲の志甚し。故に正雪は正成の密策に馴れて叛逆を企て、其陰謀發覺して黨類棄市せられ、石橋も亦正成の奇謀を稱して亂を作さんことを論じ、其徒みな市に殺せらる。是れ正成の罪人なり」と論じてゐるが、古名將の名を假るの軍學は、大抵皆正雪と同樣で、獨り正雪をのみ責むべきではない。正雪は太平記に依り、更に之に甲州流軍學を加味して、此に楠流と銘を打つたのである。楠流を標榜したのは、甲州流北條流の元祖なりとの故であらうが、後年彼の兇謀よりして云へば、自づと討幕の象徵となつたものも奇である。

一たび楠流の軍學をば彼が重々しき態度にて、吹き捲つた駄法螺は、戰國亂離の世を距ること遠からざる當時代に旨く當つて、其門下には旗下の士、諸侯の家臣等少からず、大名さへも之を其邸宅に招じて門下の禮を執るに至つた。職を得ざる浪人は其高名を聞き傳へて馳せ參ずるもの引きも切らず、處士たる正雪は久しからぬうちに天下浪人の中心となり、民間に一方の雄を稱することゝなつた。

不平不滿を抱いて、時勢に反抗心を持つた浪人の集りであるから、風雲の變を思ふのは當然の數である。諸侯は威嚇も出來るし、之を歡化するも出來やうが、民間に鬱勃たる不平を抑へることは事容易でない。若し幕閣に大經綸を有する政治家がゐたならば、或は正雪を利用し、浪人を馴らすことも得たらうが、根が俗吏の集りであるから、何で其やうな離れ業が出來ようぞ。肥前島原の城主松倉重政が南洋侵略を

企てたのは、浪人の利用であり、紀伊の徳川頼宣が亡び行く明國を援けんとしたのは、又此浪人の利用から出たのだと云はれてゐる。

　正雪の門に集つた浪人は千餘人と注せられた。全く一大勢力である。いづれも一癖ある面魂の連中である。亂世なれば、一城一國の主とならぬまでも一番槍一番乘に天晴れ功名手柄を現はすべき人達である。創業當時ならば、諸侯も之を召抱へて、其能を盡させることも得られようが、秩序の整然たる太平となつた當時にては、いづれも無用の人達であつた。まして此等の浪人は氣慨に富みて、一死辭せざるの俠氣があつた。遊民の多いのは國家の不經濟である。今の教育中毒は多くの高等遊民中等遊民を盛んに製造しつゝある。人物の不經濟之より甚しいものはないのみならず、決して視福すべき現象ではない。苟くも國家經綸に抱負あるものは看却すべき問題ではない。

　此等の浪人は正雪を取圍んで、盛んに時勢を罵り、盛んに悲歌慷慨してゐたのである。山鹿素行、熊澤蕃山の如き學德高く人格偉大なる人さへも、幕府の嫌疑は免れ得なかつた。正雪にしてよし爆發するに至らずとするも、遂には幕閣有司に睨まれて、其終を全うせるは、火を視るよりも明かである。

　況んや正雪には駿國生れの空想家肌があり、又天稟の浪人氣質を有してゐたるに於てをや。彼の五體には英雄の血が漲つてゐる。彼の胸には野心の炎が閃めいてゐる。獨彼には磨すべからざる一片耿々の俠骨があつた。彼の周圍を繞れる浪人は盛んに此大先生を煽つてゐる。正雪も此浪人の處置に就いては甚だ持て餘してゐた。如何にして彼等を救ふべきか。之れ彼に取りて至難なる問題であつた。

　種々なる事情は正雪をして已むを得ず爆發せしめたのである。敢て、已むを得ずと云ふ。正雪にして一竿の風月に餘生を樂むの雅懷があつたならば、彼は江戸を去りて故國の山水に隱れたでもあらうが、彼には俠骨もあり、英雄の血もあり、野心もあつたから、叛骨は始めて此に其本性を露はすことゝなつた。世間には叛骨ありて、遂に其儘にして露はさざるものも多々ある。

　或點から云ふと、正雪は浪人の犧牲であつた。然し浪人氣質の本山たる正雪が浪人に擔ぎ上げられて、其犧牲となつたのは寧ろ彼に取りて本懷であつたらう。

五　南龍公

　唯さへお家の爲には事なかれかしと忠勤を抽きん出てゐた幕閣の執政は、三代將軍の死に依りて、恐しく神經が尖つて來た。井伊直孝にしろ、酒井忠勝にしろ、阿部忠秋にしろ、松平信綱にしろ手腕はあつても固より英雄の質ではなく、此變事に際しても大局を忘れてひたすらに察々の明を用ひてゐた。之に對して不平を抱くものは少くなく、諸侯の中に先づ爆發して、三河苅谷の城主松平能登守定政の遁世となつた。慶安四年七月九日、定政は己が邸に增山彈正忠正利、中根大隅守正成、宮城越前守和甫、牧野織部成常、不谷十藏貞清、林道春

信勝等六人を招き、さま〴〵に馳走して後「さて各々方に折入つてお頼みしたきことあり」と申す。いづれも容を改めて「そは何事におはすや」と問ふに、定政は座を正し「不肖定政前代の御恩を蒙ること海山も啻ならず、一度は生命を擲ちて、此御恩に報ひ奉らんと思ひしも、いたづらに後れ參らせて、年來の本意を失ひたり、今幼君に仕へまつり、心力を盡さんと、心は矢竹に逸れども今の執政たちが萬機を輔佐するを見るに、盡く處置を誤りて、世ははや〳〵亂るべう覺ゆ」と。是に至りて彼の眉は軒り、彼の聲は感激に顫へてゐる。一同は茫然として呆氣にとられる。「各々方へのお頼みとは、此一封の書を井伊殿、阿部殿へお上げ下されたし」と云ひ終つた。一同は顔見合せて、彼一句、此一句、思ひ止らせようとしたが、定政の決心は牢として動かすべくもない。遂に已むを得ず、之を井伊直孝に送つたので、直孝は執政一同と之を開いて見ると、二十歳より四十二歳の今日まで夢に見たりし歌などを書きつらね、思ふ所を尋ねんとならば、召に從ひて參るべきよしを認めてある。此夜定政は長子吉五郎定知を引連れ東叡山の最教院に入りて薙髪し、墨染の衣に着換へて、能登入道不白と號し、幼兒は兄隠岐守定行の許に頼みやり、妻を里方に返し、父子家人四人、緇衣の下に打刀を横へ、銅鉢を手にし、江戸の町々を松平能登の入道に、ものたべ〳〵と云ひながら走り廻つた。同月十八日定政の兄、伊勢桑名の城主松平隠岐守定行を召して、弟能登入道の所行は狂氣の沙汰なればとて、其罪を赦して預けられた。要するに能登入道の多感なる、時勢を慨し、其封邑を擲ちて、一世を諷諫したので、其跡は不思議な擧動であつたが、決して狂氣として目すべきではない。當路者に對する諸侯の不平は、能登入道之を代表してゐる。神經質な能登入道は癇癪を起して、自身と封土とを棄て浮世をよそにしてしまつた。然し諸侯の中に、一代の豪傑ありとすれば、そのやうに簡單な解決はしなかつたであらう。御三家の一人なる紀州の南龍公の如きは、果して時勢に對して、このやうな意見を有してゐたであらうか。

正雪の兵を擧ぐるや、紀伊殿御登城と大呼して江戸城に亂入する手筈になつてゐた。又彼等は、紀伊殿に召抱へられ、若くは召抱へらるゝ内旨ありと稱してゐた。又南龍公花判の謀書數通は浪人どもより沒收して、老中の手に收められてゐた。此謀書に就いては南龍言行錄に詳しい。南龍公花判の謀狀數通を浪人どもより公儀へ差出したので、老中どもは、こは一大事の起りけるよと、竟夜衆議を聚めての密談。とにかく紀伊大納言を城中に招き、直に此狀を見せ參らせたらば、事の實否は知れるであらう。其樣子怪しと見て取れば、城内にて有無を云はせず捕縛しようと、屈強の手だれもの數十人を城内便宜の處に伏せ置いて、其登城を待ち受けた。やがて尾張中納言光友、水戸中納言頼房の登城があつたので、老中どもより、紀伊殿直判の謀狀を見せ、「此事いかゞでござりませう」と申し、いづれも片唾を飲んでゐる。尾張殿は之を見て「紀伊殿が大事を思ひ立ち給ふとならば、何で浪人

たちの力を頼まれよう。こりやまさしく謀書ぢや」と事もなげに云ひ放つ。水戸殿も同意見である。然し神經がぴく／＼したけちな量見の老中どもはとかうの思案なく唯手に汗を握つてゐる。やがて紀伊殿登城ありて着座なされる。井伊直孝、酒井忠勝、松平信綱より浪人陰謀の旨を申演べる。阿部忠秋は件の書狀數通を披露する。紀伊殿少しも騒ぐ氣色もなく、静に彼の書狀を殘らず披見し、打解けた面色にて「いや／＼これは目出たい、もう氣遣はないわい。其仔細は斯うぢやて。浪人どもが外樣大名の判を贋せて、謀書いたしとなりや、三代の御厚恩を忘れ、狂氣のもの逆心し致いたかと、御疑ひもあらうが、私の判を似せて一味のやうに僞る上は、少しも心配はない。これなら無事であるぞ。萬一御幼少の公坊様がそれでもお疑ひとならば、私は國を差し上げて思召通りにならうから、些とも氣遣はござらぬ筈ぢや。いやこれは天下安全の基、目出たいことぢやのう」とあとはから／＼からと豪傑笑ひ。老中どもは、苦もなく煙に卷かれて、まことに目出たうございますとの挨拶。やゝありて「紀伊殿が何しに御謀叛の企がありませう。それを御判形を似せるなんぞ、一しほ不埒のものどもでございます。いづれも極刑を科するでございませう」「いや待つた。其うちの若い奴四五人は助けて置かつしやい」と、南龍公は云つた。「是はかさねて御吟味御穿鑿のためなり」と言行錄の記者は云つてゐる。三家に退出する。井伊、酒井、阿部、松平も同道にて退城せんとすると、酒井讃岐は「おい掃部殿／＼、今の紀伊殿の挨拶を何と聞かしやつた」掃部頭は立ちどまり、振りかへりながら、「あれだから恐い親爺さ」

言行錄には、南龍公は百姓、町人、出家、山伏を諸國の探偵とし、其國々の巨細を夙に聞知してゐた。正雪陰謀のことも、判形謀書のことも、駿河狐ヶ崎の眞言坊主之を謀知し、七日前に吉見喜左衛門方に參り、渡邊若狹守直綱に注進したので、既に之を承知してゐたとある。酒井空印言行錄等にも此謀書のことを載せてゐるが、いづれも彼等の手柄話にしてゐて、信じ難い。豪傑の南龍公であるから、其言行錄にあるが如く、老中連を煙に卷いたのが、眞實と思はれる。正雪の書置にも、南龍公との無關係を力說してゐるが、力說してゐるだけに何だか可笑しい氣もするし、七日も前に知つてながら知らぬ顏してゐる南龍公の度胸にも疑の眼がかゝる。

南龍公は江戸初世に於ける第一の豪傑であつた。福島正則の家臣等で浪々の身となつた人材を召抱へて、厚く之を遇した。中國もの、關東もの、五畿內、北國、四國の名あるものども、此君に依りて食祿を得るものが少くなかつた。聞えある士、又は筋目の武士をいかほども召抱へて、懇に召仕つた故、皆身命を棄てゝ事へたのである。明の遺臣鄭芝龍が援を我國に乞つた時、「大明より加勢を乞ふこと、本朝の威光、四海の光輝である。諸浪人を集めたなら數十萬もあるであらう。それに西國、中國の大名小名を加へ、我等を總大將に仰せつけられたなら、大軍を率ゐて、大明へ攻入り、日本の手並を見せるであらう」

と、勇氣凛々として云ひ放つたほどの豪傑肌である。那波道圓の如き硬骨の名臣が輔佐してゐたので、彼が天才の英資は當代に於て群を拔いてゐた。

南龍公が正雪に加擔してゐたと思はれない。然し當時の幕閣執政どもは三家をも絕えず猜疑の眼で見てゐた。駿河大納言忠長の悲慘な最期にも、執政の魔の手は伸びてゐた。南龍公は常に他にて飲食することを避け、「國主の身にては、一門兄弟のかたにても、むざと料理を食し、湯水を飲むべからず、兄弟の中にても、敵を飼ふことあり、必ず〳〵其用心第一なり。」と戒めてゐるほどに、猜疑の間に身を處くの注意を拂つてゐた。彼が士を愛するの深き、近國他國に名あるもの、地侍、其外にも、內々にて彼は扶持してゐた。伊勢、大和、河內、近江、山城、丹波、攝津に、かやうのものは其數を知らなかつたと云はれてゐる。彼は豫め一朝の事變に備へてゐたのだ。

よし正雪に加擔せずとも、全然無關係とは云はれまい。知つて知らぬ顏し、風雲の變に際して、幕閣を根本的に改造するが如き意圖の蔵はありしやと、臆測するのも、强ち無理ではあるまい。彼が如き豪傑の資を以てしては、幕閣の齷齪の政には堪へられなかつたであらう。幕閣から云ふと、彼を除きたかつたに違ひないが、彼は群小に乘ぜらるゝやうなぼんくらではなかつた。とにかく正雪が名を紀伊大納言に假りるほどに、彼は名望あり、力量あり、人氣あり、地位があつた。若し眞に彼が正雪に加擔するとすれば、天下の一大事であつたが、彼は其國を賭し、其地位を賭して、幕府の根柢を覆へし、德川氏の社稷を危うせんとする如き無謀の人ではなかつた。但し、徐に機を待つ利口さはあつたらう。

六　大事露顯

正雪の門人に丸橋忠彌と云へる丸橋流十文字槍の名人があつた。正雪の推擧に依りて、大名、旗本の邸に出入し、其家臣に槍術を教授してゐた。本鄕弓町、お茶の水のほとり、吉祥寺門前（今の駒込吉祥寺はもと神田臺にあつた）幕府中間頭大岡源右衞門の邸內に住んでゐて一家は妻と母及三人の男子（七歲の郞之助、五歲の辰之助、三歲の三七）であつた。彼は土佐長曾我部氏の子孫と稱してゐたが、正雪に取りては無二の股肱であつた。

正雪等陰謀の策源地は道灌山で、四月二十五日、月黑き夜のことであつたと云はれてゐる。當夜會合の結果として、正雪は先づ駿府に赴き、久能山に據りて、其財帑を奪ひ、此を總本營となし、江戶表は忠彌、總大將となり、徒黨の一人小石川煙硝藏奉行河原十郎兵衞をして、烈風の夜に火を煙硝藏に放たしめ、之を相圖に各所に火を放ち、老中以下の周章して登城するを、飛道具にて路に要擊し、かねて準備せる葵紋の提灯を振翳して、「紀伊殿登城」と連呼して江戶城內に亂入し、之を占領する手筈であつた。吉田初右衞門、金井半兵衞は大阪に、熊谷三郎兵衞、加藤市右衞門は京都に赴いて、江戶の變を待ち、同時に蹶

を擧げ、東西相應じて、一擧に鯨鯢を屠らんとする大規模の計畫であつた。其徒黨は千餘人と注せられてゐる。

規模が大きいだけに、人數が多いだけに、此計畫は漏れ易くあつた。七月二十一日、正雪は、江戸を發して駿府に赴いた。紀伊殿より召抱へられて出發との觸込であつた。翌々日、松平伊豆守信綱の家臣奥村權之丞から信綱に直々密告する所があり、同じ日に、弓師藤四郎から町奉行石谷左近將監貞清に正雪から弓矢の注文夥しき旨と、正雪計略の一斑を急訴する所があつた。此他にも浪人より密告するものがあり、既に備前の池田光政からは老中阿部忠秋に池田家の紋所の提灯、高張を注文するものある由につき、取調べられたき旨の屆け出でがあつた。浪人活躍の飛報は次第に漏れ聞えて來た。兩町奉行石谷及神尾備前守元勝は藤四郎の急訴に依り、直に逮捕に向はんとした折に、松平信綱は急登城ありて、老中を會し、直に逮捕の嚴命を兩奉行に命じた。二十四日の曉、夜はまだ明けざるに、兩町奉行、與力同心以下は切支丹宗徒を捕ふと揚言し、藤四郎を案内とし、暗に乘じ、忠彌の家を圍んで、火事だ〳〵と連呼し、門を飛越え、屋に上りて騷ぎ立てた。初秋とは云へ、まだ短い夜の夢が圓かであつた。忠彌は、がばと跳ね起き、刀をも指さず、「火事はどこだと」飛び出たところを、石谷組の同心菊池源左衞門は、「御用」と唯一聲、組みつく。「えゝ小癪な」と、ふりほどかんとしたるを、數人寄つてたかつて、重なり合つて、手取り足捕り捕縛してしまつた。驚き屋へ上る一族も難なく縛しめの身となる。一行は直に小石川鹽硝藏に馳せ向ひて、河原十郎兵衞を捕縛した。

二十三日、使番駒井右京を急使として、駿府城代大久保玄蕃頭忠成等に正雪等逮捕の命を傳へた。翌日、又使は派遣されて、江戸表の忠彌捕縛を報じ、別に令する所あつた。之に依れば、正雪の妻は江戸にて捕縛に就いたのである。獄舍中に、正雪の人相を說いて、「せい小さく、色白く、髮黑く、眼くり〳〵として、ひたい短く、唇厚く、顋がつそう」とある。叛骨隆然と見える。

正雪の駿府に着いたのは七月二十四日であつた。旅宿は茶屋町の梅屋九郎右衞門、表向は病氣の保養、まことは一味徒黨の簇到を待ち受けるのである。

駒井右京が駿府への早打は城代より諸吏員の召集となり、それ〳〵の手配となつた。正雪は夢にも知らぬ間に旅宿梅屋は前後を遠卷にせられてゐたのである。大事の犯人故之を生捕にすべき旨は江戸より申渡されてゐた。駿府の町奉行落合小平次は與力同心を引率して、梅屋の表口をひし〳〵と固めた。先づ與力を以て正雪に、「江戸より手負の詮議これあるにつれ、旅人の掟改めを致せば、早々町奉行宅まで出頭あるべきやうに」と申入れた。正雪よりの返事は、「紀伊大納言の家來でござるが、道中より霍亂の氣にて煩つて居れば參り難い。旅宿へ檢使を遣はされ、手掟の有無をお改め下さい」とのことである。「お斷りは御尤もなるが、紀伊殿御家中衆の旅宿へ檢使を差遣すは遠慮を致

さねばなりませぬ。ともかくもお出で下されたい」と、町奉行からは再び申入れたが、それに對する返事はなかつた。

正雪の慧眼なる、事態の容易ならぬを觀破したのであらう。やがて正雪一行中の一人が表へ出て來た。年の頃は四十ばかり、晒しの帷子を着、袴は穿かず、大小をたばさみ、熊の皮の大巾着を提げてゐる。與力野木市右衛門、松田惣左衛門は出で迎へ、双方禮を厚くして、挨拶する。熊の皮の巾着提げたのは斯う云つた。「御遠慮とのことですが、其儀は此方が申したのですから、些とも御會釋には及びません。向後のためとのことならば、證文を差上げますから、早く檢使をおよこし下さい。」松田は之に對して、「そりや御尤もですが、證文も何だか變です。どうしても御病氣でお歩きが出來ないなら、乘物でお出で下さい。一つには紀州殿のお爲めでもございます。」と云ふと、「そんなら少々お待ち下さい。」と熊の皮は中へ入つた。

熊の皮は表の様子を探つたのであらう。正雪は萬事休すと覺悟したことゝ思はれる。やがて、ほの〴〵と東の方が白んで、夜は明け初めた。此上はとかうの問答は無用、たゞ押入らんと、與力同心はひしめいた。正雪一行九人は奥座敷にゐたが、中仕切の戸を半ば開いて、いづれも大小をたばさみ、大肌抜ぎとなり、尻を高くからげて、一同立ち並び、「これこの通り手疵は少しもござらぬ。よく〳〵御覽なさい」と高く呼ばはり、足ぶみして見せた。すると正雪は一行中の坊主に刀を持たせ、侍どもを左右に引連れ、羽二重の袷に、蠟色鞘柄の脇差を帶し、杖をつき、いかにも草臥れたるさまにて、靜々と出で來り、與力衆に打向ひ、「夜中より度々申す如く、旅中にて煩ひたるため、早速にお目にもかゝりませなんだ。家來どもの手疵はお改めなされたか。怪しいものがありましたか。拙者はまさか此にて肌を脱ぐにも及びますまい。各々方御覽の通りにてござる。さて各々方は斯く大勢にて夜中より何の御用向にてこゝへはお越しなされたのですか。拙者は紀州大納言殿御内のものです。拙者はとにかく大納言殿に對して異な議ではございませぬか。」と、物言ひも急かず、昂奮せず、靜にゆつくりと云ふ。野木市右衛門は、「度々申す通りですから、早く小平次の宅へお出で下さい。もう問答は無益です」と聲高に云へば、正雪は莞爾と笑つて、「御尤もですが、餘り仰山な云ひやうぢやありませんか。乘物で行きますから支度をします」と、つと内に入つた。

一行は血氣盛んな壯士である。血相凄じく、いづれも切つて出でんと云ふ。正雪合點せず、「何の五人十人打切つたとて、遁られることが出來よ。なまじ生捕られて見ろ、拷問に遇つて見苦しい死樣をするから、それより一所にゐて尋常に切腹しよう」と申聞せ、遺書一通さらさらと書き認め、一同に讀み聞かせて前に置き、片膝立てゝ、切腹した。一同も思々に自殺する。之より先、一行の一人は表の方へ廻り、「正雪唯今罷り出ますれば、門前の衆を少々お開き下さい」と云ひ棄てゝ内に入り、如何にもひしめき合へる氣合、今にも乘物を舁ぎ出す體と見えた。一同は之に力を得て、今か〳〵と待ち受けてゐたが、奥の方

は詰まり返つて、中々出る樣子もない。さては切つて出るのであらうと、一同は身構へする。やゝしばしありて微に矢聲太刀音がする。「南無三先んぜられた」と云ひさま奧へ飛び込むものがある。つゞいて與力同心十四五人障子を、蹴破りて踏み入る。見れば座敷二階に正雪始め一行はまばらに並居て自殺してゐたのであつた。外よりは大勢聲々を打ち、板戸を打破つて亂れ入るに、與力は之を制し叱る。「先づきの坊主の死骸が見えない」と云ふものがある。「もう召捕つた／＼」と答ふるものがある。見れば坊主は縄にかゝつて、同心二人に押へられてゐる。此坊主は元増上寺所化鐵念で、一人を介錯し畢つて、自殺せんとする所を踏み込まれて召捕られたのである。正雪所持のものは槍一本、具足櫃と小さな箱櫃一つとであつた。遺書は奉紙二枚にざつと認めたもので、ところ／＼に血がついてゐた。

今度謀反有之、私致叛逆上樣に被入聞召無是非仕合、尤斯く可有之儀と存候。幷私儀如何ぞ四代天下令亂逆事可叶儀に無之候、然共天下の制法無道にして、上下困窮仕事、心有者誰か不悲之哉、然に松平能登守爲諫、雖致遁世還而狂人と執成、忠義之志空罷成候事、是天下之大なる歎、上樣御爲不宜儀に存候。私不肖に御座候得共、天下令困窮之讃岐守等、爲令遠流少々爲謀儀企人數令籠城此旨段々天下御長久之政事申、其上にて如何樣共可罷成と相謀候得共、不肖之志徒に罷成候、紀伊大納言樣之御名を借り不申候得ば、人數のかたらひ難成候故、偽而蒙御扶持候者と申候、私儀誰人よりも扶持申請候者に而無之候、心底天之照覽此外無他候、申達事數多御座候へ共、時急早々申殘候以上

由比正雪

御奉行所

正雪の一族も皆捕へられた。八月十日、品川にて忠彌外二十八人を磔に、七人を斬に處し、翌月十八日、正雪以下の死骸及一族十八人を駿府在の安倍川原にて磔若しくは斬に處した。金井半兵衞は大阪天王寺にて自殺したが、其遺書には、正雪の心事を明にして、「正雪無道無欲にして、此事を企つるにあらず、先君御他界後、政邪にて、武家、町家、農商迄或は患ひ或は怨る、是故に上に訴へんがため、天下の浪人を催し、一所に堅めんと欲す、縱ひ自滅すと雖も、天下萬民のため一ヶの身命を惜むべけんや、故に無道に非ざる事」と述べてゐる。吉田初右衞門は有馬の温泉に隱れ、捕吏と鬪つて斬られ、京都一方の將たる熊谷三郎兵衞は江戸芝にて自殺して。徳川實紀、九月十三日の條に「叛黨二十三人、品川にて磔、あるひは梟首せらる」とあれば、餘黨の捕へられたのも猶あつたのである。密告した人々は賞せられ、處士林理左衞門は五百石、松平伊豆守信綱の家臣奥村權之丞の弟八左衞門、從弟七郎右衞門、處士田代太郎右衞門は三百石づゝ給はりて、家人に列せられ、弓工藤四郎は二百俵、別に銀百枚、權之丞には金十枚、時服二、信綱より五百石の加増を受けた。忠彌が邸内に置いた大岡源左衞門父子三人は佐渡に流されて、此事件は局を結んだ。

七　對浪人策

幕閣の執政も浪人には懲々した。慶安四年十月十一日には、令して浪人を抱へることを禁じた。十二月十日、白書院の會議には、酒井忠勝先づ議を提出して、江戸にある浪人を放逐すべしと主張し、保科正之、松平信綱は此議尤も然るべしと賛成したが、獨り阿部忠秋は之を斥け、「忠勝の議は其理なきにあらずといへども、畢竟國家の政令は斯くの如く狹隘なることあるべからず、江戸は天下諸大名の會合する地なれば、何方にても出身するに便あるをもて、處士のたづきなきもの皆來りて此に集りて、生產を求むるなり、然るに處士皆追拂はるれば、彼等は出身の路を失ひ、旦夕に迫りて進退谷らば、又いづかたにか潜みて、山賊强盜をもなし、良民の害を企てんもはかりがたし。又彼等がさしあたりての困窮は云ふに及ばず、其妻子たるもの、いかで悲歎せざらんや、このことゆめ〳〵然るべからず」と申す。井伊直孝聞いて、「忠秋の申さるゝところ尤も其理あり。彼等府下に群居して、如何なる惡事を企つるとも、此度の如く追捕せんに何の難きことかあるべき。正雪等が所爲に懲りて、諸浪人を追拂ひ、彼等を饑餓せしめしと評論せられんこと、天下後世に對して恥づべきなり」と同意したので、忠勝も信綱も感服して其議が止んだと云ふ。然し其の追放を主張したるもの、此議を排したるものゝ、誰なりしかは、事實明かでない。唯幕閣内に浪人追放の議のあつたことゝ、其の沙汰止みとなつたことだけを記して置けば足りる。

然るに翌慶安五年(承應元年)九月に至りて再び浪人別木庄左衛門、林戸右衛門、三宅平六、藤江又十郎、土岐與左衛門等の變があつた。是月十一日より芝増上寺にて二代將軍秀忠の夫人崇源院の法會が行はれた。十五日法會の畢るを待ち、別木等は徒黨を聚め、火を寺のほとり二三ヶ所に放ち、之に乘じ寺内に闖入して金帛を奪ひ、執政等が消防の下知とて出馬するを、途にて鐵砲にて打取り、江戸府内の騷動を機として、天下の變を起さうとの計畫であつた。普請奉行城半左衛門朝茂の家人長崎刑部左衛門嘉林なるもの之を密告したので、十三日信綱は増上寺にある阿部忠秋を呼び迎へ、酒井忠勝の日光に赴くを止め、密議して、兩町奉行の許に馳せ參じ、直に此等浪人の逮捕を命じた。此夜は風烈しきを以て、寺の警衛を嚴にし、兩町奉行神尾備前守元勝、石谷左近將監貞清は部下を引き連れ、札の辻、増上寺門前町に押寄せた。浪人ども、此を先途と防ぎ戰つたので、取手のものにも手負少からずあつたが、遂に召捕はれた。獨り土岐與左衛門は逐電して其蹤跡を失したが、十六日増上寺の裏にて自殺して未だ絶命せざるを捕はれた。是月二十一日、逮捕せられた浪人は盡く磔に處せられ、一族は打首になり、十月十日、其親戚のものは淺草の市場にて刑せられた。同月二十六日、江戸に住する浪人の査檢が行はれた。然し幕府は之に就いて、「査檢せらるゝに依り恐懼するものあるも、罪せらるゝにもあらず、又追拂はるゝにもあらず、地を貸す輩は勝手たるべし、但し寺社は寺社奉行に、市井は町奉行に、近郊は代官所に屆け出で、其故を簿に記入さるべし。新に貸し與ふる時亦之に同じ。武家の家に

抱へ置く時も、「一々所屬に從つて其趣に注記さるべし」と令し、浪人改めをした。斯くして浪人の事を好むものは、自ら爆發して、其跡を滅し是よりして浪人の變は久しく絕えた。

此等浪人の變に於ける幕閣執政の措置は極めて機敏にして、事の宜しきを得てゐる。其苦心は又買つてやらねばならない。之を利用すれば相應に役に立つべき多くの浪人として路頭に迷ひ、遂に天下の變を窺ふに至らしめたのは、彼等又與りて罪がある。戰國時代を去ること遠からぬ當時であつたから、自由奔放の氣が橫溢してゐた。況んや彼等の徒は職を得ずして、糊口に窮してゐたのである。正雪一片の俠骨は之を座視するに忍びず、遂に擁せられて、其犧牲となつた。執政が之を救ひ得ざりしは、彼等に大經綸の抱負と大手腕とが無かつたためである。然し其爆發するに及んで善く之を抑へ、其波瀾を大ならしめたのは、一意德川家の爲に謀つた彼等が忠實恪勤の力である。諸侯の意氣が既に沮喪し込た當時に於て、在野の浪人のみ氣を吐いてゐたが、之も亦此後、遂に凋落に歸した。其の學識ありて氣慨あるものさへ、常に幕府の飛耳張目を怖れずに、往々奇禍を買つてゐる。江戶は彼等執政の察々の政に依りて泰平となつたが、氣慨氣骨は長へに泯んでしまつた。其の倜々市井に遊俠を賣物にしてゐた無賴の徒も剿絕された。

四代に至りて、江戶幕府の基礎は愈々鞏固となつた。寬文、延寶を經て、五代の天和貞享、元祿の太平時代は之に繼いだ。慶安一件の如きは、過去の語り草となり、狂言綺語となり、講談となつて、面白く囃し立てらるゝやうになつた。西南戰爭が遠い〱昔話となつてしまつたと同樣である。然し西鄉隆盛傳は近來新しく復活されて來た。大西鄉の稱は盛んに云ひはやされる。西鄉の時勢に對する不平不滿と其俠骨とは、遂に薩南不平兒の犧牲となつて、新政厚德の旗を飜へすに至つたのである。西鄉の心事と苦衷とは漸くに了解されて來た。よし其間に差別はあつても、由比正雪は又江戶幕府の西鄉隆盛である。彼の心事と苦衷とは又大に諒とせねばなるまい。彼は惡い時勢に生れた。彼をして其終を全うせしめなかつたのは、時勢の罪である。然し其終を全うし得なかつたところに、彼の眞價があらう。彼も亦男子の本懷を達したのである。毀譽褒貶は彼に於て何かあらう。宜しく後世に知己を待つべきである。(畢)

外交官珍話

堀口九萬一

(一)藝者公使柳爵々

日本にまだ外務省が無かつた頃から外務の役人であつてそれで今以て存命中なのは僕の外に今では僅か一二名にしか過ぎまいといつも云ふて居らるゝ先輩松本一郎(假名。本名は姑く預り)氏は五六十年前蕃書取調所時代から我國外交の事務に携はり、明治七年には柳原前光公使に隨伴して北京に赴任し其後歐洲各國の公使館に在勤し次でまた長い間外務省に勤續し、十五六年前辭職して今は城南の閑地に悠然自適伴三昧の生活を送つて居らるゝが、何分久しい間、外務官で居られたのだから、その當時即ち日本開國初當の外交事情の表裏などには深く精通して居られて、書物や記錄に載つて居ない有益な外交談を聞かして貰はれるのと、特に先生は磊落洒脫、快活剽輕で、おまけに座談の巧妙は眞に堂に入つたもので隨つて珍談奇聞の豐富な持主なのであるから僕などは毎度お邪魔に上がつて隨分有益な教を受けたり又は半日を面白く過ごさせて貰ふのである。で四五日前にも久しぶりでお訪ねした處が、先生非常に喜ばれて、當時の外交官に關する珍談中で、まだ餘り世上に知られて居ない異聞を澤山話して聞かされた。此の日は全く文字通りに抱腹絶倒した、次第である。依つて今その內の最も面白いものを二つ三つ後の思出にと書いて見る。

北方政府の外務大臣がウエリントン顧(顧維鈞)で、南方政府の外交部長がウーシエーン陳(陳友仁)だなどと役人の名迄が歐米風に變はつて來た今日の支那と僅か半世紀前僕が北京在勤當時の支那とを較べて見ると實に隔世の感に堪へぬ。一寸した事でも支那人は直ぐに桑滄の變などゝ大袈裟に言ふ癖があるが、併し支那の今昔の變化こそは誠に以て桑滄の變と云うても强がち誇張した形容では無さそうに思はれる。

僕が始めて北京に行つたのは明治七年の三月で特命全權柳原前光公使に隨伴して書記官として赴任したのである。明治七年と云へば今から丁度五十三年前で、此年日本には佐賀の亂があつたり、臺灣征伐があつたりした年で、維新匆々、萬機漸く其緒に就いたばかりの時であつた。北京に於ける日本公使館でさへ、漸くその一ヶ年前即ち明治六

年の十一月（二十四日）山田顯義さんが最初の駐清特命全權公使に任ぜられて、之を開館した樣な次第である。山田公使は一年足らずで歸朝せられたので、そこで柳原公使が二代目の公使として支那に乘り込んだのである。（此の時、清國は穆宗皇帝の同治十三年で、其の年穆宗崩御、翌年德宗が立て光緒と改元ある）

當時の支那は捻匪の亂漸く平定し、曾國藩が二年前に沒したので、李鴻章之に代り、左宗棠や曾紀澤等と共に專ら外交の衝に當つて居た時代であつた。李鴻章は當時直隷總督を兼ねて居たので多くは天津に住つて居て時々北京へやつて來た。

偖て、日本公使館の事務は開館當初の事とて中々繁忙であつた。特に大久保利通公が臺灣事件の談判の爲めに北京へ來られたので、清國外務衙門との往復交涉は頗る頻繁であつた。併し今日のやうに、年がら年中重大事件の頻發と云ふ程では無く、且ツ當時の清國のお役人の風は、純然たる舊式の支那流、誠に悠長で、鷹揚なものであつた。だから臺灣事件の談判は、双方とも談判としては嚴重に折衝しては居るものゝ、左程までに躍起せず、悠悠不迫の態度を持し、特に支那側では遠來の大久保大使を慰勞する爲に、饗讌歡待の限りを盡くすのであるから、當方も亦之に應酬すると云ふ風で、樽俎の交歡は實に屢次であつた。

處が日清兩國の大官連は、主客共に言語不通の宴席では、寒暄の挨拶でも、世間話でも、一から十まで通譯附きと云ふのであるから、話のハヅムいゝ理由がない。で自然宴席のシラ氣る恐があるが、さてかう云ふ場合になると、同文同種が大に役に立つので、酒三行の後には、常も直ぐと双方の間に筆談が始まる。筆談は勿論漢文である。下手上手は別として兎に角當時の日本の大使や公使になる人などは漢文も書けたし、詩も作ることを知つて居たものである。さて筆談となると、一一通譯を煩はすにも及ばず、而してお互に言はんと欲する處を容易に通ずることが出來るので、非常な便宜を感じた譯である。特に支那には昔から詩酒徵逐と云ふた風に宴會の席上で即興詩の唱和をするなどゝ云ふことは風流韻事最も雅致あることゝされて居たものであつた。殊に當時の支那の大官連は、左宗棠を始めとし其同僚でも下役でも皆ンな科學の試驗に及第した進士とか擧人などゝ云ふ深奧な文學の素養を持つた先生方計りなので、所謂騷壇之卓々者、即ち墨閣之錚々者なりと云ふ程の勢であつた。だから臺灣事件談判の席上では日本側は義理堂々と論じ詰めてエライものであつたが、さて詩文の贈答などと來ては、イヤハヤ桁の違つたもので、とても太刀打の出來た次第ではないのである。處が支那人は外國の客を接待することに掛けては三千年來、即ち春秋戰國以來の經驗と修養とを積んで居るのだから、如何にも行屆いた如才ないものである。で日本の使臣等が生硬な新詩語などを臆面もなく創造して、漸く平仄丈けを合せ、危ぶなッしい韻字などを並べて、どうかこうか詩の樣なものを書き連ねると、支那の大官連はイヤ清新だ、奇警だと褒めそやし、中には險韻踏ミ得テ險ヲ覺エズ自ラコレ大家ノ筆力などゝ持ち上げて呉れるので、當方は例の支那流のお愛想だとは知りながらも、内心竊に「ほんとうに巧いのか知ら?。」などゝ持ち前の自惚も、多少は加はつて來て、そこで盛に次韻だ、和韻だと書きなぐり、且つは詩筒の往復も頻りに行はれたものであつ

た。

さうかうして居る内ち、程なく大久保公は首尾克くその使命を全うし歸朝せられた。その時僕は天津迄お見送り申したが、其途中通州を下る時に、大久保さんは一絶を作つて僕に見せられたので、今でもまだよく覺へて居る。

下通州偶成

奉勅單般向北京　黒煙堆裏蹴波行
和成忽下通州水　閑臥篷窓夢自平

と云ふのであつた。これは事實詩であつて而して公の風格ある傑作として居られたものである。

大久保さんが北京を、お立ちになつた後でも柳原公使は支那の大官連と詩の唱和などを續けて居られた。

柳原さんはさほどお上手と云ふ程ではないにしても、昔も詩も一と通りはお出來になつた。當時柳原さんの詩で今でもまだ僕の記憶に殘つて居るのは

落日下高林
漠々寒烟暮
空山調素琴
相思碧雲外

と云ふ五絶と

一夜西風萬感來
紛々黄葉下蘇臺
夕陽横岸鵑啼冷
淡月蘆汀雁叫哀

の七言絶句などである。

さて詩を作ると云ふことは支那人間に重きを爲す一の要素でもあつたので、大久保さんも柳原さんも北京に居られた間は時々詩を作られたものである。言ふ迄もなく支那は文學の國であるから讀書人は一般に尊敬される特に外國人で支那の大官達と詩文の應酬をすると云ふのだから、上手、下手は別問題として更に角支那人の目には矢張エライ人だと云ふ好印象を與へたのである。

而して詩文の應酬には大久保さんはいつも甲東と云ふ號を用ゐて居られ柳原さんは青々と號して常に柳青々と書いて居られた。

柳原さんのこの柳青々の所は言ふ迄もなく彼の陽關三疊で有名な王維の詩句、

渭城朝雨浥輕塵　客舍青々柳色新

から取つたもので、而して支那風にするには柳原では面白くないから原の一字を捨てゝ、そこで柳青々とやつたのである。而して北京で有名な印刻家に頼んで「柳青々」と云ふ立派な落款印まで出來上がつたのだ。

この柳青々から意外な面白い話が出て來るのである。

日本でも藝者や娼妓の名前は、普通の名前とは違つた、謂はゞ換名とか、源氏名と云ふやうに娼妓ならば、夕霧、少將、内侍、高尾などと呼び、藝者ならばポン太、奴、〆吉、萬龍などと云ふが如く、名を聞いた丈けで直ぐにソレと分かるやうな按配式である。支那でもこれと同じことで、宋の徽宗の時の名妓李師々や、剪燈新話に出て居る翠

翠々や又は吳梅村の詩で有名な陳圓々などを始めとして其他徐楚々、趙燕々、又は張娟々、王織々など々、疊文即ち同じ字を二つ續けた名前は近代の支那では藝者の源氏名と云ふてもよい位である。(普通の人の女子の名としては西廂記で名高い崔鶯々などと云ふのが唐代にはあつたが、要するに双文の名は女子に限られたものである。)

處が四書五經、左國史、漢や唐宋諸名家の詩文集の如き古典ものの外、支那小說や記傳などは一冊も讀んだ事のない柳原公使は、そんなことゝは少しも御存ないので、

『柳靑々！　アア良い號だな！』

『而して柳氏と云ふのは支那にもある、柳々州、柳屯田、柳公權、などが即ちそれである。』

てなど々大に御得意で、宴會席上の唱和や、大官連との詩文の應酬など、いつも柳靑々と署名してゐられた。

處が、或る日李鴻章の秘書官陳詮が、一通の書翰を大臣の前へ持つて來て、而して少々もぢ〳〵して居たので、李鴻章は

『オイ、その手紙の用事は何にか？』と訊ねた。(こゝで一寸說明つて置くが。支那では其長官宛てに役所へ來た普通の手紙は公私に拘らず秘書官が皆ンな之を開封し、一應讀んだ後で、長官の處へ持つて出て、其要旨を申上げ、若し返事を要するものがあれば其返事の大意を長官から聽き取つて引き下がるのである)

すると陳詮秘書官は、

『ハイ、……イヤ……その……この手紙は……。』

と益々はにかんで居る。

李中堂は

『オイ明瞭と言はぬか！　如何したんだ？』すると陳秘書愈々恐れ入つて、手紙の表面の文成殿大學士、太子大保、外務大臣〳〵鴻章閣下の宛名の右方に小さく

柳靑々　と書いてあるのを指して、

『これは……その……開封しては……』

と囁つて居るので、李鴻章は破顏一笑

『ウン、ソレカ、それは日本公使のだよ』

そこで陳書秘が開けて見ると、何のこつた！　柳原公使から其近什を李中堂に似したものであつた。

やがて陳詮は秘書官室へ引き下がつて來て、同僚にその顚末を話したが、一同は腹を抱へて洪笑。これより何後彼等秘書官仲間では柳原公使を綽名して「校書公使」と云ふことにした。校書と云ふのは言ふ迄もなく藝者と云ふことの雅稱である。

そんな事とは少しも知らぬ柳原特命全權公使は北京に駐在してござる間は、淸國大官との私信には墨痕鮮かにいつも變らず。

柳靑々

(二)、、、、公使アーヴヰン

これは子爵榎本武揚さんが外務大臣であつた時、慥か明治二十四年

の五六月の頃の事でした。

榎本さんは生え拔きの江戸ッ兒氣質で、物事をてきぱきとやることが好きな人でした。戊辰の時、函館五稜廓へ立籠つて、官軍に敵對したのなども、其氣質の一端です。而して學問もあり才氣もあり膽もあつた人なのですから、一寸の間逼塞して居られたが、やがて又明治政府に採用されて大臣迄になつた人です。

榎本さんは生得人に好かれるタチの人で、外國公使なぞも榎本さんと話をすると氣が快濶とするやうで、日本人には稀な人だと褒めて居たものです。それも畢竟榎本さんは表裏のない人で、特に上邊を飾つたりなどすることが大嫌ひであつて、思ふ事は誰の前でもどしどし言ふと云ふやうな至極率直、眞率な人のやうでした。だから當時我々屬僚の間でも『氣が置けないで善い大臣だな――』などゝ食堂で偶語した位でした。

その當時、卽ち明治二十四年頃には、布哇は厳然たる一獨立國であつたので、布哇政府からは公使が東京に派遣されて居たのです。慥かアーヴヰンと云ふ、大の日本好きな人でした。而して日本移民を布哇へ送ることを開始したのは實にこの公使の盡力に依つて出來たものです。（その後布哇が米國に併合せられたのは明治三十一年で、大隈伯が外務大臣をして居られた時でした。）

このアーヴヰン公使は始めて日本移民を布哇へ送る事に就て榎本外務大臣の諒解を求むる爲めに頻りに外務省へやつて來たものです。榎本さんは多少英語にも通じては居られたが、外國公使などゝの談判や會談などに少しでも誤解のあることを恐れて、必ず當時通譯を附けられた。當時その通譯の任に當つた人は、後に長い間、原首相の秘書官として令名のあつた、英語の達人、山田敬德君であつたやうに記憶して居る。

處が、このアーヴヰン公使は少し日本語がわかるので（而して此の頃の大抵の西洋人がさうであつたやうに、御當人は日本語も達人位に心得て居たものである）英語で詳細に日本勞働者を布哇に出稼せしむることの利益を說明し終つた後で、山田君が今や日本語に之を通譯せんとするのを見てとつた。アーヴヰン公使は矢繼ぎ早やに自分で其要點を大臣に說明するために日本語をあやつり出した。して其文句が大に振つて居る。曰く

『布哇　、、、、モリ、澤山アリマス、日本若イ者行ク　宜シイ』

と云ふのであつた。

最初の內は榎本さんも少し變だとは思はれたが、其まゝに聞き流して居られた。

すると其次の會見の折にも亦布哇公使が同じ文句を繰り返すので、榎本さんは直ぐと其場で山田君に訊ねて

『君、アーヴヰン公使の話の中の　、、、、モリと云ふのは何の事かね。』山田君は

『あれですか、あれは virgin forest（處女森林）の直譯の積りで、アーヴヰン先生一流の飜譯ですよ』

と答へたので、大臣は成る程 virgin――、、、、かこれは奇譯だと大笑された事であつた。

其後布哇公使が亦た會見に來た時に、榎本大臣は小使を呼んで「通商局の山田さんにナー、大臣室へ一寸入らしつて下さいッて、、、、、公使が見えたから」これは以來布哇公使は外務省内一般に、、、、公使の綽名で通ることになつた。而して其の命名親は全く榎本大臣なのである。

榎本さんは和蘭語も露西亜語も誠に巧いものであつたのみならず、端唄や長唄なども亦た堂に入つたもので、何でも器用な人であつた。特に詩も中々立派で詩も善く作られた。左の狂詩の如きは以て其の縦横の才氣の一端が窺はれる。

高帽超然敕任官
威望恰作二大名顔一
肩書不レ屬薩長土
人並欲レ兼英佛蘭
二等勳章天恩渥
五年在勤露京寒
俸金一萬三千兩
誰道全權公使難

これは明治十一年頃榎本さんが在露公使であつた時の作である。僕は公使の下に書記官として在勤して居て、その當時見せられた事があるので、今でも善く記憶に殘つて居る。

(三)苗氏奇話

外交官の綽名に關する珍談を話した序に、今度は外交官の本名に就ての奇話を一つ話して見やうと、松本さんは微笑みながら話を續けられた。

明治十二年の八月頃でした、宍戸璣さんが駐清公使として北京に來られたので、一定の形式に從つて公文を以て早速外務衙門へ其着任通知をした。すると外務衙門からも例の通り公文の返事が來た。すると四五日經てから外務衙門の書記官長劉紹元と云ふ人が公使館へ尋ねて來て、書記官に面會したいと云ふので、僕が會ふて見ると、劉君が言ふのです。實は大臣の內命に依つて來たのですが、書記官に內密に相談して見て來いと云ふので上がつたわけですと言ふから、其用向はと聞いて見ると。今度新たに着任せられた日本公使の姓名の讀み方を教へて貰ひたいと云ふのです。一寸變に思ひましたが、兎に角宍戸が姓で璣は名であると答へると。劉先生はにや〳〵笑つて言ふのです。

「多分左樣だとは思つて居ましたが、そうすると……」

と云つて少し躊躇して、

「それを別な字に換へるわけには參りますまいか」と云ふのである。依つて僕が其理由を聞いて見ると、

「支那のどの字引にもある通り宍は肉の古字なりで、宍戸即ち肉の戸であつて、支那の或る地方の方言では婦人の、、の名稱である。これでは公使の姓としても少し變に思はれるし……するから、出來る事ならば何とか變更するわけに行かぬものか。機會を見て僕から公使へ話つて見て吳れないかと云ふのであつた。

それから二三日して僕は歐洲の轉任先きへ向つて出發したので、ど

う解決したか聞く事が出來なかつたが、これ等も珍話の一つさ。

處がその後これと殆んど同じ事がブラジルでも起つたと云ふから不思議じやないか。それは外務省からブラジルへ送つた留學生の一人に河野某と云ふのがあつた。そこで公使館からブラジル外務省へその者の辭令を出した處が、外務省から直ぐに一人の書記官が公使館へやつて來て、この苗氏はブラジルでは甚だ聞こえるから變更した方が好かろうと內密に忠告に來たのであつたそうである。原書には Kono と書いてはあるが、さて之を讀む時や、話す時には Kono でも Cono でも同じに聞こえるのみならずブラジルでは K の字は皆ンなCの字に代へて書く習慣だから、書いたものも亦た Cono となる次第である。處が Cono はブラジル語では婦人の、、の名稱だから、人名としてはチト變妙に聞こえるから、何とか變へたら好からうと云ふことであつた。そこで公使館では本人とも相談の上で河野を Kono と讀む代りに Kawano と讀むことにしてブラジル外務省へ改めて通知したと云ふ事を聞いた事があるが、不思議によく似寄つた話。

(四)氏名に句切點を附けて呉れとの依賴

氏名に就ては前の話の外にまだ面白い事があつたよ。僕が支那に居た間に橋口直右衛門君と小田切萬壽之助君が書記官として北京公使館へ赴任した時の事であつた。外務衙門から宴會の招待狀を此の兩君宛てに出さうと思ふが、さてどこ迄が姓であり、どこからが名であるかが分らないので困つて居るから、どうぞその姓名に句切り點を付けて呉れと頼んで來たものだ。

(五)日本公使中で人間らしき氏名

支那人に言はせると日本から公使として北京へ來た人々の內で明治八年に來た森有禮さんと、同二十八年頃の林董さんと、同三十九年の林權助さんの三人丈けが人間らしい氏名を持つて居た……と今以て彼等の間には一つ話しになつて居るさうだ。

處が今日では支那人の氏名さへもウエリントン顧だの、ユージエーン陳だの、アレキサンドル劉（歷山）などと云ふことになつて來たのだから、その變化が一層面白く感ぜらるゝではないか？

＊＊＊

松本先生は澁茶を啜り乍らまた話を續けられた。

「支那關係の日本の外交官の珍話は今日は先づこれ位にしてをいて、こゝで一つ方面を換へて、その當時歐羅巴に於ける我が外交官の珍話を少し話して見ようか。これは又種が變つてゐるから一層面白い。

特に伊太利に我が公使館が始めて出來た時分の話などと來ては、今から振り返つて見れば全く嘘のやうな話で、まさかと思はれる程だよ。

僕は正眞正銘のところを話すのだから、まあ嗤はないで聽き給へ。」

(六)「日本人だから支那人だ」

今日でこそ日本は世界の強國であるの、五大國の一であるのと世評に持て囃されもするし、實際又押しも押されもせぬ一大強國となつたもの、僕が羅馬在勤當時の日本などは、歐羅巴人の中でその存在を知つてゐるものさへ少なかつた位のものだつたよ。

僕の羅馬着任は明治十三年の五月であつた。だから今から數へて見ると、四十七年以前のことさ。僅か四十七年で日本の國際上の位置がこれ程までに違つて來たかと思ふと、實際嬉し涙がこぼれる次第だが、その當時にあつては、僕たちはみんな悲憤の涙を呑んでゐたものさ。何んといつても日本がその存在を世界から認められたのは、全く日露戰爭のお蔭だよ。それ以前は、日本は支那の屬國位にしか思はれてゐなかつたものさ。君も知つてゐるあのきかん氣の本多熊太郎君（後の駐獨大使）が白耳義在勤の當時、さう確か明治三十三年頃だと思ふが、自宅から公使館へ通勤する途中で、悪戯小僧共めが支那人〳〵といつて馬鹿にするので、或る日本多君がその小僧の一人をふん捉へて

「おい、人を馬鹿にするない。俺は支那人ぢやないぞ。」といふと、小僧は、

「そんなら何處の國の人だ。」と疊みかけて來るので、本多君が躍起とつて、例のいかめしい顔付をして聲を張り上げ、

「俺は日本人だ！」といふと、小僧は澄ました顔付で、

「だから支那人だといふんだい。日本だつて支那だつて同じぢやないか。」といつたのには、僕も實際參つたと今以て人に話してゐる位で、全く日本は支那の屬國位にしか思はれてゐなかつたのだ。

明治三十三年頃でさへまだその通りであつたのだから、況んやそれより二十年も前の明治十三年頃などと來ては、尚一層ひどかつたといふことが想像出來るだらう。

伊太利へ始めて日公使館が出來たのが明治十三年の三月で、公使は鍋島直大公であつた。この當時の日本では、舊藩族の殿樣方を煩はして公使になつて貰つたもので、淺野長勳さんといひ、德川篤敬さんといひ、蜂須賀茂韶さんといひ、長岡護美さんといひ、みんなさうだつた。その譯は、當時の日本の財政は餘り豐かでないので、從つて公使の俸給なども僅かなものであつたから、諸外國の大公使館並みにやれ宴會をするの、やれ舞踏會をやるのといふ餘裕なんかなかつたものだ。そこで、年に五萬や十萬の金を持ち出しても、少しも内懷の痛まない舊藩主の殿樣方を公使に任命して、少くとも公使館の外觀や駐箚國の大官や各國公使館との交際丈けでも、外國に引けを取らぬやうにとの明治政府の意嚮であつたらしい。

尤も伊太利へは明治六年に公使が任命されたことにはなつてゐるが、實際は當時墺太利の維也納にゐる公使が兼任してゐたので、いはゞ名義丈けの公使館であつたのさ。當時の在墺公使は、最初が佐野常民さんで、二代目が河瀨眞孝さんであつた。

そして僕が羅馬へ着いたのは、十三年の五月だつた。着きは着いたものゝ、誠に憐れ悄然ものだつたよ。何しろ日本人は公使館員の外には一人だつてゐないのだし、その上他の外國の公使館員たちは彼等同志ではお互に親密な交際をしてゐながら、最初の内は中々日本人をさういふ交際の仲間へ入れてくれなかつたものだ。

それ程我々を、まあいつて見れば輕蔑してゐたんだね。そして僕などが散歩にでも出ると、往來でヂロ〳〵と顔は見られるし、もの好きな腕白小僧などと來ては、いや奇妙な動物でも見るかのやうにぞろぞろ後からついて來るといふ有樣で、仕舞には散歩に出るのさへ臆劫が

惡くなつた位のもの。しかしそんなことを氣にしてゐては、その時分一日だつて外國にゐられたもんではない。いつそのことそんなことは一切氣にかけぬことにして、だが心中ひそかに、今に目に物見せてくれんと銘々が銘々、激勵し合つてゐたといふ具合さ。それから比べて見ると、今の日本の外交官などは、まるで仕合せなものさ。

……ところが、十二月の末から交際季節が始まつて、先づ伊太利外務大臣を始めとし、英佛獨露等の諸大國、その他各國の公使館で、例年の通り宴會や舞踏會を催すことになつてゐたので。日本の公使も書記官も、又その招待に預かるといふ譯だつた。斷つて置くが、外務大臣や各國公使館の公式宴會には、必ずそこに駐在してゐる公使は招かれることになつてゐるのが外交界の習慣で、そして招かれた人は、これを招き返すことになつてゐるのでめる。

そこで日本の公使館でも、その返禮を兼ね旁々、各國公使館並みに宴會を催すことになつた譯だ。さあ話はこれから面白くなるのだ。

（七）鍋島公使の盛宴、各國公使の度膽を拔く

當時の歐羅巴人の日本人觀は前に述べた通りの次第であつた。で鍋島公は、兼てよりどうかしてこれを一掃してやりたいと深く考えてゐたものらしかつた。

そこでその年の九月頃直大公は、その當時の在佛公使鮫島尙信さんに宛て、『月給はいくらでも構はぬから、巴里第一等の腕利きの料理人を二人、至急送つて貰ひたい。』と云ふ長文の電信を打つたものだ。すると間もなく、フランス人の料理人が二人公使館に到着した。

さうかうしてゐる內に、羅馬は前にもいつた通り、宴會や舞踏會で賑ふ來往頻繁の交際季節となつた。そして一月の半ば頃、日本公使からも羅馬の習慣に從つて二週間前に多數の招待狀が發送された。

ところが、日本の公使が宴會を催すといふので、これが羅馬の交際社會の話柄の一つとなつて、何處のサロンでもこの噂で持ち切りの姿であつた。

といふ譯は、交際社會の人でも、日本の公使館が今年始めて羅馬に新設されたことを知らない人が多かつたばかりでなく、兎に角日本人が人並みに外國人を招待するなどといふことが、何だか不思議に思はれてならなかつたものらしい。

或る日獨逸公使の奧さんの受日に行つた書記官の小山鼎介君が、澤山そこへ集つた來客の話をそれとはなく聞いてゐると、やつぱり日本公使の招待の話をしてゐるので、そしらぬ振りをして聞耳を立てゝゐると、一人の夫人が

「私どもも招ばれたので厶いますが、してあなた方もなんで厶いますの。一體日本人の食べ物なんて、どんなものなんでせうね。なんでも聞けば、魚を生の儘で食べたり、蛇を喰つたりするといふぢやありませんか。薄氣味の惡いこと！ ですから私どもはまだ諾否の返事をさへ今のところ出してないんで厶いますの。」

小山君が翌日早速その爲體を公使に話すと、直大公はたゞ微笑せられてゐた。

さて間近の宴會當日となつた。公使館は內も外も大々的の滿艦飾、風情を添へる花などもとび切り値の高いものばかりを選びに選んで、

たんまり買ひ込み、廊下といはずサロンといはず食堂といはず、處嫌はず惜しげもなく飾りやいに飾り立て、紅黄白紫、目も覺めるばかりなのに、その花の香が馥郁と鼻を衝いて天下の春をこの一室の一夕に盡すばかり。

そして置物も扁額も壁掛も、何れも名工巨匠の手に成つた一品數千金の逸品揃ひ、飽く迄日本好みの、品であつて何處となく奥ゆかしい飾り付けだ。

來る客も來る客も、門内第一歩、玄關口からもう呆つ氣に取られて、廊下から客間を、客間から廊下を、たゞ〳〵珍奇な目を見張つて流れるやうに歩いてゐた。

やがて食堂が開いた。二十四人大の食卓上の配置、見る目もあやに、花飾り、置物、婦人たちへの小さな花束、しかも器皿はセーブルの極上、ナイフ、オークの末に至る迄贅の限りを盡した精巧品。

そして運ばれる料理は、巴里第一等の板前が腕に縒をかけたスープ、魚、鳥、肉、サラダ、果物菓子。何一つとして結構ならざるものはなく、何一つ高價ならざるものはない。文字通り贅を極め盡したものであつた。そして酒もシヤンパンもの、流るゝ計りの接待振りなのに、來賓たちは互に目と目でその畏敬の思ひを示し合つてゐた。しかも食事中はこれも選り拔きの樂手たちが爽快な樂の音を絶えず奏でて人の心を浮き立た。

食事が終ると、喫煙室にはリキユルや煙草や、それもハバナの上等やトルコ、エヂプトの精選品が、取るに任せて並べられてゐた。そして食事が終つた頃には、別に夜會に招かれた來賓が五六十人もうサロンに見えてゐた。暫らくするとミラン劇場からこの日わざ〳〵呼ばれて、これも伊太利第一のテノールと女優との合唱が始まつて、十二時過ぎ迄打ち興ずる拍手が續いた。

いよいよ散會の時には貴婦人たちに一々綺麗な花束を捧呈するなど、何から何まで行き屆いた歡待振りは、全く日本の大名ならではなし得られない大振舞だつたので、來客一同今は全く度膽を拔かれて了つて、褒める言さへも見出し得ずに、たゞ〳〵呆然、快然、愉然として夜更けて退出したのであつた。

そこでその翌日の羅馬中の新聞には、日本公使の宴會の記事が載つてゐないものは殆んどない位であつて、中にはその當日の裝飾を一々詳に述べ立てゝ、甚しきはその獻立表までも掲げて、盛大な晩餐會の成功を祝ひ筆を極めて賞讃感嘆してゐた。

かういふ風であつたから、交際社會でも四五日間といふものは唯々この話で持ち切りの有様であつた。滑稽なのは、蛇を喰はされては堪らないといつて先約を口實にして斷つた人々が、話を聞いて垂涎且つ大いに後悔したといふことだ。

しかも直大公は、このやうな盛大な宴會を釣瓶落しに一シーズンの間に五六回も催したので、羅馬に於ける日本公使館の名聲は俄かに揚がつて、我々迄が肩身の廣い思ひをしたので、今でも厚く直大公に感謝してゐる次第で、この點ばかりでも直大公が日本帝國の爲めに盡された偉功は全く大したものさ。

（八）奥さん、、、、、、、。笑話。

ちやうどこの頃のことのやうに覺えてゐるが、當時書記官小山綱介君夫妻が、伊太利外務大臣の宴會に招かれて行つたことがある。

今では食事の濟んだ後で、男は煙喫室で、婦人はサロンで、コニヤックやペパミントやウヰスキーなどを出すやうになつたが、その當時羅馬では食後の小杯は、、、(西班牙の銘酒)と、、、、、(伊太利の銘酒)を出すことが流行してゐた。

當時外務省にサブポー君といふ若い書記官がゐた。非常に氣輕な、そして剽輕者で、朝から晩までノベツ冗談ばかりいつてゐる男なので、僕たちが眞面目な用事で外務省に行つた時などは、この男のいふことが眞面目なのか、冗談なのか分らないので、時々全く手こずつて了つたことがある位の男だ。

生れ付きの交際好きと見えて、何處の公使館のサロンにもこの人の姿が見えない時はないといはれ、元來性質の良い人丈けあつて皆んなから可愛がられてゐた。そして小山君夫妻が招かれた外務大臣の晩餐會にも、この先生が接待掛兼お客として招ばれてゐたのである。

食事が濟むと食卓を離れてサロンへ來た。カツフイが出る。するとこの時サブポー先生、左の手に澤山の小杯を並べた盆を持ち右の手に、、、酒の瓶を持つてゐる給仕人を、第一番に小山夫人の處へ連れて來て、さて愛嬌たつぷり、

「奧さん、、、、?」といつものだ。斷る迄もなく、、、酒を差し上げませうかと簡單に訊いた譯だつた。

すると小山夫人は、何しろ着任匆々で宴會に招待されたのはこれが始めてであつたから、この一言に少なからずマゴついて、ノーともイエスともいずにボッと頰を赤らめて默つて俯向いてゐたものさ。すると書記官先生、今度は、

「奧さん、、、、、」といひかけたので、小山夫人は益々赤くなつて了つたのだ。

その夜、家へ歸るや否や、夫人は綱介君に、

「サブポーといふ方は、何んて嫌らしい人なんでせう。場所柄もわきまへず、人中で、私の前へ來て、しかも出しぬけにあんな失禮なこといふんですもの、冗談にも程があるぢやありませんか。」と一部始終件の譯を告げたところが、小山君が、

「そりや腹を立てるお前の方が馬鹿だよ。、、、も、、、、、も、二つともお酒の名なんだよ。お前が、、、、、否？などと曲解するから變に聞える迄の話さ。サブポー君に何んの罪があるもんか。」と敎へてやつたといふ話を、その翌日小山君が僕たちに聞かせたので、皆んなが腹を抱へて大笑ひしたもんだよ。小山夫人などは、比較的當時の日本婦人中では利かぬ氣のいはばハイカラな方であつたのだが、それですらこの調子なんだから、まあ當時の他の日本婦人に至つては、よろしく類推すべし。

(九)河瀨公使の英語の日本語演說

外國語の發音の間違ひで、外國へ來た日本人が飛んだ滑稽をやらかすことは少くない。

例へば今の樞密顧問官の有松英義君が獨逸の汽車の中で「もう幾時間でベルリンへ着くか」と訊いたところが、車掌は色々と考へた後

で、「そんな處は獨逸にはない」と答へたので、有松君が手帳に Berlin と書いて見せたところ、「あゝ、ベルリーンか、それならもう一時間で着きます」と敎へてやつたといふ話や、故岡松參太郎君がロンドンでピカデリーを尋ねた時、アクセントが間違つてゐた爲めに容易に分らなかつたといふ話などもあるが、その中で一段と振つてゐるのは、河瀨公使の演說だ。

何んでも明治十七八年の頃だ。河瀨眞孝公使は、日英の親善を計るといふので頻りと日英兩國人間に奔走して、今の日英協會の前身のやうな會をロンドンで作つた。

そこでその發會演說をやつたのさ。會衆はさう二百人以上もあつたかね。そしてむろん日本人よりは英國人の方が多かつた。河瀨公使は英語は中々勉強してゐたので、日本人としては先づ達者な方といつてもよかつたらう。且又前から草稿に就いて、演說の稽古をしてゐたのであつた。

そこで公使が滔々と英語で雄辯を振つて、凡そ一時間半も喋ると、湧くやうな拍手大喝采さ。

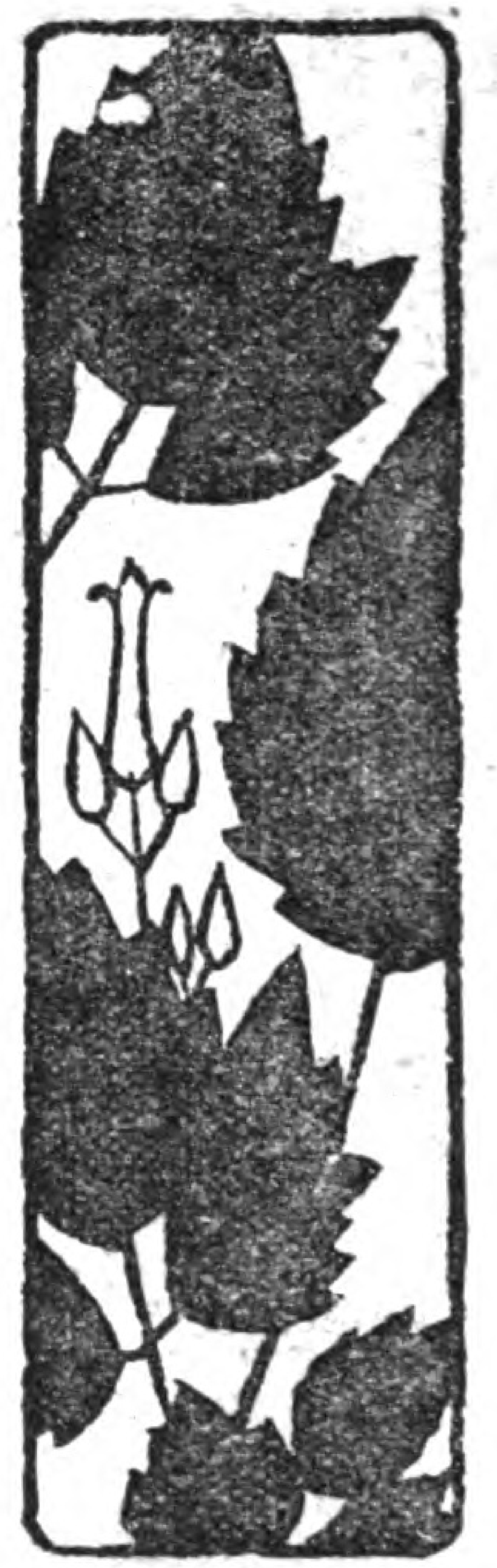
ところが散會の時に、僕はふと英國人の中に交つて外へ出たのだ。するど君どうだらう、一人の英國人が其の連れの男にかういふのだ。

「日本語の演說といふものを始めて聞いて見たが、不思議に Progress だとか revolution だとか civilization などと、日本語には隨分と英語に似た言葉が澤山あるのだね。」

他の一人がいふ。

「全くね。日本語つていふやつは、やつぱり羅典語系なのかも知れない」と語ひながら、僕も聞いてゐたがね」

芭蕉手記



室生犀星

新鮮

今にして念ふことは元祿時代に住んで居て、芭蕉が絶世の新しさを有つてゐたことである。その新しさは今まで二百年の彼岸に行き到き乍ら、なほ泉のやうな新しさを感じさせることである。大名物や大作家の何人も此の新しさの外のものではない、併し乍ら芭蕉の新しさはそのまゝ古く膠着しない柔らかい新しさである。大雅や鳥羽僧正の新しさは年を經るごとに、ひと皮あて剝れてゆく壯大な無盡藏の餘韻ある底を有つてゐる、彼もまた星霜と板下の加はるごとに、水からあがる鴨のやうに幽寂でしかも新鮮である。

新羅燒や高麗が掘り出されても、いま窯から上つたものとしか思はれない新しさを持つてゐる。それにも拘はらず五百年の歲月はその古陶の精髓に丁々と溢れてゐる。此の二つの面、古くて新しい故になほ

何百年かを豫約する光輝は、絶代の作家でなければ、稀代の大名物たる所以であらう。芭蕉が讀み捨てられて最早顧られない時代があつたら、その時は人類が此の土地の上に生息しない時であるに違ひない。人々が此の土地にゐなくなつても或は芭蕉だけが——彼の俳句だけが禿山の上に殘つてゐるかも知れない。

元祿が古來稀れなる西鶴の情痴を生んだことは、元祿年間の習俗の一面であることは多く人々の知るところである。そして芭蕉がその全然反對の、まだ何人も手をつけない掘出しものに寧日無かつたことも誰人も識るところである。しかし何人も氣のつかなかつたことは一介の乞食俳人たる彼がひそかに後世を信じながら、豁然とした何百年か何千年かを通じた境に住み込んで、ひとり寂しく眼を開いてゐたことである。「俳諧の姿いまより七度も變らん。」と言つた彼は、「我が俳諧の道は後の世も廢ること無からん。」と信じてゐたことは當然のことである。師を信じることの厚い丈草去來の徒であつても、芭蕉が何百年も後に生けるが如く論はれるとは考へ及ばなかつたことであらう。もし一と抉り約めて言へば或は芭蕉自身ですら恐らく何百年かの後世を、その莫大な光榮には苦笑を禁じ得ないであらう。彼もあらゆる名人の如く煩さげに世評の存外甘いことを輕蔑したであらうと思つてゐる。

芭蕉は時代に先立つとか新しがるとかといふことは無かつたらしい。彼はその氣質のまゝに時代と平衡した。その證據として彼が名人であるところの奇行逸話の類が奈何なる書物にも著されてゐない。彼の遺業の傍のものとして殘されてゐるものは、可成な嚴肅な語彙と訓話の類ひ許りである。或は敬虔の情を述べたもので無ければ、溢美

の嗅賞である。芭蕉と雖も失敗の逸話くらゐありさうなものである。丈草の端癖、去來の忠實、正秀嵐雪の溫雅は稀代の名人を傳へるに假借無からしめたものである。惟然路通の飄逸をしても尚芭蕉を誤り傳へたことは無い。比較的慨適の器である其角でさへも、事、芭蕉の行狀に及ぶと自ら言葉を謹んでゐたではないか。

太平の代、元祿は西鶴芭蕉の二人の興味ある二面を抉り出したが、芭蕉は西鶴を評して淺ましく下れる姿なりと曰つてゐる。「或は人情をいふとては今日のさかしきくまぐまで探りもとめ、淺ましく下れる姿なり」と言ひ、己が門に擬して「事は鄙俗の上におよぶともなつかしく云とるべし」と曰つてゐる。芭蕉が西鶴を下れる姿だと言つたのは、彼の小說文章の意味もあらうが、主として西鶴の連俳の卑俗に當つたものであらう。最も新しい人情の科學者である西鶴と、自然の大醫である芭蕉とが相容れなかつたのも興味がある。併し乍ら西鶴を容れない芭蕉は文章の旨い人ではない。あれほどの神韻渺々の俳諧の奥をまで探り當てた芭蕉も、文章紀行の類は綾を鏤み飾ることに汲々としてゐて、西鶴の敵ではない。幻住庵の記や、奥の細道、嵯峨日記その他の紀行を見ても、一代の俳聖であつた芭蕉の文章としては大したものではない。皮肉の辛辣と洞察の達者な西鶴にくらべたら、今更の如く此の二人の道の喰ひ違つたことが首肯れる。靜寂を慕ふ魂と、俗情にも組する魂とは、やはり根本から入れない元祿の二つの相異つた鏡であつたらう。一つは蕭錯たる木枯の風景の中に咲く薺のやうに幽遠哀寂で、一つは混沌の感情の中に光る一個の露はな人情の解人である。

併し芭蕉と雖も全然西鶴を容れないことはない。人情の奥底を知つてゐた芭蕉の上に、なほ大西鶴があつたことは認めてゐたやうである。唯、西鶴が嫌ひであつただけかも知れない。一日百吟を以つて誇る西鶴は、一句を練るに或は十日をも一年をも算へる芭蕉の粒々苦心の魂には近づけないのは當然である。「俳諧は時代を考ふべし」と言つた彼は、元祿の精髓の裏づけをあんなにまで叮嚀に仕上げたことは、今にして思へば芭蕉西鶴の二面相打つたゝめであらう。衣匠や器具や陶器の類にも新しい工風と運動と改革の起つた此の時代に、彼の新しさはずば拔けてゐたことは、何よりも芭蕉が偉人たる上に興味のあることである。

明ぼのやしら魚白きこと一寸　（甲子吟行）
山路來て何やらゆかしすみれ草　（同じく）
梅咲てよろこぶ鳥のけしき哉　（句選拾遺）
よく見れば薺花さく垣ねかな　（續虚栗）
枯芝ややゝかげろふの一二寸　（笈の小文）
春雨や蓬をのばす草の道　（草の道）
閑さや岩にしみ入る蟬の聲　（奥の細道）
てふの羽の幾度越る塀のやね　（句選拾遺）
新藁の出そめて早き時雨かな　（芭蕉翁全傳）

これらの靜かさの中に充ちてゐるものは、生れた時からして好ましい古さを湛えた無二の新鮮さと柔優なその心とである。木の芽を指さ

きで擢り摘むやうな小氣味よい觸れ方で、靜かに擢り摘んでゐる。彼の手が二三百年も最つと先きの分を摘み取つてゐることは、實に先きの見通しが利いてゐて驚嘆に値する。この奧の方へ誰も進めぬ樣に、進んで行つても何も摘み取れぬまでに、鋭い洞察を美事に刺し貫ぬいて摘み採つてゐる。彼の歩いたあとに實際何もないやうな空漠に等しい景色でさへある。併し彼だけが歩いて行けばまた何物をも得られる道のやうでもある。

永遠とはつひに何物であらう、「閑さや岩にしみ入蟬の聲」の閑寂の境には定家も西行もまだ行き着いてゐない、此の風景は日本の古い詩歌道の極北で最うその外へは行けなくなつてゐる閑寂の地平線である。予らが此の境で僅かに嘆賞の呼吸をつくだけである。斯の樣な奧と底に行くまで、人はどれだけ樣々の心境の數奇鍛練を經なければならぬか？――「山路來て何やらゆかしすみれ草」の可憐、その可憐に心をとめるものは、人生の垣根にさく仄かな薺の花にも心そゝぐ雅人でなければならぬ。かかる平凡であるために閑却された「よく見れば薺花さく垣根かな」の景色は、時に最大の景色をもしのぐ可憐を併せ持つて居る。蕪村の壯大がそれ故に私には懷しめぬものがあるのも、往々素大で馴染めぬためである。最も微かなるものには最大を餘してゐない。芭蕉が求めるものは常も「枯芝やや〻かげろふの一二寸」の幽かさである。得も言はれない暖かさの廣がりが遂に眼前一二寸の景色に止つてはゐない。絶後の大景をも併せ嘯んでゐるところの、最微にして最大のものである。何なる滿春のいたいけな姿であらう。三たび此の句を讀んで邪氣ない姿に接し得ぬものがあれば、かれは遂に藝道にあやかれぬ俗流の徒であらう。

自分はいま更らしくにほひやさびしおりを說かうとは念はないが、彼の清洌さは何を掴いても心を打つてくるものである。何とも云へぬ清朗さは神々しい初々しさを以つて輝くのだ。「明ぼのやしら魚白きこと一寸」の明ぼのは、元祿から天明を拔けて明治へ一と走りに行き到つてゐる。その間何ものも遮ぎるものすらない、蕪村も一茶も又子規も渺たる一雲翳をすらかざせぬ。子規が芭蕉を採らず寧ろ蕪村の壯大を選んだのは、當時の流行であつたとは云へ、子規の俳道にさびの絶無であつた所以である。病褥に多くの年月の苦難を經た子規は當然芭蕉を取るべきであつたのに、健康な蕪村の文學に心を容れたのは、彼は病理的にたよるべき人生の活潑を求めてゐた所以であらう。彼の俳諧が活達なる自然を健康なる草木をのみに傾心したことや、嶄新を求めて蕪村を見出したことなぞを考へて見ても、遂に古い新しさに辿り着けなかつたことは、何たる彼の焦燥であつたらう。「風呂吹や小窓を壓す雲曇り」は蕪村を一歩も出てゐない。怎麼にもがいても蕪村を拔けられなかつたことは、遂に彼がさびる機會が無つたからである。情の中にさびが無つたからであらう。「枯芝やや〻かげろふの一二寸にまで、彼が行き着けないのは、蕪村がなほ芭蕉に及ばざると一般である。子規がさびしおりの心を養ひ得た人であつたら一呼彼は後代を問ふべきであつた。非常な情熱家であつた彼の情熱は枯淡を外にして生活したからであるとも云へる。又彼は彼らしい枯淡にのみ辿り着いて、芭蕉の高さへまで行きつけなかつたのであらう。

新藁の出そめて早き時雨かな　芭蕉

「松風の里は[illegible]する　しぐれかな　嵐雪」
嵐雪は蕉門の内でも特に溫厚な男である。「松風の里は[illegible]するしぐれかな」の靜閑さを一步踏み込んだ芭蕉の冴えは、もつと時雨の何者かを摑んでゐる。嵐雪の道具立を踰えた彼の直接的な新しい觀照は、殆ど比較にならないくらゐの効果を出色してゐる。嵐雪のよたよたな腰の弱さに比べたら、何と云ふ把握力の强さであらう。しかもその强さは一寸動きさうもない巖丈さで、永生動かないところのものである。

路通と芭蕉

路通が芭蕉を賣つたユダだとしても、彼れの眞實の心は師叟を怖れ畏えた心で、絶えずその僞筆を夜半の小机の上に試みたものであらう。彼れの狡猾しい心を以てしても、なほ芭蕉の心を有難いものとしたに違ひない。或は去來丈草の徒よりも最つと芭蕉の何物かに觸れてゐたことは實際である。苛責と良心とに路通は絶えず師叟に謝れたい心を有つてゐた。悔ひ改めたユダの心は恐らく路通は始めから有つてゐたのであらう。しかし彼が左うしなければならなかつた生活は、芭蕉の睨眼を以つてすれば疾くに氣が附いてゐた筈である。

師匠の僞筆を贋る事なぞは今の世では何でもないことである。路通の僞筆が世にそれ故に珍重されてゐるとしたら、路通と雖も一層の赧面羞恥の情に慚死せねばならぬ。蕉門の師弟は溫厚でなければ典雅從風の徒であつた。路通の如き異端は一指にのみ止るくらゐである。路通を破門した芭蕉は著早く路通の心を射透してゐた。だから路通を認めることに少なからぬ苦痛を交へてゐた程、芭蕉と路通とは深い關係を有つてゐる。

芭蕉が初めて路通に會ふたのは、行脚の折、草津守山のとある貧しい茶店の傍に憩ふてゐる一人の男に茶菓子を振舞ふたのが、その師弟交誼の初まりであつた。この一見、二子の袖無しに木綿の袋を提げた乞食體の男は、路傍に睡る男としては餘りに卑しさから脱け、洒落で、少しばかりの人品も窺へるところがあつた。男は芭蕉に一首の和歌を紙片に書いて示した。

露と見るうき世を旅のままならばいづこも草のまくらならまし　路通

芭蕉は乞はるゝまゝに、その男に路通の名を與へ、爾來風雅の交りを約した。路通が芭蕉の何人であるかと云ふ事、自分の近づいて行くべき人は芭蕉を置いて他に無いことを知つてゐたのであらう。人の軒下に眠る放浪無賴の果に、最う一度彼れは人生に呼びかけて見て、どうにも爲らぬ身の振方をつけたのである。路通の詩情は同時に生活の改革でもあつた。

その後江戸（元祿二年）に出て深川の芭蕉庵の近くに借家して、日夕、師叟に親しんでゐたが、絶え間もない貧窮は杉風ですら持餘した程であつた。芭蕉庵の乏しい米櫃の厄介になつたことは勿論のことである。師叟に隱れた時折の短册賣や、見擢らしい心になつた名もない町人相手の俳諧興行に身を窶したことも再度ではなかつた。芭蕉は言葉を繼いで生業と俳道の正義を說いたのであるが、風顛の如き路通はその度に本心に還り乍らも、芭蕉庵を一步外へ出ると持前の放埒に身を委せ、口に師叟を楯に町人俳諧の取込役などを勸めるのであつた。

彼れはその度毎にこれは惡い事だと云ふ後悔をくやみ乍ら、芭蕉の耳に入ることを恐れたのであつた。親密の中に端正を含む意見振り、優柔しいが時とすると人の腹の中をまで見据えてゐるやうな眼付、さういふものを路通は絶えず師翁から感じ、絶えず事の發覺を恐れてゐた。その意味で路通は生涯を通して芭蕉を惧れ過ぎた位、恐れたのであつた。師翁の愛情をさへ恐怖に代えなければならなかつた路通は愛情を噛み締める間もないくらゐであつた。それほど竊かに芭蕉の聲名を售り、それを已れの口に上らせることに依つて乏しい衣食にありつくのであつた。

「おれは師匠を售つてゐる。賣れば賣るほどそのためにもおれには師匠が必要だ。おれが師匠を賣るごとに謝りたい心で一杯になつてゐる。おれはそれを止めやうと思つてゐるが、おれのやくざな暮しはついそれを遣つてしまふ。」

彼れは芭蕉を口にしないことは無く、それを口に上らせるごとに無邪氣で狡猾な心で、世の愚人に接したのであつた。芭蕉は路通を見るごとに苦痛に近い表情をした。その表情と心の有態はすぐ路通に通じた。かれも苦しさうに師匠と對座しなければならなかつた。かういふ彼らの狀態は一層兩方の心を却つて深くしたものではないか。

曲水あての手紙の端に芭蕉は恁う書いてゐる。「路通事は大阪にて還俗いたしたるとの事、推量いたし候、其志三年以前より見え來たる事に候へば驚くにたらず候、とても西行能因の眞似はなるまじく候へば、平生の人にて候、常の人が常の事をなすに何の不審か可有御座候哉、拙者においては不通仕まじく候、俗になり候へてなりとも風雅のたすけになり候半ばむかしの乞食よりまさり可申候。」と書いてゐる。その淡々たる手簡の内に何となない憤りさへ流れてゐるが、それだけ隱れた芭蕉の心が微かに動いてゐる。幾度とない改悛の心を披瀝した路通のすつかりを彼は見通してゐたのであつた。騙されまいとしながらなほ騙されてゐる氣持ちけ、絶えず芭蕉の中にあつたらしい。

芭蕉は路通に問ふてあなたは何をして居らるゝとも云はなければ、何をせよとも言けなくなつた。唯、時とすると作り話などに耳を藉し乍ら、芭蕉は眠さうに半眼を見開いて、路通の言葉を聞き流すくらゐであつた。さういふ芭蕉を知つてゐる路通は氣拙く寂しく芭蕉庵を辭することもあつたが、別に芭蕉はそれを引止めやうともしなかつた。輕い憎しみに加はる愛着はあり乍ら、最も人間的な芭蕉がそこに端然と座つてゐるだけであつた。どういふ時にも芭蕉が一番人間的な心の構えを以て接してゐたのは、路通の場合が多かつたのであつた。一個の清濁を倂せ有つてゐる路通の魂は、芭蕉のさびを以てしても澄ますことが出來なかつたらしい、芭蕉は心で路通をあきらめかけ又諦めかねてゐる。通じかねる永い清濁の結ぼりが根を張つてゐたのである。

吸露庵凉袋の「頭陀物語」は信用できないが、或時、路通が鬼貫の宿を訪ねたことが書いてあつた。「今は鬼貫の名を隱し朝夕の煙をいとふ、昔は花洛に遊吟して翁と書讃の遊をもなせしが…」今ある鬼貫は明日の飯をも缺く貧窮の暮しであつた。路通には鬼貫の困窮は解りながらも、自身もなほ頭陀袋下げる身のどうなり樣もなかつた。凉袋は此二人に僞筆の一夜を明させたやうに書いてゐたが、芭蕉臨終の時も

鬼貫は病床に置されなかつたことを考へると、支考丈草去來なども此事は知つてゐるらしく思へた。花屋日記に「鬼貫來る去來應對して還す。」とある。笈日記の同じ七日には鬼貫のことが書いて無い、——

芭蕉が心苦しさから路通を破門したのは、芭蕉本來の心もあつたらうが、他の弟子を慮つた氣もちも無いではなかつた。路通とそのまま交はることは日を逐ふごとに苦痛になり、路通の方でも庵の戸を叩くことも時稀れになるのであつた。しかしそれも三井寺の僧の取なしで許されたが、路通の心にはそれ以來何か硬い氣もちが殘つた。敬愛は拗れたまま融けないで彼のつむじを狂げたのであつた。彼れが本統の心で芭蕉を慕ふたのは矢張師翁歿後であつた。「花屋日記」に依ると、芭蕉は去來丈草支考を床近く呼んで、遺言のあとで恁う附け加えてゐる。

「路通とも親しく交はつて下され、あのやうな男であるが心には善いこころがあり誠がある。決してあの人を仲間はづれにしてくれないやうに頼みます。」

「花屋日記」は信じないとしても芭蕉といふ人は、かういふ叮嚀さのある人であることは實際であつた。必ず恁ふ遺言したであらうと私は信ずるのである。芭蕉生涯中の心を痛めた路通であつたゞけに、私はその言葉を信じてゐるのである。

路通はこの元祿七年十月十二日芭蕉屬纊に就いた日には、加賀金澤の町に行脚の假寓をしてゐた。生駒萬子の手厚い世話になつてゐたらしく、路通自身、「むつまじき方ありて、日數へぬ。」と言つてゐる。路通は殆ど何物の死よりも、芭蕉を失ふたことに驚かされ嘆かされた。いま更らのやうに謝りたい氣と悲しみに、萬子と交々喚んだのであつた。路通は何か知ら平常から師翁にその本心を解き明し、それを聞いて貰ひたかつたのである。本當の心と云ふても路通自身さへ釋明しがたい何物かであつた。話さう話さうと念ひ作らたうとう言ひ盡せない或る心持であつた。正邪を區分した彼自身の委曲した氣持の一切であつた。併しいまは彼れはその機會を永く喪ふた。芭蕉の生涯に或る不愉快を起した氣もちが、當然路通自身から起つてゐる何物かは、もう路通には手がつけやうがなかつた。彼れは秋風の稍々寂しい異土を彷徨し作ら絶えずその思念に囚はれ悩まされた。しかも彼れはその師翁の病褥を訪ふ機會も無く、亦最後に自ら花向けすることもできなかつた。

富有である萬子には路通の生活が最初から解つてゐるだけ、師翁の病歿を聽いて悶々する彼れの蒼褪めた顏容の中に、何よりも著しい愴惶と苛責とを讀み分けることが出來るのであつた。しかし右するも左するも心悶えた路通を見ると、萬子自らも隱せられた程であつた。路通は萬子から旅途の費を得て上洛の途に就いたのは、それから間もないことだつた。

路通は芭蕉翁行状記の中でかう書いて自らを悔んでゐる。

「やつがれは此三とせ折々のたがひめに、翁心障り侍りて、音信も途さかり侍りぬ。されどむかしの哀みふかきに却かへつて恥みもつよからんとおもひながして、やをら憂世にまかせうち暮しぬ。然るを定光坊實永阿闍梨心かゝり成とて、翁の方なだめまいらせ、此度罪ゆるし給へとも外の障なと侍れは、而むきうときさまにて、それ

よりはやつかれ加賀の國へ旅立ける。そこにむつまじき方ありて、日數へぬ。此度翁遺言の文に、餘命たのみなしなからん後、路通が怠り努々うらみなし、かならずしたしみ給へ、その罪おの〳〵聞あへり。今さらくやしさのみぞせんかたなき。やつかれはせめて十四日の法事に參合ぬ。新塚の前机の花筒ものあはれに、聲もふるひながら、陀羅尼など唱へ、涙おさへて……」

彼れは俳諧勸進帳に自ら乞食路通と記してゐるが、しかし芭蕉を知つた後の生活は、昔、人の家の軒に眠つた彼でないことは勿論であつた。數奇と窮屈とを持つてゐた彼れは、師翁歿後前後は貧窮ではあつたが、不思議に時折藍鼠の羽織打ちこかして、其角などゝ交り作らゐた。勸進帳二卷は決して路通が孤獨の男でないことを證左してゐる。むしろ彼は莫逆の友を得ないで、やゝともすれば瓦石の友垣を結んだ爲めではなかつたか。何と云つても芭蕉は彼の生涯の師翁であり、益友であり別の意味の親御のやうなものであつた。

ひからかす袷や小春の死出の旅　　路通

風俗文選で許六は「路通者不知何許者不詳其姓名。一見蕉翁聽風雅。其性不實輕薄而長違師命。飄泊之中著俳諧之書。」と書き、路通を不實と輕兆の者としてゐる。その去來との俳諧問答の中にも路通を卑しんでゐるところが尠くない。路通は輕薄であるといふことは、その乞食生活を皮肉つたものであると同樣に、スネ者のひねくれた性格は人に容れられなかつた。芭蕉でさへ持餘した彼れは他の門人に容れられる譯がない、――溫厚な丈草法師さへも路通には眩しい眼付をしなければならなかつた。しかし師歿後は丈草に多く親しみを感じてゐたのは、師臨終の折諸友もみな路通と親しくして吳れるやうにとの遺言も所以したものであつたらう。路通の性格には風雅高韻の相は無かつたが、その生活振りの中には甚だ近代風の破れ壞れた性格を持ち廻つたものであつた。そのために蹴まれ乍らも彼は彼らしい生活を後代にまで傳へたことは蕉門の一異彩であつた。常に飄逸である如くして然ざる悲しさうな彼れの顏容の中には、拭けども拭へぬ人生の風雪があつた。人にも我にも容れられぬ人間らしい一切のものを掻き集めた放浪の魂が彼の生涯を切り廻してゐたゝめに、不實輕薄の樣に人々から睥睨されてゐた。私は彼れを憎みながら彼の何かに惹かされてゐる。彼の性格の中に我々の持つ善良とする意識を裏返しにして見せたものを、彼れは時に臆面なく展いて見せるからである。それ故自分は許六のやうに誹ることは採らぬ。

いねいねと人にいはれつ年の暮　（猿蓑）
つみすてゝ蹈つけがたき若菜かな　（猿蓑）
裸馬も淺草詣め年の市　（勸進帳）
草臥て鳥行なり雪ぐもり　（同）

然し路通には一茶の僻見と露骨に歪んだ人生觀とがなく、却つて彼れの人生は打沈んだものらしかつた。自身で內の方の心で呼吸してゐる。「いねいねと人に言はれつ年の暮」の如く、沈んだ微笑みがそのままの彼の人生觀になつてゐた。それに抗ふことをせずに居て、或る從順と素直ささへ強ひ見せてゐる。自分はさういふ心境に澄んでゐる路通

の中に、彼の本物を見る氣がしてゐる。「草臥れて鳥行くなり雪ぐもり」の如きは、路通自らの人生が表出されてゐる。雪ぐもりが重々しく壓してゐて、そのため何も彼も動かないでゐるやうな日の光景が、さびしく一羽の鳥の立つてゆくさまに描かれてゐる。彼が北國行脚の詮方もない疲勞や心遣りの程が、その奈何樣にしても見える見すぼらしい風采の上にあらはれてゐる。或ひは彼の全生涯も又「草臥れて鳥行くなり雪ぐもり」の途づれではなかつたか？　親友の少數かつた彼は一羽鳥のそれのやうに陰影を負ふて歩いてゐるやうな人であつた。芭蕉さへ「路通はいづれの所の人なることを知らず。」と遺語集に言ひ殘してゐるが、それは間違ひであらう。芭蕉は知つてゐなければならぬ筈だ。遺語集なぞに流布されてゐるものには、眞僞を分つことのできないものが往々ある。美濃の生れで享保に歿してゐるとだけ、その折々の句作も、他の元祿の諸家のやうに纏められて殘つてゐない。散漫と愴惶の暮しの中で、何時の間にか書き捨てられて行つたものであつたらう。俳諧勸進帳二卷の興行も觀音の靈夢によつて爲されたと序言で言つてゐるが、さういふことも何となく白々しいやうな氣がしてならぬ。

元朝や何となけれど遲ざくら　　路通
鳥どもも寢入つてゐるか餘吾の海　　同

小說道の芭蕉

芭蕉もまた小說道の何物かを持つてゐる。宗房時代から江戸深川の住居、奧羽行脚や幻住庵入鎖の生活、數へ來ると彼の生涯もまた鬱然たる小說中の人物でなければならぬ。彼自身が既にそれであるやうに、彼の俳諧も一句をもつて人生の數奇大局を竭したものが尠くない。彼の素直な、なげきや、匂ひや、さびしがりや、感慨や、やさしい菫のやうな愛情、物の見方や感じ樣や、その毛深く考へ耽るこゝろなぞ、一つとして吾々後代の人生の委曲で無いものはない。

彼が何故小說を書かなかつたといふよりも、彼は一句の內に人生の心づくしを凝視めてゐた。小說と俳諧の間に一髮の餘裕が無かつたらしい。彼は彼の生涯のものを俳諧に泌み亙らせた。餘處目をすることの無い彼は、ひた向きに俳道の王城を築き上げたと言つてよいのである。

草の戶も住替る代ぞひなの家　　（奧の細道）

彼が茶人の佶屈に入らずしやれ者を輕蔑したことも理である。面目と眞實との外のもので暮せぬ彼は、その一すぢの道を徹したのは何と言つても己を知る大雅の士であらねばならなかつた所以である。彼がその生涯を通した押し方の強さは莫大のものであつた。之加も彼は騷がず急かず一句づつ押し進んで行つたのである。片々たる俳諧とは云へ、此の巨匠の踏み込み方は全く古今稀れであつた。

草の戶も住替る代ぞひなの家は元祿二年奧羽行脚の前の三月の句である。支考の笈日記に、「その後舊草を見に行けるが、たゞ見知らぬ人の住みてぞ侍るなる。」むかし師叟の深川を出るとて、此草庵を俗なる

人にゆづりて。」とあり、あとに「今はまことに、すまずなりてかなし。」と當時を偲んで書いてゐる。

芭蕉は奥羽行脚の前に「股引の破れをつゞり笠の緒付かへ」て、一先づ杉風の別業に移居した。深川の古住居を捨てたが、間もなく他の人が移り住んだことを聞いて、彼はひそかに或日その舊い門前を通りすぎたのである。折から雛かざる季節で狹い家內に、雛壇の紅いだんだらさへ格子戸を透いて見えるのであつた。寂しいやもめ住みのかれの古い住居は、いまは雛を守る娘の居る家に變り果ててゐる。――「住み替る代ぞひなの家」、此處に小說家の芭蕉が、格子內の踏石に脫いだ雪駄の類まで見逃さう筈がない。自分の居た間の様子も違ふ、何とも云へず皆懷しい氣もちがする、――彼の此の心もちは吾々にも通じる心である。支考はその後にまた行つて阿叟がゐた家を見て來たが、いまは雨雪に洗はれて住む人もないやうに破れ毀れてゐると書いてゐる。

芭蕉が舊居を眺めに行つた心は、自分の人生を讀み殘さずに溫く懷しさの餘りである。溫情と言はうか、素朴と云はうか、一味の子供らしい感懷を交へてゐて寂しさを有つてゐる。かういふ境致にある心は多く門人の信實を惹いてゐる。「六尺をこえんと欲するものはまさに七尺を望むべし。」の鋭い洞察を以て人生に呼びかけてゐる彼は、外科醫の手術の際、一寸の切開に一寸五分を以てする科學者の大膽とその用意を知つてゐた。彼の小說はやはり六尺を踰えんとして七尺を飛ぶ用意のあるものであつたらう。徹することに深く、さびるにいよいよ眩かつた彼は、寂しみに濁らず嘆きて澄むこと切なるものがあつた。

「けふははれて笠かろく、けふはしぐれて袖おもき蓑、」と云ふ旅人の心を知る彼は、「一つ家に遊女もねたり萩と月」の哀切なる人生の記錄を漏すことなき人生の作者であつた。「…不便のことに侍れども、吾々は行くところに止まることおほし、唯人の行くところにまかせ行くべし。神明のかならず恙なかるべしと云捨て……」て越中の磯べに遊女と別れた彼こそ、錯莫たる人生にひたと面を對せ、亦それに背後を見せて發つ自ら近代の人の持つ心を志とした人でもあつた。

芭蕉は在るまゝの人生に卽してゐるばかりではない、様々な門人等の生活や門人同士の間の仲勢を執り、聾である杉風のために同門へ聾の言葉を封じ、癩を病む許六にはその事を一生口にしなかつた。況や路通と同座して餓人の言葉を控えたことは勿論であつた。一介の苦勞人としての端嚴なる面目、生活者としての心意氣も坦乎として護られてゐたことは、人情の內に竊に念ひを潜め、人心の間に平和と懇切を醸すところの、心ゆたかな小說道の大器であつたからである。人として蕪村や鬼貫の苦行を止錄する前に、人としての芭蕉の苦勞が足りないといふ者があれば、彼は常に人生に現れたものしか眼に止めない杜撰なる記錄者の輩であらう。加賀の旅は北枝と句空との仲たがひを和睦せしめたことは誰でも識るところであるが、彼が人情のこまかさ、得も言はれぬ寂しさに心を向け考へたことは、あまり人の口にしないところである。彼が小說を書いて人生に直面したら恐らく眞情の內に幽韻をかなでるところの渾然たる作者に爲り得たであらう。近松の內側をあさり、西鶴の漏らした機微を彼はしかも丹念に彫刻するに閑暇を偸んで綴つた人であらう。しかし幸にかれは稍々ともすれば俗流

の媚に抵觸しなければならぬ作者にはならなかつた。彼は靜かに一句づつ乏しい人生の灯を點け始めた。しかもその乏しい灯は山嶽の全面を壓する炬火となつたのである。

髪生えて容顔青し五月雨　（續虚栗）

何奈なる芭蕉の像を見るよりも、「髪生て」の芭蕉は既に氣魂面を打つ底の自畫像を有つてゐる。精神の生活を奥底まで辿つたものの、鏡に依らずして自らの容貌を描くことを摑んでゐる。すごみある苦行が出てゐる。端然と坐つてゐる彼が常も何物かを、喧噪な人生や騷々しい自然を手をもつて抑壓してゐる大量の態が見える。「容顔青し」の素晴らしい呼び方は、小暗い五月雨の軒端をめぐつてゐるやうである。彼が描いた自畫像の内でこれほど凄みの出てゐる句はない。四十四歳の折の句であるが、彼の半生を讀むことが出來、顔色と同じい枯れ様をしてゐるその心の程も窺ひ知られる。何人が斯くまで己を書き得たか？——

白髪ぬく枕の下やきりぎりす　（江鮭子）
おとろへや齒に喰あてし海苔の砂　（今日の昔）
不性さやかき起されし春の雨　（猿蓑集）
此秋は何で年よる雲に鳥　（芭蕉翁行狀記）

あきらめも嘆きも物憂さも茫漠たる人生の行手も、自ら彼には見え透いた一齣である。一つとして彼の身邊小境の消息で無いものはない。

何人も此の蓊鬱の中に杳として鳴いてゐる「雲に鳥」の遥さには驚くであらう。夜半の枕べに白髪ぬく一介の老爺の所在なさは、老いたる人の總ての所在なさのつれづれであり、斯くて此句があつてから無味の所在なさにも、老いのおごそかさが横はつてゐるではないか。「齒に喰あてし海苔の砂」に愕いて口へ手をあてた芭蕉は戞然として天外の聲を聴いたに違ひない。彼には日常茶飯の事々に深いおどろきと意味ある永い世の聲や姿に、いつも初々しく心を潜せ働かしてゐる。「不性さやかき起されし春の雨」の中の芭蕉のほろりとさめた眼の中に、實に遠い世の夢までこもつて居さうに思はれるのも誇張ではない。彼の此の幽遠の心は行亘つて皆の者になつてゐるからだ。これらの念ひが行き到けるだけ達いたものに「秋ふかき隣は何をする人ぞ」の大極、「此道や行く人なしに秋の暮」の寂漠が、その前方に遠い雲煙のやうに聳え立つてゐる。人の言葉は限りあるものとされるが、彼の言葉には際限がなく雲表の遠きにとどいてゐる。

日本の文學では此のあたりに行きついてゐたことには、いまさら驚くより外はない。念々止まざるもの一句をないがしろにしなかつた彼は「秋ふかき」隣を思ひ乍ら、小説道の全幅を抉り立てゝゐる。彼の自傳小説は彼ばかりのものでなく、讀む人のものにその魂を移し植ゑてゆくことは、彼の用意と廣さとを持つてゐるからである。その寫實の和やかさは本物そつくりに形づくられてゐる。

さまざまの事思ひ出す櫻かな　（笈日記）
行秋や身に引きまとふ三布蒲團　（韻塞）

かくれ家や目立たぬ花を軒の栗　（伊達衣）
のうれんの奥物ゆかし北の梅　（菊の塵）
こちら向け我もさびしき秋の暮　（笈日記）
粽結ふかた手にはさむ額髪　（猿蓑）
前髪もまだ若草の匂ひかな　（翁草）

彼の俳句の或程度までの寫實的意味を解くことはできても、その奥にどの程度まで觸れていいか分らない。實際は彼のものは俳句だか自然だか寫實だか解らないと言つた方がよい。あれ程のものは芭蕉の中に在るもので、本物の自然や草木であつたとしても、彼の場合では、彼のみの世界の現象として見た方が私の好みに合ふてゐる。彼の「さまざまの」の「事思ひ出す櫻かな」の「櫻」は、彼の五十年の全生涯の中に散りもし咲きもした花で、普通の櫻でないのかも知れない。彼の心でのみ老いたる櫻であつたであらう。左甚五郎や吃又の作品は夜半這ひ出して來ても、彼の作品がさういふ口碑を持たぬだけでも、心のものと、形のものとの相の違ふ所以であらう。

園女亭に招かれた彼はその優しい一篇の物語を「のうれんの奥物ゆかし北の梅」と言ひ、好個の小品にして遺してゐる。園女亭の物閑かさ、彼が描く園女のつゝましさは常に彼の心にある女性の凡てであるにちがひない。大原女の素朴の姿を路傍に眺めて、あれこそ自分の好みのある女人だと語つた彼は、野天に育つ田舎女の美しさを悉皆知つてゐるものである。作つた上品や化粧に據る美しさを輕蔑してゐる彼は、一見、野蠻な泥の付いてゐるやうな田舎女の美を解く達眼を備へてゐる。それにくらべて園女の床しさをのうれんの奥に見た彼は、また淑かな上品を、梅花の如く感じる高尚な彼でもあつたのである。（園女は伊勢山田の醫師斯波一有の妻、夫の歿後、眼科醫を業としてゐる。貞淑端雅の婦女子であつたらう。）

「粽結ふかた手にはさむ額髪」は彼自身も物語風の作と呼んでゐる。夏の初め、笹の葉で餅をつつみながら、煩さく額と眉に下る髪の毛を搔いてゐる姿に、何か清艶のありさまが朧げに浮ぶ。濡れてゐても、なほ白い手、笹の葉の濃いみどりの色、――坦懷の彼も自ら意識して「物語りの面影をば一句は入集すべき」と言つて猿蓑集に入れてゐる。粽結ふ女もまた彼の心の中の女である。園女の貞淑を愛する彼はまたかた手にはさむ額髪の物憂さを眼に止める男であつた。

芭蕉は美小童を愛したことは人々の言ふところである。元祿は殊に美小童を愛する流行の時ではあつたが、自分はむしろ彼はその美を美として愛しただけに止つてゐるだらうと思ふてゐる。「前髪もまだ若草の匂ひかな」の彼は、美しい元祿少年の姿に眼をとめたことは當然であつたらう。併し彼を世の稚兒あさりの如く言ふのはどうか。若い時分は（三十歳前）は相當の若い者として生活をした人であらうが、それは全幅の彼を論ふ上の問題ではない。却つて危險な中年後に蹉跌の無かつた彼は、やはり瀟灑たる大雅の道に殉した男であつた。何よりも我々の頭にそれらの色慾世界への想像を呼び起すところの（例令呼び起したにしても）何物をも其の不純さを與へないところが、彼の身上でもあり清節さでもあつた。若し情事の一端が我々の耳に入つたにしても、彼の爲人のおもしろさを加へるくらゐのもので、彼の不名譽

にはならないことである。寿貞尼と彼とが何故に別居してゐたか、門人はなぜ寿貞尼の事を口にしなかつたかと云ふことも、一寸不思議である。別居して芭蕉が通ふた譯ではなからう。杉風宛の手紙には寿貞が芭蕉行脚中に亡くなつたやうに書いてある。故郷で關係があつて後にそれが無くなつたのかも知れない。唯、彼が小説道に彼自身さへ寿貞のことを書かなかつたこと、それに觸れないところを見ると、芭蕉も底を示さない深い用心を持つてゐたやうである。

「かくれ家や目立たぬ花を軒の栗」の彼は「こちら向け我もさびしき秋の暮」の主人である。「軒の栗」の幽かさに心を動かす彼の心も、到底人生に「こちら向け我もさびしき」と呼びかけなければ居られぬ或物を有つてゐる。彼の幽情寂漠の境も時にしばしば他に竊かに呼ばねばならぬものがあつた。人としての彼の弱さも剛情の中に芽ざしてゐて床しい。彼の小説道はつゝめて行けば寂しさの一とすぢ道である。埃と苔とを有つ寂しさに外ならぬ。埃は人生から、苔は自然から、ひそかに彼の上に彼を古風にして見せたのである。

浮氣もの

近松秋江

私は×××の富葉に一ぺん會つてみたいと思つてゐる。無論、指を折つて考へてみると、私と、たしか六つ違つてゐたから彼女ももう四十の上を六つも越してゐるのである。四十六といへば、いいお婆さん藝者である。そのお婆さん藝者の富葉が何で又お婆さんで藝者になつたものか、いはれを訊けば、そこにいろ〳〵の因緣があるのであらうが、私は彼女が又、以前の藝者になつてゐると、ふとしたことから聞いて、ちよつと吃驚したのである。

世間といふものは實に、廣いやうで狹いものである。今年の一月頃であつた。年暮の急がしさに臨時に雇入れた派出婦のケイといふ女は世間擦れのしてゐるほどあつて、一寸小賢い女であつたが、折柄冬の最中で、家內や子供は女中を附けて、ずつと熱海の方に遣つてあるし、留守は自分とその派出婦と二人きりで、決してその留守の間に惡いことをするといふ譯ではないが、

「今はこのとほり頑固爺兒のこつ〳〵だが、俺だつて昔は少しは鶯啼かしたこともあるよ。」

「それはさうでございませうさ、旦那さまは。」

「いやに高く買ふねえ。」

「でもさうですもの。」

「さうかねえ、半衿くらゐは奢らう。」

「半衿くらゐぢや不足ですわ。」

「だつてお前にそんなに奢る道理がないもの。だが、同じ奢らねばならぬなら、少し舊いお惚けでも聞かさうか。」

「えゝ、どうぞ。」

「いや、そんなに眞面目にいはれても困るが。」

そこで私は一寸心の底に暗い蔭がさしたやうな氣がしながら、

「きつと地震で死んでゐるかも知れん、あの女は。」私は獨り言のやうに沈吟した。

「多分地震で死んでゐるにちがひない……」

私は繰返してゐた。

「それがどうしました？」

「うゝ、それはねえ、横濱に居た女なんだ。あの地震だから、きつとやられてゐるにちがひないと思ふんだ。假ひ關係のなくなつた女でも、以前譯のあつた女であつてみると、それが死んでゐると思ふと、何と

もいへず厭な氣持ちのするものだよ。」
「そりや、さうでございませう。その女がどうしました。」
「死んでゐるか、それとも無事でまだ生きてゐるか、一度探ねていつて見たいと思つてゐるんだけれど、地震の前にも一ぺん手紙を遣つてみたことがあつたけれど、附箋をして戻つて來たんだ。會はなくなつてからも丁度十年になる。どうしてゐるかなあ。」
「もう、それつきり……もつといはなけりや分りませんわ。」
「うん、まだいふよ。その女と俺と關係があつたのだよ。そして、その女が死んだと思つてゐるんだ。」
「そして旦那さま、悲んでゐらつしやるんでせう。」
「うん、それは死んでゐれば悲んでゐるさ。」
「もつといつて聞かして下さらないと分らない。その人横濱に居ましたの。」
「うん。横濱にゐたんだ。」
「横濱に居て、何をしてゐたのです。どんな方です。」
「横濱に居て、人の妾をしてゐたんだ。」
「えゝ……それから……どんな人の妾？」
「醫者の妾をしてゐた。」
「何といふ醫者？」
「それは一寸いはれない。」
「隠さないでいつて御覧なさい。」ケイ女は少しく微笑を含みながらいつた。
「別に隠すわけもないが、とにかく大きな病院の院長さ。」

「あゝ、知つてゐる、しつてゐる。」
「何を知つてゐる。この病院は横濱のステーションから近い處にある病院だつたが、大きな煉瓦の建築だつたから、きつと一と溜りもなく地震でやられたらうと思ふ。女もそこから餘り遠くない處に圍はれてゐた。」
「えゝ知つてゐます。」彼女は薄氣味わるく笑つた。
「お前がそんなことを知つてゐる筈がない。」私は不思議な顔をしてケイの顔を見た。
「知つてゐる筈がなくつても、知つてゐます。院長の名をいつてご覧なさい。」
「うん、名は……堀江寛といつた。博士だよ。」
「えゝ、すつかり分りました。はゝゝゝゝ。旦那さまも隨分ですねえ。」
「何が隨分だい。お前どうしてそんなことを知つてゐる？」
「どうしてつて、知つてゐます。皆な知つてゐます。」
「どうも不思議だねえ。」私は又ケイの顔を見た。
「はゝゝ、わたし、その女の人から聞きました。その人死んでゐません、まだ生きてぴんぴんしてゐる。」
私は倍々不思議に堪へなくなつた。
「地震でも死なゝかつた？……生きてゐる！……お前何處で、どうしてその女に會つた。」
「ある處で……その人もう横濱には居りません。きつと、地震の前からもう横濱にはゐなかつたんでせうと思ひます。」

「まさかねえ……過失で死ななかつたのは可いが、しかしあの女が横死に死ない筈はないがなあ。」
「でも、もう居ません。」
「居ませんといつたつて、あの旦那が放す氣づかひないもの。とても惚れてゐたんだから。」
「いくら惚れてゐても、もうその旦那とは別れてしまひました。」
「別れてしまつた!?」
私はケイ女のいふことが、何が何やら一向合點がゆかなかつた。私は眼を圓くして又暫く對手の顏を見詰めた。
「だつて、子供まであつたぜ。」
「子供はあつても別れてしまつた。」
「どうしてお前、そんなことを知つてゐる。不思議だなあ。」
さういつても、ケイは意味ありさうに、たゞ狡く笑つてゐた。
實際、その女と旦那との交渉を、ある處まで深く知つてゐた私には、もう一生別れるのどうするのといふことは天地が覆つても、あるものではないとおもつてゐたからである。

その女と自分とのことは、ずつと前——十年も前に私は二三篇の小說にも書いたが、私とはわづかに一年くらゐで絕えてしまつた。その時彼女はその旦那との仲がいくらか不和になつてゐる時だつたので、いはゞ、彼女に私といふ魔がさしたのであつた。無論私の小說にも書いたやうに、最初から彼女の方で手紙で私を口說いてかゝつたのが始まりであつた。しかし私は、その一年ほど前から京都の方に惚つてゐる女があつたので、私としては、たゞ一時の戯れにほかならなかつた。又彼女の方でもそんなもので、いふとほりの一時の浮氣であつたのだ。

しかし私は、彼女をすつかり忘れてしまふことは出來なかつた。ひとり彼女ばかりではない、私は、以前關係のあつた女のことを、時々思ひ出してみることがある。それは、私の生活の寂しさを、昔關係のあつた女のことを偲ぶことによつて、いくらか慰めることが出來るからである。戀であれば猶ほさらのこと、若い時分には、一人でも多く女と親しい交際をして置くものだ。段々老境に入つて、過ぎ越し來た跡を振顧つてみることによつて、人は、自分の過去の生活内容の豐富であつたことに滿足するであらう。もし、吾々が、過去に於て、一度も戀をせずに通つて來たものと假定して見たまへ、いかに吾々は生効のない生活をして來たかといふ憾みがあるか知れない。昔關係のあつた女のことを偲ぶのは、少年の頃愛讀した小說の中の男や女を思ひ出すに類したものだ。

私は、その女との仲が絕えてから半歲ばかり經つて、京都の方にいつたきり、二三年歸つて來なかつた。彼女と絕えたからとて、別に頓着に、京都の方に惚つてゐる女があつたのだから、少しも失望もしなかつた。そして二三年の後、京都の方で私が、その京都の女のことで絕望を抱いて東京に舞ひ戻つて來た時分のことであつた。私は京都の女に失望した心を、ふと、その横濱の女に向けてみた。その時分私は京都から五月の末に歸つて來ると、半月ばかりして箱根の方にいつて、夏中を過してゐたが、その間に時々東京に出て來た。その往復の

途中私は、ふと橫濱に下車してみる氣になつて、土用の眞最中であつた。かねて往きつけて案内知つてゐた彼女の住居を訪ねてみた。ちよつと滿三年ばかりになるので、彼女はもうそこにゐないかも知れないとおもひながら、戸部の方に寄つた、ある高臺の裏にあたる、閑靜な一廓に入つていつた。

すると花崗石の門柱の立つた、可なり大きい同じ二階づくりの家が三軒並んでゐる、その一番手前の家の入口に、三年前から覺えのある、いばらぎと平假名で表札を掲げたのがそのまゝである。私は、絕えた女であつても、さすがに微かに胸が躍つた。

女中が出て來たので、取次ぎを賴むと、早速二階に通されたが、その時、三年前に何度も踏み馴れた階段を上つていきながら、ふと、そこから右手の階下の座敷の方を見ると、そこに三歲ばかりの女の兒が遊んでゐるのが眼に入つた。

やがて彼女も二階に上がつて來て、久し振りに挨拶を交はした。彼女は、滿三年前に見た時よりもそれだけ年を取つてゐる筈だが、その瘠身體に肉が附いたせいか、先の時分よりは一體に大きくなつたやうに見える。そして、どことなく貫目が出來て、奧さんらしく位が附いて見える。その時年は三十七か八であつた筈だ。

「子供が出來たんですか。」私は訊いてみた。

「えゝ、出來ました。」

「一寸今、こちらへ上りながら見たのですが、もう大きいやうぢやないですか。いくつですか。」

「三つになります。」

「ほう、ぢや一昨年生まれたんですな。」

「ネゝ、さうです。」

私はそんな會話の中にも、心の中で月日を繰つてみてゐた。先に彼女が出產したのは、その前の年の五月か六月の初であつた。そして、それは、多分、彼女の旦那との間に出來た子供ではなかつた。彼女の心證からいつても、それは否認されるのであつた。丁度その前の年の夏に私が彼女を知つてから間もなく彼女は姙娠したのであつた。そして翌年の五月か六月に生まれた子は男兒であつたが、生後わづかに一ケ月にして死んでしまつた。その時私は產後にはじめて彼女を訪ねていつて、その子供を一度見たことがあつたが、私が訪ねて行つてから、すぐ間もなく息を引取つたといふことを、彼女から後に手紙で知らして來た。彼女は、蟲が知らして會ひに來て下すつたのですと、感傷的なことを書いて來てゐた。彼女の話によると、生まれて二十日ばかりは、とても綺麗な赤ン坊であつたが、それから俗にいふ胎毒で身體中に厭な腫物が出來た。それで結局病死してしまつたのであつた。

そこへ女中が茶と菓子を運んで來た。

「孃ちやんゐて？」彼女は女中に訊いた。

「えゝ、ゐらつしやいます。」

「ちよつと連れて來て。餘處のおぢちやまに、色の黑いのを見ていたゞから。」彼女はさういつて笑つた。

女中は、すぐ階下から女の兒を抱いて來た。

彼女はそれを自分の膝に抱き取りながら、

「さあ、色の黑いのを見て下さいましつて……ほゝゝゝ」

「おう。これは大變に丈夫さうですなあ。」といひながら、私はその顔を見ると、まるで、彼女の旦那であるお父さんにそつくりであつた。それを見るにつけても、私はひとりでは、その子供の前に生まれた子供の顔を思ひ浮べてゐた。それは旦那には少しも似てゐなかつた。

「このお子さん、一昨年のいつ生まれたんです。」私はもつと精しく訊いてみた。

「さうですねえ……何時でしたか……たしか一昨年の六月か七月でした。」

「ほう、さうすると……」いひさして、私は又胸の中で子供の生まれた前後の月日を繰つてみてゐた。一昨年の六月から七月に生まれたとすれば、それはその前年の九月か十月に受胎したものでなければならぬ。さうすると、その時分は、丁度彼女と自分との間が、關係の絶える絶えないで、互に揉め合つてゐた時分であつた。彼女はその二三ケ月前の六月に先に生んだ子供を亡くした。子供を亡つた彼女は不斷の我儘癖が一層昂じてヒステリイのやうな感傷的になつてゐたが、その時分何とか斯とかいひながらも、私とも二三度會つた。そして、九月の末だか、十月の初頃に會つた時分など、旦那が、もう四十日も顔を見せないといつて、ひどく悲觀してゐた。腎臓の持病があるので、きつと患つてゐるのか知れぬ。居る處は、もの丶三丁とも離れない眼と鼻との距離なのだが、旦那に、隱し女があるといふことは飽くまでも嚴秘してあるので、こちからは不用意に手紙を遣ることも出來ない。もしこのま丶逢ふことも出來ず死に別れるやうなことにでもなつたら、どんな思ひがするであらうと、そんなことをかれこれ思案してゐるとそれが今にも現實になつて來るやうな氣がして、終には居ても起つてもゐられないほど神經が昂つてくるのであつた。それを考へると、天下晴れて夫婦と名乘ることの出來ない日蔭者の境涯くらゐ、果敢ない遣る瀬ないものはないと思はれた。あれほど毎日顔を見せ、どうかすると、身體に暇さへあれば、一日の中に二度でも三度でも一寸々々やつて來てゐたのに、今度の旦那の世話になつてからもう五年ほどになるが、今度のやうに四十日も來てくれないといふことは、ついぞ例のないことなのだ。もしかしたら、他に増す花が出來たのではあるまいか。……

私は一度、ちやうどそんなところに打突つていつて、ひどく彼女が怒つたことがあつた。それつきり互に相會はなかつたのだ。それでゐながら、今から思つてみると、それから間もなくか、或はその前かに旦那と會つてゐなければ、まぎれもない、まるで旦那と生寫しの今の子供は生れない筈である。

あの時分に比べて、ずつと肉が附いて、品の好い奥樣らしく重味が出來て、少しく眼尻に小皺の寄つた、白粉の吹いた顔を見てゐると、旦那に生寫しの子供を生んで、すつかり落着いてゐるのが、妬ましく癪に障つた。先に一度、私が京都の女に思ひ詰めてゐた最中、

「あなたの腹は眞實にどうなんです？　あなたの御量見次第でわたしにも決心がありますから。」

といつたから、私は一笑に附するやうに、

「戯談をいふのはお止しなさい。……あんたのやうな我儘で金のかゝる女が、どうして私のやうな貧乏な小説家のところになど來られるも

「んですかッ。」と笑つた。

すると、彼女も笑つて、それつきりであつた。その時、私に、別に深く思つてゐる女があつたから、強ちさういつたのでもなかつた。實際私には持て剩しものと思つたのであつた。しかし京都の方の女も結局ダメになり、彼女は彼女でそのとほり奧様らしく落着いてゐるのを見ると、一人私は、私自身の萬年孤獨を佗しがらずにはゐられなかつた。實のところ、箱根から東京への往復の途中わざ〳〵橫濱に下車してみたのは、萬一彼女が元のまゝでゐるならばといふ野心――といへば語弊があるが、今度は此方も眞面目に一つ話を切り出してみようかといふ腹もあつたのだ。それが、旦那に生き寫しの子供がもう三つになつてゐるのでは、もうどうしようもない。生後一ヶ月で死んだ先の子供はたしかに鼻の形からいつても眼尻の切れからいつてもあの旦那の子ではなかつた。あの子供がもし生存えてゐるなら、たとひ旦那との間は蜜のやうにあらうとも、膠のやうにあらうとも、いよ〳〵となれば尻を捲つてこちから割込んで芝居を打つて出る寸法もあらうといふものだが、もう斯うなつては手の出しやうもない！……私は二十分間ばかりゐて、早速出て戻つた。そして、これからそろ〳〵浴客も退けやうといふ八月の末又箱根の山へ歸つてゆく汽車の中で何ともいへず寂しかつたことを覺えてゐる。

「おい、ケイちやん、どうして子供があるのに、旦那と別れたんだい？話して聞かしてくれ。お前が又、どうしてそれを知つてゐる？」

「その女今藝者をしてゐます。」

「なに、藝者をしてゐる?!」私は又眼を圓くした。「どこで？」

「神樂坂で。」

「なに、神樂坂で。神樂坂といへば、すぐぢやないか。」

「えゝ、すぐです。」

私は頻りに頸を傾けながら、

「しかし、それは變だなあ。あんなに子供があつて……もう今は無事でゐたら、九つか十くらゐになつてゐるだらうが……旦那と別れて藝者になるとは……一體どうしたといふんだらう？……人違ひだらう。」

私は又ケイのいふことを疑つてみた。

「いや、人ちがいぢやない。たしかにその女です。」

「かうッと、もう、それ四十五か六になるよ。」

「えゝ、もう、そのぐらゐになるでせう。わたくしの知つてゐた時分が二三年前で、もう私も四十になつたといつてゐましたから。」

「大分年を隱してゐるな。……そして、お前どうして、あの女と知つたんだ。」

「あの女が自分でさういひましたもの。」

「あの女が自分で、……私のことを？……君は派出で藝者屋に働きにいつてゐたのかい。」

「いえ、さうぢやありません。ほかの處に居る時分でした。」

「どうもお前のいふことは、まだよく合點がゆかないなあ。」

が、話はかうであつた。ケイ女が、別に奉公といふ譯でもなく、ある懇意先からの依頼で、暫らく手傳ひといふやうな名目で身を寄せてゐた家の主人は、元海軍の中佐あたりまでいつた軍人であつたが、ブ

ランスに留學して飛行機を研究してゐたところから、自分から退職して、飛行機に用ゐる機械を製作する工場を起して相當盛大にやつてゐた。その主人が神樂坂で捕虜にしたのか、自分の方でせられたのか、とにかく客いろになつた仲がその富葉であつた。主人はその頃、二三年前に四十七八の、いかにも元海軍々人らしい、さつぱりした氣象の愉快な人で、始めつから奥さんを持たなかつた。勿論金廻りもいゝところから、よく遊びにはいつてゐた。しかし家には奥さんが居ないかはりに女中や書生なども多勢ゐたが、主人が始終藝者遊びをして夜一時二時になつて歸つて來るのをよく知つてゐるので、そんな時には、あゝ今時分又かといつたやうな調子で、格別起き出でゝ門まで出迎へたり、玄關を開いたりするのでものなかつた。そしてケイ女の香織が、どんなに遲い冬の夜でも、又雨の夜でもいつも寢床を出ていつて、門を開けて迎へた。主人は夜遲く自動車で歸つて來るのであつたが、その時いつも主人と一所に同乘して送つて來るのが、後に藝者になつた富葉であつた。

「香織さん、こんなに遲く、寒いのに、每度濟みませんねえ。」

「いえ、どうしまして。」

「君、この香織は全く感心だよ。」

主人は富葉の口について香織をほめた。

そんなことから、香織と富葉とは女同志で、すぐ親しくなつた。そして每月廿四五日頃になると、主人の內證の使者になつて、富葉のところへ金を屆けていつたりした。そして、行くと長く遊んでゐた。

「香織さん、あんた藝者におなんなさいよ。ねえ、あんたならきつとなれてよ。」

などゝいつてよく勸めた。

「ほゝゝ、わたしなどのやうな、田舍から掘り出して來た八つ頭のやうな者が、藝者だといつて出たら、客の方で吃驚して逃げ出すでせうねえ、ほゝゝゝゝあゝお可笑しい。」

香織がさういつて、自分から轉げるやうに笑ふと、富葉も一所に笑ひながら、

「ほゝ、そんなものでもないのよ。藝事のことをいつたら、わたしだつて隨分氣恥しくなるわ。いくら藝者だつて、藝事ばかりで此の商賣に出る者ばかりはありませんもの。あんたのその氣風だつたら、きつと面白い人になれてよ。ねえ、おなんなさい、わたし仕込んで上げるわ。」

富葉はさういつて、眞面目に勸めるのであつた。

富葉の家には看板かりだの、分けだけ、まる抱えだの四五人も居つた。彼女は土地では無論新しい藝妓であつたが、座持ちとしては、なか〳〵評判が響くので、まる三年も經たないうちに、すつかり年寄り藝者で顏を賣つてしまつた。しかし、一體が神樂坂も、御多分にもれず、若い綺麗なので賣る所なので、富葉は、

「わたし、つまりは吉原に行きたいと思つてゐるのよ。あそこなら、お婆さん藝者も相應に持てるから。何といつても此處は田舍ですよ。」

そんなことをいつてゐたから、或はもう何處かへ住み替えて神樂坂にはゐないかも知れないが、その富葉は、香織が主人の召使ひで行つたら、又は自分で氣の向いた時に遊びにゆくと、ほかの者は皆なお座敷に出拂つてゐても、自分だけ一人で家にゐて、まあいゝでせうと

いつまでも、引留めて、いろんな、自分の身の上ばなしなどをして聞かせた

「わたし、今までには隨分いろんなことがあつたのよ。」といつて、ずつと最初日本橋から半玉で出てゐた時分、信州の方の金滿家の息子に落籍されて、正式の奧さんに供はり、一年足らず田舍に行つて住んでゐるうちに、その若い主人に死別れたことやら、その時もう姙娠して七月から八月であつたことの悲哀。それから又東京に取戻されて、やう／＼身二つになつたところで、産後たつた半歳ばかりして又元の土地から藝者に出たが、その時、ぽた／＼滴の垂れるほど張つてゐる乳にガーゼの繃帶をしてお座敷に出たといふやうなことを感傷的な心持ちになつて話して聞かせたりした。

「それを振り出しに、その後いろんな人に會つた。隨分男道樂もしてよ。ほゝゝ。」富葉は四十婆さんの耻かしいことを知らぬといつたやうな調子で、やつと二十そこ／＼の素人娘の香織を捉へてそんな話をするのであつた。

「一度など小說家を情人にしたこともありましたし、あの人今どうしてゐるか知ら……前にはわたしも小說が好きでよく讀んでゐましたけれど、もうこの頃はすつかり讀まなくなつたら、どんな人がどうなつてゐるか少しも知らない。その人の書く小說でない、一寸したもの私が大好きだつたの。」彼女は、過ぎ去つた戀を戀するやうにしんみりしていつた。

今、香織は、私ののろけ話しから二三年前に富葉から聞いてゐた彼女の惚けばなしを記憶して、その間に聯絡をつけてみたのであつた。

一體香織といふ女は、妙にそんなことに頭のよく働く女であつた。小說家を情人に持つた藝者や妾は少しもめづらしくない譯であるが、彼女の頭は不思議にそこにある聯絡を直覺したのであつた。私はやつと少し諒解めたやうに、

「しかし不思議だねえ。私の名はいはなかつたかい。」

「そんなことはいひません。けれども、何だか、今旦那さんの話で、さうぢやないかと思つたのです。その女も横濱で堀江といふ病院の院長の世話になつてゐたといふやうなことをいつてゐましたから。」

「おや、ちがはない。それにしても、あの堀江博士は隨分あの女に惚れてゐたんだがなあ。どうして別れたんだらう。子供が出來て、四十に近くなつて別れるといふの解らない。堀江さん死んだかな。」

香織は强く頭振りをふつた。

「うゝ。博士も地震では死なゝかつたでせう。わたし、そのことは、よく知らないけれど。……別れたのは、その爲ぢやない。」

「ぢや、どうしたんだ。」

「富葉といふ藝者は隨分浮氣者ですねえ。」

「うゝ、隨分浮氣の方だ。それがどうした。」

「旦那があるのに、他に男をこしらへたんです。」

「それは俺のことかい？」

「えゝ、旦那さんもさうでせうけれど。また別の男を。」

「いろんなことを知つてゐるねえ、香織ちやんは。」

「それは、隨分ひどいんです。私もそのことは富葉から聽いたのぢやない、ほかから聞いたのですけれど。」

といつて、又香織の話すところに依ると、富葉――その頃は素人の時分であつたから無論本名をいつてゐたが、彼女は旦那と一所に修善寺だつたか、伊香保だつたか、ある年の九月の初に溫泉場に五六日行つてゐた。その時、隣室に滯在してゐる客といつしか親しく話し交はすやうになつた。その客といふ男はまだ三十を一寸出たばかりくらゐで、彼女よりは十も若かつた。下町の商人で、江戸前の氣の利いた男つぷりであつた。四十の聲を聞いても根が浮氣者の彼女は、一度隣の座敷の客を垣間見たゞけで、もう初つから、ちよつと焦れがしてゐたのであつた。そして、二三日居る間に廊下つゞきのところから、互に親しく口を開くやうになつた。近くの山や渓を旦那の博士を誘ふて、その男と三人で散歩したりすることもあつた。彼女は一所に歩きながら、旦那とその男とを心の中で比べてみると、どうせ女と生まれて男を持つなら、内の旦那のやうな縦から見ても横から見ても野暮で固まつてゐる人に生涯の身體を委かすよりも、こんな見るから好いたらしい人と一苦勞をしてみたいと、浮氣の蟲が身内をぞく／＼かぶつて來た。

來て四五日して、溫泉場は終日びしよ／＼雨に降りこめられてゐた。その日の午後であつた。散歩も出來ないところから、朝から二度も三度も湯に漬つて腹を消なしてゐた。

旦那は彼女を入浴にさそふた。わたしは止しますから、あなたお一人でいつてゐらつしやいといつて拒んだ。彼女は旦那が手拭を下げて階段を下りていつた後、何となく隣座敷の客に旦那の居ない間に、二人きりで口を利いてみたくつて堪らなかつたので、廊下から言葉を掛けてみた。

「關根さん、お一人？」わかり切つたことをいつて訊いてみた。

「えゝ……溫泉で雨降りは厭ですねえ。」

「ほんとにねえ。飽き／＼してしまひますわ。」彼女は隣室の閾際まで步み寄つた。

「まあ、お入んなさいまし。」關根は呆やけたやうな言葉を發した。

「おや、お休みのところ。……これはとんだ失禮を。」

彼女は慌てたやうな素振りをした。

關根は、すゝきに月を染め拔いた淺黄絽の薄い、蒲團を胸から下の方へ掛けたまゝ、仰向きになつて、キングか何か見てゐたが、一寸顔を横向けて、障子の處に佇んでゐる彼女の方を見た。

「構ひませんよ。まあお入んなさいまし。」

「さう。……わたし隨分失禮な女とお思ひになるでせう……といひながら、彼女はちよつと、廊下の方を振顧つてみて、そこらに誰れも人のゐないのを見て、つつと關根の座敷に入つていつた。そして關根の床の脇に寄り添ふて坐つた。

その時もう二人の眼の色は異様な暗示に輝いてゐた。さうして、どうしたのか、彼女はそこに坐つたまゝ、黒襦子の衿のかゝつた大島の袷の袖口を以つて、眼を拭きながら、しく／＼泣き出した。

關根は、はつと思つたが、大抵それは察してゐた。

「どうしたのですか。」と彼は不思議に思つた。

「わたし、どうしてかうなんでせう。自分でも分らないんです。」彼女は少しく鼻をつまらせたやうな聲を出していつた。

関根は腕を伸ばして彼女の手頸を優しく握つて引つぱるやうにした。

一旦浴室へ下りていつたとおもつた旦那は、便所へでもいつてゐたのか、又引返して戻つて來た。そして彼女がゐないのと、

、、、、、、、、、、、、。

旦那は、

一圖に憤つた。

到頭旅館の主人が仲裁に入つて、旦那に侘びたり宥めたりして、それでも流石は身分のある人だから始末が好い。結局旦那の方から旅館の主人を介して相當の金額の手切れを與へることにして、彼女は旦那からその場で綺麗に見放されてしまつた。温泉に行く時には旦那であつたが歸りはその男と一所に戻つて來た。

「へえ、そんなことがあつたのか。まるで、その男の役まはりは、一と頃の私の二の舞だな。なるほど浮氣な女だ。」

私はそれを思ひ、あれを考へして、そんなことなら、一度箱根と東京との往復のついでに樣子を見に立寄つた時の、自分の氣持ちを强く押していつてもよかつたのだと思つたが、しかし又考へ直してみるとそれは結局縁がないのが落であつた。

「それで、藝者屋のおやぢがその年の若い色男なのか？」

「うゝん、その男とは二た月か三月ですぐ別れてしまつた。」香織は又頭振りをふつた。

「おや！　たつた二た月で別れたの。」

「その後何でもすぐ大阪とかへ働くいつてゐたでせう。その時又藝者になつたとかいふはなしらしかつた。ですから震災は大阪にゐる間のことです。大阪でも二人か三人男が變つて、東京に歸つて來て神樂坂で藝者屋を始めたのは、その大阪の客から金を出さしたのでせう。そんなことを聞きました。」

「さうかねえ。」といひながら、私は心の中で、彼女の持ち變へた男の數を算へてみた。

（五月六日）

植物園

岡　麓

妻つれて動物園に来りけり獣が居たれば機嫌なほりぬ

妻つれて植物園に来て見れば辛夷の立木花さかりなり

桜にはまだ四五日の隙間あり植物園に人のすくなき

妻つれてはじめて来つる春の日にわれや樒の花を見にけり

枝々に盛り咲く花樒そこの木のわれにさびしき

ひたさしに日はささねども木がくれの樒花咲く。春と云はむとや

小夜の中山

松村英一

久延寺の裏山ぬけており来れば東海道の道とほりたり

日にしろく光る若芽は水楢か古きみ寺の裏山道に

楢の芽の白くかがよふ春の日に小夜の中山我が越ゆるなり

路傍に夜泣石を見る

路のべの石のおもてにうすれたる彌陀佛の文字読みたどるなり

茶のいろの淡きをあはれみて掬める蔓は堅かりき

浅谷の白砂の上に道つくり水乏しらに流れゐにけり

山上歌篇

藤澤古寶

朝日さす山上の湖に聲かなし子をつれあゆむ雷鳥の聲

山の上のお花畑を音たてて雪どけの水とほく落ち行く

かぎりなく行き過ぐる山の白雲に一日霧けしお花畑は

青空は雲かげもなく澄みとほり天づたふ日にさはるものなし

天の原みわたすかぎり雲の海とほき夕日に泪こぼるる

山の上は夕はやくより霧ふかし這松原に今宵寢むかも

耕人餘錄

吉植庄亮

百姓はたのしき業か水多くかけにし小田はよく出來にけり

あつき飯吹きつつわれらすごやけし大寒とおもふ朝霜のいろ

大寒の寒さいたりて土に凝るあしたの霜のいろ寂びにけり

寒むやとて家の中にもかむりゐし帽子と思ひきかゆき掻くとき（微恙籠居二首）

居のこりて婢がつく唐黍の音ばかりなる冬の日の光

春の野に働き居ればおのづから歌なりにけりおもしろの歌や（春一首）



吉野紀行

吉田絃二郎

四月五日六日と伊豆では寒い日がつゞいた。天城には雪が降つてゐた。櫻はさかりであつたが、天城の花を見てはわたくしは吉野の花を想像してゐた。

雨が降りつゞいた。時をりは嵐さへ吹いた。わたくしは宿の傘をかりては松山の赭土道をのぼつて行つた。谿にも、松山にも、湯の町にも、草山の麓にもさかりの花が雨に煙つてゐた。

松山のなかの小屋にはいつて爐に柴をくべては終日を雨に暮らすこともあつた。草山を出た雲がやがて千切れ千切れていつかは雨の中に消えてしまつたり、不圖松の幹にからんで柔かな霧となつて流れてゆく姿を眺めてゐると飽くこともなかつた。

今年は豐年鳥が來て蕾を啄いたので花がすくないと山の人はいつてゐた。

ちやうどそのころわたくしは志摩あたりに鷽の群があつまつて來て蕾をたべたのでこの春は花がすくないといふ新聞記事を讀んだことを思ひ出した。

日も日もわたくしは山にのぼつて行つた。一抱へも、二抱へもありさうな櫻の老木が松の間に咲きこぼれてゐるのを立ちどまつては飽かずながめることもあつた。「身を分けて見ぬ梢なく盡さばや」とうたつた西行の心も思ひ出さるゝ日が多い。

天城の谿から谿、峽から峽と靜かな花は咲いても、散りかゝつても眺める人もない。それほどに天城の春は閑寂である。春の雨のみが煙のごとくこめてゐる。

天城の花を見るにつけて、雨が花を打つにつけて吉野を思ふ念はひたふるに旅人の情をそゝるのであつた。

雨また雨の日がつゞいた。天城の花を惜しみつゝ吉野への旅に立つたのは十四日の朝であつた。

遙かな奥の森をしつとりと雨がつゝんでゐた。　吉野の峡へ通ふガタ馬車のなかには旅人の影も稀であつた。

吉野の山は荒れてゐた。　飛鳥の部落を過ぎるころわたくしは窓を開けた。　雨は横なぐりに吹きつけて來た。

わたくしは窓際に沿ふた幌馬車のなかにYの幻影を描いた。　しかしYは立つてゐなかつた。　去年伊豆から出して置いたわたくしの手紙がまだYの手にとゞかなかつたのであらう。　去年からそこの療養所に佗び住まひをしてゐるYの白い寂しい顔を想像しながら、わたくしは荒れ狂ふ森の梢を見つめてゐた。

大井川は雨に煙つてゐた。　わたくしは雨の日の大井川を愛する。　わたくしはかつて幾度か大井川のほとりを歩いた。　かつてわたくしとともにそこを歩いた誰れ彼れのことを思ひながら雨に濡れた森をながめた。　雨の降る日の白い河原は晴れよりも美しい。　白い磧をへだてゝ麦があり、町があり、山がある。　山も町も雨に沈んでゐる。　悠然として旅人の心を打つ。

関ヶ原を過ぎるころ雨はふたゝび窓を横なぐりに吹きつけて來た。　日は暮れて來た。　野の中にものをさがすやうな心持ちで嵐のなかの花を見る。

京都へ着いたころは日はすつかり暮れて雨はたゞ静かに降つてゐた。

いつも泊る鉄屋町の旅館の辺りは大きな曖昧問屋になつてゐて、幾人かの客が遊んでゐる。　夜の十時ころになるといつも数人の男たちが火を見張つて歩くのであるか、その聲が建仁寺あたりの静寂を破らせるおうおうと響く聲である。　はげしい嵐のなかに六七人の男たちの声の裡からでもわいて來るやうな聲が聞えて來るのであつた。　いかにも古風な火の用心である。　旅疲れのうたゝ寝におうおうと呼ぶその聲を聴くと、いかにも京の町へ來たといふ感じがわく。

わたくしは吉野への道や、汽車の時間を調べたり、鞄のなかに入れて來た山家集と芭蕉句集を取り出しては拾ひ讀みをした。

芭蕉が吉野の花を訪ねたのは貞享五年の春であつた。

「やよひ半過る程そゞろにうき立心の花の我を導く枝折と成りて、吉野の花におもひ立んとするに、かのいらこ崎にて契り置し人の伊勢にて出むかひ、供に旅寝のあはれを見、且はわが爲に童子と成りて道のたよりにもならんと、自ら萬菊丸と名を云ふ。まことにわらべらしき名のさまいと興あり。いでや門出のたはぶれ事せんと、笠のうちに落書す

　　乾坤無住同行二人
　よし野にて櫻見せうぞ檜木笠
　よし野にて我も見せうぞ檜木笠　　萬菊丸」

去年冬「三河の國保美と云處」——伊良古崎のほとり——に杜國が世を忍んでゐたのを訪ねたをり芭蕉は春の旅を約束したのであつた。

去年の秋から吉野行をたのしみに待つてゐた芭蕉の心をいろ〳〵に

躊躇しながらわたくしは桃山の雨の音を聞いた。雨を気にしては幾度か眼をさましては雨の音を聞かなければならなかつた。

雨の夜が明けた。わたくしは空を仰いでは軽い溜息をさへ洩らした。午後になつても雨は止まなかつた。わたくしは吉野行を一日のばすことにしてあてもなく鴨川の方へ歩いて行つた。三條小橋の上から高瀬川の暗い濁い流れをながめるごとにわたくしはいつも鴎外の「高瀬舟」を思ひ出す。護送されてゆく若い囚人の物語を思ひ出しながら三條大橋をわたつて東山の方へ歩いて行つた。夜雲の名所のみが雨に濡れて、花は散つてゐた。

けさの新聞で博物館に東山の大原氏のコレクションの一部がけふから陳列されることを、ミレエの絵が一点はいつてゐることを読んだので、西谷の方からまはつて博物館へはいつて行つた。わたくしはよい所に京都へ来たと思つた。グレコ、シヤヴアンヌ、マチス、カリエール、チアアユリ、ベナール、レーリルマンズなどの作品が四十点ほども並べられてあつた。雨の日のせいか見る人もすくなく、窓からは散りのこりの花をながめつゝ心ゆくまでしづかな鑑賞を楽しむことができたのは何よりの旅の見つけものであつた。なかんづくわたくしをよろこばせたものはミレエの「グレビーユの教会」といふ絵であつた。わたくしはその絵の前に立つた時、これこそほんたうの芸術だと思つた。幾度か去らんとしてはふたゝび立ち止まつた。教会を囲ふて柔かな草が何やくとかさやいてゐた。一体の粘土塔は花より屈曲して遊べ、殿堂の裁を纏ふて起つてゐた。塔は草に埋れてはまた草のなかを起つてゐた。殿堂の様を偲ぶ白い雲頭が寂然として日の光りを浴びてゐた。そこには一片の雲影もなかつた。鳥の影もなかつた。寂と寂とたゞ寂然として人の世を夢つた。塔の柔かな草の上にたゞ一人の若者が寝ころんでゐた。かれはスケッチを携へてゐた。かれは塔を見、空を見、何かを思惟しつゝあるのであらう。何といふスヰートな詩人の姿であらう。風もなく、鳥の声もなく、たゞ雲のみ断崖に沿ふて悠久を起る。

ミレエの絵を見て館を出ようとする時わたくしは不図古風な軍船の上に一箇子の木偶がかざられてあるのに気付いた。秀吉の一子鶴松の玩具である。鶴松のために作られた可憐な甲冑二領、小刀などを見るにつけてもいかに晩年の秀吉がその子のために父らしい濃かな情愛に耽けたかといふことを想像して、一層人間らしい秀吉を愛する気になつた。たしかにかれはその子のためには分別を失ふほどの子煩悩であつた。鶴松の死に際して失神し、或ひは寺にこもるといふやうな殊勝なかれの心を思ひながら阿弥陀ヶ峰の麓に立つてわたくしは暮れてゆく京の町をながめてゐた。

廿六日。雨は晴れた。三條大橋から電車に乗つて先づ宇治へゆく。疏水沿ひの青柳と八重がさかりである。宇治は二度目である。大地震の年の八月竹島の旅からのかへりに黄檗の萬福寺に詣でゝ日が暮れたことがあつた。宇治は静かな、清冽な水をながむるだけでも忘れられぬ地である。宇治川を溯みて南北の山の相迫るところになほさかりの

花をのこして春光漫々として漂ふてゐる。案内の男が佐々木、梶原先陣の跡だと指さした洲のあたりには二三尺に伸びた葦の葉がすがくとかがやいてゐる。宇治川の土堤を下りて數歩のところに「扇の芝」の遺跡、賴政鎧懸けの松がある。をりからの落花に平等院の物語りも殊にあはれに思ひ出される。

土堤の茶店では家ごとに草餅を鬻く。草餅は何となく昔を思ひ出させてなつかしいものである。平等院の寶物を觀、細川某の手になれる庭を見る。苔深く石寂びて春のあはれをこめてゐる。見る人もなく花は散つて宇治の茶畑を埋めてゐる。

宇治から汽車に乘つて奈良を素通りに吉野へ行くことにした。けふも木津川をわたる時木津の土堤下の竹藪の小蔭に重衡の輪塔を見た。いつの年であつたか、法隆寺に詣した夏、わたくしは露草のなかに重衡の墓を見出して、

　　このあたり塚あり木津の螢草

とうたつたことがあつた。

汽車の窓から見る若草山には行樂の人々の群が點々として草山の石のごとくながめられた。

大佛の屋根、猿澤の塔のみを菜畑のかなたにながめつゝ汽車は南へ南へと大和平原を走る。

京終といふ名も旅人には面白い。大和平原の數里麥畑菜畑をへだてて法隆寺の塔をさがさうと思つて幾度か見當をつけて見たが、春日遲々、道も小山も霞につゝまれてゐた。

程よき小山、明るい草山を背景に、春の風の小波をたゝへた池の水を前景にして築地に圍まれた大和の家の群が正しい輪廓の一かたまりをなしてはつゝましく相隣りしてゐる。そこでは平原の中に點々として村が出來上り、町が出來たのではなくて、千年前の舊都の一廓が壞たれ、さらに一廓が崩されて、金殿は朽ちて畑となり、池塘となり、わづかに崩壞の禍を免れた部分のみが點々として取りのこされ、金殿を埋めた土の上に麥がかゞやき、春の風が吹いてゐるといつた感じである。山につゝまれて靜かに眠つてゐる大和平原全體が千年の古都の廢墟である。何といふ寂しい懷かしい廢園であらう。廢園のこゝかしこに眞つ白な梨の花を見るのもわびしい。

大和めぐりは廢墟の遍路である。滅びたるものを弔ふ挽歌の旅である。氣をつけて見ればかしこの村はづれにも、かしこの一筋道にも菅笠の大和遍路の姿が見える。

三輪、畝傍、なつかしい名である。麥畑、水田の中の古い町、雨も降らばさらに情趣深きことであらう。

畝傍驛のすぐ前に古風な旅籠がある。庭、部屋のとりかたも昔めいて落ちつきがある。井戶傍の八重櫻がさかりであつた。奥の部屋に入り茶を喫して疲れをやすめる。眼をつむれば裏の菜畑の上で雲雀が高鳴きしてゐるのを聽く。畝傍、香久山を右と左に麥畑をへだてゝ見る。飛鳥川のほとり、久米寺のほとり、かしこ、こゝとたゞ霞のなか遙

かに眼をやるのみ。このあたりの山はみなたゞの小山である。川はみな小川である。春雨の日に涓滴の音を聴つゝ旅の宿の一日を樂しむにふさはしきところであらう。蛙の聲が悲しくも懶く聞える。

畝傍からは電車になり、道は吉野へと上り坂になつてゐる。小山また小山を縫ふて走る。碧珠のやうな吉野川の流れを見出して間もなく電車の終點である。花時なので自働車と俥の客を引く者が夥しい。

吉野川の長い鐵橋を渡ればやがて人家は盡き急坂にかゝる。左手に吉野川をへだてゝ上高市のいかにも落ちついた町の姿がながめられる。

わたくしはかつてシモンズの伊太利紀行を讀んだ時、一つの町を生けるものとして見たかれの見方を面白いと思つて讀んだことがあつた。ローマの町、フロレンスの町、ナポリの町それぞれの脈搏を持ち感覺を持つてゐる。

京の町、奈良の町、三輪の町、大和の農村それ／＼の呼吸と感覺とを持つてゐる。吉野川をへだてゝ春光を灑がれてゐる山の町上高市を見おろした刹那、わたくしはシモンズの言葉を思ひ出さずにはをれなかつた。かつてわたくしは大和から伊賀に入つた日、木津川沿ひの修竹にかこまれた小さな村を見て尊い藝術に對するやうな感激を經驗したことがあつた。去年高野へ詣でたをり紀伊見峠のあたりで河内の山村を眺めた時もほゞそれに近い感興をそゝられたことがあつた。吉野から見た上高市の眺めもそれであつた。

美しい靜かな自然のなかにひとりでに作り上げられた小さな村、小さな町は時として人間の手で作られた藝術に幾倍の尊さを持つことがある。

吉野川の上流に青い山が聳えてゐる。伊勢の山である。幾聯の丘がしづかに美しい吉野川の流れを下つてゆく。道は山腹をめぐりては川を失ひ、川を見出す。急坂を登りつくしてはやがて深い谿に沿ふて緩かな道となる。櫻の老木が先づ道を掩ふまでに咲いてゐる。道は尾根を傳ふて一上一下して走る。下の千本、中の千本は見頃であつた。山の背を一筋の赭土道が走つてゐる。道を挾んで吉野の宿場があり宿場の家々を埋めて雲のごとき花が簇つてゐる。谿も峯も花である。たゞあまりに電車の便が發達したゝめに、せつかくの名山も靜心をもつて花をながむるにはあまりに人の影が多過ぎるうらみがある。吉野の花こそ靜かな雨の日に眺むべきものであらう。

義臣村上義光の墓は道傍の小高い丘の上にある。このあたりからいよ／＼吉野の花らしき花のながめがはじまる。「歌書よりも軍書に悲し芳野山」の跡もこのあたりより初まるのであらう。

吉野山は花の山であり、同時に數々の人間哀史の山である。吉野といひ、高野といひむしろ葉櫻のころ青葉のころ、ほとゝぎすや佛法僧の啼くころを選んで靜かに訪ふべき山である。

南朝五十年の御所跡に立てば花は旅人の悲しみをこめて散りに散

る。

宿に着いたのは五時過ぎであつた。出來ることなら今日のうちに奥の西行庵をたづねて明日は如意輪寺あたりの花を見て、なるべく人のすくないうちに山を下りたいと思つたので、宿に着いて休む暇もなくさらに山をのぼることにした。道傍の店では裏竹を染めてこしらへた花籠を賣つてゐる。わたくしは子供のころあの花籠を土産に買つてもらつてどんなによろこんだか知れない。東京では見かけない。子供のころのことを思ひ出す時には乾度あの花籠のことを聯想するのである。わたくしはその花籠を夢に見たこともあつた。一つもとめて歸りたいと思つたが、たうとうもとめないでしまつた。櫻の坊、竹林院の前を通りすぎて天王橋あたりからはさすがに昔のまゝの山の宿の面影が殘つてゐる。道はふたゝび急峻になる。宗信法印の輪塔が暗い木立のなかに冷たい苔につゝまれてゐる。後醍醐帝が皇女を娶されたといふ勤王の士である。

宗信法印の墓から二三丁のぼつたところでわたくしは奥から木を伐して來る杣人たちに逢つた。丸木をそのまゝに車輪にした小さな車の上に吉野の杉材を運んで山を下つて來るのであつた。有名な吉野杉である。一間物、二間物とあるが、いづれも氣持ものいゝほどよく柾が通つてゐる。

「こんな杉で酒屋さんのあの大きな酒樽をこしらへたら千圓くらゐかかりますか。」わたくしは一人の男にたづねた。

「それや、ずつと昔の話ですよ。今ではとても幾らかゝるかわかりますまい。この木なんかこれくらゐ挽いたゞけで天井板一坪はとれます。たゞこれだけでも二百圓や三百圓はしますからなあ」といつて杉の木口七八分くらゐの厚さのところを指して見せた。

「高野山は見えますか。」

「この上の山から見えます。あれが金剛山、葛城……それからもうすこし左手に高野が見える筈です。」

わたくしは杣人に教へられたまゝに山をのぼつて行つた。幾度か立ちどまつては麓の花をながめた。谿は暮れかゝつてゐた。花は霧のごとく山の背を走る道と、谿とをつゝんでゐた。吉野川であらう、暮色につゝまれた幾重の山のかなたに銀のごとく光つてはやがて落日とともに暮れて行つた。

そこいらにはまだ梅が咲いてゐた。櫻はまだ堅く蕾んでゐた。花屋倉は急峻な坂を擁して俯瞰する峠の足溜りである。昔は山門のやうなものでもあつたのであらうか。佐藤忠信が吉野の僧兵を防矢した場所であると傳へられてゐる。さらに二三丁行つたところに水分神社がある。古風な建築である。軒も庇も欄干も苔むしてゐる。水分神社からさらに坂を攀ぢて數丁歩いたところでわたくしは若い二人づれの杣人に逢つた。

「これから奥の西行庵まで行けませうか。」

「まだ十五六丁はありますがな。それに行きついてもあつちは暗い山

の中ですから、今日は山を下つた方がいゝでせう。」

わたくしは若い二人の杣人と別れた。そこいらは櫻の老木が並木を作つてゐた。わたくしはしばらくそこに突つ立つてゐた。

春の夜の滿月が伊勢の山に出た。落日が高野あたりの山のかなたに沈んで行つた。わたくしはしばらくの間、吉野の奥の滿月と落日とをたゞひとり靜かに味ふことができた。蕪村の「日は西に月は東に」の句を思ひ出さゞるをえなかつた。

わたくしは西行庵を斷念して、ひたぶるに吉野の奥の滿月の姿にながめ入つた。

谿は霧につゝまれてしまつた。月の光はまだ谿の底までは屆かなかつた。風の音も絶えた。わたくしは坂道の傍にしやがんだ。そこの一筋の道をかつて西行が歩み、芭蕉が辿つたであらうことを考へると薄暗の中の谿も好かつた。

どこの家も花見の客たちが夜が更けるまでさわいでゐた。わたくしは寝床についたがどうしても眠れなかつた。京都の宿を立つ時山家集を懐にして來たが、隣りの部屋の人たちがさわぐのでとても歌一つ讀むことはできなかつた。わたくしは花のさかりに吉野を訪ねたことを後悔するやうな氣にさへなつた。湯が空いたといつて來たのでふたたび起きて湯殿にはいつたが、山上は水が乏しいので、湯は臑までも來なかつた。わたくしは逃げるやうにしてかへつて來て夜具にくるまつて寢た。夜つぴて雨戸を締めないので月の光りが水のごとく冷たく障子に映つて來た。夜の十一時ころであつた。わたくしは枕もとの障子が急に激しく顫へて、獸の呻るやうな聲を聽いたので、障子を明けて縁側に出た。

二階の縁側から五六尺へだたつた櫻の幹に栗鼠のやうな形で、猫くらゐの大きさの動物が尾を立てゝ、呻つてゐるのであつた。

鳥でもなく、獸でもなく妙な動物である。巧みに木から木を飛び歩く。宿の男にたづねたらばんどりだといつた。その名を聽いた時、わたくしは夕方櫻の坊の横で子供たちが月の下に出て「ばんどりだ！ばんどりだ！」と叫んで高い木に石を投げてゐたことを思ひ出した。

いゞいばんどりのさわぎでわたくしの眼はさらに冴えた。夜が更けて、月の光りが眞冬のやうに澄んで來ても人々は唄をやめなかつた。わたくしは一刻も早く夜が明けて、このさわがしい境地からのがれたいと思つた。

夜の明けるのを待ちかねてわたくしは起きた。顔も洗はないで逃げるやうにして宿を出た。わたくしははじめて救はれたやうな快さを感じた。道には眞つ白な霜がおりてゐた。

「蚤虱馬の尿する枕もと」わたくしは芭蕉の句を思ひ出した。夜つぴて隣りの部屋でビールを呼び、わめき、うたひ、しやべりつゞけてゐた無智な女の不愉快な聲は蚤よりも虱よりも不愉快であつた。

昨日夕方歩いた坂道をふたゝび花屋倉の方へのぼつて行つた。谿は霧の海につゝまれてゐた。奥の千本に近く金峰神社がある。役の行者

の道案内をつとめたといふ山神の木像が石燈の下に祀られてある。中老の宮守が一人焚火をしてゐた。
「お早うございます。」わたくしは聲をかけてその男に近づいて行つた。そのあたりからはほとんど人の影を見ることもない。
「けさはひどい霜でしたなあ。しかし花は時を知つてゐるもので、昨日まで雪がつもつてゐたと思ひましたが、花はもうほころびかけて來ましたよ。」
七八人の大峯詣りの道者たちが裏の山道を下つて來て一緒に火にあたつた。
　わたくしはその人たちに別れてさらに急な坂をのぼつて行つた。小鳥の聲が聞えて來た。
大峯山への道から右に岐れて杉の木立のなかを四五丁も歩いて谿に下つたところに苔清水がある。水は暗い木立の下をくゞつて五六尺の高さから落ちてゐる。水のかたはらに楳室の手に成れる芭蕉の「露とく〳〵」の句が刻まれてある。碑は苔につゝまれて文字のみ黒く沈んでゐる。
　何となく勿體ない心持ちもしたが苔清水を手に掬んで潄ぎ飲む。
とく〳〵の水からさらに南へ一丁ばかり山の腰に沿ふて狭い道をゆけば急に半段ばかりの地が展けて、周圍には樅が繁り、殊に老櫻が多い。そのやゝ平な林間の片隅に山を負ふて西行庵がある。辛うじて人一人の膝を容るゝに足るほどの草の庵である。眺むるに、佇むにたゞ涙流るゝほどの尊さを覺ゆる。
　こゝに來て西行の「よしの山やがて出じとおもふ身を花ちりなばと人やまつらん」の歌を思へば西行の悲しい決心が眼に見えるやうで、草も清水も歔欷してゐるやうな氣がする。六尺の大男西行が吉野の奥の地に獅噛みついて泣いてゐる悲しさが旅人の腸にこたへて來る。恐らく芭蕉もそこに佇んで泣いたであらう。
何といふ偉大な二つの寂人の影がかつてそこの草の上に投げられたことであらう。
西行庵の草の屋根に達するほどの丈高い馬醉木が一本目立つて見える。その雪のやうな花が濡れ縁の端に咲きこぼれてゐた。
何時かは庵の主が旅から歸つて來るのを待ちわびてゐるかのやうに馬醉木の花は白く尊くさびしかつた。そこには西行が人生の寂寞をぢつと見つめてゐたであらう日の秋の靜かさがなほ漂ふてゐた。
奥の櫻は冬枯れて、草の霜はまだ消えてはゐなかつた。
ふたゝびとく〳〵の水を掬んで、わたくしは如意輪寺の方へと志して山を下つた。
金峰神社の堂守はなほ焚火をつゞけてゐた。
「御機嫌よう！」
わたくしたちは旅人らしい挨拶をかはして山をおりた。

——一九二七・五——

春陽會を批評す

河野通勢

この批評文を書いて見度いと云ふ氣になつた動機は、斯ふである。

私は此度初めて畫を鑑査する位置に立つた。そして他の鑑査員と畫を鑑査して行くうちに、かなり自分の美術に對する考と、他の人の美術に對する考の間に異ひのある事を感じた。しかし翻つて考へて見ると、そう改めて感ずるなどゝは、馬鹿な話で、初めつからそれが當り前だと考へて居なければ、ならない筈であつた。

しかし、いざ意見を言ひ合つて見ると、唯意見の異ひ。だけでは濟まされない樣な氣になつた。一般には「この畫はよし」と極め付きの畫でも、何處が一體いゝのか、僕には、てんで分らない樣な畫が多かつた。その上、僕がいゝと思ふ樣な畫を、仲々「いゝ」と言つて吳れない。鑑査が終つた時には、僕には、てんで一切が分らなくなつてしまひ、流石の僕も一時は自分の審美眼を完く疑ふ樣になつてしまつた。

こんな經驗をしたので、正直な所、僕は自分の畫を會場へ持ち込んで、人の前に擴げる事に臆病になつてしまつた。今迄聞いた、人の批難し勝ちな所、一般に愛好しない點があまりに澤山僕の畫には出てゐる。これを列べたら「さぞ」と思つたのであつた。

いよ〳〵陳列が終ると、案の狀であつた。別に面と向つて誰かゞ批評したと云ふ譯ではないが、大概の人の畫の前には、人が立つて見るが、僕の畫の前にだけは、立つて見て居る人が無い。時に一人、ちようど僕の畫の前で見てゐた人があつたが、僕が行つたら、何か惡い事でもした樣に、僕の畫の前から飛び退いてしまつた。僕は、中川君（一政）の畫の見方には信用を置いて居るから、中川君に來てもらつて、一寸自分の畫の批評を求めた。それは、僕の出品畫のうち「春」と云ふ畫の前であつたが、中川君は空の塗り方の汚い。と云ふ事を注意した。けれど、僕はもつと根本的な考へを彼から聞き度かつた。しかしその事には言及しなかつた處を見ると、自分の經驗から考へて見ても、あまりに考へが差異してゐるのではないかと思つた。

それから、僕は、木村と別府貫一郎君の畫に就いて、木村が、かなり同君の畫を買つて居るので、木村の意見が知り度く聞いて見た。その畫に就て木村の答は僕にはよく分からなかつた。それから（日は異ふが）一緒に國畫創作展の方を見に行つて、すでに陳列濟みになつて

居る國展の畫に就ての木村の意見を聞き、僕は、一體木村が畫に就ては、どう云ふ考へを持つてゐるかを知り度く思つた。木村の畫に對する意見は、少し前迄ば、僕にもよく分つたが、其後同君とは、少し御無沙汰勝ちで居るうちに、かなり畫に對する意見が異ふ様に思はれてゐた矢先。現に春陽會の畫の鑑査の場合でも、耳を傾けてゐると、かなり僕とは異ふ事を言つてゐる。また例へば、僕なら決して採り度くない別府君の畫なども、木村は認めてゐる。

國展の、ヴアロキヱの油繪「ベニス」の畫の前で、自分は、彼から出來るだけ、思ふ存分な考へを聞き度く、色々な質問を出して見た。でとう〳〵その畫に關して、木村はどう思ひ、畫に對して、木村は、先づ第一に何を考へるか、と云ふ事だけは、自分に分る事が出來た。木村は愉快さうに、熱心に、僕に話した。マチスの畫は、木村は非常に讃めて居た。國展のマチスのみならず、木村は、元來マチスが好きである事は自分は知つて居たが、彼が、マチスの畫に關して、言つてゐる事に就ては、どうもその意味が徹底せず、結局ヴアロキヱの畫に關しても、同じく伺ひ知る事が出來た彼の畫論と云ふものは、なほ、自分とは大分異ふ様に思へた。

木村も中川も、僕と畫に對する見解が異へば、他の審査員とはなほ見解が異ひそうである。自分は自分の考へは、なほ道程に在る事は勿論だが間違つてゐるとは思つて居ない。で結局、このまゝではいけない、自分は自分の思つてゐる事は、今度、どしどし言つてしまつて、その上でも、なほ御互に友誼が保たれゝばよし、そうでなければ、これから、なほ久しく顔を合せて行くつもりなら、その事は、第一にさし障つて來る。云ふべき事は、言ふ方が――、假りに相手が僕になつて考へて見ても、むしろその方が氣持ちいゝ……。と云ふ樣に考へた。僕がこの文を草して見やうと思つたのは、實にこの理由に外ならない。

で、その點の拘泥が釋放されると、僕は實に自由になれる。第三者の位置に立つて、先づ春陽會と云ふものを、廣く美術批判の上から眺めて見ると、春陽會のアウトラインがまざ〳〵眼に寫つて來るが、その寫つて來た姿は、どんなものであるかと云ふに、實に活力のとぼしい、未來は決して賴めない様な。畫描きが唯、一つの現象の中に生きてるだけで、ちようど保護色をもつて臨機應變に自分の身體を保護して行く、弱い何かの動物の様に、その現象の如何に依つては實に、どうにでもなると云ふ人が多過ぎるのである。春陽會で、畫に對する造詣が深く、修業が本格であるのは、小杉、石井の兩氏で、この兩氏の畫には、何處か一朝にしては出來ない、如何にも畫を學んだ、本職的の畫格がある。

小杉未醒氏の牛の畫でも、あの牛の形、それから「水莊有客」畫卷に描かれた樹木や垣根の描法、或は墨色など、皆、習つた本職的な畫である。あれは單に眞似だけでは出來ない事で、私はあの影に氏の深い造詣の蘊蓄を見る事が出來る。唯、難を言へばそれが生きて居ない。牧歌的な風韻は躍如とはしてゐるが、畫を學んだだけで、その學問の形骸だけにとゞまり、畫が生きて居ない。この事は、大變惜しい事である。それから石井氏の畫にはこれは「本職的な」と言ふにはいさゝか語弊があらふが、氏の畫は決して畫理の動きに支配されて居な

い。人はどうであらふと、自分は斯う描く。と云ふ點で、突つ込んで描いてもあるし、また充分に修業も積んである。その上此の人の畫は生きてゐる。氏の油繪が何處か逡巡して臆病で、力が少し稀薄であるが、挿畫の方は世間の評判に違はず、仲々立派なものが澤山ある。そして畫の構成を一に歸して素描にひつかけ、その素描は一に寫實に根を置いて居る。机龍之助が刀を拭いて居る畫があつた。或は刀を愛撫して居るのか知らないが、いづれにせよ、大變いゝと思ふ。何處がいいと云ふと第一机龍之助を、あゝ云ふ顏の男に仕立てた點を感心し度い。あれで全くの机龍之助だ。それから米友にしろ、辨信にしろ、皆その人らしく實に仕立が上手い。そんな點では、これを歴史に溯つて比較をとつて見ても、人を畫中に動かしてゐる點では仲々引けを取らない位に進んでゐる(技法と繪畫的スケールの上からは、未だ隨分及ばないが)私は思ふに、氏はきつと此等の人物をあんまり苦しまずに生む事が出來ただらふと想像する。龍之助は病的に、米友は矮少畸形であるが滿身、此れ火の様で、自分の前に立塞がつた邪魔物は何んでもはね飛ばす、辨信はいやに叙情詩的である。すべて此等の人を生かすのに恐らく氏は、左程苦勞して居ないに異ひない。氏には、それを生かせるだけの畫才がちやんとある。これ等の活殺自在な業は、しかも藝術に成し得てゐる點は、これ迄の氏のなみ／＼ならぬ勉強に基くもので、とうてい、ちよつくら一寸眞似の出來るものではない。けれど石井氏の畫を批評的見地から見ればなほ云々すべき事は澤山ある。氏には裝飾的叡智が缺けてゐる。この爲めに氏の畫は大きく深くない。畫に於ける一種の自然主義と云ふべきものでテーマも美も深くない。僕に云はせれば、もう一歩の造形的叡智が無ければならぬが、しかしそれがないだけ、氏の畫境は小さく、從つてその爲に氏の畫は純粹になり得て居るのかと思ふ。

要するに私は、春陽會では、本格的造詣は、この二氏が最も多分に持つて居ると思つてゐる。

で、その論を進めるに當つて、本格的と云ふ字の解釋を、こゝで說明して見やう。本格的と云ふ字は、よく使はれる字であるが、その意味をはつきり言ひ傳へた人は僕は未た知らないが、僕の考ふる所に依れば、本格とは、「通俗性」或は、「普遍性」のあるもので、それが法則と成り切つたものを、本格的なものと云ふ。だから本格的なものは、必ず、「通俗性」と、「普遍性」を持つて居なければならぬ。畫で云へばカンヂンスキーの畫は、通俗性や普遍性がない。誰が見ても川だと見へるもの、誰が見ても樹だと觀じ得るものがない。それはあまりに錯覺的で病的で、健全ならば、誰の眼にも等しく映じて來なければならぬ(等しく映ずると云つても、認識が異ふから、等しくは解されない事は勿論であるが)普遍性が描いてない。けれど、あの畫には、何等か、畫としては、どうしても踏まなければならない法則だけは滿足してある。つまり畫が出來るための約束(線、色、其他)は踏んである。言葉を替へて言へば、その法則だけで、持ち耐へて居る様な畫だ。要するに本格とは言へない。何故言へないかと云ふと、普遍性が無いから本格的だとは云へない。また假りに「線」の事を問題にして見ても、遠く顧愷之の昔から、顏の輪郭は細く、着物の線は太く、若くは更に太く荒く(其の點では顧愷之の畫の事は正確には知らない。顧愷之はた

しか岩の山を描いてゐる樣に記臆して居るが、その岩を、どう云ふ描き方に依つて取扱つたかと云ふ事は、今こゝで寫眞が無いので斷言出來ないが）使つてある。そして、それが、だれがやつても、今でも、骨法はそう取扱はざるを得ない。幾世にも變らないからそれを法則と云ふ。でこれに普遍性の加つたもの、吳道玄の樣なもの、これを本格的の繪畫と名付ける事が出來やうと思ふ。

だから、畫は、だれに對しても本當だ（通俗性）、だれにもよく分かる（普遍性）畫でなければ、先づ、本格とは云へない。例へば、林倭衞君の人物畫に描ける手や足を取つて考へて見れば、あの手や足や乃至は顏は、誰が見ても手と思はれ、誰にも足だと分る。しかし、あの樣に五本の指の區別がなく、唯、ノッペラボウでは、法則には成り得ない。故に本格的の畫とは云ひ得ない。又中川君の畫をとつて見ても、あゝ云ふ、建ちかゝつたのだか、壞れかゝつたのだか、分らない家や橋を見ても人は家だと思ひ橋だとは感ずるが、あの描き方は法則とはなり得ない。故に本格的な畫ではない。

で、僕は、こゝで畫の抽象論だが、最高な畫とは、如何なる畫を言ふかと云へば、それは、誰にも本當なものを持つて居て、その上、その事が、法則的と稱ふる事が出來る樣なものを、本格的なものと云ひ、その路に依つて深められて行つたものに最高の美術は生れるのだと云ひ度いのだ。もし本格的なものは最高だと云ふ事に語弊があらば、少くとも本格的なものは健全だと云ふ事には異論はないだらふ。近頃の樣に畫描きが、その仕事を小手先でする樣になつて、殊に若い人はいつも同じ所をぐるぐる廻つてばかり居る樣な人には、先づ何より眼差しを本格的なものに向けてやるのが一番いゝ、健全の路であるが故に一番いゝ。

勿論、畫に於ては本格的なものだけが、いゝと云ふのでは勿論ない。本格的なものでも心がなければ何んにもならぬ。僕は、かなり惡口を言はれる方だが、こつちでは、仲々、廣くいゝ所は認めもし、樂しみもする。しかしこゝに一人の畫描きが、居つて、その畫描きは、最も本格的な行き方をするとすれば、僕はその人を一番賴もしく思ひその人を一番信用するだらふ。と云ふ迄である。

この意味で、一番本格的に舟を掉して行く人は、自分に第一に尊敬し度い。前にも云つた、小杉、及び石井の兩氏には、そう言ふ本格的な追究があり、又それに關しての、或る程度迄の造詣、修業がある事も前に述べた通りだ。

この二氏に比べると、他の人は一般に造詣が淺い。淺いからと云つて小杉氏の畫より生きてゐる畫は、無いではない。無いどころかむしろ多いと云ひ得る。生きる生きないは、本格であるかないかとは、全然關係のない事で本格的でなければ、生きないと云ふのではない。例へば木村の畫にしろ、中川君の畫にしろ、生きては居るが、唯、本格が隨分下だと云ふまでな事である。

中川君の油繪具の使ひ方は、近頃、澤山信者が殖えてゐるが、いゝ描き方ではない。あれは、味だけしか求めて居ない消極的な畫法で、その上、樂な行き方だ。誰でも素人にも眞似が出來る。だからこそ信者も澤山ある理だ。僕は中川君の仕事を決して、美術の專門的な立場からは認めない。唯、誰でも簡單に、或る程度迄に事業が出來る事

を數へて呉れ。美術の標準を强めて呉れた點では、その方の先達であると認めるだけである。色といゝ、まして、素描といゝ、つまり繪畫に於ける、形象的技術の上から云つて、僕としては採り度い、何物もない。唯、有れば、「感じ」と云ふものだが、或る程、その感じはある。何處かに藝術らしいものがある。そして、それは一個の藝術だと云つて間違ひないけれど深いものがあると思つてゐる若い人があるが、深いものはある理ではない。平易で死んでは居らず、感じがある。そしてその感じは、詩的だと云へば、そうかも知れない。けれど決してゲーテの様に豐かにホイツトマンの様に潑溂としてゐる理では無い。俳句の様に少し淡々むさい。俳句でも一茶の様に純眞に向ふか、芭蕉の様に正格に近づくかすれば、中川君の畫は進んだと云ふべきであらふ。この點では、稍その描き方を同じふしてゐる（と云ふのは多少語弊はあるが）國展の梅原氏の畫の方に色、線に對する、もつと本能的な繊細的なタレントがあつて、しかも豐かで、健全であると云ひ得る。そして中川君の畫に見る様な、何等か低迷した感じが無い。僕に言はせれば。梅原氏の「裸婦豹皮」と云ふ畫は、國展のマチスの畫より、一段と進んでゐる畫だと思つて居る。あの女の顏に出てゐる美は、マチスの女よりも優れて居る。其他。有機にすべてが優れて居る。しかし惜しく本格的な造形が無い。だからスケールは大きいとは云へない。

木村君の畫も本格な畫では勿論ない。推すべきものは、中川君の畫が詩であるとすれば、これは戯作であると云へば、當ろかと思ふ。そのユーモアを採れば採るのである。木村の畫には色彩と筆法とに一種の垢抜けがある。白紙と、墨と、色との一種の交響的な味覺、それを味ふべきものであると思ふ。唯、正格的に見られないのは、松と云ひ、岩といゝ、それから屋根瓦、或は人の手、或は足が、いかにも下手い。だから正面から人を超服するとか、能動的に美が滲る人の方へ働きかけて來ると云ふ事が少くない。そして、繪畫と、事件の興味とを多少間違へてゐる樣な傾向がある。風俗畫は、ユーモアが無くてはならないが、それ以上に畫的要素が無ければならぬ。しかも、あればある程いゝので、そうなつてこそ、優れた風俗畫と言ひ得る。だから私の描き度いと思つて居る風俗畫とはその點少し異ふ。

木村の畫には、會つて居る時と同じ樣に「面白サ」がある。けれど、人を面白がらせる爲めに、かへつて、人を慎ませるものを忘れてしまふ傾きがある。木村の畫を見て、謹嚴な感じは受けない。この事は言葉を替へて言へば、人に近づき易く嫌がられない。人に嫌がられる先に、自分自ら、愉快に、はしやいでしまふ。

この事は木村の畫は本格的ではないが、本格的な小杉氏の畫よりは、ユーモアも生きてゐれば、また。畫そのものも生きては居る。だから木村とすれば、何も正道的に、格を高めなくても、今のまゝでもよい事はよいが、僕の希望を述ぶれば、何んと云つても、もう一歩進格が高まつて、畫に謹嚴の感じが加はつて行く事を望み度いと思ふ。

油繪では、油繪具、そのものゝ性質上、中川君の樣に、繪具を溥く溶いて描くやり方を。自分は採らない。勿論、この事は、別に法律がある理ではないから、色々な用ひ方をするのは各人勝手で面白サもそこに、かへつてあるかも知れないが、僕の私見及び、僕の趣味から言

へば、油繪具は、林倭衞、硲伊之助兩君の樣に使ふ方が正道ではないかと考へるのである。

その意味で、林、硲兩君の技法は、僕は大變、興味を持つて見た。林君の畫では、世間の評判はどれがよいのか知らないが「白い橋と綠樹」及び「夏」が一番よかつた。殊に「夏」は、色と云ひ、技法と云ひ、經營傳彩、いづれの點から云つても仲々逸品であると思つた。其他「エスタック風景」「プロヴァンヌ小村風景」「早春の丘」などの遠景がいづれも仲々美しいと思つた。新歸朝者としては、珍らしく、練つた畫品を備えてゐる人だと思つた。

けれど、氏の仕事を見ても決して、オリヂナリテーのある人だとは考へられない。そつくりすべて、彼の地の技法であつて、もし林君を占へば、さて前途は受合へない。僕が假りに外國へ行つて來れば、林君の如く學問しては來ない。僕は新らしいものを吸收する點でも、その慾深な點、人後に落ちないが、もつと古代にも溯つて、今だに生きて居る所の色々な具を、取入れて來る。一つの型に篏められて、渡來物の如き姿になつては、歸つて來ない。自分は、今のまゝの自分であり乍ら、もつと、懷を肥やして來る自分である。西洋と東洋、昔と今に、一貫して流れてゐる、或る藝術的生命を採つて歸つて來る。そうでないと、こつちへ來て總目箱を開いた場合に彼地の學問だけでは遂に手が出せなくなつてしまふ。今後、林君が、どう云ふ風に手足を出すか、そこは興味があると思ふ。

林君は鬼頭君の畫を、賞めてゐると聞いたが、僕は鬼頭君の畫は、賛成出來ない。未だ「描き方」と云ふものに、ひつかゝつてゐる　硲君の畫は仲々本場的の處か伺へはするが、其後、僕の望んでゐる樣な成長はしてゐなかつた。

最後に椿君の仕事を、見て見やう。椿の仕事は、去年あたりから、かなり角がとれて（その角、と云ふ奴か、人に嫌はれるものらしい。僕の畫などには、今だにその角があつてか、人に嫌はれてゐる。）來た。色も一貫して、實に椿らしい。色は、昔から椿は獨特なものを持つて居たが、今では完く手に入つて來た。椿は、自分では「冬瓜大根圖」に一番自信がある樣に言つて居たが、僕は肖像畫の方を採る。しかし、試みに冬瓜の靜物を見てみやうか。自分は、木村、林、中川、石井、などゝ云ふ樣な人にそれぞれ長所を認める樣に、椿の畫にも長所を認める。すべての人が行き方が異ふ樣に、椿も、椿の行き方があるのだから、見る眼も異へて行かねばならぬ。大根は、その物質感がよく描けてゐる。變に大根の堅い感じ、また大根の皮膚の、物質感。冬瓜でも同じく冬瓜の外から見える外形的な、美、それから冬瓜の丸サ、すべて實によく描けてゐる。僕は、この技法を尊いものだと思つてゐる。もしレオナルドがこの畫を見たら、その自然物の飜刻を見て微笑んだことと思ふ。レオナルド以後、畫もその鑑賞眼がだん〳〵進んで、「自然の浮いてゐる通り、畫に浮いて出す」と云ふ事だけが、畫の目的ではない事が分つたが、さりとてその行き方は、すでに死んだのではない。鑑賞は、自由になり、廣汎になりより演繹的にはなつたが、反對にまた歸納的に考へて、この事は今の世にでも、肯定出來る眞理なのだ。だからこの路も正しい。

椿の畫に就て、缺けてゐると思ふものを云へば、畫因が、「寫實せん

とする意志」だけであると云ふ事が、缺陷だと思ふ。故にあの技巧は、あれで勿論いゝとして、あそこへ、「藝術的實因」。なほ平易に說明すれば、藝術的な、情緒を、モチーフにしてそれで、あの素描力を動かせば、いゝと云ふ様な氣がする。堅からふが、暗からふが、又時には誤られて居やうが、そんな事だけを氣にするのは、氣にする方が鑑賞力が不足なので、吾々は美術家である以上は、どう云ふ事が美しいか位は、知つてゐるから、そんな末梢な事は、いつの間にか、必ず消えて無くなつてしまふものだ。次の風景では、「鎌倉名越景」が、僕は好きであつた。

○

春陽會は、多少寄合世帯の様な感があつて以前の春陽會の様に特色のあるものでなくなつたのは、對外上、多少興醒めがするが、しかし、これもいゝのだらふ。自然に行けば、またそこにいゝ所も出て來やう。

さて、今年の應募して來る畫を見て、僕は、泌々感じたのだが、實に元氣の無い、同んなじ畫しか集つて來ない。いやに審査員の呼吸をのみ込んで、消極的な、云はゞ鼻毛を窺ふ様な畫が多かつた。思へば、昔僕などは、審査員などは如何様であれ、思ふ存分な畫を描いて何處へでも持つて行つたが、成程その結果は惡かつたが、今の人の様に個性のとぼしいものではなかつた。見る審査員があつたら必ず救ひ上げて與れただらうと思ひこそすれ、呼吸を窺ふなどは毛頭無かつた。

それに就けても、審査員そのものゝ謙讓と云ふ事が必要になつて來るが審査員は、出來るだけ廣い鑑賞眼を持つてゐて、應募者に一本調子な感を起こさせない様にすべきだと思ふ。

又、畫を出す人は、人の呼吸を窺はないで、どん〳〵自分の思ふ通りの事をやり、もし迷つたり、絲が絡み出したら、自分の畫を正道的に向け直して行つて、そこを卒業しなければいけないと思ふ。今日は三越。明日は帝展では、ついに自分の畫室へは歸つて來られないだらう。

○

最後に一言、つけ加へ度いが本格的と云ふ事は、たゞちに、それが「價値」だと僕が言つてゐると思はれる事は心外だ。本格的でも生命が無ければ、價値にはならない。又藝術のフイールドは廣く、生きてゐるものは、何んにでも價値の無い事はない。又、色々ある方が、色々の心を持つた人の爲めにはいいので、そうあつてこそ神の攝理だと云ふ氣もする。又、畫家の才能に應じて色々の救ひの路がなければ、畫家それ自身が第一困つてしまふ。

であるから畫家は思ひ思ひ、立場立場は絶對に解放されてあるべきだ。けれど、こゝにどうしても無くてはならぬ事、(いつの世になつても)は、僕は所謂本格的繪畫の路で、例へそれは、この路を歩む人が全然無くなつてしまつても、一つの抽象論としても、この世に存在して居なければならない。それが無くなつてしまふと、畫の批判が出來なくなる。又畫が迷路に踏み込んだ場合に、それを救ふものが無くなつてしまふ。だからすべての畫道は、こゝを中心として四方へ散らかつて行くが、又再びこゝを中心に四方から集つて來なければならぬ。(終)

モダーン、チシーズ

佐多芳久

文化住宅が流行り、文化村といふものが出來る。モダーン・ガールやモダーン・ボーイといふものが跋扈する。これらは現代文化の副產物であり、現代人心理のシンボルである。

現代人の住宅、服裝、姿態に於て見るが如く、現代人の心理は全く混亂の狀態にあり、渦卷の中にある。何等の秩序もなく、一致もなく、整頓もない。街を行く人、電車に乘る人、公園を彷徨ふ人、それらの人々の顏には潑剌たる活氣もなく、悠長なる餘裕もない。彼等は睡眠不足の重たい瞼の影に光りのない眼付をして熱病者の如き不安の表情を示し、疲れ果てたる焦躁の足どりで歩いてゐる。淺薄なる感激、酒亂者の如き興奮、恐怖に震へる豫感、卑怯に戰くあきらめ、失望、落膽、臆病、不平、反感、自暴自棄、悲觀、厭世、等々。それらは現代人の腦裡を流るゝ心的傾向であり、モダーン・ガール、モダーン・ボーイの素質である。耳かくし、斷髮、ウェーブオールバックの髮かたちは彼等の心理を物語るものである。

彼等は落ちつきたる理性を失ひ、あはたゞしき感情にのみ生きてゐる。下らない話に涙を流すほどに感激して笑ひ、つまらない詩に潸然として泣き、平凡な音樂に狂悅して興奮し、低級な文學に凡てを忘れて耽溺し、卑猥なる藝術を喜んで讃嘆する。俗惡なるダンスの稽古に夢中となり、カッフェの女ボーイの媚に溺れて萬引をする。

彼等の行爲は殆ど病的である。現代人の腦裡に流るゝ一脈の氣分はマックス、ノルドーの所謂フアン、ヅ、シエークル（世紀末の氣分である。即ち醫者から診ては神經病（ノイローゼ）の症狀である。現代人には自惚れと瘡氣（かさけ）はなくとも神經病のない人は恐らくあるまいと思はれる。神經病は現代の時代病である。モダーン、チシーズである。

神經病の源泉地は米國である。神經衰弱（ニユラスセニア、ナーヴアスネス）の病名は米醫ベアードの命名である。日本の文化が米化であるが如く、病氣までがアメリカニズムである。

今時代病（モダーン、チシーズ）の病型について二三述べて見る。

（一）神經衰弱（男に多し）

原因――失職、就職難、結婚難、生活難、身心過勞、睡眠不足、自瀆、亂淫、性病、肺尖加答兒等々。

症狀――焦躁、感激、興奮、自暴自棄、不平、亂酒、亂行、臆病、悲觀、厭世、不眠、頭痛、頭重、陰萎、自殺等々。

豫防法――原因に列擧したる事件に遭遇せざる樣平素謹直勉勵、品行を愼しみ、夜ふかしをせず、重役、上官の御機嫌を害はざること。

（二）ヒステリー（女に多し）

原因――失戀、三角關係、離婚、夫の病死、愛兒の死、私生兒姙娠、婦人病、良人の外泊、虛榮等々。

症狀――家出、狂言自殺、虛言、嫉妬、猜疑、色情興奮、眩暈、頭痛、失神痙攣等々。

豫防法――原因に列擧したる事件に遭遇せざる樣注意肝要、男にだまされぬこと、戀愛

た玩弄せざること。

（三）麻痺狂一名脳梅毒（壯年に多し）

原因――荒淫、梅毒潜伏十年内外で起る多くは精神過勞、感情激變によつて誘發せらる。

症狀――初期には神經衰弱の如き頑固なる不眠、前頭部の頭痛、興奮、多辯、多動、色情亢進、嫉妬妄想、誇大妄想、亂買、亂興、微小（貧乏）妄想、狂暴、殺人、暴食、痴呆等々。

豫防法――品行方正、女郎、藝者を買はぬこと、梅毒に感染したら初期に徹底的に根治すること。

（四）脳溢血（老人に多し）

原因――遺傳、酒毒、梅毒、房事過度、精神感動、血壓亢進、過食、便秘等々、

症狀――前兆として眩暈、耳鳴、肩凝、欠伸の連發、片手足の痺れ、偏頭痛等がある。急に卒倒して人事不省、半身不隨、發語困難等々。

豫防法――禁酒、驅黴法、荒淫を慎み、少食、菜食、快通快利、安眠等。

×　×　×

神經病の泰斗、獨逸のクラフト、エビングが「シヴイリザチオン（文化）はシフイリザチオン（梅毒化）なり」と喝破した言葉は文化の表面に憧憬する現代人を裡面より觀察して彼等に與へたる痛棒である。

日本でも古くから「自惚れと痴氣のないものは少い」といはれてゐたが日本の文化の進歩に比例して梅毒は更に著しく蔓延した。日本人の秦氏によつて、六〇六號が出來て鼻の落ちる人が少くなつたのを幸ひに益々梅毒は大都會より津に浦々に浸潤し、彼の流産、死産、一、二歳死亡、脳膜炎、癲癇、低脳、不良少年等はすべて梅毒親爺の記念品である。

梅毒に感染する樣な機會を作る人には自らは神經衰弱に陥り、妻はヒステリー、婦人病不産に陥らしめ、活動盛りの油の乘つた年頃には脳梅毒に陥つて狂人となり家庭亂脉、一家不安、遂には妻子路頭に迷ひ、己れは松澤行きが落ちである。

然らずんば初老に至つてポツカリ卒倒して脳溢血を起し家人の知らぬ間にお陀佛となるか、命はあつても半身不隨の身を杖に縋つて、結へ草履でヨチ／＼の醜態を曝らさねばならぬ。

日本開闢以來の大景氣襲來に狂喜して以來十年、その時仕入れられたる梅毒は現今、神經衰弱、ヒステリー、麻痺性痴呆、脳溢血の全盛期に入らんとしてゐる。

市内至る處煙草屋の看板と競爭して花柳病、性病、社交病などと銘打つた看板の殖え行くを見よ。一本十五圓の注射の痛みを知らぬ氣に、現代人の誰彼は洒々たる顔をして、脳裡には不安と焦躁の氣分で、毎日落ち付きのない生活を續けて居る。憐むべきは其等の人々である。悲しむべきは文化の裏面である。

（をわり）

李大釗氏銃殺の報を手にして

荒川實藏

一

四月二十九日の東京日々新聞は以下の如き報道を傳へてゐる。

『二十八日午後一時安國軍共產黨員特別審判長何豐林氏は三名の審判員と共に檢察廳に至り李大釗氏以下共產黨員二十名を四臺の自動車に乘せ多數の軍警護衛の下に死刑執行所に護送した。かれ等共產黨員はその日あらかじめ覺悟してをつたことながらいよ〳〵死刑執行と分つてその顏色土の如くなり、あるものは護衛軍警を罵倒し、容易に自動車に乘らうとせず婦人黨員の如きは泣き叫んで一語も發し得ず刑場に泣き伏してゐた。しかし李大釗氏はさすがに落付を見せてゐたが、今なほかれの死刑を知らず拘留されてをる夫人と二人の娘のことを思ひ浮べてか悲しみにうなだれてゐた。』云々。

私はこの報道を知つたとき、實に强烈なるショックを覺えると同時に一種の恥悔さへ感じ、一時はたゞ呆然としてゐた。やがて、三年前の夏、モスコー郊外の森林の中で、草叢に腰を下ろして、同氏と二人で時の移るのを忘れて語らつたときのことが追懷された。私はかの有名なモスコー大劇場（ボルショイテアトル）の壇上で、被抑壓民族解放のために絶叫する雄々しくも落ち着ける彼の姿よりも、傍に咲き亂れてゐる草花を手でいぢりながら、親しげに談笑せるやさしい彼の態度がより强く私の腦裡に刻まれてゐる。彼が銃殺（東京朝日新聞には絞殺されたと書いてゐる）された報道をかくも强く感じ、悲しむ所以は、モスコー郊外に於ける會談が强く印象されてゐたためであらう。私は今當時を追憶して、この一文をものせんとするものであるが、私の彼に對する追憶は、やがて海外で親しくなつた他の幾多の人々に對する追憶をさへ起さしめた。私をして先づ簡單に彼等について述ぶるところあらしめよ。

二

私は三ヶ年間の海外放浪中に、極めて數多くの革命家と親しむことが出來た。しかも、それは數に於いて多かつただけではなく、彼等に屬する國籍は殆んど全世界を網羅してゐたと云つても過言ではない。アメリカ滯在中に世界各國の人種と接近することが出來た。レストランドのボーイをやつてゐたときにも、客の少なくして暇な折は勞働服を着て居り、話せさうな顏付をしてゐると話し掛けたものだ。そして僅か二ヶ月餘りの間だけでもかなり多くの同志に親しむことが出來た。黑人と親しみ、人種問題やアメリカ帝國主義に關して意見を戰はしたり、與太を飛ばして笑ひ興じたこともある。

ドイツにプロレタリヤ革命の機の熟してゐた一九二三年の秋に伯林滯在中、目まぐるしく活動せる同志が、私に五月蠅いとの感じを少しも與はさずに、自信と希望に滿ちた態度で、ドイツの現狀を述べ、色々と世話をして呉れたことなども忘れられない印象の一つである。

丁度その當時ただ一人鬱蒼と樹木の繁れるチイヤガルテンを散步し、疲れた身體をベンチに下ろして、かの秀れた革命運動の指導者

カール・リープクネヒトの絞殺されたのは、この公園の木蔭であつたのだと思ひ出した折も折、夫婦づれが來て、默想せる私に大杉榮氏夫妻の絞殺された報道を傳へて立去つたこともあつた。物に感じ易い旅人の心にかうした報道は特に強く響くものである。

だが、以上の如き色々の經驗は何切實に私の心に迫らなかつた。と云ふのは、私と直接語つた彼等は階級闘爭戰場で戰つた人ではなかつたからである。敵の彈丸の下に戰ふた經驗を持つた人ではなかつた。しかるに赤都モスコーに來て、幾度も生死の境を往來した實驗を持つ革命家に遭遇した。日毎に激烈化し、擴大されつゝある支那民族解放戰戰場で勇敢に戰ひ遂に軍閥の魔手に斃れた李大釗氏を追懐する以前に、私は今暫らくモスコーに於けるその他の革命家についての印象を語るであらう。

三

李大釗氏銃殺の報を知つた本日（四月二十九日）は私にとつて忘れられない日である。丁度三年前の今日モスコーの郊外にある病院で手術を受けたのである。この病院を紹介されたが、言葉の下手なためと、土地の事情に不馴のために、あちらこちらと探し廻つても探せなかつたのを、一ペルシャ人が一日を棒に振つて態々その病院まで連れてきてくれたのだ。その日途すがら彼は私に彼が經驗した革命戰の實驗談を物語つてくれた。それで始めて彼がペルシャに居たとき、市街戰に參加し、反革命軍の放つた機關銃の彈丸が彼に命中し、重傷を受けたことが分つた。彼がモスコーで十幾回あちこちの病院で全治せぬ傷跡の手術を受けたからである。彼の顔相を物凄ごからしめ、醜くからしめる大きい傷跡は、近東に存在するペルシャに於ける階級闘爭を物語つてゐるやうである。傷のために歪める口で『君の手術なんかは簡易なものだ。心配せずに手術を受け給へ』と勵ましたり、入院中の注意をこま〴〵と敎へて呉れた。私は彼の親切を思ひ出すと涙ぐましくなつて了ふ。又エヂプトの總罷業を指導し、英國故にエヂプト内のブルジョアジーの心膽を寒からしめた若き革命家の激越に滿ちた態度で語る當時の實驗談も聞いたこともあつた。その他これに類したことや、個人的テラーの實行談なども數限りなく聞いたが、これで止めやう。

最后に、私はモスコーで支那人中に多くの同志を持つたことについて一寸述べて置かう。それは外でもない。支那人は大抵佛蘭西語か英語を話したので、お互に思ふことを詳細に述べることが出來、それがために親密さも増して來たのであらう。農民問題を專攻し、農民代表（ノーミンダイヒョー）と綽名され、歸國後二週間を經ずして青島の罷業を應援し、××軍に捕へられ、支那官憲に引き渡されて銃殺された二十幾歳の一青年もその一人である。私は彼と話すとき、力めて支那の農民運動について語るを常とした。彼は得意となつて、フランスに三年餘りも居つたとは云ふものゝ、餘り上手でないフランス語で、しかし、極めて無邪氣な話し振りで、熱を上げるのであつた。

今日の新聞の報ずる所の銃殺された李大釗以下廿名中には、恐らく私の知つてゐる友人が二三に止まらないだらう。私が李氏を追懐するに際して、以上述べたやうな追想が交互に湧いてきたのは、止むを得ないことである。

四

前述した通り、一九二四年の四月の終りに手術を受け、新緑滴るばかりの五月半ばに退院し、手術後の疲勞を恢復すべくモスコー郊外の別莊にその年の夏を送つた時のことであつた。ある日の夕方、松の木の下の粗末な卓の上で我々が食事をしてゐると、ロシア語

に堪能な一支那人が、

『報告！　今晩夕食後、集會（ソブラニイ）がある。支那共産黨代表李大釗氏の最近に於ける支那勞働運動の實情についての講演がある』

と聲高らかに報告をした。食後十數分休憩後集會が開かれ、司會者が李氏を紹介した後に、彼は講義風に講演を開始した。私が李氏の風丰に接したのは、これが始めてであつた。講演は支那語でなされ、次いでロシア語に通譯された。支那語に通ぜず、ロシア語に馴れない私には、彼の講演の要旨さへハツキリと頭に入らなかつた。私は退屈まぎれに彼の風丰を觀察してゐた。彼の脊の丈は低くあつたが小太りしてゐたためどことなくどつしりとして重々しい所があつた。覇氣滿々たる氣魄は見出せなかつたが、底力のある人だと云ふ感じが第一印象（ファーストインプレシヨン）として與へられた。その講演振りは、直感的に彼が曾て教壇の人であつたと想像せしめた。私の脇に居た支那人に『同志李氏は支那で何をしてゐた人か』と聞くと、その支那人は『北京大學の教授をしてゐたのだ』と答へてくれた。

講演終つて、型の如くに、傍聽者側から質問がなされ、同氏が一々懇切にそれ等の質問に答へて、集會は終り、各自自分の寢室に入つた。

翌日起きて、朝飯を食べてゐると、李氏は私の傍に腰を下ろして、粗末な朝食を共にした。彼はパンをかぢりながら、英語で話しかけた。

『何時頃モスコーへ來たか？』

『六ケ月前に』

『では、未だよくロシア語を話せないでせう』

『ロシア語は困難（むづか）しいので閉口してゐます』

『私も日本に居たが、日本語は大分忘れて了つたよ』

『それでは、日本語で話をしませう』

と私は卽座に日本語に方向轉換をした。

『何處で英語を習ひましたのか』

『暫らく米國に居ました』

『では、飯が終ると、米國の話でも聞かう』

『何も知りませんが、私は手術後で一切の仕事を免除されてゐるので、退屈ですから、あなたに暇があれば、私も色々と聞きたいことがありますから』

『田舍は靜かで、空氣もよいから、二三日遊ぶつもりだから、ゆつくり話しませう』

初めて口を聞く私に少しも勿體振らず、馴々しく話されたので、私も少しも臆せずに、話を續けた。食事を終へて、二人は森林を縫ふ小道を歩いた。

五

暫らく、無言で散歩をしてゐると、再び氏から話し始められた。

『アメリカは何處に居りました』

『主に紐育に居りました』

『何をしてゐましたか』

『皿洗をしたり、家庭で働いてゐました』

『片山さんも永らくアメリカに居られましたのですね』

『さうです。私がアメリカに行つたときは、もうアメリカに居られなかつたが、アメリカ出發の際殘して置かれた料理服を貰つて働いてゐました。』

『さうですか。アメリカで生活するのは、容易ださうですね』

以上のやうな通俗的な會話から、話柄はだん／＼と米國の勞働運動に移つて行つた。氏から提出された色々の質問に對して、私は知つてゐる限りのことを答へた。氏は、

『では、アメリカの勞働運動の前途尙遼遠ですね。』

『アメリカが一番最後まで資本主義的國家として殘るだらうとは、衆目の一致する所です。』

『そうでせうね。でも、君は疲れないでせうか』

『手術後のことゝて、少々疲れました』

『では、あの木の蔭に行つて、座りませう』

太陽は既に高く昇り、露は全く乾いて了つてゐた。雜草と草花の生ひ繁れる荒地を横切り、適當の場所を探し求めて、腰を下ろした。

六

今度は私から口を切つた。

『あなたは何日頃支那から來られたのですか』

『つい最近です。非常に危險なところを巧みに逃亡してやつてきました』

『さうですか。北京大學に教鞭を執られて居られたさうですが、支那でも壓迫の魔手が大學にまで延びてきましたか』

『どこも同じですよ。でも、私は幸運にも、間一髮と云ふところを奇蹟的に逃れたのですよ』

『その當時の話をして呉れませんか。差支へがなければ』

『話しませう。實は何時かはやつてくると覺悟をしてゐました。が、ある日のこと私の家へ私に電話がかゝり、受話器を手にすると、友人から「一刻も早く逃げよ、今君を捕縛せよとの命令が發せられた。」と聞かされたので、纏うてゐた支那服を着變へる暇なく、そのまゝ飛び逃げました。私が家を出て、數分にして捕手が私の家を襲つてきたが、私を見出すことが出來ませんでした』

『全く奇蹟でしたね。こうした奇蹟は有難いことですね。でも、あなたの友人がどうしてあなたの捕縛命令の下つたことを知つたのでせう』

『その友人が、警察内で働いてゐる彼の友人から聞いたのでした。』

『それから、支那服のまゝ蒙古を横斷してロシアに逃入りました』

私は彼が銃殺された報を手にしたとき、再び以前の如き奇蹟が偶發して、なぜ彼を救はなかつたのかと果敢ない空想に捕はれた。奇蹟が頻發するものではないとは知るものゝ、一度あつたことが、二度あれかしと願はざるを得なかつた。

彼は更に言葉を續けた。

『あなたは何日頃日本を出ましたか』

『一昨年の夏でした』

『では、地震の一年前でしたね』

『そうです』

『地震は米國で知つたのでせう』

かくして、二人は關東の大震災について暫らく語り續けてゐたが、彼はふと思ひ出したやうに次のやうに云つた。

『私が日本の大震災の報を廣東(或は上海であつたか今私の記憶に殘つてゐない)で知つたのでした。丁度その時孫逸仙と陳獨秀(確かに陳獨秀であつたか否かも今記憶に殘つてゐない)と三人で會談をしてゐた時でした。日本の大震災の報を知つたとき、孫逸仙は、、、、、、、、くないと云つてゐた。だが、孫文の豫想は外れました云々』

と當時を追懷しつゝ、私に聞かしてくれた。孫文氏は國民革命今日の成功を見ずして、病に斃れ、李大釗氏又彼の理想せるプロレタリア革命の未だ成らざる日に、恰もドイツに於けるカール・リープクネヒトの如く、銃殺された。赤化防止團長米村氏のピストルに斃れた高尾氏の死も、震災直後に甘粕氏のために絞殺された大杉氏の死も悲慘なる最后であり、、、、、、、、上に消えない記錄として殘るだらうが、それは個人的テラーに過ぎない。

七

今や支那四億の民衆の頭上に偉大なる使命が懸つてゐる。被壓迫民族解放を象徴する青天白日旗は支那の大半を覆ふてゐる。階級鬪

爭の深刻化し、擴大化しつゝあるこの重大な時機に於いて偉大なる指導者李大釗は敵の毒手に斃れた！

私は氏と會談中に得難い秀れた指導者だと云ふ感銘を得、日本にも氏の如き大きいタイプの指導者が欲しいものだと考へさせられた。其後も異口同音に氏を推稱する若き青年の氏に對する贊辭を聞き、愈々その感を深くした。氏は若き同志から慈父の如く親しまれ、尊敬されてゐた。私は氏がロシアより歸國後軍隊内で活動して居らるゝとのことを聞いてゐた。曾て大學で教鞭を執つた氏の姿と、兵卒と野營して辛苦を共にしてゐる氏の姿を對比するとき、短命に終つた氏の一生が躍如として顯はれてくる。

氏を尊敬する多くの支那青年革命家は、ゆつくりと氏を弔ひ、氏を追懷する餘裕さへないだらう。私は、彼等が『來れ、牢獄、、、、、、、、、、、ぞ』と歌ひつゝ、氏の死屍を踏み越えて進んで行く未來ある幾多の青年の姿が浮んでくる。

尙序に李大釗氏の略歴を併記しやう。

氏は號を守常と云ひ、直隷省の人であつて、大地主の家に生れ、天津にあるアメリカ人經營の南開學校を卒業し、後、日本に來つて、早稻田大學に遊んだ。支那に歸るや、北京大學教授に任ぜられ、當時同じく同大學に教鞭をとつてゐた陳獨秀及び胡適と共に一九一九年に起された五四運動を指導し、三氏は支那社會運動上の輝ける明星として尊敬されてゐた。同年陳獨秀の主宰せる雜誌『新青年』同紙上に李氏は『ボルシェヴィズムの勝利』と云ふ論文を書いた。この論文は支那に於いて初めて露西亞革命及びマルキシズムを紹介したものであつて、支那思想界全般に一大波紋を投ぜしめた劃期的論文である。二一年に彼は陳獨秀と共に僅か八人で中國共產黨を組織し、又共產黨員にして始めて國民黨に入黨したのも彼であつた。然も、その時彼の國民黨入黨を紹介せるものは張繼であつたが、今では張繼は國民黨から除名され、最右翼に轉落してゐる。

李氏は二四年の一月、廣東に開催された國民黨第一回大會に出席し、中央委員の一人に選ばれ、大會後北京に歸るや、北方方面の最高指導者として活動したため、北京政府に睨まれ、同年春、遂に同氏逮捕令が下つた。その時前述した通りの奇蹟によつて、幸運にもロシアに逃れた。翌二五年の初夏に露西亞より支那に歸るや、當時北京に駐屯せる國民軍内で活動し、國民軍が北京を撤退した後の反動時代にも尙北京に留まつて秘密運動を行つてゐた。そして、この度の難に逢つて、三十九歲の働き盛りで斃れた。(一九二七・四・二九)

胡適漫談

記者　あなたの歐米旅行の土産話でも聞きませうか……。

胡適　別に……………。

（これから約十分間の話を略する）

胡適　東洋では日本が一番マルクス主義が浸潤してゐるのではありますまいか。案外日本には……のではないでせうか？

記者　サア……一面マルクス主義は強く日本人の間に影響してゐますが、又その反面に、長い傳統によつて反動思想が強い勢力を張つてゐます。雜誌でもさういふ傾向のものが部數が澤山出ていますネ。新しい運動は可成り喧傳されてゐるに拘らず人物がない爲めにまだ實勢力が對立的にまで行つてゐない。無産政黨にでも統一して一大勢力となるべきであるのに幾つにも分裂して、可成り勢力が分散して居るのは惜しいです。

胡適　一體日本は、明治維新以來今日まで、哲學、政治、經濟、社會、思想、はどういふ系統をひいて來たのでせう？少くとも歐洲戰爭前までは獨逸系だつたと思ひますが……私は今日の東洋は、獨逸系の思想よりも、アングロサクソン即ち英米の自由思想をとつた方がより健全であり、適切ではないでせうか？如何ですか……五十年以來日本では、文學、美術、自然科學が非常に進歩し發達して大いに貢獻する處があつた。獨り哲學とか、思想方面にのみ大した貢獻するものがなかつたやうです。それは、日本の哲學者が獨逸の思想系統を脱することが出來ず、今でも尚カントや、ヘーゲルを追つかけてそれを固守してゐる故ではありますまいか如何でせうか？

記者　日本では五十年前獨逸を規範とする教育制度をとつたために小學から中學、大學と常に學生の思想を壓縮してゐました。爲めに英米の如く自由の立場で研究が出來ず從つて日本の思想界は伸びなかつたのです。併し最近在來の獨逸系思想哲學を云々するものがお說の如く減退したのは事實です。だが、それに代つたマルクス主義もまた獨逸思想で……しかし前者は小學から中學、高等學校、大學と國家の手によつて生長したが、後者は生活革命の先驅として官場以外の學者によつて、そして勞働者、社會主義者等によつて……それとは別だが、昨年八月あなたが「改造」で論ぜられた東洋文明が精神的文明でない……といふあの論文は、私も大體に於て認めます……要するに先きのあなたのお話の如く日本では獨逸のヘーゲル、カント。そしてマルクス——と走馬燈のやうにぐるぐる巡つている。これぞと日本獨自の大思想のないのは非常に遺憾だ。……私は哲學のことはよく知りませんから專門の哲學者である胡さんには敵ひませんハハ……

胡適　私も今話したことは、一寸さういふ氣がしたからお話したので、日本の思想界が將來果してどうなるかといふことは、面白い問題でせう。

記者　現下日本の大衆の思想を支配するマルクス主義が、どれほど日本に於ける階級戰の役割を演ずるかはこれからの問題です。それはそれとして南支國民黨の思想的立場

はどうですか？
胡適　支那の國民黨の思想のことですが……一部分には共産黨もありますが、大部分は寧ろマルクス主義と反對です。孫中山先生の三民主義の第一章に書いてある思想は、或る意味ではマルクスの思想の攻撃であると私は思つてゐます。

記者　國民黨と共産黨との提携のことですが蔣介石等は共産派の支持なくして革命を成功せしめることが出來ませうか。

胡適　蔣介石等の方からいへば、寧ろ共産黨と離れた方が革命を遂ぐるに便利でせう。

記者　蔣介石は將來反動的に張、孫等の軍閥と提携することはないでせうか。

胡適　いや、それは飽くまで闘ふでせう。

記者　然らば共産派は絶對に軍閥とは結ばないでせうか。

胡適　湖南あたりでは軍閥と共産派と相通じていたずらをやりますよ……

記者　ボローヂンと蔣石介はもうすつかり離反したのですか？

胡適　よくは知りませんが、もう分離してをるらしいです。

記者　ボローヂンは共産派の主流的、正統的代表と認めるべき人でせうか？

胡適　第三インターナショナルを代表してゐます。

記者　貴方の米國の視察は如何なる方面が主でしたか。

胡適　アメリカは別に目的を持つてゐませんでした。十年振りにあちらの舊師や、あの地に滯在せる中國人達を訪問するつもりでしたが、行つて見ると、彼方此方から講演に引つぱり廻されてまとまつた研究も出來ませんでした。出す方ばかりで仕入れは何もなかつた譯です。

記者　ヂューウイと御會ひでしたか。

胡適　ヂューウイは私の舊師で、お逢ひしました。

記者　ヂューウイ氏は『改造』にも四回ばかり書いて貰つたことがあります。御元氣でしたか？

胡適　御氣の毒にも奥さんが身體が惡いのです。

記者　英國でラッセル氏にお逢ひでしたか。

胡適　逢ひました。惜しいことには、ラッセル氏は今生活に非常に困つてゐます。パンを得る爲めに原稿稼ぎに追はれて研究の餘暇がなく、從つて思想上に大きな變化はないやうです。まことにお氣の毒だと思ひます。何にしろ貧乏な貴族ですからね。ラッセルは歐洲戰爭當時までは、随分の株を持つてゐましたので、だいぶ儲ければ儲かりおつたのですが、戰爭を利用して金をもうけることは罪惡だとして賣り飛ばしてしまつたのです。

記者　ラッセルの奥さんはどうですか？東洋に來られたとき若くて美しかつたですが？

胡適　若くはありましたが美人ではありませんでした。

記者　ラッセル氏は我社が日本に招待したのですが、その時は、日本の思想界は幼稚で日本の官憲がだいぶ壓迫しました。刑事が氏の身邊につきまとつてゐる有様でした。私達は随分堅い覺悟で全責任を負つて彼れを保護しました。横濱に彼れが來た時などは、新聞記者が包圍して寫眞をうつす爲めに、マグネシウムが姙娠中の夫人を盛んに脅かすものだから、ステッキを振り廻して新聞記者を追ひ廻すなどの大活劇もありましたが！

胡適　支那では非常に寬大に待遇しました。英國では今非常に冷遇されてゐます。奥さんなどは親戚との交際も出來ないほど嫌は

大篇名作

長篇 眞珠夫人
父歸る
忠直卿行狀記
恩讐の彼方に
藤十郎の戀
屋上の狂人
菊池寛

羅生門
鼻
芥川龍之介

三浦製絲場主
地藏教由來
久米正雄

長篇 嘘の果
有島生馬

風流佛
一口劍
幸田露伴

新日本の青年
德富蘇峰

宇宙
三宅雪嶺

役の行者
ハムレット
坪内逍遙

舞姫
うたかたの記
埋木
雁
森鷗外

蒲團
田山花袋

吾輩は猫である（抄）
坊っちやん
草枕
夏目漱石

河內山と直侍
河竹默阿彌

長篇 浮雲
長篇 平凡
二葉亭四迷

にごりえ
たけくらべ
樋口一葉

（其他數百篇）

▼締切五月三十一日限

▼御申込は全國各書店へ！

第二回豫約申込規定

（刊行期日）昭和二年六月第一卷を刊行し、第六卷迄は毎月一冊づゝ刊行、第七卷より第三十七卷迄は毎月二冊づゝ刊行す。
（會費）毎月拂一冊に付一圓、全拂三十七卷三十四圓、特製一冊に付四十錢増。（送料）並製一冊に付十錢、特製十四錢。書留各十錢増です。

發行所 改造社

開設

講師（約五十名家）。既に承諾を得たるは次の如くである。

片上伸　菊池寛　武者小路實篤
佐藤春夫　里見弴　江見水蔭
北原白秋　笹川臨風　佐々木信綱
齋藤茂吉　久米正雄　山本有三
吉田絃二郎　中村吉藏　高濱虛子
久保田万太郎　新村出　成瀬清
林久男　千葉龜雄　茅野蕭々
藤井健次郎　吉澤義則　（其他十數名）
（順序不同）

（科外）

福田德三　堀江歸一　末弘嚴太郎
杉森孝次郎　高橋龜吉　恒藤恭
（順序不同）

れてゐます。私は英國の或る田舍でラッセルの親戚に當る貴族の家に泊つた事がありますが、その家で「ミセス・ラッセルはどんな人ですか？」と聞かれました。親戚ですからどんな人か位知つてゐる筈ですのに……そんなことを聞くほどに、冷遇されてゐるのです。

記者　英國は資本主義の國ですから、社會主義であるラッセルやミス・ブラックが冷遇されてゐるのは當然すぎる當然ではないでせうか？

胡適　いや、ミセス・ブラックに對しての惡感の原因は、ラッセルの先の夫人が非常に溫厚で、學問があつて立派な婦人であつた爲めでせう。

記者　あなたは今度北京に歸られたら、矢張り北京大學に行かれますか。

胡適　まだはつきり考えてゐません。一應上海に行つて樣子を見たいと思ひます。自分の今の考えとしては、自由な立場にゐて著述でもしたいと思つてゐます。

記者　支那に關する社會思想的、或は哲學的の論文が出來たら改造に御寄稿下さい。

胡適　何か出來ましたら必ず差上げませう。

記者　……胡さんの社會觀はなか〳〵面白いところがありますネ……寧ろ本職の哲學より……（嚴氏……嚴氏は中國傳染病研究所長なり）（嚴氏は東京帝大を出でた人で胡氏の友人。當夜陪賓として我社が招待した人）

嚴氏　胡さんの「哲學」は哲學を破壞する爲めの哲學です。

記者　孔子や孟子の哲學をこはすにはなかなかの奮鬪がいりませう。併し若い人達にはもう孔孟の思想的勢力はないでせう。

胡適　若い人達の間にはもう駄目です。古代の哲學者のうちで、孔孟の哲學はまあ害の少ない方です。

記者　老子はどうですか。

胡適　老子の思想は一種の虛無主義ですから危險性はあります。しかし破壞といふ方面から見ればなんでもありません。只宗教的迷心を信じない。又人事に關しては、禮教の束縛を脫して、只自然を信ずるといふのです。おそらく老子は一番古くから自然を認め、自然を信じた人でせう。しかしこれを建設的方面から考えれば非常に危險です。老子はあまりに自然にかたむいて、ただ自然を信じ過ぎてゐます。だから老子の思想には少しも建設はないのです。自然を信じて建設を否定するものはアナキストです。西洋十八世紀頃はこの思想が非常に强く流行しました。老子は最も古いアナキストでせう。

記者　あなたの話はなか〳〵面白い……もう固い話はよしませう。一盃やらふではありませんか。

胡適　ハウ……ハウ……

（胡氏は上品で日本食が大の好きで、顏の輪廓は澤田正二郎君に似てをるが、しかし心神の澄明は對談者を一種奧ゆかしく引きつける。セカ〳〵せないで一杯の酒にも趣きと風格とを示す。酒の上での話は約束によつて掲載せず。

（昭和二年五月）

プロレタリア文藝理論の確立へ

所謂プロレタリヤ文藝運動の「混亂」に就いて

藏原惟人

所謂プロレタリヤ文藝運動なるものは最近に至つて甚だしい混亂狀態に陷つたと云はれてゐる。實際一見した所では、それは實に救ふべからざる混亂の中にあるやうに見える。即ち一方に於いては、文藝論上に於けるアナーキズムとマルキシズムの對立があり、他方に於ては、またマルキシズム内部に於ける雜多の對立が見られる。しかし若しも少しく注意してこれ等の對立を見るならば、我々はそこに三つの異つた傾向――立場を見出すことが出來るのである。私は今、この三つの中で我々の排擊すべき二つの傾向――立場を批判しつゝ、第三の立場――我々が眞實にマルクス主義的であると信ずる立場を明かにして行きたいと思ふ。

先づ第一に我々の排擊しなければならないのは、プロレタリヤ文藝運動上に於けるアナーキズム乃至はこれに近い傾向である。これ等の立場に立つ人々は、最近に至つて「日本無產派文藝聯盟」の名の下に結成して、いよ〳〵意識的にその進出を期圖しつゝある。しかも我々はあくまでもこれ等の傾向と鬪爭しなければならない。何故であるか？

　彼等の立場はこれを畢竟すれば、「政治は政治、文藝は文藝」と云ふ事にある樣である。彼等はあらゆる社會的現象をその自己目的として、ばら〳〵に認識してゐる。だからこれ等の諸現象の有機的統一は彼等の考へ得ざる所である。彼等は「封建制度には夫れの文藝があり、町人時代には町人文學があり、資本主義時代にはブルジョア文學がある」ことを認める。また「今や無產階級文藝のひからざるべからざる所以のもの」をも理解する。しかしそれだけだ。彼等にとつては文藝がこの社會に如何なる役割を演じつゝあるか、また演じ得るか、等云ふことは遂に問題たり得ない。――蓋し文藝を何等かの手段となすことは彼等にとつては赦すべからざる冒瀆であるのだから。(何この點については「解放」五月號に掲げられたる「日本無產派文藝聯盟宣言――村松正俊氏個人草案」を見よ。)

　こゝに彼等と我々との根本的相違點が存在する。我々にとつて現在に於ける文藝運動の唯一の目的は無產階級の解放と云ふことを置いて他に存しない。そしてこの目的の爲に藝術が如何なる役割を果し得るか、乃至は藝術を如何にして役立たして行くか、と云ふことのみが我々の終局の問題たり得る。そして我々は現在に於けるこの文藝運動の役割を、全被壓迫階級の無產階級解放の爲の鬪爭への啓蒙及びアジテーションとして見るのである。

従つて我々にとつては唯漠然とした「良き作品」を作ることが目的であるのではなくして、前記の啓蒙及びアヂテーションの爲に最も効力ある作品を作り出すことを目的とする、そしてこの目的を達成せしめる爲にのみ我々は良き作品の出現を翼求する。否、反對に、我々は此の如き作品をのみ「良き作品」であると思惟する。

此處で注意しなければならないのは、あらゆる至上主義的立場は無産階級的立場とは全然關係ないと云ふことである。現在の意識的なる無産者にとつては自己階級の解放と云ふ以外に他の目的はあり得ない、それはまたあらゆる文藝的作品をも軍國主義の俗惡なる宣傳に用ひやうとする大ブルジョアの立場でもない。――それは彼等が如何に强辯しようとも小ブルジョアの立場である。だが此處で重要なことは彼等が、彼等の至上主義的藝術によつて全被壓迫階級の政治的自覺を鈍らし、彼等を政治的鬪爭に招く代りに、彼等をしてそれを回避せしめることによつて、無産階級解放運動の現段階に於いて反動的役割を演じつゝあると云ふことである。我々があくまで彼等と鬪爭せんとする理由は實にこゝに存する。

次に我々が排擊しなければならない他の傾向が存する。それは文藝運動なるものゝ具體性を理解し得ざる所謂「觀念的左翼」の傾向である。彼等は未だ文藝運動は何を成さなければならないかを具體的に示してゐない、しかし彼等の言說をもつてすれば、文藝運動を狹義の政治的行動に極限せんとするものゝ如くである。従つて彼等にあつてはブルジョア文藝との鬪爭の如きは、全然問題であり得ない。否、反つて、彼等によれば「文壇への進出」の如きはプロレタリヤ文藝運動の單なる墮落でしかないのである。

しかしながら我々をして云はしめるならば大衆への大いなる影響力を有するこの文壇への進出を拒否することは、それは決して狹くはプロレタリヤ文藝運動、廣くは全無産階級解放運動の爲に、何等の利益をもたらさないのみでなく、反つてプロレタリヤ・イデオロギイ宣傳の分野を狹めんとするものである。それはかつてある一部の「共産主義者」がブルジョア議會をボイコットしたのに似てゐる。我々は文壇に進出することが目的ではない、しかしながら我々は、あらゆる機會を利用して、一瞬たりともわれ等が終局の目的を忘れることなく、プロレタリヤ・イデオロギーを宣傳し、防衞し、促進して行かなければならない。我々はあらゆるブルジョア・イデオロギーと疲れることなく鬪爭しなければならない、――たとへそれが如何に目新しい輝かしい裝ひを爲さうとも。（レーニン）

然らばこの左翼の誤謬は何處から生じたのであらうか？　それは彼等が理論にのみ拘泥して全無産階級解放の爲の利益と云ふ見地から事物を見得ない所にある。彼等が具體的問題に對する回答を所謂現段階の抽象的眞理の論理的結論にのみ求めようとしてゐる所に存する。だが、「具體的諸問題に對する回答も、わが革命の基本的性質に關する一般的眞理の單なる論理的發展の中に求めやうとする努力は、それはマルキシズムの通俗化であり、また辯證的唯物論に對する限りなき嘲笑であるのだ。」（レーニン）

かくして彼等の最も觀念的なる、最も愚劣なる、そして最も公式主義的なる幾多のスローガン――「一先づ取急ぎ（！）組合主義文藝雜誌（!!）文藝戰線を無産階級の陣營より驅逐せよ（?!）」「社會主義文藝を克服せよ（!!!）」等、等、が生れて來る。――かくてゴーリキイの如きをも無産階級解放運動の爲に利用して行かうとしたレーニンの立場の如きは此等

の人々にとつては全然了解し得ない所であるのだ。

しかし、此處でも亦重要なのは此等の人々が、殊に現段階に於いて意識的に進出して來たブルジョア・イデオロギーとの積極的闘爭を回避することによつて、客觀的には反動的役割を演じつゝあると云ふことである。見よ、彼等のスローガンが、ブルジョア文學者の語らんと欲する所と全然一致してゐるのを!

私は以上に於いて簡單ながら二つの傾向――プロレタリヤ文藝運動に於ける右翼老衰病と左翼小兒病とを批判し得たと思ふ。私の信ずる所では、眞實に無產階級的なる文藝運動はこの二つの傾向を理論的にも實踐的にも克服する所に生れて來なければならない。

(一九二七・五・五)

理論確立及び其混亂の根據

田口憲一

プロレタリヤ文藝運動現在に於ける理論確立の要求は然く單純なものでは有り得ない。我プロレタリヤ文藝運動は今や第二の闘爭期を迎へ、これが内部的充實の爲の理論確立の要求である――と一般に解されてゐるが、無論この「第二の闘爭期」なる語の見解如何によりかゝる言說は妥當でもあるが、併し漠然と解される限りに於て、而して機械的、常識的に解される限りに於てそれは明かに誤謬である。現在に於ける理論確立の要求は、所謂ズル〳〵ベツタリな「發展」「進出」の内部的充實の爲の要求と解されるべきでなく、實にかゝる「發展」「進出」の理論を止揚せしめ得んが爲の、根本的要求と解されなければならない。而してこの事は我がプロレタリヤ文藝運動が今や内的にして不可避なる辯證法的發展の結果、所謂方向轉換期に當面しつゝある事を意味する。即ち從來の運動形態より完全に離脫して、無產階級運動現在の發展段階に照應せる新たなる運動形態に於て、みづからの使命を完全且果敢に遂行せんとしつゝある事を意味する。この要求としての文藝理論の確立である。從つてかゝる段階に於ける文藝理論の性質は、從來に於ける所謂プロレタリヤ文藝理論の補足的、完全化的性質のものでは有り得ない。

とは云へ――かゝる段階に於ける文藝理論の性質は、從來に於ける所謂プロレタリヤ文藝理論の補足的、完全化的性質のものでは有り得ない事、確かにそれに相違ないのではあるが、併し――亦この事も、言葉の持つ皮相の意味に於て斷言するが如く、然く簡單には云ひきる事は出來ないものである。それはプロレタリヤ文藝運動の特殊な歷史そのものゝ結果として、複雜な特殊性を、又は特殊な複雜性を與へられてゐるからである。故に我々は、プロレタリヤ文藝運動の發展過程を一應檢討(固より小論の視點より)すべき必然に迫られる。

＊

從來の運動――プロレタリヤ文藝運動――は文學的知識階級の世界觀の初段的分裂――社會主義への一般的轉向の文學的表現に過ぎなかつた。それはプロレタリアートとブルジョアジーとの對立闘爭の或程度の尖銳化に基礎を置く所の、文學的知識階級――小ブルジョアジーの文學層――の生活的動搖の一般的結果の特殊的表現に外ならなかつた。然るに

本質的に云つて、知識階級の中軸をなす所のものは、專ら意識過程を中心として描き出される一體系であるから、社會主義への轉向を示せるとは云へ、初段的過程に於ける知識階級のプロレタリヤ文藝運動の根據をなす所のものは、飽く迄意識過程を中心として構成されたもので他の諸過程（政治的、經濟的過程）は唯一觀論的な彼等の認識の上でのみ結合されてゐて、そこにマルクス主義的な、辯證法的關係を見出すに由がない。從つて「無産階級運動の他の方面では、特に主として行動に現はれる方面では」各自甚しく一致を缺くてふ明確な認識を所有して居りながら、「文藝の方面では」共同戰線を張り得る、と云ふ素朴な見解の下になされ、なされつゝあつた運動であり得た。依つてそこに要求される所の指導理論は、以上の如く意識過程を中心とせる運動を指導し得れば事たりたのであるから（この場合意識過程を中心とすると云ふ事は、機械的抽象的な意味で文藝運動其自身の上に重點を置く事を意味する）、その理論は何等無産階級運動の指導理論と相交錯、牽引すべき必要を感ぜずして事たりるものであつて、其自身、獨立的に存在し得るものであつたのである。從つて文學並に文學的現象を、唯物史觀一般論の立場に於ていろ／＼に解釋してゐればいゝのであつた。從來のプロレタリヤ文藝運動の指導理論が、所謂「文學論」（文學の公式唯物史觀的解釋）の域に止まつてゐたのはこれが爲である。無論かく云へばとて、從來の運動の意義を沒却せんとしてゐるものでも、況んやそれが指導理論の素朴的機械性を笑はうとしてゐるものでもなく、その運動が歷史的、發達的に不可避的な形態のものであり、又あつたればこそ、其獨自な役割を充分に果し得たものであつた事を充分に認めるものであるが、併し――と云ふよりも、寧ろそれ故に――一と度運動が一定の發達段階に達すると、それはみづから己れ自身の機械的辯駁性を認識し、必然的に自身の方向轉換の到來を意識すべく余儀なくせしめられる所のものなのである。昨年後半期に於ける我プロレタリヤ文藝運動陣營内にあげられた所謂方向轉換の叫びはこの結果に外ならない。

さて、かくして我が文藝運動は、謂ゆるその方向轉換期に當面した。その方向を全無産階級的政治鬪爭へ轉換すべき必然に迫られた。然るに（事新しく云ふまでもなく）運動が眞に質的に方向轉換を爲し得んが爲には、それに先驅する所の、指導理論の質的轉換が行はれなければならない。而してこれは我々の立場から云へば、從來の文藝運動の指導理論を、唯物辯證法的に批判、克服する事でなければならぬ。然るに我が左翼は、一應理論的には全無産階級的政治鬪爭主義にまで自らを高め得てはゐたけれ共、併し文藝運動の從來の指導理論を眞に唯物辯證法的に批判――止揚せしめ得るまでには、遺憾ながら成熟してゐなかつた。恰も昨年末頃に於ける左翼が、從來の婦人運動の理論を眞に左翼としての立場から批判し得る迄に成熟してゐなかつたと同樣に。だが併し從來の文藝運動の指導理論を清算し、眞實に此運動をして全無産階級的政治鬪爭の一翼たらしむべく指導し得る者は、よし一應理論的にであらうとも自らを全無産階級的政治鬪爭主義にまで高め得る事の出來た左翼を措いて、他に之を求める事は出來なかつたのである。こゝに於て文藝運動陣營内の左翼は、その方向轉換を現實に過程すべく、あはたゞしくも其第一歩を踏み出した。時あたかもよし、所謂方向轉換論（無産階級運動一般の）は稍々公式的なゝに於て完成せられてゐた、せられつゝあつた。そこでこの方向轉換の理論は、直ちに文藝運動の分野にと導入せられたのである。蓋しこの事自身は決し

て誤りではないであらう。何んとなれば、それが無産階級運動一般の方向轉換の理論である限り、無産階級運動の一翼としての、又は一翼たるべく此處に自己批判を開始せる所の文藝運動への適用は、矢張原則的には妥當的であらねばならないから。從つてこの方向轉換理論の文藝運動への導入は、確に文藝運動の方向轉換の意義と、その轉換の目標と、それが過程すべき諸過程の輪廓だけは確かに指示する事が出來た。それは決して誤りではない。だが併し適用されたものは、方向轉換理論の原則的形式のみである。(また原則的形式のみであつたればこそ適用し得、而して適切な役割を果し得たのである)故にそれは文藝運動の方向轉換の原則を示すのみで、それ以上の具體的進展には、全く無力なものであらねばならないのである。依つて文藝運動の方向轉換を、無産階級運動の方向轉換理論の原則に從つて、その方向に向つて、眞に現實的に過程し得んが爲には、我々は具體的、現實的、全面的な理論鬪爭過程を過程しなければならなかつたのである。然るに文藝家の左翼は、この事實に氣付かなかつた、彼等は文藝運動が眞にその方向を全無産階級的政治鬪爭へ轉換せんが爲には、果敢にして峻嚴な理論鬪爭過程を經なければならぬと云ふ事だけは自覺してゐ、又それを遂行するだけの熱意も持ち得てゐたのであるが、併し彼等がそれを現實に遂行し得るまでに其意識は成熟してゐなかつたとは云へこの國に於ける無産階級運動最近の風潮は、謂ふ所の理論鬪爭の重視であつた。依つてこの風潮を浮薄に受けて了つた左翼文藝家の一部分は、愚かにも形式的理論鬪爭鬪者と化し去り、抽象的、形式的、原則的、一般論的な理論鬪爭を以て現實的、具體的な理論鬪爭とはき違へて了つたのである。從つて表面如何にも果敢熱心なる理論鬪爭過程を過程してゐるかに見えても、それは常に抽象論、形式論、それ以外には亂暴な常識的機械論に過ぎないのであつたから、理論鬪爭そのものは少しの發展もなし得なかつた。而してその鬪爭の結果として、我プロレタリヤ文藝運動陣營内に於ては、運動の進展上、有力な契機となり得ざる所の、二派の對立を見るに至つたのである。即ちその一は、以上の形式的理論鬪爭の誤謬を、直覺的には感知してゐるけれ共これを理論的に把握し得ないが爲に自己の對立物を克服する事が出來ず、理論鬪爭回避にまで發展すべき要素を充分に孕める一派、その二は所謂形式的理論鬪爭派である。從つて以上の對立は、その何れもが嚴密に云つてマルクス主義的態度で有り得ないから、この對立の鬪爭が如何程繼續されて居ようとも、現狀のまゝの繼續である限り、そこに眞にプロレタリヤ文藝運動を現在の發展段階に應じて、指導し得るだけの、指導理論の確立の可能性を認むるに由がない。それは唯徒に混亂に混亂を重ねるばかりである。依つてこの對立の各の特質を、以上の意味に於て見きわめざる限り、我プロレタリヤ文藝理論の混亂は、益々紛糾を加へてゆくのみであるであらう。逆に云ふならば、現在に於けるプロレタリヤ文藝理論の混亂は、以上の現實を見きわめ、これを克服せんとするの努力を缺除してゐる所に、その根據が發見されるのであらう。然るに事實はそれのみではない。現在に於ける我文藝運動が如何なる意味で特に文藝理論の確立を要求してゐるか？　その根本的意義よりも把握せず、今尚かの文藝の唯物史觀一般論的解釋にのみ終始してゐる所の「プロレタリヤ文藝論者」さへも我々は見出す事が出來るのである。

だが併し、以上の諸々のモメントの社會的根據並にそのプロレタリヤ文藝運動の現在に於ける特殊地位を認識し得た我々は、積極的

にこれらの諸要素と闘爭する事によつて、現在の混亂、穢厥性を克服——止揚する事が出來るであらう。而してこの鬪爭の過程に於てプロレタリヤ文藝運動の現在が要求する所の文藝理論——指導理論は準備せられ、再び取られるであらう。かくて我文藝運動は眞に全無産階級的政治鬪爭の一翼として自らを高める事が出來るであらう。（一九二七・五・二）

所謂現段階とプロレタリヤ文藝運動

山田清三郎

（1）

我國無産階級運動の現段階、卽ち政治鬪爭段階にあつては、プロレタリヤ文藝運動もまた必然的に、政治鬪爭意識に依つて、その全運動を貫かなければならないことはいふまでもない。

プロレタリヤ文藝運動が、全無産階級運動の一翼として理解されず、またせざらんと欲するものにとつては、かくの如きは、何等關心事として意識に上つて來ないかも知れない。或は寧ろ、かくの如きは、文藝運動を毒するものとして逆にこれを排撃されもするであらう。

だが、プロレタリヤ文藝運動を、全無産階級運動の一翼として認識し、また一翼たらしめなければならぬとの觀點に立つものにとつては、現段階に於けるプロレタリヤ文藝運動は、他のあらゆる無産階級運動がさうでありまたさうでなければならないと同じやうに、その全運動をして、飽くまで政治鬪爭意識に依つて貫かしめなければならないと考ふることは、蓋し必然の數である。

（2）

もしプロレタリヤ文藝運動が、從來のそれのやうに、單なる反資本主義的文藝の運動であり、また文藝の領域に凝り固まつたところの、漠然とした被支配階級的文藝運動に踏みとゞまつてゐたとしたら、どうであらう。それは、無産階級運動今日の發展段階にあつては、何等無産階級運動に寄與し得ないのみならず、寧ろ無産階級運動の發展途上に於て、一の障害物と化し終らざるを得ないであらう。

我々は今こゝに、その最も適切な、且つ最も具體的な例として「第二インタナショナルの老婆共」の新版とも見るべき、日本無産派文藝聯盟なるもの、存在を擧げることが出來る。

然らば、プロレタリヤ文藝運動が、この全運動をして、眞に政治鬪爭意識に依つて貫かんがためには、我々は先づ何を爲さなければならないか。端的にいへば、それはプロレタリヤ作家並に評論家が、無産階級運動今日の發展段階を、充分に把握し認識することであり、同時にそのことに依つて、全無産階級的な立場から、從來のプロレタリヤ文藝運動、卽ち單なる反資本主義的文藝運動、漠然たる被支配階級的文藝の運動に過ぎなかつたプロレタリヤ文藝運動に對して、峻嚴なる自己批判を行ふと共に、眞に全無産階級運動の一翼としてのプロレタリヤ文藝運動がもつところの現段階に於ける機能、役割、使命を明確に認識することにあらねばならぬ。

（3）

今日のプロレタリヤ文藝運動は、何故に從來のプロレタリヤ文藝運動であつてはならな

いか。この全運動をして、何故に政治鬪爭意識に依つて貫かなければならないか。私は二三の例を擧げつゝここにこれが說明を試みるであらう。

過去に於けるプロレタリヤ文藝運動の代表的な作品として、私は今ここに、「三等船客」（前田河廣一郞）「赫土に芽ぐむもの」（中西伊之助）「流轉」（宮嶋資夫）「牢獄と戀」（江口渙）「地獄」（金子洋文）「海に生くる人々」（葉山嘉樹）等の諸作品を、何等の躊躇なく擧げることが出來る。

だが、これ等の諸作品は、今日の以前のプロレタリヤ文藝運動の代表的な傑作ではあるにしても、今日以後のそれではあり得ないのである。また、あつてはならないのである。

これ等の作品が、プロレタリヤ文藝運動の歷史を飾る燦たる金字塔として、永久に傳へ殘るべきものであることを私は疑はない。だからといつてこれ等の作品が、今日以前に於てさうであつたやうに、今日以後に於ても尙且つ、依然としてプロレタリヤ文藝運動の代表的作品であり得るやうなことが許されるとしたら、それは明かに、プロレタリヤ文藝運動それ自身の後退、逆轉を意味するものに他ならない。

私は無論ここでは前記諸作品の樣式や技巧方面のことを、問題としてゐるのではない。樣式、技巧等の點に於ては、今後のプロレタリヤ文藝と雖も、前記の諸作品からは殊に攝取し、學びとらなければならない、多くのものをもつてゐるであらう。

今、私の問題としてゐるのは、かゝる方面にころがつてゐるのではなくして、その內容にある。思想にある。作品の底を貫く作者の意識、讀者に訴へかけるところの作品の感動的性能の如何にある。

（4）

たとへば葉山嘉樹の「海に生くる人々」である。この作は我々がもつプロレタリヤ文藝運動の前記の諸作品のうち、諸種の點に於て最も新らしきものゝ一つであることは、何人と雖も異存のないところであらう。このプロレタリヤ文藝運動の代表的作品として、最も新しきものゝ一つであるところの「海に生くる人々」に描かれてあるものは何であるか。それは一個の虐服階級の痛ましき勞働過程の姿であり、火の如き熾烈な經濟過程に於ける鬪爭である。

讀者の憤激を、不合理な資本主義に對して誘發するだけの、强烈な力をこの作はもつ。だが、今日から觀れば、その憤激をして一定の方向、卽ち金融獨裁治下の國家機構に向けて集中せしむることなく、單に組織の一角に對するところの散彈たるにとゞまらしむるであらう不滿がある。而して、この種の不滿は、むろん、「海に生くる人々」と同樣今日に於てはといふ條件付のもとに、前記の諸作品に對しても、同樣に共通したものであることはいふまでもない。

念のために斷つて置くが、「海に生くる人々」が今いつたやうに、勞働過程、經濟過程に題材をとつてあるといつたからといつて、私は何も、そのこと自身を論議の對象としてゐるのではない。今後のプロレタリヤ文藝は、運動の進展と共に必然、政治過程に題材をとつたものが、多く生れるであらうし、また生れなければならないことはいふまでもない。が、今ここで問題にしてゐるのは、その題材如何の點にあるのではなくして、その題材の取扱方に對する作者の觀點、心構え、言ひかへれば目的意識性についていつてゐるのである。

いかにプロレタリヤ文藝だからといつて、戀を描いては惡く、ダンスホールに題材を拾ふてはならないなどゝいふことはない。題材

は寧ろ、今後益々多種多様でなければならぬ。肝要なことは、その題材にあるのではなくして、それが果して、眞に、全無産階級的な觀點から描き出されてゐるか否かにある。

（5）

今や我國の無産階級運動は、諸種の發展段階を經て、所謂現段階、政治鬪爭段階にまで進出し、展開するに至つたことは、左翼前衛の現實に對する共通の認識であつて、私がこゝに蛇足を加へるまでもないことであらう。

プロレタリヤ文藝運動をして、苟も全無産階級運動の一翼として認識し、また一翼たらしめなければならないと信ずる我々は、無産階級運動今日の發展段階にあつては、プロレタリヤ文藝運動もまた從つて、無産階級運動の現段階が命ずるところの、政治鬪爭意識に依つて、その全運動を貫かなければならないと信ずるものである。

もしプロレタリヤ作家並に評論家にして、文藝運動は飽くまで文藝運動それ自體のものであるとして、大衆の全無産階級的成長、無産階級運動今日の發展段階の前に眼を閉ぢ、而して、無産階級運動の現段階が命ずるところの政治鬪爭意識を戰ひとるとを怠らんか、彼等は竟に、ひとしくプロレタリヤ文藝運動の名を冠し乍ら、日本無産派文藝聯盟に結成しつゝあるところの「第二インタナショナルの老婆共」と同樣の運命をたどらざるを得ないであらう。

無産階級文學に就いての覺え書

小堀甚二

1、プロレタリヤ文學は過去の文學を否定するものではなくて、從來在つたところの文學を止揚するところのものであらねばならない。從來我々は漫然とそういふ風なことを考えて來た。しかし間違つてならないことは、それはあくまで形式の上のみのことであつて或る作品に盛られた觀念——內容を決定するところの、如何なる出發點から如何なる意圖の下に作品を製作するかといふ點に於いては我々は綺麗に在來の文學から手を切らなければならないといふことである。

文學から出發して社會主義の一般論を文學の中に引つ張り込んだりしてみても、夫は在來の文學の延長以外の何物でもないと思ふ。無産階級文學が眞に無産階級文學の名に假し得るためには、そして無産階級解放運動の一翼としての任務を現實に果し得るためには、我々は出發點を文學其のものに置いてはいけない。我々は出發點を超文學的なもの、即ち資本主義社會の自己批判の主體であるところの無産階級の世界變革の意志及び未來社會への燃ゆるやうな希望の上に置かなければならないと思ふ。我々の目的は如何にして社會主義文學を建設するかではなくて、如何にして歷史の各瞬間に於いて無産階級解放運動が我々の任務とするところの具體的な問題を、文學運動の限界の中で果して行くか、である。それ以外に無産階級文學はあり得ないと思ふ。

2、プロレタリヤ文學をして、今後如何なる反動にも屈しないだけの强固な基礎に置くために、體系付けられた無産階級文學理論確立の急務が今我々の陣營の中で叫ばれてゐる。だが無産階級文學の本質、限界、職能の

一般的定義付け、即ち無産階級文學論なるものが、現在の我々に取つてそれ程必要なものであるだらうか？そもそもそういふ事は一體可能なことであるのだらうか？それは又無産階級文學をして「如何なる反動にも屈しないだけの强固な基礎」を眞に與へ得るものであらうか？

否、と答へざるを得ないと思ふ。そんなことは學究の書齋の中の遊びごと以外には意味がないと思はれる。我々の現實に必要としてゐるところのものは「プロレタリヤ文學とは何か？」などといふことではなくて「プロレタリヤ文學運動は今、何をしなければならないか？」である。プロレタリヤ文學の因數分解ではなくて、其の時々の主觀的客觀的條件に應じて、無産階級文學運動をして眞に過ちのない道を歩ませて呉れることの出來る指導理論の出現である。そして、運動の各階段の必要によつて發表せらるゝ是等の指導理論（例へそれがどんなに片々たるものであらうとも）の一日々々の推積の過程こそ、それこそ眞の無産階級文學理論確立の一歩一歩の苦闘の歩みなのであると思はれる。

現在無産階級文學は漸く下駄を履き習つたばかりの子供である。或る人間が漸く下駄を履き習つたばかりの子供である時に、其の人間が如何なる人間であるかなどゝいふことを論ずるのは馬鹿氣た話である。誰が如何なる人間であるかといふこと、即ち彼の人物論は彼が棺桶に這入つた後でなければ不可能であつて、若しそれをなし得るといふならばそれこそ宗教的迷蒙である。無産階級文學論確立の必要を叫ぶ人達が、例へ今日までの無産階級文學から歸納して或る種の無産階級文學論を確立したとしても、明日は又無産階級運動の環境及び主體の變遷に强要せられて、別個の無産階級文學論確立の必要を感ぜずにはゐられないであらう。其の翌日も、又其の翌日も。斯くして彼はプロレタリヤ文學運動の存在する限り永久に夢遊病者の如く、無産階級文學論確立の重荷を負ふて思索の沙漠を彷徨せずにはゐられないであらう。斯くして彼に取つては當面の具體的な問題を如何に解決するかといふことは（それこそ重要なことである）いつでも彼の生活視野の外にしかないであらう。

3、「黨派文學」「政黨文學」これ等はプロレタリヤ藝術聯盟乃至文藝戰線を非難する徽幟プロレタリヤ文學者達の唯一の合言葉であるらしい。此の言葉の前提には「藝術は個性の自由なる活動から生れるものである」といふ考えがある。藝術は個性の自由なる活動から生れるものである——誰がそれに反對しよう。しかし、問題は其の個性が如何なる個性であるかといふことにある。金融資本家の獨裁政治によつて計畫的に配列されてゐる今日のブルジョアジーの陣營を衝くためには、プロレタリアートのあらゆる戰線が政治過程によつて統一されねばならないのは言ふまでもないことであつて、プロレタリヤ文學運動とても亦其の例に洩るゝことはない。一人の藝術家の個性が、無産階級の此の政治的活動と、自分自身の個性の活動とをぴつたり一致させ得る個性であるか、或はそれと絶對に融合することの出來ない個性であるか、其處から我々と彼等との對立が生ずる。我々の個性は前者であり、彼等の個性は後者である。其處に彼等の階級性があるのである。

4。科學的でない作品は、つまり生活の中に深く這入り込んで行つたものでない作品は强く人を撃つことは出來ない。其の點ではプロレタリヤ文學は自然主義文學と共通點を持つて來るかも知れない。しかし根本的に違ふ

ものは、自然主義作家が意識的に現實に對して傍觀的な態度を取らうとしたのに對して、プロレタリヤ作家があくまで作品の中で自分の主觀を強調しようとすることである。無産階級が唯物論者であると共に實際的な理想主義者であることは、プロレタリヤ文學をして段々其の傾向に押し進めて行くであらうと思はれる。現在其の傾向は最早在るやうである。

（以上日記から）

文藝運動とは何を爲すことか？

久板榮二郎

一

我々は、何から何まで、、、、、のもとに蔽はれてゐる。自由に創造し、高らかに歌ひ力一ぱい跳躍すべき藝術の分野に於ても、今は、、の泥靴にむざむざと蹂躪せられてゐる。よき藝術にして彼等の專斷に依り闇から闇へと葬り去られて行くものが果して幾何であらうか？否むしろ、、、、の鋏を豫想するが故に、作家が自發的に始めから作品を歪め、要所を切り捨て、生まなましさを蔽ひ隱すと云ふが如きは、專制治下に於ては常習的なことである。そして然かも、反動的、麻醉的藝術は彼等の資本的援助と激勵とに依つて飽くまで蔓延し、民衆の一人々々にモルヒネを注入してゐるのだ！

かかる欺瞞と暴壓のもとにあつて、猶ほ且つ、飽くまで新鮮な美を愛し、人間の健康な藝術を建設して行かうとする我々は今何を爲すべきであらうか？

我等は先づ、これら一切の汚物を拂ひ清めなければならない。惡醜ふんぷんたる反動文藝を徹底的に排除しなければならない。然かも此の事は、單に文藝そのものに對する闘爭のみに依つては期し得ない。凡そ藝術は歴史的社會的産物である。意識過程は社會の基礎構造たる經濟過程乃至政治過程に規定されて構成される。意識過程の一部たる藝術を眞に變革せんとならば、畢竟、その依つて以つて發生する所の社會的根據を排除しなければならない。眞の人間的藝術の確立は、有産者社會を徹底的に揚棄することなしには不可能な事である。

二

今や、我が無産者運動は、狹隘な組合主義闘爭から、全面的政治闘爭の段階に進出したと云はれる。その意味は、ブルジョア社會に於て事物化されてゐる一切のものを解放するための闘爭——失はれたる人間性の一切を奪還するための闘爭——換言すれば、プロレタリアートの歴史的使命たるブルジョア社會そのものの變革を期する闘爭である。從つて、藝術に於ける事物化を揚棄し、人間性を奪還せんとする我が藝術運動は、茲に於て必然に全無産者運動と合流しなければならず、又、合流し得る社會的根據が具備せられた譯である。

今や、藝術運動は全無産階級的政治闘爭の一部門として戰はれなければならぬ。無産者運動が民主々義獲得のために闘爭しつゝある現段階にあつては、藝術運動も亦、可能なる一切の手段を盡して之が獲得のために闘爭し

なければならぬ。狹義の藝術的行動（創作批評等）も同じ觀點から、同じ目的のために爲されなければならぬ。

ブルジョア文藝に對する漠然たる反抗から發生した日本プロレタリア文藝聯盟は、昨年秋の第二回總會に於て一と先づアナーキスト一派と分離し、陣容を整理し、名稱も藝術聯盟と改めたのであつたが、其の後、我が國に於ける左翼の成熟と共に、陣營内の折衷主義を克服して、去る三月の臨時總會に於ては、雄々しくも全無産階級的政治鬪爭主義の見地からする新たなる運動方針を樹立し、組織を改め、具體的活動に一歩を進めたのであつた。

我が國に於ける藝術運動は、今、まさに此の段階にある。

然るにかかる段階にあつて、猶ほ我等に對立する見解が最近展開されてゐる。その重なるものは、

1、日本無産派文藝聯盟の宣言
2、田口憲一氏の所論
3、『文化批判』同人諸君の見解

等である。

三

日本無産派文藝聯盟の宣言は云ふ

（一）我等は資本主義的文藝及び黨派的文藝と抗爭し、之が排擊を期す。
（二）我等は囚はれざる正統無産階級文藝の確立發達を期す。
（三）我々は解放運動の文化戰線に立つ。

ルンペンプロレタリアの世界觀に立つが故に曾て我等の陣營から脫落したアナーキスト一派が、農民自治派と小ブルジョア改良主義者の一團を糾合して、今や、飛躍的進出を爲した我等に挑戰して來たのである。

藝術行動を純然たる個人的活動と見做し、無統制に、然かも、政治戰線から完全に遊離して、ひたすら「文化戰線」に立つ事を心懸けてゐる彼等が、既に我々が分析したが如き現段階にあつて、如何なる役割を果すものであるかは明らかである。

彼等は如何に「無産者」的粉飾に依つて自己を隱蔽しやうとも、畢竟は無産者階級意識の集團性をすら解し得ないルンペンであり、社會變革の實踐を回避することに依つて（自ら意識すると否とに拘はらず）必然に、眞實なる人間的藝術の建設を永遠の彼方に押しやつたものである。我等は飽くまで其の反動的性質を暴露し、徹底的に排擊するものである。

四

最近に於ける「文藝戰線」内の理論的指導者と云はれる田口憲一氏は、「文戰」四月號に於て「プロレタリア文藝運動の現段階と其の任務」なる長論文と、引きつづいて五月號に「文藝運動の方向轉換は如何にして可能なりや」の一文を發表されてゐる。そして其の強調せられるところは所謂「左翼文藝家意義」なるものであつて、文藝運動が眞實に方向轉換をなすための決定的要件が之だと云はれるのである。

曾て、谷一君等に依つて提唱された全無產階級的政治鬪爭意識の獲得は、これは前段的一般的の條件であつて、之に依つては未だ決して文藝運動の方向轉換を期し得ない。我々は此の意識のもう一段の具體化・特殊化たる「左翼文藝家意識」を決定的要件として必要とすると云はれる。

勿論、我等にあつても、全無產階級的政治鬪爭意識の獲得のみに依つては、文藝運動全般を具體的に方向轉換せしめ得ない事を認めるものである。即ち文藝運動の一部分であ

る藝術行動(創作、批評等)を全運動に合流せしむる爲めには、一度戰ひ取られたる全無産者階級的政治鬪爭主義の意識によりて貫かれたる藝術理論(藝術行動の規準)の必要を認めるものであるが、然し、我等は之を以つて直ちに、直接的に、文藝運動そのものの方向轉換に決定的要件であるとは考へない。

氏にあつては、文藝運動を運動として理解されてゐない。個々の作家の創作行動と之とを區別されてゐない。小説や演劇や美術品並びに評論の製作の總和が、即ち氏の意味する文藝運動なのである。

「一言にして云へば藝術理論即藝術運動理論または藝術運動即藝術理論たらしむること。」(文戰五月號五五頁)と明言して居られるではないか?

斯かる見地に立つが故に、氏は、「その爲め(藝術運動を方向轉換せしむるため)には、先づ我々は前衛の意識を戰ひ取らねばならぬ。」(同、五四頁)と一應は規定して居りながら、それは偏に藝術を生むために必要とするのであつて、藝術製作以外の運動は氏にあつては大した問題でないのである。前衛とは一般に理解されてゐる意味に依れば職業的革命家の謂である。かかる前衛が、どうして、專制的暴壓の下に呻吟する藝術家、よき藝術を事毎に奪ひ去られて不平反抗に鬱然たる被壓迫大衆を日々目撃しつゝ、袖手傍觀して、只作漫畫や小説の製作にのみ沒頭してゐるのだらうか?

文藝戰線が曾て、二月號及び三月號にテーゼを發表し、藝術運動と政治鬪爭とを排他的對立的に規定し藝術運動に關心を持つ大衆をば只管藝術作品を通しての鬪爭の埒内に跼蹐せしめやうとしたとき、我等の果敢なる追撃を受け、一斷承服したのであつたが、今や、田口氏の一層圓熟したる折衷論が出づるに及び、再びまた、藝術行動萬能主義に還元せんとしつゝある。かかる理論は究極に於て反動的役割を演ずるものなるが故に、我等は排撃せざるを得ない。

五

次に「文化批判」同人諸君の見解であるが、諸君は、我等が過去半歳に於ける執拗なる理論鬪爭に依つて、一應、現段階に於けるマルキシズムを戰ひ取り、それに依つて、運動の見通しをつけ、運動方針を樹立し、今や現實に運動を展開しつゝある時、その過程を理解し得ず、猶ほ未だ理論鬪爭こそ當面の問題であるとなして、我等の陣營から隔離してゐるのである。

方向轉換の前段的要件を未だ戰ひ取らないのは、實は、諸君こそであつて、それを明瞭に認識され、之が獲得のために凡ゆる努力を傾倒して居られることは誠に喜ばしいことであるが、併し、それが故に、日本の無産者藝術運動が未だ理論鬪爭の段階にあり、現實的運動に這入り得ずと云ふが如き考へを懐かれたら大へんな間違ひである。

又、理論鬪爭と稱して、我等の陣營内にある鬪士を引合ひに出し、過去の雜多な文獻を蒐集して、その中から都合のよい文句を選び之を都合のよいやうに曲解して、中傷漫罵を浴びせかけるが如き行爲は慎んで貰ひたい。

我等は、以上一切の誤れる理論を排撃克服し、全無産階級的政治鬪爭に合流しつつ、一切の事物化の社會的根元にまで肉迫するであらう!

(頁數に限りがあり、未だ充分に論じ盡し得ない。之は猶ほ、我等の意味する藝術理論(藝術行動の規準)と共に他日を期して展開したいと思つてゐる)

——一九二七、五、七——

凡愚列傳

長谷川如是閑

眞鍮の管に風を通ほす男

彼れは頭髪も七分通りに白くなつた時分に、何十年ぶりかで、大きなホールの廣いステッヂに立つた。

といつても、そのステッヂには同時に百人近くの人間が群を爲して立つてゐて、彼れはその群の最も後の、最も片隅の、然しながら最も高い所に立つて――といふよりは寧ろ――坐つて、さうして時々立つて、彼れの前に二つ列んでゐるケットル・ドラムを叩くのだ。

不幸にして彼れの風采は頗る堂々としてゐる。年齢には無論申分がない上に、身のたけは五尺七八寸で、しかも極めてよく均整がとれてゐて、容貌は、少し野性は帶びてゐるが決して卑しくはなく、たとへばリンカーンを少し日本化したやうである。それがドレッス姿で白い胸を突き出してゐる恰好を見た誰れが、彼れを溝溜のやうな裏長屋の奥から出て來た人間だと思ふことが出來やう。もし彼れがその風采で天長節の夜會に外務大臣と列んで現はれたら、イギリスの大使も大臣の次ぎには彼れに握手を求めたであらう。彼れの前に二つのドラムが列べてなかつたならば、彼れを音樂家だといひあてるものさへないであらう。人々は彼れを、音樂を『する』人ではなく、音樂を『させる』人だと思ふであらう。たとへ彼れが音樂家であることを知り、又彼れの前に二つのドラムが列んでゐるのを見たものでも、まさか彼れがその太鼓を叩く音樂家であると思ふものはあるまい。寧ろ、その太鼓から最も遠く離れた所に立つて、時々右の肱をその太鼓の方面へ肱鐵砲のやうに突き出して、それを叩くことを合圖する音樂家であると思ふであらう。

實際オーケストラといふものについて見たことも聞いたこともないものが、彼れの加はつてゐるオーケストラに於て始めてオーケストラなるものを見た時に、ステッヂの片隅の一番高い所に、時々スックと立ち上る彼れを見たならば、確かに一座を支配するために立ち上つた人だと思ふであらう。而も、彼れがたゞ一つ二つ太鼓を叩いて又坐つてしまつたのを見ても、その太鼓の音が、ある重大の意味で全オーケストラを導いてゐるものと思ふであらう。それほど、音樂と音樂家とに

ついて何等も知らぬ人々にとつては、彼れは顯著な存在であるが、それらのものについて少しでも知つてゐる人々にとつては、彼れは『存在』でも何でもない。

『太皷なんかは、あつちのホテルや貴族のオーケストラではコックが叩くんだつていふぢやありませんか。』

そんなことを彼れは同僚達の前でいつたことがある。

『オーケストラは所謂チーム・ウアークだよ。誰れ一人だつて肝要な分子になつてゐないものはない。そんな不平をいふなよ。』

仲間のうちでやゝ有力な音樂家がさういつた。

『さういへば、グロボトキンの親父の家のオーケストラで時々太皷を叩きそこねて免職になつたコックがゐるぜ。』

他の一人がそんなことをいつた。

『僕がロンドンにゐた時に、セシルホテルのオーケストラで太皷を叩いてゐた男が、生活難で自殺したつけ。あんな所のオーケストラをきいてゐると、その中に、そこから躍つて自殺しやうつて奴が混つてゐるとはとても思へない陽氣な光景だがなア。』

と他の一人がいふと、

『昔の日本の芝居だつて、列び大名の大多數は、夜逃げの必要を感じてゐた連中だよ。』

と他の一人がいつた

『今の日本だつてさうぢやないですか。夢ら相なことをいつていたゞきますまい。』

と彼れは心から腹が立つたやうに然しながらつまらな相にさういつて、自殺の發作に襲はれた時のサンカトンのやうな顔をした。

それらの連中は、よく彼れの風采を今更らしく見あげ見下ろしながら『一群のタクト振りを一遍見たいものだなア。』といふのであつた。

それは全く冗談だが、しかし、彼れも昔ある地方の活動館で、彼れの長い兩手をひろげてふり廻はすと全員の頭に觸れ得る位の大きさのオーケストラを指揮したこともあつた。がちきに人數が足りなくなつて、彼れもコルネツトを吹いた。『その方が經濟だ』と館主はいつたが、彼れもさうだと思つて、それきり不經濟な仕事をやめた。

仲間でバンドを作つてゐる連中が、ある高貴の邸の園遊會に招かれたことがあつた。その時仲間の一人が『今日は餘興に一つ、あの「辨當ベン」にタクトをやらせやうぢやないか』といひ出した。（因に、『辨當ベン』とは彼れの若い時分からの綽名である。その頃、彼れが軍隊から出て——彼れは軍樂隊出身だ——始めて東京のある音樂團に加はつて練習に召集された時に、さういふ場合には辨當の振舞のあることを知らないで、——中にはただ辨當を喰ふために集る連中さへもあることを知らないで——妻君の作つてくれた大きい辨當の箱を後生大事に抱へて來て皆の前に開いたのが、その綽名の由來であつた。）

で仲間のうちの頭立つた一人が、新參の彼れに、さういふ事が彼等の仲間の習慣であるやうなことをいつて、頻りに尻ごみする彼れに無理やりそれを命じた。そうして彼れがその堂々たる風采で演じる滑稽を豫想して、皆が腹の裡のをかしさを目と目で知らせ合つた。

その日も、頻りにバス・ドラムとシンバルを叩いてゐた彼れは、仲間からフレンチ・ホーンを借りて、芝生の中央に立つて、放射形に

列んだバンドを見渡した。いかさまもの〳〵しい風采である。

『これからが見ものだ』と可笑しさをこらへて樂器を構へた連中は、彼れが、ホーンを片手に、輕妙なスタイルで相圖した態度が、恐ろしく素人離れのしてゐるのに度膽をぬかれた。

愈奏樂が始まつて見ると、それがいかにも品のわるいエキセントリックなスタイルだが、とにかく日本人には全く類のない、珍型のタクト振りで、一同は大に面喰つた。それまでの指揮者が、軍隊風で、機械人形のやうな恰好で、指揮棒で、鼻のさきへ『へへののもへじ』を書いてゐたのに比べて、その對照が恐ろしく聽衆をよろこばしたらしく、一曲終ると、所謂急霰のやうな拍手がしばし鳴りもやまなかつたのは、全く彼れのタクト振りを喝采したのであることを疑ふことは出來なかつた。

彼れに代つて大太鼓を叩いてゐた眞物の指揮者は、彼れの初端の合圖ぶりを見てから、もうテレ氣味で、始終苦が笑ひをしながら、大太鼓を叩いてゐたが、大喝采が起ると、テレ隱しに彼れの前に飛んで來て仰々しく兩手を差しのべて握手を求めた。

彼れが聽衆の拍手に迫られて、何度かその珍妙なタクト振りを發揮した後で、仲間の一同は、口々に彼れの思ひもよらぬ『隱し藝』を賞贊して、『年寄りは滅多に輕蔑されぬ』『何といつても年の功だ』『イヤ全く天才だ』などゝいひ合つた。

それをきいた彼れはニヤ〳〵笑ひながら皆の前でいつた。

『なあに年の功でも天才でも何でもありやしません。私は軍隊を出た當座ひどく喰ふに困りましてね。今でも困らないことはありませんが、何しろその頃は、ラッパを吹いてご飯をいたゞけるなんてありがたい時代ぢやなかつたのですからね。で仕方なしに、ある東西屋に雇はれたのです。往來をブカ〳〵ドン〳〵やつて歩くのはお手のものでちつとも苦にはならなかつたが、時々行燈を背負はせられて眞面目な顏をして往來の眞中を歩かせられるのには聊か閉口しましたね。所がその東西屋がだん〳〵發達して何とか音樂隊て奴を組織した時に、その教師が、フランス人の喰ひつめものでしてね、それが隨分飄輕者でしたが、然しやかましいことをいつてわれ〳〵を仕込んでくれたもんです。それのタクトが、例のフレンチ・ホーンを猛烈にふり廻はしながら踊りを踊る奴でしてね、今ご覽に入れたあれなんですよ。私が何うしてそれを覺へたかといふと、その時分は私も若くて番茶氣があつたので、その教師の休んだ時にはよく、私が隊長になつて、その毛唐の物眞似をして皆でふざけたものです。開業式其他に招ばれた時に、その毛唐が出て來ないと、いつも私が代つて、物まねで出鱈目にやつてのけたもんです。習はうより馴れろで、いつの間にか眞物以上て譯でね。それに眞物のフランス人は私の胸の所までしかないやうなちんちくりんで圓るまつちい男だつたのに、ひよろ長い私が、それを眞似て、圓るまつちくならうとするので、眞物に辶をかけた珍型が出來ました譯ですよ。種をあかせば先づそんな次第でさ。飛んでもない天才もあつたものでね。アッハッハ。』

そんな譯であつたかと、仲間は漸く安心して、そのことがあつてからも、むろん元の程度でしか彼れを尊敬しなかつた。

彼れは今でも東西屋生活を全く離れ切つた譯ではない。本職は、二

三の東西屋の樂隊の教師といふ名目で、實はやつぱり開業式のコンダクターである。諸君は、町の洋食屋や吳服屋やなどの開業式に、狹いヴエランダで窮窟さうにラッパをふいてゐる連中のうちに、一人だけ背廣服をきた白髮頭の老人が フレエンチ・ホーンを吹いてゐるのを見ることがあれば、それは即ち彼れである。

それを彼れは幸福だとも不幸だとも思つてゐる譯ではない。彼れの一番の親友で彼れと同じく四十年來ラッパをふいてご飯をいたゞいて來た男は、數年前からたつた一人でコルネットとサイド・ドラムのオーケストラを組織して、往來で子供の聽衆を集めて飴をうつてゐたのであるが此頃はその男はすつかり齒がぬけてしまつて、今はオーケストラを解散して、小太鼓のソロで小さい聽衆を集める外はなくなつたが、彼れのコルネットを此の上もなく喜んだ子供達は、小太鼓の獨奏に興味を感じないので、さつぱり飴がうれなくなつたと嘆息してゐるのである。

それに比べると、同じく來年還曆を迎へるといふ年に至つて、再びきらびやかな大ホールのステッヂに立つことを得た彼れは、全く幸福であると思はない譯に行かないのであるが、何ういふものか、さう幸福だと思へなかつた。それは多分、彼れが古物の燕尾服を手に入れ、そのヅボンと兩袖の長けを延ばし、いろ〳〵の附屬品を揃へるために、彼れと彼れの老妻との全財産を殆んど蕩盡したゝめであらう。

でも彼れは、あの大きいステッヂから、大ホールに溢れるきらびやかな聽衆の群を見渡した時には、何もかも忘れてたゞ恍惚とした。もう何年か前から曲譜なんぞを見ながら演奏することなんかは殆んどなかつたので、新しい曲の譜を見つめるのが彼れの頭を重くしたが、そんなうちにも、彼れは、ふと、コルネットと小太鼓の、口と手のオーケストラに集る小さい聽衆を見渡して喜んでゐる彼れの老友を想ひ出した。さうして自分がその友人ほど喜んでゐるか何うかゞ疑はれた。大ホールに溢れる彼れの花やかな聽衆を見渡しながら、彼れは翔りと、往來端に集る彼れの友人の小さい聽衆を想ひ浮べた。

彼れは、『屁見たいな譜』を見るのが苦になつて、眠つてゐても叫ける太鼓を打ち誤りはしないかといふ懸念された。クロポトキンの親父のコックの二の舞ひになつては叶はぬと思つた。

『何十年にも、こんな馬鹿々々しい不安を感じたことはないが。』

彼れは此年になつて、有名な樂人達の樂團に加はる光榮を得て、聊か幸福に祟られたのではないかと考へて見たが、燕尾服のことを想ひ出すと、祟たられるほど幸福だとも考へられなかつた。

二晩目をすまして家に歸つて來ると、彼れはひどい疲れを覺へた。さうして狹い所に鮨のやうに寢てゐる五人の子供の寢姿を眺めながら、その傍で、いつものやうに妻のつけて吳れた熱い酒を口につけると、それがひどく苦かつた。

『人は皆、一生の間にはいろんなことをしてゐるだらうな。』

彼れは、そんなことを獨語のやうにいつた。

『お前さん何をいつてゐるの？』

老妻は臺所から彼れに聲をかけた。

『俺は何をして來た。』

彼れは盃を長火鉢の端に置いて、兩手で頭を抱へて俯向いた。

『五十年の間、たゞ眞鍮の管に風を通してゐたんだ。』
膳をもつて臺所から出て來た老妻は、火鉢の傍に横倒れに倒れてゐる彼れを發見した。
『お前さん、風を引くぢやないかね。』
老妻はさういつて、その前に膳を据へて、破れ褞袍を彼れに被ぶせて、自分は長火鉢の向ふに座つて、五德の上の鍋のものゝ煮へるのを徐かに待つてゐる。
横になつた彼れの身體は、その間に段々冷たくなつて行つた。

猿と寢た男

暗闇が恐ろしい重みでのしかゝるやうな夜の山林を、元吉は、まるで漆の海の底をもがき廻るやうに、しやにむに押し進んだ。
彼れは樺太のX驛から數里離れたY村の護岸工事の飯場から逃げ出して來たのだ。
一寸病氣をしたゝめに、うんと借金が出來てしまつて、そのまゝ居れば、いつまで經つてもロハの苦役をつゞけねばならない。それを考へると一日も我慢が出來ない。いつか逃げ出さう〳〵と思つてゐた矢先に、今夜はしなく、便所に行かうとして、出入口の土間に、面の憎い小頭の、いつも膨れてゐる大きい蟇口が落ちてゐたのを手に入れたので、もう矢も楯もたまらず、頭から毛布をかぶつて、そこにあつた龕燈に火を灯して、何かの用で舟に行くやうな風をして飯場を出て、構外へ出てから火を消して、一目散に走り出したのであつた。
Y驛に行つてまご〳〵してゐれば追手につかまる虞があるので、あてもなく山林に飛び込んだものゝ、土地不案内の彼れは、その暗の中をどう歩けば何處へ出るのか全く見當がつかなかつた。
立木にぶつかつたり、木の根に躓つまづいたりして、長い事迷ひ歩いてゐるうちに、西も東もわからなくなつて、元吉は闇の中に立ちすくんで考へ込んでしまつた。
夏といつても、夜がふければ寒中のやうに寒い。もがき廻つてゐれば汗も出るが、少し立ち止つてゐると身慄ひが出る。
蟇口をひろつたので、何の考もなく、追ひかけられたやうに飛び出して來たが、かうなると後へ引返したいやうな氣もするが、何方が元來た方だか、てんで見當がつかない。
『第一蟇口にいくら入つてゐるのだらう。』
元吉はさう思つて、龕燈をともして、木の根に坐り込んで、蟇口をあけて見た。中には書付のやうなものが一杯つまつてゐた。いつも膨れてゐるのはこれだなと思ふと、元吉は先づがつかりさせられた。絶望が鼻の先で待つてゐるやうな氣がしながら、元吉はふるへる手先で更らに内側をあけて見た。そこに揉みくちやになつた一圓札が一枚外に銀貨や銅貨がバラで入つてゐた。それを數へて見たら皆で五圓六十三錢しかなかつた。
どこか外に紙幣が入つてゐやしないかと、書付を一つ一つあけて見たが、一枚も出て來なかつた。元吉は、金だけとり出して、それを自分の蟇口に入れて、面の憎い小頭よりも面の憎い蟇口を闇の中へ抛り

出すと、急に疲れが出て、もう一足も歩くのがいやになつた。

『皆で五圓六十三錢。そんな筈はないが。』

元吉は、今捨てた蟇口のどこかに、もつと紙幣が入つてゐるのぢやなからうかと考へた。さう思ふと、その蟇口を今一度調べて見ないでは氣がすまなかつた。

彼れはふら／＼と立ち上つて、龕燈をぶらさげて、蟇口をなげた方向を探し廻つたが、確かにこの邊と思はれる所に何うしても見當らなかつた。見當らないとなると、愈その中にまだ紙幣が入つてゐるに違ひないといふ氣がした。

で更らに、躍起となつて探して見たが何うしても見當らない。『澤山の紙幣の入つてゐる蟇口を見失つた』口惜しさに、彼れは全身の血が熱くなるのを感じた。

『あの書付けの一つ／＼に紙幣が入つてゐたのだ。』

彼れはそんなことまで考へて地團太をふんだ。と彼れの足に何か觸つた。見るとその蟇口であつた。

『あつた！』

彼れは覺へず口に出してさう叫んで、貪るやうにそれをとりあげて、今度は、書付を一枚／＼ひろげて見て、愈紙幣を包んでゐなかつた分は、一々それを引き裂いて捨てた。とう／＼皆引裂いて捨てた。簡單な蟇口のどこにも確かに隱しのやうなものはついてゐなかつた。けれども元吉は、先のやうにそれを闇の中に抛り出しはしなかつた。さうすると、又その蟇口に隱しがあつてそこに澤山の紙幣が入つてゐることになるに違ひなかつたが、今度は元吉はそれを足元に捨てた。

元吉は疲れ切つて、大地に座つてしまつた。何處かに疲れた身體を休める場所はないかと思つたが、それも今の蟇口に紙幣がないかと探すやうなものだと思つた。

元吉は立ち上る勇氣もなく、座つたまゝ、龕燈をふりあげて四方を照らして見た。とつひ四五間前に葦で圍まれた小屋のやうなものがあるのを發見した。

足許に蟇口を見た時のやうな氣持で驅け寄つて見ると、小屋の中は板切れのやうなものが積み重ねられ、その上に亂雜に藁がかぶさせてあつた。

彼れは、偶然、非常に贅澤な寢床を發見したと思つた。さう思ふともう身體が石のやうに重くなつて、ころがるやうにその上に横になつてしまつた。

燈を消して、長々と身體をのばした元吉は、ふと、十數年前のある夜の經驗を思ひ出した。

兩親の顏も覺えず、死んでるのか生きてるのかもはつきり知つてゐない彼れは、無暗に彼れを毆る馬方の叔父――叔父の毆るのは敢て彼れに限つた譯ではゐないが――に育てられた。

その叔父の親分なるものは、馬の外に猿を澤山飼つてゐて、それを町の公園に持ち出して、餌を賣つて收入の一部としてゐたが、元吉は十三になつた時に、その猿の番人を命ぜられて、叔父の家から毎日公園に通つてゐた。

ある初冬の日曜の夕方に、元吉はいつもの通り五匹の猿を一つ／＼

棒杭から解き放して、それ〴〵別の箱に入れやうとして、先づ一番端の女猿の鎖を解きかけてゐると、一人の酔つぱらひが、そこにあつた籠から猿の餌の胡蘿蔔を一本とつてそれを丸ごと、一番大きい男猿にやらうとしたので、元吉は驚いて駆けて行つて、その男を遮つた。

『小僧の癖に生意氣をするな。こんな薄ぺらの胡蘿蔔の切れぱしの一きれや二きれで三錢もぶつたくるなんてまるで泥棒だ。俺は此の胡蘿蔔を泥棒するのぢやあねへぞ。手前のとこの胡蘿蔔を手前のとこの猿にやるのに何が泥棒だ。』

酔つぱらひはそんなことをいつて小僧をにらみつけた。

『あんまり安くすると猿が喰ひ過ぎるから、わざと高くしてあるんだい。そんなに胡蘿蔔をやると俺が叱られるからよしておくれよ。』

元吉の泣面をするのを面白がつて、酔つぱらひが胡蘿蔔を大猿の前に見せびらかしてゐると、いつの間にか女猿が鎖を引ずつたまゝいきなり酔つぱらひのもつてゐるその胡蘿蔔を目がけて飛びついた。

酔つぱらひが驚いて埓にしがみつくと、女猿はその背に乗りかゝつて胡蘿蔔を奪はふとした。

大きい男猿は、眼の前に女猿が人間に抱きついたのを見て、歯をむき出して怒り出したかと思ふと、恐ろしい叫聲と共に、鎖をぶちきつて酔つぱらひに飛びかゝつた。

大猿にとびつかれた酔つぱらひが、押しふされた風船のやうに地べたにへた張つた間に、男猿と女猿とは奇聲を發して摑み合ひながら、公園の奥の方へ樹の枝から枝を傳つて姿を消してしまつた。

『猿の喧嘩だ、俺は知らねへ。猿のせいだ、俺の故ぢやねへよ。』

そんなことをぶつ〳〵いひながら、生酔ひ本性違はずで、酔漢は、こそ〳〵逃げてしまつた。

近所に居合せた人達と一緒に、猿の行方を探し廻つた元吉は、とう〳〵それを發見する事が出來ないで、泣きながら猿小屋に戻つて來た時はもう暗くなつてゐた。さうして殘された猿を箱に入れてしまつたが、このまゝで歸れば、何でもない事にも息のつまる程嚴りつける癖のある叔父に、何んな目に遭はせられるかと思ふと、元吉は身體がすくんで氣が遠くなつた。

その時、彼の手に觸れたのは自分の首にかけた、貯めの入つてゐる財布の紐であつた。

元吉は、その紐を片手に握つた時に思ひついたのは、この金で切符をかつて東京へ逃げて行かうといふ考であつた。

けれどもその時は丁度もう終列車が町の驛から出て行つた頃であつた。明朝の一番まで待たねばならないが、その間何うしたら好いだらうと彼れは途方にくれた。

三十分ほどぼんやり考てゐた彼れは、自分の腰をかけてゐる大猿の箱が空いてゐるのに氣がついた。

『さうだこの中に寝てやらう。さうすれば夜中に叔父が自分を探しに來ても見つかる氣づかひはない。』

元吉はさう思つて、犬小屋程のその箱の藁の裡にもぐり込んで中から扉をしめてしまつた。

元吉はうと〳〵としたかと思ふと寒いので目がさめた。一生懸命身體をちゞめてもとても冷へて寝られ相もない。

彼れは籠から出て、傍の小さい籠をあけて、女猿を引出して、それを抱へて元の籠に入つて、猿と抱き合つて寝た。やがて、彼れと猿とは互にい丶工合の温味を感じながら、ぐつすり寝込んでしまつた。

莚の上にころがつた元吉は、十餘年間嘗て思ひ出しもしなかつたその晩のことをまざ〳〵と幻に描いた。古毛布の胸をしつかりとかき合せながら、元吉は頻りに女猿の温か味を思ひうかべた。

さうしてうと〳〵した。とカサ〳〵といふ音で目が覺めた。

驚いた元吉は、思はず首をあげて四方を見廻はしたが、元より墨のやうな闇の中に何も見える筈はなかつた。

『熊でも來たのぢやないか。』

さう思ふと、水を浴びたやうに全身が鳥肌になるのを感じた。

元吉は身體を起して慄へながらマッチをすつて舷燈の火をともして、中ば夢中でそれをふり廻した。

と小屋の奥の隅の方に白いものがちらと舷燈の光にうつつたのが元吉の目に入つた。再び水を浴びたやうに感じた彼れは、こわ〴〵燈をその方に向けて思ひきつて見つめると、その白い塊がだん〳〵はつきりして來たが、それは若い西洋人の女の寝顔であつた。

『アッあの合ひの子だ！』

元吉は覺えず腹の裡でさう叫んだ。

『合ひの子』といふのは、元吉の飯場で賄の手傳をしてゐたロシヤ人と日本人との合ひの子の女だが、此女はつい昨日飯場から居なくなつたのであつた。

『やつぱり何か擬ッぱらつて逃げやがつたな。』

元吉はさう思ふと、少し可笑しくもあつた。

『どうだい！まるで死んだやうに寝てゐら。よつぽど歩き廻りやがつたんだぜ、可哀相に。』

そんなことを考へながら、元吉は、ふら〳〵と立ち上つて、女の傍に行つて、舷燈をつきつけてその寝姿を眺めた。

いつも着てゐる黒つぽい上着の胸を眞白い腕でしつかり抱いて、腰から下を莚で包んでゐる。

『寒さうだな。』

元吉が口に出してそれをいつた途端に、女は眼をあけたが、向けられてゐる舷燈の光に、眩ゆさうに眼ばたきをつゞけた。

『おいアイちやん。俺だよ、元吉だよ。』

さういつて元吉は、自分の顔にも女の顔にも光の屆くやうに舷燈を向けて見せた。

合ひの子は、大きい眼をぱつちりとあけてじつと元吉の顔を見つめてゐたが、急に艶めしくほゝゑんで、上目で元吉の顔を見ながら、頤を胸にすりつけるやうな眞似をして見せた。

『ウフフッフ。』

元吉は、そんな音のする痙攣的の笑ひが鼻からぬけて出るのを自制することが出來なかつた。

『逃げて來たの？』

女はさういつて更めてクスと笑つた。

『あん畜生の藪口を便所で拾つたんですぐと飛び出して來たんだ。おめへは何をかつぱらつて來た？』

女はそれに答へないで、やつぱり顔で胸をこすりながら、上目を使つてにこ〳〵してゐる。
『これからおめへ、何うしやうてんだい？』
『△△の叔父さんのとこへ行く。』
『△△つてこゝからどの位あるんだい？』
『十里ばか。』
『そいつは大變だ。汽車なんか無論ねへんだらう。』
『ない。一緒に行かない？』
女はさういつて顔をそむけた。
『ウツフツフ。』
元吉はまた痙攣的に笑つた。
『まぶしい。』
女は首をねぢ曲げたまゝさういつた。
『おつと來た。』
元吉はさういつて女の顔から紘燈を離して、それを消して下に置いた。さうして彼れは、毛布にくるまつて女の傍にころがつた。
『寒む！』
女はざわ〳〵と蓙の音をさせた。
『毛布を貸さうか？。』
さういつて元吉は、毛布と一緒に自分の身體を女の方へ近寄せた。
元吉は、女猿と寢た晩の生ぬるい溫か味を肌に感じた。

脅びやかされたスパイ

二年間の恐ろしい失業の經驗が、巡査になつた山屋を有頂天にした。
『俺は一生巡査をする。結構すぎる位だ。』
彼れは教習所を出た時に眞劍にさう思つた。
彼れは佩劍をならしながら、いつぞや半日も彼れを侮辱した末に、彼れの申し出た五十錢の無心を刎ねつけて彼れを野良犬のやうに追ひ出した同郷の先輩を縛つてくれたいと思つた。
牛乳配達を志して片端から牛乳屋を聞いて廻つて三十何軒目かで漸く傭はれた家は、三日目に彼れを窃盜の疑ひをかけて放逐した。その家に營業停止を喰はしてやりたいと彼れは思つた。
その山屋が非番の日に、教習所以來彼れが世話になつてゐた警部補の平尾が突然訪ねて來た。
上官ではあり、世話にもなつてゐるので、こちらからは困しい工面をして手土産などをもつて時々訪ねてゐたが、向ふから來てくれたことなどは嘗てなかつた。然るに突然その訪問を忝うしたので、山屋は大に光榮を感じたが、その刹那に、直覺的にいやな豫感が彼れの胸をどき〳〵させた。
『諭旨を喰ふのぢやなからうか。』
動悸のする胸で、愛想よく平尾を迎へながら、山屋はそんなことを考へて、頭がフラ〳〵とした。
彼れは荒物屋の二階を借りてゐるのだが、それも漸く數日前に、そ

の工面がついたので、鍋釜や僅かの炊事道具などを調へて辛うじてこゝに移つて來たわけで、漸く少し落ちついたと思つた時には、彼れの懐には白銅二ツ三ツと銅貨が少しばかりしか殘つてゐなかつた。此月末は何うしたものかと考へてゐる時に、平尾の來訪の性質如何は、彼にとつて生死の境目であつた。

山屋は數日前に、刑事部屋でひどく毆られた勞働者に同情して、留置場で誰れもゐない間に、その男としんみり話したことが知れたのではなからうかと思つた。外に不安の種になるやうな覺へもなかつたが、一體自分が巡査に適してゐるやうでもないことは我れながら疑へないので、香ばしい結果がさう急に沸いて來やうとは思はれなかつた。急に來れば乾度碌でもない事だ。

平尾のとりとめのない話に興味をもつたやうに調子を合せてゐた山屋は、とう／＼堪へ切れなくなつて切り出した。

『今日は態々おいで下さいまして、何か私に御用ではございませんでしたか。』

『いや實はその事でね。』

山屋はぎくりとした。

『何うも、君は警官は餘り適任でないといふやうなことをいふものがゐてね。何に僕は上の方へは、うまくいつてあるから、そんなことで君が迷惑するやうな事は決してないんだがね。』

『自分の勤め振りにどんな缺點があるか自分にはわからないので、忌憚なくいつて戴からうと思つて居りましたが、』

『何平常はそんなことは問題にはならないが、何かの折に何うかするとそれが轉任を喰つたり、諭旨を喰つたりする原因になるのでね。無論君が今そんな破目になつてゐるといふ譯ぢやないがね。それにもう相當經驗も出來て、しかもまだすれて居ないといふ至極いゝ頃なんだ。』

『別に問題になつたのではないので？』

山屋は平尾の言葉が要領を得ないのにいら／＼した。

『さう、別に問題といふのぢやないが、然し、も一つ働きを見せて貰ひたいといふ要求はあるのだ。君も折角馴れた所を動かせられるのも面白くあるまいからね。』

『働きを見せるといひますと？』

『實はだね。先き頃からかういふ話があるのだ。これは嚴重にこゝだけの話だが、こつちの管轄のX新聞が近頃は益々觀察を要する狀態になつて來たのでね。それで誰れかを記者になつて入り込ませることになつてゐるのだが、さて適任がないのだ。といつてうつかり素人に手をつけて、ばれた日には、新聞社のことだから只では濟まないしな。やつぱり大びらに、警官をやめて新聞記者になりたいといふことで入つて行かにやならんし、それには高等係なんかでは自然疑はれる虞もあるし、一寸人選が六かしいのだ。』

『私がそれに向き相ですか知ら。』

山屋は、早くも平尾の目的を察して、飛んでもない役目を仰せつかつたものだと思つたが、そんな役目――や﹅重大相にも思はれる――をふり向けられたといふことに、多少の誇りを感じない譯に行かなかつた。

『さあ、君に警官には適せぬ所もあるが、われ／＼の方から新聞記者

を出すといふ段になると、勢ひ君に目をつけることになるね。君には一寸さういふ點があるのだ。』

『でさうだとすると何うすればいゝのです？』

『さあ、まあ一時さういふ諒解の下に、辭職するのだね。然し、向ふへ就職運動をするには、却つて就任のまゝの方がいゝと思ふから、辭表を出すのは、向ふの話が纏つてからがいゝのだよ。すべて君自身の內密の運動といふことにしてね。先づ署で懇意にしてゐるあすこの記者を通じて秘かに樣子をきいて見るのだね。』

そんな話のあつてから一月程經つて、山屋はX新聞の社會部記者の紹介で、社會部長のYの私宅を訪問することになつた。

馬鹿々々しさに腹も立つが、何しろ免職をもつて強迫された以上は、事生死に關するので、多少眞劍の氣分にもなつて出掛けた。途中で手土產としていちごの折を買つて行つて、恭々しくそれと差し出して萬事筋書の通りを述べ立てた。

Yはたゞ、さういふ希望ならば皆と相談して置くといふだけで外のことは何もいはず、たゞ警察の經驗が少しでも役に立つだらうといふ意見が多かつたら採用されるかも知れないがといふやうな、どちらかといへば體のいゝ斷りとしか受けとれないことをきかされた。

四五日たつとYのところから小包郵便が屆いた。何を送つて來たのだらう、採用の通知がまさか小包では來まいが、と思つて開いて見たら、自分のもつて行つた手土產のいちごの折がそのまゝに出て來た。中味はもうすつかり腐つてひどい臭氣を放つた。

山屋はハッと思つた。第一節に失敗した以上け、もうとても望みはない、とがつかりしてしまつた。新聞記者になれないことに落膽したのではない。鼻の先にちらついてゐる論旨に脅びへたのだ。

これをそのまゝ平尾に報告したら、鼻の先にちらついてゐるものがすぐと鼻の頭に噛みつくに違ひないと思つたので、平尾には依然として有望のやうに報告して置いた。

が一月たつても二月たつても、何の消息もなかつた。その筈だと山屋は思つたが、平尾からの時々の催促に對して、返事に窮した。で內々知人のゐる保險會社に口をかけたり、下の車屋の亭主に賴んで出入りの病院の事務員に口をかけたり、いろ〳〵手を盡くしたが、新聞社同樣反應がなかつた。

すると突然署に出入りのX新聞の記者からその私宅に呼ばれたので、行つて見ると、社命ではないが、役所で云へば顧といふやうな資格で、市內通信員といふものになつてくれないかといふことであつた。

山屋は二つ返事で承知して、更らに社で部長に逢つて愈採用といふことになつて、ホッとした。

山屋は、うれしさの餘りYに向つていつに似ずペラ〳〵喋舌てゐるうちに、餘計なことまで口走つてしまつた。

『實に警官が現任のまゝ新聞社なんかに御願すると、スパイの疑ひをうける向などもあるかと思つて、大に遠慮して居りましたやうな譯で、それがために御願のしはなしで誠に御無禮をいたしました。』

するとYはこんなことをいつた。

『新聞社なんかも、昔は何か新聞以外の目的をもつた陰謀家の集りだ

つたり、さういふ團體の機關だつたりしたこともあるから、新聞社そのものが秘密結社のやうなものであつたこともあるが、今日の新聞社は會社や銀行と同じで、財政は株式、目的は營利で、仕事はすつかり事務的になつてゐる。その高等政策なるものも昔のやうな陰謀的のものではなく、全く商業的のものだから、秘密といつたつて商略上の秘密位のものだ。財政なんかも今では怪しげの新聞を除けば皆公開の出來るやうになつてゐて、不正のある場合の外に秘密なんかはない。不正のある新聞は資本の薄弱な、存在理由が犯罪的の新聞だけで、營利新聞は、イギリスの商人と同じく、不正をしないことが商略上の利益になつてゐるのだから、堂々たる大資本の新聞は、下らぬ秘密をもてば却つて損をすることになつてゐる。だから、悧巧ならば不正や秘密は出來るだけ避ける。警察のスパイなんか入つて來たつて探るべき秘密なんかはありやしない。寧ろ新聞社自身の知らない、記者の個人的の秘密でも探つて警察や社に報告したら、警察のためにも新聞社のためにも利益だらう。今の大新聞社に秘密があるとすれば、それは、新聞社自身の知り得ない社內の秘密だらう。然しそんな秘密は新聞社內部の人よりも社外の人の方がよく知つてゐる。知らぬは亭主ばかりなりだ。だから警察のスパイなんかは、新聞社の知らない秘密を社に知らせてくれることは出來るが、警察の知りたい秘密を警察へ知らせる事は出來ないに定まつてゐる。警察のスパイなんかいくら入つて來ても新聞社ぢやちつとも構やしない。寧ろ同業者のスパイの方を恐れるだらう。だが、新聞社にも隨分變な自惚れがあつて、恐ろしい秘密をもつてゐると思はれるのが新聞の威力を增しでもするやうに考へて、ありもしない秘密を、自分でもつてゐるやうに錯覺して、內部を知れるのを大變に恐れるのだ。豪い人と思はれやうとすると、成るべく腹の中を人にわからせないやうにしやうと思ふのと同じさ。警察なんかは、その手に乘つて、新聞社を何かたいした秘密の塊のやうに買ひかぶつてゐるのだ。人を見たら泥棒と思ふ警察心理の錯覺だ。君も社に入つて來て、自分の目の屆かない所に、たいした秘密があると思つたら間違ひだが、さう間違はないと、自尊心をもつた新聞記者にはなれないかも知れない。威力といふものを神秘的のものと思ふと、秘密のない所には威力もないといふことになるものだから、多くの人はありもせぬ自分の威力を誇示するために、大なる秘密をもつてゐるやうな顏をするが、つひに自分自身もさういふ錯覺を起すのだ。その意味では新聞社も大なる『秘密』だ。然しそんな秘密はスパイがいくら嗅ぎ出さうとしても嗅ぎ出せやしないよ。』

山屋には、Yのいふ事が、あつちへ飛びこつちへ飛ぶ鼻の先の蠅のやうで、要領をつかまへることが出來なかつた。要するに、俺がスパイだといふことを知りぬいてゐるやうにも思はれるが、俺がスパイであるかないかこのYが知つてゐる筈はない。これも要するに、それを知りぬいてゐるやうに見せかけて『威力』を示さうとしてゐるのかも知れない。と山屋は、今Yの講釋によつて、これにも何の秘密はないと判斷した。がこのYの話も報告の材料の一つだらうと考へた。

社に出勤するやうになつても、誰れも自分をスパイだと思つてゐるものはないらしく、少しも警戒なんかされてゐるとは思へないので安心したが、それだけ山屋は、さういふ人々の內情や活動を聞き出した

り、社の組織や政策やを、たとへそれはYにいはれたやうに秘密でもなんでもないにしても、材料として警察に提供するのがつらくもあり、馬鹿らしくもあり、何の必要でそんなことをせねばならないのかわからなかつた。

その上氣にすまないことは、新聞社に入つてからも警察からは時に手當として今まで通りの額を支給されるといふことだ。新聞社からも警察と同じ位の收入を與へられてゐるので、急に倍額に昇給したと同じだ。それは恐らく何を何うされたよりも嬉しいことだが、新聞社の人達と馴染になるに從つて、それが山屋の氣を重くした。

新聞社は警察とはまるで違つて、上官も何もなく多くの人達から友達扱ひにされて、こつちは出來るだけその人達に敬意を拂うと思つても、その方法もなく、そんなことをすると却つてまづくなる位なので、隨分勿體ないやうにも思つた。でそれを古い記者生活をした社員にいふと、その人は笑つて彼にいつた。

『これでも君等はそんなに思ふのかい？僕等は新聞社が官僚的になつたのに驚いてゐるのだよ。何しろ新聞社に重役だの局長だのつてものがあつて自動車で通勤する時代になつたのだからね。元は、第一『社長』だの局長だのつて呼ぶものなんかありやしない、社長だらうが何だらうが皆『何さん』と名前を呼んだものだよ。風采態度だつて、新聞記者といふと野趣滿々たるものでね、まづ今日でいへば『主義者』といふ形だね。それで大臣だらうが、何だらうが、此方では友達のやうに心得てゐたものだ。今の新聞記者のやうに、そのまゝホテルのボーイに間に合ふやうな恰好をした記者なんかは新聞の外には見當らなかつたものだよ。新聞記者も新しいのははやゝ綺麗なのもあつたがね。何うして君、今の新聞社と昔の新聞社とでは、まるで淀川の三十石と天洋丸ほどの違ひだよ。外觀もさうだが、中の人間までも勿論のことだ。然し三等客と來たら今だに三十石以下の乘り手だがね。』

山屋は、新聞社の仕事に馴れるに從つて、警察への報告は怠り勝ちになつた。それをする時には、いひやうのない不快を感じて氣のすゝまぬこと甚だしかつた。

そんな風で早くも一年餘りになつた。

『大分怠けるぢやないか。』

平尾は、山屋が久しぶりで彼れの私宅を訪ねた時に、そんなことをいつた。

『いや大に勉強してゐるのです。』

『向ふの仕事をだらう。』

『さうです。』

平尾は苦がい顏をして笑つた。がその時は、山屋はもう、きつぱり警察の方を斷つて、眞面目に新聞社の人にならうと考へてゐたので、それを切り出した。

『私はお願ひがあるのです。』

『わかつてゐるよ、警察の方をやめて新聞記者にならうといふのだらう。』

山屋は面喰つて吃つた。

『ど、どうしてそれを御存知でした。』

『そんなことを僕が知らんでゐると思ふのかね。君も案外素人だね。』

山屋は驚いた。山屋のさういふ覺悟は最近に定めたのであつて、無論平尾の外の誰れにもいふべきことではないので、まだ口外したことは斷じてないのに、どうしてそれを平尾が知つてゐるか全く不思議であつた。

『私はこの事はまだ誰れにも申したことはなく、無論人に申すべき筋のものではないので……』

『まあ、そんなことは何うでもいゝさ。』

平尾は、山屋の言葉を押しかぶせて、

『然し、君に元來何ういふことから新聞社へ行くことになつたと思つてゐるのかね?』

『それはあなたに命ぜられた譯ですが……』

『さうだらう。それだのに僕の方を後足で砂にするといふのは少しひどいだらうぜ。』

・山屋はさういはれゝばそんな氣もして返事に窮した。といつてこのまゝ續けて行くのは何うしても耐へきれない。

『でもこのまゝかういふ仕事をつゞけるのはあんまり……あんまり……』

『あんまり……』

『あんまり……あんまり……』

『あんまり……?』

山屋はその次ぎの言葉が見出せないので眞赤になつて仰向いた。

『成る程。あんまり……不道德だとか、良心に反くとかいふのだらう。』

平尾にさういはれて、山屋はほつとして云つた。

『えゝ、全くさうなんです。』

『あつはつは。』

平尾は大きく笑つて何もいはなかつた。山屋は少し腹が立つて眞赤な顏をあげてムキになつていつた。

『をかしいですか。』

『をかしいね。何うしてッたつて君、さうぢやないか、そんなことは君に此仕事を頼む時によくお互に話し合つて君もわかつてゐたのぢやないか。警察官の良心は、個人や社會や、そんな小さ過ぎたり大き過ぎたりするものを標準としないで、明確に『國家』的生存といふ目的にあるのだといふ事位、君が警官になる時によくわかつてゐた筈ぢやないか。國家を最高目的に置いて、それがためには、小さな道德や良心や、又大き過ぎる道德や良心やを犧牲とすることは、國家の役人全體の心掛けぢやないか。敢て警察官のみには限らんさ。國家はあの新聞社について大に監視を要することを認めたから、君がその重要な仕事を擔任するといふことになつてゐるのに、何で良心に反くのだね。中途から裏切して、新聞社の方へ寢返りをうつのはちつとも良心に反かんといふのかね。便利な良心もあつたものだね。』

さういはれると山屋は、返す言葉もなかつた。平尾のいふ理窟に感服が出來ないなら、初めに此仕事を斷るべきであつた。然し、それは理窟で、あの時は、それを受負はなければ諭旨を喰ふといふので、良心なんかは問題ではなく、喰うか喰はぬかゞ問題だつたのだ、でいや

聽をいつてゐることは出來なかつたのだ。然し、月々の收入が倍になり、一方をやめても生きるに差支ないとなれば、無論、そんな仕事を斷りたくなるのは當然だと、いつてもやりたいが、今平尾にそんなことをいふ譯にも行かず。といつてその外にいひ得る言葉も發見されない。又この際屈服すれば、いつまでも此苦しい思ひをつゞけなければならないことになるので、それを思ふと遠慮しては居られない。

『でもあの時はそれをやらなければ免職でもさせられ相だつたので、もう失業にはこりごりしてゐるのでつひ苦しまぎれに……』

『まあ待ち給へ。』平尾は薄氣味のわるい笑顏を見せながら『今ならそんなことをいつても失職の虞れはないと思つてゐるのかね。隨分蟲がいゝね。』

『こちらの方をやめさせていたゞければ。新聞社の方だけで……』

『おいおい。さう警察を甘く見てくれては困るよ。君も警察の飯を喰つた人間ぢやないか。今君がこつちをやめて新聞社の人間になるとすると、僕の方ぢや、君を向ふ方の人と見る外はあるまい。すると、今日まで君に打ち明けた警察の秘密が十分に保てやうとは僕の方では考へられないよ。よいかね。で此方では防衞上相當の手段をとらねばならないのは當然ぢやないか。』

『でどうなさらうといふのです？』

『何うするかわからんさ。又それを今君に說明する必要はないさ。さうなりや君はあつちの人なんだからね。然しだ、君がいゝ氣になつてX新聞の記者でございといつてゐられなくなることだけは確かだね。』

いかにもそれは山屋にも確からしく思はれた。彼れは泣きたくなつた。

『まあ君、惡いことはいはん。そんな山氣を起さんで、從前通りやつてくれたまへ。收入の點からいつても、われわれ以上で、僕等は大に羨んでゐるのだよ。さうしてとにかく、一廉の重要な仕事をしてゐるのだし、結構な身分ぢやないか。こちらの方ぢや君の成績は大に認めてゐたんだからね、怠けてくれさへしなければちつとも文句はないんだよ。』

山屋は、鉛を澤山御馳走になつたやうな氣分で宿に歸つた。それ以來、彼れは社の仕事をする時には、警察官として新聞社を欺いてゐるやうな氣がし、警察の仕事をしてゐる時には、新聞記者として警察を欺いてゐるやうな氣がして、どつちも犯罪を行つてゐるとしか思はれないのだつた。といつて、どつちか一方に片づければ、どつちに行つても失業者にならねばならない。

とうとう彼れは猛烈な神經衰弱にかゝつて、電車に乘るのも苦しいやうになつた。社の自動車で飛び廻ると、自分が死んだやうに靜かで、兩側の家が飛び上つたり落ち込んだりした。原稿をかけば、加害者と被害者とが一行毎に交代してゐた。Yの顏を見るだけで全身が汗でぐつしよりになつた。彼は、つひに夜勤の晩に社で卒倒して、宿に送り返へされた。

それ以來床についたが兩方の仕事を離れてゐると、段々頭も輕くなつた。が此の上今の仕事に立ち返るのは命にかゝわることなので、今度は新聞社の方をやめることに決心して、平尾にそれを手紙で相談したら、病氣のためなら仕方がなからう。新聞社をやめて身體が回復し

たら又こちらで採用するやうに取計らうから、安心して養生しろといふ返事であつた。で早速社のY氏に宛て、辭表を出した。

　すると翌日、新聞社の卅年勤續の記者で、彼れの屬する部の世話役をつとめてゐる老人がやつて來て、Yからの傳言だといつて、病氣といふ理由でやめることは社では絶對にしないことだから、半年でも一年でもゆつくり療治をするやうにといふことであつた。

　山屋は面喰つた。社に居るといふことが病氣の原因なのだから、半年ゐれば半年、一年居れば一年病氣がつゞく理屈だが、それをいふ譯には行かないので、たゞ汗をかいて恐縮してゐた。

　一月ほどはそのまゝに經過したが、社からは何の通知もある筈はなかつた。で彼れは、更らに何うしても辭職せねば病氣は療らぬ故助けると思つて辭職を許してくれるやうにといふ意味の手紙をYに出した。

　するとまた老人が見へたが、Yは、神經衰弱のこと故、或は社をやめぬと療らぬといふこともあるかも知れないから、一先づ辭職を認めるが、回復したら何時でも又採用するからといふことであつた。さうして老人はつけ加へた。

『うちの大將は、肝癪もちで、無病健全のものが少し惡いことでもすると、猛烈に怒鳴つたり、遠慮なく首をきるので「牛キチ」といふ綽名がある位だが、病氣と老年といふ理由では何うしても辭職をきかないのだよ。私も、年もとつてゐるし、先の部長には義理もあるし、部長の代つた時にやめやうと思つて申出したが、何うしてもきゝいれないので、今だに何もせずに月給だけ貰つてゐるのだがね。まあうちの新聞社のいゝ所はその位のことだらうよ。』

老人と病人にとつては、老年と病氣といふ理由では決してやめさせぬといふ所程『いゝ所』はないに違ひない。

　それをきいた山屋は、さういふいゝ人達を欺いてゐたのが全く濟まないと思つた。さうして、老人が差し出した見舞の品と退社手當の金一封とを見た時には、涙が止度なく流れた。

　山屋が全快して再び警察に戻ることゝなつた時には、彼は高等係に採用された。警察に適しないといはれたに拘らず、前よりもいゝ地位が與へられたので、山屋は譯のわからないこともあるものだと思つたが、嬉しかつたので、外のことは考へもしなかつた。

　その後程經て電車の中でYに出會つた。

『又警察に出てゐる相だね。』

『ハッ。』

　山屋は面喰つて直立不動の姿勢でさういつた時に、漸くかゝないやうになつた大汗をかいた。

地妖（3）

三上於菟吉
木村莊八畫

菊枝平助向島に逢ふ事

「さう、今日こそ元氣を出しておくれ。ね、菊枝。私が髮を上げてやるから、鏡臺を明るい方へ持ち出すがいいよ。」

ある晴れた朝、清乃は妹に話しかけた。

不幸な姉妹の胸の中は相變らず暗く澱んでゐたが、いつか世の中は初夏だつた。白い明るい光が空に漲つて、ほの青い微風が限りないさはやかさをこのやうな裏町の裏家の軒にも吹いてゐた。

「ねえ、めつきり夏めいたではないの。昨日河岸を通つたら、柳があんまり青々としてしまつたので驚きました。ほんたうに月日といふものは夢のやうに經つて行くもの。叔父上がおなくなりになつてから、いつの間にかもう五十日——中陰もおとゝひ過ぎてしまつた。ね、元氣をお出し。私たちはいつまでも愚圖ついてゐるわけにはいかないのだよ。」

大さう町家風な唐棧がかつた縞ものの袷が、すらりとした體姿によく似合つた清乃は、妹の菊枝が次の小間の片隅に、ぐつたりとうなだれつづけてゐるのを横目に見ると、自分でトツトと髮結ひの道具を椽端に持ち出して來た。

「さあ、おいで——もう一晌もすると港屋から迎ひが見えるかも知れないから——髮がすんだらすぐお湯に行つて來なければ——」

それでも菊枝はうなだれてゐた。一さう身がほそつて、顏いろさへ蠟のやうに透きとほるやうになつた彼女は、まるで重い病ひの床を離れたばかりの病後の女としか見えなかつた。

姉は窶れ果てたそのすがたをじつと見て、ホツとかすかな吐息をついたが、しかしその氣弱さを押しかくすと、いかつくさへ思はれる表情になつて、ツカ〳〵と歩み近づいて膝を突き合せるやうに坐つた。

「これ菊枝。お前は見そこねた人だねえ」

愚直にみつめてひと言。

ハツとしたやうに菊枝は顏を上げたが、あまりに激しい姉の瞳に出逢うと、すぐにまたガツクリと目を伏せる。

「菊枝。お前は叔父さまの位牌の前で、抱き合つて誓つた言葉を、もう忘れておしまひかい？　あの清吉さんの死に様を、私が源太船頭の口から聴き出した晩のことをお忘れか――あの晩だつて、どんなに私が謀略をめぐらしたからつて、亡き父上母上、叔父さまの冥途からのお力添ひがなかつたら、どうしてあの怖ろしい秘密を打明けさせることが出來たらう。それなのに、私にばかりヤキモキさせて、お前はいつまで經つても、ぼんやりと哭いてばかり。それでも武士の種に生れたお前かい。菊枝。清吉さんを殺した敵をつい目と鼻のさきに生かして置いて、よくまアそんなにメソ〳〵してばかりゐられるね？」

　すると、菊枝はかなしげな微笑を見せて、

「そんなにおつしやらないでも――お姉さま――決心は、私だつてとうにつけてゐるのです。たゞいろ〳〵考へてゐますの――いろ〳〵なことを――」

「まア。その考へといふのはどんななの？　何を考へておいでなの。」

　と、姉もいくらか機嫌を直す。

「お姉さまは何ごとにも思ひ立てばぐんぐん進んで行く御氣性だから何だけど、私はこんな愚圖ですからちやあんと思案をきめてからでないと駄目なのです。」

　と、菊枝は案外雄辯につゞけた。

「あなたは思ひ立つた以上は、一刻も早く望みを遂げやうとなさいます。お父さま、お母さま、清吉さんのかたきまで、一度に打つてしまはうとなさいますけど、私はたゞあの人達に近づいて、いのちを取つてやつただけでは、滿足が出來ません――私はもつと奥まで考へてゐるのですよ。」

　やさしい花には思ひがけない毒の蜜が含まれてあつた。清野はしげ〳〵と妹を眺めて、

「もつと奥といふのは？　さあ、話しておくれ。」

「百目鬼玄蕃や湊屋の息子、源太船頭を殺しただけでは、私にはがまんが出來ません。私は百目鬼一家、湊屋一類を、すつかり沒落させてやらなければ死ねない氣がします。」

　清野は怪しくかゞやく目で、菊枝の兩手を握りしめた

「あゝ、それでこそ妹だ。くよ〳〵考へ込んでばかりゐると思つてゐたが、それならそこまで思ひ詰めてゐたのかい？　勿論そこまで行けば、私たちも滿足して目が瞑れる。町人には富が生命、武家には家名が生命、一度恨んだからには、それをすつかり奪はなければ――お前もそこまで考へつめてゐてくれゝば、私もどんなに嬉しいか知れやしない――」

「だから、お姉さま、決して事をおいそぎなさいますな。」

「ええ、私だとて知つてゐる。髓の髓まで食ひ入つて、幹も、枝も、葉も、すつかり枯らしてやらなければ――さあ、菊枝、こつちへおいで。一世の大望のかど出の今日です。心をこめて、私の手で、美くしく美しく、お前を飾つて上げませう。」

──一晌あまりたつて、港屋からの迎ひに源太船頭が自分で見えたころには、姉妹はもうすつかり化粧、着更へをすましてゐた。恥知らずな人達が、此の世に何の頼るべくもなく殘された二人の魂を買はうとして、言はゞ商ひの手つけのつもりで贈つて來た黄金で、彼女たちは華美な衣裳、髪かざり一切を惜しげもなくとゝのへたもので、姉は意氣ごのみに、妹は上品に、飽迄飾り立てることが出來た。黒髪を裝ふたいまい、珊瑚、身にまとふ綾、綴錦、友禪、緞子、二人に取つてはどんに重たく悩ましかつたらう。だが、よそほひを凝らした二人のすがたは、どんな男の魂を奪ふにも十分に見えた。

源太船頭は、さうした姉妹を一目見て、淫らにうつとりした。

「おお、すつかり仕度が出來ましたね。お二人ともすばらしい美しさだ。」

と、ニヤリとして見入つたが、

「お仕度が出來てゐれば、すぐにお供をしよう。港屋の若旦那は、とうに向島の寮でお待ち兼ねです。」

二人は源太の導くままに、細い露地を出て、待つてゐたかごに乗り移る。

──それは地位か黄金かに依ればいかなる暴慢も許され、貧しく乏しいものは、たゞ諦めと涙で生きなければならないやうな時代だつた。ことさら、泰平が長くつゞいたあと市井はまさに殷賑の絶頂に立つてゐた。最上級の武士さへ町人の豪華と競ふためにだんだん資源を失つて、うはべはどこまでも格式はりながら、内輪は火の車で援助を商賈に仰がねばならず、金權が武威をすら壓迫してゐた。

だから、物持、町人の増上慢はとめどもなかつた。家屋敷の廣大さ暮し向きの贅りはもとより、角力、役者の贔屓にまで派手を爭ひ、美女、美童のかず〳〵を揃へ、淫逸奇癖の限りをつくして、人もわれも尤めもせねば恥ぢもせなんだ。

油堀、港屋もその例しに洩れぬ。去年向島三圍りの附近に數寄をこらして建てた寮は、普請、木口、調度のたぐひに善美をつくし、庭園のながめは比べやうもないと言はれた。

今は初夏新緑の季節──池の汀に山吹が咲きみだれ、匂はしい風が、みどりの茂みのひまに、臈たけた白藤の花房が吹きなびけてゐる。

三挺のかごは意氣なかぶき門をそのままはひつて、枝折戸の前でとまる。

「さあ、お下りなせい。お二人。」

源太船頭はまづ下りて、姉妹を庭の方へ導びく。悪びれもせぬ二人は、打水がすが〳〵しく濕らした飛石を輕く踏んで、わざと今日の出逢ひのために選んだらしい離れの方へ出迎への年增女中がいざなふままに跟いて行つた。

「何と、豪勢なお庭でせう？　あの築山のかげに咲いてゐる椿は、きね川の天源寺にあつたのを、五十人も人夫がかかつて、やつと曳いて

來たものなんでさあ。それからあの石は、京力――何でも名高けえお庭から移したといふが、一石千兩だつて話さ。いやもう、世の中は金のことだね。なアに、尤も、こんなことで驚くにやああたらねえ。港屋さんの御威勢なら琵琶湖、富士山、渦ぐるみ、山ぐるみお庭へ持つて來ようと思へば來られるのさ。」

源太船頭が誇つて言ふ。

清乃はさも心からのやうに、吐息をした。

「ほんたうに美しいお庭ですこと！　青葉の匂ひが何とも言へずすがくしうございますわ。」

池をめぐつて、瀟洒な離れ家。

港屋若主人平助は、待ちくたびれたか、一間の床前に、小綺麗な小間使に酌をさせて、もう目の下をぼうと染めてゐた。

平助はみにくい男ではなかつた。遊び場といふ遊び場で、大盡風も吹かし抜いた若者で、結城好みの着つけ、茶献上の帶、髮の結ひぶりにもソツはないのだが、付目や口元、頸のあたりに我執の强さがあらはれて、品はない。

姉妹がやつて來た氣配を知ると、さすがにあぐらにしてゐたのを坐りなほして、ニタリとした。

源太はは いるなり、これも主じと目を見合せて賤しく笑つて、

「やつとお連れ申しましたよ。」

と、うしろを振り返つて、

「さあ、お二人、遠慮なさることはねえ。ずつとお通り。」

清乃と菊枝はしとやかに手を突いた。

「やあ、御丁寧な御挨拶では、私が困ります。」

と、平助は手を振つて、

「こつちこそスッカリ内輪同志のつもりになつて、こんな席へお通し申して――これこの膳を下げるがいい。」

と、小間使に言ふのを、清乃はあざやかに微笑んで押し止めた。

「どうぞ、そのままに遊はして下さいまし。私の方こそ、お招ぎとは言へ、折角のおくつろぎのお邪魔をしてはすみませぬ。」

「なアに、若旦那は酒飲みといふわけでもねえ。」

と、船頭はあざ笑ふやうに無遠慮に言葉をはさんで、

「あんまりお二人が遲いから、な、それヤケで上つていらしつたんでせう。旦那、お流れが頂戴したいもんで――何しろ、大事の使をすましたら、すつかり咽喉が乾いてしまつた。」

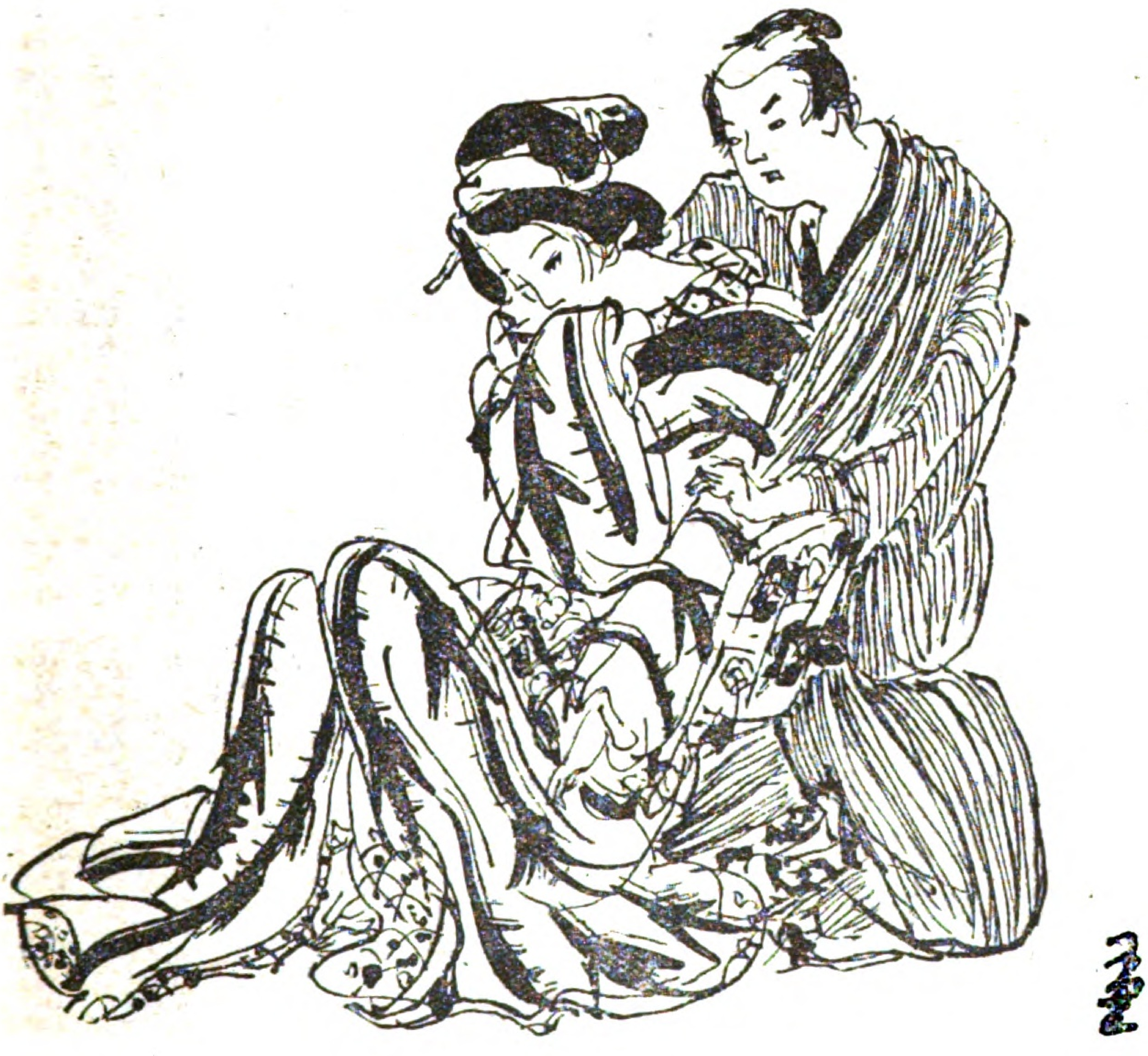
盃がそのまま廻る。

姉のかげに、藤いろの、振りの長い袂を膝に重ねるやうに伏し目ながらじつと平助をみつめる菊枝――その日こそ――その視線が鉄だつたら、憎らしい人を殺させた、人鬼のいのちを一目で取つてしまつたらうが、さうした氣持は氣がつかぬ源太船頭は、場知らずに煽り立てる。

「ねえ、菊枝さん、何も氣兼ねはねえぜ、もつと若旦那の側へお寄んなせい。何ごともザックバランに限るのさ。は、は、若旦那は美男の得

だね。さつきから、菊枝さんが若旦那の顔ばかり見てゐなさる。」
清乃は苦もなく明るく笑つた。
「まあ、お船頭、若い娘をそんな風におなぶんなさるものではありませんよ。菊枝もそんなに引込んでゐては却つて失禮です。」
平助は今度は盃を菊枝にさして、
「菊枝さんとも、これまでゆつくりお目にかかつたこともなかつたが、さあ、これから仲善しのさかづきに、ひとつ受けて貰ひたいね。」
「菊枝、きよくお受けしてお返しなさいな。」
と、清乃は妹の盃になみ〳〵と酌をして、
「天にも地にも、身よりもたよりもない私たち、港屋の若旦那のこんな御深切を無にしては濟みませんよ。ねえ若旦那、どうぞ今後とも、女中ともはしためとも思し召して、この娘をかあいがつてやつて下さいまし。」
「こつちからこそお願ひだ。私も港屋のあと取り、出來るだけのことはしますから安心して下さい。おや、有難う。よく菊枝さん。飲んでくれたね。」
菊枝から受けた盃を、さも滿足げに平助はかたむける。
「かうして若旦那と菊枝さんが、並んだ姿はお雛さまだ。」
と、源太は盛んに太皷を叩いた。
「それにしても菊枝さんも日本一の仕合者だ。大河すじで一と言はれる、港屋の若旦那に妹のやうに大事にされるなんテ。お後取りとは言ふものの、もうお當主も同じこと。大旦那は長がの中氣の病ひで、おもてのことには御口入もねえ——若旦那が天下さまだ。お二人もその積りで、御機嫌をそこねちやいけねえぜ。」
と、言葉つきもぞんざいになるのを、平助はわざとらしく眉をひそめて
「何を言ふのだ、お客人に失禮な。一たいすぐに醉ッぱらつて、クド〳〵言ひ出すのがお前のきずだ。それよりも清乃さんをお連れして、庭でもお見せ申すがよい。私は菊枝さんに、お茶を立てていたゞきたいから——」
清乃は唇を歪めて微笑んで、
「ほんにそれがようございませう。私も御酒をいたゞいたせいか、少しのぼせてなりませぬ。お庭を歩かせていたゞきます。それでは、菊枝、若旦那のおつしやる通り——」
妹と複雜な瞳をかはして、清乃が船頭と庭に去ると、あとは平助と菊枝だけ——
釜の前に、爐の炭を直さうと坐らうとする菊枝を、平助は呼び止めて、
「菊枝さん、まア、茶はあとでいい、ちよいとこつちへ。」
二人だけになると、今まで包んでゐた淫逸な性根を、すつかりあらはした平助は、恥ちも無く振りから緋がこぼれる袂をつかんで、
「いつからかたつた一度でも、かうして二人で話したいと、待ち兼ね

てゐた時が來たのだ——ねえ、菊枝さん。」
菊枝は羞恥にたえぬやうに、片袖でそむけた顏をかくして、取られた袖を振りはなたうとしたが、強く引かれて、抗ふこともならずべたりと坐つて身をすくめる。
平助は口角と脣でニヤリ笑つた。やんはりと、圓みを帶びた、娘らしい肩へソツと手をかけて、うなだれたために深く肌があらはれ白い首すじに好色な瞳を吸はれながら、
「菊枝さん。」
菊枝の島田が艶やかに、かすかに動く。
「菊枝さん。」
と、いくらか強く肩に觸れて、
「お前は隨分情なしだね。どうして今まであんなにつれなくしてゐたのだい？。」
娘は消えもしてしまふやうに、片手を疊に屆くづれたまゝ答へもない。
「よう。きこえないのか、返事をおし。」
ゆさぶられて、かすかに、ひと言。
「あい。」
「おや、はじめて鶯の初音だね。」
と、平助は微笑して、そのまま引き寄せやうとするのを身を固くして相手は拒む
平助は呟くやうに、
「いやなのかね、私がそんなにきらひなのかね——そんならまた、何でわざく、今日こゝまで來てくれたのだ？」
「でも——」
と、娘はチラリと上目を男に送つた。
「でも、もうあなたは、私のことなんぞは、とうにお忘れあそばしてゐるに相違ないのですもの——」
「まあ、どうしてそんなことを言ふのだらう。」
平助は今の愛らしい流眄に、胸の底まで射拔かれたやうにゾッとして、
「お前を私が忘れてしまう？　そんなことがあるだらうか？　いゝえ。私は死んだつてお前のことだけは忘れない。」
白い細い手を、ソツと把つて、手の甲を男はさすつた。爪が貝のやうに光つて、美しい血の色がほの透いてゐる。
平助は、しばし默り込んで、じつと菊枝の横がほをのぞき込んでゐたが、荒々しい情念は抑へがたくかき立てられて行くのでつた。長い間淫樂の巷にさまよつて歩いて、さまざまな女の肌に觸れては來たが、それだけに優雅な、しとやかな、やはらかい感情や官能からは遠ざかつてゐた。遊女、藝者はどのやうに美しく悧發であるにしても、硬い、荒い、肌ざはりの冷たすぎる人形だつた。だが、こゝにゐる娘は、まだ生れて一度も、このからだに流れてゐる燃え易い血を、荒つ



ぼい男のだきしめに擾し濁らせたことがないのだ。彼はどんなにこの娘を清吉が戀したかを知つてゐる。清吉をこの娘も、どんなに戀したかを知つてゐる。だが、二人の仲が狂ほしくけがらはしい境にまで進んでゐないのは明かだつた。

――なアに、小さな胸の底で男を想ひつめだことがあつたつて、そんなことは、何でもありはしないんだ。心の中で思ひこがれるなんてこたあ、ほんの赤んぼの見る夢さ。俺といふものをよく知つて見るがいい。昔のことなんぞはすつかり忘れてしまふから――

たゞ、淫樂官能の世界ばかりに歡びを見出さうとするこの男は、心の問題をばすぐに輕蔑してしまつた。彼は菊枝が、まだどんな男のだきしめの中にあつたこともないといふことだけがうれしくてたまらなかつた。

彼の煩惱は淫に燃え狂つた。荒々しい息使になつて、瞳が熱つぽく濁つた。

「私はもうお前を歸さないよ。この寮から出しはしないよ。」

「菊枝は白い手先を、油ッこくニチヤ〳〵する男の掌に摑みしめられてゐるのに辛抱かなくなつたらしく、それを振り放さうとしたが、

「今でもつれなくするやうなら、今度こそ殺してしまう。」

と、平助が何氣なく言ふのを聽くとハッと、我れに返つて青ざめた。彼女はこの男の衛命で殺された清吉のすがたをハッキリと目にうかべた――さうだ、自分はどんな穢らはしさをも、いとはしさをも、恥ぢをも、辱きをも忘れてしまはねばならないのだつた。自分はもう人でもない、女でもない、たゞ執念妄執の毒蛇なのだ。皮肉に食ひ入り、内臓をかみやぶる毒蛇なのだ。

彼女はぐつたりと、身も心も力も失つたやうに、引き寄せられるままに、平助の膝にもたれるやうになつたが、

「だつて、あんまりお側へ寄つては、誰れかに見られると笑はれますわ。」

平助は頽れるやうに微笑した。全身は快樂を想ふ心で痺らされた。彼は片手を伸べると、少しばかり開いてゐた障子をピタリと閉めて、ぐいと兩手を娘の背にまはすやうにして、覗き込む。

「そら、これならいいだらう。」

娘はわざと顏をそむけた。

「でも、私には、どうしてもほんたうにすることが出來ないのですの。私のやうな仕方のないものを――」

「何が仕方がないだらう。どんなに私がお前のことばかり思ひつめてゐるか――」

平助はだん〳〵心底から、菊枝の美しさとしほらしさに惹きつけられてしまつたやうに、この娘の前ではその名を決して口にも出すまいと思つてゐた、清吉のことさへ言ひ出してしまふのだつた――

「お前はあんまりあの時分、清吉のことばかり思つてゐたから、私のことなんぞは顧らなかつたのだよ。文といふ文はやぶいてしまふし、

逢へば遠くから避けてしまふし――これも乾度、あの清吉がゐるためだらうと、どんなにあれを怨んだか知れはしない。だから、寧そ、あれが死んでしまつた時には、ほつと安心した位だ――おこつてはいけないぜ。あの男は私の見世で、一緒に大人くなつた男だもの、私もそれまでは主人目下といふよりも、友達のやうにしてゐたのだが、お前を見て戀風が身にしみてからは、あの男のことをさへ、さう思ふやうになつたといふ譬話さ。」

清吉の名を聴いても、もはや菊枝は顔色も動かさなかつた。

「清吉さんなんぞ――」

と、彼女はかすかに呟きさへした。幾らか唇がわなゝいたけれども――

「ふん、うまく言ふ娘だ。」

と、平助は、さも蕩児らしく含笑つた。

「清吉さんなんぞだつて――知つてゐるよ。あの男は、お前と夫婦やくそくまでしてゐたのだ。それを私に言つたことがあつたもの。

二人だけの秘密なさゝやきをさへ、そのまま傳へる程信じてゐた清吉を、それなのにこの男は殺させたのだ。

菊枝は一さうべつたりと男に凭れた。ああ莿物を、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、穢らはしいことだらう！　だが、かうして一歩一歩、この男を淺間しい墮道にひきずり込んでやれるとすれば、その呪はしさ、穢らはしさが、なんと快よく、悦ばしいことだらう！

菊枝は不可思議な快楽感に、殘虐好感にわれにもなく醉はされてゆくのだつた。

「そんなこと、あのひとが出鱈目を申したのですわ。私、いままで、一度だつて男の人の言ふことなんぞ本氣にしたことはありません。」

「で、そのお前が、私の言葉だけは本氣にしてくれるといふのか。」

平助は女性に對する經驗家であると自信してゐるだけ、却つてこのい、い、をぼこらしい娘の媚びに惹きつけられた。かうした可憐な娘に、人工的な、僞りな、反逆的でさへもある裝ひの媚びがあらうとは思ひもよらなかつた。

「私の言葉だけは信用してくれねばならぬ――ね、かためのしるしだよ。」

で、有頂天は二倍になつた。

更らに引き寄せて、唇を觸れようとするのを、ツイと娘は避けた。

「いゝえ。」

と、かぶりを振るやうにして、なまめかしく横目で眺めて、

「まだ駄目ですわ。」

「どうしてだらう？」

「でも、私だつて女ですもの。一時のもてあそびになさるのでは、それこそ殺されたつていやでございます。どんなに心の中で好きな方で

も、不信用な方なら、私、あきらめてしまひますわ。」
と、菊枝は言つて、じつと男をみつめるのだつた。
「不信用だと、まだお前は言ふのかい？　こんなにまで私が言つても——」
と、平助は呟いて、
「どうして私が。お前を一生見てるものか。死んだつてお前を放しはしないよ。」
「まア、そのお言葉がほんたうなら——」
と、娘はさも感動したやうにみつめつづけた。
「ほんたうとも——私はもう今日からこの寮を出しはしない。お前をこゝから出しはしない。そして折を見て、乾度夫婦になるつもりだ。港屋の御新造にするつもりだ。お前は武士の種だけれど、港屋は、私の口からはオカしいが、江戸でも指に折られる海產問屋、御新造と呼ばれても、お前だつて恥かしいこともあるまい——」
「それほどまでに、ほんとに思つて下さいますの。」
娘は男の手を強く握つて、深く〳〵うなだれた。
「ほんたうとも、私の言葉に嘘はない。」
男は娘を荒々しく、、。
閉め切られた部屋の中は、初なつの午後のなやましい蒸し暑さが澱みはじめた。（つづく）

今月は非常に短かいのです。京阪旅行後、心身困憊、且つ來客多く、いかんとも最後のメ切までに十分に書けませんでした。その代り來月は一ぱいに書くつもり。大方讀者、ならびに編輯者に諒恕を乞ふ。五月五日夕。作者。

明治文學とその人々

平凡化された漱石

高濱虚子

私の眼には大概の人が平凡な姿に映る。世の中の人は皆平凡な人であるかのやうに映る。大政治家とか、大文藝家とか、傑僧とか、哲人とか云はれるやうな人々にはあまり出合つたこともないが、出合つたところでそれらのえらい人の面影は十分に私の眼穴を透して腦裡に印象しないのかも知れない。私の眼がそれらの偉人傑士たる所以を十分に認め得ないのかも知れない。私は先づ自分を尤も平凡なる人間だと考へてゐる。多くの人の前にもさう云つた心地で自分を投げ出してゐる。自然私に接觸して來る多くの人々も私に對してはさういふ心地になるのかも知れない。偉人傑士と云はれる人々でも平凡な人間の一面を具有してゐることは爭はれない事實である。さればそれらの人々も平凡なる私に接觸するにはやはりその人の平凡なる一面を持出して來るのかも知れぬ。私だとて平凡でない一面を具有してをるかも知れない。然しながら私は少しもさういふ點を心にとめてゐない。私は平凡な人間であることに滿足を持つてをる。それは今に初まつたことではない。古い昔からその通りである。私は私の短篇集をあつめて出版する時分に始めは鷄頭と名づけた。鷄頭と名づけた意味はやはり平凡な庭の草花を意味するつもりであつた。尤も平凡な庭の草花のうちにも色々あるがその中に私はこの鷄頭を選んだ。それから又つゞいて出した私の短篇集には凡人と題した。これはいふまでもなく平凡な人間の平凡な著作であるといふ意味である。又その中に描かれたところのものも平凡な人間の斷片的記錄であるといふ意味であつた。されば私自身平凡なる一つの人間として胸を擴げて誰でも這つて來いといふ態度でゐた。だから私にぶつつかつて來るところの人もその特異なる偉人傑士といふ方面はしばらく陰にして、やはりその人たちの持つてをる平凡な方面を開け放しにして來るのでもあらう。又私の平凡觀があらゆる人々の言行動作を一様に平凡化してしまうのかも知れない。他の

多くの人々によつて偉人傑士とされるところの人々も私の眼から見るとそれほどにも思はれない。それらの人々もやはり平凡な一つの人間であつたかの如く考へられることが多い。先輩子規の如き又先輩夏目漱石の如きもそれである、（曾て「改造」紙上に子規の事を書いた時分に、子規居士といはずに子規といふた。其時陳べたのと同じ理由で漱石といふ。夏目さんとか漱石君とかいふ敬語をつかふ方が私と漱石との關係からいへば ふさはしいものがある。私は漱石には兄事してゐた。が今はそれらのことに關係なく氣輕い心持で漱石と呼ぶことにする。遠く世を去つた芭蕉とか近松とか云ふのと同じやうに。）

扨て漱石が「我輩は猫である」を書きはじめた頃の事をふりかへつて見る。その頃私はホト、ギスの編輯の暇があるごとによく漱石を訪ねた。何を話したかは少しも覺えないがフラ〳〵と出かけて行つて平凡な話をしてフラ〳〵と歸つて來たのに違ひない。その頃漱石居を訪ふ人はあまり多く無かつた樣に思ふ。遂ぞ私はほかの客に出逢つたことがなかつた。只寺田寅彦君が折々たづねて來る位のものであつた。その頃漱石は尤も機嫌の惡い時分で澁面をつくつてゐることが多かつた。妻君に物を言ふときも聲をとがらしていつた。いつか訪問した時分に漱石は椽端に坐つてじつと寒い風に吹き曝されてゐた。

「そんなところに居ては寒いでせう。」と私は言つた。漱石は笑ひもせずにがり切つた顔をして空を仰ぎながら、

「もう東風が吹いてゐるのですよ。」と答へた。まだ冬の眞中であつて寒い北風がピュウ〳〵と吹き荒んでゐる大空を見上げて東風が吹いてゐると云つた漱石の心は餘程興奮して平かでないことが想像せられた。が、しかしまた考へて見ると霜柱の立つてゐる大地の下にもう春のめぐみがきざしてゐることも事實である。春の花の盛りの裏には既に夏の茂みを隱してゐることも亦事實である。夏の炎天のうらには秋の新涼の氣の動いてゐることも亦事實である。そんなことを考へるとこの朔風の吹き荒んでゐる中にもう東風が吹いてゐるのであると觀じた漱石の言葉も亦無理がないものと思はれた。私はその後に突立つた儘

「さうですね。」と答へて逆らはなかつた。それから部屋に入つて何を話したかは少しも記憶して居ない。けれども膝を組んで二人とも他感のないことを談笑したことは略想像が出來る。その頃私は漱石から何ものをも得ようとするやうな考へはなかつた。漱石も亦もとより私から何ものをば得ようとするやうな考へはなかつた。二人は何の目的もなしに一時間か二時間を談笑に過すばかりであつた。漱石も私と談笑することが好きなやうに見えた、私も漱石と談笑することは愉快であつた。時には漱石の座右にたくさん積み並べてある書架の洋書の下に和書漢書の類が雜然と積み重ねてあつた。その中に埋れてゐる謠本をひき出して來て二人で謠ふたこともあつた。あとで聞くとその頃の漱石は生理的にもあまり丈夫と云ふではなかつたし又經濟的にも裕でない理由があつたさうである。が私は漱石のさやうな事がらに觸れるべくあまりに呑氣な心持で漱石に對してゐた、たゞ雜談をして歸り。謠をうたふて歸るといふその呑氣な態度であつた。漱石も私のもう歸らうといふのを引きとめた事もあつた。そしてもう一ばん謠をうたつた事もあつた。

或る日夏目夫人は漱石の居ないとき玄關に突つ立つてゐる私をつかまへて、

「高濱さん、ちと宅を引張り出して下さい。宅にゐると機嫌がわるくて手のつけやうがなくて困るのです。寺田さんにもたのんでおいたのですがあなたも時々何所かに引つ張り出して下さいな」と云つた。私はその理由をきかずたゞ、

「承知しました。」と答へた。

それから或る日漱石を訪ねて、妻君に約束した如く、先づ能樂の見物に誘つた。漱石はすぐ承知して私と共に表に出た。それは無雜作に私の誘ひに應じて出て來たのであるがその顏は頗る險惡であつた。それから玄關を下りかけた時分に突然鋭い聲をして叫ぶのをきいた。その言葉はたしか覺えてはゐないが

「羽子板を買へ！」といふやうなことがらであつたやうに思ふ。想像するに、

「子どもが羽子板をほしがつてゐるから、買つてやつて下さい。」と細君が云つたのに對し、

「そんなものは買ふに及ばぬ。」と虫の居どころの惡かつた漱石は頭から承知しなかつた。その結果多少のいさかひがあつたところへ私が能樂を觀に誘ひに行つたものでがなあらう。漱石が私のさそひに同じて表に出かける時分に「自分は能樂を觀に行くのである子供にも羽子板ぐらゐは買つてやるべきである。」と考へて言つたものであらう。併しながら肝癪の虫がまだ收まらなかつたので、帛を裂くやうな聲をなして破裂したやうに叫んだものであらう。或はそんなことではなくてもう少し何とかしたことがあつたのかもしれんが、私の例の平凡觀はこんな風に解釋して頭の中へ仕舞ひ込んでおいたのである。それから能樂を觀た漱石は大變に氣持が好ささうであつた。門を出て暫くの間無言でその險惡な相を續けてゐた人とは全く別人な樣な快適な顏になつてゐた。

私が訪問する度に漱石は憂鬱な樣子をしてその書齋の机に凭れてゐた。さうして私に膝を向けてボツボツと話した。私は多く用のない世間話に時を過したが又時には俳句の話をしたこともあつた。或る時この頃少し連句を硏究して見てをると云ふことを話した。漱石はすぐその連句について質問した。私は猿蓑の連句を例に引いて概略その說明を試みた。漱石はそれならばその連句といふものをつくつて見ようではないかと云つた。それから私はまたこの連句の形をして意味の一貫した俳體詩といふものを創めてみやうと思ふといふことを話した。漱石は言下に、それならば其俳體詩といふものを試みてみようと云つた。「尼」の一篇の三分の一位は突差の間に出來たものである。それから二回目か三回目かは私のゐないときに漱石一人で數章を脫稿してそれを私に送つて來た。

漱石の創作の萌芽はこの時已に萠してゐたものであらう。連句のことを云ひ、俳體詩のことを云つた私自身はそれほどまでに早急にやらうと云ふのでもなかつたが、炎々と燃え上らうとしてゐた漱石の創作熱に一個の罅隙を見出したのは將にこの連句俳體詩であつたといつてよからう。殊に「尼」の一篇の如きは狂想亂調殆んど拾收すべからざる概があつた。

それと殆んど前後してゞあつた。私は漱石に文章をつくつて見たらどうかと奬めてみた。

その頃私は四方太、鼠骨、左千夫、節など一しよに文章會を開いてゐた。それは毎月自作の文章を持ち寄つて朗讀して互に批評し合ふのであつた。その文章會に持つて行つて讀んでみるから、一つ漱石にも何か文章を作つて見てはどうかと云ふことを話した。それからその文章會の日になつて私は漱石の家に寄つて文章が出來てゐるかどうかを慥めた。大方出來てゐないであらうと想像したが、案外にも出來てゐた。出來てゐた許りで無く私の來るのを待つてゐるのであつた。それから。

「一つ讀んで見て與れませんか。」とのことであつた。私は作者の前で聲をあげてその一篇を朗讀した。漱石は他人の作をきいて鑑賞するやうに熱心に聞いてゐた。そしてをかしいところに到ると聲をあげて笑つた。朗讀してゐる私も覺えずフキ出さゞるを得ない場合があつた。これが「猫」の第一回である。續いて「倫敦塔」といふ文章が書かれて帝國文學の編輯者の手許まで送られた。

その日は朗讀に相當時間を費して文章會に出席するのが遲れた。私は早く出席しなければならぬと心急ぎがしたが漱石は愉快さうに私の朗讀を聽いて居つて時間のたつのも知らぬらしかつた。それからこの一篇の標題がまだきめてなかつた。「猫傳」としようか或は冒頭の一句の『我輩は猫である』といふのをとつて其まゝ標題としようかどうしたものであらうと私に相談をした。私は無論「吾輩は猫である」の方を取ると云つた。それから漱石にところ〲に冗文句と思はるゝものがあるのを削りとつても好いかと念を押した。漱石はどうでもして與れとの事であつた。その席上でも二三の文句は削り去ることをすゝめた。漱石は筆を執つてそこを削り去つたと記憶してゐる。

後の漱石は私がさう云ふことを云つても輕々しくは肯じなかつたであらう。殊に虞美人草を書くやうになつてから後の漱石は自分の原稿を消して書きなほすと云ふやうなこともしなかつた。一旦筆を下した以上は丁度相撲がとり組んだものゝ樣で、もう後には引けぬと云つてゐた。自分でも直すことを肯んじぬ位であるから、まして他人の言を聞いて抹殺するとか改刪するとかいふやうなことは容易承知しなかつたであらう。が始めて猫を書いた時分の漱石はまだそれほどに自信がなかつたので容易に私のいふ事を聞いた。そこで自宅に歸つて後に、私は作文書生の文章を點檢するやうな積りで、仔細にこの猫の文章を檢して無用の文句と思はれるものは削除してしまつた。私は今でも決して。無益の削除をしたものとは思はないこれが爲めに全體が引き締つてゐると思ふ。適當な削除を爲し得たものと思ふ。今でも少しも後悔するところはない。が猫の第二回以來は一躍して漱石が文壇の人となつたので私は謹んでさういふことはしなかつた。漱石の文章にはどちらかと云へば無駄が多い。剪採すべき部分が澤山そのまゝにしてあるやうな感じがする。吾が輩は猫であるの第一回と第二回以下とを仔細に讀みくらべて見たならば自ら明かになるであらう。

吾が輩は猫であるがホトヽギスに發表せられると同時に、倫敦塔が帝國文學誌上に發表せられた。天下の讀書子が立ち騷いだ。殊に大學の學生や卒業生の仲間が大學の教師がかゝる創作を爲したといふこと

に發表した。漱石は一躍して文壇の大家となつた　それから矢繼早に創作を試みた。

始め漱石は第一回きりで止めやうかとも云つた。或は二回以下續けて見やうかとも云つた。

「猫は續けて書かうかどうしやうか。かくのならば材料はいくらでもあるのですが……」と漱石は私に向つて云つた。私は無論つゞけて書くことを望んだ。第二篇が雜誌に出てから

「第三篇も書いて見やうか。」と漱石がまた私に向つて云つた。私は「書いて下さい。」と答へた。が第二回、第三回と重なるにつれて漱石の筆が多少蕪雜になつていくのを多少批難する聲は文章會の仲間のものゝ口から聞こえた。漱石はそれらに頓着なく興の赴くまゝに筆を驅つた。そして二回の時も私に朗讀さすことは一回の通りであつた。そうしてそれを聽きながら可笑しいところに至ることに嬉々として笑ふこともまた第一回のときの通りであつた。第三回のときも第四回のときもいつもそれは例になつてゐた。第二回以下のときに甚だしい冗文句と思はれるものに出くわすと、私は少し朗讀の聲を絕つて不興な顏をするのであつたが、漱石は最早それらのことに頓着することなしに早く次を朗讀することを促した。

また私も漱石の創作熱にあほられて多少の短篇を書いた。風流懺法や大內旅宿と題するものが出來たのはその頃であつた。漱石は極力さういふものを推稱して私に創作を續けることをすゝめた。

私の創作家たらんとする慾望は漱石などよりも大分古くからあつた。その爲にコツ／＼と寫生文といふものを研究して、今まで來つたのである。四方太、鼠骨の諸君と共に煉瓦を積み立てる樣な勞作をして今に至つたのである。其間に漱石といふやうな人が現はれて來た。多年築き上げて來た寫生文の上に忽ちに一夜にして樓閣を築き上げやうとするやうなことは嘗て思ひも寄らぬことであつた。寫生文にたいては遙かに漱石の先輩を以て任じて居つた私たちも、大河を決するが如き漱石の多年の蘊蓄を一時に傾け盡した創作熱には非常な刺激をうけたのであつた。しかしながら漱石の行る文章には飽きたらぬ節が多かつた。漱石の思想には、殊にその學問の蘊蓄には私等の及びもつかぬところであつたが、その文章だけを見ては私たちが多年練習して來た寫生文の眼から見て飽き足らぬ點が多かつた。私はときにそれを漱石に洩らしたこともあるが、其の後の漱石が殆んど耳に入れやうともしなかつた。てんで氣に止めやうともしなかつた。却て私たちを刺激して創作熱を煽り立てた。

それから後の漱石は前の陰鬱であつたのと反對に明るくなつた。私が訪問するたびに自分の原稿を讀んで私にきかした。又猫のときの如く私の朗讀を聽いて自ら快心の笑みを洩らすこともあつた。私も亦自分の原稿を漱石のところに持つて行つて朗讀した。

話しが少し前後するかも知れない。私の記憶が兎角時日の點に曖昧であるので、致し方がない。鈴木三重吉君とか野上彌生子さんなどの處女作を面いものだからホト、ギスに載せないかといつて私に勸めたのは猫が雜誌に載りはじめてから間もないことであつたやうに思ふ。

それから何日か訪問した席上でその鈴木三重吉君なる人にも出遇つた。續いて小宮豐隆、森田草平等の諸君にも出會するやうになつた。木

曜會と自然に吾々が呼ぶやうになつた、木曜の面會日にめい〳〵が文章を持ち寄つて漱石の許で朗讀し批評するやうになつたのもそれから間もないことであつたらう。とにかくもう面會日と云ふものが定まるやうになつたといふことが漱石を訪ねる人が多くなつて來たといふ證據である。その訪問客といふのも主として文科の學生たちであつた。されば漱石門が一時に榮えて賑かになつたのは、漱石の著作が世の中に出はじめてからであつた。漱石の書齋から洩れる談笑の聲が屋を搖がすとでも形容すべきほどの愉快な日が漱石をめぐる人々の間にあつたのはその頃からである。私もそれらの仲間にあつたことは事實であるが、しかし私が漱石と二人つきりで他愛のない話をして謠をうたつて半日を消した往時が何となくなつかしく思はれることもあつた。

　これより前私は國民新聞社に入つて國民文學欄を創設した。一年間ばかりやつてをるうちに朝日新聞にも朝日文藝欄といふものが出來て漱石が自ら之に當ることになつた。漱石は私に手紙をよこして決して國民文學に對抗するつもりではないのであるが、社の方ではじめたいといふから引受けたまでゞあるといふやうな意味のことを云つて來たやうに思ふ。

　又話しが前後したが漱石は大學を退いて朝日新聞社の聘に應じたのはそれより前のことである。そして朝日新聞入社以來その著作は全部朝日新聞に發表するからほかの雜誌に書くことは暫く斷るといふことを云つた。それはもとよりホトヽギスばかりではなく中央公論とか其他の雜誌に漱石の作をもう出さないといふことであつた。猫ももうズツと前に筆を止めて、完結したことになつてゐたし、其の後坊ちやん幻の楯、野分といふものをホトヽギスに發表して居つたが爾來筆を絶つことになつた。そしてホトヽギスには主として其の門下生の作を紹介した。大學の學生ばかりでなく、筆を執る青年は多く漱石の許に原稿を寄せて批評紹介を求める狀態であつた。漱石はその煩に絶えなかつたであらうが、しかしよく面倒を見てやつたやうである。漱石の手からホトヽギスに持ち込まれる原稿はなか〳〵分量の多いものであつた。しかも三重吉、彌生子當時の作よりもだん〳〵と下落して中には顏をしかめるものも多少交つてゐた。漱石の猫が出はじめてから一時ホトヽギスの部數は激增したが、しかし強いて漱石の著作を載せることをつとめもしなかつたので、好んで漱石其の他文壇の人々の作を載せることに熱心であつた中央公論などに讀者は移つていつて、ホトヽギスはやがて猫が出る以前の讀者に逆戻りをした。そして漱石の紹介する新進作家の作物は餘りホトヽギス從來の讀者に喜ばれなかつた。

　それは何時の頃であつたらうか、恐らく漱石が猫を書きはじめて間のないことであつたらう。忘れもしない私の宅の、其頃麹町富士見町の招魂社の裏かどに居つたのであるが、その宅の櫻が滿開の頃であつた。漱石が私の家を訪ねて來て二階に上つて談笑したことがあつた。誰かまだ漱石と共に二三人來て居つたやうに記憶するが、それが誰であつたかといふことは委しく記憶に殘つてゐない。鈴木三重吉君であらうか或は寺田寅彥君であつたらうか又は別人であつたらうか、はつきりと覺えてゐない。私かその頃好んで酒を飲んでゐた。客が來れば必ず酒を飲むのが常であつた。假令その人が下戸の客であらうとも、

自分一人醉ふて好い心持になるのが常であつた。この時も漱石に酒を出したものと見える。平生漱石はあまり酒を嗜んで飲まなかつたやうに覺えるか、この時はどうしたものか非常に好い機嫌になつて盃を重ねたらしい。私ももとより醉つたのである、何ごとを談笑したのか覺えてをらんが、無暗に好い心持になつて私はろくに節も出來ゐぬ義太夫のさはりか何かを歌つたことを記憶してゐる。さうすると漱石はよう〱とか何とか云つて私の義太夫をはやし立てた盛んに談笑の聲が沸き立つたことを覺えてゐる。それから漱石が私の家内をつかまへてしきりに近所の鰹節屋のかみさんが漱石に對してどうだとか、また漱石の方がその鰹節屋のかみさんに對してどうだとか他愛もないことを云つて家内を笑はせ。又漱石自身も愉快さうに笑つてゐたことを覺えてゐる。とにかく其の夜は櫻の花が咲き滿ちてゐて、障子など開け放してゐても少しも寒くない朧々として春の夜であつて吾等の團欒もその春の夜にふさはしいやうな打ち解けた他愛もないものであつたことを記憶してゐる。こんな話をするといよ〱漱石が平凡な人間になつてしまつて、文豪とか偉人とかいつて漱石を心から尊敬してゐる人々には飽き足らないであらうが、これも平凡なる私の打開した平凡なる漱石の一面である。

以上述べたことは何かにも一度書いたことがあることのやうに思ふが、其の事實は未だ何にも發表してゐない。たゞ此所に平凡人の平凡觀を述べる序に記錄して置かう。それはもう猫が數回ホト、ギス誌上に載つた時分のことである。さうして朝日新聞から招聘する話などのまだなかつた時分のことである。

一日漱石は飄然私の家を訪ねて散歩しないかと云つた。私は漱石の云ふことに從つた。いかなることを話したか、どの邊を歩いたか記憶してゐないが二人は牛肉屋の二階に上つて居つた。他分それは晝飯を喰ひに上つたのであつたらうかと思ふ。まはりに外の客はゐなかつたやうに思ふ。言葉少なであつた漱石はこんなことを切り出して私に云つた。それは、

「ホト、ギスを若し盛んにしやうと云ふ氣があるのならば、もう少積極的にやつて見てはどうか。他の中央公論その他の雜誌は編輯そ他のことに全勢力をそゝいで居るホト、ギスはどうも娑婆つ氣がな過ぎる。單に同人雜誌として賣れても賣れなくつても好いのならばそれでも好いが、賣らうといふ考へがあるのならばもう少し積極的になる氣はないのか。」とさういふ話しであつた。若しこの時私が、

「貴君が盡力して下さるのならばやつて見ても好い。」と云つたならば、

「それなら僕もやつて見てもいゝ」と或は漱石が答へるかも知れぬと考へられた。しかし私は此時分、人の力を借りて雜誌を遣るといふ心持にはどうもなれなかつた。私は非力ではあるが細々ながらも私自身の力で遣つて行き度かつた。それで、私はぶつきら棒に、

「さういふことはだめですね、私に出來さうはありません。」と答へた。もう話はそれきりになつた。二人とも興が乘らず、牛鍋をつゝきながらまづい飯を食つたやうに記憶して居る。

要するに私の漱石に對して抱く最も懷しい感じは郷里の松山ではじめて漱石に會つた時から、漱石が自ら創作家を以て立たうと志を定

めたまでの間にある。漱石が創作家を以て立つやうになつてからの私との關係はどうもその昔ほど無邪氣に行かなかつた。猫の第一回をホトヽギスに載せる頃は何にも心に介意する所はなかつた。けれども一旦その猫の評判がよくて忽ち文壇の大家になつて漱石に對しては何處となく第二回以下をたのむのにたのみづらくなつた。

「第二回を書く方がよければ書かうか。」と云ふ漱石の言葉には少しも不純なものは交つてなかつた。しかし私の

「えゝ、書いて下さい。」と云ふ言葉のうちには多少重たい響きがあつた。

「何か文章を書いて御覽なさい、文章會に持つて行つて讀んで見ますから。」と云ふやうに輕く無邪氣には云へなかつた。第三回、第四回と數が重なるにつれていよ／＼其の傾向は著しくなつて來た。私がペンを執つて猫の第一回の文章のところ／＼を抹殺した心地は、一漱石の文章を完璧なものにしやうといふ心ばかりであつて、何等そこに斟酌はなかつたのであるが、第二回以下の多少飽き足らぬ節のあるのもその儘にして置かうといふ心のうちには曩のやうに輕くすなほな心持ではなくなつた。私の我儘な心持から云つたらばいつまでも漱石は大學の教師であつて、たゞ餘技として文章を書き俳句を作る人でありたかつた。さうして私と共に談笑して二時間も三時間も無用のことを談笑し時には謠をうたつて時間を空費する人でありたかつた。

漱石の世間の人に認められたのは、漱石が創作家として起つて以來のことである。また漱石の鋭鋒が露出して多くの人に感化を與へたのもそれ以來のことである。澤山の述作が出來たのものそれ以來のことである。此の頃手にしてはじめて讀んで見た新小說の追悼號を見ても、多くはそれ以來の漱石の面目が描かれてをる。私の懷しく思ふ漱石はすべてそれらの陰になつてをる。未生以前の漱石であるやうな心持がする。追悼號に種々の人によつて描かれた漱石は燦然として輝いてをる。それも漱石の一面である。否世間の人が多く感得した漱石の方面がその燦然たる方面であつたとすれば、それが漱石の眞面目であつたであらう。私の述べたところは私といふ平凡人が觀た平凡なる漱石の一面である。否、私が平凡化した漱石其人である。

警句の口をついて出づるのは江戸つ子の獨り享有する一面である。其に教養ある、品格のいゝ麗しいユーモアに富んだ、機智縱橫の天馬空を驅けるの慨があつた。英文學者として十八九世紀の英文學に對する造詣も深いものがあつたさうである。それのみならず和漢の學問も相當にあつた。其他趣味の方面から云つても大概のことに趣味を見出だす人であつた。人間としてもどこまでも正しきを好み、曲れるを惡み、眞實を愛し虛僞を排するといふ人であつた。それらの點は已に世間の多くの人の知つてゐるところで、偉人として文豪として傳へられてゐる所以のものも其所にある。それらのことを繰り返して云へば、私も亦漱石を偉人、文豪として取りあつかふこととなる。若かず矢張り平凡化した漱石其人を描くのにめ留て置かう。

私の明治文學觀

野口米次郎

全世界の思潮と人間生活は過般の世界戰爭を一區劃として論ぜられるであらう。私は決して戰爭を是認しそれを奬勵するものでないが、その人間の實際生活と思想に及ぼす大きな變化を考へると、戰爭は必ずしも罪惡とのみとして論ずるものでない。日本だけの問題として日露戰爭の物質的並に精神的結果を考へても、また同樣のことが云へる……明治時代は日露戰爭を一大區劃として大變化してゐる。日露戰爭前の明治時代は扮粹子的見解と溌溂として熱心な公人的態度の時代であつた。英國人が喜ぶやうな評語を使ふと、日露戰爭前の日本はミルの『自由』とカーライルの『力』とラスキンの『自然』とアーノルドの『修養』とを打つて一丸としたやうなものを、一大理想として居つたと云へる。この時代の人々は修養を離れない倫理を尊重して、一定の理想に從つて人格を築からうとして居つた……然らば何を以て彼等は理想としたかといふに、彼等は保守と進歩の二つを双手に摑んでそれ等の妥協を計らんとしたのである。今日の私共も彼等と同樣に保守と進歩のヂレンマに懸つてゐると云へるが、日露戰爭前の日本人は明瞭に人をして彼等が進歩主義であるか又保守主義であるかを疑はしめたと云へる。彼等はこれ等の二つの妥協を計らうとしたが、その實際は英語のデッドロックの狀態でそれ等の二つが離れればなれに存在せざるを得なかつた。

私は今三宅雄次郎と德富蘇峰を日露戰爭前の日本の代表的思想家として考へてみるに、前者は事物を見る人で後者は事物を知る人であつた。私に決して事物を見る人間の方が事物を知る人間より偉いといふのではない。私は勿論三宅德富兩氏を研究したものでないから私のいふ所は單に感想的評論に過ぎないが、彼等は互に異つてまた互に類似する所があると云へる。若し彼等を五十年後百年後乃至は二百年後の人が見たならば、彼等の相違より類似の點が特別に注意されるであらう。先代菊五郎と團十郎とはその藝術にまた生活態度に全然異つた俳優であつたに相違ないが、今日から彼等を見ると同時代の人間としてその類似の點が私共を喜ばせる。カーライルとマコーレーはその文章にその思想に相異つた英國人であつたが、今日から見ると彼等は等しくヴヰクトリア女王朝の人として彼等の相違より寧ろ類似の點の方が私共に訴へると云へる。それと同樣に三宅博士と德富蘇峰とにも當嵌めて論ずることが出來るであらう……今日に於てもさういふことが出來るから、無論將來の評論家は彼等に對して、等しく、彼等の價値

は『彼等は時代の先驅者であつたか或は單に整理者であつたかの一問題にかかる』と云ふであらう。

私は前にいつた如く三宅博士の著書も德富氏のものも詳細に知るものでないが、からいふことが云へると思ふ……彼等はアーノルドのやうに必ずしも『流行』を否定して『古典』を支持した人でないであらうが、一定の規則で善惡邪正の二種に事物を悉く分類して評論してゐる。從つてどこかに現實味が不足してゐる徹底味が足りない、彼等は赤裸な思想の境地に立つて居らない。私は嘗て德富氏に對して『若し氏が英國のヴヰクトリア女王朝の人であつたならば、マコーレーで始まつてアーノルドで終つた人だと思ふ』といつたことがある。この言葉は現に活動して居られる德富氏に對していささか不都合の言葉かは知らないが、私は今でもこれを撤回しようとは思はない。私は三宅博士がたれで始まつてたれで終つたといふ適當な評言を知らないが、彼が明治時代の中部に於ける思想的領團へ眞實の意味での自由民權の空氣を吹込んだ仕事は決して德富氏の行績に劣つたものでない。三宅博士にしよ、德富氏にしよアーノルドやカーライルがなつたやうに實際は思想的公人で哲學者では無い。彼等の文字は凡ての問題を社會の現象として取扱つたもので、決して豫言的色彩の言葉でない。然し日本的評價の上からいふと彼等は確に一頭地を拔いた文章家である卽ち思想家であると云へる。アーノルドは『英國は歐羅巴の一部分で一部分としても、ウオーターールー戰勝の翌日のやうに今日はさう有名でない、事實世界で重要な一部分でも無い』とかいつて英國の地方的自負心を破らうとしたとある。私は『日本の今日は世界の一部分としてパルチツク艦隊を沈めた時のやうに重要な一部分でも無く又從つてさう有名な國でない』と語つて日本の地方的自負心を破らねばならないと信ずる。如何なる國でも地方的感情と思想に支配される時位危險な時はない。私共は日本人としていつも怠らずにそれを打破る覺悟がなければならない。然しそれを實行するには豫言者的實力を持たねば出來ない。德富氏にしても三宅博士にしても乃至はカーライルにしてもアーノルドにしても、或意味からいふと保守主義者であつて、新しい時代を恐怖した點があつたことを注意せねばならない。カーライルやアーノルドのことはどうでもいいが、三宅博士や德富氏は日本人であるから私共に直接に關係を持つてゐる……彼等は保守主義者として進步を邪魔し又進步主義者をして保守を徹底させて居らない所がある。彼等がもつと保守主義であり、或はもつと進步主義であつて、どちらかであつたならば私共は一層厚く彼等に感謝せねばならないであらうと私は思つて、何となく寂しいやうな感に打たれざるを得ない。然しそれは三宅博士や德富氏だけに限つたことでない、明治時代のどの思想家にも又文學者にも適用されると私は思ふ。

明治時代は長い日本の歷史を飾る偉大な時代であつたといふ大膽論に私は異論をさしはさむものでない。恐らくその偉大は奈良朝時代の偉大に匹敵し、いなそれ以上の偉大さを持つてゐると私は信ずる。奈良朝時代は支那文明輸入の時代であつて、その當時の人々は『どうして自分共はから所謂ハイカラであらう』と思つたに相違ない。然し今日私共が奈良朝文學として萬葉集などを讀むと、私はその時代の流行的精神に反抗した保守主義をその中に明瞭に認めざるを得ない。私は如

何に奈良朝時代が漢土文明を生活に思想に取入れたかといふ跡なり、寧ろその時代の人々が依然として傳統的な日本人である卽ち彼等の保守主義の發達を知るのである。若し私共が明治大正の文藝を振返つて顧みる時それと同樣の感に打たれるであらうと思ふ……明治時代は實際生活の上に又思想の上に確に外國謳歌の時代であつたが、事實價値ある文藝として今日又將來に殘ると想像されるものは日本人の保守的半面に卽したものが多いであらう。若し人が私の言を疑ふならば手取り早く、近來流行の『現代日本文學全集』や『明治大正文學全集』を見れば分る……それ等に含まれてゐる文學は、小說にしても隨筆紀行文にしても、西洋かぶれしたもののよりか保守的態度の文章が多いのを容易に見出すであらう。さうしてみると日本人の西洋主義卽ち進步主義の存在は傳統主義卽ち保守そのもののやうに根強くないと云へる。實際生活に於て私共が今日又將來如何に西洋館に住み西洋服を着、如何にモーダーン・ガールスやボーイスが街上に溢れても、日本人に依然として日本人であるであらうといふ證據とも見ることが出來る。然し考へると私共がもつと西洋主義であるか或は保守主義であつたならば、詰りその何れかに偏して居つたならば、私共の思想も生活も單純化されて一層の發達を見るであらうと想はれる。私共は今日混亂の心理に脅かされてゐるが、その點は二三十年前の明治時代に於ても同樣であつた。そのため私共日本人は餘計の物質を精神を浪費させられた。明治時代に於ける心理上の混亂は決して今日のそれに比較して決して少いものでなかつた。これは進步主義と保守主義を双手に提げてその妥協を計つて、それに失敗するものの拂はねばならない稅金であつたのである。かういふ點が明治時代の文藝に顯はれて不滿足な結果を出してゐるとも云へる。

私は時々明治時代を英國のヴヰクトリア女王朝時代に比較して一篇論文を書いてみたいと思ふことがあるが、まだ私に充分の用意が出來ないから着手することが出來ない。ヴヰクトリア女王朝は偏狹と安心と傳統的人情と富との時代であつた。又この時代のロマンチックを最も大きな特徵としたならば、私共の明治時代の特徵も卽ちそれであつたと云へる。今日の私共から見ると明治時代の理智には惹かないが、そのロマンチックには頭を下げていいと感ずる。この時代の文學者は日露戰爭以後の自然主義者のやうに現實を赤裸に見ることが出來なかつたが、彼等の想像力は極めて力のあるものであつた。事實想像力を缺いた自然主義の文學の如く價値のないものはあるまい……今私はこの點を實證することを避けたい。明治時代の想像は、假令それが制限されたものであつたにしよ、倫理的評價のため制肘されて平坦か良く取られてゐる。それに反して自然主義時代の心理は如何に淫佚を極めたかは考へてもぞつとする。勿論明治時代の文藝は倫理觀のためその心理狀態が不自然であつたとも云へる……實際にさうであつたであらう。然しこの時代の文藝家は今日のそれ等より以上に藝術的特[illegible]性に富んで居つた。その例は紅葉露伴其他の作品を見れば明瞭である。彼等は今日の所謂藝術論乃至は審美觀に迫害されて居らない故に、一面に趣味的であり概念的であつて創造的でない個性的でない。今日並に將來の文藝は傳統的打破であり個性的であり創造的であらねばならぬといふ點から見ると、明治文藝は過去のものといふ歷史的價

値のみとも云へる。然し明治時代の文學者は人を喜ばせる前に彼等自ら喜んで執筆した。これ即ち趣味的な學者の特徴ではあるが時代が文學者にさうさせたといふ時代精神に可なり尊敬に價すると私は思はざるを得ない。

假名垣魯文

高須芳次郎

嘉永六年の頃である。

本郷湯島妻戀町にある小さな家——間口九尺二間、奥行二間半——に一風變つた獨身者が何處からともなく引越して來た。彼れは二十四五歳に見ゆる飄逸奇怪な容貌の男で、狐の皮で作つた袖無し羽織を着け、破机によりかかつて、いつも何か書いてゐた。道ゆく人々が、その門口を見ると、一枚の看板が掲げられてある。それには卑下したうちに、滑稽味を漂はせてゐる戯作者氣質をよく現はした文句を書いてあつた。

談笑諷諫
滑稽道場　御誂案文認所　江戸作者　鈍亭魯文

まぎれもなく、それは嘉永二年に戯號の披露をした魯文が、はじめて家を持つて、賣文業を開いたのである。その頃の魯文は辛くも生活を維持するに過ぎなかつたが、後『滑稽富士詣』を書き、更に『西洋膝栗毛』などを作るに及んで、文名大に揚り、明治初期の文壇に十返舎一九の再來として雄視したのである。

江戸末期から明治初期にかけては、デカダン風を帯びた奇人が往々あつた。魯文はその一人である。彼れの生涯は奇談の連續とでもいつてよい位で、一九の『膝栗毛』中にある彌次郎兵衛、北八などを連想せしむる俤があつた。

ある時(慶應三年)魯文が僅かの手落から暫く入獄したことがあつたが、獄を出ると間もなく、彼れ一流の滑稽を演じた。その頃、魯文は或書肆から頼まれて『細撰記』と題する小冊子を書き、江戸市中の商店、飲食店などの事を『吉原細見記』風に擬して出版したが、書物問屋の行事——この種の出版物は行事の檢印を受ける規則になつてゐた——から檢印を受けなかつた爲め、告發されて、入獄した。が、素より微罪であるから、程なく許されて獄を出ると、彼れは依然、滑稽洒落のうちに日を送つた。

折柄、銀座役人辻傳右衛門が淺草橋場の別莊で興趣合——この遊びは豫め會合の日を定め置き、兼題を配つて、當日各自の趣向になるものを持寄るのである——の開卷をしたとき、魯文も亦招かれたが、その日は來會者いづれも旅人の扮装をして出ることになつてゐた。そ

れで魯文は何か奇抜な扮裝をして來會者を驚喜させたいと思つたので、工夫の末、彼れが過般出獄したことにちなみ、胡麻の蠅になりすまして出ると、果して「これは妙だ、流石に魯文だけのことはある。」といつて喝采された。

それから四五日經つてから魯文は川崎に遊んだ。當時大傳馬町の富豪勝田某(俳名春廼屋)が川崎在平間村の厄神の祠を修繕するについて少からぬ寄附をした關係から、修繕落成の日に招かれると「これは魯文さんに代參して貰ふ方がよからう。」といふので、早速魯文に委細を話した。彼れはすぐ承知して友人山々亭有人(條野採菊)らと一緒に平間村に赴いた。やがてその夜は祠内に參籠して、信者らといろいろ話したが、夜が更けて、もう話の種がなくなると、魯文は自分の側にゐた「は」組の消防夫外道の吉に向ひ、「これを轉がして遊びませう。」といつて紙入から骰子を取出した。外道吉がそれを手にとつて見ると、俗間では「いかさま」といはれてゐる不正のものであつたから、愚直で通つた外道吉はひどく怒り、「こんな物を持つてゐる奴は不正な人物にちがひない。」と思つて、碌々挨拶もせず、骰子を魯文へ投げ返し、ぷいと座を起つてしまつた。そして外道吉は社の別當に「一體、あの男は何者です。」と聞いたところが、「傳馬町の代參をされた方で、有名な假名垣魯文先生です。」と答へたので「さうですか、何だか面白くない奴だ。」と呟くやうに云つて、再び魯文を見かへらうともしなかつた。

その翌日、外道の吉は江戸に歸ると、すぐに春廼屋を訪ひ、「旦那、昨日私は假名垣とか、バラ垣とかいふ先生に逢ひましたが、一體御宅とはどういふ關係があるのですか。」と尋ねた。春廼屋はそれに對し何氣なく、「別にどういふこともないが、中々面白い人でね、先般、辻の別莊で胡麻の蠅になつたが、本物とすこしもちがはなかつたよ。」と答へると、吉は早合點して「さうですとも、あの男なら胡麻の蠅でも立派にやりませう。」と魯文のことを惡口したが、春廼屋は吉が魯文に對して怒つてゐることに一向氣付かぬので、「いやまだ面白いことがある、先日も細撰を書いて牢へ入れられたが、先生平氣で誠に無頓着なものだ。」と云つた。

その際、吉は「細撰」を「賽錢」と誤解して、「賽錢を盜んで牢へ這入りやしたか、どうも最初から刑狀持と睨んでゐやした。碌な奴でねえ。先日も私に『いかさま骰子』を出して見せやがつた。」と云つたが春廼屋は何の事かわからぬので、よい加減に扱つてゐると、そこへ山々亭有人が來て、双方の話を聞き、魯文の一風變つた樣子を吉に告げたので、いづれも腹を抱へて笑つた。かうした奇談はいつも魯文の一身について廻つてゐたのである。

□

魯文がどんな人物であるかは、右にあげた一挿話でもわかるが、次に順序上、彼れがどうして戲作者——小說家になつたか、そのロマンチイックな經路について述べよう。魯文は純粹の江戸ッ兒で文政十二年正月、京橋鎗屋町の家に生れた。彼れは本姓を野崎氏といひ、幼名を兼吉と稱したが、後に庄七、また文藏とも改め、明治初年、假名垣魯文を通稱とするに至つた。その祖先は相模國に住み、代々農業に從事したが、魯文の父佐吉の時代になると、江戸へ出て魚屋となり、魯

しい生活をすることになつた。

魯文の文學趣味は、その父から傳へられたもので、父は俳句を好み、山水畫などを器用に描いた。そして家では、『實語教』『童子教』などを魯文に教へた。かうした魯文は八歳の頃、山東京山の『娘評判記』などを讀んで、早くもいくらか小説の味を知つた。やがて天保八年、九歳になると、父の意見に從うて、新橋竹川町の諸藩用達鳥羽屋多吉の家へ十年の年期奉公に住み込んだ。鳥羽屋は本姓を三村といつて、本家は三十間堀にある鳥羽屋清左衛門といふ富豪で、俗に十人衆と呼ばれた一人である。

魯文は最初から商人になる考へは一向になかつたので、毎夜、店をしめると、一九、三馬、京傳などの作品を耽讀し、少しでも小遣があれば、本屋へ赴いて、合巻物などを買ひ求め、他の小店員たちのやうに飲食のために無駄遣をしなかつた。かうして二三年、鳥羽屋に勤めてゐるうちに、魯文の文學趣味は次第に發達し、時々俳文を書き、俳句を咏み、鳥羽繪小僧といふ戯號で漸く人に知られた。中には、魯文を奇童だとして感服し、特別に彼れを優待したものもあつた。

折柄、茲に魯文が文學修業をするについて都合のよい機會が出來た。といふのは、當時大通の一人であつた香以山人が放蕩のため偶然、鳥羽屋に預けられ、そこで魯文の文才を知つて種々引立てたからである。香以は新橋山城町の酒屋津國屋の息子で、幼名は子之助、後に藤次郎と改め、津藤といへば狹斜風流の巷で誰れ一人知らぬものがなかつた。彼れの父藤兵衛は鳥羽屋(三村多吉)の姉すみを後妻に迎へた關係で、双方心やすくしてゐたが、香以が二十歳の頃、ひどく耽溺して、新宿、品川二個所の引手茶屋で借財を作つた爲め、父藤兵衛はその不始末を怒り、一時、香以を繼母の里方鳥羽屋へ預けた。

が、香以は一向謹愼しないで、尚ほ窃かに吉原に遊び、當時の文士、俳人らと交つて金を撒いたので、鳥羽屋へ香以を尋ねてくるものが少くなかつた。その取次にはいつも魯文が出たので、次第に文士、俳人らと親みを重ねた結果、茲に戯作者として世に起つて見たいと思ふやうになつた。

それから魯文は文學修業のため、暇を偸んで、俳句を涼窓露萵に學び、狂歌を三世千種庵諸持(元淺草の里長勝田權左衛門)に習ひ、また後には米羅坊守一について、江戸座風の俳諧を修めた。が、平生規則的に學修したわけではないので、組織立つた知識を得る迄に至らなかつたけれども、性來の頓智頓才で巧みにそれを補つた。魯文の才能は早く香以の知るところとなつたが、その十四五歳の頃、「朝顔や水入竹の水をあげ」といふ句を咏むと、香以は「中々うまい、年の割にしては立派な句だ。」といつて、香雨亭應一の俳號を與へた。のみならず、香以は守一、露萵らと共に、魯文に向つて、その頃名ある狂言作者花笠魯介(文京)の門に入るやうに勸めたので、魯文も乘氣になり、十五歳の時、魯介の弟子となつた。その折、戯號を和堂珍海と稱し、一篇の戯文を作つたが、記念として「砂はらに蚯蚓のたくる暑さかな」の一句を咏んだ。

魯文が處女作『政談青祇碑』を書いて出版したのは十六歳の時で、それには和銅珍海の戯號をやめ、英魯文の號を署した。それは師の名にある魯介の魯と文京の文とを併用したので、英といふのは、花

笠にちなんだわけである。かうなると、魯文は次第に戲作者となりすました心持で、先づ戲號の披露をしようと思つて、曲亭馬琴、山東京山、爲永春水、萬亭應賀、松亭金水らに請うて祝句を寫した狂歌、俳句を貰ひ受け、黃表紙風にして出版しようとした折柄、父佐吉が貧苦のうちに卒去し、その葬式や弟妹の世話などをせねばならなくなつたので、一時、戲號の披露を思ひ切つた。ところが友人中に同情するものがあつて、出版の資を助けたので「名聞面赤本」と題した戲號披露の摺本を知己に配ることが出來た。馬琴は當時、盲目となつてゐたので、魯文が訪うても、帷外の聲を聞いて話すといふ具合であつたが、「戲作者などになつて、身を誤つてはいけない。」と魯文に諭したと傳へられる。馬琴が魯文に與へた祝句はかうである。

　花笠先生の社中魯文子にしめす
みそ揚て作り上手に成たくば
　世によくなれし甘口ぞよき

□

魯文が戲號の披露をしてから間もなく、その主家を去つて獨立しなければならぬ時が來た。その頃、魯文の心は戲作の方に傾いて、店の用事などは手に著かなかつた。のみならず、香以に導かれて、次第に劇場妓樓などの味をも覺え、ともすると、遊蕩の方にも心を惹かれるといふ具合で、始終落着かなかつた。さういふことから、主人多吉は折角、家を興した魯文が途中から挫折してはならぬと心配し、ある時、そつと魯文を呼び寄せ、頻りにその不都合を責めて、「暇を出すから何處へなりとゆくがよからう。」と申渡した。その實、多吉は「かう威しく叱つたら鈍吉（魯文）も必ず改心して、以前より一層忠實に勤めるだらう。」と考へた上の策略にすぎなかつたのである。

ところが、魯文は主人の胸底をそれと知らないで、「一日も早く店を出たい、そして熱心に希望してやまぬ戲作者生活をしたい。」と思ひつめてゐたので、主人に詫びようとはせず、「仰せ御尤もですから、私は今日限り御暇を頂きます。」といつて、籠の中から放たれた小鳥のやうな輕い氣持で、久しく奉公した鳥羽屋を離れたが、さてこれから何處に身を落着けようかと考へると、丸で五里霧中にあるやうで、一時ぼんやりした。その頃、彼れの弟妹は他へ奉公し、父が住んだ家はもう疊んでしまつたので、止むなく、木挽町のグレ宿（安宿）松川屋へ泊つて筆を取りはじめたが、勿論、まだ戲作を書いたといふ丈で何の名もない彼れに對し原稿を依頼する物好きな書肆はなかつた。

魯文は止むを得ず、所持の衣類を典して宿料を拂ひ、わびしい日を送つたが、或日、盜賊詮議のためだといつて、岡引川おかし（探偵）が松川屋へ來り、奇怪な容貌の所有者——魯文の樣子を見て、盜賊にちがいないと思ひ誤り、魯文を引立てやうとした。魯文は驚いて「私は戲作渡世をするものでございます。決して怪しいものではありません。」と辯解したが、岡引らは容易に信用しないで、否應なく、彼れを木挽町の自身番迄引立てたのである。

そこで岡引らは魯文に訊問を發し、「お前は戲作者だといふが、そんなら自分の家がある筈ぢやないか。無宿者のゐる安宿にころがつてゐるのは一體どうしたわけか。」と云つたので、魯文は辯解に窮し、止むを得ず、

仲間には入らぬ綠の林ぞと
いまだ前出しの草本作者

と云ふ狂歌を詠み、英魯文と書いたので、拘引のうちに偶然「一面赤本」を見たものがあつて、「では花笠の門人だね。」と云つて、はじめて疑ひを解き、魯文を釋放した。魯文はひどくこれに懲り、すぐにダレ宿を飛び出して、その故郷相模森原村にある本家へ身を寄せることに決心し、江戸を出た。この時から魯文の漂泊生活が始まつたのである。

當時、魯文は「本家に行きさへすれば、何とか身のふり方を着けることが出來よう。」と思つてゐた。そして本家に着くと、困窮してゐる事情を告げ、切に世話を頼んだが、「百姓になるなら、いつでも世話したい。」といふのである。が、魯文は百姓を好まぬので、「何か他に自分にふさはしい職業はないか。」と問ふた。本家の人は「南須賀村の長樂寺へゆけば、何とかならう。」と答へたので、「それならばいくらか學問修行の助けにもならう。」と考へ、本家の力にすがつて、長樂寺に赴き、急に頭を剃つて僧となつたが、それは全く魯文の豫期しないことであつた。

戲作者を志して僧となる。これが既に魯文に取つて矛盾であつた。彼れは無論、僧らしい僧ではなかつた。境遇に制せられて、心ならずも、住持から經文を習つたが、心は三馬一九の小説を思うてゐた。少し日が經つと、阿呆陀羅經の新作を試みて、それを佛前に朗誦するといふ具合で、酒も飲み、女にも戲れたので、住持の怒りに觸れ、半年經たないうちに長樂寺を去らねばならなかつた。が、魯文は少しもそれに屈託しないで、江戸へ歸り、今度は葭町の居庵にたよつて、永町の書肆藤岡屋の店番となつた。

ところが、店番としても、魯文は全く適任でなかつた。毎日、店頭にゐて、小説、戲曲、隨筆などを耽讀し、客が來ても一向、顧みないで、時には並べてある册子を盜み去られても平氣であつた。藤岡屋の主人は魯文の無頓着に眉をひそめ、「も少し店の事に注意してくれなくてはいけない。」と諭した。が、魯文は一向、その言葉を氣にも留めなかつた。が、或日彼れが主人と話してゐるところへ、鳥羽屋時代の知己、柳下亭種員が來て、「君は此處にゐるのか。」と聲をかけられ魯文は流石に今の零落した姿に恥ぢて碌々、挨拶もしないで裏口から藤岡屋を飛び出してしまつた。

魯文はその夜、ある安宿に泊り、將來のことについて、いろいろ案じてゐると、同宿の客人武藏屋良助が言葉をかけ、「失禮であるが、貴君は職業を求めてをられるやうですが、どうでせう、私のゐる田舍まで來ませんか、江戸にゐるよりも、ずつと樂に暮せますよ。」と云つた。魯文は前後の思慮もなく、良助の勸めに從ひ、新堀（上總市原郡西村）へ行くことに決した。

かうしてその翌日、雨がはげしく降つてゐるのにもかまはず、魯文は良助と一緒に宿を立ち出たが、良助は丸で一文も持つてゐないので、駕籠に乘ることが出來なかつた。魯文は僅かに二三十文を懷中した儘、雨にぬれて、漸く新堀に着き、良助の家に入つたが、昔、豪農であつたらしい大家も今は大分落魄して、唯老母が淋し氣に留守してゐるといふ有樣だつた。この態を見て、魯文は失望したのである。

□

良助は魯文が、がつかりした樣子を見て、心中を察し、ある時、魯文に向つて、「別段心配しなさるな、私の妹婿に長我部の幸藏といふものがある。中々しつかりした男で、今は博徒の親分になり、幅を利かしてゐます。その方へ世話してあげるから、大船に乘つた氣でゐなさい。」と云つた。それで魯文も愁眉を伸べ、「それは有難い、是非共、御世話願ひます。」と賴んだので、良助は紹介狀を認め、魯文に渡した。

魯文は「今度こそは氣樂に生活が出來よう。博徒の親分だといふから、自分ひとり位はまあ遊んで暮らせるだらう。」と考へ、幸藏のところへ出かけた。程なく、幸藏の家に着くと、折よく主人がゐて、「まあお上りなさい。」と云ひ、歡待したが、魯文は丸でちがつた世界へ來たやうな心持がした。と云ふのは幸藏の樣子が常人と異つて、骨組逞しく、ぎよろりと光つた眼で、魯文を睨むやうに見たので、先づ氣味が惡かつた。その上、幸藏の側にゐる二三人の乾分も、一癖あるらしく、中には額に刀傷のあとがまざまざと殘つてゐるのがあつたので、魯文は「困つたところへ來た。」と今更、自分の無謀を悔ゐた。

その時、幸藏は魯文に向ひ、「貴君は長く商家にゐたさうだが、いかにも人品がよい。それについて、すこし仕事があるのだ。」と云つた。「仕事！　何の仕事であらう。わるいことなら、御免蒙りたい。」と魯文は心の中で思つた。程なく、晝餐が濟むと、幸藏は魯文に向ひ、「時に客人、すこし御願ひがあるのだが、聞いて下さらぬか。それはほかでもない、お前さんには樂な仕事だ。今夜、武士に化けて賭博場へ來て下さらば、それでよいのです。それに大小は飾りにさすばかりで、物騷なことはするに及ばぬのだ。」と云つた。

物事に無頓着な魯文も、この話を聞くと、よい心持がしなかつた。けれども萬一、それを斷ると、一刀の下に魯文の首を刎ねさうな樣子をしてゐるので斷りかねて澁々それを承諾した。蓋し當時博徒の間では一種の習慣があつて、親分と云はれるものは二三の浪人を家に置き、賭博場の張番をさせて威勢を示したのである。それで魯文は浪人の代理をすることとなり、髮を大髻に結ひ直し、古びた木綿の紋付羽織に威儀を整へ、馴れぬ大小をさして、賭博場へ出かけた。

彼れは內心、びくびくしてゐたが、初めの夜は何の事もないので、ほつとした。二日目も三日目も先づ平穩であつたが、四日目に魯文の膽をひやすやうな出來事を見た。その夜、突然、上州の博徒が、幸藏の賭場へ現はれ、烈しく喧嘩を挑んだので、幸藏方もこれに應じ、白刃を閃かして亂鬪した。この體を見て魯文は眞靑になり、腰にさしてゐた大小を投げ出して、這々の體で良助の許へ逃げ歸つた。

良助は魯文が靑くなつてゐるのを見て、「一體どうしたのか。」と尋ねた。魯文が喧嘩一件を話し、「もうあんなところへ死んでもゆきたくない。貴君の御蔭でひどい目に逢つた。」と云つたので、良助も氣の毒に思ひ、種々思案の末、二人は江戶に出て、何か仕事に有り付かうといふ事に一決し、良助は不用の家財を賣拂つて老母に渡した後、新堀を出た。

さて魯文、良助は江戶へ着いて、仕事を求めたが、別段、思はしい事もなかつた。折柄、將軍家慶が日光へ社參する由を聞き、同地に集る人々を目當て花簪を賣らうと考へ付いたので、魯文は良助を伴ひ、

日光の或宿屋に落着いたが、不圖、病に罹り、思つたほどの收利もなく、ひどく困つた。幸ひ魯文の病も輕かつたので、宿の主人に狂歌を職業とする旨を告げ、「笹原のすねに針持つ欠落は日光までもはしり大黒」といふ狂歌を書いて與へた。それを見て主人は喜び、近所の人々に江戸の狂歌師が來たことを話すと、いづれも色紙、短册などを携へ來り、魯文の揮毫を求めたので、臆面もなく、即吟を書き散らし、漸くそれらの謝禮によつて宿料を支拂つた。

それから魯文は忠助と別れて、鹿沼までくると、そこの宿で八丁堀の倉吉といふ瓦師に逢つた。瓦師といふのは今の新聞紙の先驅をしたもので、當時の社會記事を瓦に彫り、それを印刷して賣り歩いたのである。魯文は倉吉から宿料を借りた因緣で瓦版の原稿を書き、而もそれが輕妙洒落を極めてゐたので賣行よく、倉吉も意外の利益を得た。それで魯文は愈よ倉吉と親しくなり、同道して江戸に歸つたが、爾後暫く倉吉の家に寄食し、『アメリカ國說ヤンレ節』『佐倉總吾一代記』『質屋雜談やりくり合戰』などを書いた。それらはいづれも時好に投じ、可なりの賣行があつたと同時に、魯文の文才は早くも人形町の書肆品川屋久助の認むるところとなつた。

或日、魯文の許へ久助が尋ねて來て、小說の執筆を依賴したので、魯文も始めて前途に一縷の光明を認め、喜んで筆を走らせた。その時、出來たのが『白井權八一代記』『小栗一代記』などである。かうして生活の方途も漸く定ると、魯文は倉吉、久助の厚意で、妻戀町に小さな家を構へた。その事は冒頭に記した通りで、彼れが二十四五歲の時である。

□

その翌年、魯文は友人の世話で、旗下酒井新三郎の妾の妹よしといふのを妻に迎へ、健筆にまかせて、俗衆を相手とした通俗小說の類を書き、漸く生活を支へたが、偶々餘分の收入があると、花柳の巷に赴き、すつかり消費してしまふので、いつも貧しかつた。間もなく、安政二年となつたが、その冬、大地震があつたとき、魯文は階子の下敷きになつて一命を失ふばかりであつたけれども、蒲團を被つてゐたので、漸く免れることが出來た。それは十二月二日夜のことである。

地震のため、魯文の家は大分破損したのでその夜は戸外に一夜を明したが、翌早曉に及ぶと、際物に眼を着けた一書肆が魯文を訪ひ、「先生、何か地震にちなんだ一枚摺の原稿を御書き下さい。」と賴んだ。魯文は快く引受け、街頭に起ちながら、筆を執つて、鯰の老松といふ趣向で滑稽諧謔の文を作りあげたところへ、丁度畫家惺々曉齋が來たのですぐに畫を描かせて賣出すと、忽ち數千枚を賣りつくした。その以後、魯文は矢張、地震を當込んだ原稿數十枚を書き、意外に大くの稿料に有りつくことが出來た。

が、魯文の名が頓に揚つたのは、文久年間、『滑稽富士詣』十卷を公刊してからである。それ迄に魯文は『安政見聞誌』『操松月景淸』など書いたが、まだ魯文の特色を發揮することが出來なかつた。ところが、『滑稽富士詣』は一九の風骨を模しながら、巧みに魯文自身の特色をも示したので、讀書社會の歡迎を得たのである。

蓋しそれは魯文の實驗を土臺としたもので、萬延元年の夏、魯文が友人數名と共に富士山に登つた歸途、箱根七湯をめぐり、到るところ、

滑稽をつくし、諧謔を弄んだその儘の樣子を實寫したのである。篇中の人物は皆變名を用ゐてあるが、實在の人々で、一々その癖までも描いたところから「これは妙だ。」といふので、一九の『膝栗毛』にひとしいほどの喝采を得た。この時、魯文が小説家としての前途は漸く多望となつたのである。

　かうして一九の再來であるかのやうに云はれた魯文が明治二年秋、『西洋膝栗毛』初編を出し、第十一遍迄――十二編より十五編迄は總生寛執筆――續けて、奇想天來と稱せられたのは偶然でない。蓋し魯文は丸で英書を讀まず、また左程學問がなかつたけれども、新しい時勢に適應してゆくべき才能があつたので、世の新風潮を見て、巧くみにそれを自分の作中に取入れることを忘れなかつた。『安愚樂鍋』『胡瓜遣』などは、やはり、時好に投じて評判を得たが、その代表作は『西洋膝栗毛』である。

　その材料は『輿地誌略』『西洋旅案内』『西洋事情』などに仰ぎ、またフランスから歸朝した富田砂燕、いくらか英書を讀むといはれた岡丈記の二人を相談相手として、種々、工夫を凝らしたのである。かうして全く洋書を知らぬ魯文がその空想の力を驅使して出來たのが『西洋膝栗毛』で、初編を書きあげたときは、左程世に歡迎せられようとは思はなかつたのである。

　ところが、當時文明開化の語が頻りに新人の間に用ひられ、西歐の物質を憧憬し崇拜するの風が漸く旺んになつたので、まだ見ぬ歐米の天地や汽車、汽船、電信の有樣や新舊精神の衝突などを描き、兎も角、そこに文明開化の一斷面を示したので、新しいとか珍しいとかいふ意味に於て、將た輕妙、滑稽の趣がある點に於て、豫想外の歡呼を浴びたのである。

　篇中の主人公三世彌次、喜多の二人が到るところ、赤毛布流の失敗を繰返し、その都度狂歌を詠んで放笑する趣向は一九の『膝栗毛』その儘であるが、舞臺が西洋だけにいくらか淸新な感じを今日の讀者にも與へる。それに會話は頗る手に入つて、江戸ッ兒流の惡口などは殊にうまい。一種の日本主義とでもいひたい頭で西洋文明を批評してゐるところも、皮相歐化者流とちがつた獨自の味がある。魯文の名を不朽ならしめるものは、『西洋道中膝栗毛』である。

　この二世一九ともいひたい魯文が世を去つたのは明治二十七年十月のことで、享年六十六であつた。その辭世の狂歌は、これも一九の俤を思ひ出させるのである。

　　快く寢たら其儘おき炬燵
　　　いけし炭團の灰となるまで

明治文學史手引草

佐藤春夫

明治の文學も、その時代と殆んど歩調を一にしてゐる。社會百般の事物が輸入時代であつた如く、文學も亦、ヨーロッパからの移入であつたと言つても間違がない、どころが餘り當り前の言ひ分過ぎるであらう。

明治の文學でも日本風の色彩の比較的濃厚なのはせいぜい硯友社同人諸家までぐらゐのもので、即ち紅葉山人や又その社中ではないが一葉女史などのものは最も日本的と言ひ得る。さうしてその時代を殆んど最後として次の時代の作家の作風は一變してゐる。

一體硯友社的作風と云ふものは、人も既に知つてゐるごとく西鶴研究から出發してゐるもので、要するに作者はやはり江戸時代の作者の魂を持つてゐたので、たゞ世相が一變すると同時に目に觸れる事物が新鮮なものだから、作者が江戸時代の魂と目とを以てしても取扱ふ世界が新しかつたために其處に自から別樣の作品が現れて來てはゐた。しかしもと〳〵その魂と目とは既に傳統的に完成したものであつたから、彼等の作品も自ら渾然としてゐた。少し遡つて饗庭篁村などと云ふ作家なども殆んど同じことで、たゞ前者は後者よりも年少であつたから着目するところが多少相違してゐたので、その他では全く同じ系統に屬してゐるかと思へる。

斯う云ふ傳統的な文學の半面には、また別に社會の他の事物と一緒に外國の文學も移入されてその新しい魂によつて文學を作らうと云ふ考への人々も既にないことはなかつた。二葉亭四迷の如き、また書生氣質の作者としての坪内逍遙の如きがそれである。しかし時代はまだその新しい魂に馴染まなかつた。たゞその精神よりも先に、文體の變化が問題になつて所謂言文一致の問題が起つた。それにしても作者魂といふものにはまだ〳〵さう革命的な動搖はなかつた。しかし先驅者は既にあつた。文學界同人の如きがその代表的なもので、彼等は主として彼等の親しんだ外國語によつて、イギリスの文學に接近してゐたので思想的にはエマスン、カーライル、また創作的にはシエクスピヤやウオズヲオス、などの如き人々に近つかうとして、その形式に於ても散文よりも韻文の方に興味を感じて抒情詩はもとより敍事詩や更に劇詩にまで野心を抱いてゐたのは、それは彼等の手本であるイギリスの文學から學はうとしたものとして甚だ自然なことである。明治十五年に既にその萌芽を示した新體詩の第一期の完成はこの人たちの手によつて完成せられたのは意味あることで、その發芽からこの完成

まで十年の歳月を要してゐる。この一團體の若々しい活動は、その時代的苦悶のために自ら倒れた北村透谷の殆んど未定稿とも見るべき斷片的な仕事にその名殘を留めてゐる。また僕が新體詩の第一期的完成と呼ぶのは島崎藤村の「若菜集」の出版を指すのである。この書は同じ作者の他の韻文集と共に明治文藝界の古典である。

硯友社的文學は、時代の姿が新しくなり偖てその精神までも徐ろに新しからんとする三十年代に至つて、少しづゝその權威を失ひつゝあつた。即ち日清戰爭以後一層急速な勢で發展した國力と時勢とに對しては、たとへ完成されてゐても前の時代の魂は少しづゝ役立たなくなつて來つゝあつた。齋藤綠雨はこの時代に於ける象徵的人物である。彼は完成した江戸時代の作者氣質を抱いてこの時代の混沌的世相を眺めながら、彼自らの衰滅すべき運命を感じ觀じてゐた。

正岡子規も亦この時代の注目すべき、非常に注目すべき一人物である。彼は滔々としてヨーロッパ化して來るこの時代の中に一人國民性に目覺めた。彼は決して保守的な人物でなかつたにもかゝはらず、その性根に於て飽くまでも日本人であつた。さうして彼の短い病身な生涯の間に成された仕事、就中その詩歌的意見の中には今日も、また今日以後のある時代――即ち、如何なる時代でも人々が折節國民性に目覺めた時、或ひは國民性を考へる時代には、彼から暗示さるべく案外澤山なものを見出すであらう。

文學界同人がイギリス風の精神を以てしたと殆んど同じやうな仕事を、高山樗牛たちの一團が、正にしようとしつゝあつた。しかしその仕事はその華麗なリーダーを失ふと共に大した影響を見せないでしまつた。たゞ餘りに個性的な仕事のために、時代的に稍不遇とも思はれる一人の異常な作家泉鏡花を擁護して、これに一種ドイツロマンチシズム風の魂を吹き込まふと試みたのは、面白い着目ではあつたけれども、これは亦たゞ企ての半ばで終つたやうに思へる。

後年世に現れた國木田獨歩は、この時代の最も不遇な狀態で世に處れてゐた。後年光りを見た彼の小品風な作品の如きも、その發表當時には女學世界なぞといふ文壇的には價値のない雜誌に、それも文學的な待遇をも受け得ずに僅かに活字になつたのである。(改造社版國木田獨歩集の著作目錄の中に「春の鳥」を、發表も製作年月も不明としてあるが、それは三十三年頃の女學世界誌上に發表されたもので、それは少年の僕をして初めて文學的感銘を覺えさせた作品であるがために、偶然この記憶は甚だ鮮明である。このことを序に、同集の編者に傳へたい)獨歩は僕の見るところでは、文學界同人と一味相通ずるところがあり、後年露佛等の大陸文學から影響せられた人々が自然主義を唱道した際に、獨歩をも同じ自然主義の中間に加へて、この不遇な特色豐かな作家を人々に知らせた時、獨歩はその待遇に滿足しながらしかし一方で、「僕の自然主義はウヲオズヲオスの自然主義だ」と稱して多少の異を樹てたのは、たゞ彼のつむじまがりばかりではない。

日露戰役以後年少氣鋭の一團體の作者と批評家達とが、既に述べた自然主義と稱する文學運動を起した。これは極端に今までの文學に對して挑戰し、今までの美に對して彼等は別の美を、寧ろ眞實を實感を力說したもので、一切の技巧を排斥すると稱した。これは單に時代の文

學的社會のみならず一般社會に對しても偶像破壞者として認められ、その少しく以前から或る國民史的大事件のために頗る注目されてゐた社會主義者たちと共に危險思想の名によつて呼ばれ、新聞の三面記者は自然主義の名を卑猥淫蕩の同一語として用ひた。また文學界に於ても、二十年代以來の大家たる森鷗外を始めとして外國の文學に通じた大家達はこの運動の餘りに一面的なのを見て、同情的な立場には立たなかつたけれどもこの運動は時代の力によつて、成功して確かに我が國の文藝界思想界に近代主義の洗禮を與へた。この運動の闘將としては田山花袋の名を逸することは出來ぬ。二十年代に詩人として現れた島崎藤村も亦この時機にこの運動の背景の前に作家として現れた。新進でこの運動によつて世に現れた人の中に正宗白鳥氏がある。また硯友社中の人物でこの思潮によつて彼自身を生かした人は德田秋聲である。僕は近松秋江の名をも、岩野抱鳴の名をも特に數へたい。彼等は單にこの一時代の思潮によつて生きたのではなくもつと個性的に生きてゐる。

散文界がこの樣な極端な空想を排斥するのにひきかへてその運動の稍少し以前から韻文界では與謝野寛夫妻たちの新詩社が、最もロマンチックなまたヨーロッパ的な色彩で詩壇に君臨した。しかしこの華美な詩風は、それ自身の成熟とまた散文界の自然主義運動の餘波とのために徐ろに衰微して行つた。しかしこの社中から、この色彩の餘燼を傳へて後に雜誌スバルによつた青年達がある。彼等は自然主義運動がその使命を果したあとで多少の爲すべき任務を見出した

自然主義運動が絶頂に達した頃に正岡子規の遺して行つた雜誌ホトトギスによつて、自然主義とは自ら別に平淡な日常生活的な、しかしその中に一種の詩趣を求めやうとするところの一團の人々が俳句の世界から散文にその試みを廣めて行つた

夏目漱石はもとホトトギスにその文學的出發點を持つてゐた一人であつたが、初めに諧謔的な長篇によつて人に知られ、更に一時、耽美的な短篇をものしたが一轉して、心理的な平淡な作風になつた。この人はその學殖と人格とによつて一代の人々に仰がれた。

永井荷風は三十年代の初期にその名を既に幾らかは現してゐたが、海外留學から歸へると目覺ましい活動によつて一代を風靡した。折りから自然主義が稍その單調な作風に飽かれてゐた時代である。パリイ人のやうな荷風の情緒に富める物語りが愛誦され、さうして青年の作家達は暗示された。

これはほんの明治文學史の摘要である。文學的中學生のために述べた。また僕は殊更に自分と同時代に近い人の名を省いた。



ダイヤのジャック

――エレンブルグ――

米川正夫譯

本當のことを言ふと、なにもかも占ひ女のクヴーチカが悪いのである。この女も朝のうちは別に變つた事もない、人並みに『モスクヲトプ』(莫斯科燃料局)の帳簿掛りを勤めて、細かい、おつに拈くつた字で來信を記入したり、同僚のグージンと喧嘩をしたりしてゐる。グージンは配給品の交附を仕事にしてゐるが――人によつては十月の革命記念祭に、牛肉を一斤づゝも渡してやるくせに、クヴーチカには腸詰なんか押しつけるではないか――しかもそれは犬の肉で作つたものに違ひないのだ。

『今に何もかも執行委員會に告訴してやるんだから。グージンがキヤラメルを三つ腹の衣嚢へ突つこんだ事も、走り使ひのマルーシャが、廊下でほんの二三度立ち番したからと言つて、順を飛ばしてカーメルヌイ座の切符をやつた事も、みんなみんな素つぱぬいてやる。』

一口にいへば、午後四時まではクヴーチカも正直な一箇の市民で、一向そんな樣子は氣にも見えない。ところが晩になると、彼女の小部屋の中で怪しからぬ事が始まる。ほかでもない、クヴーチカは品物と引き換へに人の運勢を占ふのだ。しかもその時あまり一生懸命になり過ぎて、家屋委員から公式に禁止があつたにも拘らず、咆えたり啼いたり踊つたりするのである。一度などは偉さうな委員が頼みに來て、大きな砂糖の塊りを置いて行つたことさへある。その時クヴーチカは彼にさん〴〵惡態をついた。

『なんだ、石油なんか飲みくらつて、腹の中がすつかり燒けて了ふんだから。今に「アメリカ人形」(當時流行の玩具、浮いて來いの類)のやうに瘠せひよろけて、なめくじみたいになるに相違ない。そして、少しばかり空元氣で命令を書いてるうちに、ぴいと啼き聲を立てて、そのまゝくたばつて了ふのが落ちだよ。』

これが御意に召さなかつたので、委員は、迷信を撲滅しなければならぬなどと、脅し文句まで並べて行つた。しかしそんな事に恐れるクヴーチカではなかつた。彼女はどこへ行つても、慾得づくに離れた友達が大勢ゐるのだ。(占ひをするのは五時から八時まで、その後はしたい三昧をして疲れをなほす)。

もとはいつでも珈琲の出し滓で占つたものである。けれど皆の知つてゐる通り——ソヱートの珈琲は他でもない燒いた人參なので、出し滓が大粒で輕く動かない。だからそんなもので天啓はおろか、暗示さへも得られる氣遣ひはない。その代りまだ廢帝にならぬ王のついた古い歌留多が、何でもすつかり言つてくれる——鐵道委員會ではいつ二月分の配給が出るかといふ事も、どうしたらリードチカが色男のピーリンを、坊さんのところへ釣り寄せられるか(註—結婚)といふ事も(なぜと言つて、先生なか〱ずるい男で、『宗教は阿片である』などと大聲叫呼しながら、ご自分はちよつとの隙をものがさずに、何でも遠慮會釋なく掻きこむ働き者だからである)、また進んでは、どこから救世主がやつて來るかといふ事さへ、ちやんと豫言してくれる。この救世主は普通に考へてゐるものと違つて、一種特別なものなのである。つまり今ごろオビ河向うの森の中で慄へながら、黒莓で露命をつないでゐる正統の皇帝のことなので。

丁度このクヷーチカのところへ、先週の木曜日、厚い唇をしたド。ニャーシャが、運わるくやつて來たのである。これは公けの調査では『勞働婦人』となつてゐるけれど、やはり昔どほりブルインゾフ家の臺所で粉を捏ねたり、序にちよい〱ブルインゾフの子供達のおまるを運び出したり、自分の袴に火のしを當てたりしてゐる老婆であつた。仕事は前より反つて多くなつた。以前は下働きのフョークラと、小間使のマチリダがゐたものだが、今ではド。ニャーシャが『何もかも一人で背負つて』ゐるのである。その譯は別にむづかしい事でもない——以前ブルインゾフは請負仕事や、取引所などで派手に粟の儲をしてゐた上に、正々堂々あわてず騷がず、鑛山や砂糖の株を殖やしてゐた(あゝ、その株の甘さよ!)今でもやはり掻き込んではゐるが、『中央委員會』怖さに早業をやらなければならぬ。それから物持ちのよい奥さん連から、ロマノフ札の買ひしめもやつてゐる。みんなもう麵麭を買ふ金もない始末ゆゑ、貯金などといふ暢氣な沙汰でないのだ。見受けたところ、ブルインゾフは大して懷が不自由でもないらしく、ド。ニャーシャは籠へたゞの麵麭を入れるばかりでなく、佛蘭西麵麭だの(それも味つけにバタをしこたま入れるのだ!)昔風の脂ぎつた魚饅頭だの、そのほか鳥のやうな恰好をした玩具じみた菓子まで燒いてゐた。

當のド。ニャーシャも別になにに不足ない身の上であつたが、あれやこれやの胸に餘る物思ひに、菓子もすつかり燒け上り、袴もみんな火のしが濟んで了つた後など、いつまでもいつまでも思案に耽るのであつた。燈明の亞麻油をわづか半匙つければ事のすむ、薄い白髪を殘したこのみじめな頭が、なぜかうまで物を思はされるのだらう。まるで下女のド。ニャーシャなどでなく、分別の深い女學者か何ぞのやうである。

まづ第一の物思ひは息子のヷーシャのことである、ヷーセンカ、ヷシーリカのことである。あゝ、ヤキマンカたるセリヱルストフ家の、

階段の下についた暗い小部屋、金モールをつけた下男のグリーシャーーいや、金モールなど何でもないが、爪を磨ぎすまして狙つてゐるのに、それがどうして哀れな小娘に押し切れようか？おまけに菓子を買つたり、誓言を立てたりしたばかりか、結婚まで揺かしてやらうと約束したのである。ドゥニャーシャは恐ろしくて堪らなかつたけれど、それでも釘を商つてゐる取上げ婆さんの、シャポローフスカヤの所へも行かなければ、生れた男の子を養育院へも手放さないで、セルプーホフの近所にあるチェリーツイへ預けて、月々二ルーブリづゝ養育料を仕送つた。ヷシカが九つになつた時、ドウニャーシャは我子を床屋のフェルヂナンド、つまり同じ村から出たトリューヒンの所へ弟子入りさせた。勿論、剃りなどするのではなく、床の髪の毛を掃除するくらゐのものだつた。たゞ土曜日あたり客の立てこんだ時には、幾らか眞當に頭の掻ける職人の手があくまで、自分で客の頬に石鹸を塗つた。

しかし何者が唆したやら、この子の白つぽい毛をした頭の中に、とてつもない考へが動きはじめた。彼が石鹸を塗つてゐたのは、長いあひだでもなかつた。三箇月ばかりたつた春近い頃、トリューヒンにも母親にも一ことの相談もなく、家出をしてしまつたのである。ドゥニャーシャは泣きわめいた。しかも遠慮會釋のない高齢なので、四ところも奉公先を換へなければならなかつた。聖母原の散歩場へも行つてみたし、聖人様のところへ膜禮にも出掛けて見たが——どこでもめぐり合ふことが出來なかつた。彼女は泣くのをやめたけれど、しかし諦めはしなかつた。一體どこを探したらいゝだらう？それにもし出會つても、見分けが付かなかつたらどうしよう？一ついゝ目じるしがあるけれど、それも隠れた所にある。ほかでもない、ヷーシャの左の乳の下に赤い痣があつて、ちやうど歌留多のダイヤのやうに見えるのだ。ドゥニャーシャは若い方の門番のトリーフォンに、かう言つて頼んだ事さへある——

『もし風呂屋で胸にダイヤのついた男を見たら——すぐ引つ張つて來ておくれ——きつとうちの息子に相違ないから。』

しかしトリーフォンにしても、わが血を分けた子でもないのに、すき好んでさう〳〵行つて見てくれようはずがない。一體ヷーシャは生きてゐるだらうか？事によつたら、息災を祈つて蠟燭をあげる度に、天國にある我子の魂を悩めるばかりかも知れない。寺のアファナーシイ長老は彼女に向つて、そんな迷ひを起さずに、基督様を愛する息子の息災と勝利を祈りなさい、なぜと言うて、ヷシーリイは年頃から見ても、軍人になつてゐるに相違ないからな、とかう諭して聞かした事がある。けれど今では、考へのない若者のことゆゑ、ひよつと悪魔に摑まつてゐはしまいか。現にある信心ぶかいペルロフ——あの無慾な商人の息子も、言ふも恐ろしい罰あたりな事ながら、大それたボリシェヸックとなつて、呪ひの爪で多くの人の魂を掻きむしつてゐるではないか。

それからドゥニャーシャの第二の物思ひ、第一のものに劣らぬほど苦しい物思ひは、世の中の恐ろしい混亂と、正教ロシヤ教會の受けてゐるさまざまな苦難である。これを思ふと、胸さはぎが腹の底から込み上げて來るやうであつた。

一度ドゥニャーシャがザーツェパへ行つた時、ちやうど市場の眞向ひに、繪姿が一つ掛つてゐるのが目に入つた。それは惡人共の一番親玉で、紐のついた眼鏡をかけ、横の方を向いて指の間からにやりと笑つてゐる――こいつがどれだけ露西亞人を殺したことやら、このヘロデめ！あらう事かあるまい事か、食糧切符にまで反基督の印を捺してあるから、穢れた文字で手が火傷しさうである。おまけに、店へ行く時大事な寶物か何ぞのやうに、盗まれない用心に懐に收めて、心臓の傍へ當てて置かなければならぬ！しかしアファナーシイ長老はもつと変つた話もしてゐた――罰當りの不信心者どもが、聖フローラの御遺骸に手を觸れようとしたところ、神樣はそのやうな事を許しはなさらなかつた――惡人どもの目を晦まされたのである。偉い坊樣や信心ぶかい敬虔の人たちは、永久不壞の尊骸はいふまでもなく、その肚の中から生え出した金色の草まで見透したと言ふ。ところが、赤鬚の毒虫どもは、たゞ鋸屑をつめた人形しか目に入らなかつたのである。

ドゥニャーシャは何もかも知つてゐる。スパススキイ門のニコーラ聖者の聖像が、忌はしい赤い布を引き裂いたことも、チュードフ修道院の方から使ひしめの鳩が神殿の陣内へ飛び込んで、大きな猿つらの石像を鐵鎚で打ち倒したことも知つてゐた。世間の人は基督教を改宗して、この石像を拜むやうに無理强ひされてゐるのである。ドゥニャーシャもすんでの事で、この改宗の憂目を見ようとしたが、裏梯子にある石炭入れの物置に隠れて、夜つぴてじつと横になつてゐた。そして壁の音さへ憚りながら、心の中で『天なる父よ』をくり返してゐた。

ところが、先週の木曜日から、また新しい災難が降つて湧いた。罰當りのボリシェヴィックが一人、階段をぶらぶら歩き廻つてゐる中、その通りすがりに、ブルインゾフの客間を徴發したかと思ふと、さつそく山のやうな書類や、穢らはしい魔王の手下の似顏繪をしこたま持ち込んで、引つ越しを濟ましたのである。男は甘つたるい聲でドゥニャーシャに金槌を借りると、その穢らはしい似顏繪を四方の壁へ掛け連ねたが――偉い聖像ばかりは我慢し切れないで、片づけて了ふやうに言ひつけた。聖者クジマーやデミヤンの顏をみると、惡魔の族も恐がつまつたものと見える。一體どこの女の卑しい胎が、こんな白つぽい毛をした毒虫を生んだものやら？おまけに男は、ドゥニャーシャの足が思はずわなゝくほど、黄ろい大きな目でじいつと彼女を見つめながら猫なで聲で、『タワーリシチ、お湯を少し貰ひたいね！……』と言ふ。人を破滅の淵へ引き込まうとするのだ。ドゥニャーシャは地獄の使ひが自分のところへ最後の誘惑に來たのだと悟つて、偉大な苦難に向ふ心構へをしたのである。

つまりこの時、ドゥニャーシャは心に迷ひを起して、クヷーチカの

所へ運勢を占つて貰ひに出かけたのである。彼女は自分の配給品――粉砂糖四半斤をすつかり持つて行つた。クヴーチカは即座に肝腎かなめの事を見抜いてしまつた。ほかでもない。丁度あの白つぽい毛のボリシェヴィックに寸分たがはぬ、黄ろい目をした雄猫を吹鳴りつけたのである。

『しつ、こん畜生、とつとと出て失せろ、この肥つちよめ、散々みだらな眞似をして、牛乳を一壜たいらげて了つたぢやないか。本當に、千ルーブリがものをぺろりとやつて、くさめ一つしやしない。』

それから指の先に唾をぶつと吹いて、歌留多を切つて扇形に擴げると、見もしないでその中の一枚を抜き取つた。そしてとん〳〵とその場で足踏みをして、まるで肚の底から出るやうな聲で、ドゥニャーシャの耳へ吹き込むのであつた。

『お前の運勢はダイヤのジャックだ、最後の試みの用意をするがよい！』

ダイヤのジャックが平和の札で、夢出たい取り込み事の知らせになるのは、誰だつてちやんと心得てゐる。けれどクヴーチカはこの道にかけたら利口な抜け目のない女で、まめの出るほど歌留多を扱つて來てゐる。札などはろく〳〵見もしないで、どこか肚の中を睨んでゐるのだから、この女に分らないといふ事は何一つない。しかしドゥニャーシャに詳しく譯を話さうともしないで、たゞ別れ際に、『何だこの砂糖は！黄ざらで、おまけに濕つてるぢやないか』と口小言をいつたばかりである。

ドゥニャーシャは道々たえず思案に沈んでゐた――一體この難かしい歌留多の謎を何と解いたらよからう？元來ダイヤはスペードなどと違つて明るい色で、神樣の札と言はれてゐる。丁度ヴーシャの胸にもダイヤの紋があるから、聖母マリヤ樣のお護りを受けてゐるのだ！ところが、ジャックはあの不吉な同居人に似た所がある。鼠の尻尾のやうなちび髭など、そつくりその儘である。あゝ、結局だれが自分の運命を決めてくれるのだらう――可愛い我子から賴りがあるのだらうか、それともあの黒い爪をした惡魔から、例の印を捺した食糧切符を貰ふのだらうか？

プロホンカの傍を通りかゝつた時、ドゥニャーシャはまたもや穢らはしいものを見た。恐ろしく角ばつた裸の大男が、壁の上から睨みつけてゐるではないか。まるで、地獄で壁に突つつかれでもしたやうに、體ぢう赤いしみだらけで、臍の所から大きな赤茶けた目が一つ生え出してゐる。何といふ罰當りな！きつと印を捺す連中の頭に相違ない。繪の周りには人が一ぱいたかつてゐる。ドゥニャーシャは傍へ寄つて、

『まあ全體なにごとが持ち上つたんだね？』と訊いた。

すると一人の眼鏡を掛けた老人が（ドゥニャーシャはこの人を知つてゐる。以前オホートヌイ市場で店番をしてゐたのだ）、さも勿體らしく讀み上げた。『ダイヤのジャック社繪畫展覽會』――そしてこれが

つまりあの仲間の大將なんだよ。』と強ひてへり下つたやうな調子で說明した。これを聞いたドゥニャーシャは、地べたへ倒れもしなければ、叫び聲を立てもしなかつた。たゞ早く恐ろしい運命が一思ひにやつて來ればよい、こんなにいつまでも胸を惱まされては堪らないと、心の中で祈るばかりであつた。彼女も今は免れ難い運命の襲來を、はつきりと觀念したのである。

果せるかな、翌日の朝なにもかも一時に始まつた。白つぽい毛をした男は彼女を呼んで、さも何げない調子で、家屋委員から自分の食糧切符を貰つて來てくれと賴んだ。委員會へ急ぐので、暇がないとの事であつた。

『タヴーリシチ、一つご苦勞だが僕の代りに事務所へ行つてくれないか。』

ドゥニャーシャは悟つた――そろ〳〵やつて來るぞ！

『わたしはね旦那、いえさ、タヴーリシチ、さういふ仕事はまるつきり習つてをりませんよ。』

『何だつて？』

『何もかにもありませんよ。わたしは今まで自分の魂を、穢れのつかないやうに護つて來ましたからね。』

『タヴーリシチ、そんな事をいふと無學一掃會へ行かなくちやならないよ。』

『わたしはたとへお前さん方に釘を足へ打ち込まれても、惡魔を拜みになんか金輪際ゆきやしません。』

すると白つぽい毛の男は馬鹿に陽氣な調子で、大きな聲でから〳〵と笑ひながら、惡魔のところぢやなくて、學校へ行くのだ、リクベースといふものが出來たので、それはつまり『無學一掃委員會』を約めたものだと言つて聞かせた。實際、學問は光りといふ譬の通りで、自分もやはり無學な人間であつたが、家出をしてから本を讀み出して、何もかも自分の自力で發明した。こゝに學校の所書がある、つい近所のコローザイ・ヴールで、もとヤンターレフの茶店があつた家だ、とかう言つて書きつけを渡してくれた。（プローフ・チーホヌイチはよい時に死んだものだ、お蔭でこんな恥を見ずに濟んだ！とドゥニャーシャは腹の中で考へた）。

『自分で出掛けて行かなかつたら、民警が鐵砲をもつて引つ張つてゆくぜっ』と男は脅かした。

ドゥニャーシャはブルインゾフの細君のところへ飛んで行つた。

『奧樣、どうかわたしをあのボリシェヰックの手から助けて下さいまし！かやうかやうでございます。』

ブルインゾフの細君は自分から先に慄へ上つた。

『お前わたしを奧樣などと呼ばないでおくれ、「タヴーリシチ」とでも言ふことにしようよ。ひよつとしたら、酷い目にあはされないとも限らないからね。それにお前を助けることなんか出來やしないよ！わたしはうつかりしてゐたら、金庫の中へ入れて置いた儲出したくなつた

んだよ、何しろ十八金だからね、ほんとに！なにお前、構ふことはないぢやないか、何も非常委員會へ引つ張られて行くわけぢやあるまいし、學校ぢやないかね。仕方がないからお行き、勉強なんかしなくたつて、そつと隅つこの方に坐つてて、出來るだけそれらしい振をしてゐることだね。」

ドゥニャーシャは仕方なしに出かけて行つた。前世からの定めを遁れるわけにゆかない。見ると、年とつて苔の生えたやうな婆さん達が腰かけてゐる。ものの一寸ばかりもある牙が横の方へ突き出したのもゐれば、耳の穴から小さな森のやうな毛が、もじやもじや覗いたのもゐる。まるで置き古しになつたやうな、老人連も音なしく坐つてゐる。上の方には、よく見世物小屋で見るやうな、胸の惡い繪か描いてあつて、その下にはちよこちよこした娘つ子が一人立つてゐる。頭を短く切つて、軍服など着込んだ姿、何といふ恥さらしだらう！しかもそこでしてゐる事と言つたら、もつてのほかの沙汰である。娘つ子が手を劒のやうに振ると、信心ぶかさうな音なしい爺さん婆さんが、娘つ子について「ベー！…ア—！…パー！…」と鼻聲で呶鳴つてゐる。惡魔の繪姿を拜んでゐるのだ。

ドゥニャーシャはそこに腰かけて慄へてゐた——生きながらに地獄へ墮ちた氣持であつた。娘つ子は彼女に向いて、

「タヴーリシチ、新入りのお婆さん？言つてご覽なさい——ベー…アー……」

ドゥニャーシャは跳り上つて、魂ぎるやうな聲で叫んだ。

「お前さん、人をごまかして惡魔に拜をさせようたつて、その手は食はないよ。たとへ死んでも、穢れた言葉は口から出しやあしないから！」

ドゥニャーシャはこの上もなく綺麗ずきで、部屋を汚すのを恐ろしい罪な業と心得てゐた。猫は牛馬などに比べると、話にならぬほど音なしい畜類だが、一度などは飼猫のムルザが、書齋の絨氈の上に水溜りを拵へたからと言つて、川へ沈めて了はうとした事さへある。けれど今度だけは我慢し切れないで、いきなり部屋の眞中に唾をはいた。

「お前たちの王國などはお斷りだ！誰がお前たちを引き廻してゐるか、今こそもうちやんと分つた——ウスペンスキイ横町のわたし達の家へ越して來たあの男だ。さあ、いくらでもわたしを詛むがいゝ、わたしはあのダイヤのジャックに、あいつのどぢやう髭に、三度でも唾をひつ掛けてやるから！」かう喚いて馳け出した。

家へは歸らなかつた。家には白つぽい毛の男がゐる。多分なにもかも知つてゐて、例の印を手に取つて、髮の毛へしるしを付けるかも分らない。彼女は肌守りの十字架のほかに、怨敵退散の咒ひをなんにも知らないのである。ふと古馴染のイヴン・クジミッチを思ひ出した。分別のある相談あひ手である。ドロゴミーロフまでは遠い道だけれど、一走りに走りついた。

イヴン・クジミッチは金箔職人で、もと肩章などこしらへてゐた。そ

して星のしるしに感涙を浮べながら――『これは天の叡智ぢや、東方の賢者の手引きの光ぢや、これをばわしの腕一つで、値打のある人の肩へ授けてやるのぢや』などと言つてゐたものである。謀叛が始まつて、最後の將軍の肩から金色の星が墮ちた時、哀惜の涙を流したけれど、別に大して愚痴もこぼさず、眼を永久不壞の光體に向けて、默示錄の研究に沒頭した。封を開かれた泉にしても、日の衣を纏うた女にしても、順々に現れる四匹の馬にしても、この人ほど上手に解き分けるものはほかになかつた。彼は毎朝ギヴルトーフスキイ工場の職工から酵母を買つて、それをスモレンスキイで賣つてゐた。ドゥニャーシャの話を聞いて、イヴン・クジミッチは恐ろしく喜んだ。

『先々週の水曜日に、わしはもう兆を見たよ。白つぽい毛ではなうて、炭のやうに黑い頭をしてをつたが、しかしお前の魂を亡すやつに相違ない。わしは色々と知つてをるから、お前にそれを傳授して上げよう。なあ、エヴドーキヤ、お前はユーヂットなのぢや。あり難い神樣のお言葉で、穢れと淫慾の中を彷ひ廻つてをるホロフエルネスを退治するのぢやぞ。お前は露西亜帝國を救うて、聖い教會を護る人間なのぢや。エヴドーキヤ、大きな苦行の心構へをするがよい。わしはお前の髮の毛の周りに冠が見えるぞ！』

ドゥニャーシャは立ち上つて、恭しく會釋をした。

『イヴン・クジミッチ、わたくしにそのやうな値打はございません。わたくしは聖母昇天祭に牛乳を頂いたりなどして、いろ〳〵罪業を重ねてをりまする。』

けれど、さうしたものではなかつた。イヴン・クジミッチはちやんと心得てゐる。でたらめにあんな事を言つたのではない――全人類の敵を打ち倒し、罪深い世のために苦しむといふ、この上もなく有難い名譽が、ドゥニャーシャの頭上へ降りかゝつたのである。

毛の白つぽい同居人、これこそダイヤのジャックであつて、取りも直さず惡魔なのである。しかしドゥニャーシャも空手でもつて行く譯にゆかない。イヴン・クジミッチはいろ〳〵の方法を知つてゐる――十字架、守り袋、咒文、秘密の祈禱などである。惡魔といつてもそれほど無暗に强いものではなくて、それ〴〵弱みを持つてゐる。たとへそれを見拔かなければならない。一番やさしいのは、まだ小さい時に惡魔を退治ることである。はじめて角が生えかける時には、どれでも病氣にかゝる――にきびが出て、體がぐんにやりするのである。それからまた大きくなつた奴でも、靈驗あらたかな聖パンテレイモンの夜に、浸めをした柳の枝で引つぱたいたら、すぐに閉口してべそを搔き出す。その時ぐづ〳〵しないで、そいつを胡瓜漬の鹽水の中へ入れて、すつかり死んで了ふまで置いとけばよい。しかし、ちび惡のジャックなど退治るのには、もつと手つ取り早い法がある。イヴン・クジミッチは小さな壜を出した。その中には有難いお水が入つてゐる。坊さん達が聖山から持つて來たのだ。ドゥニャーシャの仕事は夜中にそつと忍び寄つて、寢てゐるやつを裸にした後、『ヨルダンの河にこの世の汚濁めあ

り。サタンとその下僕どもに亡びを與へ給へ、アーメン！』と口の中で唱へながら、お水を振りかければよい。さうすれば惡魔はぶる〱慄へ出して、そのうちに尻尾が千切れ落ち、腹の中から犬のやうな唸り聲が洩れると、やがて針鼠みたいに縮こまつて、ぐつたり事切れて了ふのである。

ドゥニャーシャは嚴かな晴ればれしい顏つきで、秘法の壜を手に我家へ歸つて來た。彼女はイワン・クジミッチを心から信じてゐたが、たつた一つ疑ひに苦しめられた——自分は罪ふかい取るに足らぬ凡婦であるから、自力でこの極惡の根を斷つには、證の淨め方が足りないのではなからうか。信心の淺い罪深い我身は、大望をし遂げずに倒れるのではあるまいか？彼女は神の前へ出るのに恐れ多い事のないやうに、新しい肌着を出して身に着けた。ブルインゾフの奥樣にも赦しを乞うて、まるで大齋前の謝罪日か何ぞのやうに、つゝましやかに手を接吻した。彼女は護り神聖母マリヤに熱い祈りを捧げた。

白つぽい毛の男は長いこと家へ歸らなかつた。彼は自分の正體を發かうとする人々があらうとは夢にも知らず、まだ何かの會議に、職業教育會あたりに坐り込んでゐた。彼はそこに坐り込んで、千九百三十年迄には、ペルミ縣の坑山勞働者の學校が幾つ開かれるだらうとか、その頃には皆が自覺のあるしつかりした人間になるだらうとか、さういふ事を空想してゐた。それは今のやうに、ちよつと生活したかと思ふともう狂ひの來るやうな、脆い骨とやくざな肉から出來た人間と違つて、亞米利加出來の機械同樣、懲役も婚禮も何から何まですつかり計算されてゐて、間にはしやつくり一つする事ではない。じつと坐つて勘定して見た——學校三百十八、生徒一萬六千人、學校九十四、生徒八千人、補助校四——終ひまで勘定して、バシュキール人やモルドヤ人の事まで序に考へた後、職業教育會の番人がソローリニキイで摘んで來た、何やらえ體の知れぬ木の葉を煎じた茶を一杯のみ、砂糖の代りにブリキと鯡の臭のする匙を舐め、それから計畫、議案、報告など、優に二貫目を下るまいと思はれる、重い折鞄をもつて家路を辿つた。

ドゥニャーシャは戸の隙間にぴつたり身をつけて、賊虫が寝入つてしまふのを待つてゐた。ところが、こちらは夢路に入る前に新聞を讀まうといふ氣になつた。

『おや、アルゼンチンでも同盟罷業か、世界の大火事が始まつて來たな。』とにつこり笑つて、ズボンを小まめに伸して椅子の上に置いた後、毛布の下へもぐり込んでしまつた。やがてドゥニャーシャは、まるで搖籃に眠る赤ん坊のやうな、輕い鼾の聲を聞いた。本當に惡魔といふ奴は、何の眞似でも臆面なくやつてのけるものではある！

ドゥニャーシャは、十字を切つた。そつと音のせぬやうに戸を開けて、毛布をぱつと撥ねのけると、いきなり咒文を唱へながらお水を撒きはじめた。白つぽい毛の男は跳ね起きさま、恐ろしい聲をして喚き出した。まるでイワン・クジミッチが見越した通りであつた。目を開け

ることが出來ないで、たゞ兩手を振りながら喚くばかりである。程近い勝利を信じ切つて、ド・ニャーシャはいきなり相手に詰め寄つた。けれども最後の試しが彼女を待つてゐた。夢には想像することの出來ない刄が、彼女の哀れな心臟の上へ落ち懸つて來たのである。悪魔の臟腑を喰らうてゐたジャックが開いたと思ふと、絶えず心の中に抱き續けて來たダイヤ形の痣が、ド・ニャーシャの目に映つた。血の目じるし、われとわが血でつけた目じるしである。ザシカー息子ージャックー反基督！人間の聲とは思はれぬ叫びを立てながら、彼女はいきなり外へ馳け出した、凍つた階段づたひに、がらんとした中庭づたひに、街づたひに――どこと言ふ行方も知らず、たゞ〳〵己れの呪ひを遁れたさに走つた、森の中へ雪の中へ、地獄の火の中へ。

おゝ、恐ろしい火が彼女の臟腑を燒きたゞらした！あの男も、あの金モールの四季施を着て、似顏繪を約束したり、甘い菓子など買つてくれた下男のグリーシャも、やはり悪魔であつたのだ！悪魔の胤を宿して、この胎の中で育て上げ、勿體ない基督教徒の血で生み落して、世の物笑ひになつたのか！もう神樣のお惠みもない、お赦しもあるものか。慈悲ぶかい聖母マリヤでも、泣きはらした目を外らし、傷だらけの手を雲に隱して、悪魔の思ひものとなつてサタンを乳房で養つた女に、救ひの手をさし伸べては下さるまい。

町の城門を出た[illegible]墓地のあたりで、彼女は雪の吹き寄せの中へ打ち倒れ、恐ろしい胎内の痛みを消さうとして、がつ〳〵雪を呑み込み始めた。けれども雪は口を燒いて、焔の舌は燃えしきる毒虫のやうに、彼女の腹の中をのた打ち廻り、喉もとまで込みあげて、老いぼれたか弱い胸をしめつけるのであつた。彼女は次第に深く雲の中へ埋もつて行つた。たゞ二本の足が履きへらされた赤革の靴をつけたまゝ、まるで腐つた切株のやうに、野ざらしの朽木のやうにいつまでも突つ立つてゐた！（「本當らしくない話より」）

饒舌録（感想）

谷崎潤一郎

大正十二年に罹災民となつて流れて來てから、すつかり關西に居着いてしまつて、そのせゐかだんだん上方が好きになつて來る。氣候はよし、食ひ物はうまし、人の心ものんびりとしてゐて關東よりは住み心地がよく、このくらゐならなぜもつと早く來なかつたかと、今ではさう思ふほどである。それで據ん所ない用事でもなければめつたに東京へは行く氣にはなれない。たまに出て行くと昔の友達が待ち構へてゐて、彼方此方へ招待されて御馳走になるが、酒や食ひ物がまづいので一向舌の保養にはならず、東京と云ふ所はかうもひどい田舍だつたかと今更のやうに驚ろかれる。ただ關西には昔馴染みの友達がゐないのが寂しいけれども、私はそれほど友達を戀ひしがるたちでもないから、ゐなければゐないで濟まして行かれる。此方にゐる方がうるさい訪問客がないので、却つて都合のいい點もある。さう云ふ譯で東京の方には何の未練もないのだが、ここに一つ難を云へば、關西にゐると芝居のいいのを見ることが出來ない。活動寫眞も亞米利加物は來るけれども、歐羅巴物はさつぱり來ない。つまり「食ふもの」には事を缺かないが、「見るもの」が不足である。

ぜんたい私はそんなに芝居好きでもなく、關東にゐた時分だつて毎月缺かさず見に行くほどではなかつたのだが、さて關西へ來てしまつて見ようと思ふ時に見られないとなると、無闇に見たくなるものである。大阪にだつて芝居がないことはないぢやないかと云ふ人もあらうが、いくら上方カブレがしてもどうもあれまではカブレられない。鴈治郎は東京で二三度見たけれども、いいと思つたのは河庄の紙治の花道の出だけである。昔高等學校の頃、故大貫晶川と一緒に歌舞伎座へ鴈治郎を見に行き、あの揚げ幕から紙屋治兵衞が出て來る形が「魂抜けてとぼとぼと」と云ふ心持ちをそつくりそのまま表はしてゐるので、その時はちよつと感心させられたが、幕が進むに從つて技巧がうるさくコセコセしてゐて、餘計な詮鑿や穿き違へが多く、することなすこと悉く花道の印象を打ち壞してしまつた。得意の出し物だと云はれ

る「引窓」も見たが、これなどは一層下らない。大阪人はあれを名優名優と持て囃すので、當人もその氣になり、ハタの者も大物扱ひにするものだから、自然何となくふくらみが出來、大きい感じがするやうなものの、脚本の解釋も幼稚であり、技巧の種類も底が知れてゐて單純であり、あのくらゐの頭と腕なら東京の俳優にはいくらでもありさうに思へる。單純でも生一本な美しさ、古典的の厳かさがあれば別だが、單純な癖にイヤに末梢神經的で濁つてゐるのは遣り切れない。鰹の鹽辛ならばいいが鴈治郎のは餡ころ餅の鹽辛である。これを喰はされては顏を顰めずにはゐられない

鴈治郎にして猶且然りだから、鴈治郎ほどのふくらみや潤みのないその餘の若輩に至つては、嘸かし嫌味であらうと思ふ。さればと云つて勘彌や猿之助に拮抗するほどの頭腦あり野心ある青年俳優も見當らない。從つて舊劇も駄目、新劇も駄目である。歌舞伎俳優以外の劇團では寶塚に國民座とか云ふものがあるが、これとて築地小劇場のやうな眞面目なものでも高級なものでもないらしい。そこで私は、東京へ行くと舌の保養をあきらめて眼の保養をすることにしてゐる。「今日は何處其處の料理を御馳走しませう」と云はれると、「そのくらゐなら芝居を御馳走して下さい」と云ふ。大阪にだつて東京の役者が來ることは來るが、困つたことには私が一番好きなのは菊五郎なのである。この人は先年一二度寶塚へ來たけれども、どう云ふ譯か東京で見るほど面白くなく、それに上方は嫌ひと見えてもうあれつきりやつて來ない。中車、梅幸、吉右衛門が見られても、菊五郎が見られなければ私に取つては芝居がないのも同然である。上方にうまいものがないと云はれる鯛、天ぷら、そば等はそれぞれ相當に食へる家のあるのを見つけた。だから上方に不足なものは「菊五郎の芝居」一つである。

○

菊五郎の藝に就いては私のやうなしろうとが今更喋喋するまでもないが、私は第一に彼の藝術家としての態度に多大の尊敬を拂ふものである。さうして彼の藝に關してはいろいろの讃辭を聞くけれども、彼の態度の立派さに就いては、特に際立つて注意したものがないやうに思はれるのは、どう云ふ譯か。それともそんなことは誰でも云つてゐることで、私が寡聞なのであらうか。

菊五郎は若い時分からしばしば傲慢であると云はれた。吉右衛門をいぢめると云ふやうな噂もあつて、そのために同情が吉右衛門に集まり、彼は世間から憎まれたやうな時代もあつた。私は一二度樂屋で會つただけで、個人的に深く知るところはないのであるが、しかし公人の出所進退と云ふものは、――それが前後一貫した立派なものであるかどうか。狹しいところや、曖昧なところや、表裏反覆常なきところがあるかどうか。と云ふことぐらゐは、そんなに親しく接觸しないでも、遠く離れて、長い眼で見てゐれば分るもので、「人豈んぞ廋さん哉」である。思へばもう三十年近くも前のことだが、その頃日本橋に

住んでゐた私は、先代菊五郎の愛子菊之助の葬式が水天宮の近所を通るのを、乳母に連れられて見に行つたことがある。何でもびしよびしよと雨の降る日で、長い行列が濱町の中之橋の方から人形町の方へ練つて來た。會葬者は大概俥で、幌に隠れてゐたけれども、歌舞伎役者の素顔が見たさにその大雨をものともしない見物人が集まつて來て、往來はたいへんな混雜であつた。狹い道路の兩側が雨傘で一杯に埋まつて、ぎつしり詰まつた人込みの中を押し分けるやうにして行列が通る。幌を掛けた人力車が何臺も續く。その時今の菊五郎は、菊之助の弟で丑之助と云つてゐた。私より一つ歳上の彼はまだやつと十歳前後だつたであらう。明治何年のことだつたか確かな記憶がないのであるが、「あれ、あすこにゐる兒が丑之助ですよ」と云つて、乳母が私に教へてくれたのは、可愛い圓顔の色の白い、子供であつた。(或ひはお白粉をつけてゐたかも知れない。)その頃は堅儀の家の少年でも大人のやうな長い袂の着物を着、不斷着にも黃八丈や絲織などの絹物を纏ひ、獻上の角帶に表着きの下駄を穿くと云ふ時代だつたから、まして役者の子の丑之助は兄の葬式の際でもあり、黑七子の紋附に仙臺平の袴を穿いてゐたであらう。しかし私に見えたのは幌の隙間から窺はれるほんの肩から上だけであつた。私はその時その圓顔の子供の丑之助が、小さな黑の山高帽を冠つてゐたのが馬鹿に可愛らしく、「自分も冠つてみたいなあ」と羨ましく思つたことを未だにはつきりと覺えてゐる。私が彼の存在を知つたのは實にその時からであつた。さうして今も菊五郎の名を聞くと、小さな山高帽を冠つた丑之助の姿を想ひ出し、俥の幌へ雨がざあざあ降りそそいでゐる光景が眼前に浮かぶ。當時木挽町の芝居茶屋に菊岡と云ふのがあつて、私の家ではそのお茶屋から歌舞伎座へ行つたものだが、どう云ふ譯か歸りにはよく雨に降られて、母に抱かれて俥へ乘ると、役者の口跡や三味線の餘韻がまだうつとりと尾を曳いてゐる私の耳に、雨の脚がパラパラと幌を打つのが聞え、暗くじめじめと鎖された俥の中には母の着物に沁み込んでゐる樟腦の匂ひと幌の匂ひとが融け合つて、甘く蒸すやうに鼻を衝く。……そんな幼い頃のたわいのない出來事までが、丑之助の幌を想ひ出すにつれて想ひ出される。……

大分横道へ外れてしまつたが、その可愛らしい丑之助は菊五郎になつてからすつかり憎まれつ兒になつた。累代の名門の秘藏つ兒であるから、下つ葉の者に坊つちやん坊つちやんとちやほやされていい氣になり、だんだん増長して傲慢不遜になると云ふことは有りがちだけれども、しかし今日になつてみると、菊五郎の傲慢は單なる坊つちやんの空威張りや上つ面の生意氣ではなく、もつとしたたかな氣骨を藏してゐるやうである。俳優の中には名門の子でも變に如才なく、隨分腰の低いのがあるが、そんなのは寧ろ卑屈で不愉快である。藝術家として傲慢の名を博することは決してその人の恥辱ではない。ただその傲慢の鼻つ柱をさまざまの辛苦艱難に遭つてもヘシ折られずに、最後まで押し通して行くと云ふ覺悟があつての傲慢ならば、世間も遂には服

せざるを得ないであらう。さうしてさう云ふ傲慢は眞に實力あり自信ある人でなければ、眞似ようとしても眞似ることは出來ない。菊五郎は勘彌に逃げられ、三津五郎に背かれ、しまひには吉右衛門に捨てられた。これは世說に傳ふる如く彼が傲慢な後輩を壓迫し、威張り散らした結果であるか否かを知らぬが、たとへその噂の通りであつたとしても、彼は自分の行動に就いては全責任を背負つて立ち、逃げられたら逃げられたでビクともせず、立派に跡を引き受けて獨立獨行してゐるではないか。徒らに俗衆に媚び、ハタの思はくを氣がねする職人根性の多い中で、たまにはかう云ふ背つ節の人もゐた方がいい。

○

帝劇の一派を除いて殆んど凡ての歌舞伎俳優が松竹に屬してゐる今日、菊五郎一人が頑張つてゐるのは、故田村氏に對する義理合ひでもあるのか、それとも單なる江戸つ兒の意地つ張りであるのか。義理を重んじてのことだとすれば、彼の人格にいよいよ輝やきを添へる譯でありただの意地つ張りだとしても斯うまで徹底的なのは偉とするに足りる。贅六に對する江戸つ兒の反感なぞは時勢後れの小感情だが、その感情を完全に實行にまで持ち來たしてゐる力量に至つては敬服させられる。而もその力量か、彼の場合には政治的手腕でも經濟的手腕でもなく、一に藝術的精進の力であり、その意地つ張りが俳優としての彼の純粹さを傷けないのみならず、却つてますますそれと一致することになるのだから、一概に小感情とも云ひ切れない。その意地に終始することが、菊五郎に取つては案外生きがひのある、有意義なことかも知れない。彼の門閥と地位とがあつてこそ始めてあんな眞似が出來るのでもあらうが、しかしさうだからと云つて、菊五郎の境遇に生れれば誰にでも出來ると云ふものではない。金持ちの家に生れて親の遺産を有り餘るほど受け繼いでゐても、金錢にキタナイ奴はある。菊五郎とていろいろの方面からいろいろの誘惑があるであらう。彼の技量を以てしたら、孤城落日の市村座に立て籠つたり、自腹を切つて多くの門弟を支へたりしないでも、もつと算盤の取れる道はいくらもあらう。

歌右衛門などは金のためか野心のためか孰方か分らないが、反覆常なき時代があつた。節操と云ふものがさまで問題にされてゐない俳優社會のことであるから、それほど批難を蒙らず面目を損することなしに、身をカハすことも出來るであらう。それをあやつて居るところは、藝の力以上のもの、――一個の人格の力である。私は現代の在らゆる藝術家を見渡して、菊五郎の場合ほど藝と人格とがぴつたり一致してゐる例はないやうに思ふ。彼は實に何處へ出しても恥かしくない見上げた人間であるのみならず、まことに羨しい藝術家である。

○

私には舞踊のうまいまづいはよく分らないが、菊五郎のやうに際立つて傑出したものは分るやうな氣がする。彼の舞踊は見物を醉はせる

前に自ら醉ひ、陶然として藝術三昧の境に飛遊してゐる感じがする。(技巧は彼に劣るけれども石井漠君にも此の感じがある。)あすこまで來るにはやつぱり人格の力でなければ駄目であらう。私は彼の舞踊を見ると、立派な文學や美術品に接した時と同樣に、一種の藝術的興奮を覺える。精神的にハチ切れるほど充實してゐなければ、小手先の藝でこんな感銘が人に傳はるものではない。

云ひ洩らしたが、彼は品行方正の方で、あれだけの美貌と肉體と藝名とがありながら、若い時分にも浮いた噂はあまりなかつたと聞いてゐるこれも俳優には珍しいことである。

兎にも角にも菊五郎は、藝術家に限らず、いろいろの人間がお手本にしていい人である。

○

菊五郎の藝風は、小說家にしたら何處か里見弴君に似てゐないだらうか。「まごころ」を振り廻さないところは、前者の方が垢拔けがしてゐるが、聰明なところ、熱つぽいところ、すつきりとして銳利なところ、男性的でありながら線が細かくて氣の屆くところ、そして時々自分の實力を恃むあまり、穿き違へて脫線するところ。

小說家にも女形になれる人となれない人、踊りのある人とない人がある。里見君は女形になれる人で、且踊りのある人である、と云ふやうな氣がする。

○

昔孔明と同じ時代に生れて、いろいろな方面で孔明とよく似てゐながら、而もどの方面でも少しづつ孔明に劣つてゐた周瑜と云ふ男は實に不幸だ。外の時代に生れれば一流の人物として通つたものを、孔明と云ふ途方トテツもない空前絶後の人間と時を同じうして生れ合はせて、おまけにタイプが似てゐたのでは、周瑜の身になつたらとても遣り切れなかつたであらうと、芥川君が云つてゐた。

菊五郎と猿之助とは聊か孔明と周瑜の感がないであらうか

私は猿之助も好きな俳優の一人である。その教養、その頭腦、その技量、孰れの點でも申し分はない。ただ氣の毒なのは、彼がいろいろの方面で菊五郎に似、而も少しづつ劣つてゐるかに見えることである。彼の容貌は菊五郎タイプであるが、菊五郎ほど整つてゐない。彼の肉體は菊五郎の如く健康で、筋肉が發達してゐるが、菊五郎よりは少しばかり身長が低い。彼も名門の出であるが、菊五郎ほどの累代の名門でない。年齡もほぼ同じであつて、彼の方が僅かに若い。さうして彼も亦、舞踊を得意とし、熱つぽくつて而も纖細な藝風を持ち、新時代に對する一隻眼を備へてゐる。菊五郎がゐなかつたら、彼が菊五郎の地位と人氣とを得ることは、必ずしも難事でなからう。彼の出所進退は菊五郎と反對に、松竹を出て獨立してみたり、又松竹へ逆戻つたり、キネマに首を突つ込んだりして變幻極まりなく、ひどく無節操

に見えるが、それも彼の場合には同情出來る。彼の才幹を以てすれば滿々たる野心を抱くのは當然であり、上に菊五郎が居られては功名を急いで焦慮するのも尤もである。二月の歌舞伎の件內なども、餘り人もなげに縱橫無盡にやり過ぎて不評判だつたが、あれも野心の畸形的現はれだとすれば、私は寧ろその點を買ひたい。これが劇壇だからいいやうなものの、若し文壇で私が猿之助の地位に置かれ、菊五郎のやうな作家があつたらどうか。下手をマゴつけば氣が違つて自殺するかも知れない。思つただけでも竦然とする。

しかし周瑜は自ら孔明に及ばずと知つて浩嘆したのだが、自信の强い猿之助はさうは思つてゐないであらう。彼は周瑜よりも勇敢であり、それだけに幸福でもある。

周瑜は孔明に劣つてゐても、悉く孔明に掩はれてはしまはずに、後世になれば矢張り周瑜だけの價値は認められてゐる。猿之助たる者さう焦るには及ばない。何と云つても彼に菊五郎ほどの品格がないのは、焦るせゐもたしかにあらう。これを要するに猿之助の存在は劇壇に於ける一つの運命悲劇である。

綠蔭閑語

正宗白鳥

一、「銀行取付」

西鶴は世態人情に通じてゐた。浮世のさま〴〵な方面の出來事を知つてゐた。しかし、彼れのいろ〳〵な著書に掲載されてゐる世上の事件は、必しも彼れの直接の見聞によつたのではないらしい。空想から產みだしたものも少くないやうであるし、源氏や伊勢などの平安朝の物語からの飜案や、支那の小說雜話の燒直しも少くないやうである。「日本永代藏」や「當世胸算用」の類は、新聞の雜報見たいなものである。

私は、この頃の經濟界の動搖、銀行の破綻に關する新聞の社會面のいろ〳〵な記事を讀んで、西鶴の目をもつて見たなら、「銀行取付」の一卷の浮世物語が書上げられると思つた。徳川幕府時代に大晦日を主題として、人さま〴〵な胸算用を描いた作者の鋭い眼光を、今日の時世に注がせたなら、「銀行取付」を中心にした人心のさま〴〵は、好個の題目となるに違ひない。金錢に對する執着、不安、煩悶、喜悅が、あるひは悲劇の姿を帶び、あるひは喜劇の色をもつて現はれてゐたらしい。金錢が心靈となつて人間を活躍させてゐたのだ。私は田舍の小銀行が破綻した時に、自らその渦中にあつて、周圍の光景を目擊したのであつたが、今度は、預金者が、破綻の豫感に襲はれ、風聲鶴唳に戰いて狂奔したのであるから、そこに、一層多く人間心理の微妙な作用を見ることが出來る。

金といふものを人間社會に横行させたのがいけないのだ。「胸算用」や「銀行取付」に現はされたやうな無用な人間苦を、人間が味はゝされることになつたのも、人類發生當時には存在しなかつた金錢といふものを當世の便利のために發明したのがいけないのだ。支配すべき筈の金錢に人間は支配されるやうになつた。……かういふと、議論が根本的になるが、最早、金は人間の血肉に喰入つてゐるので、理想家の說法くらゐで、その桎梏が薄らぐ見込みはないのである。藝術の香り

も金錢の臭みに浸蝕されるのを免れない。

詩は最も金から遠ざかつたものとされてゐた。銅臭を帯びることは詩の品位を傷つけるとされてゐた。だから、支那の詩には恬淡無欲を詠ずることが古來の常套になつてゐた。しかし、今日は、詩だつて歌だつて、現實の人間を現はす上は、自ら銅臭を帯びなければならなくなつてゐる。一首いくらの原稿料で、和歌でも發句でもつくらなければならぬ世の中では芭蕉や西行のやうな態度で、感慨を洩らして安んじて生きてはゐられなくなつてゐる。

私は、時としては、人間を色餓鬼として見ることがある。しかし、それよりも、金錢欲の餓鬼として見ることが多くなつた。自分の周圍に目を注いでも、虚飾を脱しお愛想を剥いだなら、金錢欲が瀰漫してゐるやうに感じることが多い。男が女を得、女が男を得た時の喜悅の現はれに詩を讀むことが出來るならば、人間が金貨や紙幣を獲得し喪失した時の喜怒哀樂の感情にも、現代の新しい詩人は、そこに清新な詩を感じるであらう。すべての本能が詩の源となるのなら、最も強烈なる本能となつてゐる金錢欲も、詩とならない譯はない。それを銅臭として卑むのは、舊來の常套に捉へられてゐるのだ。

私は、大震火災の際の人心の動揺を想像したと同樣に、「銀行取付」當日の都會の人心の動揺を想像した。生命でも金錢でも愛人でも、有つてゐるものを失ふことの恐れが、人間の娑婆苦である。やうやく引出した金を電車の中に置忘れたり、泥棒に取られたり、あるひは、引出した金の仕末に困つて、夜も寢ずに屈托してゐたりする愚らしい所行だつて笑ひ事ではない。

私は人間としてさういふ境地を脱却することの、如何に難きかを、自ら痛感してゐる。

二、我若し王者なりせば

私は、先日、銀座シネマで、「ウインダミヤ夫人の扇」を見た。それから、南明館で「我若し王者なりせば」を見た。前者は、オスカー・ワイルドの原作を讀んでゐないので、この映畫が、どこまで原作を生かして、どこまで原作を傷つけてゐるか分らなかつたが、多分「毆られる彼奴」程度に映畫化されてゐるのだらうと思はれた。扇子の應用は巧みであるが、それ以外は有振れた通俗物である。「ペン、ペンシル及び毒藥」「ドリアングレーの肖像」に現はれてゐるやうなワイルド特有の鬼才の發露は、これでは見られなかつた。映畫によつて、外國の傑れた小說や戲曲を窺はふとするのは間違つてゐると思つた。原作をよく知つてゐたなら、映畫によつて、ある部分の印象を強くされるかも知れないし、あるひは、原作の弱點を擴大して見ることを得る便利があるかも知れないが、歐洲大文豪の名作も、映畫化されたものによつてのみ、極東の青年子女に鑑賞されるやうなのは悲しむべきことである。

私は、獨逸映畫の「オセロ」を見た時には、日本の俳優によつて演

ぜられた「オセロ」よりも、場面の構造や俳優の容貌動作が、原作を生動させてゐるやうに思はれたが、ユーゴーの「ノオートルダムのせむし男」を映畫で觀た時には、ユーゴーの小說の通俗性をまざ〳〵と見せられてゐるやうな感じがした。彼れは構想の才に富んでゐた。人間や部分々々の背景を誇張し强調して敍することが巧みであつた。映畫向きの作者であつた。日本で云ふと、曲亭馬琴と並べていゝ作者のやうに思はれる。彼れの「哀史」は、和蘭(?)のある僧侶が、聖書と同一視して禮拜してゐたさうだが、それは、彼れが通俗說教の材料になるやうなことを書いたゝめなのだ。彼れは、馬琴の如く偉大なる通俗作家であつた。

「我若し王者なりせば」を觀ると、意外にもそれは、十五世紀の泥棒詩人フランソア、ヴイロンを主題としたものだつたので、私は少からぬ感興を覺えた。この奇怪なる佛國の詩人によつて、中世紀の歐洲文學史の幕が閉ぢられたのであつて、彼れは、ダンテが中世紀の壯嚴美と理想とを結晶して唄つたのに反して、その時代の苦惱と恐怖とを總括して唄つたのだと云はれてゐる。スヰンバーンが唄つてゐる如く、「娼婦が彼れの乳母であつた。」盜賊にもなつた。人殺しをもした。屢々牢獄に投ぜられたが、奇蹟の如く脫獄した。何時何處で死んだか、まるで分らないのである。ボードレールやヴエルレーンや、あるひはポーよりも、もつと徹底的に人間苦を表現してゐるのではないかと、私は想像してゐる。ところが、今度映畫で見ると、彼れは、シングの「プレーボーイ」に似たやうな快活性を具へて、その行爲は米國人好みの探偵物の人物となつて奇智を弄してゐる。脚色者はヴイロンを膚淺な遊び人にしてしまつた。「彼れの詩は憂鬱に浸つてゐた。彼れは人生を嘲笑し、自己の罪惡を誇り、つねに斷頭臺の影で詩をつくり、寸刻も死の恐怖を忘れたことはなかつた。」「プレーボーイ」や、ショーの「惡魔の弟子」のやうな、陽氣な、英雄氣取りの男子ではなかつたに違ひない。……それが、この映畫では、遊戲的英雄にされてしまつた。さうしなければ、米國の映畫鑑賞家や日本のシネマファンの氣に入らないのであらう。

私は、フイルムに映るバリモアの顏と、文學史に挾まれた、冷嘲を脣邊に湛はせたヴイロンの愚鈍な相好とを比較した。「ヴイロンとシャロット姫との目出たき契りはここに結ばれた」と、かうしなければ、映畫の御見物が滿足しないので、ユナイテッドアーチスト社の通俗脚色者がさうしたのであらうが、詩人ヴイロンに、目出たい契りも何もあつたものか。……彼れは、地獄の業火のなかを果てしなく旅してゐるやうな人間であつた。

三、女性の演說

私は一夜、報知講堂で開かれたプラトン社主催の女子演說會を傍聽した。會場の後端から滿員の聽衆席を見渡してゐると、今日の青年男女の頭髮の標本の陳列を見てゐるやうで面白かつた。私の頭は少年

時代から引續いて角刈にされてゐるのだが、こんな頭はすでに天保頭になりかゝつてゐる。東京の中心地にある一流の理髪店では、かういふ頭はあまり取扱はれなくなつてゐるので、刈方が下手になつた。明治の初期に、チヨン髷から無雜作にザンギリ頭になつた日本男子も、年月を經るにつれて、次第に頭髪美を保たうとするやうになつた。一概に嗤ふことは出來ない。

壇上に現はれた名流婦人の演説は、概して貧弱であつた。此處に集まつた聽衆は、婦人から名説を聽かうとしてゐるのではなくつて、容貌風姿を仰見るためなのであらうが、現今の日本の婦人文學も、またその程度に止まつてゐるのだ。餘興程度であるのだ。音樂や繪畫の方面で、婦人が婦人特有の技能を發揮してゐる程度に、文學に於て婦人の才華があらはれてゐるのではない。……多くの婦人雜誌が、自傳だの隨感だのをやたらに書かせて、賣物にするのをいゝことにして、虚名と原稿料目あてに、まはらぬ筆で物を書く女が多くなつたといふだけのことだ。

本當にしつかりしたものを書かうとする婦人作者は、婦人雜誌のおだてに乘つて、色取りの見せ物にされて、一ぱしの文學者を氣取ることの危さを反省するがいゝ。樋口一葉は艱苦の生を過したが、あの頃は、演説會も婦人雜誌もなかつたので、あれだけの彼女の文學を産むことが出來た。

四、飜譯文學

文學は原語で味はゝなければ、充分にその眞味の會得されない筈であるが、しかし、世界の名作を一々その原語によつて讀破することは絶對に不可能である。我々の生涯は短い。ことに、文字や言語の系統の異つてゐる歐洲の語學を徹底的に研究してから、文學に手をつけようとしたなら、肝心の目的を達するまでに墓に入つてしまふであらう。我々は歐洲の一ケ國の言語を一通り讀みこなすだけでも容易なことではない。飜譯文學の必要な所以である。いくつもの語學の端くれを學んで、腦力と時間を銷費するよりは、その間に飜譯で諸國の名作に接した方がいゝと、私は思つてゐる。

それで、日本ではます／＼飜譯事業の盛んになることを望んでゐる。古今の傑作を網羅した飜譯叢書の續出することを喜んでゐる。しかし現在の豫約の申込みには應じる氣にはなれないのを遺憾としてゐる。

私は、これまでにも、歐洲文學の日本譯を隨分購讀して、お陰で、新知識を得てゐるのであるが、杜撰な飜譯に呆れたことも多い。ドストエフスキーとバルザツクとの小説は、私に取つては、最も讀みづらい面白くない文學なのであるが、かつて、バルザツクのある日本譯を讀んで、その用語の拙劣晦澁で、殆んど文章の體をなしてゐないのに驚いたことがあつた。誤譯の有無は兎に角、バルザツクがいくら文章が下手であつても、まさかこんなに粗雜な辭句をならべてはゐないだ

らうと思はれた。早稲田卒業後、二三年間、私は飜譯によつて小使錢を稼いでゐたのであつたが、その頃、バルザックのある短篇を「むごい助命」と改題して飜譯して、文藝倶樂部へ寄稿したところ、馬場孤蝶氏によつて、「明星」誌上、「蒲鞭」といふ題目の下で、手酷しく誤譯指摘をされた。それは一々的中してゐたので、自己の無學を反省する外なかつた。それで、私は小使錢取りの飜譯を斷然思止まることにした。

爾來二十數年の歳月が經過した。今日バルザックの拙譯を讀んで、私は過去の自己の誤譯を追想した。そして、外國の、自分の愛讀してゐる二三の名作を飜譯して、往年の恥をそそぎたいやうな氣持がした。

歐洲諸國の相互間の飜譯とは違つて、日本の文字をもつて歐文を譯することは、一種の創作と云つてもいゝのである。二葉亭や鷗外の飜譯文學は、彼等の創作以上の文學であつた。「卽興詩人」の如きは、飜譯と云ふよりも、日本文學の古典として永く傳へらるべきものである。坪内博士の沙翁譯も、日本化されたる沙翁として、一種の風格を具へてゐる。

飜譯者も豫約出版が大成功を遂げて、物質的に空前の報酬が得られることになつたさうだが、それなら、われ〳〵が信頼し得られる程度の飜譯を出して貰ひたい。多量に賣れるとなると責任も重い譯だ。この頃の廉價本によつて、はじめて外國の名作に接する讀者も多いのであらうが、それ等の人々をして、外國の名作はこんな拙いものかと思はせるやうでは、譯者も原著者に合はす顔がない譯だ。歐洲の原作家も、日本文については明き盲人であるなさけなさに、どんなに譯されてゐるか知りもしないで、「おれのものが日本にまで飜譯されてたのは悦ばしい」と感謝してゐるとすると氣の毒である。時節柄、腐敗肉や不良飲料の檢査の必要がある如く、飜譯に對しても、新たなる「蒲鞭」が必要である。

異國の古今の文學を、日本人でも容易に讀み得られるやうになつたのは、文運隆盛の結果で、私など最も喜んでゐるのであるが、それについて些少の不安を感じるのを如何ともし難いのである。私は鷗外二葉亭の飜譯を推讃したが、あの飜譯振りを、現今の飜譯家の模範にせよといふのではない。古い漢文や國文の拘束を脱して、文章が自由になつたのは、飜譯の上にも好結果を齎してゐるのであるが、ろくに日本文の書けない人の飜譯は讀むに堪へないのだ。この頃私の讀んだ飜譯のうちでは、山本有三氏の「死の舞踏」や、岸田國士氏の最近の佛蘭西劇の飜譯は立派な創作の出來る人の手に成つてゐるほどあつて、原作の力や匂ひが感ぜられるやうな氣がした。

文藝的な、餘りに文藝的な

芥川龍之介

二十九　再び谷崎潤一郎氏に答ふ

僕は谷崎潤一郎氏の「饒舌錄」を讀み、もう一度この文章を作る氣になつた。勿論僕の志も谷崎君にばかり答へるつもりではない。しかし私心を挾まずに議論を鬪はすことの出來る相手は滅多に世間にゐないものである。僕はその唯一人を谷崎潤一郎氏に發見した。これは或は谷崎氏は難有迷惑であると云ふかも知れない。けれども若し點心並みに僕の議論を聞いて貰へれば、それだけでも僕は滿足するのである。

不滅なるものは藝術ばかりではない。僕等の藝術論も亦不滅である。僕等はいつまでも藝術とは?云々のことを論じてゐるであらう。かう云ふ考へは僕のペンを鈍らせることは確かである。けれども僕の立ち場を明らかにする爲に暫く想念のピンポンを弄ぶとすれば、——

(1)　僕は或は谷崎氏の言ふやうに左顧右眄してゐるかも知れない。いや、恐らくはしてゐるであらう。僕は如何なる惡黨か、驀地に突進する勇氣を缺いてゐる。しかも稀にこの勇氣を得れば、大抵何ごとにも失敗してゐる。「話」らしい話のない小說などと言ひ出したのも或はこの一例かも知れない。しかし僕は谷崎氏も引用したやうに「純粹であるか否かの一點に依つて藝術家の價値は極まる」と言つたのである。これは勿論「話」らしい話のない小說を最上のものとは思つてゐない云々の言葉とは矛盾しない。僕は小說や戲曲の中にどの位純粹な藝術家の面目のあるかを見ようとするのである。(「話」らしい話を持つてゐない小說——たとへば日本の寫生文派の小說はいづれも純粹な藝術家の面目を示してゐるとは限つてゐない。)「詩的精神云々の意味がよく分らない」と言つた谷崎氏に對する答はこの數行に足りてゐる筈である。

(2)　谷崎氏の所謂「構成する力」は僕にも理解出來たやうに感じて

ゐる。僕も亦日本の文藝に――殊に現世の文藝にかう云ふ力の缺けてゐることを必しも否むものではない。しかし若し谷崎君の言ふやうにかう云ふ力の現れるのは必しも長篇に限らないとすれば、前に僕の擧げた諸作家もやはりかう云ふ力を持ち合せてゐる。尤もこれは比較的な問題であるから、或標準の上に立つて有無を論じても仕かたはないであらう。なほ又僕の志賀直哉氏に及ばないのを「肉體的力量の感じの有無にある」と云ふのは全然僕には賛成出來ない。谷崎氏は僕自身よりも更に僕を買ひ冠つてゐる。「僕等は僕等自身の短所を語るものではない。僕等自身語らずとも他人は必ず語つてくれるものである。」――メリメェは彼の書簡集の中にかう云ふ老外交家の言葉を引用した。僕も亦この言葉を少くとも部分的に守るつもりである。

(3)「ゲエテの偉いのはスケールが大きくて豁且純粹性を失はないところにある」と言ふ谷崎氏の言葉は中つてゐる。これは僕にも異存はない。しかし雜駁である大詩人はあつても、純粹でない大詩人はない。從つて大詩人を大詩人たらしめるものは、――少くとも後代に大詩人の名を與へしめるものは雜駁であることに歸着してゐる。谷崎氏は「雜駁な」と云ふ言葉を下品に感じてゐるのであらう。それは僕等の趣味の相違である。僕はゲエテに「雜駁な」と云ふ言葉を與へた。しかしそこには必しも「騷々しい感じ」を含んでゐない。若し谷崎氏の語彙に從ふとすれば、「包容力の大きい」と云ふ言葉と同意味にしても善いのである。唯この「包容力の大きい」と云ふことは古來の詩人を評價する上に餘り重大視されてゐはしないであらうか？　ボオドレエルやラムボオを大詩人とする一群はユウゴオの上に圓光をかけない。僕は彼等の心もちに少からず同情してゐる。(元來ゲエテは僕等の嫉妬を煽動する力を具へてゐる。同時代の天才に嫉妬を示さない詩人たちさへゲエテに鬱憤を洩らしてゐるのは少くない。しかし僕は不幸にも嫉妬を示す勇氣もないものである。ゲエテは傳記の數へる所によれば、原稿料や印税の外にも年金や仕送りを貰つてゐた。彼の天才は暫く問はず、その又天才を助長した境遇や教育も暫く問はず、最後に彼のエネルギイを生んだ肉體的健康も暫く問はず、これだけでも羨しいと思ふものは恐らく僕一人に限らないであらう。)

(4)これは谷崎氏に答へるのではない。僕等二人の議論の相違は「おのおの體質の相違になりはしないか」と云ふ谷崎氏の言葉に對し、ちよつと感慨を洩らしたいのである。谷崎氏の愛する紫式部は彼女の日記の一節に「淸少納言こそ、したり顏にいみじう侍りける人、さばかり賢しだち、まなかきちらして侍るほども、よく見れば、まだいと堪へぬことおほかり。かく人にことならんと思ひ好める人は、かならず見おとりし、行く末うたてのみ侍れば、……もののあはれにすすみ、をかしきとも見すぐさぬほどに、おのづからさるまじく、あだなるさまにもなるに侍るべし。そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよく侍らん」と云ふ言葉を殘した。僕は男魂陸々たる淸家の少女を以て任ずるものではない。けれどもこの文章を讀み、(紫式部の科學的數

賞は體質の相違に言及するほど進步してゐなかつたにしろ）はるかに僕を戒めてゐる谷崎氏を感じずにはゐられなかつた。今再び谷崎氏に答へるのに當り、かう云ふ感慨を洩らすのは議論の是非を暫く問はず、「饒舌錄」の文章のリズムの堂々としてゐる爲ばかりではない。往年深夜の自動車の中に僕の爲に藝術を說いた谷崎潤一郎氏を思ひ出したからである。

三十 「野性の呼び聲」

僕は前に光風會に出たゴオガンの「タイチの女」（？）を見た時、何か僕を反撥するものを感じた。裝飾的な背景の前にどつしりと立つてゐる橙色の女は視覺的に野蠻人の皮膚の匂を放つてゐた。それだけでも多少辟易した上、裝飾的な背景と調和しないことにも不快を感じずにはゐられなかつた。美術院の展覽會に出た二枚のルノアルはいづれもこのゴオガンに勝つてゐる。殊に小さい裸女の畫などはどの位シャルマンに出來上つてゐたであらう。——僕はその時はかう思つてゐた。が、年月の流れるのにつれ、あのゴオガンの橙色の女はだんだん僕を威壓し出した。それは實際タイチの女に見こまれたのに近い威力である。しかもやはりフランスの女も僕には魅力を失つたのではない。若し畫面の美しさを云々するとすれば、僕は未にタイチの女よりもフランスの女を採りたいと思つてゐる。……

僕はかう云ふ矛盾に似たものを文藝の中にも感じてゐる。更に又諸家の文藝評論の中にもタイチ派とフランス派とのあるのを感じてゐる。ゴオガンは、——少くとも僕の見たゴオガンは橙色の女の中に人間獸の一匹を表現してゐた。しかも寫實派の畫家たちよりも更に痛切に表現してゐた。或文藝批評家は——たとへば正宗白鳥氏は大抵この人間獸の一匹を表現したかどうかを尺度にしてゐる。が、或文藝批評家は、——たとへば谷崎潤一郎氏は大抵人間獸の一匹よりも人間獸の一匹を含んだ畫面の美しさを尺度にしてゐる。（尤も諸家の文藝評論の尺度は必しもこの二者に限つてゐない。實踐道德的尺度もあれば、社會道德的尺度もあることは確かである。しかし僕はそれ等の尺度に餘り興味を持つてゐない。のみならず持つてゐないことも不思議ではないと信じてゐる。）勿論タイチ派は必しもフランス派と兩立しないものではない。兩者の差別はこの地上に生じた、あらゆる差別のやうに朦朧としてゐる。が、暫く兩端を擧げれば、兩者の差別のあることだけは兎に角一應は認めなければならぬ。

所謂ゲエテ・クロオチエ・スピンガアン商會の美學によれば、この差別も「表現」の一語に霧のやうに消えてしまふであらう。しかし或作品を仕上げる上には度たび僕等を、——或は僕を岐路に立たせることは事實である。古典的作家は巧妙にもこの岐路を一度に步いて行つた。彼等に僕等群小の徒の及ぶことの出來ないのは恐らくはそこにあるのであらう。ルノアルは、——少くとも僕の見たルノアルはかう云ふ點ではゴオガンよりも古典的作家に近いのかも知れない。けれども橙

色の人間獸の牝は何か僕を引き寄せようとしてゐる。かう云ふ「野性の呼び聲」を僕等の中に感ずるものは僕一人に限つてゐるのであらうか？

僕は僕と同時代に生まれた、あらゆる造形美術の愛好者のやうにまづあの沈痛な力に滿ちたゴオグに傾倒した一人だつた。が、いつか優美を極めたルノアルに興味を感じ出した。それは或は僕の中にある都會人の仕業だつたかも知れない。同時に又ルノアルを輕蔑する當時の愛好者の傾向につむじを曲げたこともない訣ではなかつた。けれども十年あまりたつて見ると、――立派に完成したルノアルは未だに僕を打たない訣ではない。しかしゴオグの糸杉や太陽はもう一度僕を誘惑するのである。それは橙色の女の誘惑とは或は異つてゐるかも知れない。が、何か切迫したものに言はば藝術的食慾を刺戟されるのは同じことである。何か僕等の魂の底から必死に表現を求めてゐるものに。――

しかも僕はルノアルに戀々の情を打つてゐるやうに文藝上の作品にも優美なものを愛してゐる。「エピキユウルの園」を歩いたものは容易にその魅力を忘れるとは出來ない。殊に僕等都會人はその點では誰よりも弱いのである。プロレタリア文藝の呼び聲も勿論僕を動かさないのではない。が、それよりもこの問題は根本的に僕を動かすのである。純一無雜になることは誰にも恐らくは困難であらう。しかし兎に角外見上でも僕の知つてゐる作家たちの中にはこの境涯にゐる人もない訣ではない。僕はいつもかう云ふ人々に多少の羨望を感じてゐる。……

僕は誰かの貼つた貼り札によれば、所謂「藝術派」の一人になつてゐる。（かう云ふ名稱の存在するのは、同時に又かう云ふ名稱を生んだ或雰圍氣の存在するのは世界中に日本だけであらう。）僕の作品を作つてゐるのは僕自身の人格を完成する爲に作つてゐるのではない。況や現世の社會組織を一新する爲に作つてゐるのではない。唯僕の中の詩人を完成する爲に作つてゐるのである。或は詩人兼ジヤアナリストを完成する爲に作つてゐるのである。從つて「野性の呼び聲」も僕には等閑に附することは出來ない。

或友人は森先生の詩歌に不滿を洩らした僕の文章を讀み、僕は感情的に森先生に刻薄であると云ふ非難を下した。僕は少くとも意識的には森先生に敵意などは持つてゐない。いや、寧ろ森先生に心服してゐる一人であらう。しかし僕の森先生にも羨望を感じてゐることは確かである。森先生は馬車馬のやうに正面だけ見てゐた作家ではない。しかも意力そのもののやうに一度も左顧右眄したことはなかつた。「タイイス」の中のパフヌシユは神に祈らずに人の子だつたナザレの基督に祈つてゐる。僕のいつも森先生に近づき難い心もちを持つてゐるのは或はかう云ふパフヌシユに近い歎息を感じてゐる爲であらう。

三十一　「西洋の呼び聲」

僕はゴオガンの橙色の女に「野性の呼び聲」を感じてゐる。しか

し又ルドンの「若き佛陀」（土田麥僊氏所藏？）に「西洋の呼び聲」を感じてゐる。この「西洋の呼び聲」もやはり僕を動かさずには措かない。谷崎潤一郎氏も谷崎氏自身の中に東西兩洋の相剋を感じてゐる。しかし僕の「西洋の呼び聲」と云ふのは或は谷崎氏の「西洋の呼び聲」とは多少異つてゐるかも知れない。僕はその爲に僕の感じる「西洋」のことを書いて見ることにした。

「西洋」の僕に呼びかけるのはいつも造形美術の中からである。文藝上の作品は——殊に散文は存外この點では痛切ではない。それは一つには僕等人間は人間獸であることに東西の差別の少ない爲であらう。（最も手近な例を引けば、某醫學博士の或少女を凌辱したのは全然神父セルジウスの百姓の娘に對したのと異らない男性の心理である。）それから又僕等の語學的素養は文藝上の作品の美を捉へる爲には餘りに不完全である爲であらう。僕等は、——少くとも僕は紅毛人の書いた詩文の意味だけは理解出來ないことはない。が、僕等の祖先の書いた詩文——たとへば凡兆の「木の股のあでやかなりし柳かな」に對するほど、一字一音の末に至るまで舌舐めずりをすることは出來ないのである。西洋の僕に呼びかけるのに造形美術を通してゐるのは必しも偶然ではないかも知れない。

この「西洋」の底に根を張つてゐるものはいつも不可思議なギリシアである。水の冷暖は古人も言つたやうに飲んで自知する外に仕かたはない。不可思議なギリシアも亦同じことである。僕は最も手短かにギリシアを說明するとすれば、日本にもあるギリシア陶器の幾つかを見ることを勸めるであらう。或は又ギリシア彫刻の寫眞を見ることを勸めるであらう。それ等の作品の美しさはギリシアの神々の美しさである。或は飽くまでも官能的な、——言はば肉感的な美しさの中に何か超自然と言ふ外はない魅力を含んだ美しさである。この石に滲みこんだ麝香か何かの匂のやうに得體の知れない美しさは詩の中にもやはりないことはない。僕はポオル・ヴァレリを讀んだ時、（紅毛の批評家は何と言ふか知れない。）ボオドレエルの昔からいつも僕を動かしてゐたかう云ふ美しさに邂逅した。しかし最も直接に僕にこのギリシアを感じさせたのは前に擧げた一枚のルドンである。……

ギリシア主義とヘブライ主義との思想上の對立はいろいろの議論を生じてゐる。が、僕はそれ等の議論には餘り興味を持つてゐない。唯街頭の演說に耳を傾けるやうに聞いてゐるだけである。しかしこのギリシア的な美しさはかう云ふ問題に門外漢の僕にも「恐しい」と言つても差支へない。僕はここにだけ——このギリシアにだけ僕等の東洋に對立する「西洋の呼び聲」を感じるのである。貴族はブウルヂョアに席を讓つたであらう。ブウルヂョアも亦プロレタリアに早晩席を讓るであらう。けれども西洋の存する限り、不可思議なギリシアは必ず僕等を、——或は僕等の子孫たちを引き寄せようとするのに違ひない。

僕はこの文章を書いてゐるうちに古代の日本に渡つて來たアッシリアの竪琴を思ひ出した。大いなる印度は僕等の東洋を西洋と握手させ

るかも知れない。しかしそれは未來のことである。西洋は——最も西洋的なギリシアは現在では東洋と握手してゐない。ハイネは「流謫の神々」の中に十字架に逐はれたギリシアの神々の西洋の片田舍に住んでゐることを書いた。けれどもそれは片田舍にもしろ、兎に角西洋だつたからである。彼等は僕等の東洋には一刻も住んではゐられなかつたであらう。西洋はたとひヘブライ主義の洗禮を受けた後にもしろ、何か僕等の東洋と異つた血脈を持つてゐる。その最も著しい例は或はポルノグラフィイにあるかも知れない。彼等は肉感そのものさへ僕等と趣を異にしてゐる。

或人々は千九百十四五年に死んだドイツの表現主義の中に彼等の西洋を見出してゐる。それから又或人々は——レムブラントやバルザックの中に彼等の西洋を見出してゐる人々も勿論多いことであらう。現に秦豐吉氏などはロココ時代の藝術に秦氏の西洋を見出してゐる。僕はかう云ふ種々の西洋を西洋ではないと言ふのではない。しかしそれ等の西洋のかげにいつも目を醒ましてゐる一羽の不死鳥——不可思議なギリシアを恐れてゐるのである。恐れてゐる？——或は恐れてゐるのではないかも知れない。けれども妙に抵抗しながら、やはりじりじりと引き寄せられる動物的磁氣に近いものを感じない訣には行かないのである。

僕は若し目をつぶれるとすれば、かう云ふ「西洋の呼び聲」には目をつぶりたいと思つてゐる。しかし目をつぶることは必しも僕の自由にはならない。僕はつひ四五日前の夜に室生犀星氏や何かと一しよに久しぶりにパイプを啣へながら、若い人たちと話してゐる中に十年餘りも忘れてゐたボオドレエルの一行を思ひ出した。（それは僕には實驗心理的にも興味のある事實だつたのに違ひない。）それから不可思議な莊嚴に滿ちた一枚のルドンを思ひ出した。

この「西洋の呼び聲」もやはり「野性の呼び聲」のやうに僕をどこかへつれて行かうとしてゐる。アポロに對するディオニソスに彼の偶像を發見した「ツァラトストラ」の詩人は幸福だつた。現世の日本に生まれ合せた僕は文藝的にも僕自身の中に無數の分裂を感ぜざるを得ない。それも或は僕一人に、——何ごとにも影響を受け易い僕一人に限つてゐることであらうか？ 僕はこの不可思議なギリシアこそ最も西洋的な文藝上の作品を僕等の日本語に飜譯することを遮げてゐるのではないかと思つてゐる。或は僕等日本人の正確に理解することさへ（語學上の障害は暫らく問はず）遮げてゐるのではないかと思つてゐる。一枚のルドンは、——いや、いつかフランス美術展覽會に出てゐたモロオの「サロメ」（？）さへかう云ふ點では僕に東西を切り離した大海を想はせずには措かなかつた。この問題を逆にすれば、紅毛人の漢詩を理解しないのも當然であると言はなければならぬ。僕は大英博物館に一人の東洋學者のゐることを聞き噛つてゐる。しかし彼の漢詩の英譯は少くとも僕等日本人には原作の醍醐味を傳へてゐない。のみならず彼の漢詩論も盛唐を貶して漢魏を揚げたのは萬人の說を破つて

ゐるにもせよ、やはり僕等日本人には容易に首肯することは出來ないのである。ピカソは黒んぼの藝術に新らしい美しさを發見した。けれども彼等の東洋的藝術に——たとへば大愚良寛の書に新らしい美しさを發見するのはいつであらう。

三十二　批評時代

批評や隨筆の流行は即ち創作の振はない半面を示したものである。——これは僕の議論ではない。佐藤春夫氏の議論である。(「中央公論」五月號所載)同時に又三宅幾三郎氏の議論である。(「文藝時代」五月號所載)僕は偶然軌を一にした兩氏の議論に興味を感じた。兩氏の議論は中つてゐるであらう。今日の作家たちは佐藤氏の言ふやうに疲れてゐるのに違ひない。(尤も「僕は疲れてゐない」と主張する作家は例外である。)或は休みない制作の爲に、(世界に日本の文壇ほど濫作を強ゐる所はない。)或は又身邊の雜事の爲に、或は又爭ひ難い年齡の爲に、或は又、——事情はいろいろ變つてゐるにしても、兎に角多少は疲れてゐるであらう。現に紅毛の作家たちの中にも晩年には批評のペンを執つて閑を潰したものも少くはなかつた。……

佐藤氏はこの批評時代に一層根本的なものに觸れることを必要であると力說してゐる。三宅氏の「第一義的の批評」を要求するのも恐らくは佐藤氏と大差ないであらう。僕も亦各人の批評のペンにも血の滴ることを望んでゐる。何を批評上では第一義的とするか?——それは各人各說かも知れない。その又各人各說であることに所謂「眞の批評」の出現する事實上の困難はあるのかも知れない。しかし僕等は各人各說でも兎に角僕等の信條や疑問を叩きつける外はないのである。現に正宗白鳥氏は「文藝評論」や「ダンテに就いて」の中に立派にかう云ふ仕事をした。正宗氏の議論は批評的に多少の缺點を數へ得るかも知れない。しかし後代の人々はいつかラッサアレも言つたやうに「我々の過去を咎めるよりも我々の情熱を諒とするであらう。」

三宅氏は又「批評をも全く(原)小說家の手に委ねておく事は、寧ろ文學の進步發展を澁滯させる恐れがある」と言つてゐる。僕はこの言葉を讀んだ時、「詩人は彼自身の中に批評家を持つてゐる。が、批評家は彼自身の中に詩人を持つてゐるとは限らない」と云ふボオドレエルの言葉だつた。實際詩人は彼自身の中に批評家を持つてゐるのに違ひない。が、その批評家は彼の批評を「批評」と云ふ文藝上の或形式に完成する力を持つてゐるかどうか、?——それは又おのづから別問題である。三宅氏の所謂「眞の批評家」の出現することを望むものは必しも僕ばかりに限らないであらう。

唯日本のパルナスは或因襲に捉はれてゐる。たとへば詩人室生犀星氏の小說や戲曲を作る時にはそれ等は決して餘技ではない。しかし小說家佐藤春夫氏の時々詩を作る時にはそれは不思議にも餘技である。(僕はいつか佐藤氏自身の「僕の詩は決して餘技ではない」と憤慨してゐたのを覺えてゐる。)若し「小說家萬能」の言葉に相當する事實を

數へるとすれば、これこそ正にその一つであらう。小說家兼批評家の場合もやはりこの事實と同じことである。僕は「鷗外全集」第三卷を讀み、批評家鷗外先生の當時の「專門的批評家」を如何に凌駕してゐるかを知つた。同時に又から云ふ批評家のない時代の如何に寂しいものであるかを知つた。若し明治時代の批評家を數へるとすれば、僕は森先生や夏目先生、と一しよに子規居士を數へたいと思つてゐる。東京の惡戲つ兒齋藤綠雨は右に森先生の西洋の學を借り、左に幸田先生の和漢の學を借りたものの、畢に批評家の域にはいつてゐない。（しかし僕は隨筆以外に何も完成しなかつた齋藤綠雨にいつも同情を感じてゐる。綠雨は少くとも文章家だつた。）けれどもそれは餘論である。……

批評家だつた森先生は自然主義の文藝の興つた明治時代の準備をした。（しかも逆說的な運命は自然主義の文藝の興つた時代には森先生を反自然主義者の一人にした。それは或は森先生の目はもつと遠い空を見てゐたからかも知れない。しかし兎に角明治二十年代にゾラやモオパスサンを云々した森先生さへ反自然主義者の一人になつたのは逆說的であると言はなければならぬ。）僕は若し當代も批評時代と呼ばれるとすれば、——三宅氏は「吾々は來る可き日本文學の隆盛期に對して、殆ど絕望を感じないか」と言つてゐる。若し仕合せにもこの言葉は三宅氏一人の感慨だつたとすれば、僕等はどの位安んじて新來の作家たちを待てるであらう。或は又どの位不安になつて新來の作家たちを待てるであらう。

所謂「眞の批評家」は稗を米から分つ爲に批評のペンを執るであらう。僕も亦時々僕自身の中にから云ふメシア的慾望を感じてゐる。しかし大抵は僕自身の爲に——僕自身を理智的に歌ひ上げる爲に書いてゐるのに過ぎない。批評も亦僕にはその點では殆ど小說を作つたり發句を作つたりするのと變らないのである。僕は佐藤、三宅兩氏の議論を讀み、僕の批評に序文をつける爲にとりあへずこの文章を艸することにした。

追記。僕はこの文章を書き終つた後、堀木克三氏の啓發を受け、宇野浩二氏も批評の名に「文藝的な、餘りに文藝的な」を使つてゐることを知つた。僕は故意に宇野氏の眞似をしたのでもなければ、なほ更プロレタリア文藝に對する共同戰線などにするつもりではない。唯文藝上の問題ばかりを論ずる爲に漫然とつけたばかりである。宇野氏も恐らくは僕の心もちを諒としてくれることであらう。

三十三　新感覺派

「新感覺派」の是非を論ずることは今は既に時代遲れかも知れない。が、僕は「新感覺派」の作家たちの作品を讀み、その又作家たちの作品に對する批評家たちの批評を讀み、何か書いて見たい欲望を感じた。

少くとも詩歌は如何なる時代にも「新感覺派」の爲に進步してゐる。

「芭蕉は元祿時代の最大の新人だつた」と云ふ室生犀星氏の斷案は中つてゐるのに違ひない。芭蕉はいつも文藝的にはいやが上にも新人にならうと努力をしてゐた。小說や戲曲もそれ等の中に詩歌的要素を持つてゐる以上、——廣い意味の詩歌である以上、いつも「新感覺派」を待たなければならぬ。僕は北原白秋氏の如何に「新感覺派」だつたかを覺えてゐる。(「官能の解放」と云ふ言葉は當時の詩人たちの標語だつた。)同時に又谷崎潤一郎氏の如何に「新感覺派」だつたかを覺えてゐる。……

僕は今日の「新感覺派」の作家たちにも勿論興味を感じてゐる。「新感覺派」の作家たちは、——少くともその中の論客たちは僕の「新感覺派」に對する考へなどよりも新らしい理論を發表した。が、それは不幸にも十分に僕にはわからなかつた。唯「新感覺派」の作家たちの作品だけは、——それも僕にはわからないのかも知れない。僕等は作品を發表し出した頃、「新理智派」とか云ふ名を貰つた。(尤も僕等の僕等自身はこの名を使はなかつたのは確かである。)しかし「新感覺派」の作家たちの作品を見れば、僕等の作品よりも或意味では「新理智派」に近いと言はなければならぬ。では或意味とは何かと言へば、彼等の所謂感覺の理智の光を帶びてゐることである。僕は室生犀星氏と一しよに碓氷山上の月を見た時、突然室生氏の妙義山を「生薑のやうだね」と云つたのを聞き、如何にも妙義山は一塊の根生薑にそつくりであることを發見した。この所謂感覺は理智の光を帶びてゐない。が、彼等の所謂感覺は、——たとへば橫光利一氏は僕の爲に藤澤桓夫氏の「馬は褐色の思想のやうに走つて行つた」(?)と云ふ言葉を引き、そこに彼等の所謂感覺の飛躍のあることを說明した。かう云ふ飛躍は僕にも亦全然わからない訣ではない。が、この一行は明らかに理智的な聯想の上に成り立つてゐる。彼等は彼等の所謂感覺の上にも理智の光を加へずには措かなかつた。彼等の近代的特色は或はそこにあるのであらう。けれども若し所謂感覺のそれ自身新しいことを目標とすれば、僕はやはり妙義山に一塊の根生薑を感じるのをより新しいとしなければならぬ。恐らくは江戶の昔からあつた一塊の根生薑を感じるのを。

「新感覺派」は勿論起らなければならぬ。それも亦あらゆる新事業のやうに(文藝上の)決して容易に出來るものではない。僕は「新感覺派」の作家たちの作品に、——と云ふよりも彼等の所謂「新感覺」に必しも敬服し難いことは前に書いた通りである。が、彼等の作品に對する批評家たちの批評も亦恐らくは苛酷に失してゐるであらう。「新感覺派」の作家たちは少くとも新らしい方向へ彼等の步みを運んでゐる。それだけは何びとも認めなければならぬ。この努力を一笑してしまふのは單に今日「新感覺派」と呼ばれる作家たちに打擊を與へるばかりではない。彼等の今後の成長の上にも、引いては彼等の後に來る「新感覺派」の作家たちのしつかりと目標を定める上にもやはり打擊を與へるであらう。それは勿論日本の文藝を伸び々々と進步させる所以ではあるまい。

しかし何と呼ばれるにもせよ、所謂「新感覺」を持つた作家たちは必ず今後も現れるであらう。僕はもう十年あまり前、確か久米正雄氏と一しよに「草土社」の展覽會を見物した後、久米氏の「この庭の松の木を見ても、「草土社」的に見えるのは不思議だよ」と感心してゐたことを覺えてゐる。「草土社」的に見えるのは正に十年あまり以前の所謂「新感覺」の爲に外ならなかつた。から云ふ所謂「新感覺」を明日の作家たちに期待するのは必しも僕の早計ばかりではあるまい。

若し眞に文藝的に「新しいもの」を求めるとすれば、それは或はこの所謂「新感覺」の外にないかも知れない。（新しいことなどは何でもないと云ふ議論は勿論この問題の埒外にある訳である。）所謂「目的意識」を持つた文藝さへ「目的意識」そのものの新舊を暫く問はないとすれば、（たとひ新舊を問つたとしても、バアナアド・ショウの現れたのに千八百九十年代である。）實は大勢の前人の歩いて行つた道である。況や僕等の人生觀は、――恐らくは「いろは骨牌」の中に悉く數へ上げられてゐることであらう。のみならずそれ等の新舊は文藝的な――或は藝術的な新舊ではない。

僕は所謂「新感覺」の如何に同時代の人々に理解されないかを承知してゐる。たとへば佐藤春夫氏の「西班牙犬の家」は未だに新しさを失つてゐない。況や同人雜誌「星座」（?）に掲げられた頃はどの位新しかつたことであらう。しかしこの作品の新しさは少しも文壇を動かさずにしまつた。僕は或はその爲に佐藤氏自身さへこの作品の新しさを――引いてはこの作品の價値を疑つてゐはしなかつたと思つてゐる。から云ふ事實は日本以外にも勿論未だに多いことであらう。しかし殊に甚しいのは僕等の日本ではないであらうか?

『現代日本文學全集』嚴正批判

先驅者の熱と力

菊池寛

改造社の現代日本文學全集は、まことに出版界の大革命である。その革命のために、市價十圓の單行本が、わづか一圓で社會大衆の手には入ることになつた。今まで二三萬にすぎなかつた文藝書の讀者が十倍二十倍に激增したことは、改造社の文藝に對する一大奉仕である。その後、現代日本文學全集に追隨するもの無數であるが、改造社のそれには先驅者としての熱と力とがみなぎつてゐるやうだ。自分の著作は、この程第六回配本として、製本されたが、その製本部數の賣數の絶大なるには、いささか驚嘆せずにはゐられなかつた。改造社は意氣と誠意とで一貫する出版書肆である。一錢の利益があれば一錢だけ、讀者のためにつくし、百萬圓の利益があれば百萬圓だけ讀者のためにつくす出版書肆だ。その意味で改造社の募集には讀者も意氣を以て應ずべきだと思ふ。改造社に迷惑をかけられたり不當な利益を貪られる心配はないと思ふ。

善き良心のみが善き全集を提供する

高畠素之

私は純文學に對して門外漢であるが、文藝の愛讀者たる點に於いては敢て人後に落ちぬつもりである。この立場から、改造社の現代日本文學全集はその內容に於いて至れり盡せりであらうと思ふ。殊に、純文學以外思想方面にわたつても幾多の名作を網羅した點は、この全集の一大特色として强調すべきだ。改造社は區々たる素町人的出版業者にあらず、山本君の使命には英雄的熱意と至純至高の國民的文化理想が輝いてゐる。我々は一切を彼れの識見と、人格と、良心に依賴して、この全集の偉大なる使命を全うさせたい。善き良心のみが、善き全集を提供する。事業は人格の現はれだ。

足音の高い大人

廣津和郎

今まで出版といふものは、全社會から見れば、知識階級相手の狹い範圍のものだつた。そして經濟的に云つても、日本の他の生産事業に比して、ほんの小さな赤子に過ぎなかつた。ところが、それが最近に至つて、急に一般民衆相手の足音の高い大人に成長したのだ。改造社の日本文學全集の發刊以來、舊式な姑息な出版事業は、全然覆されてしまつた。新大陸が發見されたのだ。出版史上山本實彥君の業蹟はコロンブスに比しても誇張ではあるまい。自分はこの勇敢なる冒險家の事業に出版界が特別な敬意を拂ふのが當然であると思ひ、社會が彼の事業の完成に、心からの援助を與へるのが當然であると思ふ。

私自身の立場から

大山郁夫

今更ら改まつて改造社の『現代日本文學全集』の能書きを書き立てるまでもないとは思ふが、しかし私が何故、私の個人的立場からそれに異常の興味を繫ぐかと訊かれると、私にはこれだけのことは言へると思ふ。――即ちそれは同類のものの中で最初に計畫されただけあつて、取材の範圍も廣く、且つその選擇も自由であつたためか、その包攝してゐる内容が極めて多面的であつて、しかもそれらの個々のものが、その相互聯關性に從つて系統的に整理されてゐて、單に小説とか戯曲とかの如き純文學の畑だけに止まらず、『新聞文學集』や『社會論集』や及びその他の諸部分で散見される通りに、明治時代から大正時代へかけての、政治、經濟、社會、思想等々の方面に於ける一般的狀勢の推移を反映してゐる重要なる文獻の原野までが丹念に開拓されてゐるといふ一事、――それが、私のやうな仕事に携はつてゐるものにまで多大の期待をいだかせる。そして私はまた、同感の人々が他にも少くはないであらうことを信ずる。

權威と個性のある全集

佐藤春夫

山本君。君の創案になる廉價本のシリイスが各方面に現はれ、中には全くの同案のものもあり、折角君の獨創の事業が模倣者によつて害せられるのを見て、君は氣を惡くしてゐるかも知れません。しかし、この際君は自重して君の創案が天下を風靡したことを滿足しその自尊心によつて行動す可きです。君の發行のものには、文學をたゞ創作のみとは見ずに、もつと廣く思索的な文字をも洩さずに集め、また有名無實な今では婦女子の娛樂にもなり兼ねる通俗小説などを排したことなどに特長も權威もまた出版者としての君の箇性もあるのだから、今更追從者の不見識をまで眞似る必要は少しもないのです。僕は君が君の所信を貫くことによつて萬々一多少の物質的損害を受けることがあるにしても、その代りに立派な出版者として惡どい挑戰や無實の中傷などに超然とすることを期待するものです

點睛の意味をなさない

近松秋江

山本實彦氏が、徒手空拳を揮つて改造社を起し、社會、政治、經濟、文學等各方面にわたる評論雜誌「改造」を創始してから、まだ僅かに八九年にしかならないのであるが、當時「中央公論」が此の種の雜誌の覇權を握つてゐた時分のことで、「中央公論」を模して創刊された雜誌の種類は幾つあつたか知れぬが、いづれも三號雜誌で廢刊したものばかりであつた。ひとり「改造」は、山本氏の不屈不撓の健鬪性によりて、その間幾度か艱難に遭遇したにも係はらず、彼は一難到る度に勇氣を百倍にして經營慘憺。雜誌「改造」を表看板にして、百科の高級書籍を出版して來た。しかも彼は決して單に錙銖の利を爭ふ素町人ではない。彼の仕事の體系には、人類の文化を促進しようとする高遠なる理想を目標とし動いてゐるところが著しく眼につく。今度の「日本文學全集」を、多量製産主義によつて豫約出版したのも、山本實彦には、實彦獨自の思想的見解から打ち出してゐるところがあるのだ。即ち高級文學思想を民衆に普及せしめようとして思ひ立つたのである。それを、單なる前垂れ掛けの商人根性で模倣したところで、所謂點睛の意味を成さないと思ふ。

名作の回顧

片岡鐵兵

曾つて三上於菟吉氏と自分とは協力して明治大正文學史のやうな物を二十年計畫で書き上げやうと話し合つた。私はその志をまだ捨てかねて居る。殊に、改造社の現代日本文學全集は、さう云ふ仕事にとつて有難い出版だらう。明治大正時代の、文學史に名を止めなければならない程の名作は、悉く此の全集の中に網羅されて居ると云つても好い。換言すれば、改造社のこの全集は明治大正の文學史其物であると云つても好いほど、編輯が體系づけられて居る。

自分は蘆花の「不如歸」で小說を知り、獨歩で小說作家への憧憬を喚起させられた。十七八歲の頃の花袋熱で自然主義的思想を内に燃やし乍ら、然もその一方で柳浪の「今戸心中」におどろき、藤村の「春」に泣き、更に鷗外の「即興詩人」に如何に殉情教育を受けたかを回顧する時、それらの小說を收めた現代日本文學全集は又私自身の發育史をなつかしく物語る物でもあるやうだ。

稀人の事業

中村吉藏

コロンブスの卵子といふ事がある、後から見れば誰にでも出來さうに思へるが、始めてそれをやつて見せた人は、發見、發明の天才と、大膽不敵な冒險的精神と、勇猛果敢の實行力とを兼具したものでなければならない。その意味で今日の一圓本流行の新世界の發見者たる改造社の山本實彥君は、我が出版界の小コロンブスだと云つても、幾多の追隨者たちからあまり異議は云へない筈である、この小コロンブスは啻に出版界許りでなく、今後社會的に如何なる突飛な大仕事をやり出すか分らない、誠に畏るべき稀人であるが、さし當り、その全心全力を傾倒しつゝある「現代日本文學全集」が日本の全國民の書架を片ッ端から充たすべく、十分に意義あり、價値あるものなる事は、この人を信ずると共に信じてよい理由がある。

現代日本文學全集について

藤森成吉

私の思想的立場から云へば、此の全集の選定には率直に異論がなくはない。然し、出版者としてのいろいろな事情を考慮する時、此の企劃が、與へられる限りの努力を盡してゐる事を認めざるを得ない。實際の本の内容が豫約發明の時より一段改善され、豐富にならうとしてゐる事實がその一證だ。これは、確かに從來の豫約物に新例を開いた事で、一部山本氏の意氣に依らう。私は此の意氣に最後の成功を期待する。

これにまさる全集はない

横光利一

嘘と誇張を云はないと云ふ點で、わが文壇に定評のある正宗白鳥氏が、現代日本文學全集について次のやうに書いてゐる。

「僕の作品はもつとも自分の氣に入つたものを精選したつもりです。他の諸氏のも概して當を得てゐるやうだから、明治以來の日本文學の大要を知るには、これにまさる全集はないだらう。」と。

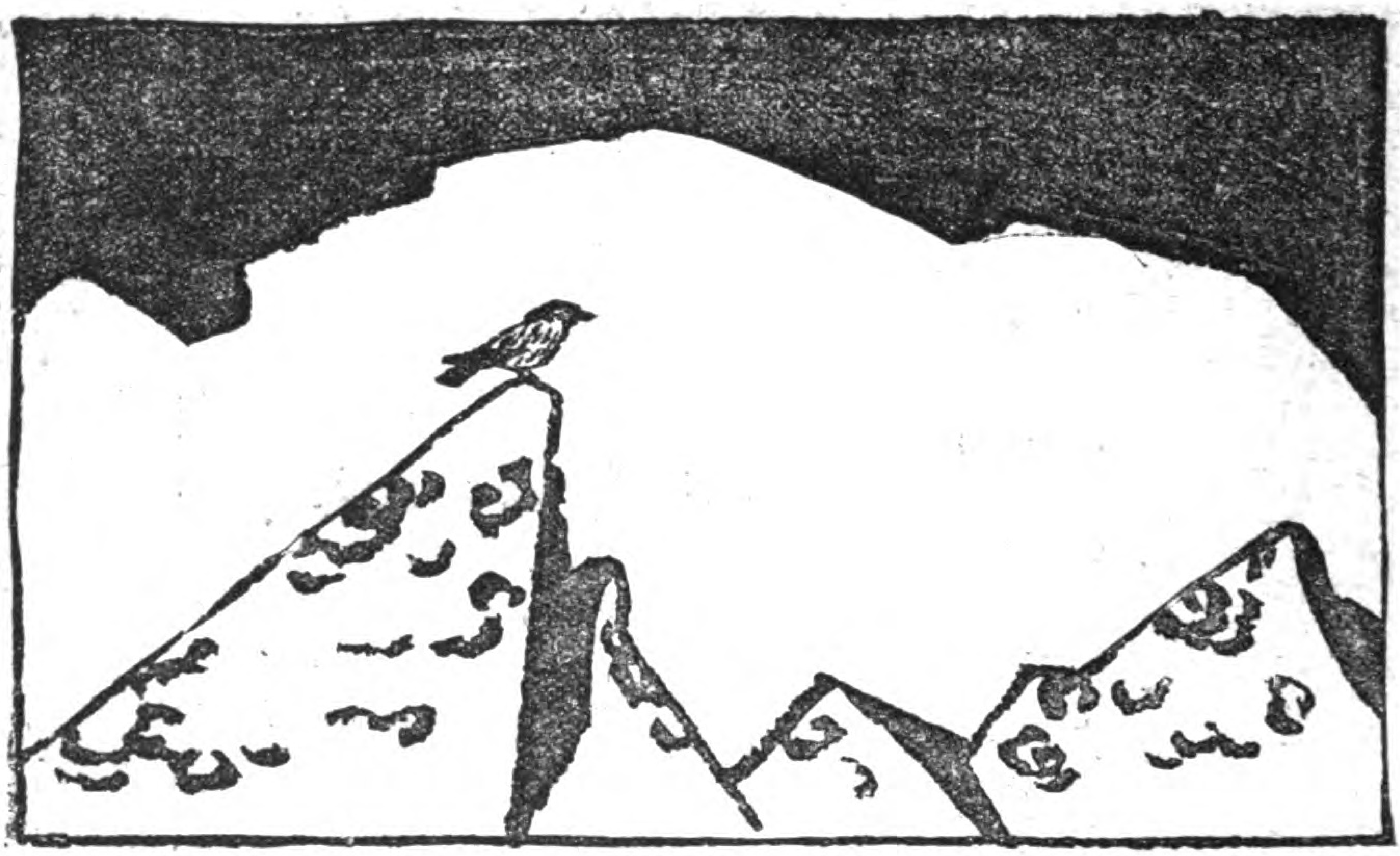
正宗白鳥氏の正直さを認める點に於いては、私もまた、絶えず人後に落ちないつもりである。

現代日本文學全集 第一次會員諸君へ

改造社長　山本實彥

一生を無爲に過したくない。私達は何か意義ある事業を遂げたい。その現れはこの現代日本文學全集の刊行となりました。私は一體呑氣な質であるが、しかし今回の事業を成すに當り責任の重大さを感じて、夜もオチオチねむれぬことが多かつた。それかあらぬか鬢に羽毛がポツポツと見え出した。しかし何の事業でも一つの革命を遂ぐるには——春が來たとて花の訪れを知らふよしもなく、秋の夜に詩心頻りに動いても、それに心ゆくばかりの興趣をもつの時間もない。加之、家人の數々にいたく病まれても懇ろなるかしづきさへも出來ない。一事業の段落と共に、私は何故に此世に生れたかを反覆瞑想する涙の瞬間が多いのです。しかしまた、私等の企圖の一段階としての此事業の完成は、私をして私事に戀々するを許さない。文化史的に重要な位置を百世に持つであらう本事業に、身命を賭しても遂げ了へねばならぬ。しかし、本事業を遂行するに、第一の對象となるのは讀者諸賢です。各位の熱烈なる後援なしでは、如何にジタバタしたとて、到底完成の域に達することは出來ないのである。私が乏しき知識ではあつたが、しかし強き自信のもとに、そして冒險的に此全集發行を聲明し、そして特權階級の專有であつた我が藝術を百萬大衆に解放する宣言を發したとき、或るものは笑つた、そしてあるものは自己の利益から私に好ましからぬ評言を下した。雨の如き散彈が私の頰を打ち、耳をかすめ、發表當日より締切りまで喧々囂々の聲に滿ち充ちた。しかし識者は私に與し、天は私を助けて私の大業を遂げしめた——否、未だその道途にあるが——のはそれ以上の知己である第一回會員各位である。

私は第二回の募集をなすに當り率直に、無遠慮にあなた方に御相談がしたい。もともと私と私の主宰する改造社を信じて會員となつて下さつたあなた方であれば今回の御相談に乘つて戴けるだらうことを飽くまで信じてのことです。それはこれを機として第一回會員に配付する全集の內容革命を斷行しようと思ふからです。質的にも、量的にも。この內容革命を遂行せしめる原動力は一に本全集を支持するあなた方が一人で一人以上の新しき會員を世話して下さることです——それは我全集のありのまゝを率直に御紹介下さることで充分であることと信じます——若しこのお願ひにして可能ならば本全集は第七卷以後にドンナに思ひ切つた大改革を斷行することが出來ませう。本全集が公約より內容が革まり、量が殖え一册は一册と充實して行くさまは既に御承知でせう。世の所謂第一卷のみに力を注ぎだんだん頁數を減じ、內容の荒み行くものとは自然類を異にすると思ひます。そして內容にして心に染まぬものはドシドシ增補して行きます。たとへば或る集が發行されて後、大作名篇を逸したと思つたときは過ちて改めるに憚るなかれでどんな困難を排しても、どんな犧牲を忍んでも後からどの形でかあなた方の配本にもれなく登載する事に努力します。私達は唯だ單に——讀者と出版者——のつながりばかりでなく日本文化のためにお互に手をとつて進まねばならぬ身です。今後親しく膝を交へて祖國藝術を打語らふ一夜もあらうことを信じます。ただ今日は一人で一人づゝの友達を勸誘して下さることが私等の最大の願ひであります。東洋の政局は慌しく、我財界多難のとき、各位が轉換機のチャンピオンたらるることを望み祈るものです。だが、快き靑葉の夕は我を忘れて藝道の一境を辿らるることが人生の一ばんの淸樂であることをも思ふものです。



長篇

夢殿

中里介山

○

（要領――）鳥佛師と秦河勝の問答から初まる。

鳥佛師は推古朝を代表する彫刻家にして繪をよくす。

秦河勝は聖德太子の寵臣。

鳥佛師は個性を藝術に集中し、河勝は自己を建築に沒入して滿足する。

鳥佛師は祖先來の日本の佛教の開拓者の一人にして、河勝の背後にはネストリアンの系統を引く基督教あり。

鳥佛師が逆臣蘇我馬子の女にして崇峻天皇の嬪、天皇を手刄し奉りたる東漢直駒と通じたる川上の郎女の像を描くことを河勝は不快とする。

聖德太子の御名は本篇に於ては主として上宮太子或は上宮（かむつみや）の太子と呼び奉る。

第一

鞍作の鳥佛師が密陀僧で天人の繪を描いてゐる處へ秦の河勝がやつて來て

「鳥佛師、御精が出ますな」
と云つた。
「はゝあ——」
と鳥佛師は繪筆を休めないで、鼻唄のやうな挨拶をする。
河勝は兩手を後に組んで棒立ちになつて、鳥佛師の繪筆のさばきを無言で、無遠慮にながめてゐる。
鳥佛師の方も亦、頓着なしに筆をつゞけてゐること、傍らに人無きが如しだ。
だが、本來、鳥佛師はさう無頓着にのみ出來てゐる人間ではない。彼とても、時として焦燥することがある。殊に自分の仕事中には外物の來つて煩はすことを嫌ふ名工氣質は多分に備へてゐる男である。
それだのに、河勝の來たのに格別眉をひそめはしないし、河勝も亦その氣質を知りながら、棒立ちに突立つて仕事を見てゐるのは、つまり雙方相熟してゐる間柄だといふことがわかる。
相熟した間柄といふのは妙なもので、心を二つに使ひわける必要が無いから、鳥佛師は河勝の入つて來た瞬間だけ、極めて輕い注意を拂へば濟むので、そのあとは心の上に何等の負擔も負はされないで、仕事の興味をつゞける事が出來るといふものだ。
「鳥佛師」
やゝ暫らくあつて河勝が後から呼びかけると
「何だい」
鳥佛師は見向きもしないで返事だけをする。河勝は鳥佛師の返事よりは、その畫面の上に注意を集めて
「鳥佛師、お前、その繪はモデルがあつて描いてゐるのかい、それともお前の頭だけで描いてゐるのかい」
「妙な事を聞くんだね、秦氏の親方」
鳥佛師は冷淡に取扱つてゐる。その癖、筆は鈍重に畫面は輕快に動いてゐるやうだ。
河勝は何ともいはず同じやうに手を後にした棒立ちの姿勢で立つてゐたが、その畫面を見てゐる眼の中に悲憤のやうな皮肉のやうな色が現はれて來る。
こゝに鳥佛師といへば、字面の感じから云つても年配から云つても早や老巧圓熟の境に入つた名工のやうに想像されるかも知れないが、事實は全くそれと反對で、河勝の方は初老を越した分別盛りであるのに、鳥佛師は血の氣の多い青年佛師であるのだ。
青年佛師は心置きなく、その繪筆を揮つてゐるが——彼は彫刻家としてのみではない、畫師としてそれに優るとも劣らぬ手腕を認められてゐる——河勝は一種不快な色に面を曇らせて、
「鳥佛師、まるで別人の手になるやうな繪だな、元興法隆の三尊を刻んだ、その人が此の魅惑に富む繪を描いたとは、見ない人は本當にすまい——」
「さうかなあ」

「これは天人ぢやない、地上の人だ」

「ふーん」

鳥佛師は、あざ笑ふやうな鋭くやうな返答をして繪筆をちよつと休めたが、やはり河勝を見返るのでは無く、しげ〳〵と自分の描いた天人の姿に見入るのであつた。

「はゝあ、地上の人に見えるかい――地獄の人に見えなくて仕合せだ」

「何を云つてるのだ」

河勝が少しせき込む。せき込んだからとて背中を突ついたり、肩を叩いたりして、ゆすぶるのではない、やはり、以前の通り、手を後に棒立のまゝで、心持ち膝を乘り出した程度のものである。

その時、鳥佛師は目をつぶつて頭をうなだれた。それとても深い感慨に耽るのではなく、輕く頭腦の疲勞を休めんとする體である。河勝は何と思つたか、横向きになつて、室内を二三歩あるき出した。手はやつぱり後に組んだなりである。さうして、物和らかにいふ。

「鳥佛師、お前の惡口をいつてゐる者があるぞへ」

「何、惡口を……」

鳥佛師は輕くつぶつてゐた眼を物うげに見開いた。

「さうよ、黄書の繪師共がお前の惡口をいつてゐるのを、わしに聞いたよ」

「何といつて……」

「お前の彫刻は本物ではない、皆んな模倣だといつて……」

「成程……」

「つまり、お前は此の推古朝を代表して、前後に濶歩する大名人のやうに人も許し自分もその氣になつてゐるか知れないが、お前の仕事の種本は皆んなわかつてゐる、知らない者は知るまいが、知る者は一から十まで、その種本を心得てゐるのだから、まあ、お前は幸運兒の一人で、一代の名人でも何でもないと斯ういふのだ」

「それだけか……もつと聞かして呉れ、もう少し立ち入つて、おれの惡口をいふ奴は無いか、それを聞きたいものだ」

「左様……たとへば法隆寺の大釋迦像でも、金堂の藥師三尊でも、三韓を通つて來た支那の六朝風の金銅の模倣だ、支那の石窟のお寺へ行くとあんなのがゴロ〳〵と轉がつてゐる。つまりお前のはその精粹を集めてゐる仕事で自分の頭から出たのでありはしない……さうして其の人眞似も極めて拙いものだ、お前のやうな人眞似の拙い工人が一代に名を成すのは、つまり日本の文明がまだ輸入早々の文明であるのと、それから一つには當代に人が無いからだ……と斯ういつてゐるのを聞いたが蔭で云はれると、聞いてゐる他人のわしでも腹が立つから、當人のお前はいゝ心持はすまい」

「うむ――だが、格別惡い心持もしないよ、さういはれる譯にも亦一面の眞理はあるのだからな」

「ぢや、お前は模倣と拙劣と其の人にあらずして其の名を負る卑劣の

名を甘受するのか、それは名工の良心の上に容易ならん恥辱ではないか」

『否々、おれは手法は眞似るかも知れないが心は眞似ないよ……尤も眞似やうとしても眞似られるものではないが」

『それは巧妙な言ひぬけに聞えるぞよ、手法は眞似るとも心は眞似ずとは、獨り合點になり易い言葉だ。手法は誰が見ても、すぐわかるのだ、心持はその人でなければわかりはしないから何とでも云へる」

『有難う、お前がさういつて呉れるのは、おれを信じての餘りだ』

『勿論、わしはお前を信じてゐるが世間の多數がさうだとはいはれない、現にお前を目の上の瘤として邪魔にしてゐる者がある。それに對してお前が相當に辯明の手段を取らない限り、お前は手もなく逆宣傳に引かゝつてしまうのを氣の毒に堪へられない」

『それはおれも考へてゐるよ――だが、おれはまた安心もしてゐる、何となれば、彼等はおれよりも巧みなものを作るかも知ないが、おれより拙いものは作れないから……』

『それは、どういふわけだ』

『手法を學ぶのは仕方が無い――いふまでも無く支那には數千年來の文明がある。我が文明はまだ淺い、學ぶといふのはマネるといふことだ、だから、手法に於て彼地のものに似るものがあつても、今の技術家の立場として已むを得ないが、おれには、おれだけの拙さがある。この拙さは、彼にも學べない、我も學ばない――』

『またわからぬぞ』

『後世のものが見て、おれの作物は拙いといはれゝばそれが本望だ』

『ふーん』

今度は河勝が、さげすむやうな感歎で歩みをとゞめ

『後世を待つまでもなく、お前の作物は模倣でさうして拙劣だと彼等がいつてゐるといふのを聞かないか』

『今の奴等……どうも言葉が粗野に流れるのを許して下さい、今の人達は何とでもいへる。黄書の繪師も、山背の繪師も、河内の繪師も皆んな美術家であると共に賣買人だ、彼等はその職によつて食はねばならぬ。他によつて其の職と食とを犯されてはならぬ。そこで彼等は黨を成して自分達の水平より擢ん出た者の出づる事を甚だしく嫌ひ怖れ退けんとする』

鳥佛師の言葉に多少の昂奮がさすのを認める。河勝は同情するやうな激勵するやうなまた冷評するやうな言葉で

『それは、お前の僻みだらう』

『僻み……』鳥佛師はそれを聞きとがめて

『おれといふ人間も可成りくだらない人間だが僻みと嫉妬と排擠とだけは持ち合はさないつもりだ……獨自の價値以外に手段によつて自己を現はさうとするのは、藝術の神への此の上もない不忠である、自己の良心に對してもこれより恥かしい事は無いと心得てゐる』

『だが、やつぱり市に三虎を出すといふ事もあれば、衆口金を鑠かす

例も無いではないのだぞ、あんまり、世間の評判がうるさいと、わしまでがそれを信じたくなるやうな事がある」

「ちえッ」

鳥佛師は多少の昂奮を面に上らせて繪筆を抛つやうに下に置きながら、

「衆口が何をいふ。金を鑠かすとは何時の事だ、彼等が慾がゝりになつても、戸の開閉が一枚出來ないではないか——」

「うむ」

河勝は不分明に深く頷いてまた室内を歩き出した。鳥佛師は別人のやうに昂奮して、その眼にさへ多少のかゞやきを添え

「元興寺御入佛式の時だつてさうだ、鳥の作つた佛像がどうしても堂の中へ納まらないと騒いだのは誰だ、さうして手を變へ品を換えて納めやうとしたが納まらなかつたのは誰々だ。その時も彼等は鳥をおとしめる好い口實を發見したではないか……お堂をこわさなければ鳥の作つた御佛像は納まりませぬ、お堂の一部と扉をこわした上で、御佛像を納めた後に應急修理をして、それから御儀式をお擧げ下さるやうに、これ甚だ不祥の儀には似たれども、何分、鳥の作つた佛像がお堂へ入り兼ねまする故に……鳥の佛像が、鳥の佛像が……と赤くなり青くなつて喚いだのは誰々だ」

鳥佛師は昂奮の眼を正面柱の間あたりに注いだが、河勝は下を向い默つて鳥のいふ所を聞いてゐる。

「それが爲に百官が狼狽する、御儀式の時刻も遲れる、それやこれやの責任を鳥一人の上に持つて來て投げかけやうとしたのは誰だ、奉行からおれの處へ沙汰があつたが、おれは動かなかつた。動く必要がないからだ、おれは佛像をお堂に納めやうとして作つたので、お堂を御佛像の中へ納めやうと思つては作らない、納めるやうに作つたものが納まらない筈はないのだ——納めるやうに作つたものゝ納まらないのは、その間に無理があるからだ——無理といふものは、元興寺のお寺のお堂を通らないのみならず、此の天地の廣い間をも通らない、通るやうに作つたものを通らせないのなら鳥が出ても無益だ——といつておれは動かなかつた爲に、とう〳〵お堂をこわして佛像を納めるといふ事になつたのを、お前も知つてゐた筈だ」

そこで河勝が答へた。

「恥かしながら、その現場にゐて、わしも衆愚に雷同した一人だ、事實、わしでさへも、あれはお堂の一部と扉をこわさない事には御佛を入れ奉ることは六つかしいと思つたよ」

「そこが、まだお前の信じきれない所だ、たとへて見れば、國と王とは相合はなければならぬ。國をこわして王を置き奉ることは出來ないやうに、王を傷つけて國に納め奉るといふ道理もあるまい——鳥は不肖ながら、その位の道理は心得てゐる。重ねていふが堂をこわさねば入れ奉ることの出來ない御佛像は作らない、それを、しつくりと入れ奉ることの出來ないのには無理がある——無理が通るものて

ら通してごらん、とおれはその時に頑張つてしまつた――處か上宮の太子樣からお使があつて、鳥を呼べとの御沙汰だ。さすがに上宮の太子樣は、その妙理を心得ておゐでになる。お前のいふ通り衆愚の雷同の中の唯一人でお在しました』

といつて鳥は感激の眼からハラ〲と涙をこぼした。

河勝は、そゞろ歩きをしながら無言でゐる。

上宮太子の御沙汰によつて、鳥はもう頑張りきれなくなつた。元興寺のお堂に馳せつけて、太子の温顔を拜し奉つた時には涙が瀧のやうに落ちてしまつた、鳥は前後不覺に太子の御前で泣いてしまつたよ』

鳥はその時のやうに、今も涙をこぼしてゐるらしい。

『さうだ〱』

河勝も鼻をつまらせて、あらぬ方に向いて沈黙したが、しばらくあつて感情を鎭靜しながら、

『お前が來ると、何の苦もなく、御佛像がお堂へ納まつた、無論、枓栱の一箇所に鑿を入れるではない、扉の一枚に傷をつけるでもなし、東より出でた日輪が西の山へ納まるやうに、鞘を脱け出た劍が再びその鞘へ納まるやうに、山鳥が枝から枝にうつり、水鳥が水の上を辷るやうに、あとかたもなく、御佛像はお堂へ納まつて、御儀式も滯りなく擧げられるゝに至つた』

『それは少しもおれの誇りではない、あるべきものがあるべきやうに納まつたのみだ、併し彼等はあるべきものをあるべきやうに納める術さへ知らぬ、さうして事終つた後は、何の造作もないといつた面で、恥といふものを全く忘れてゐる』

鳥は冷眼にそれを讀み去らうとしても、そこは若いだけに、昂奮せざるを得ないものがあるらしい。といふのは恥を知らざる彼等の無能を憤るよりは、此の無恥と無能者が道理を蔽うて有能を陷れんとする卑劣さ加減そのものゝ爲に憤慨してゐるらしい。

げに、推古朝の彫刻は鳥一人が代表することになつてゐる。其の裏面には多少の苦心が無いとはいはれない。自然、喬木としての風當りを最も多く味ははねばならぬ運命――それは人間としては最も最も光榮ある部類に屬するの迫害ではあるが、當人に取つて見ると其の事の光榮に感ずるの念よりも、どうして世間並の工人ばらが斯うも卑劣であり得やうかと、それを慨嘆もしてゐるやうである。

これは一應さもありさうな事で、當時に於ての繪師も彫刻師も鳥一人に限つたことはない、外國から來た名工や、その流れを汲む達者は少なからぬ數であつたのだ。その中で鳥一人が秀出して御寵遇を蒙れば、その他の者の嫉みが集まるのは當然といはねばならぬ。優れたるものがよき地位に上るはそれより以上の當然ではあるが、世間の事は得てさうばかりもならぬ。

鳥佛師の慨嘆を河勝はさりげなく聞き流して、

『腹を立てぬがよい、萬事は上宮の太子が御存知だ』

といつた。

「うむ」

鳥佛師はその一言に深く頷いた。河勝は慰め顔に

「數多い工人の中から、特にお前を引き立てた上宮太子のおめがねを忘れぬ限り、お前は人を怨めるの不足は無い筈だ」

「うむ」

鳥は腹の中で、ひとり合點のやうな返事を繰り返したが、

「さうだ、上宮太子の限りなく大きな、限りなく悲しいお心をお察し申すと、我々如きは物の數でないのだ」

練り上げた密陀僧の酸漿のやうに赤い色を刷毛に含ませた。河勝は隅に近い燭臺の上に燈を移したが、その眼は天人の畫面に注いでゐる。

密陀僧の赤いのは裳を彩る爲であつたが、その赤い色が畫面の全體を一層艶麗なものにした。

「鳥よ」

「何だい」

「お前、その赤い色は練が違ふやうだな」

「うむ」

「色がにやけてゐるよ」

「新らしいからだらう」

「でも、あれとは同じ赤でも赤の位がちがつてゐる」

「新らしいからだよ、年が經てば、もつと燻んで來るだらう」

「さうぢや無い、お前の今使つてゐる赤は鄭聲の赤だらう」

「鄭聲の赤とは……そんな赤は密陀僧にはないよ」

「密陀僧にはないが、論語にある」

「論語に」

「さうさ、鄭聲の雅樂を亂るを惡むといふのを知らないか」

「お前は謎のやうな事をいつてゐる。それはお前の癖だらうが、おれにそんな六つかしい事はわからない」

「鳥、とぼけちや可けないよ、わしはお前に、それをたしかめたいばつかりで、斯うして氣永にお前の仕事の邪魔をしてゐるのだ」

「何だらう、おれはお前に疑ぐられるやうな惡い事をしたか知らん」

「あゝ、惡い事をしてゐるとも、現にお前はわしの眼の前で惡い事をしてゐる」

「はてな」

「鳥佛師。白狀しちまいな」

「何を」

「お前の、その心持をいつてごらん、お前が今その天人を描いてゐる心持を偽らずにわしに話してごらんなさい」

「はゝあ、我々は自分の藝術の表現によつての外、自分の心事を說明しやうとは思ひません、おれの心持が知りたければ、おれの作物を平氣で御覽なさるがよい、さうして其の解釋は見る人の勝手で、我々の干渉すべき範圍ではないのだ」

『さうか、それぢやあ、此處でわしが勝手に解釋して見やう』
『御自由に』
『その天人を描いてゐるお前の今の心には、あの中堂の藥師三尊や、元興寺の釋尊を刻んだ時の嚴肅と敬虔と粗朴と勁健とが無い』
『ふーむ』
『その代り艶冶と嬌態と反逆と觸るれば落ちなんとする誘惑がある』
『何をいつてゐるのだかわからない』
『つまり、お前は天人の名によつて惡魔を描いてゐるのだ』
『ふゝん――』
『お前はその天人を瀆してゐるのだ、人の目が無ければ、お前はその天人を抱擁して罪の驕りに油をさす事をさへ厭はないだらう、墮落、腐敗、淫樂、反逆の色がその天人の艶やかな肉の中に含まれてゐる』
『ふゝーん』
『それはお前の心が、涯りなき下の方へ墮落して行く證據だ、……悲しい事ぢやないか』
『さうばかりも云へまい、天上にも地獄にも出入を許されてゐる事が我々の繪と筆との特權ではないか知ら』
『生意氣な事をいうな……』
河勝は立ち上がつた。さうして自分の携へて來た壁に立てかけて置いた太い杖を求めるのは、まさか、この杖で若い者の慢心を打ち碎いてやるといふ了見でもあるまいが、率直な此の人はさういう事をもやり兼ねないと氣がついたのか、鳥佛に少しあわてゝ、
『まあ、待つて下さい、おぢさん……お前の解釋する處に、おれは一切干渉をしない限り、お前も亦おれの氣持に壓迫を加へては困るぢやないか』
『墮落と罪惡とには干渉を加へなけりやならん。時としては暴力を以てしても、それを遮らにやならん。さうで無ければ滅亡があるばかりだからな……わしは此んな穢れた繪を橘寺のお堂の中に納めさせるに忍びない、伽藍の莊嚴の爲にも、お前の良心の爲にも』
『不思議ですね……』
鳥佛師は、河勝の激昂に引かえて、繪筆を休めてしまひ、極めて冷靜な色で、その問題の天人の畫面を見入つてゐる。
河勝とても亦無下に、暴行を働かうとするのではない。
畫面をつくづくとながめながら鳥佛師は自分ながら、どうしても、わからないやうな色を湛えて河勝に向ひ
『全く不思議だ……さる御方から餘儀なく此の扉を頼まれてゐるうちに、おれの心持がこんなに變つてしまつた。その變つた心持でずんずんと筆が面白く進むものだから、繪が斯うなつてしまつたのだ。おれは自分の力では、これをどうすることも出來ぬ、またどうしやうとも思はない』
『あゝ、誰がお前にその樣な暗示を敎へたか、その者こそ呪はれねばならぬ』

「そのお方には少しも罪はないのだ、却つて罪を赦して冥福を祈るの御精神がおれにはよくわかる」

「鳥佛師、世には許さるべき罪と、どうしても許されぬ罪とがあることを忘れてはならない、憎まれてもお請をすべきものと辭退をすべきものとがあることを忘れてはならぬ」

「さあ……」

鳥佛師は憮然として言葉をとゞめ、やがて、ひとり言のやうに

「人の罪はドコまで責めてよいか、またドコまで許されてよいものか今のおれには、それがわからなくなつてしまつた」

「怖るべき誘惑だ……やがて、その誘惑がお前をあの三罪の賊の辯護者にまで導くかも知れない、良心が眠り魔心が處を得やうとしてゐる。今にして醒めない限り……わしは、もうこれ以上云ふまい、これ以上に見るのも忌だ」

秦の河勝は斯ういつて杖を取り上げ、此の室を出て行つてしまつたので鳥佛師だけが殘された。

呆氣に取られたやうな鳥佛師は不精な心から、出て行く鳥佛師の袖を引とめやうともせず、その後姿をちらりと見送つたゞけで、あとはひつそりした室内の天井を見上げながら呟いた。

「河勝は信仰家だ、信仰一邊の人だから繪筆を持つおれの心がわからない、彼の眼には法と罪とがあるばかりだ、法に歸依する人には罪に對する同情があつてはならないのか知ら、同情といふのはおかしい、寛容といはうか知ら、それでも足りない──御佛を刻む此の手を以て罪惡の女を天人の名に寓して描くことの出來る此のおれの心持が河勝にはわからないのだ、だが河勝は正直な人だ、正直な人だけに罪を責むるの心が強いのだ、御信用を蒙つてゐる上宮太子の御前ですら、あの河勝は此の罪惡觀といつたやうなもので太子に異見を申上げることがある。さういへばあの一族は此の罪惡觀といふものには殊に嚴格な考を抱いてゐるやうだ、或人はいふ、秦氏のあの一族だけは宗旨が違ふのだ、先祖の出も違ふやうにあの一族の守る宗旨は我等の御佛とは全く違ふのだといふ者がある。だから上宮の太子に對し奉つてする其の宗旨の上から御意見を上下なさる事さへあるのださうだ。だがそれは間違ひだらう、同じ佛の御弟子であり、上宮太子の御寵臣の一人として異信仰を蓄へてゐる筈がないが、それでもさういつて噂をする人々の口も無下に斥けたものではない──さうだとすれば、一體、あの秦氏の一族の宗旨は何だらう」

鳥佛師は天井を見上げて、こんな空想の關を切ると、想像と事實とがこんがらかつて次から次へとうつり行くのをとゞめる事が出來ないそこで胸の中の想像が獨語の煙となつて、天井の上へのぼつて行く。

「あれの先祖は、おれの先祖と同じことに支那から來たものであることは間違ひないが、秦の始皇帝の裔だといふので、秦氏を名乗るといふのはどうだらう、山背の國の太秦が彼等の代代の地で、そこに上宮太子の御後援で蜂岡寺（廣隆寺）を建てたのは遠くない昔の事だが、あ

の太秦といふ文字に就て博士がわしに教へて呉れたのを覺えてゐる――あの太秦の秦は始皇帝の秦ではない、昔、支那のずつと西の方にある國を支那では太秦と呼んだことがある、その太秦は羅馬とかシリアとかいふ國ださうだ、その國にはまた釋尊の教へた御佛の教と違つた宗旨があつて、その宗旨を景教といふ、向うの言葉ではネストとかネストリとかいふ宗旨があるのださうだ、河勝の一族は支那から其の宗旨を傳へて來てゐるのではないか、太秦といふ字が支那よりもズツト西の國を示してゐるのみではない、山背の太秦には彼等の一族が最初に掘つた伊皿井の井戸といふのがある、伊皿井といふ名は、これもズツト支那よりは西の方の國にイスラエルといふ都があつて、その名を取つてつけたらしいとこれも博士が、わしに教へて呉れた。そのイスラエルの都のある猶太といふ國では移住すれば眞先に井戸を掘つて祝ふ習はしがあるのださうだ、それ等から思ひ合せても、秦氏の一族は秦の始皇帝の後裔といふのは假託で、實は其のネストリといふ宗旨を持つた太秦渡りの民族の流れではないか、さうだとすれば、釋尊の宗旨とは、全く出處が違ふのだといつた人の噂も捨てたものではあるまい」

鳥佛師の空想はまだ見ない西の國、それは釋尊の生れた天竺よりもまだ西の方の國へ馳せてゐる――やがて、いつぞや楓野の時分に國を越えてわざ／＼尋ねて行つた山背の太秦の蜂岡寺あたりの光景に戻つて來てそこで彼の一族のとりわけて飛鳥朝廷あたりの内外の人の生活狀態との相違をあれかこれかと思ひ浮べやうとする。

「さうだ、あそこに大辟神社といふのがあつたけ、どうかすると、あれを間違へて大酒神社と書くこともあるが、やつぱり本來は大辟神社で、その大辟といふ字は無論支那の文字だが、それはメビデといふ西國の昔に支那の文字を當てはめたのだと、これも博士が教へて呉れた――では、そのメビデといふのは何ですと尋ねたら、その博士もよくは返答が出來なかつたが、つまり彼の一族の氏神だから、その先祖のうちのエライ人の名前だらうといふ事であつた……」

鳥佛師の空想は秦氏の素性調べにまで及んだが、その時東院の方で鐘の鳴るのを聞くと慌しく立ち上つて、此の室を出て行つてしまつた。

これより先き、鳥佛師の室を出て行つた秦の河勝は、斑鳩の里の松並木になつてゐる人通り少ない處を歩みながら、これも亦ひとり呟いてゐる、

「鳥佛師があれを描く氣になつた動機がどうしてもわしにはわからぬ。あれの家は達等以來の佛教の開拓者の家だ、今となつてこそ、彼は一代の識見ともいへるが、今日あるまでの彼の家の殉教的精神を考へて見ると、あだやおろかの沙汰ではない――有ゆる迫害のうちに孤立して佛教の信仰を守り通して今日まで來た彼の一家の歴史には血涙が無ければならぬ、鳥も亦、慈悲や忍辱の教に歸依してゐるが、その性格は強いものだ、その強い性格と血筋がよく新來の佛教の開拓者た

るに堪へて今日あるのだ――その男が、今はガラリと變つた反逆の女を寫してゐる、まさに墮落だ、淺ましさの限りだ」

河勝がかういつて歎いて見たのも、實は先祖を辿ると同じやうな歸化の身ではあり、歸化の身に何か一つの根本信仰を抱いて、開拓者の苦心といふ事の經驗には他人ならぬ同情のやむにやまれぬものがあるに相違ない。

「鳥の心が不思議なのではない、あの女性――あの鳥がいゝ氣になつてゐる女性の姿を蘇我の河上の娘と見ないものが何處にある――あゝ、怖るべき罪の女、恐らく此の日本の歷史が產んだ最も深き罪惡の女はあれだらう――人もあらうに、あれを正直な鳥に擬かしめたのは誰だ、引請た當人も沙汰の限りではあるが、あの誘惑を鳥に與へたその人は誰だ……」

此の松並木が近江街道の方へ續くのも河勝は忘れて、やはり胸に燃やす炎を煙に吐きながらうつら〱と歩くのは、さいぜん靈鷲の中の鳥とは同工異曲である。

「さうだ〱、まだ忘れてゐた。第一あの蘇我の河上の娘は、いつ何處でどのやうな最後を遂げたのか、それを知つたものがない、爛盛にはまだ決して老ひたる年ではない、生きてゐるとすれば、まだ〱あの女性は幾多の男を惱殺するの力を殘してゐる筈だ。誰かあの女性を死んだものと定めた――此の世にあの女がゐないと誰が事實を以て證明したのだ、して見れば」

こゝ容易ならぬ疑惑が彼の頭の中に捲き上がつた。

「鳥は知らない筈だ、鳥はあの女を見たことはあるまい、見た事の無からう筈の鳥が、あの通り生きうつしに、あの姿を描き得やうとは……では蘇我の河上の娘はまだ生きてゐる、生きて鳥と面を會はせてゐる、あゝ、あの女性が生きてゐるとすれば何處に、誰がそれをかくまつてゐる、日月の照らず處、王土の支配する限りではあの女の罪の身を容れる處は無い筈だ――」

その容易ならぬ疑問の女性は、容易ならぬ罪惡の女性である。日本の歷史が產んだ最も深き罪惡の女の一人として、彼女は死後にも身を置く處無かるべき女であると河勝が怖れてゐるのも道理である。

泊瀨部の天皇が逆臣の刄にかゝつて天命を縮め給ひしは實に此の女ありしが故ではなかつたか。

罪惡の蔭にはいつも女ありといふが、この蔭は餘りに大きい。

河勝が知つてゐる限りに於ての事實の眞相は斯うである。

かねて天皇の御寵愛を蒙つてゐた大伴の小手子の姫が、新たに蘇我の河上の娘が入內するに及んで、その寵愛が衰へたといふが、事の起りである。

この嫉妬が、天皇と蘇我の大臣（馬子）との間を離間する。ひそかに宮中には兵器を增されたといつて小手古が大臣へ注進する。五年冬十月、山猪を天皇に獻ずるものあつた時に「あゝ、いつになつたら此の猪の頸を斷つやうに、朕の憎む人を斷つことが出來るのか」と、こ



仰せになつた思ひきつたお言葉を、そのまゝ、大臣に内通したのも、この小手古の姫の嫉妬心のさせる業であつた。

帝の御憎しみ此處に至つては蘇我氏たるものは枕を高うしては寝られない。

そこへ現はれたのが東漢直駒いふ悪魔が面をそむける男である

この男は河上の娘が入内以前から私通してゐたのだといふ。この男から言へは情婦を取り戻さんが爲に、刄を以て天蹕を犯し奉るといふ日本の歴史には二つとはない大逆を遂行したのであらう、馬子からいへば、その情慾を利用して自家の安全を計るの具に供したのであらう。大魔と小魔との利害關係の一致から大逆は完全無遠慮に遂行されてしまつた。

東漢直駒なるものは、その美にして艶なる高貴の情婦を得て、この世が與うる悪逆と淫樂の限りをつくしても誰も咎める者はない。

たゞ一つ大臣としての良心が……内から責めて、どうも世間の思惑



を此のまゝにして置くには堪へられないといふ、逆中の良心が大惡魔をして小惡魔の增長を制裁するの口實を求めしむるに至つたといふ次第である。

　大臣蘇我の馬子は東漢の駒を捉へて、その髮を庭前の櫻の樹の枝につり下げて、自ら弓矢を取つて其の前に立ち

　汝、わが言を用ひず、天皇を殺し奉り、吾が惡名を千歳に傳ふるの罪一。

汝、たわけ者。わが怒を思はず、奴手を以て天皇を殺し奉るの罪二。

汝、天皇の嬪を盜みたわむるゝ罪三。

一罪を數ふる每に一矢を射る——たまり兼ねて小惡魔が絶叫した。

『おれは其の時大臣のいひつけを知つて、天皇の尊きことを知らなかつたのだ、その他の罪はどうでもあれ、弑逆の一事のみは、おれだけが責任を負ひきれない』

大臣馬子はそれを聞いて激怒し、劍を以て駒の腹を斷ち其の頸を斬つた。

大惡魔が、小惡魔を殺して、さうして云ふ。天に代つて逆奴を誅したのだと。

東漢の駒なるものゝ運命は斯うして終つたが、それを誘惑し、それと戯れて此の大事を持ち上げた女は何處へ行つた。

河勝の頭の中では、これ等の空想が渦を巻いてゐるものだから、自分は今何處を歩いてゐるのか氣がつかなかつた。たゞ成るべく斑鳩の里の中心を離れた處を通つて、わが家へ歸らうとする漠然たる歩みを踏み出して來たのに過ぎなかつたが、こゝで、ふと我に歸つて見ると驚いた。知らず〳〵自分は近江街道の方へ踏み出してしまつてゐるのである。これはいけない、と踵をめぐらして、法隆寺の方へ引き返すと郊外といふ處の辻々には人立があつて、西の空をながめては口々に罵

つてゐるのを見た。同時に、それがもう夕暮間近い時であるといふ事にも氣がついた。

磐の上に
子猿米燒く
米だにも
たけて通らし
山羊の伯父

子供達が口々に謠ひはやしてゐる。

と見れば、信貴山の方に當つてあたり一ぱいに立ちのぼる濛々たる赤氣。

『また猿が米を燒いてゐるなあ』

信貴山のあたりに、こんな赤氣が立ちのぼるのは今日に始まつた事ではない、行つて見れば原因は何の他愛もない事かも知れないが離れて見ると、人の迷信をそゝるには充分である。その度毎に子供達が謠ふ

磐の上に
兒猿米燒く
米だにも
たけて通らし
山羊の伯父

もとより子供達の卽興に出る口拍子だから何の意味もつかまへ處もあるのではないか、あの赤いのはあれは山の中で猿が米を燒いてゐるのだといふ解釋だけは誰も一致してゐるやうだ。あれは信貴山で猿が米を燒いてゐるのだと口々に言ひ觸らされてはゐるが何の爲に猿が米を燒くのだか、それを說明し得るものはない。河勝は、それを他にして、徐に斑鳩の寺の近い處まで步いて來て、ホツと息をついて夕暮の空を、ほれ〲と打ちながめた。

こゝは、物靜かな斑鳩の夕暮である。信貴山の赤氣もこゝまでは屆かないのか、それとも、もう一しきり人を騷がせて、夕づゝの中へ落ち込んでしまつたのか、辻々に出て罵る人もなければ、巷に出て謠う童も無い。飛鳥より歸る武士達の蹄の音が打々大路の砂を鳴らすばかりで、水を打つたやうな斑鳩の里の夕暮であつた。

秦河勝は、斯うして、頭燃をさましながらの氣分で、斑鳩の里の落ついた相を見るとおのづから頭の下がることを覺えるのだ。

『斑鳩の宮は美しい』

と我を忘れて、法隆寺學問所の甍に恍然とながめ入るのを常とする。

平群の山を後にして大和平野の安定の地盤に、どつしりと甍を並べたあの堂塔伽藍の美しさ。

その美しさは、人をして一切の危惧を忘れて、ひたすらに安樂の淨土に落つかせる。あたりの風土も、氣候も、すべてが落着いた上に、この整つた人工の美。堂塔伽藍の配置に無理といふものが見出せな

い。

多くの美には脆弱と魅惑が伴ふ。この美しさには安定と莊嚴と不朽とがある。

前代にこれほどの建築が無かつたやうに、後代にも亦これほどの建築が有らうとは思はれない——秦の河勝は、美に打たれてゐる間に、一種の力強い誇が、むら〱と脈管のうちに涌くのを感じた。

此の偉大莊嚴なる建築の御設計はもとより上宮太子御自身の表現であるには相違ないが、數ならぬ自分もたしかにその相談に一部には參與を許された覺えがある。

よし、全體は上宮太子御自身の人格そのものゝ現はれであるにしても、その部分々々には不肖のわれも應分の力を致してゐることの光榮と本懷とを、心のうちに誇らずには居られない。

建築は人格である。個人の人格であると共に時代の人格である。惡しき人によつてよき建築の營まれた例は無く、良き時代がよき建築を殘さぬ例は無い。建築といふものは時代そのものゝ良心の表現である。

殿下よ、殿下の知ろしめし給ふ時代は恐らくは日本の歴史に於て空前絶後の光榮ある時代と申上げても過言では無からうと存じます。前代には後世にも殿下ほどの御人格が此の日本に再び現はれ給ふべしとやの見當が小臣にはつき兼ねる次第でございます。故に殿下の殘し給ふ紀念が、有ゆる人工のものを超越して千百年の後にかゞやき給ふべきを信じて疑ひませぬ。

斯く申上げて、自分は四方の名山に分け入つて檜の良材を求めて奉つた。檜の良きものは千年不朽の性質を持つてゐる。それから此の地相の安定と、風土の乾燥の點とをも熟と調査して祝福申上げたつもりである。建築の手法樣式の御相談にも數々の卑見を申上げたつもりである。

上宮太子御人格の表現として見る、あの法隆寺堂塔伽藍の莊嚴な中の一木一瓦にでもわが心血を注ぐことを許された自分を光榮としないわけには行かない。よし、金銅の三尊は磨滅する時があつても、壁畫の彌陀佛は剝落する時があつても、此の木造の法隆學問寺が腐朽するといふことはあるまい。法隆寺そのものが腐朽せぬ限り自分の心血も此の中の一分子として永久に生きてゐる。

秦の河勝はそこに限りなき誇と滿足とを感じて生氣の全身に溢るゝのを覺えた。あの鳥佛師の聲名。後世に至つては推古朝には鳥佛師の外に彫刻は無かつたやうに云はれるかも知れぬ。それは彼に取つて無上の光榮ではあらうが、名の現はるゝだけそれだけ彼の光榮には負擔がある。それに比べると自分の仕事は、この建築そのものゝ中に溶け込んでしまつて、偉大なる諧調の一分子として生きて行くことの安樂——秦の河勝はその韜晦味を此の上も無く有難いものとして感謝せざるを得なくなつた。



橋

池谷信三郎

1

人と別れた瞳のやうに涙を湛えた灰色の空を、大きく環を描き乍ら傳書鳩の群が、新聞社の建物の上を散歩してゐた。煙が低く空を這つて、生活の流れの上に溶けてゐた。

黄昏が街の燈火に光を添え乍ら、露路の末迄浸みて行つた。

雪解けの日の夕暮。——都會は靄の底に沈み、高い建物の輪廓が明方の夢のやうに消えた頃、上層の窓にともされた灯が、霧の夜の燈臺のやうに瞬いてゐた。

果物屋の店の中は一面に曇つた硝子の壁に取り圍まれ、彼が毛糸の襟卷の端で、何んの氣なしにSと大きく頭文字を拭きとつたら、ひよつこり靄の中から蜜柑とポンカンが現れた。女の笑顔が蜜柑の後で微笑てゐた。彼が硝子の戸を押して這入つて行くと、女はつんとして、ナプキンの紙で拵えた人形にマッチの火をつけてゐた。人形は燃え乍ら、音もなく灰皿の中に崩れ落ちて行つた。マッチの箱が粉々に卓子の上に散らかつてゐた。

——遲かつた？

——……

——どうかしたの？

——……

——クリイムがついてますよ、口の廻りに。

——さう。

——僕は窓を見てゐると、あれが人間の感情を浪漫的にする麗しい象徴だと思ふのです。

——さう？

——今も人のうようよと吐き出される會社の門を、僕もその一人となつて吐き出されて來たのです。無數の後姿が、僕の前をどんどん追ひ越して、重なり合つて、妙に淋しい背中の形を僕の瞳に殘し乍ら、皆んなすいすいと消えて行くのです。街はひどい霧でね、その中にけたたましい電車の鈴です。自動車の頭燈です。光が廻ると、その輪の中にうようよと音もなく蠢く、丁度海の底の魚群のやうに、人、人、人、人、……僕が眼を上げると、ほら、あすこのデパアトメントストオアね、もう店を閉じて燈火は消えてゐるのです。建物の輪廓が霧の中に溶けこんで、まるで空との境が解らないのです。すると、ぽつんと思ひがけない高い所に、たつた一つ、灯が這入つてゐるのです。あすこの事務室で、きつと殘務をとつてゐる人々なのでせう。僕は、……

——まあ、お饒舌りね、あんたに。どうかしてるんぢやない、今日？

——どうしてです。

——だつて、だつて眼に一杯涙をためて。

霧ですよ。霧が睫毛にたまつたのです。

——あなたは、もう私と會つて下さらないおつもりなの？

——だつて君は、どうしても、橋の向ふへ僕を連れてつてはくれないんですもの。だから、……

女は急に默つて了つた。彼女の顏に青いメランコリヤが、湖の面を走る雲の影のやうに動いて行つた。しばらくして、

——いらつしてもいいのよ。だけど、……いらつしやらない方がいいわ。

町の外れに橋があつた。橋の向ふにはいつでも霧がかかつてゐた。女はその橋の袂へ來るときまつて、さよなら、と云つた。さうして振り返りもせずに、さつさと橋を渡つて歸つて行つた。彼はぼんやりと橋の袂の街燈に凭り掛つて、霧の中に消えて行く女の後姿を見送つてゐる。女が吟んで行く『マズルカ』の曲に耳を傾けてゐる。それからくるりと踵を返して、あの曲りくねつた露路の中を、野犬のやうにしよんぼりと歸つて來るのだつた。

炭火のない暗い小部屋の中で、シャツをひつぱり乍ら、あの橋の向ふ

ふの彼女を知る事が、最近の彼の憧憬になつてゐた。だけど、女が來いと云はないのに、彼がひとりで橋を渡つて行く事は、彼にとつて、負けた氣がして出來なかつた。女はいつも定つた時間に、蜜柑の後で彼を待つてゐた。女はシイカと云つてゐた。それ以外の名も、又どう書くのかさへも、彼は知らなかつた。どうして彼女と知り合つたのかさへ、もう彼には實感がなかつた。

2

夜が都會を包んでゐた。新聞社の屋上庭園には、夜風が葬式のやうに吹いてゐた。一つの黒い人影が、ぼんやりと欄干から下の街を見下してゐた。大通りに沿つて、二条に續いた街燈の連りが、限りなく眞直に走つて、自動車の燈頭が、魚の動きにつれて光る、夜の海の夜光虫のやうに交錯してゐた。

階下の工場で、一分間に數千枚の新聞紙を刷り出す、アルバート會社製の高速度輪轉機が、附近二十餘軒の住民を、不眠性神經衰弱に陷れ乍ら、轟々と廻轉を續けてゐた。

油と紙と汗の臭が、新大臣のお孫さんの笑顔だとか、花嫁の悲しげな眼差し、或ひはイプセン、蔣介石、心中、保險魔、寺尾文子、荒木又衞門、モラトリアム、……等と一緒に、荒繩でくくられ、トラックに積み込まれて、この大都會を地方へつなぐ幾つかの停車場へ向けて送り出されてゐた。だから彼が、まるで黒いゴム風船のやうに、音もなくこの屋上庭園に上つて來たとて、誰も咎める人などありはしない。

彼はシイカの事を考へてゐた。モーニングを着たら、きつとあなたはよくお似合ひになるわよ、と云つたシイカの笑顔を。

彼はそつとポケツトから、クララ・ボウのブロマイドを取出して眺めた。屋上に高く聳えた塔の廻りを、さつきから廻轉してゐる探海燈が、長い光の尾の先で、都會の空を撫で乍ら一閃する度に、クララ・ボウの顔がさつと明るく微笑んだが、暗くなると又むつつりと、暗闇の中で物を想ひ出した。彼女にはさう云つた所があつた。シイカにも。

彼女はいつも、會へば陽氣にはしやいでゐるのだつたが、マズルカを口吟み乍ら、橋の向ふへ消えて行く彼女の後姿は、――會つてゐない時の、彼の想ひ出の中に活きてゐる彼女は、シイカは、墓場へ向ふ路のやうに淋しく憂鬱だつた。

カリフオルニヤの明るい空の下で、溌剌と動いてゐる少女の姿が、世界中の無數のスクリンの上で、果物と太陽の香りを發散した。東洋人獨特の淑かさはあり、それに髪は斷つてはゐなかつたが、シイカの面影にはどこかそのクララに似た所があつた。とりわけ彼女が、忘れものよ、と云つて、心持首を傾げ乍ら、彼の唇を求める時。シイカはどうしても寫眞をくれないので、――彼女は、人間が過去と云ふものの中に存在してゐたと云ふ、確かな證據を殘して置く事を、何故かひどく嫌がつた。彼女はそれ程、瞬間の今の、自分以外の存在を考へる

事を恐れてゐた。——だから、仕方なく彼はそのアメリカの女優のブロマイドを買つて來て、鼻の所を薄墨で少し低く直したのであつた。

　彼がシイカといつものやうに果物屋の店で話をしてゐた時、Sunkistと云ふ字が話題に上つた。彼はきつと、それは太陽に接吻されたと云ふ意味だと主張した。カリフオルニヤはいつも明るい空の下に、果物が一杯實つてゐる。あすこに君によく似たクララが、元氣に、男の心の中に咲いた春の花片を散らしてゐる。——貞操を置き忘れたカメレオンのやうに、陽氣で憂鬱で、……

　すると、シイカが急に、丁度食べてゐたネーブルを指さして、どうしてこれネーブルつて云ふか知つてて？と訊いた。それは伊太利のナポリで、——と彼が云ひかけると、いいえ違つてよ。これは英語のNavel、お臍つて字から訛つて來たのよ。ほら、ここんとこがお臍のやうでせう。英語の先生がさう云つたわよ。とシイカが笑つた。アリストテレスが云つたぢやないの、萬物は臍を有す、つて。そして彼女の眞紅な着物の銘仙の模様が、ふつくらとした胸の所で、激しい匂ひを撒き散らし乍ら、搖れて搖れて、……こんな事を想ひ出してゐたとて仕方がなかつた。彼は何をしにこんな夜更、新聞社の屋上に上つて來たのだつたか。

　彼はブロマイドを蔵ふと、そつと歩き出した。鳩の家の扉を開けると、いきなり一羽の傳書鳩を捕へて、マントの下にかくした。

3

　デパアトメントストオアには、あらゆる生活の斷面が、丁度束になつた葱の切口のやうに眼に沁みた。

　十本では指の足りない貴婦人が、二人の令孃の指を借りて、ありつたけの所有のダイヤを光らせてゐた。若い會社員は妻の意識を散漫にする爲に、いろいろと食物の話を持ち出してゐた。母親は、まるでお聟さんでも選ぶやうに、あちらこちらから娘の嫌だと云ふ半襟ばかり選り出してゐた。娘は實を云ふと、自分にひどく氣に入つたのがあるのだが、母親に叱られさうなので、顏を赤くして困つてゐた。孫に好かれたい一心で、玩具の喇叭を萬引してゐるお爺さんがゐた。若いタイピストは眼鏡を買つてゐた。これでもう、接吻をしない時でも男の顏がはつきり見えると喜び乍ら。告示板を利用して女優が自分の名前を宣傳してゐた。妹が見合ひをするのに、もうお嫁に行つた姉さんの方が、餘計胸を躍らせてゐた。主義者がパラソルの色合ひの錯覺を利用して、尾行の刑事を撒いてゐた。同性愛に陷つた二人の女學生は、手をつなぎ合せ乍ら、可愛しさうに、お揃ひの肩掛を買つてゐた。エレベーターが丁度定員になつたので、若夫婦にとり殘された母親が、ふいと自分の年を想ひ出して、急に淋しさうに次のを待つてゐた。獨身者が外套のハネを落す刷毛を買つてゐた。ラヂオがこの人混みの中で靜かな小夜曲を奏してゐた。若い女中が奧さんの眼をかすめ

寒さうに捧げてゐた彼女の兩手がだらりと下つた。彼女は二十年もさうしてゐた肩の凝りを感じた。何かしらほつとしたやうな氣安い氣持になつて、いきなり男の胸に顏を埋めて了つた。

彼女の藥指にオニックスの指輪の跡が、赤く押されて了つた。新調のモーニングに白粉の粉がついて了つた。貞操の破片が絨氈の上でキラキラと光つてゐた。

卓上電話がけたたましく鳴つた。

—火事です。三階から火が出たのです。早く、早く、非常口へ！

廊下には開けられた無數の部屋の中から、けたたましい電鈴の音。續いて丁度泊り合せた露西亞の歌劇團の女優達か、寢間着姿のしどけないなりで、青い瞳に憂鬱な恐怖を浮べ、まるでソドムの美姫のやうに、赤い電燈の點いた非常口へ殺到した。ソプラノの悲鳴が、不思議な齊唱を響かせて。……彼女等は、この力強い効果的な和聲が、チャイコフスキイのでもなく、又リムスキイ・コルザコフのでもなく、全く自分達の新しいものであるのに驚いてゐた。部屋の戸口に、新婚の夫婦の靴が睦しげに取殘されてゐた。

ZIG・ZAGに急な角度で建物の壁に取りつけられた非常梯子をつたはつて、彼は夢中でシイカを抱いたまま走り下りた。シイカの裾が梯子の釘にひつかかつて、ビリビリと裂けて了つた。見下した往來には、無數の人があちこちと、虫のやうに蠢いてゐた。裂かれた裾の下にはつきりと意識される彼女の肢の曲線を、溶けて了ふやうに固く腕に抱きしめ乍ら、彼は夢中で人混みの中へ飛び下りた。

—裾が破けて了つたわ。私にはもうあなたのものね

橋の袂でシイカが云つた。

4

暗闇の中で傳書鳩がけたたましい羽搏きをし續けた。

彼はぢいつと眠られない夜を、シイカの事を考へ明すのだつた。彼はシイカとそれから二三人の男が交つて、一緒にポオカアをやつた晩の事を考へてゐた。自分の手札をかくし、お互ひに他人の手札に探りを入れるやうなこの骨牌のゲームには、絕對に無表情な、假面のやうな平氣で嘘をつける顏付が必要だつた。この特別の顏付をPoker-face、ポオカア・フエスと云つてゐた。—シイカがこんな巧みなポオカア・フエスを作れるとは、彼は實際びつくりして了つたのだつた。

お互に信じ合ひ、戀し合つてゐる男女が、一遍このポオカアのゲームをして見るがいい。忍びこんだメフイストの笑ひのやうに、暗い疑惑の戰慄が、男の全身に沁みて行くであらうから。

あの假面の下の彼女。何んと巧みな白々しい彼女のポオカア・フエス！—橋の向ふの彼女を知らうとする激しい欲望が、嵐のやうに彼を襲つて來たのは、あの晩からであつた。勿論彼女は大勝で、マクラメの手提袋の中へ無造作に紙幣束を押し込むと、晴やかに微笑み乍

ら、白い腕をなよなよと彼の首に巻きつけたのだつたが、彼女は彫刻のやうに無言のまま、彼女と別れて來たのだつた。橋の所迄送つて行く氣力もなく、川岸へ出る露路の角で別れて了つた。

　シイカはちよつと振り返ると、訴えるやうな暗い眼差しを、ちらつと彼に投げかけたきり、くるりと向ふを向いて、だらだらと下つた露路の坂を、更けて行く秋の落葉のやうに下りて行つた。……

　彼はそつと起き上つて蠟燭をつけた。眞直ぐに立上つて行く焔を凝視てゐるうちに、彼の眼の前に、大きな部屋が現れた。氷つたやうなその部屋の中に、シイカと夫と彼等の子とが、何年も何年も口一つきかずに、各々憂鬱な眼差しを投げ合つて坐つてゐた。――さうだ、ことに依ると、彼女はもう結婚してゐるのではないかしら？

　すると、今度は暗い露路に面した劇場の樂屋口が、その部屋の情景にかぶさつてダブつて來た。そこをこつそりと出て來るシイカの姿が現れた。ぐでんぐでんに醉拂つた紳士が、彼女を抱えるやうにして自動車に乘せる。車はそのまゝいづれへともなく暗の中に消えて行く。……

　彼の頭が段々いらだつて來た。丁度假裝舞踏會のやうに、自分と踊つてゐる女が、その無表情な假面の下で、何を考へてゐるのか。若しそつとその假面を、いきなり外して見たならば、女の顏の上に、どんな淫蕩な多情が、章魚の肢のやうに搖れてゐる事か、或ひは又、どんな純情が、母を見た赤子の脣のやうにも無邪氣に、蒼白く浮んでゐる事か。シイカが橋を渡る迄決して外した事のない假面が、仄明りの中で、薄氣味惡い無表情を示して、ほんのりと浮び出てゐた。

　彼は絶間ない幻聽に襲はれた。幻聽の中では、彼の誠意を嗤ふシイカの蝙蝠のやうな笑聲を聞いた。かと思ふと、何か陰々として彼に訴える、清らかな哀音を耳にした。

　涙蠟が彼の心の影を浮べて、この部屋のたつた一つの裝飾の、銀製の蠟燭立てを傳つて、音もなく流れて行つた。彼の空想が、脣のやうに乾いて了つた頃、嗚咽がかすかに彼の咽喉につまつて來た。

5

――私は、ただお金持の家に生れたと云ふだけの事で、そりや不當な侮蔑を受けてゐるのよ。私達が生活の事を考へるのは、もつと貧しい人達が贅澤の事を考へるのと同じやうに。空想で、必然性がない事なのよ。それに、家名だとか、エチケツトだとか、さう云ふ無意義な重荷を打ち壞す、強い意志を育ててくれる、何らの機會も環境も、私達には與へられてゐなかつたの。私達が、持て餘した一日を、退屈と戰ひ乍ら、刺繍の針を動かしてゐる事が、どんな消極的な罪惡であるかと云ふ事を、誰も敎えてくれる人なんかありはしない。私達は自分でさへ迷惑に思つてゐる歪められた幸運の爲に、あらゆる他からの同情を遮られてゐるの。私、別に同情なんかされ度くはないけど、ただ不當に憎まれたり、蔑まれたりしたくはないわ。

――君の家はそんなにお金持なの？

──えゝ、そりやお金持なのよ。銀行が取付けになる度に、お父さまの心臓はトラックに積まれた荷物のやうに飛び上るの。

──ほう。

──この間、一緒に女學校を出たお友達に會つたのよ。その方は學校を出ると直ぐ、或る社會問題の雜誌にお入りになつて、その方で活動してらつしやるの。私がやつぱりこの話を持ち出したら、笑ひ乍らかう云ふの。自分達はキリストと違つて、全べての人類を救はうとは思つてゐない。共通な惱みに惱んでゐる同志を救ふんだ、つて。あなた方はあなた方同志で救ひ合つたらどう？つて。だから、私がさう云つたの。私達には自分だけを救ふ力さへありやしない。そんなら亡んで了ふがいい、つてさう云ふのよ、その女は。それが自然の法則だ。自分達は自分達だけで血みどろだ、つて。だから、私が、共通な惱みつて云へば、人間は、丁度地球自身と同じやうに、この世の中は、階級と云ふ大きな公轉を續け乍ら、その中に、父子、兄弟、夫婦、朋友、その他あらゆる無數の私轉關係の惱みが惱まれつゝ動いて行くのぢやないの、つて云ふと、そんな小つぽけな惱みなんか踏み越えて行つて了ふんだ。自分達は小ブルジョア階級のあげる悲鳴なんかに對して、斷然感傷的になつては居られない。だけど、あなたにはお友達甲斐に良い事を敎へてあげるわ。──戀をなさい。あなた方が戀をすれば、それこそ、あらゆる倦怠と閑暇を利用して、淸らかに戀し合へるぢやないの。あらゆる惱みなんか、皆んな熔かしこんで了ふやうにね。そこへ行くと自分達は主義の仕事が精力の九割を割いてゐる。後の一割でしか戀愛に力を別たれない。だから、自分達は一人の戀人なんかを守り續けてはゐられない。それに一人の戀人を守ると云ふ事は、一つの偶像を作る事だ。一つの概念を作る事だ。それは主義の最大の敵だ。だから、……そんな事を云ふのよ。私、なんだか、心の在所が解らないやうな、頼りな氣がして來て、……

──君はそんなにも惱み事があるの？

──私は母が違ふの。ほんとのお母さんは私が二つの時に死んで了つたの。

──え？

──私は何とも思つてもゐないのに今のお繼母さんは、私がまだ三つか四つの頃、まだ意識がやつと牛乳の壜から離れた頃から、もう、自分を見る眼付きの中に、限りない憎惡の光が宿つてゐるつて、さう云つては父を困らしたんですつて。お繼母さんはかう云ふのよ。つまり私を生んだ母親が、生前、自分の夫が愛情を感ずるあらゆる女性に對して懷いてゐた憎惡の感情が、私の身體の中に、蒼白い潛在意識となつて潛んでゐて、それがまだあどけない私の瞳の底に、無意識的に、暗の中の黑猫の眼のやうに光つてゐるんだ、つてさう云ふのよ。私が何かにつけて、物事を僻んでゐやしないかと、しよつちゆうそれを向ふで僻んでゐるの。父は繼母に氣兼ねして、

私の事は何んにも口に出して云はないの。繼母は早く私を不幸な結婚に追ひやつて了はうとしてゐるの。そしてどんな男が私を一番不幸にするか、それはよく知つてゐるのよ。繼母は自分を苦しめた私を、私はちつともお繼母さんを苦しめた事なんかありはしないのに、私が自分より幸福になる事をひどく嫌がつてゐるらしいの。そんなに迄人間は人間を憎しめるものかしら。……中で、私を一番不幸にしさうなのは、或る銀行家の息子なの。ヴアイオリンが上手で、困つた事に私を愛してゐるのよ。この間、仲人の人が是非その男のヴアイオリンを聞けと云つて、私に電話口で聞かせるのよ。お繼母さんがどうしても聞けつて云ふんですもの。後でお繼母さんが出て、大變結構ですのね、今、娘が大變喜んで居りました、なんて云ふの。私その次に會つた時、この間の軍隊行進曲は隨分良かつたわ、つてそ云つてやつたわ。ほんとはマスネエの逝く春を惜しむ悲歌を彈いたんだつたけど。皮肉つて云や、そりや皮肉なのよ、その人は。いつだつたか一緒に芝居へ行かうと思つたら、髭も剃つてゐないの。さう云つてやつたら、濟した顏して、いや一遍剃つたんですが、あなたのお化粧を待つてるうちに、又伸びて了つたんですよ。どうも近代の男は、女が他の男の爲に化粧をしてゐるのを、ぼかんとして待つてゐなければならない義務があるんですから、全く、……つて、かうなのよ。女を輕蔑する事が自慢なんでせう。今度會つたら紹介して上げるわ。

——君は、その人と結婚するつもり？

シイカは突然默つて了つた。

——君は、その男が好きなんぢやないの？

シイカはぢつと下脣を嚙んでゐた。一歩毎に震動が脣に痛く響いて行つた。

——え？

彼が追つかけるやうに訊いた。

——えゝ、好きかも知れないわ。あなたは私達の結婚式に何を送つて下さること？

突然彼女がポロポロと涙を滴した。

彼の突き詰めた一筋の空想の絲が、そこでぽつりと切れて了ひ、彼女の姿は又橋の向ふの霧の中に消えて了つた。彼の頭の中には疑心と憂鬱と焦燥と情熱か、まるでコクテイル・シエークのやうに攪き廻された。彼は何をしてかすか解らない自分に、監視の眼を見張り出した。

川沿ひの並木道が長く續いてゐた。二人の別れる橋の燈火が、遠く霧の中に霞んでゐた。街燈の光を浴びた蒼白いシイカのポオカア・フエスが、かすかに微笑んだ。

——今日の話は皆んな嘘よ。私のお父さんはお金持でもなければなんでもないの。私はほんとは女優なの。

——女優？

——まあ、驚いたの。嘘よ、私は女優ぢやないわ。女が瞬間に考へつ

いた、素晴しい無邪氣な空想を、一々ほんとに頭に刻みこんでゐたち、あなたは今に狂人になつて了つてよ。

——僕はもう狂人です。こら、この通り。

彼はさう云ひ乍ら、クルリと振り向いて、女と反對の方へどんどん、後も見ずに馳け出して行つて了つた。

シイカはそれを暫らく見送つてから、深い溜息をして、無表情な顏を憐げに立て直すと、憂鬱詩人レナウのついた一本の杖のやうに、とぼとぼと橋の方へ向つて歩き出した。

彼女の唇をかすかに洩れて來る吐息と共に、落葉を踏む足音のやうに、……

君は幸あふれ、

われは、なみだあふる。

6

いつもの果物屋で、彼がもう三十分も待ち呆けを食はされてゐた時、電話が彼にかかつて來た。

——あなた？ 御免なさい。私、今日そつちへ行けないのよ。……どうかしたの？

——いいえ。

——だつて默つて了つて、……怒つてるの？

——今日の君の聲はなんて冷いのかしら。

——だつて、雪が電線に重たく積つてゐるんですもの

——どこにゐるの、今？

——帝劇にゐるの。あなたいらつしやらない事？……この間話したあの人と一緒なのよ。紹介して上げるわ。……今晩はチアイコフスキイよ。オニエギン、……

——オニエギン？

——え。……來ない？

——行きます。

その時彼は電話を通して、低い男の笑聲を聞いた。彼は受話器をかけるといきなり帽子を掴つた。頰つぺたをはたかれたハルレキンのやうな顏をして、彼は頭の中の積木細工が、不意に崩れて行くかすかな音を聞いた。

街には雪が蒼白く積つてゐた。街を長く走つてゐる電線に、無數の感情がこんがらかつて軋つて行く氣味の惡い聲が、この人通りの少い裏通りに騷々と響いてゐた。彼は耳を掩ふやうに深く外套の襟を立てて、前屈みに蹌踉いて行つた。眼筋が動きを止めて了つた視界の中に、重なり合つた男の足跡、女の足跡。ここにも感情が縺れ合つたまゝ、冷え切つた燃えさしのやうに棄てられてあつた。

いきなり街が明るく光り出した。劇場の飾燈が、雪解けの顏に七色

の虹を反射してゐた。入口にシイカの顔が微笑んでゐた。蝦色の紋織の羽織に、鶴の模様が一面に絞り染めになつてゐた。彼女の後に身長の高い紳士が淑かに立つてゐた。

二階の正面に三人は並んで腰かけた。シイカを眞中に。……彼は又頭の中の積木細工を一生懸命で積み初めた。

幕が開いた。チアイコフスキイの朗かに憂鬱な曲が、靜かにオーケストラ・ボツクスを漏れて來た。指揮者のバトンが彼の胸をコトンコトンと叩いた。

舞臺一面の雪である。その中にたつた二つの黑い點、オニエギンとレンスキイが、眞黑な二羽の鴉のやうに、不吉な嘴を向き合せてゐた。

彼は萬年筆をとり出すと、プログラムの端へ急いで書きつけた。——

(失禮ですが、あなたはシイカをほんとに愛しておいでですか?)

プログラムはそつと對手の男の手に渡された。男はちよつと顔を近寄せて、すかすやうにしてそれを讀んでから、同じやうに萬年筆をとり出した

(シイカは愛されない事が愛された事なのです。)

——まあ、何? 二人で何を陰謀をたくらんでゐるの?

シイカがクツクツと笑つた。プログラムは彼女の膝の上を右へ左へ動いた。

(そんな無意義なパラドツクスで僕を愚弄しないで下さい。僕は憤慨してゐるんですよ。)

(僕の方が餘つ程憤慨してるんですよ。)

(あなたはシイカを幸福にしてやれると思つてますか。)

(シイカを幸福に出來るのは、僕でもなければ、又あなたでもありません。幸福は彼女の側へ近づくと皆んな假面を冠つて了ふのです。)

(あなたからシイカの事を說明して頂くのは、お斷りし度いと思ふんですか。)

(あなたも亦彼女を愛してゐる一人なのですか?)

——うるさいわよ。

シイカがいきなりプコグラムを丸めて了つた。舞臺の上では茫然たる一發の銃聲。レンスキイの身體が枯木のやうに雪の中に倒れ伏した。

——立て!

いきなり彼が呶鳴つた。對手の男はぎくとして、筋を引いた蛙の肢のやうに立上つた。シイカはオペラグラスを膝の上に落した。彼はいきなり男の腰を力任せに突いた。男の身體はゆらゆらと蹌踉いたと思つたら、そのまま欄干を越えて、どさりと一階の客席の眞中に墜落して了つた。わーつと云ふ叫び聲。一時に立上る觀客の頭。無數の瞳が上を見上げた。舞臺では、今死んだ筈のレンスキイがむつくりと飛び上つた。音樂がはたと止つた。客席のシヤンドリエに燈火か入つ

た。叫び聲！

シャンドリエの光が大きく彼の眼の中で揺れ初めた。いきなり力強い腕が彼の肩を摑んだ。ピントの外れた彼の瞳の中に、眞蒼なシイカの顔が浮んでゐた。廣く瞠いた瞳の中から、彼女の感情が皆んな消えて行つて了つたやうに、無表情な彼女の顔、白々しい假面のやうな彼女の顔。――彼はただ、彼女が、今、觀衆席の床の上に一箇所の斑點のやうに壓しつぶされて了つたあの男に對して、何んらの感情も持つてはゐなかつた事を知つた。そして、彼女の爲に人を殺したこの自分に對して、憎惡さへも感じてゐない彼女を見た。

7

街路樹の新芽が眼に見えて靑くなり、都會の空に香はしい春の匂ひが漂つて來た。松の花粉を浴びた女學生の群が、故もなく興奮し切つて、大きな邸宅の塀の下を、明るく笑ひ乍ら歸つて行つた。もう春だわね、と云つてそのうちの一人が、ダルクローズのやうに思ひ切つて兩手を上げ、深呼吸をした拍子に、空中に幾萬となく數知れず浮游してゐた蚊を、鼻の中に吸ひこんで了つた。彼女は顰め面をして鼻を鳴らし初めた。明るい陽差しが、軒に出された風呂草の鉢植に、惠み多い光の箭を振りそそいでゐた。

取調べは二月程かかつた。スプリング・スーツに着更えた豫審判事は、彼の犯行に特種の興味を感じてゐたので、今朝も早くから、友人の若い醫學士と一緒に、極く懇談的な自由な取調べや、智能調査、精神鑑定を行つた。以下に書きつけられた會話筆記は、その中から適宜取り出した斷片的の覺書である。

問。被告は感情に何にかひどい刺戟を受けた事はないか。

答。橋の向ふの彼女を知らうとする激しい慾求が、日夜私の感情をいらだたせてゐました。

問。それを知つたら、被告は幸福になれると確信してゐたのか。

答。却つて不幸になるに違ひないと思つてゐました。

問。人間は自分を不幸にする事の爲に、努力するものではないと思ふが。

答。不確實の幸福は確實な不幸より、もつと不幸であらうと思ひます。

問。被告の知つてゐる範圍で、その女はどんな性格を持つてゐたか。

答。巧みなポオカア・フエスが出來る女でした。が、それは意識的の惡意から來るのではないのです。彼女は瞬間以外の自分の性格、生活に對しては何んらの實在性を感じないのです。彼女は自分の唇の紅がついたハンケチさへ、私の手もとに殘す事を恐れてゐました。だから、彼女が素晴らしい嘘をつくとしても、それは彼女自身にとつては確實なイメエヂなのです。彼女が自分を女優だと云ふ時、事實彼女は、どこかの舞臺の上で、華やかな花環に包まれた事があ

るのです。令嬢だと云へば、彼女は寝床も上げた事のない懶い良家の子女なのです。それが彼女の強い主観なのです。

問。さう解つてゐれば、被告は何もいらいら彼女を探る事はなかつたではないか。

答。人間は他人の主観の中に、決して安息してゐられるものではありません、あらゆる事物に冷やかな客観性を與へたがるものなのです、太陽が地球の廻りを巡つてゐる事實だけでは滿足しないのです。自分の眼を飛行機に乗せたがるのです。

問。その女は、被告の所謂橋の向ふの彼女に就いて、多く語つた事があるか。

答。よく喋る事もあります。ですが、それは今云つた通り、恐らくはその瞬間に彼女の空想に映じた限りない嘘言の連りだつたと思ひます。若しこつちから推理的に質問を進めて行けば、彼女は直ぐと、水を離れた貝のやうに口を噤んで了ふのです。一時間でも二時間でも、まるで彼女は、鍵のかかつた抽斗のやうに默りこんでゐるのです。

問。そんな時、被告はどんな態度をとるのか。

答。默つて爪を剪つてゐたり、百人一首の歌を一つ一つ想ひ出してゐてみたり、……それに私は工場のやうな女が嫌ひなのです。

問。被告は自分自身の精神狀態に就いて、異常を認めるやうな氣のした事はないか。

答。私を狂人だと思ふ人があつたなら、その人は、ガレリオを罵つたピザの學徒のやうな譏りを受けるでせう。

問。被告は女が被告以外の男を愛してゐる事實にぶつかつて、それで激したのか。

答。反對です。私は彼女が何人の戀人を持たうと、何人の男に失戀を感じやうと、そんな事は構ひません。何故ならば彼女が私と會つてゐる瞬間、彼女はいつも私を愛してゐたのですから。そして、瞬間以外の彼女は、彼女にとつて實在しないのですから。ただ、彼女が愛してゐる男ではなく、彼女を愛してゐる男が、私以外にあると云ふ事が、堪えられない心の重荷なのです。

問。被告が突き落した男が、彼女を愛してゐた事は、どうして解つたか。

答。それは、彼が丁度私と同じやうに、私が彼女を愛してゐるかどうかを氣にしたからです。

問。彼女の貞操觀念に對して被告はどう云ふ解釋を下すか。

答。若し彼女が貞操を守るとしたら、それは善惡の批判からではなく、一種の潔癖、買ひ立てのハンケチを汚すまいとする氣持からなのです。持つてゐるものを壞すまいとする慾望です。彼女にとつて、貞操は一つの切子硝子の菓子皿なのです。何んかの拍子に、ひよつと落して破つて了へば、もうその破片に何んの未練もないのです。

……それに彼女は、精神と肉體を完全に遊離する術を知つてゐま

す。だから、例へ彼女が、私はあなたのものよ、と云つた所で、それが彼女の純情だとは云へないのです。彼女は最も嫌惡する男に、手易く身を任せたかも知れません。そして又、最も愛する男と無人島にゐて、淸らかな交際を續けて行くかも知れません

問。判決が下れば、監獄は橋の向ふにあるのだが、被告は控訴する口實を考へてゐるか。

答。私は喜んで橋を渡つて行きませう。私はそこで靜かに觀音經を讀みませう。それから、心行く迄、シイカの幻を愛し續けませう。

問。何か願ひ事はないか。

答。彼女に私の形見として、私の部屋にある鳩の籠を渡してやつて下さい。それから、彼女に早くお嫁に行くやうにすすめて下さい。彼女の幸福を遮る者があつたなら、私は脫獄をして何人でも人殺しをすると、さう云つてゐた事を傳へて下さい。

問。若し何年かの後、出獄して來て、そして、街でひよつこり、彼女が仇し男の子供を連れてゐるのに出逢つたら、被告はどうするか。

答。私はその時、ウオタア・ロオリイ卿のやうに叮嚀なお辭儀をしやうと思ひます。それからしやつとこ立ちをして街を步いてやらうかとも思つてゐます。

問。被告のその氣持は諦めと云ふ思想なのか。

答。いいえ違ひます。私は彼女をまだ初戀のやうに戀してゐます。彼女は私のたつた一人の戀人です。外國の話にこんなのがあります。二人の想愛の戀人が、山登りをして、女が足を滑らせ、底知れぬ氷河の割目に落ちこんで了つたのです。男は無限の憂愁と誠意を黑い衣に包んで、その氷河の盡きる山の麓の寒村に、小屋を建てて、一生をそこで暮したと云ふ事です。氷河は一日に三尺位の速力で、目に見えず流れてゐるのださうです。男がそこに、昔のままの、十八の少女の姿をした彼女を發見する迄には、少くとも三四十年の永い歲月が要るのです。その間、女の幻を懷いて、嵐の夜もぢいつと山合ひの小屋の中に、彼女を待ち續けたと云ふのです。例へシイカが、百人の戀人を港のやうに巡りつゝ、愛する術を忘れた寂寥を忘れに、この人生の氷河の下を流れ行つても、私はいつ迄もいつ迄も、彼女の爲に最後の食卓を用意して、秋の落葉が窓を叩く、落漠たる孤獨の小屋に、彼女をあてもなく待ち續けて行きませう。

それから若い醫學士は、被告の意識、學力、記憶力、聯想觀念、注意力、判斷力、感情興奮性等に關して、いろいろ細かい精神鑑定を行つた。

女を一番愛した男は？　ショペンハウエル。Mの字のつく世界的音樂家は？　ムウソルグスキイ、モツアルト、宮城道雄。斷髮の美點は？　風吹けば動的美を現す。寢沈まつた都會の夜を見ると何を聯想するか？　或る時は、鳴り止まつたピアノを。或る時は、秋の空に、無數につるんでゐる赤蜻蛉を。等々、……

8

シイカは川岸へ出るいつもの露路の坂を、ひとり下つて行つた。空には星が冷やかな無關心を象徴してゐた。彼女にはあの坂の向ふの空に光つてゐる北斗七星が、あゝやつて、いつもの通りの形を持してゐる事が不自然だつた。自分の身に今、これだけの氣持の變化が起つたのに、天體が昨日と同じ永劫の運行を續け、人生が又同じ歩みを歩んで行く事が、何故か彼女にとつて、ひどく排他的な意地悪さを感じさせた。彼女は今、自分が殘して來た巷の上に、どんよりと感じられる都會のどよめきへ、ほのかな意識を移してゐた。

だが、彼女の氣持に變化を與へ、彼女を憂愁の闇でとざして了つた事實と云ふのは、劇場の二階から突き落されて、一枚の熊の毛皮のやうに壓しつぶされて了つた、あのヴアイオリンを彈く銀行家の息子ではなかつた。又、彼女の爲に、殺人迄犯した男の純情でもなかつた。

では？……

彼女が籠に入れられた一羽の傳書鳩を受けとり、彼にさよなら、と凍たい一語を殘して、あのガランとした裁判所の入口から出て來た時、ホテルへ向ふアスフアルトの鋪道を、音もなく走つて行つた一臺のダイヤナであつた。行き過ぎなりに、チラと見た男の顔。幸福を盛つたアラバスタアの盃のやうに輝かしく、角かくしをした美しい花嫁を側に坐らせて、彼女の行ひがどうであらうと、彼女の食慾がどうであらうと、決して汚されはしないたつた一つの想ひ出が、暗い霧の中に遠ざかつて行く哀愁であつた。

心を唱ふ最後の歌を、せめて、自分を知らない誰かに聞いて貰ひ度い慾望が、彼女のか弱い肉體の中に、生を繋ぐ唯一本の銀の絲となつて、シイカは小脇に抱えた籠の鳩に、優しい瞳を落したのだつた。

9

一臺の馬車が、朗かな朝の中を走つて行つた。中には彼ともう一人女優のやうに華手なシヤルムーズを着た女が坐つてゐた。馬車は大きな音を立て乍ら、橋を渡つて搖れて行つた。彼の心は奇妙と明るかつた。橋の袂に立つてゐる花賣の少女が、不思議さうな顔をして、この可笑しな馬車を見送つてゐた。チユウリツプとフリイヂヤの匂ひが、緑色の春の陽差しに溶けこんで、金網を張つた小いさな窓から、爽かに流れこんで來た。

何もかもこれでいい。自分は一人の女を戀してゐる。それでいい。それだけでいい。橋の向ふへ行つたとて、この金網の小窓からは、何が一體見られやう。……

三階建の洋館は平屋の通りに變つて行つた。空地がそこここに見え出した。花園、並木、灰色の道。――たつた一つのこの路が、長く長く馬車の行方に續いてゐた。その涯の所に突然大きな建物が、解らな

いものの中で一番解らないものの象徴のやうに、厳然として聳えてゐた。彼はそれが監獄だと信じてゐた。

やがて馬車は入口に近づいた。だが、門の表札には刑務所と云ふ字は見付からなかつた。同乗の女がいきなり大聲に笑ひだした。年老つた門番の老人が、悲しさうな顔をして、静かに門を開けた。錆びついた鐵の掛金がギイと鳴つた。老人はやはりこの建物の中で、花瓶にさした椿の花のやうに死んで了つた自分の娘の事を考へてゐた。男の手紙を枕の下に入れたまま、老人が臨終の枕頭へ行くと、とろんとした暗い瞳を動かして、その手を握り、男の名前を呼び乍ら死んで了つたまだ年若い彼のたつた一人の娘の事を。最後に呼んだ名前が、親の自分の名ではなく、一人の見も知らない男の名前だつた悲しい事實を考へてゐた。

10

シイカは朝起きると、縁側へ出てぼんやりと空を眺めた。彼女はそれから、小宮の中からそつと取り出した一枚の紙片を、鳩の足に結えつけると、庭へ出て、一度強く鳩を胸に抱き締め乍ら頬をつけてから手を離した。鳩は一遍グルリと空に環を描き、今度は急に南の方へ向つて、糸の切れた紙鳶のやうに飛んで行つた。

シイカは蓋を開けられた鳥籠を見た。彼女の春がそこから逃げて行つて了つたのを感じた。彼女は青葉を固く噛みしめ乍ら、芝生の上に身を投げ出して了つた。彼女の瞳が涙よりも濡れて、明るい太陽が彼女の睫毛に、可憐しい虹を描いてゐた。

新聞社の屋根でたつた一人、紫色の仕事着を着た給仕の少女が、一襟にさし忘れた縫針の先でぼんやりと欄干を突つつき乍ら、お嫁入だとか、電氣局だとか云ふ事を考へてゐた。見下した都會の底に、いろいろの形をした建物が、海の底の貝殻のやうに光つてゐた。

無數の傳書鳩の群が、澄み切つた青空の下に大きく環を描いて、新聞社の建物の上を散歩してゐた。少女はふと、その群から離れて、一羽の鳩が、直ぐ側の欄干にとまつてゐるのを見付けた。可愛い嘴を時々開き、眞丸な目をぱちぱちとさせ乍ら、ぢつとそこにとまつてゐた。あすこの群の方へは這入らずに、まるで永い間里へやられてゐた里子のやうに、一羽ひよんぼりと離れてゐる様子が、少女には何か愛くるしく可憐しかつた。彼女が近づいて行つても、鳩は逃げやうともせずにぢつとしてゐた。少女はふとその足の所に結えつけられてある紙片に氣がついた。

11

二月の感傷

押入の奥、抽斗の隅々まで片づけようと、とり散らした部屋の

中で、ふとした古い手紙の一片に、いつの間にか、はたきを取り落し、その夥しい雜物と埃の間に、いつまでもいつまでも、とりとめもなくすわりこんでしまふ私のくせは、この頃も未だ、……

四月、四月、四月になつたら——

四月になつたとて、懶いその日暮しのほかに、何の新らしい事かな「あて」のあらう筈もない私が、ただ、花が咲くだらう、風がぬるむだらう。といふことだけで、ついまたほんやりと、おもひほうけてしまふのです。

四月になつたら、大きな犬を二疋飼はうと思つて居ます。

私は、房々と毛のちぢれた、小牛ほどの犬の頭を二つ膝へのせて、そのどつしりした首つ玉を、とんとん兩手でたたきながら、日向ぼつこをしてゐたいとおもふのです。たたきながら、いつの間にかぼんやりと、遠い人のことをかんがへこんでしまつたとき、もしも彼等が、その聰し氣な瞳を見合せ、氣の毒さうな色を浮べたら、私はすこしうすあかくなり、二つの首を息のつまるほど、抱きしめてやらうとおもふのです。

四月になつたら、ふつくらと廣い寢臺を据え、黑い、九官鳥の籠を吊さうとおもつてゐます。

私は、寢臺の上に腹這ひ、頬杖をつきながら、鳥に言葉を敎へこまうとおもふのです。

君は幸あふれ、
われは、なみだあふる。

もしも彼女が、嘴の重みで、のめりさうになるほど嘲笑しても私は、もう一度、云ひ直さう。

さいはひは、あふるべきところにあふれ、
なみだ、また——

それでもガラガラわらつたら、私はいつそあの燃え枯れ際に、

あたしやね、おつかさんがね、
お嫁入りにやるんだとさ

と、おぼえさせようとおもつてゐます。

ああそれから、裏の櫻の下へは、羊を一疋、つながなくちやあ。

私は今まで四年越し書きためて來たやうに、四月になつても、あてのない手紙を、やつぱりまいにち、まいにち、書きつけるだらうから。

四月からは、羊を飼つて、書いてはたべさせ、書いてはたべさせることにしよう。

でもすこし苦すぎて、たべにくいやうなら、こまかく、こまかく刻んで

遠い、　傍、　一途な
憐憫　報いなき
ゆくすゑ　秋の
ゐたた　まれない

こんな、きれぎれを、散りかかつて来る櫻の花ひらに、交ぜてたべさせることにしませう。

さうして、今度、彼の二番目の子供が生れたら、それを——その、まつしろな、哀し氣な瞳をした小羊を、——だまつて、贈つてやることにしませう。

——私の妹も、もう長い裾の洋服を着せられた事でせう。

——カスタニイの並木路を、母とよく歩いて行つたものです、

——神様が、妹に、立派な戀人をお授け下さいますやうに——

——Amen!

——Amen!

——一九二七年四月・鎌倉にて——

（挿入した『二月の感傷』は作者F・Oの承諾に依る）

——（　橋　）——

12

明るい街を、碧い眼をした三人の尼さんが、眞白の帽子、黒の法衣、黒い洋傘を日傘の代りにさして、ゆつくりと歩いて行つた。穏やかな會話が微風のやうに彼女達の脣を漏れて來た。

——もう春ですわね。

——ほんとに。春になると、私はいつも故國の景色を想ひ出します。

この異國に來てからもう七度の春が巡つて來ます。



善魔

里見弴

四の一

日本劇場の支配人秘書、佐山俊次の名で、塔ノ澤の對翠樓へ來てくれ、との至急報の電報を、昌造は、熱海の町はづれにある母親の別莊で手にした。それは冬の三四ケ月を、きまつてそつちで暮すことにしてゐる母を見舞ひがてら、ついその正月匆々大船の乘損ひ、下駄をひツくり返して挫いた右足のあと養生も兼ねて、跛を引き引き出かけて行つて、五六日してからのことだつたが、前からの打合で、さう云つてよこすわけは解つてゐた。今度、劇界の大勢力である××合名會社の手を離れて、一門を率ゐて立つことになつた市川鰕藏のために、佐山の肝煎で、後援會のやうなものを拵へてやらうといふ、その下相談の寄合を、一つには昌造の熱海行きがきまつてからのことだつたので、旁々箱根へでも持ち出して、ゆつくり風呂に浸つたりしながらやらうではないか、といふ話合になつてゐた。で、みんなが東京を發つて來やうといふだんになつて、たゞその落ちつく先を知らせてよこした電報だつた。

昌造は、今までにまだ手をつけたことがないほどの長い仕事にかゝつて、それを歳尾の二十六日から新聞に載せ始めて、丁度三十回あたりの厄介なところを、日に一回は必

ず送らなければならない境遇たつたので、せめて、二三日前に知らせてくれたら、勉強して二回分づゝも書きためて置いて、のう〳〵と遊んで來られるものを、と少しは恨めしくも思つたが、僅か一週間たらずでも、老つた母親と差向ひの無事平穏に、そろ〳〵もう倦怠を感じだしてゐた矢先へ、久振りに親しい友達に逢へるといふ、その樂しさに紛れて、急に元氣づき、いそ〳〵と手提鞄に仕事の道具など詰めて、午後二時には眞鶴行きの乘合自動車が出ると聞き、時刻を計つて母の別莊を出た。

大雪の擧句で、熱海から眞鶴までの道は、お話にならないほどひどくなつてゐた。熱海線の開通と同時に廢物になつて了ふ筈の輕便鐵道の營業振りが、だらけきつてゐるので、大抵の人は、乘合か買切りか、兎に角自動車の便を撰んだ。そこへもつて來て、鐵道工事の材料運搬のために、ひつきりなしに馬力も通つてゐたから、もと〳〵村道に毛が生えたほどの手入れの屆かない道は、まるでもう滅茶苦茶だつた。自動車なら、普通四十分ほどの道程を、一時間二十分も揺られなければならなかつた。殊に伊豆山と熱海との間、それから眞鶴の停車場附近などの新道は、水の落ちきらない川床を行くと異らなかつた。

來た時に經驗したその道中は、多少苦にならないでもなかつたが、でも、乘合といふやつは、わりに窮屈しないから、と思ひながら出かけて行つた。ところが、歳尾から正月にかけての滯在客が、そろ〳〵もう引きあげて行く時節で、午前中に頼んで置いてまだ乘れない、といふやうな人たちで、乘合自動車の待合所がひどくこみ合つてゐた。中には、近所から取つて貰つた親子丼を、茶屋の牀几に掛けて、往來に背を向け、大急ぎでかつこんでゐるやうな若い男女などもあつた。

その景色を見ると、昌造はすぐ諦めをつけて、普通の自動車屋のあるところまで引き返して來て、一臺出して貰ふことにした。大勢の人が困つてゐるなかに、荷物もなしに、特別小さな體ひとつを乘せて、三四人分は空席のまゝ、一時間二十分の道を行くことは、錢金の話でなく、昌造には勿體ない氣がした。誰でもいゝから乘せて行つてやりたいと思つたが、然しそんなことを云つて聲をかけるには、乘りたい人があんまり多すぎた。

乘合の待合所近くへ行くと、客の見送りについて來てゐる宿屋の番頭のやうな、なんでも心得てゐなければならない筈の人間までが、慌たゞしく驅けよつて來て、乘合ですか〳〵と一刻を爭ふやうな調子で、右左から問ひかける。あとから客が、自分で大きな荷物などぶらさげて、我先にどや〳〵とより集つて來る。餓えたものゝ前に、突然食物でも持ち出された時のやうな、いかにもがつついた容子に、理由のない反感が、むか〳〵とこみあげて來た昌造は、眉間に氣むづかしい八の字をよせて、窓から、わざとその餓鬼道の焦燥を睥睨して通つた。それに對しては、そとからも、すぐまた反感の眼差が、矢のやうに射かけられた。

道幅の狹いところへ、人通りも可なり繁く、それに泥濘んでゐるので、自動車はごく徐行だつたが、たうとう或る休茶屋の前で、彼方から來た自動車をやり過ごすために、ぴたりと停つて了つた。と、そこにゐた客が、およそ買切とは察しながらも、よもやに引かされて、一どきに飛び出して來た。先刻から、のべつに同じ答へを繰り返さなければならなかつた運轉手は、たうとう肝癪を破裂させて、その人たちに對して、ひどく邪慳な一喝をくはせた。それがまた昌造に反感を抱かせた。すぐうちから扉をあけると、半身乘り出すやうにして云つた。

「乘れる人數にきりがあるから、老人や女の人だけでも、乘れるだけは乘せてつてあげませう」

そこには、六七人も女がゐたが、いづれも男の連をもつてゐる人たちだつたとみえて、――それにまた、運轉手ならば兎も角も、乘つてゐる客と直の掛合となると、なんとなく鼻白み、遠慮がちになつて一人へり二人へり、だんく奧へひつこんで行つて了つた。

「誰も乘らないんですか」

その時、三十四五の、丸髷に結つた女が近よつて來た。宿屋の番頭がついてゐて、それが口を利いて連のない婦人だから同乘させて貰へまいか、と言葉丁寧に賴むのを、「さアく、どうぞ」とひと言、すぐ昌造は席をひらいた。

「なんとも申譯ございませんが、何分どうか……。御免くださいまし。相濟みません……」

そんな風に、諄々と禮を云ひながら、二つ三つ荷を提げてはいつて來た。羨望と反感の目つきで、取り殘された客が見送つてゐるなかを、やがて自動車は動きだした。交通機關の不備や、道の惡いことなどについて、お互に十言ほどづゝ話し合つたきりで、口下手な、律氣な、ごく堅氣の女房さんらしいその女は、間を出來るだけ離して、彼方の窓際にぴつたりくツついて、小さくなつて押し默つて了つた。

一時間二十分の道中に、話相手が出來ることは、ちよつと樂みでもあつたのだけれど、何分これでは仕樣がなかつた。そのくせ昌造の心持は、たつた一人乘つて行くのとは、おのづから變つてゐた。微かながらも拘泥があつて、これくらゐ沈默が續いたら、具合がわるくなつて、なんとか話しかけさうなものだ、とか、あぶなつかしい山鼻を、急角度に把を切つて廻る時など、なんとかそれについてひと言口を利いてやらうかな、とか、そんな風に始終あたまについてゐることが、自分ながら可厭だつた。彼方も同じことなのだらう、と思ふと、なほさら氣が詰つた。さうかと云つて、こつちから、無理に話題を持ち出してみるほどの氣にもなれなかつた。

要するに、誰もほかに乘つてゐない氣持になればいゝのだ、と思つた。で、さういふ場合に、考へごとにも倦きると、よくやる癖の鼻唄を唄ひだした。よそながら聞かせたがつてゐるやうに釋られても結構だ。――それにつけても、すぐこんな拘泥が出るのを、まづそれからして吹き飛ばして了はふとして、昌造は、いつもよりづツと大きな聲

で、やけくそな調子で、三四年前まで稽古してゐた長唄の、なかで一番好きな「土蜘蛛」をやつてゐた。

「ツンテレ、ツテ〱、ツルトツツン」

口三味線で、「あまの、岩戸に、かくれんばうオ。今に、停へて、神國のオオ」

やりながらも、然し、すぐまた、(一體この男は何もんだらう、なんて思つて、さぞ呆れ返つてゐやがるだらうなア)――そんな ガラガラしたものゝ考へ方になつて來てゐた。腰掛の上に胡坐をかいて、駄駄ッ兒じみた目つきで、移り變るそとの景色を眺め續けた。煙草を吸ふにしても、さもまづさうに、プカ〱と矢鱈に煙ばかり吐いた。捨てる時には、駒下駄の下に、邪慳な踏み躙り方をした。――何かなし昌造は、總てがさつに振舞ひたかつた。さうでもしなければ、たつた一人で乘つて行く氣持になれなかつた。

やつと眞鶴へ着いた。降りてからも女房さんは、繰り返し〱禮を述べ、賃金を折半してくれと云つたが、無論昌造はきつぱりそれを斷つた。

停車場に、昌造は、母親から頼まれて來たちよつとした用事があつた。三四日前から、生花の師匠が、遊びがてらやつて來てゐたが、その人が東京を發つ前に、停車場で花屋から受け取つて來る手筈にして置いた花が間に合はないで、仕方なく、あとから客車便でこれ〱宛に送るやうにと、見送りの人に云ひ殘して來た。すぐ送りだした、といふ照會だけは、その日のうちに、電報で花屋から云つてよこしてあつたが、いまだにそれが屆いて來なかつた。いろ〱訊き合せた末、眞鶴の驛にひツかゝつてゐるのだらうといふことになつた。で、今日の序に、驛員にそれを調べて貰つてくれるやうにとの頼みだつた。

たてこんだ荷のうけ渡しに忙殺されてゐる手荷物係の一人を、昌造は、やつとのことで捉へて、訊くと、暫くそこらをまご〱して戻つてゐた揚句、來てはゐるが、この用紙に、これ〱の書込をし、捺印して來なければ渡すわけに行かない、と、いかにも突慳貪な挨拶だつた。熱海とこゝでは、なか〱さう簡單に行つたり來たり出來ないし、それに、何しろ内容が花のことだから、今までゝも既に損んでゐるだらうのに、これからまたその手續を踏むとなると、明日の間にも合ふかどうかわからない、そのへんのことも察してくれて、なんとか特別の便宜を圖つて貰ふわけには行くまいか、と、言葉を盡して頼んでみたが、それが當りまへとは云ひながら、木で鼻くゝるあしらひで、どうにも取りつく島がなかつた。と、その時、うしろから、

「あのう、判は、代人のではいけませんのでせうか」

と、臆々口をだした者があるので、振り向いてみると、先刻の女房さんが、いつの間にかうしろに立つて、この厄介な掛合の一伍一什を傍聽してゐたものとみえて、早速もう懷中のなかゝら、三文判か何か取出さうとしてゐた。

「どうも、さういふことは、規則上できないんでね……」

結局一遍ではどうしても埒があかないときまつて、待たせて置いた自動車の運轉手に受取の用紙を渡し、これ〲の箇所にこれ〲の書込をし、印をついて、もう一度誰か人をよこすより仕樣がないから、と、母親の別莊まで言傳を頼んだ。そんな時でも、女房さんは、心配さうにそばについて來て聞いてゐたが、自動車を歸してから、昌造が切符を買ひに行かうとすると、それだけはせめて自分の方で買ふから、どこまで乘るのか聞かせてくれと云つて、斷つても斷つても聽かずに、どん〲出札口の方へ近づきながら、

「東京驛でおよろしいのですか」

「いゝえ」

「お宅はどちらなのです？」

「うちは逗子だけれど……」

「ぢア、逗子を買へばおよろしいのですね？」

「でもね、今日はうち歸るんぢアないんだし……いゝんですよ」

「ほんとに、どちらへいらつしやるんだか仰有つてくださいまし」

「ほんとにいゝんですよ」

「そんなこと仰有らないで、どうぞこれだけは……」

「それより、大へんな人だから、序にあたしが買つて來てあげよう。貴方は東京驛ですね？」

「とんでもない！」

この邂逅に驚いたか、もうそれツきり云はずに、慌たゞしく人ごみのなかへわり込んで行つて了つた。

女房さんは三等だつたので、歩廊で別れた。別れしなには、性分か、また例の鯤さで、逗子の所番地や名前を訊かれたけれど、まアいゝぢやアありませんか、と取り合はずに、昌造は、さつさと別の客車へ乘り込んで了つた。

四の二

一人々々膳を運んで來たのを、この方がいゝと、隅によせてあつた疊一帖よりも大きいほどの、欅の机を持ち出して、ぐるりとそれを圍んで坐つた。席の上下、主客のけじめなどを云つてゐるものはなかつた。それほどみんな氣のおけない友達同士だつた。作家の側では、高松、小野、久保、昌造、佐山の親友で畫家の杉田、それに幇間と世話人の佐山、といふ同勢七人、誰一人として遠慮ぶかく差し控えてゐるやうなのはないのだから、かうして鼻をつき合せた食卓の、その賑かさといふものはなかつた。

佐山から、今度幇間が、獨立不羈の、それだけにまたいろ〲の危險も豫想される立場に立つに至つた動機や經緯について、一通りの說明があつて、今後何かにつけて指導と援助を望む、といふやうな意味を、座談的な、改まらない調子で話さうとする間も、落ちついて聞いてゐるものはないくらゐだつた。そんなことはもう解りきつてゐる、といふ風に、すぐあつちやこつちから、今後の方針について、思ひつ

くまゝの意見が盛に飛び出した。
「何しろ、なんだよ、君なんかゞ、どんく新しいものでもやつてくれなきア、どうにも仕樣がありやしないぢアないか」
　頰と目をしばたゝきながら、甲高な早口で、ごり押しに自分の云ひたいことだけ云つて退けやうとするのは、新興劇壇隨一の寵兒と云はれる高松だつた。「そんな、君、いつまで仙臺萩だの、め組の喧嘩だのつて、あんなくだらない芝居をやつてたつて……」
「そんなこと云ふけど……」
　高等學校時代からの舊い友達である久保は、もつて生れた反潑性から、冗談ながらもすぐ突ッ込んで行つて、「昔日は高松だつて、これでずゐぶん大入場通ひをしたもんだぜ。左團次が明治座に立て籠つて……」
「それア見に行つたさ」
　大きな腹に波をうたせて笑ひながら、「でも、俺は、久保みたいに、高島やアなんて、大きな聲で怒鳴つたりしたことはないよ」
「さうですか。貴方がたにもさういふ時代があつたんですかね」
　俊藏は、白い、綺麗に揃つた齒並をみせて、机の上へ兩肘で乘り出して來た。
「それア、君、あるさ！　芝居のことなんぞこれんばかりも云はない貝原なんぞだつて、若い時分にやア、相應……どころか、僕等よりもつと通俗的な意味でのけんぶつだつたかも知れないんだからね」
　そこまで云つてから、小野は、厚い近眼鏡の奧に細めた目を昌造の方へ向けて、「加島君なんぞも、生拔の東京ッ兒だから、無論ちいさい時分から見てるに違ひない」
「見てることは見てるが、そんなものは、大して今日の役にやア立つてゐませんね」
　昌造だけ學校が別で、お互に文壇といふものへ乘り出してからのけたの三人などに比べればづッと日の淺い交際だつたから、自然、いくらかは言葉が改つた。
「然し、それアそんなこたアありませんよ。なんかそれア、目に見えないとこで、ずゐぶん役に立つてますよ」
　そんな風に云ふのは、なかでは一番親しくしてゐる久保で、殊に貴方の書くものなんざア、誰より一番歌舞伎劇の手法が取り入れてあると思ふがなア」
「つまり、古いつてこつてすかね」
　言葉の組み合せだけに、心にもなく、昌造はこんな風に戯れた。
「そんなこたアないが、——それア決して古いなんてこたアないが、おんなじことでも小野の芝居となると、矢つ張りきちんとはしてゐるんだが、劇作術の系統から云つて、どつか歐羅巴風ですよ。[illegible]に源を發した本格戯曲つてつた感じでね……」
「まアいゝよ」
　と、小野は、世故に馴れた穩な調子で、自分をそつと話題のそと

へ抜き出さうとした。「お互の批評はいつだつて出來るんだから、今夜はまア兩角君の問題を話さうぢアないか」

本名で呼ばれた鰕藏が、そのとき輕く頭をさげると、歯切れのいゝ、はつきりしたもの云ひで、

「何しろ、こんなことをしてゐちアとても駄目だ、と思つた氣持だけは、そんなにまアあやふやなもんでもないつもりなんですけれど、さア、それぢア、今後どんな風にやつてつたらいゝかといふだんになると、誠にお恥しい話ですが、實際のところ無我夢中なんでして……どうかひとつ、これからはみなさんにビシ／＼云つて頂いて、なんとか道を切り拓いて行かなきアならないと思つてゐるんですが……」

「兎に角、これまでの芝居道の、へんにこんがらかつた情實みたいなもんがなくなるだけでも、數等いゝ芝居が出來るにきまつた話なんだから、こゝでひとつ君がうんとふんばりさへすれア……」

一語々々の頭へ力を入れてさう云ひながら、高松は、丸々と肥つた可愛らしい指先で、——それとは凡そそぐはない神經質さで、皿小鉢のあちこちへ、ちよい／＼さはつてみたりした。

「經營方面のことは、僕等にはさつぱり解らないが」

と、小野が、眉間の縦皺を深く、目をそばめて、「感じだけで云へば、背水の陣といつた態もあるが……」

「えゝ、無論それアさうなんです」

「その點からも、きつと仕事の上にいゝ結果を現はして來やアしないかと思ふんだ。要するに、今度のことに、僕なんぞ素敵にいゝと思ふな。大賛成だな」

「どうです」

低聲で、久保が、昌造の前に銚子の口を向けてよこした。これだけの人數のなかで、珍しいことには、飲ける口といふのは、この二人きりだつた。

「有難う」

昌造はうけて、「それから、なんだね、自分もそんななかの一人で云ふのはをかしいけれど、折角これだけの人に集つて貰つたんだから、あけるたんびに、一つは是非新しく書き卸して貰ふんだね」

「えゝ、それは、是非お願ひしたいと思つてたんですけれど、なんですかあんまり虫がよすぎるやうで……」

「いや、實はそれア僕からもお願ひしようと思つてたんだ。ありもののなかゝら、出來さうなもんを見つけて、少々無理でもやつてみるつてことも、所謂こなす力を養ふ上から云つて、無論必要なことにやア違ひないんだが、一方にはまたこの人の柄とか仁とかいふやうなものを見て、はめて書いて貰つたら……」

もと／＼作家出の佐山秘書は、これだけの人を招いたのも、眼目はと云へば結局そこにある、といふ氣持を、强いては押し隠さうともしずに、熱心にから述べたてた。いろ／＼討議の末、第一回の公演にはとてももう間に合ふまいから、何か適當なものを探すとして、第二回

からは、必ず書き卸しを一つを加へるといふことにきめ、云ひだしべえだからと、最初まづ昌造が筆を執ることになつた。この種の會合で、具體的の問題がかうすら〳〵とひとつでも片づけば大出來の部で、待ち構えてゐたやうに、あとはすぐもう雜談だつた。

食後、好きな者だけ四人ひと固りになつて、敷布にくるんだ座布團を圍んだ。兩角が持參の、兆代が好きで、特に誂へて秘藏してゐたといふ花牌の道具は、なか〳〵立派なものだつた。誘はれるまゝに、久振りに昌造も、その遊びに加はらうとして、ほろ酔ひの、どちらかといへば、氣樂なお喋りでもしてゐたい氣分のまゝで、そこへ行つて牌を手にした。個人意識の強い久保でさへ、かういふ顔ぶれで、ほんの酔餘の座興に、さうむきになつてひいてもゐなかつたが、ひきで、梅ひろひの赤短みで出てゐた昌造の手を、いゝどう二から捷くもそれと讀むと、親のめくりで出た初の梅を前にして、

「どうです？」

と、ニヤ〳〵昌造の顔を覗き込みながら、正直で持つてるんですか。それとも二ちようかなー

「詭計は密なるを以てよしとす、だ。隠密々々」

「大抵親の手だと思ふんだけれど、兎に角一遍は延してみるか。……どうです、それとも貴方取りますか？」

「さア、ね」

「ほかのものなら兎も角、梅だから取る、てやアしないか」

笑ひながら、早口に呟くと、平手で、ぽんと昌造の膝を叩いた。昌造には、見るまに赤くなつて行く自分の顔が忌々しくつてならなかつた。半分やけで、

「取るとも！ 梅ならなんだつて取る！よしんば手になくつたつて打ち當ててみせる！」

はたに誰一人知つた者がないと思ふ氣安さからも のめ〳〵とからかひ退けたのは、瑞龍の本名お梅にかけての、久保の樂屋落の冷かしを、手強く切り返したわけだつた。このふて〴〵しさの裏には、けれども、ほんの一重の薄さで、內心の嬉しさをつゝみかねた、初々しいと云つてもいゝほどの心が、却つて露に透いて見えた。

「呆れる！」

「さア、どうします」

「どうもしやアしない。出來るもんなら勝手にお拾ひなさい」

と、ほかの牌をうつた。

なかでは一番玄人ッぽくひく兩角が、親の位置から、むづかしい顔をして、おッと場を見詰めてゐた。

口の三

翌日は、富士屋ホテルまで晝飯を食べに行つて、そこからもうぢかに引きあげることになつた。久保は、差し迫つた婦人雜誌の仕事を持つて來て、一人あとに殘ることにしてゐたが、何も是非箱根に眠つた

ことでもなからうからと云つて、昌造が誘ふまゝに、ほかの連中とは小田原で別れて、一諸に熱海に行つて、二人とも前にちよつと顏馴染のある女が采配を振つてゐると聞いた紅楓園といふのに宿をとつた。おつきあひに、その晩は昌造も、母の別莊の方へは使で知らせてやつて置いて、一緒にそこに泊つた。訊いてみると、その以前芝公園のなかの大きな料理屋に勤めてゐた女は、もうそこも退いて了つたといふことで、あまりぱツとしない座敷に通されたが、然し仕事には、却つてそれもよかつた。箱根では、まだみんなが寢てゐる間に、そつと鞄から取り出した仕事の道具を、翌朝、こゝの帳場の上にも擴げなければならなかつた。そして書きあげた一回分を、郵便局へ持つて行きがてら、ひとまづ母の別莊へ歸つた。――こゝに來てから、瑞龍の手紙は、欠かさず日に一本は來てゐた。昌造も毎日のやうに、どうかすると新聞の一回分よりも長いくらゐなのを書いた。で、こゝまる二日の留守にも、二本や三本は來て、茶室の爐ばたに据えた机の上に、歸りを待つてゐてくれるだらうといふ樂しい豫期があつた……

――前年の秋もふかく、露香や三平とつれだつて、肇て扇ケ谷の清風園に訪ねて來た時は、電話の序にばた／＼ときまつて了つた話とは云ふじよう、然し感じに、何かしら手重く、落つきのないものがあつた。それが、昌造の借りてゐた茶室の名から、誰しもすぐ思ひつきさうな洒落だが、「露の茶へも二度三度」と、口調がいゝまゝに、なんかと云ふとそれの出たのが讖をなしてか、その後も時折訪ねて來て、その度毎にどん／＼隔てが薄れて行つた。昌造も、東京に出てゐる間の寢泊りどころにして、ちよつとした着換の二三枚は備へつけて置いた日本橋の瀬村へはぴつたり跛の道で、沖津へばかり足を向けた。いつとはなく、そこへは、友達ならまだしも、雜誌社や兄弟たちのところからさへ、昌造が上京してゐるかどうかを問ひ合せの電話がかゝつて來るやうなことになつて了つた。一つ床のなかに、瑞龍と枕を並べてねるやうなことも、今では決して珍しくはなかつたが、然し最初の手紙にあつた「爆裂彈」は、いつも儼然と二人の體の間に置かれてゐた。話が合ふとでも云ふのか、たゞもう實によく喋つた。これといつて取りとめたことでもないのだけれど、あとから／＼と話の種が湧いて來て、大抵は、緣側の欄間が白み、山王臺に鳥の聲が騒がしくなつてから、やつと喋り勞れて眠つた。おまけにその合間、――逗子と東京に離れてゐる時には、ちよく／＼手紙の往復があつたのだから、假令どんな馬鹿だらうとも、やがてはお互を識り盡さないわけにはいかなかつた。男と女との間で、さういふこととなしに、こんなにまで親しくなれやうとは、まつたく思ひ設けなかつたところで、それに比べれば、これまで滿足してゐられた親しい友達との友誼さへ、急に傷まれるほどだつた。嘘のやうな話だけれど、昌造は、この夜を徹してのお喋りで、十分たんのうしてゐた。二人の間に挾まれてゐる「爆裂彈」を、邪魔ッけに感じるやうなこともなく、殊更にそれへ觸れまいとするやうな心遣をしないでも、けろ／＼と忘れてゐられた。

とは云へこのことは、昌造が男であり、瑛龍が女である限り、どちらにとつても、決して自慢になる話ではなかつた。そこには、何かしらなみでないものがなければならない筈だつた。一體が凡庸主義で、少しでもなみでないものに對しては、すぐに疑をもち、ぶつてる、とか、きざだ、とか、そんな風な嫌惡の情を催したがる質の昌造だつたけれど、この自分たち自身のなみはづれに對しては、自己辯護の狹しさどころか、人には吹聴できないまでも、自分の心のうちだけでは、ちよつと褒めてやりたいほどの、ちやんとした理由があつた。それは第一には、氣持の落つきだつた。わく／＼と取りのぼせて、矢鱈に先を急ぐやうな幼さから脱けてゐられたことだつた。それから、この先どうなつて行かうとも、——例へば、さんざ金を使つて、身動きがならなくなつた揚句、ぽいと抛り出されやうとも、少しも動じないだけの眞面目さをもつてゐることだつた。一體瑛龍は、好かれゝば根こそぎ好かれる代り、また一方には、ずゐぶん惡い評判も多い、と云つた質の女で、昌造は、兄の健吉から、いつまでもあんなやつにひつかゝつてゐると、仕舞には、いゝ馬鹿を見るぞ、と露骨な注告をうけたこともあるし、そのほか蔭に陽に、自分たちの接近が、いろ／＼の意味で、ひどく危ぶまれてゐることも知つてゐたが、無論そんな女とも思はなかつたし、よしんばどういふ結果にならうとも、總て自分一人の責任で、誰に罪をかづけやうともしないくらゐの肚は出來てゐた。

瑛龍の側から、このなみはづれの理由を擧げるとなれば、もつとはつきりしてゐたが、それにはまづ、少しばかりかれの過去について述べなければならない。父母といふのは、二人とも相當の家庭に、それぞ／＼相續者として生れてながら、その頃にはまだ世間から許されにくかつた所謂戀愛結婚をして、そのために一生世を狹く送らなければならなかつたやうな人たちだつたが、瑛龍のお梅と妹のお蘭とが、二人ながら身を妓籍に置くことになつたのは、もつぱら兩親の趣味によるので、決して窮乏のなかに生ひ立つたわけではなかつた。なかでも姉は、父親の寵兒で、いかにも總領らしい弱氣、甘ッたれ、我儘、お洒落、お茶ッぴい、情の脆さなど、あらゆる性情を恣に展べて育つた。それが、十三の年齢に、ひとりこの土地だけの話でなく、東京ぢう探してもたんとはないほどの大がゝりの藝妓家で、多い時には百三十何人とかの妓を置いたと云はれるうちの養女として貰はれて行つた。そこでは、たつた一代でそれほどになるだけの、女傑と云つてもいゝやう女親が、一どきに二人も出來た。といふのは、つまり姉妹ふたり共力で經營してゐたのだが、こゝに移されると同時に、健氣にも賢いかれは、驚くべき意思の強さで、全く別の人間に生れ變つて了つたのだ。而もそれが、誰の目にも、昨日までと少しも變りなく見せることで成し遂げられ、今日でも、大抵の人からは、數ある養女のうちで、かれほど我儘いつぱいに云ふ目を出さす人はほかにない、と思はせてゐた。それは然し、新しい二人の母親たちに、どんな場合にも、決してなさぬ仲の冷たさを感じさせまいといふ、——子供のくせに、あゝ

こべに大人振る周到な、繊細な心遣から來てゐた。十四で父、十九で母と、次々に生みの親の死に會つた二度が二度ながら、涙はもとより顔色にさへ憂は見せなかつた。母親の時などは、慌たゞしい知らせをよそに、髪の出來がどうのかうのと云つて、一時間も鏡臺の前に、固唾ついてゐたくらゐで、同じ東京に住みながらたうとう二人とも死目には會はず仕舞だつた。かういふ、昌造のやうな直情家に云はせれば唾棄にも値すべき意思の力で、新しい親たちに對する、我儘と勝氣と華美好きとの形でなされる孝養を怠らなかつた。有繋の女傑たちも、これには心を許して親身の愛情をもち、それによつて同時にまたかれの大人びた心も、努力なしにしんから甘へたり、云ひたい放題の云へる折々も生じるやうになつて來た。一口に云へば、習ひが性となつた。

　さういふ玲瓏にとつては、客の心理を摑むことなどは朝飯前だつた。座敷のとり廻しのうまいことは、まるで藝者に生れついて來た女みたいだ、と評する人もあつたくらゐで、隅々まで氣がつき、それでゐてちつともこせつかず、うるさくなかつた。たゞ、惡く云へば一種の自己嫌惡者であるところのかれにとつて、どうにも解決のつけやうのないのが戀愛だつた。親とは云ふじよう、嚴しくは抱へ主に違ひない二人を喜ばせるやうな旦那をとることは、十三歳で甦生を決心したかれにとつては、何程のことでもなかつたけれど、――それゆゑ現に立派な旦那はついてゐたけれど、年ごろによつて惚れたはれたを云はないのも、藝者としては、矢つ張り親に心配をかける病氣のひとつに違ひなかつた。で、雛妓の時分から、父にしてもまた年齡が多すぎるほどの有名な女形を、岡惚だ岡惚だと騷ぎたてゝゐたが、だん〳〵そんなまゝごとじみたことでは人が承知しなくなつて來た。

　そこに、亞米利加歸りの或る富豪の息子が現はれた。善良で、親切で、俠婦心の厚いこの大河内には、兎角思索の多い玲瓏も、素直な氣持で好意がもてた。おまけに、年齡や容貌からいつて、玲瓏の惚れた人として、どこへ出しても恥しくなかつたし、名聞財産からいつても、親たちが決して眉を顰める筋道のない相手だつた。で、そんなところも決して人手は籍りずに、自分だけでちやんと前の旦那との話をつけて、天下晴れて大河内のものになつた。始め好きになつた氣持に打算はなかつたにもせよ、結果は、いかにもかれの思ふ壺だつた。これで、一應戀愛生活の解決もつき、華やかに、無事に、多忙に、そして變質されたかれとしてはなんの不滿足もなしに、夙くも月日が流れて、昌造が嘗て逢つた時までには、毎年一つづゝ珠を殖して來たといふ蒲鉾の指環に、既に七つのダイヤモンドが嵌つてゐた。だから、玲瓏を知つてゐる限り、大河内との關係を知らない人はないくらゐで、昌造ほどの、そんなことの詮索に冷淡な男でさへ、いつどこで聞いたともなく、そんな噂も耳に挾んでゐた。いつぞや沖津で、訊かれるまゝにいゝ氣になつて、長い惚話をさらけだしたあとで、お愛想にちよいと冷かしてやつたのも、この人のことだつたが、それほど有名な旦那

那を「爆裂彈」など、呼ぶ筈はないので、これはまた別に、内證の人があるに違ひなかつた。それは然し、最初の手紙で約束した通り、こゝでもまた觸れないことにして置いて、さてこれだけの女だつたから一晩ぢう喋つてゐても、一瞬間たりとも空虚や倦怠を感じさせられるやうな要はなかつた。この話上手といふことが第一で、それからまた、一つ床のなかで、どうかすると觸れ合ふ膚の感じに、ちつともいろけがないのも大きな理由だつた。間に「爆裂彈」を挾んでねてゐるのでなかつたとしても、この人とならば、たゞ仲よく話し明して、千一夜でもすごせさうだつた。

歸ると、母が、機嫌よく出迎へて、早速客間につれて行き、留守まで人をやつて取つてこさせたといふ草花に、庭先の梅を添へて、馬盥に生けた手際の自慢だつた。鐵無地の道行を着て、後手に身をそらせてゐた師匠も、呂造がおめず臆せずいゝ加減にやッつける批評を、長閑な笑ひ聲をたてゝ聞いてゐた。

「あゝ、さう〳〵」

と、母は、切下の鬢の毛の、短く切りすぎたか、ともすれば落ちかゝつて來るのを、うるささうに撫であげながら、「さう云へば、お前さんの出かけなすつたすぐあとに、壬イさんから。

作者註。——壬之助は、健吉のすぐ上の兄で、安城家の次男である。

お前さんが好きだからつて、なんだかへんなものを送つてよこしてくれたよ」

「なんです?」

「なんだか知らないけど、これくらゐな……」

と、手つきで巻煙草の箱ほどの大さを拵へてみせながら、「なんかの根ッこみたいな、堅アいもんで、一種へんな匂ひがするんだけれど……ちよつとお待ちよ、いま持つて來させるから」

さう云つて呼鈴を押してから、腐らせても勿體ないと思ひ、なんだか、正體は知れなかつたが、兎に角堅いので、フライにでもしたらと、昨夜さうして食べてみたが、とても不思議な味だつた、などゝ話してゐるところへ、女中がどんぶり鉢を持つてはいつて來た。

「なんでせうね」

と、うけとつて見て、思はず呂造は、ぶッと噴き出して了つた。「阿母さん! あんた、なにヨウするですよ!」

「なんだい?」

「なんだいぢアありませんぜ、おこうこをフライにして食ふやつがあるもんですかね」

「え? おこうこかい?」

「支那の漬物ですよ。……お師匠さん、あんたもそのフライを食べさせられたんですか」

「へゝゝへ」

と、笑つて、どうも、さう伺ふと、なんかから支那くさいやうな匂

ひやしましたな」

「なんだか性の知れもしないものを、いきなりフライにして食つちまふなんて、相變らず阿母さん式だなア、大膽不敵と云はうか、惡逆無道と云はうか、實際呆れ返つちまふなア」

「さうかい！　おこうこかい！」

母親も、涙をこぼして笑ひ噎びながら

「あたしアまた、初めはなんか肉の乾し固めたもんに違ひないと思つたんだよ。だからフライにしてみたんだけれど、食べてみたら、どうも野菜らしいんで、ねえ、お師匠さん……」

「いや、然し、なんでした、なかなかフライも結構でした」

「何が結構……。冗談ぢアないぜ」

「さうですか、支那のお漬物。へーえ。それぢア、今夜は早速ひとつ、お醬油で煮かして頂きませう」

「その早速が老人の惡い癖でね、惡作行てしはしかないから、おこうこのフライなんてことになつちまうんですよ」

そんな憎口を利いたりして、やゝ暫く母親たちの相手になつてゐてから、昌造は、土庇の深い四疊半の茶室へ引きとつた。果して、きちんと片づいた小机の上に、瑛龍からの手紙が二通のつてゐた。昌造がこつちに來る前、もしかひよつとしたら、といふ程度で話してゐた熱海行きを、沖津のお民につきあつて貰つて、いよいよ明後日の晝發つことにしたから、と、後の方の手紙で知らせて來てあつた。

紅楓園は、支配してゐる女に馴染があつたばかりでなく、瑛龍の許にも出て、行くとすればそこに宿をとるやうに云つてゐたのも、ひとつには、久保にそこを勸めた私な理由でつた。晩飯までは、やつとうちで我慢したが、翌る日の樂みに堪へられなくなつて、當分紅楓園で仕事をするから、と母に斷ると、昌造は、またいそいそとそこへ出かけて行つた。

四の四

遠くから聞えて來た自動車の警笛か、どうもさうらしく聞へてならなかつたが、それつきり音も沙汰もないので、諦めてゐると、やゝ暫くしてから、女中が來て、久保に逢ひたいと云ふ客がある由を告げた。

「誰だらう」

「やつて來たんでせう」

「だつて、あの人たちなら、僕につて云ふ筈はないぢアありませんか」

「まア、兎に角行つてごらんなさいよ。きつとさうに違ひないから」

「どんな人？」

敷居際に控えた女中にさう云つて尋ねながら、上靴を突ッかけて出て行つたが、ほどなく戻つて來た足音か、一人ではなかつた。

「そんなことつて……。どうして？　え？　冗談いつちアいけないぜ

「……」
大聲に、久保の云ふのに續いて、例のほがらかなお民の笑ひ聲が聞えて來た。矢つ張りさうだつたんだな、と思ふ間もなく、襖があいて久保を先に、瑛龍とお民とが、ニコ〱笑ひながらはいつと來た。
「こんちは」
「いらつしやい」
「たうとう來ちやつたわ」
坐つて、はつきり頭をさげるやうなことをしない女だつた。氣忙しなくそこらをぐる〱歩き廻つて、「こゝにお二人とも御一緒なの？」
「あたしの部屋は隣なんだがね、然し、ほんとによく來たね。まア、ゆつくり落ついたらどうです」
「もうこゝまで來ちまへば大丈夫よ」
お民もかう云つてから、丸々とはちきれさうな膝を、昌造のつい鼻のさきに折つて、改めて挨拶したが、實際その、なんの氣もなしにふはりと出た「もう大丈夫」には、實感があつた。追手にでも追はれながら、やう〱こゝまでたどりついた、と云つた風情が、何故か昌造には、元氣のいゝ、二人の樣子に感じられて、いぢらしい氣がした。
「まア、こつちイ來てお坐んなさいなね」
「えゝ」
早速見に行つた昌造の部屋の方から戻つて來ながら「あたしたちの部屋にいらつしやらない？　三階のてつぺんで、こゝよりよつぽどからッとしていゝわ」
かようにして着いて來てから、二日二晩といふものを、昌造は、殆どその「三階のてつぺん」の部屋で暮した。
着いて來た晩、瑛龍は、以前よく出入し、時には房州の方の海岸にある御別莊へもお伴をした、或る、、の私生活について、一流の能辯で詳しい話を聞かせられた。それ〱部屋を貰つて、五人の側女が、恭しくかしづいてゐる樣など、今の世の話とも思へないほど變つてゐて面白かつた。少しばかりづゝよそつたお菜が、、、にだけは十ばかりも出る、それへ象牙と銀をつぎ合せた長い箸をちよいとつけると、これは誰へ、これは彼へといふ風に、五人づらりと居並んでお相伴してゐる側女たちへくださるのだが、そのお菜の具合で、およそ當時のお氣に入りを推察することが出來たといふのなども面白かつた。その時分は、おこう樣といふのが一番お氣に召してゐたらしい、そんなことを云つた。
「ふうん、さうかねえ。今時そんな世界もあるのかねえ」
久保も、珍しがつて、頻に感心してゐたが、昌造の方を振り向いて、「然し、いくら面白くつても、どうもこの話ばかりは頂けませんからねえ」
「さうねえ。あたしの學校時代の友達には、昔で云へばお小姓みたいな役で、、、の、、、にお仕へしてゐたのが二三人あるけれど、現に松井なんぞずゐぶんいゝ話を澤山もつてるらしいんだけれど、どうも

こいつばかりは使ひ道ゥならない、一生持ちぐされだ、なんて云つてますよ」
「さうですか。松井君、そんなことしてたことがあるんですか」
いつかまた話が變つて、みんなが共通に知つてる人の性分を、鳥とか花とか布地とかに喩へて云ひ合つたりした。昌造は、鳥ならば鵙、布ならば鼠色の羽二重だといふのが女連の主張だつたけれど、當人はもとより、久保もそれには贊成しなかつた。
「それア加島君は、羽二重つて感じは、まだいくらかあるかも知れないが、鼠色なんて、それアまるで違ふなア」
「いゝえ、さうよ。ちよいと肌ざはりがよささうで、そのくせ着るといやにぴやッとして、色目で云やア不得要領なかに、ちよいとから滋味があつて……」
「冗談ぢアないぜ、あたしに滋味なんて、薬にしたくもありやアしないし、萬事それア正反對だ。鵙だつて困るけれど、これア前にも一度友達の日本畫の大家にそんなことを云はれたこともあるから、ひよつとしたら、そんな風に見えるとこがあるのかも知れないが、どうも、要するにどつちもひどく皮相の見だね」
口では、そんな風に輕く抗辯して置いたが、然し昌造は、もしこれを瑛爾が本氣で云つてゐるのだとすれば、半年近いつきあひも、自分を識つて貰ふ上に、なんの役にもたつてはゐなかつたか、と、内心かなり寂しく儚かつた。それも、瑛爾だけならまだしも、そばからお民までが、頭にその比喩の適切さを云ひ張るので、仕舞には昌造も、口に出してまで、
「さうかなア、僕アそんな風な男に見えるかなア」
と、ついうつかり嘆聲を洩して了つたほどだつた。
次の日の好晴に、みんな勇みたつて梅園へ出かけた。何が氣に入らなかつたのか、宿を出るなり、瑛爾だけどん／＼先へ行つて了つたが、杖をたよりに跛を引き／＼ゆつくり歩いて行く昌造のそばで、お民が、どうでもかうでもそれを冗談にして了はふと、
「きつと、どつか木の蔭かなんかに隱れてて、あたしたちが行くと、わッてつて飛びだして來て、おどかすつもりなんですよ。さうしたらわざと知らアん顔をして、今度はこつちがどん／＼先へ行つちまひませうよ」
歸りには、瑛爾も、然しすつかり機嫌を直してゐたが、昌造はいくらか仕返しの氣持から、名所を案内する男の口調を眞似て、
「えゝ、これは腹立の松と申しまして、昔或る女が、腹立まぎれにこゝを驅けぬけやうとした時には、涙にうるんで、ピントのはづれた寫眞のやうに見えたと云ふことです。……えゝ、これがやけくそ坂……」
晩飯後町を散歩して、土產物を賣る店によつてゐた時だつた、うしろで、「加島さん、加島さん」と呼ぶものがあるのに、振り向いてみると、思ひがけなくも、それは、三四日前に國府津まで自動車に乘せて行つた女房さんだつた。店を出ながら、

「あゝ、貴方か……」
「どうも先日は……」
早速また例の鄭重なお辭儀で、それがすむと、今度は少し離れて立つてゐた大入道のやうな感じの五十男を、亭主だと云つて紹介した。口を利いてみると、亭主も慇懃しい調子の人で、女房が世話になつたことを、ひどく喜んで禮を述べ、兼々昌造の作品を愛讀してゐる由をも云ひ添へた。どこでどうして分つたのか、名前を知られてみると、あの自動車のなかのがさつ極つた振舞が恥しく、省られて、昌造は、往來ばたの薄暗がりで、獨かに顏を赤くして了つた。尋ねられるまゝに、今度は素直に、母の別莊に來てゐるのだけれど、この二三日は都合で紅葉館の方にゐるつもりだ、と答へて別れた。
そこに、買物をすませて、みんなも出て來た。
「だアれ？」
「いゝえね、どうも不思議な話なんだが……」
昌造は、先日の一伍一什を話して聞かせてから、どうして名前が知れたんだらう、と頻に首をひねつてゐたが、
「それア知れますよ」
と、久保は事もなげだつた。それもその筈で、この人が銀座通りでも歩くと、久保だ、久保達郎だと、呟く聲や、無遠慮な視線か、行く先々について廻つた。昌造にはそんなことはなかつたけれど、たゞ轉く、
「さうでせうかねえ」
と、云つてゐた。
みんなが寢に行つてから、昌造は新聞の仕事にかゝつた。今夜も可能だけあとに殘り、くたびれたとみえて、昌造の左の膝を枕に、座蒲團の上に丸くなつて寢て了つた。一枚書けるとは、胸に合せた兩の掌の間から、そうツと左の手をぬいて、紙挾のはねを押し、原稿紙を新しくしてから、またもとの位置に返して置いた。その晩も喋り明して、すぐ裏手の寺の、曉の看經を聞いてから瞼を合せた。
翌朝は大雪になつてゐた。そのなかを、昌造が寢てからやつとまだ三四時間にしかならない時分に、――といつても九時はすぎてゐたが、昨夜町であつた夫婦が、つれだつて尋ねて來た。斷るのも氣の毒と起きて逢つた。亭主といふのは、早稻田の方にある日蓮宗の寺の住職だつた。先達は女房さんだけちよつと歸つて來なければならない用事で出かけたが、一晩泊りですぐまたこつちへ戻つてゐたのだといふ話だつた。
「何しても不思議な御緣で御座いまして……」
と、いかにも好人物らしい住職が、眞四角に坐つた膝頭を撫でながら、「今度、歳尾にこちらに參ります時分にも、宅に居ります若い書生さんたちに、何かあつちへ行つてからみるやうな本があつたら借して貰ひたい、と申します、なかの一人が、大へんに貴方のお作に感服して、始終愛讀させて頂いてるといふ男でして、これがいゝ、あゝこれ

も面白い、といふ具合で、四五冊も貸してくれましたのが、殘らず貴方の御著書ばかりでして、實はこつちへ參りましてから、づうッと續け樣に貴方のお作ばかり拜見さして頂いて居りましたやうなわけで、なんですかもうかうして思ひがけなくお目にかゝる機會を得ましても、甚だ失禮ですが、とんと餘所のお方のやうな氣はいたしません。貴方の方では御存知なくとも、わたくしにしますと、もう十年もお心やすく願つて居るやうな心持がいたしますんで、……。それにまた、先達は、偶然にも愚妻が自動車に御同乘の榮を得ますなどゝは、全くもつて思ひがけない、まるでもう夢のやうな話で御座います。これもまアなんかの御緣と申すので御座いませう、誠に不思議なことで……」

昌造は、恐縮して、堅くなつてゐた。さう聞けば、けれども、どうして昌造だといふことが分つたか、そのわけはほゞ想像するに難くなかつた。多分「宅にゐる書生さんたち」とは、早稻田へでも通ふ學生で、それに間貸をしてゐて、――だから、女房さんは、若い人たちから、小母さん／＼と慕はれてゐるやうなわけなのだらうが、それが東京へ歸つてから、みんなに途中自動車の一件を、感謝の氣持を露に話して聞かせたのだらう。そのなかには逗子が出る、生花の荷を受け取らうとしてゐた時に幾度も繰り返した安城といふめつたにない姓が出る、――昌造の愛讀者なら、この二つの固有名詞を捉へ、少し詳しく樣子でも訊けば、もうそれが加島昌造だといふことに、少しの疑も抱くわけはないのだ。――昌造は惡いことは出來ないものだ、の意味をそのまゝに、いゝことも出來ないものだ、と思ひながら、多くは目を伏せ、うけ答へばかりしてゐた。

女房さんと違つて、住職の方は話好きらしく、なか／＼腰を擧げやうとはしなかつたが、昌造は、一刻も早く三階の部屋に歸りたくつてもじ／＼してゐたうち、たうとうこらへきれなくなつて、今ちよつと仕事の忙しい時だから、と嘘をついて了つた。

「いや、これアどうも、誠に心ないことをいたしまして……」

いゝえ、この大雪のなかを、態々どうも恐れ入りました」

「これは……」

と、女房さんに目くばせして風呂敷包をとかせ、敷島の箱を取り出すと、疊の上を、昌造の前に押しやりながら、「誠に粗葉で御座いまして……。實は、これに訊きましたところ、自動車のなかでも、のべつに煙草をめしやがつていらしつたと申しますもんですから……」

「そんな御心配はなさらなかつた方がいゝんですけどね……」

「唯今伺つてみますと、貴方が國華をお用ひでいらつしるんで、はアこれアしまつたことをした、と思ひましたんですが……」

と、さもてれたやうに笑つて、「どうぞまア、御召使の方にでも………」

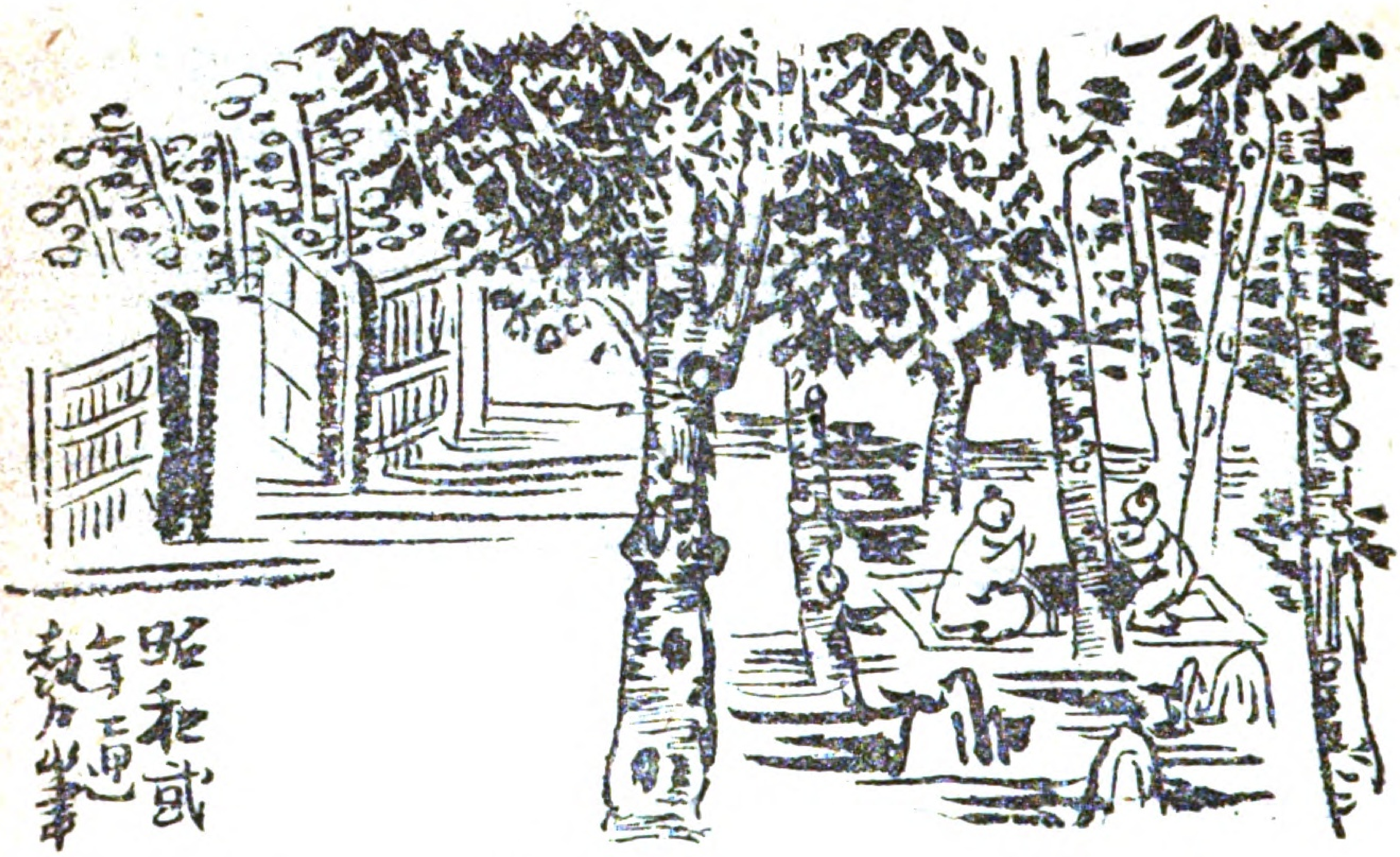
「とんでもない。ぢア、御遠慮なしに頂戴して置きます」

「ほんとにお恥しいもので……」

女房さんも呟いた。

「ちよつと御禮に伺ひましたのがつい喋り込んで了ひまして、とんだ御邪魔をいたしました。では、これでお暇いたしますが、どうぞこれを御縁に、以後御別懇にお願ひ申します。お序も御座いますまいが、また自然あちらの方へお通りかゝりの節は、どうか……」

屍は言葉を我慢しいく\やつと住職夫婦を玄關まで送り出すと、昌造は、長い階段を飾ふやうにして三階へ駈けつけた。そこでは、雪を肴に、久保がもう一杯はじめてゐた。



太陽の黑點

前田河廣一郎

1

太田爲吉は、跛であつた。

勞働者に生れついた彼は、組合幹部の徽章をぶら下げたり、轉轍手の赤旗を振つたりすることが出來なかつたために、三種の職業に從事してゐた。もつとはつきり云へば、毎日三種の安價な商品を、三人のちがつた行商人として、賣つて步るいた、といふ方が正しいかも知れない。つまり、普通の家庭で朝の新聞を開らく刻限までに納豆を商ひ、午前中は學齡未滿の兒童を顧客にして飴を賣り、電燈のつく前後にゆでだし饂飩の車を曳くといふことが、それであつた。

この三種類の商賣は、それを商ふ方法に確乎とした分岐線のない小商ひにちがひなかつたが、それでも、一人の脚の不自由な人間が、一日に三人を兼ねるに十分なほどの商法上の約束と變化はあつた。爲吉は長いことこの仕事をつづけて來た――。納豆は、原價二十五錢の十本が、辛子だけ自分持ちで五十錢になつた。これは問屋で配達してくれる代りに殘品は引取らない。飴は、氣紛れな子供對手の商品なので、二十錢も仕入れると、まるまる賣れて、三十錢と儲からない。饂飩の方は、車、原料、鈴まで向ふ持ちで

錢の子一枚に三十玉の、三枚以上を捌くことは不可能である。一と玉の純益は五厘、とんとんに行つて、三枚四十五錢以上の純益はなかつた。そこで、彼は、朝は餌を資本にせいぜい二十錢ほどの利益を得、晝までには鉦と餌を資本に二三十錢の賣り上げを見、晩は運が良くて五十錢近くの儲けを——都合、一日、約一圓弱の收入をもつて暮らしてゐたのである。

この蟲眼鏡で見なけりや見えないやうな收入をもたらした勞働の合間には、彼は、そのために郷里の田を失つたほど一生の邪魔物になつてゐる左の脚を曳摺つて、古新聞の一面に貼つてある家の中を絶えず歩き廻はる習慣を持つてゐた。

最初の合理的な目的が、寒さと風を防ぐことにあつた家の大部分を保護してゐる古新聞紙は、次第に、爲吉の生涯に重大な役割を演ずることとなつて、今は更らに合理的な第二の目的を帶びるやうになつてゐた。つまり、習慣の屋內散歩の暇に、退屈しのぎに讀んだのが、いつの間にかそれを讀むことが日課になり、しまひには、それらの新聞紙は、人生の研究資料——爲吉の社會觀となつてしまつたのである。

新しい新聞を讀むことの出來ない彼は、襖、障子、壁板、便所、押入、天井の嫌ひなく貼りこくられた、三四年來の古新聞を讀んで、世の中のことを知つた。

そんなわけから、爲吉の頭腦には、ヴイタミンAといふものも、勞働爭議といふことも、社會主義といふことも、あまり明確には系列されてゐない、むしろエレメンタルな知識體系としてもうろうとした存在を營むでゐた。

『淸朝遂に絶ゆ』といふミダシの下には、どうして支那の先代の王さまが、馮玉祥といふ男のために帝位を剝奪されて、一平民となつたかが書かれてあつた。さうかと思ふと、『防火宣傳の映畫』を見て放火をした子供もあつた。『五年目で出獄そのまた泥棒』とか『警官廿餘名の怠業』などといふ記事は、別な新聞にある天文學の講話と略同じ程度に、彼をして人類生活の複雜なわりに單調なことを思はしめた。皮肉なことには、いつも妻君の枕元には『誘惑される女』があり、自分の寢る場所には『生きた地獄』といふ記事があつた。

『震災のどさくさに妻を燒き殺ろす』とか、『不景氣に祟られて親子五人の身投げ』とか、『爭議遂に暴動化す』とか。『血に餓ゑた鼠ども』とか、『名古屋の八人斬り』とか——かういふもの凄こい事件が、大小縱橫の活字で、彼れの視力の達する範圍に、まるで彼一人に犯罪の秘密と記錄を托して置くかの如く潜伏してゐるのが、彼れの家の構造であつた。煤けて、細かい記事の大部分は不明になつてゐたが、今では、どこの釘の傍にはどんな戰爭があり、どこの壁板にはどんな學說、どんな殺人があつたか、場所と期日と出來事とが、學者の頭に海藻や昆蟲の名が泛んで來るよりも容易く憶ひ出だせたのである。わけても、東京朝日の次のやうな記事は、讀むごとに、彼れの胸を、大きい機關車の側を通つたときのやうに非常な熱をもつて温めずには置かなかつ

た。

「……小兒固有の理想の一端がはしなくも此處に面白く現はれて來たのである。僕は將來のソキエトの小兒は總べてあんな工合に育はれて行くのではないかと考へて見た。幼兒と十歳未滿の兒童と十歳以上の青年期に入るまでの少年少女が極めて面白い工合に按配され共同の家屋、共同の食堂、共同の庭園に樂しく生活しつゝ、勞働の出來るものは養蜂、養雞、耕作又は花園の手入れ、編物、手工等に從る適宜分に一番興味のあり可能性のあるものをやらせる。勞働の遊戯化は無政府主義の特に意を用ひた處であつて勞働は決して苦い仕事でない、舞踏や遊戯と同じやうに人生になくてならぬ一種の享樂だといふことを道徳的に說かずして實地にやらせてゐる。…資本主義の諸國家の家族制度は餘りに個人主義的（家族を單位とする、從つて相續財産を中心とする）に出來上がつてゐるのであるから擴充せられた規律ある共同生活を行ふのは極めて下手である。それに拘らず青年が一定の年齢に達すれば勞働者にせられたり兵隊にとられたりする。其處に個人主義的に教育された勞働者兵隊が共同作業をするのに大變な無理が出來る。從つて爲政者はどうしてもその二元的な精神を調和さすためにゴマかしの服從倫理を教へなければならぬか、或ひは宗教を以て陶冶しなければならぬ。だからソキエト制度の將來では小兒は國有とする。國家で養ひ教育して一人前の人格者に仕上げてやるやうにならねばならぬ……」

この記事に、綴き物らしく、貼附られてある三疊の間にも、その他家のどの間にも『十一』と『十三』號としかなく、題は『ソキエト露西亞で感じたこと』としてあつて、その下に『黒田禮二』といふ人間の名が記してあつた。恐らくそれは新聞社の通信員とでもいふ人の名前らしく思はれたが、もし、その人と何かの機會で爲吉が出遇はすやうなことがあつたとすれば、彼は、その文章の一字一句まで書いた當人よりも良く暗らんじてゐることによつて、黒田禮二氏を驚かすことが出來たであらう。

どうして、こんな見も知らぬ外國のことに彼が特別な感激を覺えたかといふに、その理由はきわめて簡單な左のやうな二三の生活事情にあつたのだ。

例へば、食事の際である。爲吉の家庭から飯時といふものを除去つたなら、何のために彼等が一家族を成してゐるかわからないと思はれるほど、食事は一家の重大な興味であつたが、その最も華かで、和氣藹々であるべき場合に、彼と彼れの妻とは、がつがつした小氣味良いほど動物的な食慾に支配され、一杯でも餘計に粥をよけいに啜らうと箸を握つて暗鬪してゐる三人の子供達を、上からじつと見おろしながら、すこぶる絶望的な、淚ぐましい微笑を交換するのであつた。

それから、產兒の問題である。現に、彼れの妻の腹子は、人間の女として孕み得る責任數を超過して、十歳を頭にした三人の子供達と一人の乳呑兒と、おまけにもう一人妊娠してから五ヶ月にもなるらしい

のだ。
『人なみな暮らしさへ立ててくれるんなら……わたしはいくら子供を産んだつて構はないんだけどネ。——いやだよ、御産だけは、考へて見てもぞつとする!』
　かういふ論爭は、ほとんど夜ごとにこの夫婦の間に繰返へされる。いたましい性的な葛藤である。まだ三十になつたばかりの節子は、多産と營養不良と激勞とで、すつかり面窶れがして、彈力のない四肢を出來るだけ疲勞のない方へ、温かい場所へ、ものを考へない生活へと運んで行かうとしてゐる大きい水母のやうな女であつた。子供を一人生むごとに、彼女の高い鼻は益々高く、益々間拔けて見えた。
　次には、子供の教育であつた。善良なる國民の一人として、爲吉は子供達の普通教育に對する父としての義務は痛切に感じてゐた。しかし、實際のところ、長女ひさ子と長男の力一は、彼れの意志から通學してゐるのではなくて、學校で慈善的に通學させてくれてゐるのである。筆も紙も讀本も、みな受持の教師が教員會議に提出した事情報告に基いて、學校の資金のうちから給與された。
　この爲吉が、共同の家屋、共同の庭園、共同の食堂をさへも與へて子供を國家が育て上げてくれる場合を、涙ぐましい氣持で想像したのも無理のないことだらう。——しかし、悲しい哉、それは外國のことで、わが『東京朝日』の『黑田禮二氏』しか目撃してゐない邦のことであり、それも、もう貼られてから三年あまりにもなる古新聞の上の事實であつたのだ。人間には、幾分なりと、新聞を疑ふ本能さへもあるのだ。
　……そこで、かういふ矛盾した心理狀態にある太田爲吉が、更らに多くの矛盾を包有した環境——十三軒の町の中に見出されるのである。

2

　東京の近郊でも、彼れの棲んでゐる町ほど不思議な町はなからう。その町といふのは、高い赭土の崖と、荒れはてた無住寺の境内とに挾まれた、恐ろしく窮屈な谷あひにあつて、戸數はずうつと前から十三軒しかなかつた。
　谷のまん中には、いつも犬の糞と紙屑と石鹸水の溜まつてゐる、欠傷した鍋のやうな廣場があつて、周圍に、壁や扉を勝手な方へ突出して建て散らされてあるのが、その十三軒であつた。
　この町の不思議さは、その不思議さを知らない町の人達からはじまつた。寺の境内は、その雪崩れを打つた墳墓の勾配と、爬蟲類の多い欅や杉の密林と、墓地そのものの有つ憂鬱性とをもつて、一日の一定時間を、町から熱い日光を遮斷しただけではなく、絶えず町の近代化を脅かすことを怠らなかつた。この無住寺の正門からかけて、市電の終點にいたるまでは、この界隈でもかなり繁華な場所なのだが、町の誰一人として、無住寺の境内を突切つて、せめて簡單な抜け道でも穿

がたうと思ひつくものさへない。況してや、生きて活動して、それぞれの勞働と税金とを收めてゐる人間の住宅區域が、江戸時代の古るい骨屑を埋めた面積よりも遙かに狹い、と感づくものなぞは皆無であつたのである。墓地を五町も迂廻した、その實、この町からは直徑四五十間の距離まで、瓦斯や水道や電話が來てゐるのに、谷あひへ追ひつめられたこの種屬だけは、平氣でさういふ生活必需品を要求しようとは思はないのだ。

一方、崖の上には、太い起重機のやうな電柱が突立つてゐて、それから數條の電線が、小さな町を宙に掴み上げるやうに、谷底の十三軒の屋根へ手を伸ばしてゐた。その崖のむかう側には、日あたりの良いなだらかな傾斜に、ラヂオを曳いた紅瓦の住宅や、ピアノの鳴りひびくバンガローなども隱見するが、それらは崖の下とは正反對の方向——文明の方をむいてゐるので、町とは外國ほどにも關係がない、町には、崖のむかうを見わたすほど高い建築もなかつたし、それに、ここの住民は、物乾竿以上に高いところを瞻上げるやうな習慣を持たなかつたのである。

そこで、たつた一つある共同井戸はいつも同じ赭土色に濁つてゐ、廣場から流れ出す水蒸氣は殺人的であり、各戸の便所から發散する排泄物の臭氣はあらゆる食物に加味し、震災以後牛小舍を建てなほして六軒に分割した爲吉等の長屋には、永遠に牛の糞の臭ひが惡る甘まく漂つてゐた。

十三軒のうちの一軒は、町の入口のメリヤス工場であつて、煤つぼけた不眠症のガラス窓の下には、毎日十四五人の女工が、柿の蒂のやうに頭を鳩めて、どこから註文があるのか、誰も穿きさうにもないほど大きいズボンや、ダリヤ色の腰卷などを無限に製造してゐた。工場の向ひは、鼻紙や懷爐やサックを商ふ紙細工のやうな煙草屋であつた。この二軒の入口を潜る拍子に、寺の突端から折れて來る路は、全然道路といふものの性質を失つて、軍隊の機動演習に踏み固められた田圃のやうに、必要のある地點へ最近距離をめがけて分岐してゐるだけで、桃色の洟擤紙の散つてゐる三軒の藝者屋の戸口と、筋向ひの、無住寺の境内へかいい、がんどう返へしの拔け孔を持つてゐる「梅鉢」といふ料理屋と、廣場の隅の井戸端から牛舍を建てなほした六軒長屋へ通じてゐるに過ぎなかつた。

六軒長屋は、箱屋と同棲してゐる常磐津の師匠なるものの家からはじまつて、爲吉の古新聞で張つてある家で終つてゐる。この兩極の間に、いつも窓を半分開けて何かしてゐる栗山といふ男の家と、夜警の爺さんとその娘の家と、長唄の師匠なるものの家と、爲吉と隣り合つたおちやら姐さんの家との四軒が挾まれてあつた。これらの長屋から奧へ墓地寄りに、土盛一尺ほどの優越感を誇つてぱつんと建て離されてある平家が、或る請負師の妾をしてゐる「とんぼ」姐さんの家であつた。メリヤス工場、煙草屋、三軒の藝者屋、あいまいた料理屋、六軒長屋、一軒のしもたや——總じて十三軒。このほかに、爲吉の長屋

と隔つて、崖の下に設けられた鷄小舍を除いては、消耗物といふものは絶對になかつた。この統計が示すとほり、崖の下の町は、藝者屋町としてはあまりにみすぼらしく、それかと云つて、貧民窟にしては地價や家賃の高か過ぎる――謂はば、そのどちらよりも劣つてゐる。最下級の藝者屋町――淫賣窟であつたのである。

この淫賣窟で、實際に淫賣窟なみの職業に從事してゐたのは、「梅鉢」の女將と抱へ藝者、三軒の藝者屋の女達か七八人、それに、名義上、常磐津とか長唄とかの職業を出して男の集會所を開いてゐる「御師匠さん」達や、爲吉の隣りのおちやら姐さんなど、――都合で十三四人はあつた。そのほかの堅氣な連中は、この夥しい「婆あ藝者達」の勢力圏内に、辛ふじて自分達だけの職業を固守することによつて、その存在を認められるに過ぎなかつた。この町でも、やはり數は勢力であつた。いつも窓を半分開けて何かしてゐる栗山といふ男は、ときどき外へ出て行つては、ひどく醉つぱらつて歸へつた。夜番の爺さんは、夜になるとこつそりほかの町へ柝を打ちに出た。爲吉は爲吉で彼獨自の生活方法があり、メリヤス工場は無限に同じ型の腰卷とズボンを縫ひ出してゐたのである。

この町の人達の特色を擧げるとなると、私達は何を措いても、先づ彼等の無責任と利己主義とを擧げねばなるまい。その一つの例は、「梅鉢」の流し元にある塵埃箱から食み出る、ぬるぬるしたよごみがいつも共同井戸から廣場へかけて、犬や野良猫や掃除人夫の散らかしたままになつてゐるのだが、つい眼と鼻の近間に、自分の家の銅壺や廊下を半日がかりで磨いてゐるお主婦か、一向に魚の腸や竹の皮や鷄の脚については頓着しないことである。それから、井戸端を水源地として爲吉の家のうしろの溜桝へ流れる仕組みになつてゐる、土管を中程にした泥溝であるが、これには、いつも長屋中の使ひ水かあふれて、その小さな洪水の氾濫した沿道には、飯粒、人間の糞、魚の頭、大根の尻尾、菜つ葉のきれなどといふやうす汚い廢棄物か、女の長い髮の毛に堰き止められたままになつたり、蚯蚓の死骸と同じ色に腐つたりしてゐても、誰一人としてそれを掃き流さうと試みた前例がない。土管はところどころちぐはぐになつて、そこから滲み徹つた汚水は、地層を腐蝕して床下に侵入し、息の塞まりそうな臭氣の中に、あらゆる種類の蟲けらを培養してゐるのである。次に、この町のたつた一つの共有地とも云ふべき廣場であるが、そこへ立てかけられた高低十組の物干柱には、恥も外聞もなく町のどこからでも見とほしのつくやうに、一日眉をひそめさせるやうな色彩の不潔な、、、、露骨に隣り合はせた、、、、、や、道化じみた男の、、などが毎日空へ高々と陳列される。それから、この物干柱に圍まれた廣場には、雨が降らないときは、どこから集まるともなく、あらゆる顏つきの子供達が、朝から晩まで椋鳥の群よりも騷々しくむらがり立つてゐる。それらの子供達は、ただに廣場を排泄物や騷音や紙屑などで穢すだけではなく、彼等獨特の實社會の模倣を行ひ、泥棒ごつこ、戰爭ごつこ、探偵ごつこ、めんこ、賭

け猥楽『阪妻ごつこ』にいたるまで、ことごとく人間の世の淺ましさを演じつくし、その上に、内輪もめで家の蔭や他人の軒下から大聲で惡態をつきあふのである。彼等は仲間うちで、めいめいの盗癖を奨勵しあふやうな道徳を尊重し、隙さへあれば誰の物でも掻つ拂つて、墓地の奥や廢寺の廊下へ逃げ込むで分配し合ふ。警察權に見捨てられたやうなこの町では、深夜が夜の引明けまでも、男女の痴話喧嘩があらうと、醉漢のごたくさがあらうと、三味線を鳴らさうと、花札を引かうと、絶對にそのうちうちの勝手であつた。もちろん、刑事は巧みにさういふ時間以外のときしか、この町へ這入つて來なかつた。師匠達の掻き鳴らす三味線や、料理屋藝妓屋の亂痴氣騒ぎや、子供達の不斷の喧騒などは、崖と寺の境内とに三方を塞がれたこの町に反響し合つて、いつも何かの騒々しい取引に聲を張りあげたり、どうにかして人の注意を惹かうとして手當り次第に器物を鳴らしたりしてゐる、場末の市場のやうな感じを與へた。

どんなに長屋の亞鉛屋根が破損し、皆が塵埃捨場を荒らさうと、どんなに危險なガラス屑が廣場に散らばつてゐようと、どれほど『桔梗屋』の前に、、、、が落ちてゐようと、この町の女達から、化粧の本能だけは奪ひ去ることが出來なかつた。だが、化粧といふことは、この町では衛生と婦人美を無視した、文字通り他人を一時的にあざむく意味の化粧に過ぎなかつた。それは、大概の場合、錢湯で三日前に結つた髮へ更らに臭い油を加へることであり、頸から上だけを白く、あまりにも白く塗り立て、膨ざつた足や、まつ黒な爪の變形した手は、全く自分と關係のない誰かの肉體でもあるかのやうに、自然のままに放置してゐる種類の美容術であつた。それと同様に、この女達は、半襟と上衣一枚だけは比較的高價な物を着てゐたが、襦袢腰卷足袋履物などは、ほとんど實用性をさへ失ひかけた品物で間に合はせた。同じことが、彼等の會話、食物、流行、支出收入、心理生活のすべてにも行亘つてゐた。そこで、性質上、清潔で派手であるべきこの町から、いろいろな汚らしい裏面が暴露した。『桔梗屋』の二階には梅毒第三期の瀕死のとも奴が毎日女將に、、、、――死ぬのを待たれてゐた。『梅鉢』の抱への秀きちといふ藝妓は、何かの腫物のために、決して電燈をともしては、、、、しなかつた。『中村屋』の女將は、首に出來てゐるぐりぐりを隱さうとして年中手巾を卷いてゐた。覿面に、女達の不節制の祟つた例として、とんぼ姐さんの息子は痴呆症で、鰐口のやうな脣から際限なく涎を流してゐた、どこから來るのか、新しい田舍女が來たと思ふと、半月ほどで忽ち町の化粧法を覺え込み、眼藥を買つたり、洗滌劑を入れた罐を下げて病院通ひをしたりした。――

太田爲吉は、この十三軒の町を人間の創造し得る最極限度の地獄だと思つてゐた。しかし、人間は、どんな地獄の底にだても何等かの方法で經濟生活を營んでゐるものだ。爲吉と彼れの一家は、この地獄のどんづまりの牛小舍を建てなほした長屋に、一年半以上もの家賃の滯納を來たしてゐたのである。――私達は、ここで、爲吉のことと前後

して、崖の下の鷄小舍のことを語りたい。それには、どこの町にもある鷄小舍といふものでさへも、この町では一つの不思議な存在であるといふ事實を、私達は見逃したくはないのだ。

第一、この小舍は爲吉の、三疊のつい窓の下にあつた。

3

その鷄小舍といふのは、何かの殘忍な大機械で、一と息に削り去られたやうな崖の二隅へ、ぼろぼろな亞鉛板と、蜷[illegible]のやうにたるみきつた金網とを結はひつけ、單に家禽の脫出を防ぐといふだけの原始目的をもつて設けられた小舍で、それの創造主は、その小舍のやうに頭の單純な、爲吉とは壁一重隣りの、年增藝妓のおちやら姐さんであつた。

それが出來あがつた當座は、金網も亞鉛も新しく、姐さんの評判もよかつた。

『……あれがうまく行けあ、下手な情人など持たんでもいいわけだからな。』

彼女のだらしなさを知り拔いてゐる爲吉でさへも、その當時は隣家へとどかぬほどの聲でかう障子へ語つたものであつた。もちろん、かういふ利殖の方法が、突如、町の傳統を破つておちやら姐さんの頭腦から發明されたについての疑問の裏には、この町の反語として、彼女が黑ん坊のやうに黑く、年配も惡あがきをし出す頃合ひの年增である爲に、どうも男に緣がうすくて、いつも旦那に逃げられる女なのだから……といふ意味も潜めてあつた

鷄はレグホンといふ種類であつた。髭でも生やしてゐさうな、逞しい一羽の雄鷄と、白い肉感的な三羽の雌鷄――營利事業となるとどうしても一夫多妻でなけりやいけない。それらが輸入されてから、町の景氣がぐつと引立つやうに見えた。關係のないやうなことだつたが、爲吉の家の夫婦喧嘩でさへも、爲吉の置き處が、鷄小舍の方へ幾分移つて行つた。家禽といふものが、どんなに人間の社會へ貢獻するところの多いものであるかは、飼主の姐さんが急に早起きをするやうになつたり、サックを賣る煙草屋に『うみたての卵あり〼』と書いて鷄卵の所在地とは反對の方を指さしてゐる指標が出たり、『福鉢』へ御用を聞きに來る鳥屋が鷄卵の値下げを斷行したりするやうな、有機的な變化よりも、むしろ、町に漂はすところの牧歌的な効果にあつたといふべきであらう。飽食した雄鷄が、鷄冠を振り立てながら、日ねもす蓄音機の西洋音樂のやうな音吐で、騷々しい崖の下の町へ、豐饒と幸福の歌を唄ひかける――それを聞いてゐて、心から伸び伸びとする村落的情緒にそそられぬものがない。更らに又、雌鷄のくらッく、くらッくこう、こう、といふ家族的な聲を聞いてゐると、何かの聯想から、どんな無頼漢でも自分を生んだ母親を懷ひ出さずにはゐられない。町が町であつただけにかういふ微妙なニュアンスはむしろ途方もない錯誤としか思はれなかつたが、おちやら姐さんでさへも淫賣婦以外の何

かの家庭的な本能を持つてゐたことを證明しただけでも、それ相應の價値があつたかも知れない。「うみたての卵」と小さな看板を揮毫したお禮として、爲吉一家が大小四つの卵を寄與され、それらを四日かかりで食べたことなども、恐らくその餘德の一つであらう。

二た月のうちに、幸福はレグホンの一夫三妻を見舞ひ、小舍には眞綿の團塊のやうにふくふくした、歩行するのが不思議に思はれたほど玩具の雛つ子に似た、七羽の生きた小さな鷄が姿をあらはした。雛つ子のどれがどの母親の直系であるかは判明しなかつたが、いづれも兩親の茶褐に白まだらを遺傳してゐて、鷄としての立派な將來が彼等に約束されてゐた。それらを孵へすまでの姐さんの苦心と、孵へし終へてからの助産婦的雄辯とは、最も良く爲吉夫婦によつて耐え忍ばれた。彼女は節度なく話すのである、まるで話してしまはないと忘れてしまふ惧れを感じてゐるやうに。——もちろん、泥水稼業にはうんざりしてゐたこの七羽の雛つ子が七七の四十九羽に殖えて見なさい、大小五十二羽の鷄を引率して、お天道さまがどこから上がつてどこへ落ちるか見定めのつくやうな原つぱの一軒屋を借りなきあならない、さうなりや差し向き爲吉さんに小舍の掃除やら何かをお願ひして、毎日オムレツにチキンカツだけ食べてゐられる、——かういふ話に聞き惚れてゐると、鶏子の洗濯石鹸がひとりでに盥の水へ溶けてしまふのであつた。

しかし、鷄の運命といふものは、人間が禽獸の一部を家畜化して以來、人間の社會組織と密接な關係のあることは、おちやら姐さん以外の大概の人が知つてゐる事實であつた。雛つ子が生れて、七七四十九羽どころか、野良猫のために二羽誘拐された頃から、何といふわけもなくおちやら姐さんの本職の方が揮はなくなつてしまつた。それには世の中全體が幾分不景氣になつたといふこともある。現に、爲吉でさへも毎朝納豆が六本しか賣れなくなつてゐた。それにしても、姐さんがあまりあけすけと泥水稼業を呪つたことが、檢番の方へひびいたといふこともあつたらしい。さうなると、彼女もべんべんと鷄ばかり可愛がつては居られなくなつた。姐さんが躍起となつて稼ぎ出してから今度は、ほんたうに世の中の方で不景氣になり出した。世の中が不景氣になるといふことは、町の女達にとつては、寺の角を曲がつて二三町先きの檢番から形式だけにも來る遣ひの者が來なくなるといふ現象以外に何もないのであるが、それが、彼女達には、檢番といふ制度が世の中を不景氣にしてゐるとしか思へなかつたのである。前から、檢番といふ制度に、不自由と不經濟を感じてゐたじまへの女達や、そのためにいつも血税を絞られてゐた連中には、一圓に、彼女達に小遣錢にさへもつまらしくならせてゐたものは檢番であるといふことを觸れまはつた。そして、必然の結果として、町には『、、、、』が殖えた。『鶏鉢』でも、師匠連の家でも、『桔梗屋』でも、無届で女達が、、、、、。おちやら姐さんでさへも、町の外の安待合と結託して、ひそかに檢番の方は迂回して淋しい裏道から通よつた。待合で都合の悪るい

ときには、構造の點に於てそれと甲乙のない自宅へ大びらに、、連れ込んだ。爲吉の一家に皮肉な悶着が起こつたのはその時分からである。長屋は、同じ床つづきであつたところから、支へる重量が、、の抵抗力を超過した場合には、、、は遺憾なく周圍に波及した。爲吉が、、、、、、、、、、、、、多くなつた。それと同時に、鮨子の顏には、妙に良人の人格、全存在をすらも侮蔑するやうな表情が見えた。おちやら姐さんの方では、大部分酔つての上の亂痴氣であつたとしても壁一重隔てた自由勞働者の家族には、、、最も深刻な問題が醸はれつつあつたのである。

爲吉は、壁を恨らんだ。そのむかふにゐる黒ん坊のやうな年増藝妓を恨らんだ。牛小舍を分割して貸す大家を恨らんだ。

そのうちに、多産的な鮨子が懷胎した。

爲吉は失望した。彼は人生を呪つた。

町の女達の非公式振りがあまりにはげしかつたので、土地の三業組合から厳重な抗議が出た。それにしても、場末の三業組合の勢力をもつてしては、不景氣といふ對手は少し大き過ぎた。組合よりも直接に、女達は不景氣の支配下にあつた。かういふ町の狀態の下で、鷄はぱつたり卵を生まなくなつてしまつた。彼等は單純な生物であつただけ、人間の女よりも食物と生殖力との相關現象をより直接にあらはした。姐さんは打ちつづく亂酔と朝寢と貧乏とで、ろくにくだけや野菜物は愚か水さへもあてがはなかつた。雌鷄と雛つ子とは、長屋の羽目板を傳はる人間の跫音に喊聲をあげて金網の目へ突貫した。しかし、大抵の場合それは跫音だけに終つた。たまに、爲吉などが近づいて見ると、鷄どもは、首を幾度も兩方へ傾けて、いぢらしいほど彼れの手に食物があるかどうかを確かめるのであつた。彼は一種の義憤を感じた。

『鷄を——あんたはどうするつもりですかね？　あれぢや、ひぼしになつちまひますぜ。』

彼は、二三度、午後になつてもまだ眠つてゐる姐さんを起こした。姐さんはその都度何とかしてくれと云つて、云ひわけばかりに、爲吉に小錢を渡した。見るに見かねて、或る日、爲吉は『梅鉢』へ相談しに行つた。そして、その頃から『梅鉢』の殘り物や小魚などを、鮨子が鷄小舍へ運んで行つてやることに定められた。

『今朝は卵を生まなかつて？——』

二三日經つとそんなことを姐さんが、鮨子に訊ねた。聞き咎めた爲吉は堪らなくなつてから頭から怒鳴りつけた。

『卵を見たけりや、姐さん、朝早く起きなけりや駄目ですよ！』

『それがちつとも生まないんですよ、この頃は。』

爲吉の妻が側から、自分のせいでもあるかのやうに辯解した。

『鷄よりも、此女の方が早く生むかも知れませんよ——お蔭さまで！』

『……あら！』

姐さんは顏の筋肉を螺旋形に歪めて、勝手元から家の中へ姿を消した。

から云つた狀態か、しばらくつづいた。そのうちに、或る騷々しい晩、姐さんはどんな理由からか、狐のやうな、金縁眼鏡をかけて、頭髮をまん中から分けたにやけた、若い男を長屋へ引つ張り込んでしまつた。その若い男は、夜が明けても、亦その次の日が暮れても、一向に長屋から去らうとする風がなかつた。

『なんだい、あのにきび野郎は？』

『朝つぱらから、二人で吞んでやがる。いい氣なもんさね。』

『世話はねえ、黃鷄は自分持ちと來てゐる——。』

『ともかく、やーな奴ネ。』

この町には、ほかの完備した自治體のやうな表向きの審議機關はなかつたが、蔭へまはつては、かなり突込んで他人の私有所有權をも批判する無形の評議會があつて、その決議によると、若い男は場末の洋食屋のコックでもあらうといふことになつた。その情況的證據として廣場に夥しい茶斑の羽毛が散亂し、鷄小舍の雛が三羽減つてゐたといふ事實が指摘された。その雛が、もう二羽だけ姿を消したときにはそこにさまざまな物議が湧かざるを得なかつた。第一に、默つてゐなかつたのは爲吉である。——何のために、妻が料理屋の流し元から汚い物を運んだり、水を掬んだり、鷄舍を掃除したりして鷄を養つてやるのか？あの狐のやうな若い男と年增女の酒盛の肴を提供するためか？人を馬鹿にするな！——そこへ狡猾な『梅鉢』のお主婦が妥協案として、鷄を全部買收してしまはふと云ひ出した。しかし、その値段が法外な安値であつたものか、姐さんは殆んど喧嘩腰で、そんなに他人の鷄についてやきもきしないでも放つといておくれと云ひ切つた。

さうなると、空地にも鷄の世話をするものがなくなつた。ときたま狐のやうな若い男が生米や麥をばら撒いたりする樣子は見えたが、小舍はまるで投り放しであつたところから、腸炎に下痢した鷄の排泄物の殘滓と泥とが生燒けのケーキのやうに堆積して、その上へ、腰を拔かした病人のやうな雌鷄がべたつり座り込んでゐることは珍らしくなかつた。間もなく、二羽の雌鷄が小舍から見えなくなつて、坂の下の『鷄屋』の籠の中へ姿をあらはしたといふ噂が、眼の敏い子供達によつて報告された。小舍に殘つた三羽は、みた毛蝨に襲はれて、體ぢうを驅け廻はる痒痛に怺へかね、互ひに咬み合つたり金網へ體を擦りつけたりするので、禿のやうに赤剝けのした皮膚を曝らけ出してゐた。羽毛並の美しかつた雄鷄は、すつかり脫毛して、嘴と胸骨は今にもうすい被膜を突破りさうに飛び出してゐた。煙草屋からは、いつの間にか『うみたての卵』の札が取去られた。かうなると、鷄小舍は、夜となく晝となく、この町にうろうろしてゐるあらゆる陰險な動物どもによつて狙はれた。對手の落ち目を窺ふのは動物の本能でもあつたし、それにこの町の動物は、ひどく空腹であつた。その間、鷄は、泥の中から『巣守り』のガラス玉をほぢくり出したり、苗の粘土や小舍に散らばつた羽根を突いたり、己が排泄物をさへ啜つたりして生きてゐた。最後に、佩系は、逆上した狂猛な驅り立てて、たつた一羽の雛つ子を

襲撃させた。雛つ子は一とたまりもなく臨終の痙攣を黄いろな瘦せた脚に刻んで斃れた。殺ろして見ても、さすがに、わが児の屍へだけは嘴を刺さなかつた。血みどろな鷄冠を振りながら、雄鷄はけたたましく啼き立てた。自分の行爲を恥ぢたやうな雌鷄も、雄鷄と聲を併せた。

三疊の窓から、この光景を眺めてゐた爲吉は、

『くそッ！』

と叫んで、いきなりおちやら姐さんの茶の間と隣り合つた壁板へ細長い體をどしんと打ちつけた。壁のむかう側には、目ざましと茶瓶とが長火鉢の上へ轉ろがり落ちた。男と女の金切聲に對して、彼は、壁越しに、

『鷄を見ろ！』

と罵り返へした

翌朝、流場の隅には、又、羽根枕を毀はしたほどの雌鷄の羽毛が散らばつてゐた。最後に生き殘つた雄鷄は、それ以來、急に老衰して、中風に罹つた人間のやうに絶えず體中にかすかな痙攣を見せ、いつも白い眼を瞑つてゐるので、眠つてゐるのか死んでゐるのかわからなかつた。しかし、たしかに生きてゐたことは事實であつた。何故となれば、夜の六七時頃になると、彼は突然怯えたやうに眼を瞠いて、血を吐くやうな刻を告げたのだから。

4

この憫むべき家禽と、人間太田爲吉との間には、別に直接の有機的な關係がある筈はなかつた。

しかし、最近、爲吉は、世界で一番よく自分に似てゐるものは、その中風患者のやうな、ひとりぼつちの雄鷄であるやうな氣がしてならなかつた。

客に對して物を賣つたり、問屋の番頭と話したりしてゐながら、彼は、よく自分のみすぼらしい、左の脚を曳摺つた姿を心に描いた。さういふ空想は、いちじるしく彼を臆病にするやうだつた。尤もその姿は、決して、鷄ほどにみじめなものではなかつたが、居酒屋の壁のやうに褪せた色合の袢纏に包まれ、頸に箱を釣るし、草履のやうにすりへつた下駄を穿き、いつも何かを口走りながら町を歩るき廻つてゐる自分のどこかに、あの鷄と共通した本質的な何物かがあるやうな悲哀に撲たれるのであつた。

實際のところその雄鷄よりも彼は淋しかつたのだ。ただ彼に於てはほんたうに淋しい人間のやうに、それを口に出して云はなかつただけである。

單調な一日の生活を調べて見ると、よくそれがわかつた。──長屋で高く鳴る時計と云つては長唄の御師匠さんの家の柱に一つあるだけだつた。毎朝、それが、二軒むかうから、四つ打つと、爲吉は機械の

やうに、がわりと跳ね起きた。納豆は、夜前に會社から屆けてくれたのを、餉子とてんでの籠へ分けて、いつでも持つて行けるやうにしてあつた。顏を洗ふと直ちにその籠を頸へぶら下げた。家を出しなに、疲れはてて腐つたやうに眠つてゐる妻を、子供達の眼を醒さぬやうに揺り起こした。町へ出ると、ぽつぽつ郊外電車を利用する人達が、淡い電燈の下を歩いてゐた。納豆を買り込むのは、郊外電車を利用する家庭に限つた。――職工や、安月給取りや、電車の車掌の家族。からしてものの十二町も歩いた頃には、町の表面から靄がとれて、すべての物にくつきりした光と影が浮き出し、從つて、納豆といふ商品にもあかあかと幻滅的な日光が照りつけるのである。彼は疲れて、自分の家へ歸つた。それと前後して、いつも幾らか彼よりも鼻高の尠い餉子が、ほかの町から鼻を赤くして歸へつて來た。子供達はまだ眠つてゐる。だが、彼等の朝飯はまだはじまるのではない。爲吉は飴代を差引いた金を殘らず彼女へ渡した。渡された金と、自分の方の賣り上げとを、掌の皺の中へ大事に疊んで、餉子は白米屋へ行くのである。夫婦は寺の角まで同行して、そこで別れた。爲吉の頸には、今度飴屋で貸してくれる木の箱がぶら下がつてゐた。飴屋は長い坂をのぼつた光つた町にあつた。箱の中では、彼れのぎくしやくした步行に伴つて、鉦が兵隊の軍器のやうに鳴つた。飴屋はいつも爲吉や彼れの同類を歡迎するやうに、店を開いて待つてゐた。飴屋の主人は、粉つぽい手で、品物を三本づつ一と掴みにして、莫大な取引きをでもするやうに、仰山に數字を讀んだ。その傍らには、牛の角のやうな器械が、ひとりでに飴を伸ばしながら廻轉してゐた。三本が原價一錢、それを、小旗の景品を添へて一本一錢づつに賣るのだ。赤い繪具をなすりつけた小旗はそくの三錢五厘であつた。坂は昇りよりも下りに倍骨が折れた。爲吉は、左右の肩で籠を取り、右脚を挺子にして、滑るやうに無限の傾斜を下へ、下へと降りるのだ。息切れがして、何かにすがりつかうとして手を差伸べる頃に、やつと平らな町通りへ降り立つてゐた。一度などはそこに待合はしたやうに、顏も髮もまつ白な婆さんが立つてゐて、

『お取り。今日は、連れ合ひの亡くなつた日だもの――。』

と呼びかけて、穴のあいた五錢白銅をくれたことがあつた。彼は、往々乞食とも見做されることがある。ソヰエト共和國の子供國有政策を知つてゐる、彼が！

ほんのすこし前までは、生命のない古ぼけた扉や、迫害的な門の連續であつた町へ、今度は爲吉は全く新鮮な人生觀で眼を配るのである。この場合の心理は、野犬撲殺人が、犬のゐそうな横丁や露地や埃つぽい廣場などを物色してゐるのと大差はない。彼は、小さな撞木で鉦をかんかん叩いて、一種の狩獵的本能から暫らくその邊を窺つた。もしこのとき、小さな顏が、町のどこかの隅からちらりとでも露はれたなら、彼は急に活氣づいて、『サノサ節』や『ストトン節』を大聲で唄つた。

『おくれ！』

『頂戴な！』

小供達は、嚴密に彼れの職業と人柄を檢査したあとで、そつと手を出すのであつた。一本三厘五毛の小旗は、たしかに彼等の嘆賞慾をそそらずには置かなかつた。二人が三人になる。爲吉は、賣れ出すと、むやみに大聲でたわけた歌を唄つた。卑猥な歌——十三軒の町は、その學校みたようなものであつたのだ。子供達は、赤い小旗を振りながら、工場の罷業團のやうに、猥褻な歌を唄ふ男についてまはつた。新しい參加者があるごとに、子供達は獨自の宣傳で互に勸誘し合つた。飴は子供達が朝飯を終へ、最初の小遣をねだつた一時間と、晝近くとが書入れどきであつた。しかし、非常に飽きの早い彼等は、いつも同じ飴屋から同じ飴を買ふことを拒否した。もし爲吉の方で、執拗に同じ區域をまはらうと主張したとすれば、彼は、

『やアい、跛の馬鹿飴い！』

『跛、跛、ここまで御出で！』

『買つてやらないよウだ！』

と云ふやうな、腹立たしい非買同盟に出遇はした。いつも區域を變へる必要があつた。

飴が終ると、爲吉は、あらゆる商工業組織の篩からふるい落されたやうなそれらの銅貨を數へながら、頭のてつぺんまで空腹を感じて家へ戻つた。家では妻が飾臺の前で待つてゐた。子供達は、遊びに出るものは出、學校へ行くものは行つてゐた。爲吉は、飴箱を長押の一番高い釘へ吊るして食事にかかつた。あかるい飾臺のむかうに、ばりばり漬物を噛み、騒々しく味噌汁を啜る妻のすさまじい食慾を目撃してゐると、いつも彼は、そのあさましさと同時に、憎むべからざるものを憎んでゐる氣まづさとを自覺した。

三時頃には、饐る臭い、ひやりとした製麺會社の粉だらけな土間に立つてゐた。メリケン粉と水と機械力で、長い算盤を彈いてゐる會社は、社是として、一と玉の饂飩から、賣子と同じく五厘しか儲けないといふ利率の均等主義を誇つてゐたが、その實、個人賣子は一と晩に五十玉とは賣り得ないところを、會社は、雜多な手を經て、瀑布のやうにこの機械麺を市民へ供給してゐたのだ。爲吉の鳶色の手車は、朝晝と同じ陰鬱な輪廓の、しかし今は黄昏の迫つた町を、締まりのない舌のやうな鈴を鳴して、低く遠くまでさまよつた。夜の七時頃、會社の店先へ車を留めると、帳場では賣れ殘りの分を控除して、一と玉につき原價一錢五厘づつを請求した。帳場へ拂つたあまりは、爲吉の全收入であつた。

一日の日光が收縮すると、勞働者の慾望は先づ胃の腑の一點に集中される。彼は寺の角を曲がるときから、臺所で葱を刻んでゐる俎の音を聴いた。途中で、乞食のやうな力一と留吉とが南京袋を抱へて、薪を拾つて歩るくのに出遇はすこともあつた。家族のものが、幽靈のやうにぼやけた影を投げながら、その癖、影の主はみなこちんと疊の上へ硬まつて、熱心に彼れの歸りを待つてゐることもあつた。赤ん

坊が、どこかうす闇の宙間に、腑甲斐ない人生を罵倒するやうに泣きわめいてゐることもあつた。

『歸へつたよ、──ほら、米代!』

もの賣り人の常として、町へ出てゐるときは、顔面筋肉の上だけでも樂天的に口輕るくしようとする僞造心理から、まだ全く脫けきらぬ爲吉が、戸口でから高らかに叫ぶと、忽ちそこには無數の小刻みな動作を經た歡聲があがつた。父、母、子供達四人──家族はここにはじめて一日の最初の會見をするのだ。しかも、父親は米代を持つて來た!

米屋へは五六丁あつた。使ひはひさ子の役である。もつと近間にも店はあつたが、遠い方では、量もよかつたし、ときどきは子供に菓子や果物などをくれた。一家はひさ子の歸へりを待ちあぐむ。途中でこぼすといふ憂ひもある。誰か貧乏人に掠奪されるといふこともあつた。その間、子供達は、父親の命令で、いろいろな角度に缺けた食器類を母親の手から受け取つて、飾臺の方へ運んで來る、石油罐で拵へた竈の中には、町の四方から蒐集された燃料がいつぱいにつまつてゐる皆はひさ子の顔が見えるまでは、不安を紛らはすために、いろいろに手足を動かす。米屋から家まで何分かかるか、母親は、時計がなくともちやんと時間を知つてゐた。……ひさ子が來た。米、米が來たのだ!爲吉の一家は、約束したやうに臺所の竈の前へ集まる。ろくに磨がれもせぬ米が、釜の中へあけられる。その下へ點火するのは、爲吉の嚴かな役目であつた。この家では、一個一錢もするマッチを、好奇心に富んだ子供達に玩具にさせることは許されない。竈の中には、杉の葉、木屑、古下駄、バナナの皮、ボール紙などが不規則な火焔をあげる。それらは大部分、火にならずに、家中へ黒い白い怪物となつてどぐろを卷くのだ。次男の留吉が、竈の口へ小さな手を翳してせがむ。

『ごはん、まだア? 早くよう、母ちやん。』

すると、いつもきまりきつた教訓をもつて、長男が弟をたしなめた。

『先きにお糊を取つて……それから。』

糊は末女の赤ん坊へ母乳の代りに與へるのだ。艶子は三人目の子供から乳がぱつたり留まつてゐた。粥が釜から掬ひ取られると、次に、俎の上の薩摩藷が、一と撮みの糠といつしよにふり撒かれ、更らに糊の二倍强の水が釜の中へ注ぎ込まれた。それがふつふつと沸騰するまで、爲吉は、簡易食堂で食はせる、白つぽい粒の揃つた炊き立ての丼飯や、もつと上等な、黒い櫃へぎつしり詰まつて、蓋を取るとぷーんと稻の香のする飯などを想像して食慾を刺戟した。粥が出來上がつた。母親が上澄みと下のどろどろを掻きまはすのも待ちきれずに、子供達は各自の茶碗を差し出して、熱い汁を立ちながら啜つた。

『一度でいいから、俺あ黑飩で焚立ての白い飯が食つて見たいな……』

爲吉はよくこんな贅澤を云つた。

かういふ混沌とした熱い流動物ですらも、腹へ詰められるだけ詰めたあとには、食後の滿足といふものはあつた。その滿足を出來るだけ

長びかせながら、爲吉は、頭を抽象の世界へ走らせて、毎晩のやうにソキエト・ロシアには子供達のための共同の食堂があつたのだと考へるのである。

――かういふ日々の生活は、彼に一種の社會觀を與へた。それは、もし彼れの隣りの鷄小舍の雄鷄が社會觀といふものを持つてゐたとしたなら、その社會觀を極度に人間大にした度合と相似てゐた。爲吉には、どんな人、どんな家、どんな町を見ても、それらが彼れの商品に對する購買力であるとしか思へなかつた。そして、彼自身、鷄小舍の金網の目から飼主の投げる餌を待つてゐる鷄のやうに、それらの町や横丁や裏通りを、いろいろな跫音で觸れまはることによつて、誰かがそれに注意を惹かれて、購買力を發揮するのを待つよりほかはなかつたといふことを知つてゐた。行商人としての彼れの活動範圍は、つまり、鷄の活動範圍を幾十倍にか擴大した區域に過ぎないといふ事實が近頃やゝはつきりと彼れの頭に萠して來たのである。

さう考へることが、鷄でなかつた爲吉に、人間的な淋しさを誘つたことは爭はれない。

5

――と、同時に、不景氣といふ大きな力は、決して、鷄小舍の中とごく小量の物質だけで均衡を保つてゐる爲吉の一家だけを、切離してゐるわけではなかつた。

それは、實際、眼に見えて、十三軒の町を、日一日と衰頽させつゝあつたのだ。それは先づ、首にぐりぐりのある女將によつて經營される藝者屋『中村屋』をして、こつそり町から夜逃げさせた。時間的に考證すると、それは、おちやら姐さんの鷄小舍に、鷄が三羽しかゐなくなつた當時のことであつた。『桔梗屋』、『ときわ』、『中村屋』と、三軒ならんだ藝者屋のうちの、赭土の崖へ喰ひ込むやうに建てられてあつた最後の一軒が『中村屋』である。あとから債權者の一人によつて發見された空家の中には、無數の紙屑と、鼠のやうな古い髢と、しづく一滴も出て來ない『富久娘』の空樽とが發見された。空樽は直ちにその債權者の押收するところとなつた。

藝者屋が一軒廢業したといふこと、それだけでは、町へ不可抗的な不景氣が侵入したといふ事實を立證すべくあまりに根據が薄弱であるが、その際、何よりも町の人達を脅かしたことは、今まで殆んど誰一人として氣がつかなかつた、この町の地主の出現といふことである。地主といふのは坂の上の町の、『仁丹』のイルミネーションの真下にある、第×××銀行といふ、妙な數字で築き上げられた名の小さな銀行であつた。銀行の支配人をしてゐる、『仁丹』の紳士のやうな男が、『中村屋』の逃亡した一週間後に三人のこの町の家主達や藝者組合の役人達と會合して、酒を呑んだり藝者をあげたりしたあげく、恰も當夜の遊興の費用を、思ひつきで、町の人達に負擔させようと試みたやうに、地代の値上げを彼等だけで申合せたのである。家主達としては、

旣に、彼等の借家人の大部分が家賃滯納をしてゐる際であり、その上地代まで値上げをされたのでは立つ瀨がなかつたので、一齊に家賃の値上げを協議した。――銀行がどうして地代を値上げし、家主がどうして家賃をせり上げたかについては、他人の私行をせんさくするに妙を得た、町の無形な評議會と雖も、はつきりした理由を突き留めることが出來なかつた。彼等は、ただぼんやりと、『中村屋』のぐりぐりの出來た女將の顏を憶ひ泛べて、何か彼女の逃亡と、値上げとの間に神秘な關係があるらしいとだけ推測するよりほかはなかつた。個人個人を疑ふことが出來ても、團體とか社會とかは、仲々疑ふのに骨の折れるものであつた。

家賃は、二割增――その噂が事實となつた時には、切口の見えない致命傷を負ふたやうな狼狽が、どの家にもどの家にも起つた。

家賃が上がつて十日目に、長屋に住んでゐる夜番の爺さんと、その養女が、寺の杉の樹で首を縊つて死んだ。家賃の問題と緊密な關係がないと云へば云へたかも知れない、又、あつたと云へばあつたのである。ともかく、爲吉は、その事件のあつた翌日の晩、お通夜をしようとして、爺さんの家へ行くと、やはりその家にも古新聞がべつたり貼つてあつて、ちようど爺さんの死骸の頭の上に大きい字で『太陽の黑點』といふ記事があつたのを見たのであつた。何げなくその古新聞の記事を讀んで見ると、在來まで相互的に何等のつながりのないもうろうとした智識體系にしか過ぎなかつた新聞紙の上のいろいろな出來事や、事件などの間に、共通した動機があり、どこかに聯絡があるものだといふ革命的な見方が彼れの頭腦に閃めいたのであつた。外國の或る博士の說として、複雜な氣象的關係から、太陽の表面に迸發する黑い瓦斯柱の增加と人類社會の景氣不景氣は常に重大な關係を有つ――と書いてあるのがその記事であつて、單純な爲吉をして、卽座に、その新知識を轉じて、老人と娘は『太陽の黑點』によつて縊り殺ろされたのであるとまで結論させてしまふほど、記事はわかり良く書いてあつた。太陽の黑點――卽ち不景氣――卽ち地代家賃の値上げ――卽ち老人親子の縊死――かう手取早く考へたところが、誰がさうでないといふ反證を示してくれるだらう？だが、太陽の黑點と否とに拘らずほんたうのところ、爺さん親子の死はすこし常識に外れてゐた。爺さんは、腰のすこし曲がつた、眼窩の深い、胡麻鹽髯の、無口な厭人主義者で、長屋の交際は愚か、晝はめつたに井戶端へさへも姿を見せないといふ――やはり、どこか偏屈なところのある老人だつた。長いこと、長唄の師匠の向ふ隣りに住んでゐて、誰もこの老人がどの町へ柝を打ちに行くのかを見定めたものがなかつた。養女といふのは、十八九の色のあさ黑いはつきりした顏立の娘で、每朝、町の角のメリヤス工場へ通つて、ズボンと腰卷を縫つて手間を稼いだ。その娘が、家賃の値上げ以來、工場の方の都合で、何の前觸れもなく、ほかの五人の女工とともに馘首されてしまつたのである。本來、このメリヤス工場といふのも、企業的基礎のあいまいな代物にはちがひなかつた。彼女

が工場へ出なくなつてから、爺さんの家には、寢酒のことや何かで、何となく龜裂の這入つた瀬戸物のやうな雜音が娘との間に湧き立ち、それが自然と近隣へもひびくやうになつた。

この二人の死因について、町の評議會が内偵した事情を物語ると、ざつとこんな風な、この町らしい原因があつたのである。——老人に、その頃、長唄の師匠の家に、彼れの出勤する時刻の前後に、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、氣を腐らしてゐた。三十五六の、謂はば女盛りの師匠は、毎晩のやうに、、、、、、、誘つてはその隣りのおちやら姐さんに負けぬほどの癡痴氣騷ぎをした。長屋の構造がもつとも一と棟の牛小舍を改築したもので、各戸が互ひに造作の一部分を共通してゐる關係から、自然と人間の模倣性をそそるやうに出來てゐたのである。爲吉の一家が窘しめられたやうな惱みが、七十近いこの夜番の爺さんを巨きい手で押へつけるやうに囚へてしまつた。それは、つまり、不景氣によつて自宅へ客を取つたお師匠さんも惡るかつたし、それと同時に、不景氣によつて解雇された養女が爺さんの陶醉狀態にある間知らず識らずに彼れの、、、をそそつたといふ、不景氣が二樣に作用した結果であつた。——一體、この夜番の爺さんの家には、蒲團といふものは、冬になると一揃分しかなかつたのである。晝は爺さんがその中に寢て、夜は娘がそれに代つた。ところが、一夜、夜番の爺さんは、柝を打ちに町へ出る代りに、娘に買はせ、、舌を吐いて、別々な杉の木へ首を釣つてゐたのである。——から云つて見れば、やはり、爲吉の推理法のやうに、どこかに太陽の黑點と關係のないこともなからう。

警察から檢死官や警部が來て、一時は他殺のやうな噂も立つたが、事件は、嚴重な屍體の檢索とともに、人性の不可解事の中へ自然消滅を遂げた。

そこで、町の中には、貸家が二軒になつた。この忌はしい事件は、あらゆる悲劇のやうに、卒然として出態して長いこと、町の人達の氣分を支配した。夕方になると、どんな子供達も、寺の境内へ足踏みするものがなくなつた。人達は、はじめて、この十三軒の町を脅かしてゐる陰慘な墓地の持つ、原始林的な壓迫を感ずるやうになつた。迷信の强い『梅鉢』の女中は、夜二階の窓から、怖わ怖わその木立の間をすかして見ると、拍子木を持つた爺さんが、よぼよぼと墓地の勾配を降りて來るのを見たとさへ言つた。

同じ不景氣が、一種の按分比例によつて、いつも桃色の消毒紙の散らばつてゐる『桔梗屋』にも分け前を持ち運んだのを見逃がすわけに

は行かない
『桔梗屋』は、濕室のやうな恰好をした、その癖、日受けが一番いい筈の地位にありながら、いつも小暗いやうな感じのする頭でつかちな家である。無理に二階の後方を『ときわ』の椽先まで持ち出し、強いてメリヤス工場の窓を覗くまいとして西側をすつかり塗り潰したせいかも知れない。その女將は、眼の飛び出た、干鱈のやうな四十女であつたが、、、、、、、するときにはひどい癇癪を起こした、町の無形の評議會は、ここでも雄辯に、彼女が秘藏してゐる、、、、、、、、、、、、、、、、、の非常識な噂を成立さしてゐたが、私達は、そこまで好奇心を鋭くする必要はあるまい。だが、これだけは、この女將について語り得る。――彼女は、何かしら彼女だけの理由から、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、あつたとも奴といふ病氣人へ向けたのであつた。とも奴といふ藝妓は、まだ二十五六の、さほど醜い女ではなかつたのだが、數多い男のうちから、、のやうに出來てゐ、眼からは絶えず、黄ろい、、、、、、、、を流してゐた。爲吉は、よく自分の四疊半の障子を開けなくとも、紙の破れ目から斜かひに覗かれる、『桔梗屋』の裏側の一室に、髮の脱けあがつた、眉毛のない、鉈のやうな顏の彼女が、欄干につかまつて、脊髓を鋸で挽き割るやうな咳をしてゐるのを見てぞつとするのであつた。一度などは、ちようど家の眞下を通りかかつて、不圖、二階の方を振り向くと、日向に何等の羞耻心もなく、着物をはだけて、胸の腫物の、、、、、、、、彼女を目擊したことがあつた。そのときのとも奴は、首筋一面に、赤い天然痘のやうな腫物がふき出、青筋の立つた手首には、赤インキの斑點のやうな腫れが見え、ぺちやんこになつた顏の半分を、燒けた毛糸の屑みたやうな亂れ髮が掩ふてゐた。からもわざとらしく二階から、、、、、、、、、、、、、、、、、、で出してゐる彼女には、恐らくこの種の稼業の最下層の苦惱を通過した女でなければ味はふことの出來ぬ、虛無的な健康に對する憎み、美に對する呪咀が、そのままあけすけと表現された、といふ捨て鉢な氣分があつたものにちがひない。――このとも奴に對する女將の態度は、この町に於てすらも殘忍であると思はれたほど無情冷酷なものだつた。それは、つい最近まで、この重態患者であるとも奴が、、、、、、、、、、、、、、、、、、、あさましい事實によつても、證據立てられる。事實上、彼女はとうの昔に抱への資格を剝ぎ取られ鑑札は沒收されてゐたのだが、身動きさへならぬ重態であり、それに、身内といふものの皆無な彼女が、芝居に出て來る孝行娘のやうに手を合はして泣きついたので、二階の納戸へ、押込んだきりにして、ろくに食物もあてがはずに、警察への屆けはいい加減にして、投り放しに飼ひ殺ろさうと目論んだのがお主婦の腹であつたらしい。彼女は自分では一度も顏を出さずに、納戸の中へ敷きつぱなしの汚い床の中にとも奴を放置して、わづかに日に二回、自分の食事のあまり物を、小婢に運ばせ

てやつたのであつた。それが、ともすると、いろいろな事情から、平均して日に一度の食事すら滿足に納戸へは運ばれなかつたといふことになるのだ。

お主婦の千代が、顳顬をぴくぴくさして、やたらに煙管で火鉢の緣を叩きながら、

『まだ、今日もくたばらないのかい？　ほんとに、なんてまあしぶとい淫賣だらう！』

と、小婢をつかまへて口汚く罵つたりしてゐるが、臺所で洗濯をしてゐる鶴子の耳へ這入ることがあつた。しかし、とも奴は決して死ななかつた。彼女に與へられた生命力は、お伽噺のやうな女將の呪咀だけで、蠟燭の火のやうに消えるわけはなかつた。彼女は生きた。、、、、、、、、、に身の皮がこびりついても生きた。そして、この生きた死人である彼女に、環境は絕えず慘虐な惡戲をして窮しめることを忘れなかつた。

それは、納戸といふ特別な室の設備が、わづかに紙で拵へた襖といふもの一重をへだてて、、、、、、、、、、、次室へつづいてゐたといふ、ごく簡單な家の構造から起つたことである。彼女は、毎夜のやうに、惡夢のやうな次室の現象に反感と呪ひを感じた。ことに、この淫賣窟でのどん底まで落ちた彼女達をさへも道德的に窮しめたのは『桔梗屋』の半玉の『しめ子』である。しめ子は、三日間、連續的に、、、、、、、、、、、、、、、儀式を擧行すべく餘儀なくされたしめ子といふのは十七になつたばかりの、氣取りやの、いつもつうんと濟ました顏をしてゐる。お主婦の氣に入りであつたが、町のむからの料理屋の鈴半のお主婦の斡旋で、一夜は或る材木屋の隱居へ、もう一夜は下町の遠くからこの界隈へふらりとやつて來た見ず知らずの嫖客へ、更らに、坂の上の吳服屋の若主人へ、それぞれ初見得としての馬鹿騒ぎをしつくしたあとで、、、、、、、、、、、を取つたのであつた。とも奴は、三晩つづけて、、、、、、、、、、ゐた。しめ子の執つた痴態は、たしかにあまりにも詐欺的だつた。お主婦の入智慧によつたものにちがひないが、、。とも奴は、三晩目には、苛く癇を嚙みしめて、男といふものの他愛なさを罵り、女の底知れぬ惡魔性を呪ひ呪つた。

『嘘つき！——大嘘つきツ！』

彼女は、怺えきれずに、三晩目にはから襖のむかうに對して叫んだ。しかし、男はぐつすり寢込んでゐたし、その聲に眼を醒ましたしめ子は、

『姐さん、何を寢呆けてるのさ。』

と大人びた聲で云つて、寢返へりを打つただけだつた。

すべて、これらの事情は、町の人達の噂であつたとともに、鶴吉の妻が、その家々の勝手元の掃除やら、洗濯やら、風呂の水汲みに手傳

はせられた關係から、直接に見聞きして、いち早く爲吉の耳へ入れた報告である。かういふ十三軒の町のむらな諸現象は、新聞記事のやうに、ちやんと纏まつてはゐなかつたが、その一つびとつを突詰めて行くと、やはり、學者が不景氣の原因の一つを太陽の黒點まで持つて行くやうに、何かの大きい社會的原因に遡ることが出來たのだ。見やうによつては、十三軒の町總體ですら、一つの大きい鷄小舍であり、そこの住民はみんな半死半生の雄鷄であつたり、飢ゑに苛まれて自分の子供を突き殺ろした雌鷄であつたりするやうに考へられぬでもなかつた。——鷄を飼はうとしたのはおちやら婆さんであつたが、さて、この人間の鷄小舍をはじめたのは、どこの誰、社會の何か——そこまでは、わが善良なる爲吉にはわからなかつた。それを知つてゐる男がこの不思議な町にたつた一人あつた。彼れの名は甚作、姓は栗山、彼れの家の窓はいつも半分しかあいて居らず、その下で、この男は、世間の資本家を欣ばすやうな『十圓で千圓儲ける法』などいふ雜誌の記事を書いて、年中貧乏してゐたのである。

6

どうして、栗山甚作と爲吉が知り合ひになつたかは、やはり、太陽の黒點といふものの手引によつたと云つてもよからう。

或る晩、彼は、納豆屋の店員が品物を配達してくれるのを待つてゐた。冬期にさしかかつて、食物の腐る惧れがなくなると、納豆の賣れ行が激減するので、いつそ當分のうち、納豆の方は打切らうと思ひ、その談判をしようとしてゐたのであつた。

そこへ表の戸を開けて、ものを訊く男があつたので、出て見ると、納豆屋の店員とは似ても似つかぬ粗つぽいまん丸な顏の男が、垂氷のやうな水洟を光らせながら、土間に立つてゐるのに出逢はした。

『栗山君？——や、お宅とはちがひますかな？』

『栗山——ですか？うちではありませんが』

『ここは皆同番地なんですねッ』

『この長屋だけはさうですよ。わかつた、貴方の尋ねてゐられるのは長屋の端から二軒目の人ですよ。顏の長い、眼鏡を掛けた、何か物を書いてゐる商賣の……』

『さうです。その男ですよ。——このならびのむかうから二軒目なんですね？』

これだけの短かい會話を交はした爲吉は、出て行きしなに、その男の足のくるぶしが凍傷したやうに赤脹れになつてゐるのを見た。大體他人の足に對して、彼は普通人以上に神經質なところがあつた。翌る朝になつて、何げなく爲吉がその長屋の前を通ると、いつも半分閉まつてゐるそこの窓が、からりと開いてゐて、そこからもうもうと立ちあがる煙の中に、昨晩見た圓顏の男が口笛を吹きながら廣場の隅の塵埃溜めを漁つてゐる野良犬を呼んでゐるのに出逢はした。栗山がこんなに早起きをすることは絶對になかつた。

『やあ、昨晩は失禮。わかりましたよ。——君は、何をしてゐるのですか？』

その男は、から狎れ狎れしく爲吉に問ひかけた。尤もはじめてこの町へ來た人間で、爲吉の頸に釣るされた飴箱と、彼れの不恰好な跛との對照に不審を抱かないものはないのだ。

『これですか？　飴ですよ。食ふに困るので、こんな物でも賣るよりほかはありませんよ。これから問屋へ行くところです。』

爲吉は、何の特色もないその男のうす汚い顔に、強いてほかの部分よりも多少人間並みであるといふまでの、黒味の勝つた眼を眺めた。それは正直な眼であつた。爲吉は、安心して話の出來る人間だと思つた。

『飴とは面白いね。でも、何かほかにないもんですか？——馬鹿々々しいぢやありませんか？』

『ところが、駄目なんですよ。脚が惡るいのでね。一度なぞは、大崎の大正電機へコイル卷きに行つたんですが、試驗のときは棒立ちになつて胡魔化せても監督の奴に作業中にめつかつてね、三日目に追拂はれましたよ。——栗山さんはゐますか？』

その男が何か云はうとして内を振り返へつた途端に、奥から太いがすがすした聲が、無雜作に爲吉へ答へた。

『あ、居るよ。——這入り給へ。君はよく働く人だね。』

家は、爲吉の家と寸分ちがはぬ構造で、破損の程度から云へば、むしろここの方がひどかつた。ただ、最も爲吉の眼を駭かしたのは、この家は一面にあらゆる形の古雜誌で埋まつてゐたといふことである。古るいビール箱を造りつけた机が一つ、その傍に煙草の吹殻で盛りあがつた瀬戸火鉢があり、卵の殼のやうに裂けた電燈の笠が、その二つの道具の上に舞ひ下がつてゐる——目ぼしい道具と云つてはこれだけだつた。栗山は、鐡縁の眼鏡を掛けて、臺所で古雜誌を引裂きながら七輪の火をおこしてゐた。

『全く、感心するよ、君には。毎朝よくあんなに早く起きられるもんだね。そりやさうと、僕んとこへは、昨晩から坊主頭の娘が來てね、これで、當分は男やもめも淋しくはないといふところさ。』

彼は、どこか東北人らしい訛りを含んだ言葉で氣輕に話しながら、ちよいちよい眼鏡越しに對手を批評的に見る癖があつた。前から爲吉には、この男にいろいろなことか訪ねて見たい氣持があつた。しかし世の中で、何が一番爲吉をおどかしたかといふと、それは眼鏡であつた。彼は先天的に眼鏡を掛けた人間は、自分とは絶對に別な階級に屬してゐる高尚な人間だと思ひ込んでゐた。

『貴方は——一體、何をなさるんですか、御商賣は——その、文士とでもいふんですか？』

彼はやつとこれだけを上り框から臺所へむかつて云ひ掛けた。この臆病たらしい質問は、二人の男達の突放すやうな笑ひ聲で打消されてしまつた。昨夜の男は、歩るく拍子に、背膨れのした足で室内の雜誌

額を蹴飛ばしながら、

『まあ、そんなところに踏んでないで這入り給へ。』

と云つて、火鉢の傍へ、重苦るしさうに座つた。爲吉は頭から箱をおろした。

『栗山は、かういふ大事業家だよ。』

彼は、机の上に載つてゐる大型な實業雜誌を開いて、『腕一本の資本で五萬圓儲ける法』と書いてある記事を差して見せた。そのあとで二人は又腹を揃へて笑ひ出した。

『へえ――』

爲吉は、呆氣に取られて、雜誌を手に取つた。それは、或る種の實業雜誌で、老人に讀ませるやうな大きい活字で印刷してある、政治のことや、立身譚や、地方人向きの利殖法などを書き立てたものであつた。

『君も、金儲けがしたけりやかういふ學者に相談することだよ。』

その男は、癖らしい貧乏搖るぎをしながら、横から爲吉の顔をしげしげと見戍つた。

『この雜誌には、何か太陽の黒點と不景氣の關係について書いてはありませんか？――あのお天道さまに黒ろい星が見えるでせう、あれと世間の不景氣とが關係あるつてことを新聞で讀みましたがね……。』

爲吉は、雜誌を押返へしながら、突然から質問した。このとき、七輪を兩手に抱へながら、とつとと臺所を走り出た栗山が、ちよつと眉をひそめて彼を眺めたが、やがて、瓦斯のやうな苦笑を洩らした。

『そりあ、世の中を不景氣にするのは、太陽の黒點よりも恐ろしい奴がゐるからだよ。――そんなことを云ふ奴に限つて、太陽の黒點のやうに腹黒い奴らの手先にちがひないよ。』

『いや。栗山はね、』圓顔の男は、火に手を翳しながら説明した。『十圓で千圓儲ける方法だとか、日銀の金利はどうだとか、そんな大きなことばかり書いてゐる癖に、當人はいつもぴいぴいなんだよ。』

その日の午後にもう一度遊びに行つて見ると、栗山はどこかへ外出して留守であつたが、昨晩の男だけがぽつねんと障子の下に胡座をかきながら、バットを喫つてゐた。どういふわけか、この男ほど他人を珍らしがる人間はなかつた。彼は、爲吉といふ人間を、まるで骨董商が道具を捻ねくり廻はすやうに、方々から眺めるやうな眼付をして見るのであつた。二つ三つちよつとした話をしたあとで、いきなりその男は、爲吉の度膽を拔くやうなことを語つた。

『ね、君。君は――僕が、北海道の監獄から出て來た人間だと知つたら驚くだらうね？』

爲吉の頭は異常な速度で、自分の家の新聞記事を隅から隅へ搜かしまはつた。世間の出來事で、そこに貼付されてないものは殆んどなかつた筈だ。

『いつ頃のことですか？』

『君は、あの米騒動を知つてますか？』

『米騒動といふと、大正……ずうつと昔のことぢやないんですか？』

『まあ、寺内内閣當時だね。大正七年さ。――もちろん、米騒動とは別なんだが、やはりあれに關聯したことで、僕は網走へ收監されたのさ。それから、八年。見給へ、僕の手足はこんなにひどくなつちまつたんだ。――しかし、まあ、お蔭で僕はあの大震災當時のどさくさは遁れたわけだがね。』

『すると、何ですか、貴方は、何か。その主義者とでも云ふ方の――？』

『まあ、そんなものかね。――つまり寺内内閣の總辭職を少しは手傳つた方かも知れんて。』

爲吉は、壁板の『東京朝日』の記事について詳しいことを尋ねて見たかつた。しかし、考へて見ると、八年も刑務所にゐた人間が、三年前の記事のことについて知つてゐる筈もないと思つたので口を緘ぢた。對手はしみじみと、何かを思ひあたるやうに述懷した。

『だが、何だね、僕も長いこと牢獄にゐたんだから、ちつと娑婆へ出る日にあ世の中が善くなつてゐるかと思ふと、――變つてゐるのは、監獄のことを刑務所だなんて鹿爪らしく呼ぶことぐらゐのもんさ。それで監獄と刑務所との間に、どれほど囚人待遇法が改善されてるかといふに……ヘッ、いや全くあきれた世の中だよ！――俺は、考へても腹が立つよ。何のために俺達がわざわざ辛らい思ひをして、ソノ犠牲になつてるのかと思ふとね。……』

『變りませんかね？……でも、世の中つて、そんなに早く善くなるものぢやないでせうか。――ひよつとしたら、惡るくなる一方の、』

爲吉は、西日を受けた古障子にぼんやり眼を向けた。

『そりや、僕達が急ぎ過ぎるといふことはないことはない。しかし、もうロシアあたりでは、民衆は成功してるんだからな。――ともかく資本主義といふものが、矛盾を持ちながら大仕掛にどしどし行きつく處まで行かうとし、惰力といふ奴でどうしても引返へしがつかなくなると、世の中も不景氣になる一方さ。』

かういふ話になると、この男は奥から奥からと、蜘蛛の絲みたやうな議論を無限に抽出してくれる人物らしかつた。監獄にゐながらやはりロシアのことなんかちやんと知つてゐた！『資本主義』なんてものも、野良猫の首筋を掴まへてゐるやうに、きうつと押へつけて話してゐる！

障子の表面がうす暗く陰つた。爲吉は驚きの眼をもつて、そこに圓い人間の團塊になつた見える網走とやらを出て來た男を瞶めた。對手は、しむみりとした口調で云つた。

『君も貧乏人だね。貧乏人は何のために貧乏してるかを悟らんといかぬよ。それがはつきりわかれば、僕達に力が出て來るんだ。むかし夢中で、何年何十年――一生貧乏したつて、世の中は平氣だからな。そりや、俺が、監獄へ這入つて、一人で焦燥つていらいらして、早く世の中を善くしたい、一日もこの格子と板の間から飛び出したいと思

つて、いざ出た、自由だ——と思つて來て見ると、一向に俺のやつた仕事が世の中に利き目がなかつたを見ると、左程ちがつてはしないんだ。しかしだ、しかし、しつかりと理論を把握して、資本主義の行くべき必然な徑路を見ながら、それを一日も早く驅逐したいと思つてする貧乏も、、、も、ただぼんやりとする貧乏や、、とちがつて、重大な主義があるよ。……』

雲切れがしたのか、障子の下の方がほんのりと白くなつて、そこへだけ掌で揃つたほどの日光が射した。腰高障子の一番下の部分に廣場の物干柱の一本が淡い影になつて泛んで出た。と、對手の男の、圓い鼻のあたりに無數の針で突ついたやうな孔があいてゐて、そこからちかちかと白つぽい太陽の光がぢかに射込んで來た。

『太陽の黒點といふのは、やはり先刻栗山さんが仰有つたやうにあまり不景氣とは關係のないもんなんですかね？——私は、その記事を、この隣りの夜番の爺さんの死骸の枕元に見つけたのですがね。まだよく私には腑に落ちないんです。』

爲吉がかう訊ねるまでには、障子は、もとのやうにあかあかとした陽を受けてゐて、對手の頸の下には、長唄の御師匠さん襦袢らしいもののさへくつきりした片袖を見せてゐた。その男は、嚙んで含めるやうに話した。

『ははア、そんな理由かね、その太陽の黒點といふのは、——そりや君、人類が太陽系の一惑星であるところの地球の上に繁殖してるんだから、いろいろな天文學的な意味で太陽の影響を受けてることは事實なんだ。これで、この太陽といふ奴は、』彼はかう云ひさして、からりと窓をあけた。『地球の三十三萬四千倍もある、恐ろしくでつかい火の玉なんだからね。つまり、太陽系つていふやつの親玉なのさ、こいつの引力で、地球だの火星だの月だのといふ星が、かうやつてぐるぐる一定の軌道を運轉してるんだ。この太陽の火力が鈍りあ、自然と地球の上にも人類は滅びてしまふだらう。ほかの星でも、もう太陽の火力の及ばない、その星にも自分の熱がなくなつちまつて、とても温かい血を持つた人間の想像出來ぬほどの寒さに襲はれてゐるのがいくらも空にごろごろしてるさ。さて、それだからと云つてだね、俺達はむやみに天體の何十億年か經つ後のことを今から心配して、現在の地球の上の問題を投つとくわけには行かんだらう？いや、宇宙といふものを、考へりあ考へるほど、俺達は人間の生命といふものを尊重しなけりやならん。そこで、人類が歴史を創めてからやつて來た馬鹿げきつた同志打ちや、國と國との小さな戰爭なんてものを、一日も早く切りあげて、協力して地球といふものの持つあらゆる力を開發して、當然いつかやつて來る大氷時代といふやうなものや、雷や暴風雨や洪水なんてものの、防備策をみんなで講じなけりやならないんだ。——いきなり、突飛に、太陽黒點が餘計に現はれたから、地球の上は一大不景況に襲はれるなんてことを云つたとしたら、それこそ栗山ぢやないが爲めにするものの宣傳にしか過ぎないんだ。人類社會に、不景況を來さ

せるやうな仕組みがあつて、それが必ず何年目かに襲つて來るといふことがわかつてゐる現在だね、――さういふ經濟的根據を投つといてからに、それは太陽の黒點さまの仕業ですは、ちと虫が良過ぎるよ――そんなのは、ざらにある低級な科學的迷信だ。ともかく、不景氣はでたらめな資本主義政策によつて起るものだ。太陽の黒點、藥喰らへサ！」

云ひ終つて、その男は、メリヤス工場の屋根に引つかかつてゐる太陽の表面へ、挑戰するやうな拳をぬうと突出して見せた。

7

不景氣は爲吉の場合に於ても、二元的に作用してゐた。

彼れの年來の三種類の商賣が、一向に振はなかつたことが一つの現象であつたとすれば、もう一つは心の中で彼れの今迄の社會觀を、劇藥かなんぞのやうに腐蝕して行つた。この二つの現象は、決して離ればなれに爲吉といふ人間を表裏から攻めたのではなくて、そのどちらが先に來るともなく、相縺いで起つた破壞作用であつた。ただ、それらの內訌を來たした根本の原因は、やはり不景氣といふことにあつた。

彼は、納豆をやめるとともに、飴の方も手を引いた。ゆでだし饂飩だけはどうやら續けて行つたが、それも、成績はむらであつた。日中の間は栗山とその同居人の貝島といふ男に勵まされて、方々の工場や商店に、職業を探がしに廻つた。電車賃ぐらゐは栗山が持つてくれた。

崖の下の町から出て見ると、黴臭い、穴のやうな自分の家で考へてゐるよりも、世の中はけばけばしい眼の眩むやうな服裝をしてゐる若い女も居れば、塗り立ての棺のやうな光澤の自動車も走つてゐた。高いビルデングには、何千人といふ人間が、きちんとした洋服を着て、どこが不景氣といふ風が吹くかといふやうな、何やらめいめいの仕事を忙しそうにやつてゐた。活動寫眞はどこの町にも赤い旗を立ててゐたし、電車はどれもどれも滿員だつた。誤つて銀座あたりの大通りへでも踏み込まうものなら、カフエには綺麗な女が肥つた紳士に媚びてゐたし、吳服屋の百貨店の窓ガラスには飛び上がるほどの高價な正札をつけた雜貨や吳服が、大勢の通行人の足を留めてゐた。

『俺達が、あの崖の下の町で、あんなに苦るしんでゐるのに、ここはまたどうしたことだらう？』

爲吉は馬車馬のやうに跛を曳きながら、から訝り訝り歩いた。

あるときは、錆びたボイラーの捨ててある河岸を歩いて、どろどろした漆のやうな川に水上生活をしてゐる石炭舟を見た。頑丈な五十がらみの髯面の老爺が、腹掛け一枚で何所の工場へ石炭を運んでゐた。舳の屋根の上には、竹竿が立ててあつて、赤ん坊の襁褓が乾してあつた。バケツの蔭から、二三人の黯い顏の健康そうな子供が笑ひ顏を出した。彼は、そこにも一團の家族のあることを知つた。團欒といふも

のがある。彼等の晩餐の食卓は、どんなに幸福で、どんなに賑かだらう──彼は崖の下のあばら家に一生くすぶつてゐる妻子を考へた。ひさ子、力一、留吉、すゑ子──彼等の將來はどうなるだらう。

しかし、世間は表面の華美なわりに、中味はちつとも富んでゐなかつた。工場といふ工場には、一枚も『人員募集』の札がぶら下がつてはゐなかつた。職業紹介所には、いつ行つてもバラツク建ての事務所から人間が喰み出てゐて、中に居る人間は、背後から押し潰されても嶮しい顏もせずに壇の下へ詰めかけ、役人がたまに持つて來る端切れ仕事を生命掛けで奪ひ合つた。獸のやうな咆哮が、一齊に手を差し伸べた勞働者の間から湧きあがつた。どんな紹介所でも跛の男を特に必要だといふ口がある筈はなかつた。『土方、仲仕、人夫、雜役夫、炊事夫火夫、運轉士、工夫……』こんな名前だけの札がずらりと並んでゐて、それらが駄目だとなると、定まりきつて『樺太行』『北海道行』といふ札ばかり眼につくのである。十日もあぶれたといふ朝鮮人の勞働者などは、まるで故意に紹介所が彼をボイコットでもしてゐるやうにかんかんになつて女事務員に怒つてゐた。

一日、彼は、ある工場の罷業團が、組合旗と警官を先に立てて示威行列をして來るのに出逢はした。それは折惡しく、彼が職業を求めに行かうとしてゐる工場であつた。實際、ストライキの示威運動に、職工の數よりも警官の方が多いのは驚くほかなかつた。それでも職工達は靜肅にぞくりぞくりと砂利路を踏んで爲吉の傍を通つて行つた。たまに突發的に嫌味を云つたり、歌を唄はうとした者は、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、容赦なく檢束された。無言で、しかし、何か充ち溢れた力に自信してゐるやうに、砂利を踏んで行く百人近くの勞働者を見てゐると、爲吉は思はず『萬歳!』と叫びたくなつた。しかし、さう叫ぶ前に、彼れの眼には、抑へきれぬ熱さがこみあげて來て、意氣地のない泪がぼろぼろとこぼれ出した。彼は、顏を掩ふて横町へきれ込んだ。

『俺は、世の中から捨てられてるんだな。──俺にはストライキする權利さへないんだ。崖の下の町、さうだ、あすこでは、資本主義にむかつてストライキする奴は、死ぬよりほかはないんだ!』

かういふ氣持で、方々の町から、いろいろな實社會觀を持つて歸つて見ると、彼れの棲んでゐる町は、まことに腑甲斐ない、まるで生活權を否定されてゐる、乞食──社會の寄生蟲みたやうな町に見えた。嚴密に云へば、それはたしかに寄生蟲生活を營んでゐるにはちがひなかつた。そこには、一軒のメリヤス工場を除くほか、どの家と雖も、社會の生活に關係した職業を持つてゐるものはなかつたのだ。──爲吉はその後栗山と貝島の議論に、かなり感化された自分を見出してゐた。

わづかに、勞働者や嫖客達の性慾を調節する目的だけで出來あがつてゐるあの稼業!彼等は、それを營利事業とすることに於て、二重にも三重にも、社會の階級闘爭を隱蔽しようとする目的に使はれてゐ

ゐのだ。しかも、さうした彼等自身が苦るしまずにやつて行けるかといふに、不景氣になると最つ先に困るのは彼等ではなかつたか。何故？——社會のほんたうの生産に參加してゐないからだ。

彼は、日に〳〵、客足のうすれて行く『梅鉢』を見た。そこの三つに撮まんで出してある盛り鹽は、日によつては誰にも踏まれないことすらあつた。『ときわ』の藝妓の金太郎といふ女は、借金を踏み仆して客の一人と驅落をした。おちやら姐さんを、蛭のやうに吸ひつくした若い男は、いつの間にかこつそりと町から逃げてしまつた。一說には食ふべき鷄がなくなつたからだといふものもあるが、それは冗談だらう。ともかく、姐さんは、毎日居るのか居ないのかわからぬほどひつそりとして、冬眠期に這入つた蛇のやうに出て來なかつた。町の二軒の空家は、どんなことをしても借り手がつかぬらしく、火が見えるとか柝の音がするとかいふ、女達の迷信の種を生むだけだつた。とんぼ姐さんの家では、毎晩のやうに請負師の旦那が來て、毆る蹴るの大喧嘩をやつた。家の地位が一段と高いところから、その喧嘩の內容が町中にひびき亘つた。この町でなくてならぬ物賣りの一人である花屋も冬期にさしかかつたせいか、前のやうに鈴を鳴らしてやつて來なくなつた。客かと思ふと、へんなもぢりを着たり自轉車へ乘つたりして來る借金の催促人が、いつも『桔梗屋』や『梅鉢』の前を出たり這入つたりしてゐた。艶子の働きも、仕事はいくらもあつても、一向金にはならなかつた。一體が派手で、一本五錢の大根を買つて貰ふにも十錢のチツプを切つた連中も、その大根を手控へるやうになつた。

一夜、『梅鉢』の奥座敷に警察の手入れがあつた。車座になつて、花を引いてゐた檢番の連中や、町の女たちや、當のお主婦など八人が拘引され、現場にあつた二十五圓の現金が押收された。しかし、八人が二十五圓の賭博、とはこの町らしい小賭博ではなかつたか！　いづれにしても、この町が漸く警察署の眼を惹いただけでも、そこに何かの意義があつたのかも知れない。

町そのものが、かういふ白つ茶けた自壞作用を營みつつあつた間、この町とは何等の關係もない、お上の役所の別働隊として知られてゐる一つの財團法人が、この小さないぢけた町の地理に注目して、この地域內へ新しいアパートメントを建てようといふ決儀をして、內々、それぞれの關係者に交渉を進めつゝあつたのである。それは、主として、時の政府が苛辣な財政々策を行つて八方塞がりになつてゐたので、人氣取り政策として勞資協調主義の・社會政策といふ美名の下に都會の家賃に窮しない程度の小市民を對手にして西洋式な共同長屋を建てる趣旨から出發した一種の非公式な官營事業であつた。

この町がすつかり全部その財團法人によつて買收される——かういふ噂が、どの新聞が書き立てるとなく洩れたと思ふと、それを一番早く知つたのは栗山甚作であつた。

『そんな子供欺しのやうなアパートメントを建てたところが、この不景氣が收まると思ふのかい！　それでもつて、女學生の寄宿舍みたや

うな眞似をしたところが、失職して家賃の拂へない連中をどうするんだ？　アパートメントを探がしてゐる人間より、職業のない、めしの食へない、家族の養へない人間の方がどれほど多くゐるか知れやしないんだ。』

或る晩、二人が昂奮して話し合つてゐるところへ這入つて行つた爲吉は、かういふ栗山の話を聽いて、何かしら彼れの生涯にも最後の決定をすべき時が近づいたやうにどきりとした。

『ぢや、何ですかそのアパートメントを建てるために私達を追拂はふとするんですか？』

『きつとさうだよ。いくらかの涙金を出して、ここを引移れと云ふにちがひないよ。いいかね、そのとき、三十や四十の端た金に目をくれて、はいと云つて追ん出て見給へ、君の家族は差向きその翌日からどこに棲むか？　家一軒借りるには、愚劣な敷金なんてものを取る惡家主が多いんだ。その涙金は、敷金にも足らぬとしたら、どこへ行くんだ！　いいかね、太田君、もしそんなことが持ち上がつたら、僕達は團結するんだ。そして、飽くまでここに住でゐる權利を主張するのさ！』

人間の居住權の主張！

と貝島は、理窟つぽくそれを云つた。

8

艶子は、栗山と監獄から出た『前科者』とを、女として憎み得る限りの憎惡をもつて取扱つた。良人が、稼業の方はそつちのけにして、毎日ろくでもない長談議に耳を傾けてゐるのは、あの二人のためではなかつたか？　勞働者に何の理窟がいるものか――あんな下らないことを議論し合つたつて、この不景氣がどうなるといふのか、四人の子供達に何を食はそうといふのか？　このままで行くなら一家はみすみす乞食でもして、野埀れ死にするよりほかはないぢやないか？――かう思ひ込むと、彼女は、顏を合せるごとに、あらゆる手段をつくしても、二人から爲吉を遠ざけようと試みた。二人の社會主義者は、彼女の主觀によつて、極端に漫畫化され、怪物化されなければならなかつた。およそ人間に生れた二人の男のうちで、栗山と貝島ほどに忌はしい、醜い、意氣地なしの、陰險な惡漢はなかつたのである。それも、一人は、監獄に八年もぶち込まれてゐた囚人ではなかつたか！

艶子のこの主張は、どんなことがあつても枉げらるべくもなかつた。家計が困れば困るほど、彼女の眼の前には、世の中を嘲笑つてゐる二人の惡漢の姿が、惡魔的に膨脹して行つた。彼女の雄辯の下に、二人は飴屋の機械によつて伸ばされたり捻ねられたり粘ばされたりする飴のやうに變化した。

爲吉の一家は、實際、幸福ではなかつた。米がないと云つては夫婦は喧嘩し、米が漸く買へたと云つては又喧嘩した。子供達は、父親がむきになつて母親を毆るのを、學生がラグビーの試合を見物するやう

に囃し立てるほど、一家の不和は平氣で昂じて行つた。爛れた傷口を觸るやうに、双方のどちらかがたつた一と言云へば、それで今にも崖崩れのありさうな喧嘩を惹起こすに澤山であつた。これらの荒みきつた貧乏の象徴でもあるかのやうに、まだ乳離れのしないすゑ子は、母親の背の上でめきめきと痩せ細つて行つた。長女と長男とは、學校の先生が月に三回も呼びに來たほど學校へは出なくなつた。彼等は、貧乏によつて、ますます密接に母親の手元へひきつけられるやうに見えた。妻子は、用のないときは、子供達をぐるりと自分のまわりに座らせて、節度のない涙とともに父親の愚物であることを教へ込んだ。

どんなに節約しても、現代の世の中で、親子六人が、一日五十錢足らずの收入では食つて行けない。しかも、そのうちの四人は、無限大の食慾を持つた子供達である。不幸なる兩親は、自分達の食物を減らして子供達へ分けてやつた。しかし、子供達には、不景氣はなかつたのである。彼等は、兩親を倒してしまふまでも喰はうとした。その主我主義にも當然の權利はあつた。

かういふ間にも、無慈悲な思想が、ぐんぐん爲吉の頭に生長しつつあつた。それは、個人の生活、家族の生活をば冷酷に振り向きもせずに、それ自身の生長を遂げようとしてゐた。泣きついて十錢の饂飩を買つて買つてゐる爲吉の頭に、買つてくれてゐる常人をすらも、その同情をすらも、全然賣買制度から離れた、大きい社會構成の一階級層として取扱ふやうな皮肉な氣持が自然と湧いてゐた。爲吉は、普通の社會人のさうであるやうに、決して、苦るしめられてゐる現在を苦痛だとは思はなかつた代りに、その現在の延長を恐れた。どこまで自分の思想が發展し、どこまで一家の貧乏が繼續するか——その二つの線がいつどんな場所で一家の上に悲慘な大爆發を伴つて相交錯するか。それを考へると、彼は眼が眩んで、一日も先きのことを想像することが苦るしかつた。そして、最も悪いことには、その爆發を伴ふ交錯が無限に緩漫に、日一日と延期されて行くのであつた。昨日よりも今日は、すこしだけ苦るしかつた。今日よりも明日は、もうすこしだけ苦るしむにちがひない。そして一年の後には、手も足も出ぬほどに苦るしんでゐるにちがひない。それは、すこしづつの死であつた。——

或る晩、爲吉は、珍らしく醉つぱらつた栗山と、坂の下でばつたり出遇はした。それは、浮世のどこかにクリスマスといふ賑かな催しのある夜だつた。

『やあ、今日はすこし原稿料がはいつた、一杯やらう！』

栗山は、古洋服のポケットに、銀貨をちやらちやら鳴らして見せた。

『いや、御機嫌ですな、』爲吉は淋しさうに笑つた。『駄目ですよ、僕は。これから、米を買ふので。家で餓鬼が待つてますからね。』彼は、鷄だけの食ふだけを食ふ四人の子供達の顏を、一瞬間腦の中に浮べてゐた。

『米——？　うむ、と。他人のパンを食はざる時、菓子を食ふ勿れか。よし、米に俺が買つてやる！　米屋へ行かう！』

栗山はかう云つて、よろめきながら米屋の前へ立つた。一升だけの二等米を、彼は、酔漢らしい聲で注文した。

それが濟むと、無理に爲吉の手を取つて、すこし後戻りしながら、御旅屋の縄暖簾へ無理に引張り込んだ。

『さあ、米は買つたから、ともかく一杯交際へ！』

栗山はかう云つて小鉢の注いで出した厚手のコップをかちりと爲吉のへ打合はせた。爲吉は一刻も早くこの酔漢の手から遁れる唯一の方法は、一刻も早く電氣ブランを嚥み下すことにあつたと思つたので、鼻を衝く臭氣を我慢してぐつと嚥み下した。注文は重ねられた。恐ろしい硝子の尖がつた鼻が爲吉の眼にちらついた。

『さあ、私はこれで失禮します。――餓鬼があんた待つてますのでな。可哀そうです、この頃は一日一食ですからな。』

これを默つて聽いてゐた栗山は　急に立ちあがつて、ポケットから煙草の折れ屑や、紙片といつしよくたに、七八枚の五十錢銀貨や雜多な白銅などを掴み出した。

『さあ、取れ。金をやる。』

『私はね、金は欲しいが、あんたの金は賊からとは思ひませんですよ。』

爲吉は泣きそうな顔をして手を振つた。

『何ッ、俺の出したものを取らねえ？　ふざけるない。俺はな、一旦やるといつた物を、自分の手へ引込めるやうな人間ぢやねえんだ。取れ、取らないか――何だ、こんな金なんざあ、どうせ俺だつて他人の金を貰つて來てるんだ。取れ、こんな物に未練はありあしないんだ――取れ！　ようし、取られえな、そら、持つて行け！』かう云ひ捨てて、彼はいきなり掌の中の銅貨やら銀貨やらを、精一杯に爲吉の顔窩を目がけて投げつけた。銀貨は、店の中の數個所に鐵砲玉のやうに鋭い音を立てて散らばつた。呆れはてた爲吉は、雪に滑つた馬のやうに平突張つて、床の上や客の椅子の下などから銀貨を拾つてやらなければならなかつた。

酒場の人達は、一齊に大聲で笑ひ出した。それが、栗山を笑つてゐるのか、爲吉を笑つてゐるのか、薄つぺらな鋭い刃物で身内のどこかを快よく擽ぐられてゐる醉ひにうつとりなりかけた爲吉には、よくわからなかつた。彼は、人達の無制限な笑ひのうちに、その笑ひを打消すためだけにも、栗山の金を全部拾ひあつめてやらねばならぬやうな氣がして、長いこと膝を折つて蹲まつてゐる自分を意識した。

不圖、人達の笑ひ聲が頭の上で留まつた。

『三つ番だ！』

『火事だッ。』

『どこだ、どこだ！』

『寺の背後だ。』

『あ、あの墓の下か？』

はつと思つて立ちあがつた爲吉の耳に、鮮かに半鐘の音が、一つ、

二つ、三つ――性急に打撃と打撃とが重り合つて、ひびき出した。それは、萬物が限りなく騒いでゐる上に、冷靜に冴えた聲で、世の中の終末を告げてゐるやうに聞えた。

　彼は、何かを瞶めてゐる風に、宙に眼を瞠つた栗山とばつたり顏を合はせると、殆ど對手を片手で曳摺るやうに、引張つて、

『行かう。大變だ――家が燒ける！』

と云つて跛と思はれぬほどの足取りで駈け出した。

無住寺の境内を駈け脱けたときには、町のまん中には凄じい火の屛風が立つてゐた。

『火元はどこだ、どこだ？』

　やつと、足元に、自分達の長屋がまだ無事に横はつてゐたのを見ると、彼はこんな役にも立たぬことを口走つてゐる自分に氣がついた。どこではぐれたのか、栗山は、もう側にゐなかつた。

燃えてゐるのは、『桔梗屋』と『ときわ』であつた。双方の庭から渦を卷いて跳れあがる煙は、火焰に反射して、谷あひ一圓眞赤に照り返へしてゐた。火は、狹苦るしい二軒の藝者屋の屋根の下から、窮屈に押縮められてもがいてゐる怪獸のやうに、隙さへあれば手當り次第に何にでも摑みかかりそうな勢ひで、巨大な尻尾や四肢や鬣などをあらゆる障壁へ打當てた。そこから吐き出される怪獸のいぶきは、嚇つと谷底全體を煽り立てて、見る見るすべての物を火力の焦點へ吸ひ込み捲き上げずには置かないやうに見えた。酸漿のやうに脹らんだ巨大な煙の層が、何かの加減でぱつと消えて、より黒い第二の煙團に代らうとする途端に、町角やメリヤス工場の屋根に詰めよつた人間の垣が、ひらひらと猛火のむかう岸に、小さな動作を營んでゐるのが見えた。早鐘の音が、悲しげに叫ぶ人間の聲と火勢の間に、無駄な礫つぶてを投げ込んでゐるやうに、ありありと縮小されて聞えた。

『馬鹿ッ、――何をしてるの、この人は！』

爲吉は、勝手元で、鬼のやうに髮を振りかぶつた艶子に、びくんとするほど呶鳴りつけられた。そこは、氣のせいか、もうぷ――んと黄な臭い匂ひが漂つてゐた。次男の留吉が、四疊半の障子に映る火を見て、ほとんど痙攣けそうに立ちながら泣いてゐた。

『子供はどうした？――子供は？』

艶子はそんなことに答へようともせずに、爲吉の上半身をめがけて、まつ黒な恐ろしい物の團塊を、異常な力をもつて投げつけた。爲吉は、前から約束してゐたもののやうに、ぐにやりと腕の間に柔かになつたその團塊を受取ると、

『留吉ッ！　留公ッ！』

と、四疊半にむかつて叫んだ。

子供は、いつの間にか、小脇にひつたりと寄添ふてゐた。

『子供達は、お寺の本堂だよう！』

艶子の金切聲があとから追ひかけた。

『早く來い、道具なんぞどうでもいいから――』。

爲吉は、花簪を片手に、足袋はだしで露地をうろうろしてゐるおちやら姐さんを押のけながら、簞笥やら盥やら米櫃などの引出された間を、夢中で杉の密林へ驅けあがり、そこで、

『ひさ子！　ひさ！――ひさ公ッ！』

と呼び立てた。

墓地の中は、人間でいつぱいだつた。漸く本堂の方へ潜り拔ける、と、いろいろな提灯の下に、極度に昂奮して、何を云つてゐるのか自分達でもわかるまいと思はれるやうなことを、てんでに口走つてうろうろしてゐる人達の顔が、もうろうとした他界の光景のやうに見えた。どんなに聲を嗄らして叫んでも、人達の聲で爲吉の呼び聲は一般の騷動の中へ溶け込むだけであつた。彼は本堂の階段の處へ驅け寄ると、小脇に抱へた留吉を卸した。右手に抱へてゐる柔かい重い物が、蒲團であることにはじめて氣がついた。

『ここにゐるんだぞ、いいか、御父さんが歸つて來るまでじつとしてるんだぞ。』

彼はしくしく泣いじやくつてゐる子供を、しつかと蒲團でくるんで、階段の下へ寢かした。

再び長屋まで取つて歸す間、彼は無駄とは知りながらも、まだ長女と長男の名を呼びつづけた。

ばりばりと木材の燃え裂ける音の中に、彼は、かすかに赤ん坊の泣き聲を聞いたやうな氣がした。しかし、それは、ほんの瞬間の、わづかに腦皮質を掠め去つた想像にしか過ぎなくて、次の瞬間には、

『あツ、「梅鉢」へ火が廻つたな。』

と叫びながら、我が家の中へ躍り込んでゐた。

艶子は、押入れから引出したごたごたした諸道具を、室內へ積み重ねたり、その一つ一つへ手を掛けて見たり、さうかと思ふと、天井の墜落するのを惧れるやうに上の方を見戌つたりしてゐた。

今度は、爲吉の罵る番だつた。

彼は一枚の蒲團を抱へると、いきなり艶子の手を握つて、もと來た道へ驅け出した。良人の姿を見て、急に氣が弱つたやうに、彼女は半ば曳摺られながら、口惜しさうに聲を立てて泣いた。

坂のむかうの方から、蒸汽ポムプの疾驅して來る氣はひがした。『梅鉢』の角の、町の共同井戸からは、掬みつくせるだけの水が掬み出されたかして、ポムプの吸引力を失つた響が、喘息病みのやうにかすれて聞えた。咄嗟の間に、平和狀態から自然力の鬪爭へ急動員されたあらゆる身裝の人間が、防備の部署を捨てて、火を避けながら寺の境內へ押し寄せて來た。持ち出された道具類は、途中で何かの機みに取落すと、忽ち人間の波に押ひしがれて、何の形をも留めなかつた。

消防隊、青年團、警官などの間から、避難民は、狼狽した、頓狂な聲を立てて、各自の家族の名を呼び立てた。

『――あのとも奴だそうですつてね、ま、なんて鬼のやうな女でせう。こんなことを――出來すなんて！』

『でも、あの女は燒け死んださうですよ。』

『自分で自分の誌へ火をつけたんですつてさ。ことうあらうに。』

人達の間には、火元の噂が立つた。それが何となくこの町の恐ろしい秘密をあとからあとからあとからと發き立てる最初の前兆のやうにひびいた。

爲吉と駿子とは、人間の一人一人の顏へ觸つて見るやうにして子供達を搜した。

と、ぱつたり本堂の石塔籠の下に、貝島と佇んでゐる二人の子供達を發見した。

『まあ、なんで馬鹿なんだらうね！』

母親は腹立たしそうに、ぴしやりひさ子の頰を毆つた。それは、同時に、子供達を發見した嬉しさの表情でもあつたのだ。

『長屋へ火が廻つた！』

誰かがさう叫んだ。

『燒けろ！　燒けろ！　燒けつちまへ！』

爲吉は思はず大きい聲で云つた。

翌る朝、彼等は、灰白い日光といふものの消え失せたやうな朝の下に、すべてが灰になつた十軒の町へ降りて行つた。いつそこへ現はれたかわからぬ栗山熊作は、失業人達の頭へ大きい亜鉛屋根の一部を曳摺つて來て、

『さあ、バラックだ！　早くバラックを建てよう！』

と叫んだ。

いろいろな流言蜚語のうちにも、樺山第三期のとも奴が、我と自分の部屋に火を放つて燒死したことと、慈興會といふ財團法人が數名の役人をこの町へ送つて、現に燒け跡を見聞してるといふ噂とが、事實となつて殘つた。

その日の午後までに、粗末な亜鉛小屋が出來あがつて、それに爲吉の一家と栗山と貝島とが、燒けた材木の前に掛けてゐた。亜鉛はまだ人達の頭の上にほてつてゐた。小屋の前には『居住權獲得同盟』といふ紙へ太書した文字が見えた。

子供達は、靑年團の焚き出しで、白い飯の食へるのを欣んだ。

力一は、崖の下から、雌雞の燒けた死骸をぶら下げて來た。――それは、もう雞ではなくて、燃えさしの木の枝と大差のないものだつた。栗山は、午後になつて歸つて來て、一同へ云つた。

『さア、これから演說會を開くんだ。あの寺の境内で！』

（了）。

編輯だより

◇「現代日本文學全集」は別項の如く第二回の募集をなすに決した。第一回募集當時に比し大作長篇の加はるものが多くなりました。しかし今後御手許に達するまではまだ幾十もの作品が新に加へられるであらふことを斷言出來ます。本社では本全集を完璧せしめる上に誤ぐましい程の努力をしています。尤もこの改革せられたる內容は第一回讀者にも均しく配付するものです。

◇第二回の第一回配本は「夏目漱石集」とする。第二回は「有島武郎集」か「德冨蘆花集」より選ぶこととする。夏目漱石集は菊判四百數十頁の燦然たるものである。今後並製裝幀は紙裂を廢して布裂とする。第一回會員に配付した紅葉集、一葉集、詞一郞集、獨步集等六冊は全集終了後無代にて布製に裝幀を改めて差上げます。

◇すべての點に本全集は內容も頁數も、裝幀も豫約規定によりて契約したものとはまるで一變してしまいました。今後讀者のためにどれほど內容に於て大改革が斷行さるるかは玆に敢えて明言のできぬほど幾多の計畫をもつています。が、しかし、其改革するものは純藝術といふことをモツトーとします、通俗のものはやむなきものの外はいれません。かくしてこそ藝術が永遠に生命をもつ所以だと思ひますから。

◇そして今夏文學全集讀者のために全國に五ケ所の「夏期文科大學」を開催します。講師などは別廣告に記載した人々より他に十數人も增加する筈です。尤も詳細は七月號の改造に廣告しますが、これは全集の讀者のみに無料で解放さるる特別の講演です。

◇それから「現代日本文學全集」とは別の計畫で近く文藝の普及版を發行します。賀川豐彥氏、森田草平氏、葛西善藏氏等の力作が一人一冊若くは一人二冊づつとして發行されます。

◇新潮社に版權のあつた島崎藤村氏「春」が現代日本文學全集に這入るやうになつた。これは新潮社長佐藤義亮氏の好意によるものである。厚く同氏に感謝する。尙ほ「春」は第一回の讀者にも或形式のもとに配付する。

◇社員宮城久輝は社用にて布哇及米國へ出張した。

改造定價		
冊數	定價	郵稅
壹冊	五拾錢	貳錢
半ケ年	參圓	郵稅不要
壹ケ年	六圓	郵稅不要

注文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

昭和二年五月十八日印刷納本
昭和二年六月一日發行

編輯兼發行人 東京市麴町區內幸町一ノ三 幸ビルヂング 山本三生

印刷人 東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二 秀英舍

（價五拾錢）

發行所 東京麴町區內幸町一ノ三 幸ビルヂング一階 改造社

振替東京八四〇二
電話銀座（一四五五〇四五八）
營業部（一五〇四六）
編輯部（一七三三）

世界驚異の大著述

縮約大藏經の完成

法然上人が二度、親鸞上人が一度通讀されたと傳說される『大藏經』は、さうした傳說の生れるほど夫れほど浩瀚尨大な大書册で、我國に傳來してから一千有餘年の歲月を經てゐるが、未だ其內容が詳く研究されてゐない。

尤も古來多數の佛敎家によつて部分的に研究されてゐるが、夫れは主として宗敎家としてこの立場から敎義の方面のみを研究し、其他全般に亘り討究した人は一人も無かつた。『大藏經』と云ひ『一切經』といへば、宗敎の書物で單に敎理を說いてゐるものに過ぎないと考へられてゐたのであつたが、それが旣に內容の詳しく研究されてゐない證據で、此の『大藏經』こそ古代東洋殊に印度文化の百科全書で、ひとり宗敎に關するのみならず、法律經濟、文學、美術、醫學、藥學、物理化學、工學等に至るまで百科の學術を洩れなく收集した所の寶典である。實に變態性慾に關する事項迄も蒐集してゐるので、東洋の文化を知らうと思へば、此の寶典を攻究するより他に道はないのである。

歐羅巴文明の漸く行詰らうとするや、歐米人は早くも新生命を東洋の文化より拓き來らねばならぬとして、ひとり美術文學のみでなく、百科の學術に就て、東洋の文獻を研究することの切要を認めるやうになつた。斯うした方向に針路を轉じてゐる學者が多きを加へるに至つた。夫等の人々は二千年以前の昔に於て旣に、全身痲醉の下に大外科手術が行はれてゐたことを發見して吃驚してゐるほどである。

然るに其唯一の古典たる『大藏經』が、非常な浩瀚尨大な書物で、完成な索引もなく、何處から手をつけてよいか、何處を見たら欲する專門の部を引出し得るかすら分らないので、學者は首を傾けて殆んど皆な匙を投げてゐた。支那でも明の時代に『閱藏知新』だの『藏經一覽』だのいふ書が出たが、不完全なもので、實用には適しなく其儘に用ゐられずに終つた。

蓋し『藏經』は、一度讀むだけでも一生の事業である。それを咀嚼して解說をつけたり分類したりするのは容易な事ではない。

其の困難な事業を日本人で仕遂げた人がある。京都妙心寺の禪付川上孤山師其人である。若い時に發願立心して五十餘年の生涯を此尊い仕事にさゝげ、漸く完全な大藏經の索引を作つた上に、其要文を抄錄した『要文抄錄大藏經索引』といふ縮約大藏經を完成した。實に有史以來の大著述で佛國敎授レビー氏を始め世界の學者が皆驚嘆し感謝の辭を捧げて居るのも當然である。實に世界に誇る可き日本人の名譽である。

此書は四六版二倍の大判で、三册、三千頁非營利的に出版頒布してゐる。代價は六十圓これで大藏經中の自分の好む專門科の大意がわかるのであるから難有い事と言はねばならぬ。希望者は往復ハガキで左記へ申込まるれば取扱ふことになつてゐる。

東京下谷上根岸三八長生會
（振替東京五五一二五四番）

アルス刊行の「日本兒童文庫」の教育的方針に就て

土田杏村

長い期間の準備

愈々發表の時が來た。我々の長い間夢想して居た世界が今やつと我々の前に展開せられようとする。「日本兒童文庫」によつての日本兒童及び日本家庭の教養の向上が其れだ。苟くも兒童讀物の責任編輯に携はる位のものなら平素から教育の意見を公表して居た人でなければなるまい。教育學界にも貢獻した人でなければなるまい。「日本兒童文庫」の編輯協議會には各方面の權威者を網羅して居るが、私は最初の立案をした關係上、其の末席を汚す事となつたから、編輯者を代表してといふのは甚だ僭越であるが、單に發議者の一人の意味で此の文庫が發表せられるまでに取つて來た教育的方針を公表して置きたい。

「日本兒童文庫」の計畫は、敢て昨年や今年に始まつた事では無い。私は自學自習教育の必要上何としても立派な兒童圖書館文庫を拵へ上げなければならぬと考へて居たが、然らば其の編輯はいかなる方法でなすかといふ事に就いては既に數年前の「教育研究」誌上に公表して置いた。其の前後から私は此れに關聯した内外の文獻を出來る限り多く集めて研究し書目は勿論編輯方法の細案をまで作製して置いたのである。

發議又凝議の結果のプラン

アルス主北原鐵雄氏の懇に應じて私の提供した案は、此の方針に基づき北原氏の意見を合せ、私の作製したものであつた。其の案の提出せられた後北原氏は各方面の權威者の參集を乞ひ原案に就いて凝議又凝議を重ね修正案を作られ、北原氏自身其れを携へて京都の私を訪問せられた。其の結果又數回の會議が重ねられ、爾來東京に京都に幾回と無き往復が行はれた。其間の苦心は名狀すべくも無く少なくも私自身としても出來る限り廣く質問し何人もの註文を容れた積りである。併し私は多人數を以て成る一夜の會合を以て即席的に書目を定める樣の事は成る可く避け常に退いて靜かに考へ又靜かに個に質問する樣式を取つた。斯樣にしなければ内容の極めて微妙な統一を失ひ易いからである。斯く準備を重ねる間に時日は遷延して三月始め豫約開始の豫定は内容見本印刷不可能の故を以て變更せられたが、何れにせよ我々が此の決定案を得て印刷し或る多數者の間に公表した時には、他に未だ此れと類似の計畫を發表したもの無く況んや斯くも綿密なる決定案を得て居たものは斷じて無かつた。私は今其事を明らかに公言して憚らない。換言すれば我々の決定細案の印刷物は我國に最初の大綜合兒童圖書館文庫の公表であつたのだ。

文庫の教育的方針（一）

然らば「日本兒童文庫」は如何なる教育的方針を以て作製せられたか。其の編輯方法の細案には多年研究の結果に成る特殊的の事項が多いが、模倣を恐れて其の公表を後に延期したい。早く既に發表せられて以來一冊の動

揺も無い書目選定の方針に就いてだけ今一言して置きたい。

第一に、我々は世界的平和の精神を取り狹隘なる島國的精神を打破しやうとした。併し同時に日本の精身的傳統を顧み、土に基づく精神を高調した。爐邊に語り繼がれた民話は全國的に遺憾無く保存せられ、日本の生活に關係の深かつたもので我々が次第に忘却しようとするものゝ保存をも考へた。民話は內地は勿論アイヌ琉球朝鮮臺灣に至るまでそれぞれ此人を除いては絕對に他に無い第一の權威者によつて書かれる。「歌、俳句、諺」の如き「我家の紋、年中行事」「都會と田舍」の如きは我が文庫に特異のものである。

第二に、全文化の一大綜合を企畫した。編輯細案を見れば分る樣に、凡そ我々の文化的、産物にして此の文庫の何れかで語られぬといふ事は無い。隨つて材料に無用の重複が避けられて居る。此の一大綜合といふ事には編輯顧問の綿密な注意が働らいた譯である。

文庫の教育的方針(二)

第三に、兒童の興味と知識との平衡に注意した。單に面白い、菓子の樣なものを作るのは容易であるが、面白くて同時に爲めになる本を作るのは容易の事で無い。

第四に、內容の易解と精確とを期した。易解といふ事については徹底的に此れを實行する積りで編輯協議會は諸家の執筆になるものをどしどし修正する筈である。次に內容の精確を期する爲めには、各部門についてそれぞれ日本隨一の權威者を選んだ。理科の方など執筆者が幾人にも分れて居るのは、極めて僅かの內容の相違によつても執筆專門家を別にしたからである。試みに「日本歷史物語」「西洋歷史物語」を見て貰ひたい。上代、中世、近世とそれぞれ專門的に最大の權威者である。私の考へでは老大家は流行に長い間の閱歷でいろいろ面白い話を知つて居られるから其れを書いて貰はうといふのである。この見込みがいかに成功して居るかは、內容見本の「動物園」實物見本の「發明發見物語」を見て同感して戴きたい。動物學、植物學などの教科書風の記述を避けて何處までも個々の具體的記述に骨を折つたのである。此の「內容見本」「實物見本」の記述は何處へ持つて行つても大好評であつた。

第五に、一冊々々で讀んで面白いと同時に教室や家庭で直ぐに自學自習用に使へるものとした。これには我々の文庫は殆んど遺憾が無いと信ずる。世の多くの類書は、單に面白いだけで此の自學自習用の點で用を爲さない事が多いと思ふ。それと同時に我々はこの文庫を家庭永久の知識の友である樣にしようと念願した。此の點でも日本の家庭はどれだけ明るくなるか知れない。第六、文庫の程度は小學二三年から中學女學二三年に及ぶ樣に適宜に工夫してある。併し同時に家庭全部の人達に面白くて爲めになるのである。

第七に、これだけの文庫も廉價で丈夫で美しくなければ役に立たぬから出來るだけの勉強を出版者にして貰つた。決して「安からう惡からう」の外見だけのものにはなつて居ない積りである。其れは見る人が見れば分つてくれる事と思ふ。頁數は兒童に過重にならぬ樣注意を拂ひ、他面插圖等で驚く程の勉強をしてある。理科的の材料のものなどはどんなにしても考へられぬ値段だと誰れもいつてくれる。

我々の避けるに苦心した點

最後に我々が極力避けようとした點を一言したい。我々は先づ當今の兒童讀物に多い極端に兒童の心を刺戟する材料を避けた。成る程武勇傳、劍客傳、立志傳、忍術本、悲哀小

說、復讐談、戰爭談などを子供は悅ぶが、現在の子供は其點で大いに心情を害されて居る。我々はかうした材料の教育的取扱ひに腐心した。此等の讀物の面白みだけを殘して其の異常の刺戟を除かうとしたのである。「武勇傳」「劍客傳」の名を避けて「勇者物語」の新名目を作つた。立志傳などもヒロイズムを避ける爲めに態々沖野岩三郎氏に書いて貰ひ、潜航艇だの飛行機だのの武器關係のものは「文明の利器」の中へ收めるといふ樣に細心の注意を拂つた。この細心の苦心は心ある父兄と敎育者に屹度買つて貰へると思ふ。つまり我々はぎらぐ\したものを避けて賣る方での損をしてもなほ敎育的であらうと努めたのである。また假名遣言葉遣なども一々修正して誤つたものを避けようと努めた。受驗の事は父兄の購讀心を刺戟するにはよいが、やはりこれだけ堂々たる文庫に始終「受驗」の文字が見えて子供を刺戟するのを避ける爲めに書目の中に含めずこれを「學習新聞」の方で扱くことにした。

周章模倣するものを排したい

これだけ苦心した書目は言はゞ一の「特許」の如きものであつたがこれが早く世に公表せられたためどうしても世の模倣を免れないであらう。別卷として「自習辭典」を附ける計畫などは、顧問も大取次店も一齊に感心した、全く取つて置きの我々の案であつたが、模倣すれば誰れにでも出來る。「發明發見物語」「山の科學」「海の科學」「地球と生物の歷史」「兒童劇集」「太平記物語」「源平盛衰記物語」と最初に考へたものは慘憺たる苦心を拂つたが模倣すれば何でも無い。併し流石に「動物園」「博物館」などの破天荒な我々の書目名は模倣しようにも仕方があるまい。斯樣に一々模倣して居れば、結局は我々のプランになつて了ふのである。それ程我々の案は一冊の拔きさしもならぬ時までこれに批評を加へてある。併しどんな模倣によつても模倣出來ないものは我々の文庫の特徵ある內容だ。すべては實質が語るのである。我々はよくもこれだけの人達が執筆を承諾してくれたとただく\其れに驚いて居る。一冊の微もよく目を止めて見て戴きたい。坪內博士などは從來決して他の編輯顧問を承諾せられた事が無い。新村博士などもイソツプ學者としては日本隨一の文獻精通者で、イソツプはイソツプでも他と其選を異にするのだ。況んや童話、童謠、自由畫等で教育界になじみの深い島崎藤村、小川未明、鈴木三重吉、北原白秋、山本鼎等の諸氏は徹頭徹尾本文庫の完成に全力を盡されるに於てをやである。次には其の特殊の方法による綜合編輯である。我々は父兄及び教育者の絕對の信頼を期して動きたいのである。少なくも私一個人に就いていへば私は名義だけの編輯者である積りはない。原稿の一々に私は念入りの注意を拂ひたい。若しも本文庫が類書に劣る樣の衆評があれば、私は爾來筆を折つて教育の事を再び論じないだけの決心を持つて居るのである。

一般の御後援を乞ふ

「日本兒童文庫」は右の如き內容と經過とを持つものであるが、今後の編輯については各位の忌憚なき御批評と御忠言とを戴きたい。本文庫は最初から敎育の素人や商人の間で起つたもので無く、教育界の中で生れたものだ。隨つて我々は極力教育界の御助力を仰ぎたいのである。內容の事に許り氣を取られて居て、我々の宣傳は甚だ拙劣であつた。教育の事は分つても商賣の事には隙だらけである。願はくは其點を御諒察あつて萬事に御氣付きの點を我々の誰れなりに聞かせて戴きたい。既に個々の團體にして、我々の危つかしい商賣の仕方に氣遣はれ、自發的に立つて助力せられ東奔西走するものの現はれ出した事に就いては我々は實に感激してひとり感謝の念に堪へないものである。

徳田秋聲著（最新刊）

過ぎゆく日

定價一圓八拾錢　送料十八錢

最近文壇を聳動せしめたる傑作「元の枝へ」「過ぎ行く日」「逃げた小鳥」「未解決のまゝに」外近業九篇を收む。氏の藝術は最近生活の著しい變化と共に一新轉化を來し、益々洗練されたる筆致は、平々坦々たるテンポの上に氏獨特の心境藝術を形成せしめてゐる。かくまで深く人生を凝視し、爽やかに戀を描き、女を描き、子を描き、己自身を描き得た作家があらうか。老大家としての落付きの内に潑剌たる氣鋭の筆は氏の最近の生活、心境を躍如たらしめてゐる。

廣津和郎著（最新刊）

秋の一夜

定價一圓六拾錢　送料十八錢

静かに人生を凝視し、清澄なる世界を描寫し、溫き抱擁力を以て人生を批判する廣津氏の筆は、一面かのチエホフを髣髴たらしめるものである。又その明快にしてそつのない筆觸の妙は氏の豐潤たる美感と見事に綾をなして、洗練されたる近代人の理性を思はせる。此處に藝術の最高指標を見ないだらうか。今廣津氏の傑作たる「秋の一夜」「獵犬」外九篇を得た。新しき靈魂と新鮮なる美觀の一致せる好個の藝術品として江湖に推す。

横光利一著（最新刊）

春は馬車に乗つて

定價一圓八拾錢　送料二十錢

近來旭日昇天の勢を以て文壇を風靡した運動は新感覺派の擡頭であつた。その新感覺派中にあつて、最高地位を占むる者は横光氏である。鋭い神經と纖麗なる筆はあらゆる事件を捕へて斧り、自然描寫の巧妙さに於ては萬物皆高き香を放つ雰圍氣中に抱擁されて仕舞ふ。題材は新鮮にして輕妙なる筆致の内に深淵なる感覺を盛り、不可思議なる世界を現出せしめてゐる。本書は氏の近業中快心の作のみを採錄し、十一篇を收む。

岸田國士著（最新刊）

パン屋文六の思案

定價一圓五拾錢　送料十八錢

氏の明るさは誠に南歐の空と、青い海と白い雲、あの淡緑の山を覆ふ華やかしい藍青の空だ。今まで吾々はあまりに北歐的な陰鬱な藝術に惱まされすぎた。パリーよりもニースよりも明るいこの日本に朗らかな呼吸と明色のウイツトは如何にしても必要だ。今や氏によつてその明るい藝術境は拓かれ玲瓏たる日本の呼氣は甦つた。ここに集錄するもの「麵麭屋文六の思案」外數篇皆氏の近業に屬し駿品のみ。

發兌　東京市麹町區内幸町　幸ビルデイング一階　振替東京八四〇二番　改造社

『社會科學』四月特輯

帝國主義研究

定價壹圓貳拾錢　送料拾錢

改造社發行

資本主義はその進行の必然に從つて帝國主義的毒芽を現し、資本の侵略、新植民地の獲得、世界の再分割は、英・米・日の資本主義列强を中心として深刻に轉回しつゝある。支那の革命に於ける「打倒帝國主義」「民族解放」運動の急速なる進展は帝國主義の前途に對して重大なる暗示を與ふ。今や資本主義の行方、そしてその前驅をつとむる帝國主義の分析究明は、刻下最大の急務である。本誌は四月特輯に於て内外の碩學に乞うて我資本主義の現段階及世界的帝國主義の現實的進行を追究し、帝國主義研究の礎石を据ゑんことを期した。

内容

帝國主義の理論とその沒落の過程……猪俣津南雄
帝國主義論と超帝國主義論……河野密
資本の蓄積と帝國主義……オットー・バウエル
世界資本主義の「安定」とその性質……山川均
末期における帝國主義の變質……高橋龜吉
ローザ・ルクセンブルク資本蓄積論の批評……エス・ウオイラツキー
帝國主義的政治過程……淺野晃
資本主義安定の理論的批判……ジヤン・ステン

日本資本主義發達の現段階……蒲茂人
モスクワ對東方就中對支那民族政策……スターリン
支那における反帝國主義運動……市村今朝藏
太平洋支那を中心とする日英米の帝國主義的葛藤……マヌイルスキイ
アメリカ帝國主義の本質ダラア・デイプロマシイ……佐々木修一郎
アメリカのヨーロッパ征服……シエー・ロウエストン
帝國主義に關する文獻集錄(資料)

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, UCHISAIWAI-CHO COJIMACHI-KU, TOKIO.

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可



株式會社秀英舎印刷